

博士学位論文

氏名（本籍）	深石 圭子（神奈川県）
学位の種類	博士（建築学）
学位記番号	博甲第166号
学位授与年月日	令和3年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文題目	建築家・中原暢子の生涯における主 要な作品と設計思想に関する研究
論文審査委員	主査 木下庸子
	副査 大内田史郎
	〃 山下てつろう
	〃 後藤治（工学院大学総合研究所）
	〃 藤森照信（工学院大学、東京大学）
	〃 定行まり子（日本女子大学）

工学院大学大学院

建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と
設計思想に関する研究

A Study on the Major Works and Design Ideas of Architect Nobuko Nakahara
During her Life Span

2021年3月

工学院大学大学院工学研究科建築学専攻

博士後期課程

深 石 圭 子

建築家・中原暢子の生涯における主要な作品と設計思想に関する研究

—目次—

第1章 序論	7
1.1 研究の背景	7
1.2 既往の研究	7
1.2.1 中原に関する既往研究	7
1.2.2 草創期の女性建築家に関する既往研究	8
1.2.3 女性建築家グループ「林・山田・中原設計同人」	10
1.2.4 筆者の既発表論文等	10
1.3 本研究の目的と方法	11
1.3.1 目的	11
1.3.2 方法	11
1.3.2.1 発表作品からみる流れの把握	11
1.3.2.2 未発表作品を加えた時代区分の設定	12
1.3.3 研究対象の抽出	12
1.3.3.1 発表作品からみる作品の傾向	13
1.3.3.2 未発表作品を含めた作品の傾向	21
1.3.3.3 未発表作品を含めた研究対象の設定	24
1.3.4 機能主義と和風	26
1.3.4.1 機能主義の系統 構造表現主義	26
1.3.4.2 和風 様式を受容	28
1.3.5 本論文で使用する用語の定義	28
1.4 論文の構成	31
1.5 中原暢子の経歴	33
1.5.1 誕生から東京家政専門学校卒業まで	34
1.5.2 労働省入省から東京大学生産技術研究所池辺研究室退所まで	36
1.5.3 林・山田・中原設計同人設立から第1回 UIFA 参加まで	43
1.5.4 農協建築研究会設立から死去まで	44
1.6 第1章のまとめ	45
参考文献リスト	45
図版リスト	47
注釈	59

第2章 HP シェルを用いた構造表現主義—「長覚院」—	53
2.1 「長覚院」と第2章の概要	53
2.1.1 本章の研究の背景	53
2.1.2 本章の目的と分析方法	54
2.2 当時の新しい建築技術（HP シェル構造）	54
2.2.1 国内におけるシェル構造に関する初期の研究とシェル構造作品 ..	54
2.2.2 1950年頃の海外におけるシェル構造の動向	59
2.3 池辺の伝統に対する考え方と中原の設計方法	59
2.4 「長覚院」の設計	61
2.4.1 「長覚院」の「伝統」をたどり「寺」の機能を検討	61
2.4.2 技術主義の非人間性の克服	63
2.4.3 「長覚院」を大衆に結び付ける	68
2.5 考察	71
2.6 第2章のまとめ	72
参考文献リスト	72
図版リスト	73
注釈	75
第3章 木造を主構造とする構造表現主義—「辻別邸」—	79
3.1 「辻別邸」と第3章の概要	79
3.1.1 本章の研究の背景	79
3.1.2 本章の目的と分析方法	80
3.2 概要	80
3.2.1 平面構成の概要	81
3.2.2 架構の特徴 丸太柱・合せ梁・水平押え梁	82
3.2.3 丸太柱の構造	84
3.2.4 2階床の構造	86
3.2.5 大屋根と3・4階床	89
3.3 増改築での変更点	90
3.4 分析	90
3.4.1 丸太柱の利用	91
3.4.2 ピロティの実現と採用の背景	91
3.4.3 外観及び内観の意匠 地域性と中原の和風好み	92
3.5 考察	93
3.5.1 中原の丸太架構の空間構成の特徴	93
3.5.2 架構構成における現実的な対応	93
3.5.3 民家構造への親和性	94

3.6 第3章のまとめ	94
参考文献リスト	95
図版リスト	95
注釈	96
第4章 農村住宅に関する言説と作品	99
4.1 第4章の概要	99
4.1.1 本章の研究の背景	99
4.1.2 本章の目的と分析方法	99
4.2 農協建築研究会発足	99
4.2.1 農協建築研究会と林・山田・中原設計同人	100
4.2.2 柿生農協と農協建築研究会	101
4.2.3 農協建築研究会住宅相談事業	101
4.2.4 農協建築研究会の農村住宅研究	102
4.3 中原暢子設計の農村住宅	103
4.3.1 中原暢子の農村住宅に関する言説	104
4.3.1.1 雑誌『室内』掲載の「農村住宅の問題点」	104
4.3.1.2 書籍『農村の住まい』掲載の「住まいの要点」	105
4.3.1.3 農村住宅に関する言説	110
4.3.2 中原暢子の農村住宅に関する言説と作品の比較	110
4.3.3 林雅子と山田初江の農村住宅	118
4.4 第4章のまとめ	122
参考文献リスト	123
図版リスト	124
注釈	125
第5章 様式併存の受容—「水野レストラン」—	129
5.1 「水野レストラン」と第5章の概要	129
5.1.1 本章の研究の背景	129
5.1.2 本章の目的と分析方法	131
5.2 建築主等の経歴と敷地周辺の時代背景	131
5.3 立面計画	133
5.4 平面・断面計画	136
5.5 インテリア計画	141
5.6 考察	146
5.6.1 目白台の歴史的・文化的環境	147
5.6.2 明治時代の上流層の住宅形式「和洋館並列型住宅様式」	147

5.6.3	文化人の居住地「目白台アパート」	147
5.6.4	環境に適したレストランの構想.....	148
5.6.5	中原暢子の「水野レストラン」でのデザイン	150
	参考文献リスト	150
	図版リスト.....	150
	注釈	152
第6章 「和風」と「機能主義」の展開		155
6.1	第6章の概要.....	155
6.1.1	本章の研究の背景	155
6.1.2	本章の目的と分析方法	155
6.2	「和風」と「機能主義」に関する語句の定義.....	157
6.2.1	「和風」に関する語句の定義	157
6.2.2	中原暢子と浜口ミホの「床の間追放論」	159
6.2.3	「機能主義」に関する語句の定義.....	160
6.3	中原暢子設計の「和風」住宅の特徴.....	160
6.3.1	第Ⅲ期の「和風」住宅の接客空間	162
6.3.1.1	中原暢子設計の「本格的続き間座敷」	162
6.3.1.2	中原暢子設計の「続き間座敷」	170
6.3.1.3	中原暢子設計の「単独座敷」	171
6.4	中原暢子設計の住宅に関する分析	174
6.4.1	「和風」の流れ	174
6.4.2	内部空間における和室の設え.....	175
6.4.3	外観における「和風」要素	179
6.4.4	LDKの特徴.....	183
6.4.5	茶の間と和室の居間	184
6.4.6	構造種別による分類と傾向.....	185
6.4.7	混構造による分類と傾向	186
6.4.7.1	混構造の形式による分類と作品例	186
6.4.7.2	混構造作品における構造の表出の傾向	190
6.5	考察	191
	参考文献リスト	192
	図版リスト.....	192
	注釈	194
第7章 茶室設計の展開		195
7.1	第7章の概要.....	195

7.1.1	本章の研究の背景	195
7.1.2	本章の目的と分析方法	199
7.2	中原暢子設計の茶室における時代別特徴	202
7.2.1	初期の近代的な茶室設計	202
7.2.2	本格的な茶室設計とプロデュース	207
7.3	広間における本歌の写しとみられる作品	214
7.3.1	中床四畳半切の茶室	215
7.3.2	床回りにおける特徴	215
7.3.3	断面における特徴	218
7.4	小間における本歌の写しとみられる作品	220
7.4.1	「森邸」茶室 3 畳台目	221
7.4.2	自邸「茶室のある家」茶室 2 畳台目	227
7.4.3	「大野邸茶室」茶室 3 畳台目	237
7.5	考察	243
	参考文献リスト	244
	図版リスト	246
	注釈	248
第 8 章	各章の要約と総括	251
8.1	各章の要約	251
8.2	総括	254
8.3	今後の課題	254
	図版リスト	254
謝辞		255
付録		257
付録 1	中原暢子設計原図リスト	259
付録 2	中原暢子著作リスト	267
付録 3	中原暢子設計新築住宅の平面図・立面図一覧	275
付録 4	中原暢子略年譜	311

第1章 序論

1.1 研究の背景

建築家中原暢子（1929-2008 以下、「中原」という）は、林雅子（1928-2001 以下、「林」という）と山田初江（1930- 以下、「山田」という）と共に設計事務所 林・山田・中原設計同人（以下、「設計同人」という）を設立し、44年にわたり住宅を中心とした設計活動を行ってきた。中原は、日本で初めてできた女性建築技術者の組織であるポドコ（PODOKO）設立への参画や国際女性建築家会議（以下、「UIFA」という）創立総会への参加、さらに1993年からは国際女性建築家会議日本支部（以下、「UIFA JAPON」という）の初代会長として活躍したが、その一方で建築雑誌に掲載された作品は数少なく、本格的な作品集も発刊されていない¹⁾ことから、現時点で建築設計者・中原についての評価は定まっていない。中原のこれまでの作品を整理することによって、作品を支える設計思想の全容を見出すことが求められている。

2002年の設計同人解散後、元所員の白井克典（1957-）が、設計同人時代の中原の144作品2,922枚の設計図書を保管していた。その資料が中原死去後の2012年に、中原が教育研究活動を行っていた東京家政学院大学生生活デザイン学科に寄贈された（付録1参照）。また、2012年3月の「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（1985）の取壊しの際にも、相続者から中原に関する建築及び茶道関連の書籍等の遺品を同大学同学科が譲り受けた。これらによって生涯の中原の設計活動を明らかにする手掛かりが得られた。

譲り受けた図面は、大部分がA1判のトレーシングペーパーの原図であったため、「平成24年度東京家政学院大学若手研究者研究費助成」を活用し、それをPDFデータに変換、A4判に縮小・出力しファイリングし、中原暢子設計原図リスト（付録1参照）を作成している。そのリストの項目は、整理番号、作品名、用途、新築/増改築等、図面枚数、設計期間、施工期間、構造、階数、敷地面積、延べ面積、建設地、図面作成者、現存/取壊、掲載誌についてまとめている。

中原の記した書籍や作品掲載誌については、各種関係機関において収集をおこない、その該当部分をPDFデータに変換し、出力したのもファイリングしており、中原暢子著作リスト（付録2参照）である。

なお、これらを連携した検索システムは、現時点では構築していない。

1.2 既往の研究

1.2.1 中原に関する既往研究

中原に関する既往研究として、中原を単独で調査研究したものはない。研究の一部として中原を取り上げたものは、松川淳子・中島明子・杉野展子・宮本伸子が著した「日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者」¹⁾²⁾があり、そこには、建築系学科創草期の卒業生の一人として、プロフィールや建築家を目指した経緯、女性建築家としての苦労話等が記さ

れているのみである。また、『未来へ 女性建築家のパイオニアたちの肖像—巡回展覧会の記録—』¹⁻³⁾は、2012年6月から2013年3月までに開催したUIFA JAPAN・IAWA（国際女性建築家アーカイブ）主催の巡回展「未来へ—女性建築家のパイオニアたちの肖像」の展示内容を冊子にまとめたものであるが、これも一建築家として中原を取り上げている。さらに、中原自身が執筆した「建築—私との出会い 81」¹⁻⁴⁾には、中原の経歴が最も詳しく記載されている。中原に関する作品集としては、東京家政学院大学家政学部住居学科の退職記念出版の『中原暢子の木造住宅設計図面集』（1999）があるものの、これは、以前雑誌に掲載した作品のうち7作品を抽出し、その実施図面をそのまま掲載したものである。そのため、中原の設計手法についてまとめた出版物は、みられない。

1.2.2 草創期の女性建築家に関する既往研究

上記のように中原は、女性建築家のパイオニアの一人として取り上げられている。女性建築家の草創期に活躍したとして挙げられるのは、戦前から活躍した土浦信子（1900-1998）、吉田文子（1913-2001）、浜口ミホ（1915-1988）であり、戦後大学を卒業した建築家としては、下河辺千穂子（1923-）、林、中原、小川信子（1929-）、峯成子（1930-2011）、奥村まこと（1930-2016）、山田、吉田あこ（1931-）、高橋公子（1932-1997）、魚住麗子（1932-）、加藤由利子（1932-）、佐伯洋子（1934-）、草野千恵子（1934-）、飯島静江（1937-2010）、富田玲子（1938-）等が挙げられる（表 1-1）。このうち、建築家研究がなされているのは、土浦信子、浜口ミホ、林、中原、小川信子、奥村まこと、高橋公子のみである。

その他、特定の女性建築家ではなく、全体的に焦点を当てた研究は、坂本絢他の「雑誌『新建築』に見る女性建築家の活動の変遷について：女性建築家の職能の確立過程に関する研究」¹⁻⁵⁾が挙げられる。この研究は、雑誌に掲載された作品を通して女性建築家の活躍の変遷を明らかにしたものである。

このように草創期の女性建築家について、研究が行われているのは一部に過ぎず、また、筆者が知りうる限り、一建築家の全ての作品を分析できる状況にあるのは、林（「林雅子資料室」¹⁻⁶⁾にて管理）、中原（東京家政学院大学にて管理）のみであり、まだ全容が明らかになっていないといえる。

表1-1 草創期（1930年代以前に生まれた）に活躍した女性建築家

No.	氏名	生没年	略歴	分類	主な作品集・著書	研究書	旧姓	配偶者
1	土浦信子	1900-1998	タリアセン（1923-1026） 土浦亀城建築設計事務所（1934-1969）	アトリエ事務所	—	田中厚子：『女性建築家としての土浦信子とその経歴と作品』（1998） 田中厚子：『女性建築家としての土浦信子：亀城との協力関係について』（2001） 小川信子：田中厚子：『ビッグ・リトル・ノブ：ライトの弟子・女性建築家土浦信子』（2001）	吉野	土浦亀城 （建築家）
2	吉田文子	1913-2001	早稲田大学建築学科田辺泰研究室助手（1931-1932、?-1939） 鈴木小松商店技術部（1932-1935） 佐藤鉄工所設計部（1935-1939頃） 則武工業事務所（1939-1950頃） 吉田設計事務所（1950-1996）	技術系事務所	—			
3	浜口ミホ	1915-1988	前川國男建築設計事務所（1939-1948頃） 浜口ミホ住宅相談所（1948-1949） 浜口ハウジング設計事務所（1959-?） 浜口美術建築研究所（?-?）	アトリエ事務所	『日本住宅の封建性』（1949） 『生活時間・生活空間（建築学大系 第1（住居論））』（1954） 『部屋の日本的性格（現代教養全集 第22（生活の科学））』（1960）	北川圭子：『住宅建築家・浜口ミホについての考察：経歴及び凸団ダイニング・キッチンとの関わり』（2000） 北川圭子：『ダイニング・キッチンはこうして誕生した：女性建築家第一号浜口ミホが目指したもの』（2002）	浜田	浜口隆一 （建築評論家）
4	下河辺千穂子	1923-	農林省農業技術研究所（1954頃） 跡見学園短期大学（1988頃） 北島建築設計事務所（1992頃）	官公庁 大学	『農村の住宅改善』（1957）		（不明）	下河辺淳 （都市計画家）
5	林雅子	1928-2001	東京工業大学清家研究室（1951-1985） 林・山田・中原設計同人（1958-2002）	アトリエ事務所	『現代日本の住宅』（1969） 『現代日本建築家全集 22（林雅子、川崎清）』（1975） 『林雅子（現代の建築家）』（1981） 『林雅子のディテール：空間の骨格』（1984） 『新・空間の骨格（林雅子のディテール：2）』（2001） 『建築家林雅子：1928-2001』（2002）	井上尚也・末包伸吾・山崎篤史：『林雅子の独立住宅作品の空間構成とその手法に関する研究：空間の骨格に着目して』（2006） 吉永沙織：『林雅子の住宅作品における空間特性と建築設計教育との関連について』（2019）	山田	林昌二 （建築家）
6	鈴木貴美子 （淑子）	1929-1992	某大学院研究生 某出版社 某設計事務所 某設計事務所設立				（不明）	
7	中原暢子	1929-2008	東京大学池辺陽研究室（1953-1955、1956-1958） 広瀬謙二建築技術研究所（1955-1956） 林・山田・中原設計同人（1958-2002） 東京家政学院大学助教授（1985-1988） 同教授（1988-2002）	アトリエ事務所 大学	『中原暢子の木造住宅設計図集』（1999）		—	—
8	小川信子	1929-	土浦亀城建築設計事務所（1952-1955頃） 日本女子大学（1955-1960頃、1978-1998） 東京大学吉武研究室（研究生）（1960-1978頃） 北海道浅井学園大学（1998-2003）	大学	『子どもと住まい：生活文化としての都市環境』（1991） 『ストックホルムの建築（建築巡礼；23）』（1991） 『スベリエ手帖』（1991） 『生活環境の探求：小川信子の世界』（1998） 『子どもの生活と保育施設』（2004） 『生活環境の探求 続（子ども・生活とすま）』（2013）		（不明）	
9	峯成子	1930-2011	建設省建築研究所（1952-1959） 同住宅計画研究室（1959-1973） 同建設経済研究室室長（1973-1974） 東京家政学院大学助教授（1974-1989） 同教授（1989-2003）	官公庁 大学			—	—
10	奥村まこと	1930-2016	吉村順三設計事務所（1953-1972） 奥村設計所（1972-1978頃） 木曾三岳奥村設計所（1978-?）	アトリエ事務所	『戦争と建築』、『戦争の教室』（2014） 『まことの徒然草』（2013）	村上藍：『奥村まこと（1930-2016）の生涯とその設計 -東京藝術大学建築科を卒業した最初の女性建築家-』（2008） 中村謙太郎：『暮らしの時代 住まい・暮らし・居場所 -建築家・奥村まことの仕事』（2008）	戸塚	奥村昭雄 （建築家）
11	山田初江	1930-	梓設計（1951-1953?） 井上一典建築設計事務所（1954-1958?） 林・山田・中原設計同人（1958-2002）	アトリエ事務所	『居間の家族学：ゴロ寝のできる家がいい』（1984） 『子ども室と遊び場』（1961） 『住空間の家族学：「心・体」感覚で考える』（2003）		松沢	山田昭 （建築家）
12	近藤洋子	1930-	都市建築研究所（吉川清作の設計事務所） 岸本建築設計事務所	アトリエ事務所			近藤	岸本篤 （建築家）
13	吉田あこ	1931-	芦原義信建築設計研究所（1961-1965） 内藤建築事務所部長（1963） 筑波技術短期大学建築工学科建築工学科主任教授（1986-1997） 実践女子大学生活環境学科教授（1997-2002） 吉田研究室（?-?）	大学	『建築設計と高齢者・身障者：ここがポイントだ（建築技術選書；34）』（1984） 『高齢化時代の住まいづくり：いま考えること、なすべきこと（住まいを問い直す本）』（1988）		日下	吉田あきら （研究者）
14	高橋公子	1932-1997	東京大学池辺陽研究室技術補佐官（1955-1962） 建築ユニット設計事務所（1962-1971） 日本女子大学講師・助教授・教授（1972-1997）	アトリエ事務所 大学	『女のハイテック：生活行為と空間のシステム（住まい学大系；17）』（1988） 『住まいの近景・遠景』（1994）	日本女子大学高橋研究室の会：『時間の中の住まい：高橋公子と五つの住まいの現在』（2003）	境	高橋篤志 （研究者）
15	魚住麗子	1932-	北海道大学施設課 北海道庁住宅課公営住宅係 北海道大学助手（1961-1964） 北海道建築指導センター相談員（1966-?） 旭川大学女子短期大学（1980-?） 光塩学園女子短期大学（1980-?）	（現）一般財団法人 大学	—		（不明）	
16	加藤由利子	1932-	東京大学高山英華研究室（1958頃） 国民生活研究所（1962頃） 青山学院女子短期大学（1995頃） 山梨英和大学（2005頃）	特殊法人 大学	—		久松	
17	田中温子	1932-	都市建築研究所（吉川清作の設計事務所） 中野組設計部（1958頃） 岩手県庁建築課	官公庁			田中	
18	佐伯洋子	1934-	建設会社役員・同社長（1985-?）	技術系事務所	—		（不明）	
19	草野千恵子	1934-	早稲田大学安東勝男研究室（1966-?） ギャラリー空間（1999-?）	（不明）	—		小林	
20	飯島静江	1937-2010	桜井建築設備研究所 日建設計設備部	組織設計事務所	—		（不明）	
21	富田玲子	1938-	U研究室（1963-1971） 象設計集団（1971-）	アトリエ事務所	K.リンチ：『都市のイメージ』（翻訳）（1968） 『小さな建築』（2007）		富田	林泰義 （都市計画家）

1.2.3 女性建築家グループ「林・山田・中原設計同人」

中原における設計組織の特徴は、「設計同人」というグループで活動した点である。中原は東京大学生産技術研究所池辺陽（池辺陽 1920-1979 以下、「池辺」という）研究室（以下、「池辺研究室」という）の出身であるが、財団法人建設工学研究会（1950年設立 以下、「建設工学研究会」という）の技術研究生として所属している。

そして、中原らが設計同人として、建築家グループを設立したのは1958年であり、草創期に活躍した女性建築家の中でも、かなり早い。また、個人事務所を立ち上げる場合、配偶者と共同で事務所を運営することが多いが、中原らは、そのような組織ではなく、女性のみのグループを設立し、その中で主宰者が個別に受注し設計活動を行った。中原の詳しい生い立ちについては、後述する。

1.2.4 筆者の既発表論文等

筆者は、これまでに中原に関する以下の論文等を発表している。

【査読論文】

- 1) 深石圭子・木下庸子・大内田史郎：「中原暢子設計の長覚院における HP シェルと伝統の融合に関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』, 第 84 巻, 第 763 号, pp.2005-2015, 日本建築学会, 2019.9
- 2) 深石圭子・木下庸子・大内田史郎：「中原暢子設計の「辻別邸」における斜材丸太柱使用の設計意図に関する考察」、『日本建築学会技術報告集』, 第 26 巻, 第 62 号, pp.389-394, 日本建築学会, 2020.2

【紀要】

- 1) 深石圭子：「長覚院と水野レストランの設計についての考察」、『東京家政学院大学紀要』, 第 56 号, pp.107-114, 東京家政学院大学, 2016.8
- 2) 金子雄太郎・深石圭子・金子高裕：「長覚院本堂に関する構造工学的考察」、『東京家政学院大学紀要』, 第 56 号, pp.115-120, 東京家政学院大学, 2016.8
- 3) 深石圭子：「建築家中原暢子の茶室設計の系譜についての考察」, 第 57 号, pp.107-124, 東京家政学院大学, 2017.8
- 4) 深石圭子：「建築家中原暢子の設計した小間に関する考察」、『東京家政学院大学紀要』, 第 59 号, pp.115-122, 東京家政学院大学, 2019.8
- 5) 深石圭子：「中原暢子設計の茶室小間と本歌の差異—建築家・中原暢子の茶室に関する研究 1」, 『東京家政学院大学紀要』, 第 60 号, pp.159-173, 2020.8

【口頭発表】

- 1) 深石圭子：「長覚院の保存に関する一考察」, 『日本建築学会大会（九州）学術講演梗概集』, 日本建築学会, pp.955-956
- 2) 深石圭子：「昭和 40 年代柿生農協による住宅相談事業における中原暢子設計の農家住宅についての考察」, 『日本家政学会第 69 回大会ポスター発表研究発表要旨集』, p.91, 日本家政学会, 2017.5

- 3) 深石圭子：「伝統的和風住宅への回帰」、『日本建築学会大会（中国）学術講演梗概集』、日本建築学会、pp. 239-240
- 4) 深石圭子：「辻別邸に関する考察」、『日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集』、pp. 743-744、日本建築学会、2019.9

【その他】

- 1) 深石圭子：「建築家中原暢子の設計図書集成の作成」（平成24年度東京家政学院大学若手研究者研究費助成）、2013.1

1.3 本研究の目的と方法

1.3.1 目的

本研究の目的は、池辺研究室から独立し、1960年代から設計同人にて活躍した中原の作品を分析することによって、中原の設計活動を支える設計思想の展開を総合的に解き明かすことを目的とする。作品の傾向は、後述する「1.3.3.2 未発表作品を含めた作品の傾向」のように、大きく4つに分かれるが、それぞれの作品を支えた設計思想とその転換を促した契機、さらにその転換の中でも一貫して変化しないもの、変化したものを明確にすることによって、中原の設計思想を総合的に明らかにしようとするものである。

1.3.2 方法

中原の作品の傾向を分析するために、既に発表された作品を分類して大きな流れを把握する。次に、それに未発表作品を加えて、分類し、その流れに食い違いがないかどうかを確認し、研究対象の抽出を行う。発表作品を、設計同人での時代区別に、構造表現主義的作品の構造種別と建築種別の農村住宅・和風住宅・茶室に分類をする。そのうち構造主義的作品を混構造と木構造に分類し、混構造は層別タイプ（階層ごとに構造を変えているもの）と層別タイプ以外に分類した。和風住宅は、続き間座敷のあるものと単独座敷のあるものとで分類した。

1.3.2.1 発表作品からみる流れの把握

作品の流れは4つ存在する。第1の流れは、池辺研究室で学んだ機能主義の考えに従って設計活動を行った作品が初期に多くみられる。第2の流れは農業協同組合（以下、「農協」という）の住宅相談事業を通して「農村住宅」を設計した作品で、戦後の家族制度や農地解放によって農村の構造が大きく変化したにもかかわらず、「寄り合い」の重要性が持続し、その場として様式として確立した「続き間」や「続き間座敷」を採用した作品で、機能主義の思想からは逸脱した作品である。第3の流れは、このような「座敷」を備えた和風住宅の設計が集中する時期である。住宅の設計は注文設計であり、農村住宅の設計は伝統的な和風住宅を設計できる建築家としての定着が、このような住宅に対する注文が集中した結果と考えられる。第4の流れは小間、広間を備えた茶室設計が集中する最晩年である。中原は、第3の

流れが始まる時期に茶道を再度学び始める。このおよそ10年の修行の時期を経て、本格的な茶室の設計が始まる。

1.3.2.2 未発表作品を加えた時代区分の設定

このような大まかな流れに対して、未発表の作品を補足してその流れを確認する。

第1の機能主義に基づく作品は、既に発表されたHP シェルを用いた天台宗 西林山長覚院 浄泰寺（以下、「長覚院」という）や混構造の「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」に加えて、丸太斜材を構造として使った未発表の「辻別邸」を追加する。これらは機能主義に基づきながらも、構成機能と視覚機能を表現として用いた構造表現主義の作品群である。構造表現主義的な作品は初期に集中することから、これを第Ⅰ期とした。

次に機能主義を逸脱して旧来の「続き間」や「続き間座敷」の様式を「人寄せ」という接客機能に様式を選択することによって設計した農村住宅の他に、未発表であるが「水野レストラン」という作品がある。「食事を提供する」という機能に対して「明治建築風」「蔵造り風」「書院造」などの様式を組み合わせ、庭を中心に配置することによって、「食事を楽しむ」という機能に対する「舞台装置」のように様式を選択した作品が発見された。この考え方は機能主義の以前の様式選択の時代の方法論でもあり中原の大きな転換点と考え、様式受容の時期として第Ⅱ期に位置付けた。

その後、様式選択的な作品を設計した結果、和風の作品に対する注文が多くなった。しかしながら、第Ⅰ期でみた機能主義の思想が消滅したわけではなく、和風と機能主義が混在していることが作品を通してみられる。そこで和風と機能主義が拮抗している状態を分析することによって、中原作品の機能主義と伝統の重層性を実証する。これを第Ⅲ期と位置付けた。

最後は、小間・広間が揃った本格的な茶室設計の時期である。茶室設計の経験は、池辺の下で初めて設計を担当した「住宅 No.10」に始まり、既に第Ⅰ期から始まっている。茶室という「おもてなし」の空間として、小間の「写し」、広間の引用等様式を選択する第Ⅱ期以降の傾向が継続しているが、詳細にみると「写し」だけでなく、大胆な機能主義的な設計が行われている。これを第Ⅳ期とした。

このように作品の傾向を時期に区分することによって、設計思想の変化を具体的に把握するとともに、中原の設計思想の変遷の契機、さらにその中で変わったもの、変わらないものを突き止めることによって、中原の設計思想を総合的に明らかにする。

なお、本論で取り扱う作品について、元所員より譲り受けた図面に書かれている名称をそのまま用いることとする。

1.3.3 研究対象の抽出

設計同人時代の作品系統を分析するために、今回図面により詳細が明らかになった未発表作品を含めて行う。中原が設計同人で設計した作品は、設計図書として残っているものが142作品（付録1参照）であり、うち併用住宅、別荘を含んだ住宅は、139作品存在する。そのうち設計年の明らかな新築住宅は計72作品であった（表1-2）（付録3参照）。第6章

の調査については、新築住宅であるこの72作品を対象とし、本論文全体としては、「長覚院本堂」、増改築等の茶室をもつ住宅4作品及び単独茶室1作品を加えた、計78作品を研究対象とする。

表 1-2 中原の設計同人時代における作品数

住宅/非住宅	住宅（併用住宅・別荘等を含む）			非住宅	作品総数	
建築の種類	新築		増改築等	新築		
設計年施工年の明記	設計年が明らかなもの	設計年が不明なもの	設計年が明らかなもの			住宅作品数
発表作品	19	1	1	21	1	22
未発表作品	53	21	44	118	2	120
計	72	22	45	139	3	142

中原は、池辺研究室時代及び広瀬鎌二建築技術研究所にも所属していたため、そこでの担当作品も取り上げながら論じていく。また、設計同人での増改築模様替えについては、原則対象としないが、これも論述する上で必要な場合は、活用する。

なお、本論文記載の作品名後の年の表記について、特記がない場合は、設計同人における中原作品については設計年を、その他の作品については竣工年または発表年を記載している。

1.3.3.1 発表作品からみる作品の傾向

設計同人時代の中原の新築住宅の発表作品19作品、うち建築雑誌への発表は8作品と少ない。発表順に並べると下記の通りである（表1-3）。このように発表作品のみでは、中原の作品の傾向が不十分には読み取れなかったため、未発表作品も含み研究対象とする。

表 1-3 中原が発表した設計同人時代の作品一覧

No.	設計年月	作品名	掲載誌数	掲載誌										
				建築系 書籍	建築雑誌			作品集 (1999)	UIFA関 連	インテリア系		婦人系雜 誌	農協関連	
					KB (1946-2004)	JK (1975-)	SJ (1985-)			雑誌	SN (1961-2006)		書籍	機関誌
1	1961.11	吉永邸 (通り庭のある家)	1							1963.4				
2	1963.4	近藤邸 (増築) (K邸)	1								『暮らしの知 恵』 1965.11			
3	1961	田口邸1	2							1966.4				『みのり』 1966.9と その前後
4	1960頃	平田邸 (H邸)	1								『暮らしの知 恵』 1966.8			
5	1961.12	長覚院本堂・庫裡	1		1966.9									
6	1964.5	岡部医院 (O氏邸/岡部邸)	3	『木造の 詳細1構 造編』 1968	1966.1			○						
7	1965.10	木村別邸 (K氏別邸/下呂山の家)	5		1966.1	1976.6		○	『未来へ 女性建築 家のパイ オニアた ちの肖像』 2013.3	『新感覚 のセカンド ハウス』 1990.5				
8	1966.3	飯草邸	1										『農村の 住まい』 1967.9	
9	1966.12	立川邸1 (若夫婦の家)	1							1968.9				
10	1966	坂本邸 (雁行した家)	1							1968.9				
11	1967	仲林邸 (鉄筋コンクリートの 家)	1							1968.9				
12	不明	横田邸 (大屋根の家)	1							1968.9				
13	1968.7	高橋邸1 (扇形の家/Ta氏邸/T Ta邸)	3		1969.8	1976.6		○						
14	1972.9	前田別邸 (M氏別邸)	2		1974.3			○						
15	1972.11	四柳邸 (Y氏邸)	2		1974.3			○						
16	不明	木村ビル (Kビル)	1		1974.3									
17	1974.5	長谷川邸 (H邸)	1			1976.6								
18	1981.11	斉藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)	2	『食べる空 間・つくる 空間』 1984							『Sophia』 1986.6			
19	1985.2	中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和 の家)	4				1986.1	○	『未来へ 女性建築 家のパイ オニアた ちの肖像』 2013.3		『Sophia』 1986.6			
20	1980.10	西川別邸 (千葉の家/N氏別邸)	2					○		『新感覚 のセカンド ハウス』 1990.5				
21	1970.4	熊沢邸(柿生の家)	1						『未来へ 女性建築 家のパイ オニアた ちの肖像』 2013.3					

注:公表年月順に掲載。

掲載誌欄の、「KB」は、『建築文化』(彰国社)、「SJ」は『新建築 住宅特集』(新建築社)、「JK」は『住宅建築』(建築資料研究社)、「SN」は『室内』(工作社)、「作品集」は『中原それぞれの掲載誌名の下段には、創刊年—廃刊年を、網掛けの部分は、創刊前の時期を示す。

これを時期別種類別にまとめると、表 1-4 のように分類ができた。第Ⅰ期の位置づけを明確にするために、池辺研究室時代に中原が担当した作品を付け加えた。和風住宅は、第Ⅱ期と第Ⅲ期にまたがっている。

表 1-4 発表作品の系統

	構造表現主義			農村住宅	和風住宅（農村住宅を除く）		茶室	備考（未分類）
	混構造		木構造		続き間座敷	単独座敷		
	層別タイプ	層別タイプ以外						
池辺研究室時代		住宅No. 28	作品C				住宅No. 10	住宅No. 20
第I期	木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）	辻別邸 長覚院本堂 長覚院庫裡	田口邸1 岡部医院（O氏邸）				吉永邸（通り庭のある家） 木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）	平田邸（H邸）
第II期	坂本邸（雁行した家）	仲林邸（鉄筋コンクリートの家） 横田邸（大屋根の家） 熊沢邸（柿生の家）	坂草邸	坂草邸 立川邸1（若夫婦の家） 坂本邸（雁行した家） 仲林邸（鉄筋コンクリートの家） 横田邸（大屋根の家） 熊沢邸（柿生の家）				
第III期			前田別邸（M氏別邸） 四柳邸（Y氏邸） 長谷川邸（H邸）		長谷川邸（H邸）	高橋邸1（扇形の家/Ta氏邸/Ta邸） 前田別邸（M氏別邸） 四柳邸（Y氏邸）		
第IV期	西川別邸（千葉の家/N氏別邸）	斎藤邸（Kさんの家/斎藤邸） 中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）	千代田養神堂 戸部邸				斎藤邸（Kさんの家/斎藤邸） 中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）	

注：未分類の欄には、構造表現主義でも農村住宅・和風住宅・茶室にも分類できなかった作品を記載した。
 グレーの部分は、発表作品として対象とするものを示す。
 「住宅No. 10」は、池辺研究室で中原が初めて担当した住宅（1953）である。
 「住宅No. 20」は、池辺研究室で中原が共同で担当した住宅（1954）である。
 「作品C」は、池辺研究室で新建築賞・新制作協会展建築部に出品したものであり、中原が共同で担当した住宅案（1954）である。
 「住宅No. 28」は、池辺研究室で中原が単独で担当した住宅（1955）である。

第I期の混構造の層別タイプでは屋根にトラス構造を採用した「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」（1964）（写真 1-1）やHP シェルを用いた「長覚院」（1961）（写真 1-2）、があり、木構造では、「田口邸 1」（1961）（写真 1-3）、「岡部医院（O氏邸/岡部邸）」（1964）（写真 1-4）がある。これらは、混構造や合せ梁の採用により構造が表出するデザインがなされ、池辺研究室の設計活動での影響が強くみられる。その他にT型プランの「平田邸（H邸）」（1960頃）¹⁻⁷⁾（図 1-1）や和小屋の「吉永邸（通り庭のある家）」（1961）（写真 1-5）、がある。なお「辻別邸」の他に、木造を主構造とした池辺研究室時代の経験を生かしたものは、「平田邸（H邸）」（1960頃）、「田口邸 1」（1961）及び「岡部医院（O氏邸/岡部邸）」（1966）が挙げられる。「平田邸（H邸）」は、池辺研究室時代に中原が設計担当した「住宅 No.20」（1954）の平面形状を応用したものであり、「田口邸 1」（1961）は、同僚と共に新建築賞・新制作協会展建築部に出品した作品である「作品 C」（1954）の経験を踏まえて、実現したものであり、その合せ梁のシステムを建物全体に展開したものが、「岡部医院（O氏邸/岡部邸）」（1966）である。この作品は、『木造の詳細』¹⁻⁸⁾に細部にわたって掲載されている。

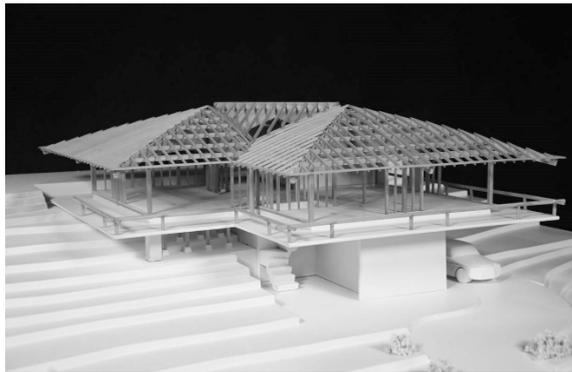


写真 1-1 「木村別邸 (K 氏別邸/下呂山の家)」 (1964) 模型写真



写真 1-2 竣工時の「長覚院」 (1966) 本堂

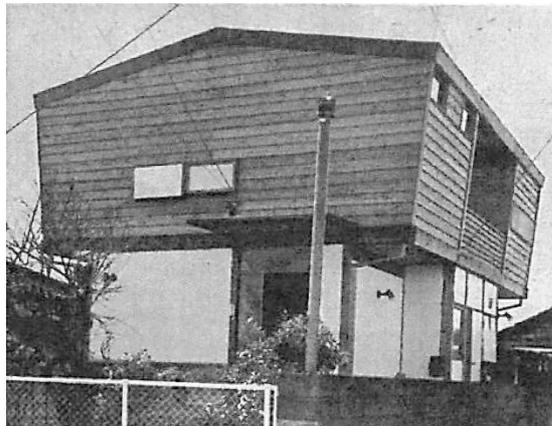


写真 1-3 「田口邸 1」 (1961) 北側外観

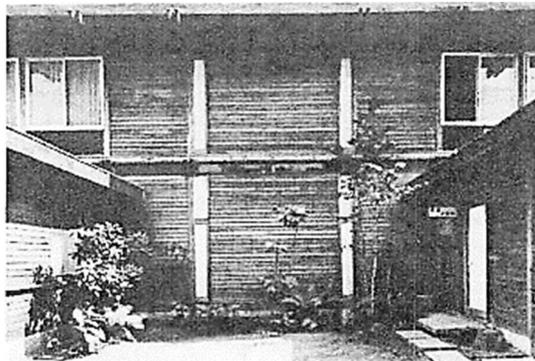


写真 1-4 「岡部医院 (O 氏邸/岡部邸)」 (1966) 外観

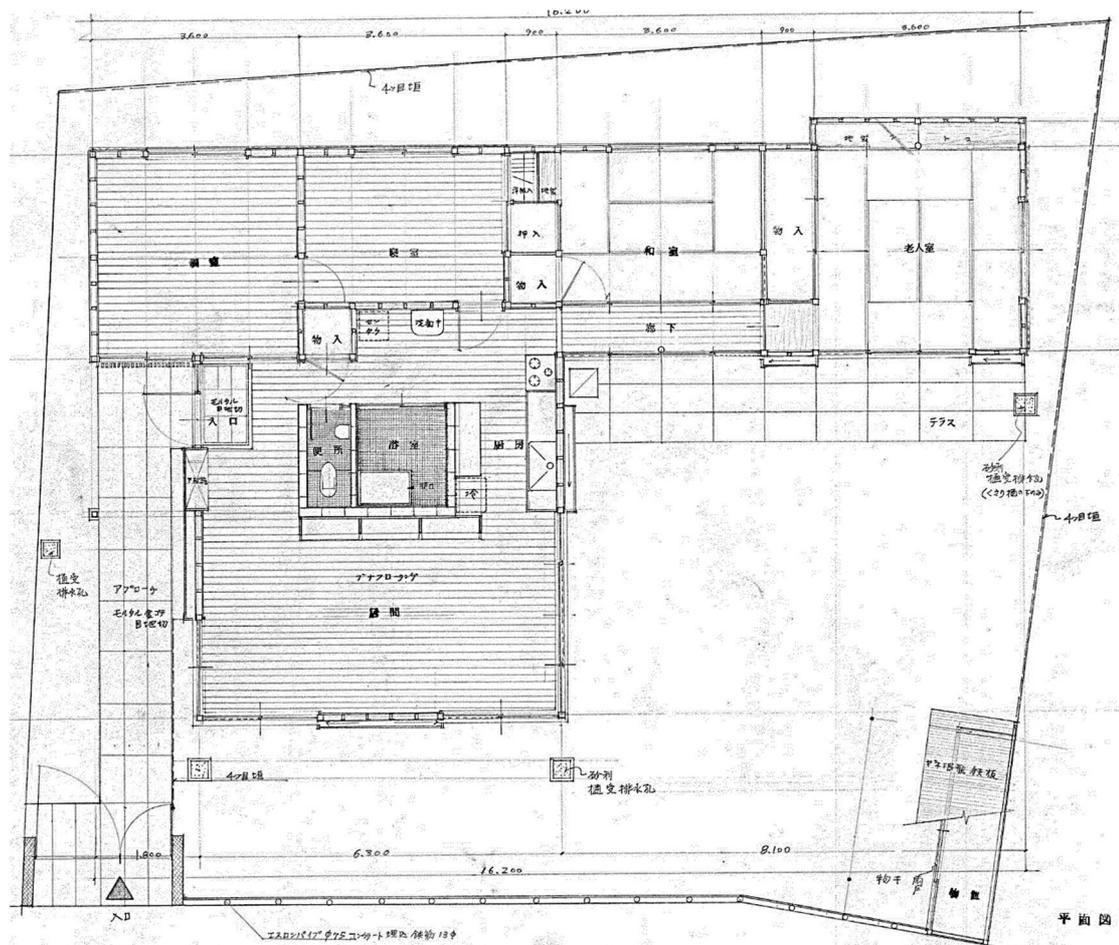


図 1-1 「平田邸 (H 邸)」 (1960 頃) 1 階平面図



写真 1-5 「吉永邸 (通り庭のある家)」 (1961) 南側外観

第Ⅱ期は、丸太を合掌に組んだ「飯草邸」(1966) (写真 1-6)、合せ梁・登り梁を採用した「立川邸 1 (若夫婦の家)」(1966) (写真 1-7)、木造の「坂本邸 (雁行した家)」(1966)¹⁻⁹⁾、木造の「横田邸 (大屋根の家)」(1968 以前) (写真 1-8)、混構造の「仲林邸 (鉄筋コンクリートの家)」(1967) (写真 1-9)、「熊沢邸 (柿生の家)」(1970)¹⁻¹⁰⁾がある。これらはいずれも農村住宅であり、「鈴木邸 1」以外は続き間座敷、または続き間が設えられている。

合せ梁を採用した「高橋邸 1 (扇形の家/Ta 氏邸/Ta 邸)」(1968) (写真 1-10) から第Ⅲ期を中心に座敷が完備した「四柳邸 (Y 氏邸)」(1972) (写真 1-11)、「長谷川邸 (H 邸)」(1974) (写真 1-12) がある。「高橋邸 1 (扇形の家/Ta 氏邸/Ta 邸)」は第Ⅱ期ではあるが、近代的な住宅に座敷を設けた和風住宅である。

第Ⅳ期は、茶室が複数ある「斎藤邸 (K さんの家/斎藤邸)」(1981) (写真 1-13) や「中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)」(1985) (写真 1-14) がある。いずれも茶道の生徒を招いた茶道教室や茶懐石の料理教室も開催可能な設備の整った住宅である。

作品数のみならず、発表された作品掲載の雑誌等には、その作品の解説が、書かれているものもあるが、それ以外に自身の設計手法を記したものも少ない。中原による著作は、雑誌等への掲載作品も含めて現時点で、117 件が見つかっており、それらも研究対象の一つとする。(付録 2 参照)



写真 1-6 「飯草邸」(1966) 南側外観



写真 1-7 「立川邸 1 (若夫婦の家)」(1961) 南側外観



写真 1-8 「横田邸（大屋根の家）」（1968 以前）南側外観



写真 1-9 「仲林邸（鉄筋コンクリートの家）」（1967）南側外観



写真 1-10 「高橋邸 1（T邸）」（1968）南側外外観



写真 1-11 「四柳邸（Y氏邸）」（1972）南側外観



写真 1-12 「長谷川邸 (H 邸)」(1974) 南側外観

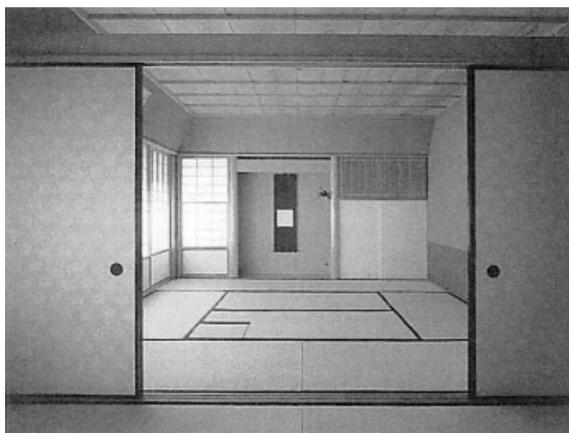


写真 1-13 「斉藤邸 (K さんの家/斎藤邸)」(1981) 和室 2

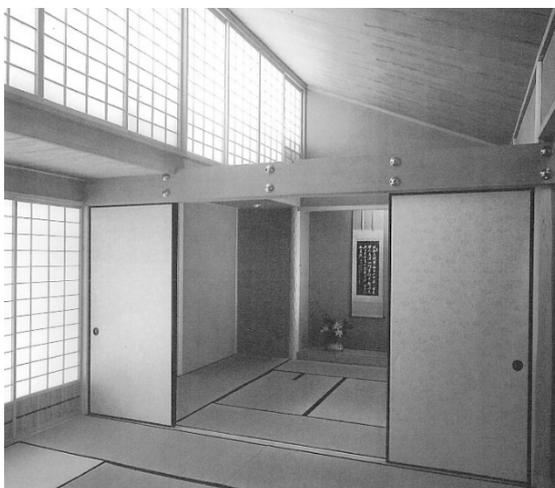


写真 1-14 「中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)」(1985) 茶室

このように発表作品については、「長覚院本堂」(1966)と農村住宅及び茶室設計が、重要な作品であることが予想されるところから、各章でこれらの作品について取り上げる。第 I 期の「平田邸 (H 邸)」(1960 頃)、「田口邸 1」(1961)、「岡部医院 (O 氏邸/岡部邸)」(1966)は、第 3 章で、「吉永邸 (通り庭のある家)」(1961)については、第 7 章で、「木村別邸 (K 氏別邸/下呂山の家)」(1964)については、第 6 章と第 7 章で部分的に取り扱う。

1.3.3.2 未発表作品を含めた作品の傾向

発表作品の一覧に未発表作品を加えた合計 72 の設計年の明らかな作品について、各期の対象となる作品数の内訳は、次の表の通りである。参考として池辺研究室時代についても記載している（表 1-5）。

表 1-5 時代区分と事柄、作品数一覧

時代区分	期間	事柄	作品数 (担当)
池辺研究室時代	1952-1955 1956-1958	建設工学会の技術研究員として、住宅の実務に関わった時代。	4
第Ⅰ期	1958-1965	設計同人を設立し、池辺からの直接的影響が作品に表れている時代。構造表現主義の作品が多くみられる。	18
第Ⅱ期	1966-1971	農協の住宅相談事業において多数の農村住宅の設計を担当し、同時に「水野レストラン」の設計を通して歴史的な様式を受容した時代。	22
第Ⅲ期	1972-1979	本格的和風住宅を多数設計するとともに茶道を学び直し、和風住宅の新たな展開を求めた時代。この傾向は、第Ⅱ期からみられる。	15
第Ⅳ期	1980-2002	第Ⅰ期からの茶室設計の傾向が大きく変わり、小間広間を備えた茶道の流派の特徴を踏まえた茶室設計を行った時代。	17

その全体的な傾向を把握するため、「構造構法」（表 1-6）、「和風要素」（表 1-7）の系統に分類し表を作成した。

「構造構法」（表 1-6）については、構造の表出の有無、合せ梁の採用、屋根の構造について抽出をした。すると、構造の表出は、全体的に見られるが、第Ⅰ期に集中しており、合せ梁の採用も多くみられる。屋根構造は、登り梁構造が最も多く、和小屋は第Ⅰ期に集中している。

「和風要素」（表 1-7）については、農村住宅、日本瓦、続き間座敷、単独座敷¹⁻¹¹⁾、続き間、床の間、本床、茶室の有無について抽出した。農村住宅は、第Ⅱ期に集中しており、日本瓦や続き間座敷の採用についても第Ⅱ期が最も多い。床の間については、第Ⅲ期のすべての住宅が採用している。床の間の形式で最も格が高いとされる本床の採用も多い。茶室の設計は、第Ⅱ期から第Ⅲ期は行われていない。

これらの詳細な分析については、第 6 章で後述する。

表 1-6 未発表作品を含めた構造構法の特徴

No.	作品名	時代区分	構造構法の特徴									
			構造の表出の有無		合せ梁	屋根構造						
			表出あり	表出なし		登り梁構造	垂木構造	母屋構造	洋小屋	和小屋	その他	
1	吉岡邸	第Ⅰ期	●							●		
2	本橋邸				●						●	
3	矢島商店				●	●						
4	茂木邸				●						●	
5	鱒邸				●						●	
6	平田邸 (H邸)				●						●	
7	芳賀邸				●							●
8	吉永邸 (通り庭のある家)				●						●	
9	長覚院庫裡			●			●					
10	辻別邸			●		●	●					●
11	田口邸1			●		●					●	
12	土肥邸			●								●
13	増山邸			●				●				
14	吉田邸			●			●				●	
15	岡邸			●								●
16	渡辺邸				●						●	
17	岡部医院 (O氏邸)			●		●						
18	木村別邸 (K氏別邸/下呂山の家)			●						●		
19	飯草邸	第Ⅱ期	●		●	●					●	
20	芝崎邸				●		●					
21	立川邸1 (若夫婦の家)				●	●					●	
22	坂本邸 (雁行した家)			●							●	
23	秋永邸				●	●						
24	仲林邸 (鉄筋コンクリートの家)			●								●
25	安藤邸1			●								●
26	安藤邸2			●								●
27	横田邸 (大屋根の家)			●		●		●				
28	高橋邸1 (扇形の家/Ta氏邸/T邸/Ta邸)				●	●	●					
29	高橋邸2				●	●		●				
30	戸田邸				●							●
31	水野レストランA棟			●								●
32	篠崎邸			●		●		●				
33	松田医院				●		●					
34	立川邸2			●		●	●					
35	堤邸1			●							●	
36	熊沢邸 (柿生の家)			●				●				
37	神崎邸			●								●
38	横山邸			●			●					
39	鈴木邸1			●		●						
40	志村邸			●	●	●						
41	竹内邸			●	●	●						
42	松本邸		●		●				●			
43	前田別邸 (M氏別邸)		●		●		●					
44	天満邸			●							●	
45	四柳邸 (Y氏邸)		●		●	●						
46	高塚邸		●		●	●						
47	沢柳邸		●		●	●						
48	長谷川邸 (H邸)	第Ⅲ期	●		●	●						
49	前田邸				●							●
50	田口邸2			●		●					●	
51	小杉邸				●	●						
52	堤邸2				●						●	
53	京極邸			●								●
54	山本邸				●							●
55	藤野邸 (現田中正造記念館)				●	●			●			
56	西川別邸 (千葉の家/N氏別邸)	第Ⅳ期	●						●			
57	佐野邸				●							
58	斎藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)			●								●
59	鈴木邸2				●				●			
60	田邊邸			●					●			
61	千代田養神堂			●		●						
62	中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)			●		●			●			
63	中原邸				●		●					
64	石垣邸				●	●	●					
65	森邸				●					●		
66	山田邸				●				●			
67	村上邸				●				●			
68	戸部邸			●					●			
69	木所邸			●			●					
70	寺内邸			●		●	●					
71	増田邸				●							
72	大関別邸			●		●			●			

注：中原設計の新築住宅（別棟であっても内部で行き来し出来るものは、住宅に付属する用途であれば含む）で設計年若しくは竣工年の明らかなもののみを古い順に示す。
「構造の表出」とは、梁（外観・内観）・小屋組（内観）、RC造の場合は外観に柱型がデザインとして、表出しているものを示す。

表 1-7 未発表作品を含めた「和風要素」の特徴

No.	作品名	時代区分	農家住宅	平面構成		床の間			茶室	日本瓦
				続き間座敷	単独座敷	続き間	床の間	本床		
1	吉岡邸	第Ⅰ期				●	●			
2	本橋邸				●		●			
3	矢島商店						●	●	●	
4	茂木邸									
5	神邸									
6	平田邸 (H邸)							●		
7	芳賀邸							●		
8	吉永邸 (通り庭のある家)				●	●	●		●	●
9	長覚院庫裡						●		●	
10	辻別邸									
11	田口邸1				●		●	●		
12	土肥邸						●			
13	増山邸									
14	吉田邸									
15	岡邸				●		●		●	
16	渡辺邸							●		
17	岡部医院 (O氏邸)									
18	木村別邸 (K氏別邸/下呂山の家)				●		●		●	●
19	飯草邸	第Ⅱ期	●			●	●		●	●
20	芝崎邸						●	●		●
21	立川邸1 (若夫婦の家)		●				●	●		●
22	坂本邸 (雁行した家)		●				●	●		●
23	秋永邸									
24	仲林邸 (鉄筋コンクリートの家)		●				●	●		
25	安藤邸1						●	●		
26	安藤邸2						●	●		
27	横田邸 (大屋根の家)		●				●	●		
28	高橋邸1 (扇形の家/Ta氏邸/T邸)				●		●	●		
29	高橋邸2							●		
30	戸田邸									
31	水野レストランA棟							●		
32	篠崎邸			●				●		
33	松田医院									
34	立川邸2		●		●	●	●	●		●
35	堤邸1									
36	熊沢邸 (柿生の家)		●	●			●	●		
37	神崎邸					●	●			
38	横山邸	●	●			●	●		●	
39	鈴木邸1	●		●		●	●			
40	志村邸	●				●	●		●	
41	竹内邸					●	●		●	
42	松本邸		●			●	●		●	
43	前田別邸 (M氏別邸)			●		●	●			
44	天満邸			●		●	●			
45	四柳邸 (Y氏邸)			●		●	●			
46	高塚邸			●		●	●			
47	沢柳邸			●		●	●			
48	長谷川邸 (H邸)		●			●	●		●	
49	前田邸			●		●	●			
50	田口邸2					●	●		●	
51	小杉邸			●		●	●		●	
52	堤邸2		●			●	●			
53	京極邸			●		●	●			
54	山本邸		●			●	●		●	
55	藤野邸 (現田中正造記念館)		●			●	●		●	
56	西川別邸 (千葉の家/N氏別邸)									
57	佐野邸		●			●	●	●	●	
58	斎藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)		●			●	●	●		
59	鈴木邸2						●			
60	田邊邸					●	●			
61	千代田養神堂					●	●		●	
62	中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)		●			●	●	●		
63	中原邸									
64	石垣邸					●	●			
65	森邸			●		●	●	●	●	
66	山田邸			●		●	●	●	●	
67	村上邸			●		●	●			
68	戸部邸					●	●			
69	木所邸					●	●			
70	寺内邸			●		●	●			
71	増田邸					●	●			
72	大関別邸									

注: 中原設計の新築住宅 (別棟であっても内部で行き来し出来るものは、住宅に付属する用途であれば含む) で設計年若しくは竣工年の明らかなもののみを古い順に示す。
 彩色部部分は、例えば「吉岡邸」の場合、この該当する続き間座敷は、単独座敷でも続き間にも該当するが、統計処理上、重複を防ぐために、判別できるよう表記している。

1.3.3.3 未発表作品を含めた研究対象の設定

系統別に研究対象として重要な未発表作品を追加した計78作品を分類すると、下記の表のようになる(表1-8)。作品の系統である「構造表現主義」、農村住宅、和風住宅及び茶室いずれにも該当しなかったものは、13作品であった。

各期の主な未発表作品は、第I期では、斜材丸太と合せ梁を使って構造を強調し、ピロティを使った「辻別邸」(1961)(写真1-15・写真1-16)、第II期において、明治建築風、蔵造り風、書院造の3つの様式を併存した「水野レストラン」(1976)(写真1-17・図1-2)がみられる。第III期では、「竹内邸」(1972)、「松本邸」(1972)、及び「藤野邸(現田中正造記念館)」(1979)などの続き間座敷のある伝統的な和風住宅が集中的に設計されており、第IV期では、初期の茶室である「岡邸」(1963)、後期の茶室である「佐野邸」(1981)、「森邸」(1987)、さらに「山田邸」(1987)等が該当する。

表1-8 未発表作品を追加した作品の系統と時代区分

	構造表現主義			農村住宅	和風住宅(農村住宅・茶室を除く)		茶室	備考(未分類)
	混構造		木構造		続き間座敷			
	層別タイプ	層別タイプ以外			続き間座敷	単座敷		
(参考)池辺研茶室時代		住宅No.28	作品C				住宅No.10	住宅No.20
第I期	木村別邸(K氏別邸/下呂山の家)	辻別邸 長登院本堂 長登院車裡 土肥邸 横山邸 吉田邸 岡邸	吉岡邸 田口邸1 岡部医院(O氏邸)		吉岡邸 矢島商店 美覚院庫裡	本橋邸 田口邸1	矢島商店 吉永邸(通り庭のある家) 岡邸 木村別邸(K氏別邸/下呂山の家)	茂木邸 榊邸 平田邸(H邸) 芳賀邸 渡辺邸
第II期	坂本邸(雁行した家) 水野レストラン 横山邸	仲林邸(鉄筋コンクリートの家) 安藤邸1 安藤邸2 横田邸(大屋根の家) 横田邸1 熊沢邸(柿生の家) 神崎邸	飯草邸 徳崎邸 立川邸2	飯草邸 立川邸1(若夫婦の家) 坂本邸(雁行した家) 仲林邸(鉄筋コンクリートの家) 横田邸(大屋根の家) 立川邸2 熊沢邸(柿生の家) 横山邸 嶋木邸1 志村邸				秋永邸 高橋邸2 戸田邸 松田邸
第III期	松本邸	高橋邸 沢野邸 田口邸2 京極邸	前田別邸(H氏別邸) 豊田邸(Y氏邸) 長谷川邸(H邸)		竹内邸 松本邸 長谷川邸(H邸) 横田邸2 山本邸 藤野邸(現田中正造記念館)	高橋邸1(扇形の家/Ta氏邸/T邸/Ta邸) 前田別邸(M氏別邸) 天眞邸 四柳邸(Y氏邸) 高橋邸 沢野邸 横田邸 小杉邸 京極邸	高橋邸増改築 増田邸増改築1 大塚邸増改築	
第IV期	西川別邸(千葉の家/N氏別邸) 田邊邸 木所邸 大岡別邸	斉藤邸(Kさんの家/斎藤邸) 中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家) 寺内邸	千代田兼神堂 戸部邸			村上邸 寺内邸	佐野邸 斉藤邸(Kさんの家/斎藤邸) 中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家) 森邸 山田邸 大野邸茶室 山田邸改築	鈴木邸2 中原邸 石塚邸 増田邸

注:未分類の欄には、構造表現主義でも農村住宅・和風住宅・茶室にも分類できなかった作品を記載した。
下線は、率として構成するものを示す。
太字は、対象として追加した未発表作品を示す。
グレーの部分は、色の濃さによりその特徴が強く表れているものを示す。
混構造については、第6章で詳細を述べる。



写真1-15 「辻別邸」(1961)の外観

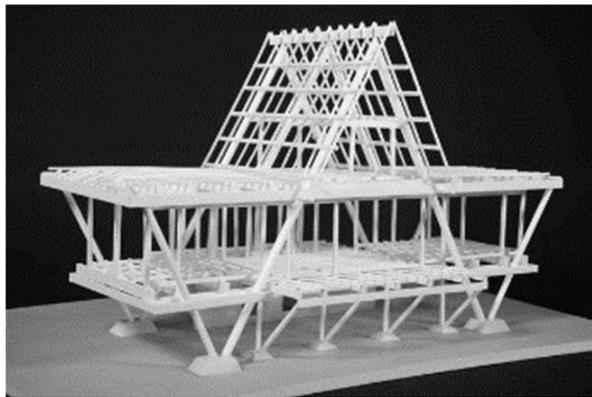


写真 1-16 「辻別邸」(1961)の模型写真



写真 1-17 「水野レストラン」(1976)の外観



図 1-2 「水野レストラン」(1976)スケッチ

未発表作品については、「辻別邸」(1961)と「水野レストラン」(1976)が、重要な作品であることが予想されることから、各章で取り上げ、「長覚院」庫裡(1966)については、第6章で混構造の事例として挙げることにする。

また、便宜的に設定したこの時代区分についても、このまま採用し、分析を行うことにする。

1.3.4 機能主義と和風

中原の設計思想には2つの流れが認められる。第1は池辺研究室で学んだ機能主義の考え方であり、第2は和風への指向である。双方は、一見関係がないように見えるが、後に述べる池辺が取り上げる機能の分類のうち「生活機能」は、単なる使用機能ではなく、それを支える本質的機能を追求するということであり、これは建築主の形としての要求を含むものと筆者は考えた。

1.3.4.1 機能主義の系統 構造表現主義

中原は、武蔵工業大学短期大学部を卒業後、勤務した池辺研究室では、住宅の機能性、経済的合理性、新しい工法や素材の開発とともに、部品、部材を統合するモジュラーコーディネーションの研究を行う中で、「住宅No.10」「住宅No.20」「住宅No.28」等の設計を担当している。設計同設立後の作品では、特に木造建築において、構造表現主義に則り梁を外部に採用するが、雨水による腐朽が生じた。その対策として、使用する部材の位置を外部から天井懐へと変更、また、当時新しい材料であった鉄骨梁を採用するといった流れが生じる。

機能主義についての池辺は、「住居の機能分類として、①生活機能：生活の合理性（家事：LDK・プライバシー：個室）、②空間機能：環境工学的分野（日照・通風・採光・室内気候）、③構成機能：構造（構造・構法・素材・施工）と設備（給排水・電気・ガス・空調）、④視覚機能：美的な問題（外観・室内）の4つがある」としている¹⁻¹²。また、池辺自身は構造表現主義という言葉を用いていないが、③構成機能と④視覚機能が合わさったものと理解できる。それは、建築部位に適した構造・材料を選択し、それを表出するという考え方である。これらについて書かれた著書『すまい』（1954.6）が出版されたのは、中原が池辺研究室に在籍していた時期（1952-1955、1956-1958）と合致する。この書作について中原は、「私はとてもいい本だと思っていて、たいへん勉強させていただきました。」¹⁻¹³と述べている。

構造表現主義の住宅について池辺は、チャールズ&レイ・イームズ夫妻設計の「イームズ邸」（1949）（写真1-18）を「もっとも新しい住居の外部と室内である。…（中略）…だが、この住宅は現代の住居の美しさを端的にあらわしている。そこにあるものは、永遠の美しさの原則と現代の技術の巧みな結合であるといわなければならない。私たちはここで再び民家の美しさが何に起因しているかを考えてみよう。或いは茶室の渋さについて考えてみよう。両者ともにあらゆるむだなものを取り払ってゆくところにこの方向が見出される。この住居はそれと同じ方向をとっている。」¹⁻¹⁴と述べている。さらに、「和風と現代住宅」の中で「高台寺傘亭」（写真1-19）とバックミンスター・フラー（1895-1983）設計の「夢の家」（1954）（写真1-20）を取り上げ、これを正しい方向と論じている¹⁻¹⁵。さらに小屋組については、「洋小屋のほうが細い木材でつくることができるので、耐震性にも経済性にもすぐれている」¹⁻¹⁶とも述べている。

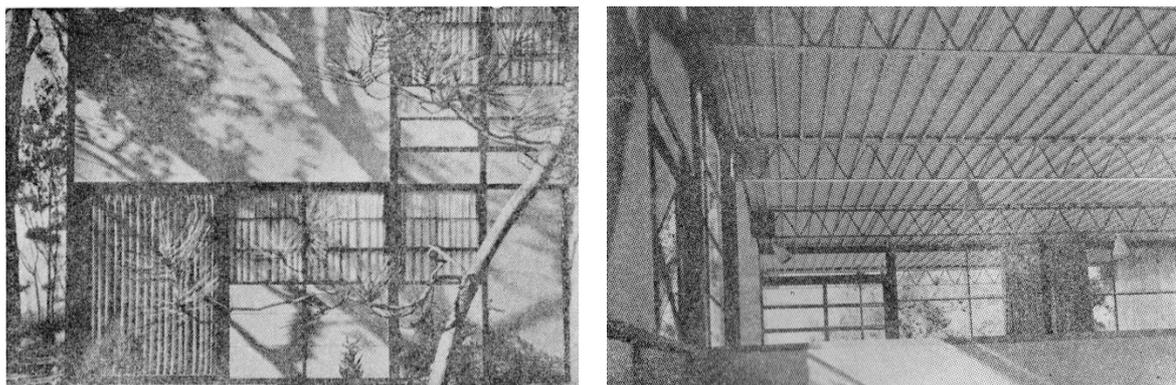


写真 1-18 「イームズ邸」の外観と室内（1949）

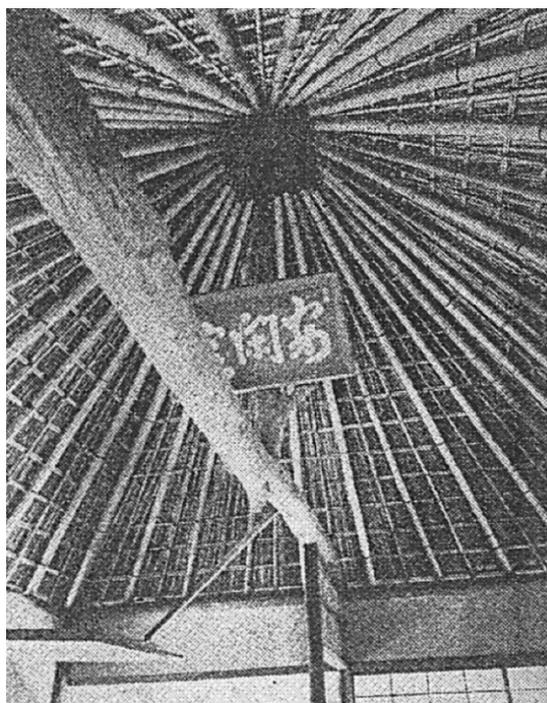


写真 1-19 高台寺「傘亭」（桃山時代）

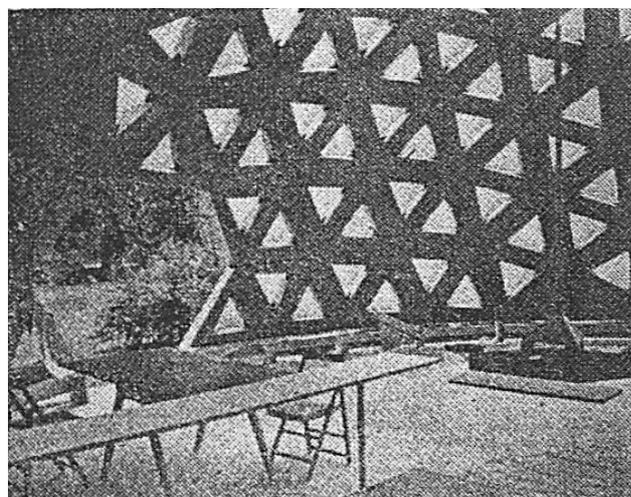


写真 1-20 「夢の家」（1954）

そこに流れる考え方の一つは、機能主義や経済合理主義の考え方であり、他は構造合理主義、さらには構造表現主義の考え方である。それは、家事労働の合理化や個人のプライバシーの確立であり平面計画に明確に反映されている。それらにつながるものとして、中原は、例えば伝統的な小屋組は構造的に安定性がないということから、合理的な小屋組を模索している。

1.3.4.2 和風 様式の受容

1) 農村住宅

機能主義建築は、機能が形態を決定することが原則で、機能のために歴史的様式を選択することはない。中原はNKKの住宅相談事業における農業を営む建築主とのやり取りを通して、従来からの封建的家族制度が廃止され、形式的な続き間座敷は不必要と考えられていたが、農村社会に残っている寄り合いや冠婚葬祭のための集会の場所として、さらに、農家の格として、伝統的な続き間が必要であるという強い要望に従い、続き間を確保し、外観は伝統的な日本瓦屋根のデザインを志向した。

2) 「水野レストラン」

さらに、これまでどこにも発表されておらず、今回の設計図書調査から発見された「水野レストラン」では明治建築風、蔵造り及び書院造といった歴史的様式をレストランという会食の場を選択するという、機能主義建築を基本としてきた中原の設計方法に大きな転換が行われたことが確認できる。

3) 和風住宅

農村住宅や「水野レストラン」を設計後、接客の用途としてのみ使用する続き間や単独座敷を採用した住宅が多くみられる。「松本邸」(1972)、「長谷川邸(H邸)」(1974)、「堤邸2」(1978)、「藤野邸(現田中正造記念館)」(1979)が例として挙げられる。

4) 茶室設計

茶室の設計については、池辺研究室時代の「住宅 No.10(秦邸)」(1953)で初めての茶室(4.5畳)を設計している。設計同人設立後も茶室の設計がみられる。近代的な茶室の試みが、「岡邸」(1963頃)や「木村別邸(K氏別邸/下呂山の家)」(1964)で行われる。中原自身が茶道を改めて習う中で、茶室設計の依頼が増え、その内容も徐々に小間と広間を共に備えた本格化したものとなっていく。

1.3.5 本論文で使用する用語の定義

本論文で使用する主な用語の定義を次に示す(表1-9)。用語の定義では、主に彰国社編の『建築大辞典 第2版』、深谷基弘他の『図解 木造建築伝統技法事典』、林屋辰三郎他の『角川茶道大事典 普及版』を使用している。

本論文で新たに定義した用語については、「」を付して用いる。

なお、池辺は「(和風とは、) 明治の初めにヨーロッパ風の住居が日本で建てられるようになった時に従来の住居を読んだ漠然とした言葉に他なりません。和風とはどんなものか、という定義などは始めからないのです。」¹⁻¹⁷⁾ としている。

表 1-9 本論文で使用する用語の定義

	用語	読み	用語の定義
第1章	ポドコ	ぼどこ	1953年に設立した女性建築技術者の会のことで、エスペラント語の「考える(PENSEDO(ペンセード))、話し合う(DISKUTEDO(ディスクテード))、そして創る(KREEDO(クレエード))」を意味する。1955年度の江ノ島のヨットハーバーのコンペで1位を獲得した。
	国際女性建築家会議	こくさいじょせいけんちくかかいぎ	国際女性建築家会議(Union Internationale des Femmes Architectes)のことで、1963年に設立した女性建築家を中心とする国際組織のことである。本研究では、「UIFA(ユイファ)」と略している。
	国際女性建築家会議日本支部	こくさいじょせいけんちくかかいぎにほんしぶ	国際女性建築家会議日本支部のことで、1993年に設立した。中原はこの初代会長を務めている。本研究では、「UIFA(ユイファ) JAPON」と略している。
	茶室	ちゃしつ	炉を設けた和室をいう。
	農村住宅	のうそんじゅうたく	農家の住居をいう。
	寄り合い	よりあい	ある目的をもって、人が集まることをいう。農家の場合、農民の自治会的会合も含まれる。
	続き間	つづきま	2つの和室が襖等で仕切られたものをいう。
	続き間座敷	つづきまざしき	いずれか一方が接客専用の和室で、座敷飾りのあるものをいう。
	座敷	ざしき	和室に床の間等を設え、接客に用いる室をいう。
	HPシェル	えいちびーしえる	双曲放物線面(HP:hyperbolic paraboloid shell)をもつ殻構造をいう。垂直断面が放物線、水平断面は双曲線となる。壁面として使用する場合、柱の役目も兼ねる。「双曲線外殻構造」ともいう。
	構造表現主義	こうぞうひょうげんしゅぎ	池辺が『すまい』(1955)で定義した「構成機能」と「視覚機能」を組み合わせたものをいう。「構成機能」とは、空間を可能にするための構造・設備、「視覚機能」とは、形や色から受ける精神的影響をいう。
	人寄せ	ひとよせ	人を寄せ集めることをいう。民家でいう「人寄せ」は、冠婚葬祭による人の寄せ集めも含む。
	単座敷	たんどくざしき	続き間でない接客専用の座敷をいう。
	「和風」 「機能主義」	わふうじゅうたく きのうしゅぎ	和室に座敷飾りを設えたものと定義する。 池辺の考える機能主義と定義する。
	建設工学研究会	けんせつこうがくけんきゅうかい	1950年に東京大学生産技術研究所の外郭団体として設立した財団法人建設工学研究会をいう。本研究では、「建設工学研究会」と略している。
	農協建築研究会	のうそんけんちくけんきゅうかい	1964年に設立した農村問題を解決する一助にしようと集まった建築家グループで、農林中央金庫の外郭団体である。本研究では、「NKK」と略している。
第2章	鞍型HPシェル	くらがたえいちびーしえる	HPシェルのうち、アーチ作用とサスペンション作用が直行に働くもので、境界部にはアーチのスラストとサスペンションの引張力が働くものをいう。
	双曲放物HPシェル	そうきょくほうぶつえいちびーしえる	HPシェルのうち、アーチ作用とサスペンション作用が直行に働くもので、面内応力の合力は縁方向に作用するため、縁に曲げは生じないものをいう。
第3章	水平筋違	すいへいすじかい	火打梁のをトラス状に使用したものをいう。
第5章	縁側	えんがわ	和風住宅の畳敷きの室の外部に面した側に設ける板敷きの部分をいう。
	なまこ壁	なまこかべ	土蔵などに用いられる、日本伝統の壁塗りの様式の一つをいい、その壁をも指す。
第6章	和室	わしつ	畳の敷き詰められた室をいう。
	本格的続き間座敷	ほんかくてきつづきまざしき	両室とも接客専用の和室で、少なくとも片方に座敷飾りのあるものをいう。
	床の間付き和室	とこのまつきわしつ	床の間のある家族の用の和室(例:居間、老人室、寝室、書斎)をいう。
	広縁	ひろえん	幅の広い縁側の総称。通常は水平にせず、外側の方を入側より3分から5分低くして水切りをよくする。
	入側	いりがわ	書院造り、または伝統的な民家においては、座敷と濡れ縁との間の細長い縁側部分。その幅1間から1間半くらいとる場合が多い。全面または一部を畳敷きとする場合もあり、この場合は、「縁座敷」と称される。
	蹴込床	けこみどこ	床框をつけず、床地板の下に蹴込板と呼ばれる横板を嵌め込んで畳面より一段高くした床の間をいう。
	踏込床	ふみこみどこ	床框をつけず、床の床面を客室の畳と同じ高さにして板または畳を敷き込んだ床の間をいう。

第6章 (つづき)	本床	ほんどこ	床柱を立て、床の内部を一段高くして畳又は薄縁を敷き、床前足元に床框を付け、上部に落掛を設け、その上を小壁とした床の間をいう。床の間の形式の中で、正式なものとする。
	織部床	おりべどこ	天井の廻縁の下端に、幅六七寸程の化粧板を柱と柱の間に壁面より三分程浮かせて取り付け、軸釘だけ打った床の間をいう。
	内縁	うちえん	縁側、広縁、入側をいう。
	和小屋構造	わごやこうぞう	柱の上に桁や小屋梁をのせて軸組を固め、小屋梁の上に多数の束をたてて屋根の勾配をつくる小屋組をいう。束相互を小屋貫、振れ止め、小屋筋かいで固定するが、洋小屋と比べると水平力に弱い。また、小屋梁は屋根荷重を受けることになるから、洋小屋と比べて大きなスパンをつくるのが難しい。『図解 木造建築伝統技法事典』
	洋小屋構造	ようごやこうぞう	トラスの原理で造られた小屋組をいう。屋根の形態や条件に応じてさまざまな形式がある。『図解 木造建築伝統技法事典』
	登り梁構造	のぼりばりこうぞう	屋根勾配にそって傾斜した登り梁(登り木)による屋根構造をいう。『図解 木造建築伝統技法事典』
	垂木構造	たるきこうぞう	母屋を用いず、屋根面の荷重を垂木(屋根下地を支える材)によって桁に伝える小屋組をいう。屋根裏は複雑な小屋組が作られず、広く開放されるので、収納や居室として利用しやすいことになる。『図解 木造建築伝統技法事典』
	母屋構造	もやこうぞう	壁面(または壁面を構成する柱、束)で支持された母屋で垂木を支持する屋根構造をいう。登り梁同様に、内部空間を活用する場合に用いられる。『図解 木造建築伝統技法事典』
	又首構造	さすこうぞう	斜めの材で屋根過剰を負担する小屋組をいう。一端は小屋梁、敷桁、柱上に置かれた枕木などに固定される。斜材はさす(又首・又首)、または合掌ともいう。『図解 木造建築伝統技法事典』
第7章	写し/本歌	うつし/ほんか	原本を写した書画類、原品になぞらえて造った茶道具類、原型を模した茶室などをいう。この場合もとどなったものを「本歌」という。『角川茶道大事典普及版』。本研究では、小間については平面、立体構成、材料や寸法が同一であるかを「写し」の定義とする。
	広間	ひろま	4.5畳以上の茶室をいう。
	小間	こま	4.5畳以下で躡口のある茶室のことをいう。
	亭主	ていしゅ	亭主が茶を点てる畳をいう。
	水屋	みずや	茶室に隣接する茶道具や水などを用意する場所をいう。
	寄付	よりつき	茶事に不要な荷物を風呂敷にしまい、足袋をはき替えるなど、身支度を整える室をいう。
	炉	ろ	畳の一部を切って床下に備え付けた一尺四寸四方の囲炉裏をいう。1~4月に行われる点前で使用する。
	躡口	にじりぐち	草庵の小間において、客が出入りするのための片引戸の小さな出入口をいう。
	露地	ろじ	茶室に付随する庭をいう。「茶庭(ちやにわ・ちやてい)」ともいう。
	原畳床	げんそうどこ	一畳大の地板の上の少し入ったところに床柱を立て落掛を入れた床をいう。
	待合	まちあい	「寄付」で身支度を整えた後に招待客全員が揃うのを待つ室のことをいう。「寄付」と「待合」は1部屋を区切って使用する場合もある。
	四畳半切	よじょうはんぎり	点前畳(亭主が茶を点てる畳)より客座側の半間下に出ている炉で、踏込畳が丸畳の炉の切り方で、「広間切」ともいう。
	風炉	ふうろ	火を入れて釜を掛ける道具をいう。5~12月に行われる点前で使用する。
	水皿	みざら	畳の面と同じ高さに作られた、竹の簀子(すのこ)の入った流しをいう。
	中板	なかいいた	点前畳と平行に客畳との間に入れた板畳のことをいう。
	二重露地	にじゅうろじ	一般的な露地の形式で、露地門側の外露地と茶室側の内露地からなり、その間に中門を設けたものをいう。
	大炉	だいろ	裏千家独自の炉で正式な寸法よりも大きな炉のことをいう。
	上座中床	じょうざなかどこ	上座側の間口の中間に床の間が位置するものをいう。
	平3畳台目	ひらさんじょうだいめ	点前畳から丸畳を横並びとして横長敷いた茶席のことをいう。
	台目切	だいめぎり	台目切とは、点前畳に接した外側の畳を切る出炉のうち、点前畳が台目畳で点前畳の長辺を二等分した位置から上座側に切れ、点前畳の炉の先が小間中(京畳1/4間、1/4畳)になる炉の切り方をいう。
	上座床	じょうだどこ	点前座に亭主が座してその前方(左手)に床の間が位置するものをいう。
	点前座	てまえざ	茶席で亭主が茶を点てるために座る場所をいい、一般的には点前畳と踏込畳を含めた、茶室で亭主が茶を点てるのに必要な場所をいう。
	茶道口	さどうぐち	亭主が点前をするときの出入口をいう。
	突上窓	つきあげまど	化粧屋根裏に切り開いた天窓をいう。
	給仕口	きゅうじぐち	懐石料理を出す場合など点前以外で客座に入るときの出入口をいう。
	方立口	ほうだてぐち	主に茶道口に用いられる出入口の形式のひとつで、方立を立てて上に鴨居を乗せて枠として区切った開口部を作り、水屋側に片引き襖を建てたものをいう。
	花頭口	かどうぐち	主に給仕口に用いられる出入口の形式のひとつで、方立のような枠を用いず、出入口の上部を丸くして壁を塗り廻し、塗り廻した縁を奉書紙で貼り、水屋側に鴨居を入れて片引き襖を建てたもので、「火灯口」、「火頭口」、「華頭口」、「火燈口」、「瓦燈口」、「架燈口」ともいう。

1.4 論文の構成

本論文を執筆するにあたって、まず中原の経歴を調査し、生涯に起きた出来事や中原と関わった人物との関係を明らかにする必要がある。各期において、中原の主な作品と推察できるものを抽出する。中原が池辺の構造表現主義の考え方に基づいて設計したものは、HP シェルを採用した RC 主構造の「長覚院」と、丸太を合掌に組んだ「辻別邸」(1961)である。そのため、第2章、第3章では、それぞれ「長覚院」と「辻別邸」を取り上げる。また、中原が設計した「農村住宅」、様式併存の「水野レストラン」(1976)の詳細を分析した後で、中原の住宅設計において「和風建築」の観点で分析し、さらに中原の和室設計の集大成となった「茶室」について各章で取り上げ、これらを通して、中原の作品と設計思想を明らかにする。

本論文は、第1章から第8章、及び付録から成り、本論文の構成図を(図1-3)として示す。各章の記載内容の概要は次の a.から i.に示す。

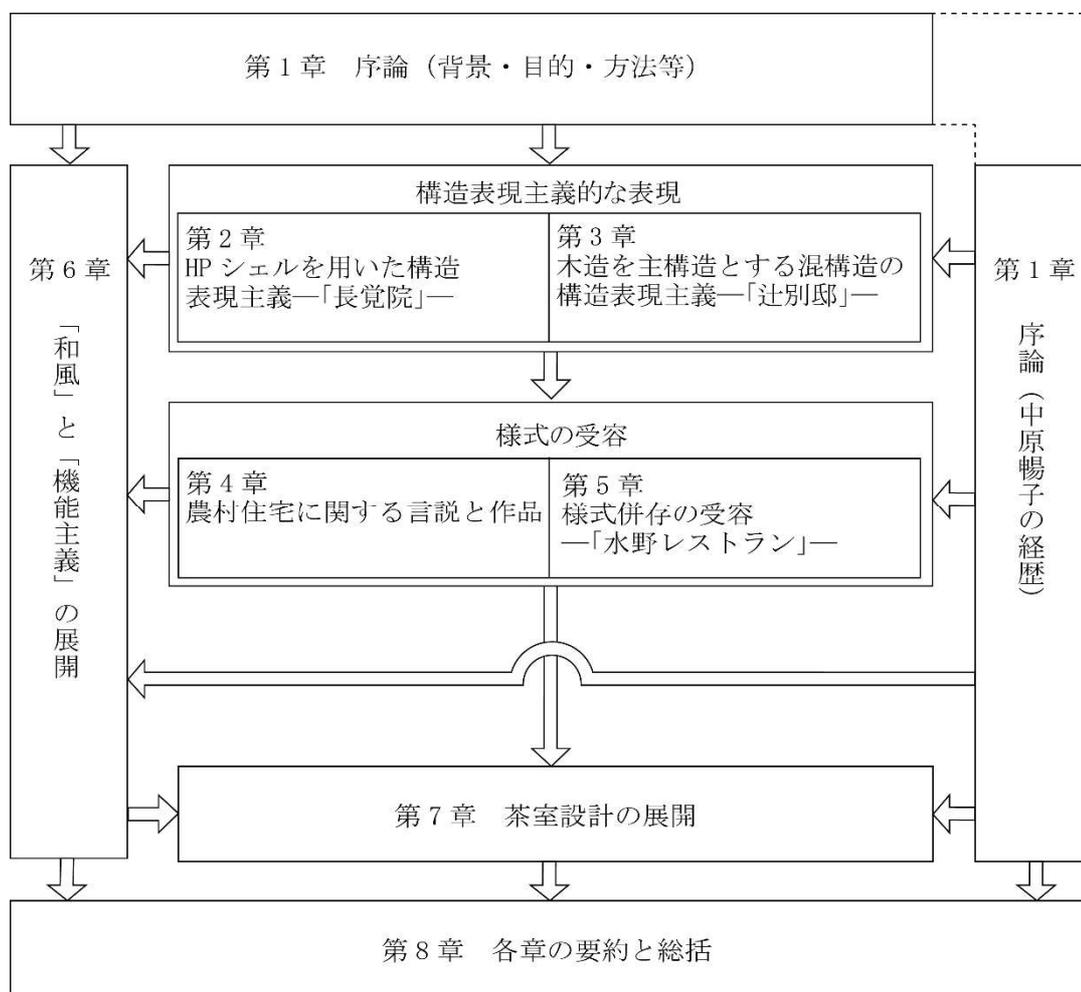


図1-3 本論文の構成図

a. 第1章 序論

第1章の「序論」では、本研究の背景と目的、既往の研究、論文の構成、研究の目的・方法、研究の対象を明らかにし、全体が俯瞰できるよう用語の定義の他、中原の経歴を述べている。

b. 第2章 HP シェルを用いた構造表現主義—「長覚院」—

第2章の「HP シェルを用いた構造表現主義—「長覚院」—」では、中原のRCが主構造の混構造作品である「長覚院」について、中原が、構造表現主義をどのように受け止めたのか、特徴的に表れる屋根構造に着目し、その施工過程を含めて検討する。

c. 第3章 木造を主構造とする構造表現主義—「辻別邸」—

第3章の「木造を主構造とする構造表現主義—「辻別邸」—」では、第2章と同様に、木造を主構造とする構造表現主義の扱いについて検討する。

d. 第4章 農村住宅に関する言説と作品

第4章の「農村住宅に関する言説と作品」では、構造表現主義など設計表現にとどまらず、機能主義的側面から中原の設計思想をみることが出来る住宅建築について、とりわけ作品の多く残こされている農村住宅について検討する。

e. 第5章 様式併存の受容—「水野レストラン」—

第5章 様式併存の受容—「水野レストラン」—では、やや、全体的な設計思想から外れる作品として、「水野レストラン」—を取り上げ、中原が自身の設計思想を拡大しようと試みた。その表れをここで探ってみる。

f. 第6章 「和風」と「機能主義」の展開

第6章の「「和風」と「機能主義」の展開」では、構造表現主義、構造主義などの思想的な変遷を辿って統合される「和風」を検討することで、中原に結実される設計思想を読み取りたい。

g. 第7章 茶室設計の展開

最後に第7章の「茶室設計の展開」において、中原の手による「茶室」の設計を検討することで、確立された設計思想を確認する。

h. 第8章 各章の要約と総括

第8章の「各章の要約と総括」では、第1章から第7章までをとりまとめ、明らかにしたことを示した。こうした設計思想の系譜を読み解くために、中原が関わった人物や当時の技術、社会的背景などを第1章に整理している。

i. 付録

付録1 中原暢子設計原図リスト

付録2 中原暢子著作リスト

付録3 中原暢子設計新築住宅の平面図・立面図一覧

付録4 中原暢子略年譜

付録に使用した主な資料を①～④に示す。

- ① 中原暢子の発表した作品の掲載資料とその関連資料
- ② 設計同人の元所員白井克典より譲り受けた中原設計の設計図書一式とその関連資料
- ③ 中原暢子：「建築一私との出会い 81」, 『建築文化』, 第41巻第480号, p.13, 彰国社, 1986.10
- ④ 太田博太郎他9名：『図説 日本建築年表』, pp.208-239, 彰国社, 2002.5.10

1.5 中原暢子の経歴（付録4参照）

中原の経歴が最も詳細に記載されているものは、中原自身が執筆した「建築一私との出会い 81」¹⁻¹⁸⁾があるため、それを中心に、中原の育った家族環境、住居・建築系教育、そして池辺研究室や設計同人等での設計活動を以下にまとめる。なお、中原の略年表（表1-10）と本論文に登場する建築・茶道を通じた人物との関係（図1-4）とを下記に示す。

表1-10 中原暢子の略年表

年	年齢	出来事
1929	0	埼玉県浦和市に生まれる
1944	15	埼玉県立浦和第一高等女学校卒業
1948	19	東京家政専門学校(現東京家政学院大学)卒業 労働省婦人少年局入省
1950	21	武蔵工業大学短期大学部建設科入学
1952	23	武蔵工業大学短期大学部建設科卒業 東京大学生産技術研究所第5部池辺研究室入室
1955	26	広瀬謙二建築技術研究所入所
1956	27	広瀬謙二建築技術研究所退所 池辺研究室再び入室
1958	29	林雅子・山田初江と共に、林・山田・中原設計同人を文京区表町に設立
1960	31	事務所を台東区上野に移転
1962	33	東京家政学院短期大学非常勤講師
1971	42	事務所を新宿区南元町に移転
1985	56	東京家政学院大学住居学科助教授
1988	59	東京家政学院大学住居学科教授
1992	63	国際女性建築家会議日本支部(UIFA JAPON)初代会長
1999	70	東京家政学院大学住居学科定年退職
2002	73	林・山田・中原設計同人解散
2008	79	死去 享年79歳

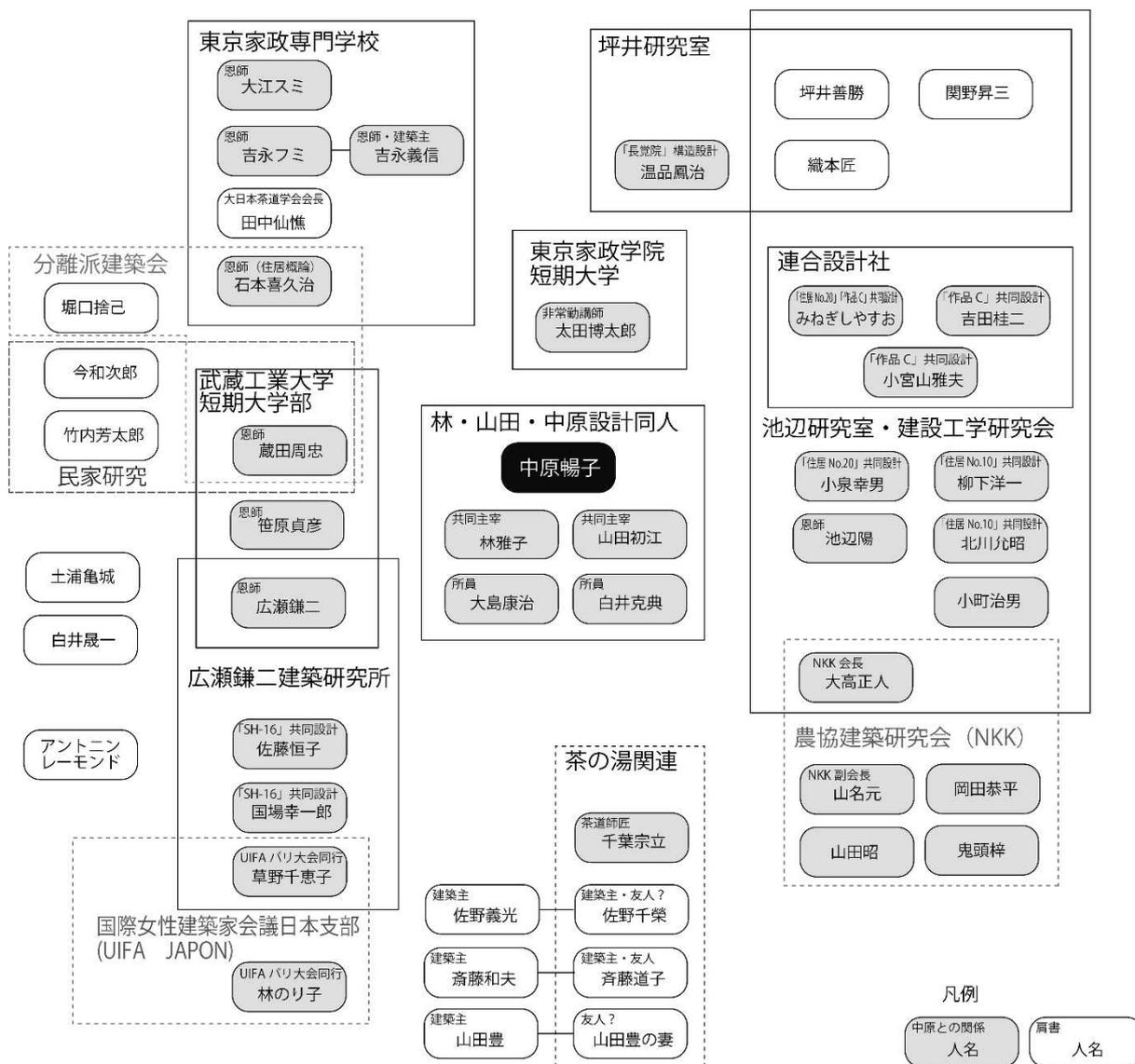


図 1-4 中原と関連する人物の関係

1.5.1 誕生から東京家政専門学校卒業まで

中原は、1929年1月5日、3人兄弟の末っ子として埼玉県浦和市（現：さいたま市）に生まれる。父の中原英寿は、師範学校教師であり、母のきよのも職業人であった。¹⁻¹⁹⁾ 祖母のきよは、浦和市議会議員で、第24代の浦和市議会議長を務めている¹⁻²⁰⁾。

中原は自身の住居として、後に「中原アパート」（1962）を埼玉県浦和市（現：さいたま市浦和区）常盤の自身の敷地に設計するが、その中に、大正15年（1926）築の中原の生家と思われる既存家屋平面・配置図が見つかった¹⁻²¹⁾。その配置図兼1階平面図によると、6畳の茶の間、床の間のある8畳と6畳の続き間、書斎と思われる本棚のある洋室があり、浴場は一部が土間であり、浴槽の隣には、恐らくそこには井戸であろう「井」の印が書かれている（図1-5）。

板の間の台所に茶の間が隣接し、配膳が容易な設計である。住宅の南には廊下を挟んで、8畳6畳の続き間座敷が南面して配置されている。北側には洋間がみられる。2階の間取りは不明である。台所周りの改造が想像されるが、続き間座敷が配置された伝統的な住宅である。

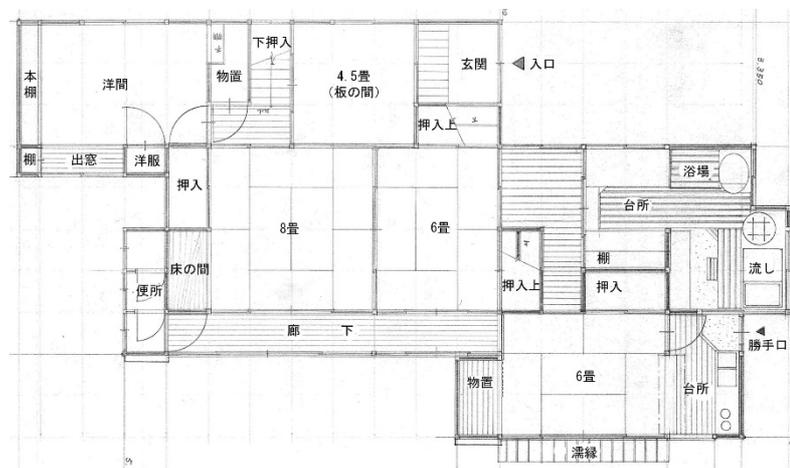


図 1-5 中原の生家と思われる配置図兼 1 階平面図

1941年に埼玉県立浦和第一高等女学校(現:埼玉県立浦和第一女子高等学校)に入学する。同年12月には太平洋戦争に突入した。中原は、戦時中、「死を常に意識していたのと、若くに吸収しやすい年頃だったせいも、仏教的なあきらめの思想は、その後も私を支配しているようです。」¹⁻²²⁾と述べている。晩年は仏教彫刻を趣味のひとつとしており、中原自身が彫ったとみられる多くの仏像が残されている。

女学校は本来5年制であったが全国一斉繰り上げ卒業となり4年で卒業し、そのまま終戦を迎える。中原は、東京・三番町の東京家政専門学校(現:東京家政学院大学)への進学を決意する。終戦直後の1945年9月に同校の保健科(入学定員50名)に入学した¹⁻²³⁾。校舎は同年5月24日の東京大空襲の影響で全焼していた。中原の住む浦和は、空襲の被害は大きくなかったが、強制疎開のため線路脇の住宅は立退かされ、何もない原っぱに変貌していた。同年10月から専門学校は、千歳船橋の寮を仮校舎として授業が行われ、そこに通うようになり、料理や裁縫を学ぶ¹⁻²⁴⁾。

大江スミ(1875-1948 以下、「大江」という)は、1916年に家事理論を説いた教科書として『応用家事精義』を出版し、大江家政学の体系化を試みようとする。第1巻は「緒論と住居」で構成されている。戦争の影響で、第2巻以降は出版されず、衣食は展開されなかった。次いで、1918年には『応用家事教科書』(上下巻)を出版する。住居については、第1章に記されており、農家や商店の間取りを新たに引き上げ、庶民の生活を意識していたことがわかる。1923年に東京市牛込区市ヶ谷富久町に家政研究所を開設した。1925年には、東京家政学院(家政高等師範部・家政専修部・家事实習部各種選科)を開学。1927年7月に家政高等師範部を東京家政専門学校として開学し、家政専修部を東京家政学院本科に改称する。翌年4月に、東京家政専門学校に研究科(裁縫科)・東京家政学院(各種学校)に専攻科設置する。

1938年には、東京家政専門学校に家事専修科設置。この頃、大江スミは、1938年に『禮儀作法全集』（第1巻～第9巻）（中央公論社）の編纂を手掛けている（表1-11）。第1巻第2編1章には、住居について書かれており、住居と礼儀作法の他、客間、茶の間、応接間、玄関、室内の各部、床・棚・書院とその飾り方についても書かれている。また、第5巻から第7巻は、茶人で日本茶道学会会長であった田中仙樵（1875-1960）が執筆しており、中原が在学する少し前の1931年頃に東京家政専門学校の学科担任講師を担当していた記録がある¹⁻²⁵⁾。また、時期は不明だが、中原は叔母から茶道を習っていたという¹⁻²⁶⁾。

表1-11 『禮儀作法全集』各巻のタイトルと執筆分担

巻	タイトル	執筆分担
第1巻	作法基礎・住居書道篇	大江スミ
第2巻	物品作法篇	大江スミ
第3巻	儀式・結婚篇	洋式作法：大江スミ 和式作法：久米茂
第4巻	饗応・社交篇	大江スミ
第5巻	茶道篇（上）	田中仙樵
第6巻	茶道篇（中）	田中仙樵
第7巻	茶道篇（下）	田中仙樵
第8巻	生花篇	兒島文茂
第9巻	盛花・瓶華（投入）篇	小原光雲

同専門学校で、日本で初めての近代建築運動として知られる分離派建築会のメンバーであった非常勤講師の石本喜久治（1894-1963）の住居概論を週に2時間程度受け、設計の仕事に興味を持つ¹⁻²⁷⁾。石本喜久治は、戦前に前任であった早稲田大学教授工学博士の吉田享二（1887-1951）を引き継ぎ、宇田川（後の永山）フミ（1917- 非常勤講師・後の同校教授・同窓会光塩会会長）により推薦され、1945年に東京家政専門学校に着任していた。石本喜久治は、この頃日本人のすまいに影響を与える米兵将校用扶養家族住宅「ディペンデントハウス代々木」（1946年竣工）の設計に取り組んでいた¹⁻²⁸⁾。その他、後に中原の建築主となる日本庭園史の権威である吉永義信（1895-1985）が生物学の非常勤講師として東京家政専門学校に着任している。

1.5.2 労働省入省から東京大学生産技術研究所池辺研究室退所まで

同専門学校卒業後、直ちに労働省婦人少年局に勤務する。建築への夢を捨て難く、1950年に石本喜久治の勧めで、同じく分離派建築会の蔵田周忠（1895-1966）¹⁻²⁹⁾がいる武蔵工業大学（現東京都市大学）の短期大学部建設科¹⁻³⁰⁾を薦められ、蔵田周忠本人に相談をした上で同短期大学部の第1期生として入学する。同科の同級生は4名で、女学生は全校で中原一人であった。中原が本格的に建築教育を受けたのは、この2年間である¹⁻³¹⁾。

「武蔵工業大学短期大学部設置要綱」¹⁻³²⁾によれば同科の専門科目には必須科目として、応用化学、測量、建築史、材料、施工、建築計画、建築法規、橋梁及鋼構造、鋼筋コンクリート、建築構造法、基本製図、建築製図、測量実習、材料実験、校外実習、選択科目として衛生工学、都市計画が設置されていた¹⁻³³⁾。中原は1年次の夏休みより、戦前のモダニズム建築の先駆けであった土浦亀城建築設計事務所の元所員であり蔵田周忠の愛弟子・笹原貞彦（1914-2005）の事務所で手伝いをし、実践的建築製図能力を養った。

1952年に同短期大学部卒業後、機能主義や工業化という観点から建築を提案した池辺の「立体最小限住宅 No.3」（1950年発表）に憧れ、1952年5月より東京大学生産技術研究所池辺研究室に技術研究生として入室する。中原が当初在籍した1953年から1955年の池辺研究室は、以下の所員10名で活動していた（表1-12のNo.1～No.10）。

表1-12 中原が在籍していた頃（1953-1958）の池辺研究室のメンバーとその在籍期間

No.	氏名	在籍期間
1	関文子	1946-1963
2	嶺岸泰夫	1948-1956
3	吉田秀雄	1948-1957
4	北川允昭	1950-1953
5	柳下洋一	1950-1953
6	小泉幸男	1951-1953
7	吉田桂二	1952-1957
8	尾崎昌凡	1953-1955
9	小宮山雅夫	1953-1957
10	中原暢子	1953-1955、1956-1958
11	佐々木宏	1955-1962、1965- ?
12	高橋公子	1955-1962
13	川井満	1957-1958
14	箱根強	1957-1961

入室後の中原の研究テーマは「立体最小限住宅の設計」であった。具体的な設計活動は、建設工学会で行っていた。建設工学会は、東京大学生産技術研究所教授の坪井善勝（1907-1990）の提案で、池辺を中心として、今泉善一建築設計事務所（1948年5月設立）と小芦健一を代表とする日本赤煉瓦協会とを統合させて発足した生産技術研究所の外郭団体であり、池辺が設計の実務を行う場でもあった。その組織は、住宅系グループとビル系グループに分かれており、中原は住宅系グループに所属していた¹⁻³⁴⁾（図1-6）。

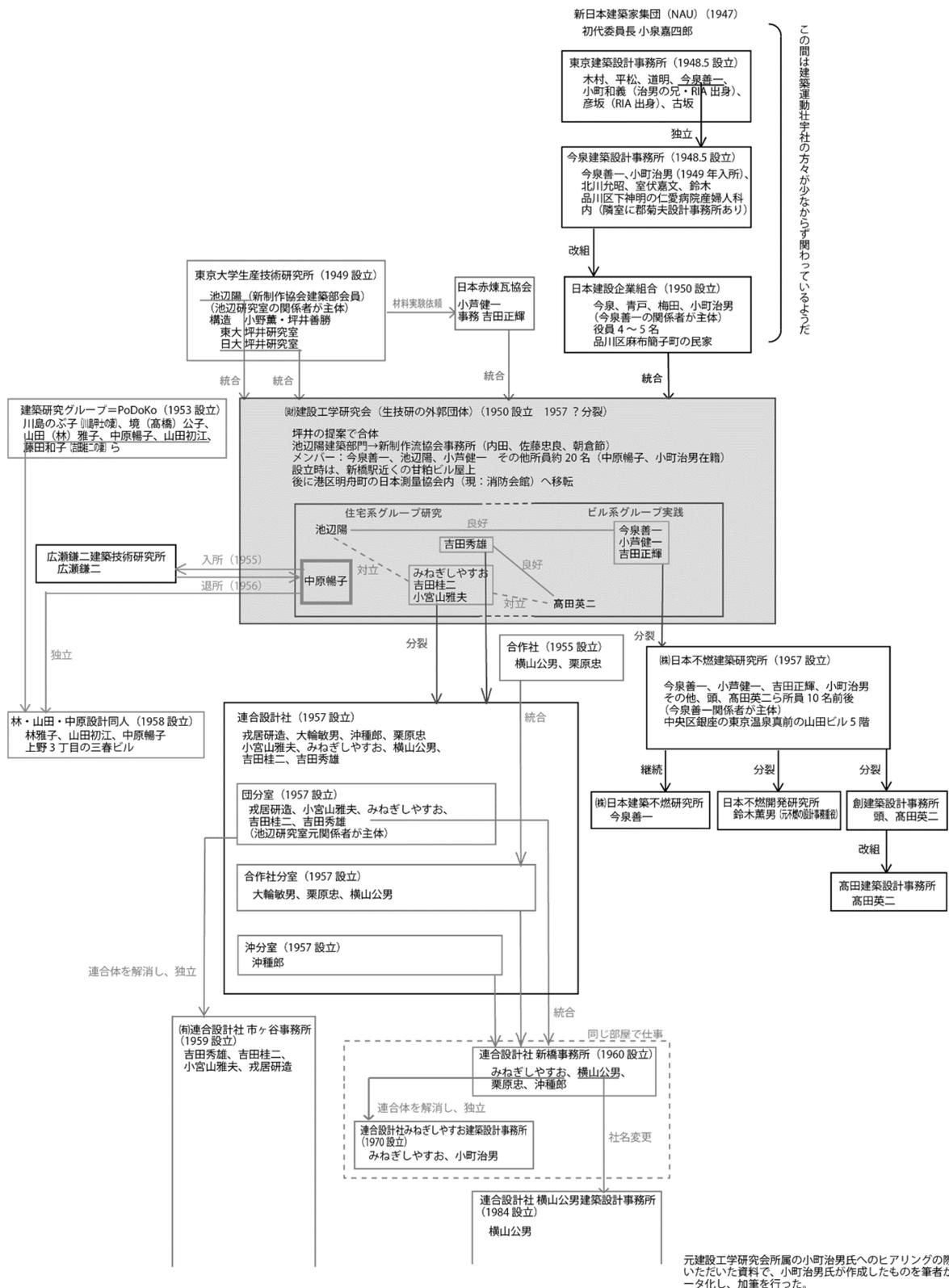


図 1-6 昭和 20 年代から 50 年代までの池辺研究室を中心とした建築人脈の流れの概略

五期会（1956年6月結成）は設計事務所や大学の研究室に所属し、設計活動に従事していた若者を中心に結成された。会の目的は、「民衆の建築を目指し、積極的な創造活動を展開するために、建築家の主体的・内的条件である設計体制・組織の改革を図る」¹⁻³⁵⁾ というものであり、建築家の在り方に関する様々な主張がされた。建設工学研究会は、研究主体の住宅系グループと実践主体のビル系グループの運営方法の違いについて、五期会の理想と建設工学会の経済的な行き詰まりでの所員の不満が高まり、1957年に池辺を除く池辺研究室の元関係者が主体の「連合設計社」（1957年設立）と今泉善一ら率いる「株式会社日本不燃建築研究所」（1957年設立）に分裂することになる。この住宅系研究グループに所属していた嶺岸泰夫（1925-没年不明）や吉田桂二（1930-2015）らは、中原とともに活動した建築家であり、その影響は大きかったと推察される。資料には「池辺研（建設工学研究会）が分裂して、池辺さんと嶺岸（泰夫）さんたちとの間で大騒動があって、そのとぼっちりでこっちも弾き出された」¹⁻³⁶⁾、さらに、「自分の場所がなくなったから飛び出さざるを得なくなった」¹⁻³⁷⁾ と書かれている。結果として中原は、このどちらの団体にも所属せず、技術や生産から建築を捉えた広瀬鎌二（1922-2012）に拾われる形で1955年から1年間、広瀬鎌二建築技術研究所に入所するが、その後池辺の要望で、池辺研究室に戻る¹⁻³⁸⁾。

池辺研究室で中原が実際に設計担当したのは「住宅 No.18」（1953）から「住宅 No.38」（1958）くらいまでとの記述がある¹⁻³⁹⁾ が、池辺研究室と広瀬鎌二建築技術研究所で、設計担当として中原の名前が記載されている雑誌掲載作品は下記の通りである（表 1-13）。

表 1-13 池辺研究室・広瀬鎌二建築技術研究所での中原担当の作品

	建築名称	竣工年	構造	設計担当者	雑誌出典
池辺研究室	「住宅No.10・秦邸」	1953	W	柳下洋一・北川允昭・中原暢子	『国際建築』1953.2、 『建築文化』1995.3
	「住宅No.20」	1954	W+CB	みねぎしやすお・小泉幸夫・中原暢子	『新建築』1954.11、 『建築文化』1995.3
	「作品C」	1954*	—	みねぎしやすお・小宮山雅夫・吉田桂二・中原暢子	『新建築』1954.11（新建築賞・新制作協会展建築部出品作品）
	「住宅No.28」	1955	S+CB	中原暢子	『新建築』1955.11、 『建築文化』1995.3
広瀬鎌二建築技術研究所	「SH-12（公団試作1号住宅）」	1957	S	中原暢子	『新建築』1957.1
	「SH-16」	1958	RC+S+CB	中原暢子・佐藤恒子・国場幸一郎	『近代建築』1958.10

*：発表年を示す。

「住宅 No.10」は、『国際建築』掲載平面図と『建築文化』掲載平面図と照合した結果、「秦邸」にあたると思われる（図 1-7、図 1-8）。中原は池辺研究室にて伝統論争の真っ只中にいた人物のひとりである。「住宅 No.20」（写真 1-21、図 1-9）は、池辺の作品の中でも代表的なものである。「作品 C」（写真 1-22）は、個人空間と家族空間の上下型として計画したものであり、2階梁に合せ梁を用い外部に表出したデザインを採用している。「住宅 No.28」（写真 1-

23) は、建築主がサッシ工場の関係者であり、鉄骨・サッシを使用することが基本条件であった住宅であり、中原が一人で設計担当として進めたものである¹⁻⁴⁰⁾。

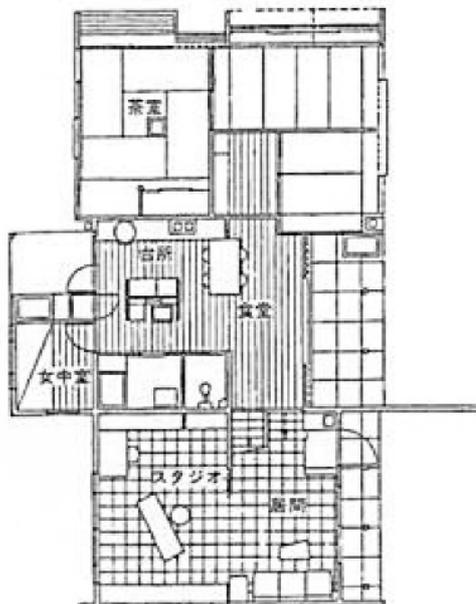


図 1-7 『国際建築』掲載の「秦邸」(1953) 平面図

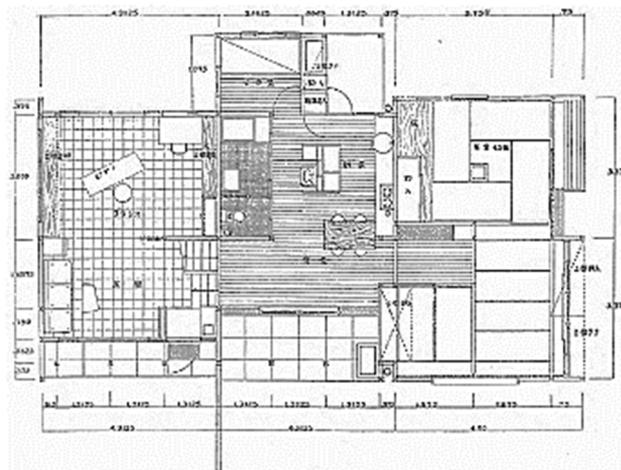


図 1-8 『建築文化』掲載の「住宅 No. 10」(1953) 平面図



写真 1-21 「住宅 No. 20」(1954)

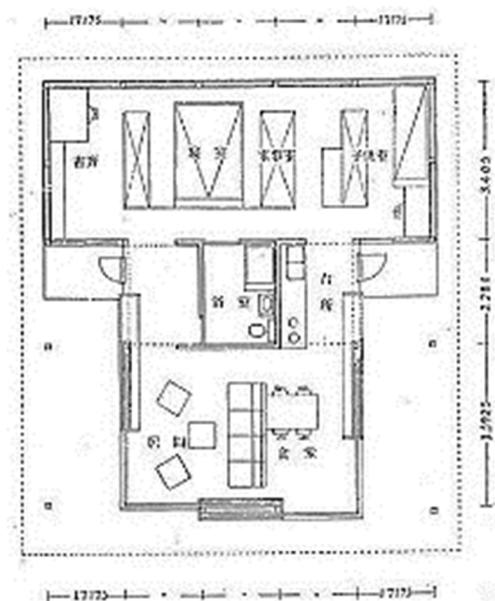


図1-9 「住宅 No. 20」(1954) 1階平面図

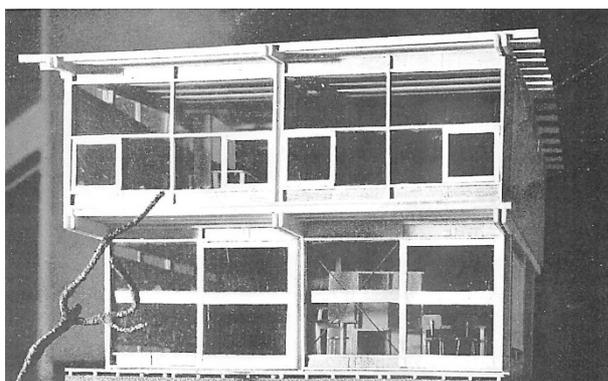


写真1-22 「作品C」(1954 発表)

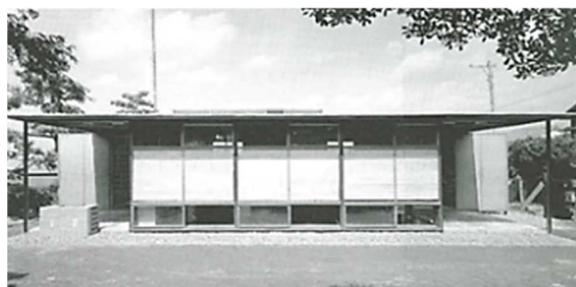


写真1-23 「住宅 No. 28」(1955)

中原は、「池辺陽 システマチックな感覚と人間的魅力」の中で池辺について「池辺さんはだんだん年をとるにつれて随分デザインも変わられました。考え方を突き詰めていったような住宅がたくさんできてきていると思いますが、私がおりましたときは、まだ池辺さんが一生懸命住宅を考えようとしていた時代だったと思います。」¹⁴¹⁾と述べており、住宅ナンバーシリーズでいうと屋根や壁面に集成材と波型曲げスレートを使用した「住宅 No.58」(1960) (写真1-24) の頃とは異なる時代であったことが分かる。

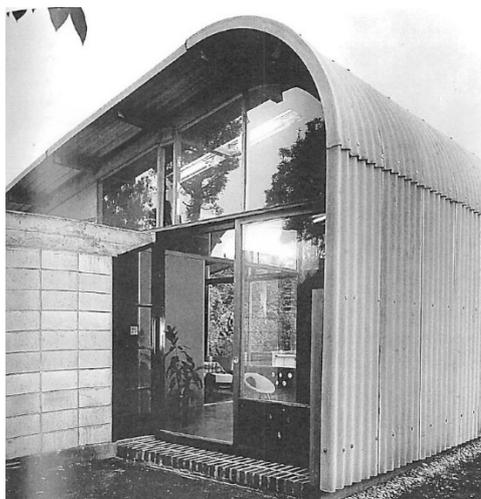


写真 1-24 「住宅 No. 58」(1960)

1955年に広瀬鎌二建築技術研究所に入所した中原は、一連の鉄骨造独立住宅作品「SHシリーズ」の中の公団試作第一号住宅である「SH-12」(1957)を単独で担当した後、「SH-16」(1958)を佐藤恒子・国場幸一郎と共同で設計する。「SH-12」は、日本住宅公団調査研究課と日本軽量鉄骨協会が企画した作品である。鉄骨造によって量産及び工場生産方式の採用を前提としたものであったが、広瀬鎌二は「この試作が、計画の最初から、その意図の半ばを失っていたということは、公共機関が企画し実行することのできた最初の機会であっただけに、まことに残念であった。」と述べている¹⁻⁴²⁾。「SH-16」は、鉄骨が急激に高騰した影響のため、プランニング変更が追いつかず、居間と台所、さらに寝室と浴室が離れたものになっている¹⁻⁴³⁾(図1-10)。

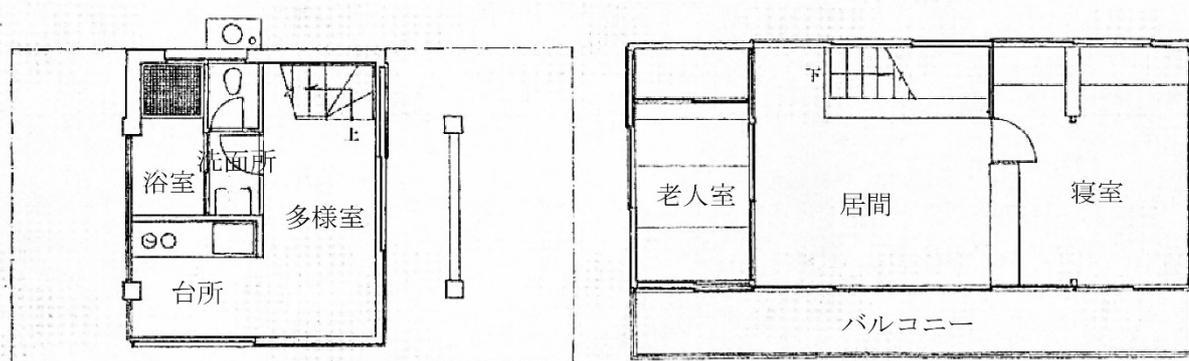


図 1-10 「SH-16」(1958) 各階平面図 (左:1階平面図 右:2階平面図)

池辺研究室に戻った中原は、出戻りの身では居辛い状況であった¹⁻⁴⁴⁾。この頃、池辺から「女子の仲間づくりをしてみたらどうか」との勧めもあり¹⁻⁴⁵⁾、女性の建築家の集まりであるポドコ(1953年設立)の活動に参加する。ポドコとは、エスペラント語¹⁻⁴⁶⁾で「考える

(PENSEDO (ペンセード))、話し合う (DISKUTEDO (ディスクテード))、そして創る (KREEDO (クレエード))」を意味する。山田は、「民主主義の社会といわれていてもまだ封建制の色濃く、女性であるがための根強く古い因習からの束縛、男性とのハンディキャップを取り除くために一人で思い悩むよりは、友人たちとの連帯のなかで、その因子をとり除く努力をしていこうというのがポドコのめざすものであった。」¹⁻⁴⁷⁾と述べている。

池辺研究室の所員が1957年から次々と独立をしていく中、ポドコに横浜の神奈川県青少年センターの企画段階の依頼が入り、清家清研究室に所属していた林とともに現地に通い詰めたことがきっかけとなり、共同で事務所を設立することになったという。しかし、二人だけでは喧嘩になるといけないとのことで、もう一人誰かをということになり、井上一典建築設計事務所の山田に声が掛かった。そして1958年、東京都文京区表町に女性3人を主宰とする設計同人を設立した¹⁻⁴⁸⁾。当時の事務所は、4畳半一間の広さであり、そこに中原が下宿していた¹⁻⁴⁹⁾。

1.5.3 林・山田・中原設計同人設立から第1回UIFA参加まで

設計同人設立では、当初から事務所のスペースと所員を共有することで事務所運営上の負担を軽減し、設計活動は3者独立させるという姿勢をとっており、3者が連名の共同設計はみられない。また、設計業務の営業に関しても、3者各々の人脈により受注しており、その部分は所員にもみえない部分であった。担当所員は固定されていたというわけではなかった。3者間での設計におけるお互いの影響について、3者が直接議論するということはなかったもの、所員を共有していることから、所員を介したことでお互いに受けた影響はあったのではないか¹⁻⁵⁰⁾という。

設計同人設立後、1年半は『婦人画報』や『主婦の友』などの複数の婦人向け生活情報誌での住まいに関する執筆活動が多くを占めていた。ラジオでの「住宅教室」や新聞の家庭欄連載にも取り組む(表1-14)。1960年には事務所を台東区上野の三春ビルに移す。一方1962年には、中原の母校である東京家政学院短期大学で非常勤講師として着任し、家政専修科の授業科目「すまい」や「室内装飾」を担当する¹⁻⁵¹⁾。中原が勤務していた1975年の建築関連の教員には、同じく非常勤として授業「住居学(造園)」を受け持った造園研究者の金子九郎(1902-1982)、授業「住居学概論(室内計画・造園学)」を受け持った坂田種男(生没年不明)がいる¹⁻⁵²⁾。

表 1-14 中原寄稿の婦人（家政）系雑誌等一覧

年	月	著者・協力者	雑誌名(出版社)等	タイトル
1958	—	林雅子、山田初江、中原暢子	(池袋三越)	(モデルルームの設計・展示)
	6	林雅子、山田初江、中原暢子	女性教室(ラジオ東京テレビ)	住宅教室(週一三者交代で30分の企画構成を担当)
	12	中原暢子	婦人画報(婦人画報社)	女三人の建築設計事務所をもって
1959	—	中原暢子	日本経済新聞家庭欄(日本経済新聞社)	(家庭欄への連載 詳細は不明)
	6	中原暢子	栄養と料理(女子栄養大学出版部)	働きやすい台所
	9	中原暢子、田中温子、為永綾子、上田フサ	栄養と料理(女子栄養大学出版部)	働きやすい台所とは 公団アパートの台所を中心に(座談会)
	10	浜口ミホ、中原暢子、荻野富雄、田島良平、栗原忠、主婦の友売店相談室	主婦の友(主婦の友社)	台所をこうして便利に 手軽な設備と改造の実験集
	11	中原暢子	子どものしあわせ(福音館書店)	子どもとすまいコーナー・デスク
	12	中原暢子	栄養と料理(女子栄養大学出版部)	ボーナスで買物読本 〇台所改造をしたので食器戸棚を買いたいのですが
	12	中原暢子	子どものしあわせ(福音館書店)	子どもとすまい 子どもの机・椅子
1960	1	中原暢子	子どものしあわせ(福音館書店)	子どもとすまい 子どもべやの色
	2	中原暢子	子どものしあわせ(福音館書店)	子どもとすまい 子どもの遊び場と道具について
	3	中原暢子	子どものしあわせ(福音館書店)	子どもとすまい 寝室について
1961	7	中原暢子	子ども室と遊び場(主婦の友社)	子ども室をつくる
1965	8	中原暢子	週刊サンケイ(扶桑社)	住まい サービスヤード/物置と雨の日の物干し場
	9	中原暢子	週刊サンケイ(扶桑社)	住まい 主人のコーナー/書庫つき書斎をつくろう
	9	中原暢子	週刊サンケイ(扶桑社)	住まい タタミの寝室/マットレスの置き場所
	10	中原暢子	週刊サンケイ(扶桑社)	住まい 車庫を作る心得/行動半径をよく計算して
1966	8	中原暢子	暮らしの知恵(学習研究社)	広い空間をデザインする つくりつけ家具のある書斎 K邸(近藤邸増築)
	8	中原暢子	暮らしの知恵(学習研究社)	広い空間をデザインする 空間の広がりを見せた食堂 H邸(平田邸)
1982	2	中原暢子	高校教育(学事出版)	家庭科「住居」の指導について
1997	1	中原暢子	家庭科教育(家政教育社)	集まって住もう—高齢者の住まいを考える—

建築家協会を通じて、UIFA¹⁻⁵³⁾の初代会長となるフランスの建築家ソランジュ・デル・ベルツ・ド・ラ・トゥール (Solange d'Herbez de la Tour) の招請により、唯一の女性建築家の会であるポドコから代表して中原、小林(後の草野)智恵子(1934-)、広瀬鎌二建築技術研究所)、現地で留学中であった林のり子(1938-)が、1963年UIFA第1回大会フランス(パリ)の設立総会に参加した。中原はこの総会において、UIFA副会長(アジア担当)となった。中原は、この会議の後、現地の設計事務所で働くインターンアーキテクトに9カ月間参加し帰国する。

1.5.4 農協建築研究会設立から死去まで

1964年には、大高正人(1923-2010)が会長を務める農協建築研究会(以下、「NKK」という)の設立に林・山田らと参加し、神奈川県川崎市柿生地区における農家の住宅相談事業において、住宅の新築・増築等の住宅相談や設計・監理を行う。詳細は第4章に後述する。

1971年、事務所を信濃町外苑ビルに移し、精力的に設計活動に取り組む。一方で、1975年には、東京家政学院大学の家政学部家政学専攻内において、授業科目「室内装飾」を非常勤講師として担当している¹⁻⁵⁴⁾。1979年に十二指腸全てと胃の2/3を切除する手術を受ける。1981年頃から、茶室の写しの設計に取り組むようになるものの体調は悪化し、同年の年末にも膜下出血により倒れる。後遺症はなかったものの、半年間は仕事のできない状態が続いた¹⁻⁵⁵⁾。中原はこの頃に「中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家)」の設計を始めている¹⁻⁵⁶⁾。後に中原は、この自邸は自身の老後対策のために建てたものであり、1階を茶事のために人に貸すことができるようになっていた¹⁻⁵⁷⁾と述べている。

1985年4月に母校である東京家政学院大学家政学部住居学科の助教授として着任し、1988年に教授に昇進する。大学に勤めてからは、設計同人の設計活動はそれほど多くなく、執筆活動が多くを占める。その間、1993年にはUIFA JAPONが設立し、中原はその初代会長を務める。1999年3月に同大学を定年退職するが、この13年間の教育活動において、卒業研究を直接指導した学生は、112名に及ぶ。退職後は、自邸での茶会や懐石料理等を楽しみ、その後2008年7月5日、79歳で死去する。

設計同人共同主宰の一人であった林が2001年に亡くなったのを機に、その翌年設計同人は解散する。元所員の白井克典によれば、中原は設計同人自体を誰よりも大事にしていたため、設計同人をなんとか残そうと悩んでいたが、林の存在感の強かったこれまでの設計同人としての特色が変わることを危惧し、最後は中原自ら事務所を閉めようと言い出した¹⁻⁵⁸⁾という。

1.6 第1章のまとめ

本論文は、中原の未発表作品を含めた作品を分析することによって、中原の設計活動を支える設計思想の展開を明らかにすることを目的とし、中原の設計方法とその変化を把握するため、設計同人時代を4期に分割し、それぞれの特徴と時間的な変化を確認し、中原の設計思想全体を把握する。

中原の経歴を提示することにより、そこに登場する人物や思想背景、社会背景などを取り上げた。主に建築的な影響としては、分離派建築会の石本喜久治や民家研究の蔵田周忠、笹原貞彦であり、池辺研究室からの機能主義、また、ポドコを通じた女性建築家からの影響があると推察される。さらに地元埼玉や東京家政専門学校関連、茶道関連では師匠や友人、弟子とのネットワークが、中原を支える背景にあったと考えられる。これらの事項をもとに、続く第2章以下の章立ての正当性を示す。

参考文献リスト

文献 1-1)：中原暢子：『中原暢子の木造住宅設計図面集』，1999.1.14

文献 1-2)：松川淳子・中島明子・杉野展子・宮本伸子：「日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者」，第30巻 研究 No.0227，pp. 251-262，住宅総合研究財団研究年報，2004

- 文献 1-3) : UIFA JAPON・IAWA (国際女性建築家アーカイブ) : 「中原暢子」, 『未来へ 女性建築家のパイオニアたちの肖像—巡回展覧会の記録—』, pp.38-39, 2013.3
- 文献 1-4) : 『建築文化』, 第 41 卷, 第 480 号, 彰国社, 1986.10
- 文献 1-5) : 『日本建築学会東北支部研究報告会』, 第 72 卷, 2009.6
- 文献 1-6) : 「長覚院」住職所有のアルバム『長覚院建設録V』
- 文献 1-7) : 『室内』, 第 136 号, 工作社, 1966.4
- 文献 1-8) : 彰国社編: 『木造の詳細 第 1 (構造編)』, 彰国社, 1968
- 文献 1-9) : 『暮しの知恵』, 第 6 卷, 第 8 号, 学習研究社, 1966.8
- 文献 1-10) : 中原暢子: 『平田邸新築工事』
- 文献 1-11) : 『室内』, 第 100 号, 工作社, 1963.4
- 文献 1-12) : 農協建築研究会: 『農村の住まい』, 農林中央組金庫組合金融推進部, 1967.9.30
- 文献 1-13) : 『室内』, 第 165 号, 工作社, 1968.9
- 文献 1-14) : 『住宅建築』, 第 4 号, 建築資料研究社, 1976.6
- 文献 1-15) : 『建築文化』, 第 29 卷, 第 329 号, 彰国社, 1974.3
- 文献 1-16) : 『Sophia』, 第 3 卷, 第 6 号, 講談社, 1986.6
- 文献 1-17) : 『新建築 (住宅特集)』, 第 6 号, 新建築社, 1986.10
- 文献 1-18) : 青木正夫他 8 名: 「中流住宅の平面構成に関する研究 (2)」, 『住宅建築研究所報』, 第 11 卷, pp.69-84, 財団法人新住宅普及会, 1985
- 文献 1-19) : 中原暢子: 『水野レストラン新築工事設計図』
- 文献 1-20) : 池辺陽: 『すまい』, 岩波書店, 1954.10
- 文献 1-21) : 日本建築家協会: 『素顔の大建築家たち 02』, 建築資料研究社, 2001
- 文献 1-22) : 『モダンリビング』, 第 11 卷, 婦人画報社, 1955.6
- 文献 1-23) : 彰国社編: 『建築大辞典 第 2 版』, 彰国社, 1993.6
- 文献 1-24) : 深谷基弘・鈴木紘子: 『図解 木造建築伝統技法事典』, 彰国社, 2001.5
- 文献 1-25) : 林屋辰三郎他 8 名: 『角川茶道大事典 普及版』角川書店, 2002.9
- 文献 1-26) : 浦和市議会: 『浦和市議会史』, 続巻一, 浦和市議会, 1998
- 文献 1-27) : 中原暢子: 『中原アパート』, 1961.11.20
- 文献 1-28) : 『東京家政学院大学紀要』, 第 31 号, 東京家政学院大学, 1991.7
- 文献 1-29) : 大江スミ: 『禮儀作法全集』全 9 卷, 中央公論社, 1938
- 文献 1-30) : 東京家政学院: 『東京家政学院五十年史』, 東京家政学院, 1976.11.22
- 文献 1-31) : 石本建築事務所: 『石本建築事務所ホームページ』,
<http://www.ishimoto.co.jp/about/ayumi/timeline/>
- 文献 1-32) : 武蔵工業大学三十年史編集委員会: 『武蔵工業大学 30 年史』, 学校法人五島育英会, 1960
- 文献 1-33) : 石田満齋他 73 名「私の受けた建築教育〈アンケート〉」, 『建築雑誌』, 第 92 卷, 第 1128 号, 日本建築学会, 1977.11

- 文献 1-34) : 影山幸一他 17 名 : 『Artscape』, 「Artwords」,
<https://artscape.jp/artword/index.php> (参照 2020.11.20), 1995
- 文献 1-35) : 林雅子・山田初江・中原暢子 : 「もう一つの戦後史—ポドコに芽吹いた潜勢力」,
『風声』, INAX 出版, 1986.10.15
- 文献 1-36) : 『建築雑誌』, 第 74 巻, 第 866 号, 日本建築学会, 1959.1
- 文献 1-37) : 『国際建築』, 第 20 巻, 第 2 号, 美術出版社, 1953.2
- 文献 1-38) : 『建築文化』, 第 50 巻, 第 581 号, 彰国社, 1995.3
- 文献 1-39) : 『新建築』, 第 29 巻, 第 11 号, 新建築社, 1954.11
- 文献 1-40) : 『新建築』, 第 30 巻, 第 11 号, 新建築社, 1955.11
- 文献 1-41) : 『新建築』, 第 32 巻, 第 1 号, 新建築社, 1957.1
- 文献 1-42) : 『近代建築』, 第 12 巻, 第 10 号, 建設情報社, 1958.10
- 文献 1-43) : 栗田勇 : 『現代日本建築家全集 17 (広瀬鎌二・池辺陽)』, 三一書房, 1972
- 文献 1-44) : 『建築雑誌』, 第 111 巻, 第 1386 号, 日本建築学会, 1996.3
- 文献 1-45) : 宮脇檀 : 『キーワード 50 建築知識別冊ハンディ版』, 第 7 巻, 1983 年 7~8 月
号, 建知出版, 1983.7
- 文献 1-46) : 『婦人画報』, 第 652 号, 婦人画報社, 1958.12

図版リスト

- ・ 図 1-1 : 文献 1-10), 「3 平面図」より抜粋。
- ・ 図 1-2 : 文献 1-19), 「スケッチ」より抜粋。
- ・ 図 1-3 : 筆者が作成。
- ・ 図 1-4 : 本論文に記載された人物を中心に中原との関係を筆者が作成。
- ・ 図 1-5 : 文献 1-27), 「0 既存家屋平面・配置」より抜粋。
- ・ 図 1-6 : 元建設工学研究会所属の小町治男からのヒアリングによる (2018.12.25)。小町治男作図を筆者がデータ化し整理。
- ・ 図 1-7 : 文献 1-37), 池辺陽 : 「標準寸法の住宅への適用 例Ⅱ : 秦邸・東京碑文谷」, p.60 より抜粋。
- ・ 図 1-8 : 文献 1-38), 池辺陽 : 「住宅ナンバーシリーズ」, p.33 より抜粋。
- ・ 図 1-9 : 文献 1-39), 東大池辺研究室 : 「住宅 No.20」, p.46 より抜粋。
- ・ 図 1-10 : 文献 1-41), 広瀬鎌二建築技術研究所 : 「SH-16」 p.39, 1958.10 より抜粋し、筆者が加工。
- ・ 表 1-1 : 文献 1-2) 及び文献 1-3) を中心に筆者が作成。
- ・ 表 1-2 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 表 1-3 : 中原作品の掲載誌より筆者が作成。
- ・ 表 1-4 : 中原作品の掲載誌より筆者が作成。
- ・ 表 1-5 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 表 1-6 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。

- ・表 1-7：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 1-8：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 1-9：文献 1-23)、文献 1-24) 及び文献 1-25) 等をもとに筆者が作成。
- ・表 1-10：文献 1-4)、中原暢子：「建築一私との出会い 81」, p.13 をもとに筆者が作成。
- ・表 1-11：文献 1-29) のタイトルと執筆分担を筆者が作成。
- ・表 1-12：文献 1-43)、p.201 を参考に中原在籍時の池辺研究室のメンバーを抜粋し、筆者が加筆し作成。『東京大学生産技術研究所池辺陽研究室関係者名簿』によると、中原の在籍期間は、1952-1958 との記載もある。
- ・表 1-13：文献 1-37)、池辺陽：「標準寸法の住宅への適用 例Ⅱ：秦邸・東京碑文谷」, p.60、文献 1-38)、池辺陽：「住宅ナンバーシリーズ」, p.33、文献 1-39)、東大池辺研究室：「住宅 No.20」, p.45、文献 1-40)、池辺研究室：「住宅 No.28」, p.13、文献 1-41)、広瀬鎌二建築技術研究所：「公団試作一号住宅」, p.56、文献 1-42)、広瀬鎌二建築技術研究所：「SH-16」, p.34、文献 1-44)、p.204・210 を参考に筆者が作成。設計担当者全員の氏名を記す。なお、氏名の表記は、雑誌に掲載されているそのままに記載した。
- ・表 1-14：中原が寄稿した婦人(家政)系雑誌掲載誌より筆者が作成。
- ・写真 1-1：独立行政法人国立女性教育会館：平成 24 年度女性アーカイブセンター企画展「建築と歩む ～チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」、国立女性教育会館本館 1 階 女性アーカイブセンター展示室、2012.8.7-12.9 に展示された模型である。模型制作者の表記はない。構造壁の筋違は省略している。当時は女性就業支援センターに所蔵されていたが、現在は、東京家政学院大学所蔵である。
- ・写真 1-2：文献 1-6) より抜粋。1962.7 頃撮影。
- ・写真 1-3：文献 1-7)、中原暢子：「見積と契約」, p.28, より抜粋。平面図と照合した結果、「田口邸 1」であることが確認できた。
- ・写真 1-4：文献 1-8)、中原暢子：「岡部邸(真壁構造・合せ梁・檼母屋)」, p.20 より抜粋。
- ・写真 1-5：文献 1-11)、中原暢子：「通り庭のある家」, p.44 より抜粋。平面図と照合した結果、「吉永邸」であることが確認できた。中原が作成した図面には写真にある土庇の記載はない。
- ・写真 1-6：文献 1-12)、 「木造／飯草邸」, p.53 より抜粋。
- ・写真 1-7：文献 1-13)、中原暢子：「若夫婦の家」, p.26 より抜粋。平面図と照合した結果、「立川邸 1」であることが確認できた。
- ・写真 1-8：文献 1-13)、中原暢子：「大屋根の家」, p.10 より抜粋。平面図と照合した結果、「横田邸」であることが確認できた。
- ・写真 1-9：文献 1-13)、中原暢子：「鉄筋コンクリートの家」, p.20 より抜粋。平面図と照合した結果、「仲林邸」であることが確認できた。
- ・写真 1-10：文献 1-14)、中原暢子：「T 邸」, p.69 より抜粋。平面図と照合した結果、「高橋邸 1」であることが確認できた。

- ・写真 1-11：文献 1-15), 中原暢子：「Y 氏邸」, p.131 より抜粋。平面図と照合した結果、「四柳邸」であることが確認できた。
- ・写真 1-12：文献 1-14), 中原暢子：「H 邸」, p.57 より抜粋。平面図と照合した結果、「長谷川邸」であることが確認できた。
- ・写真 1-13：文献 1-16), 中原暢子・斎藤道子：「趣味の茶事が、退職後生活の中心に 住まいがそれを可能にした」, pp.198-200 より抜粋。
- ・写真 1-14：文献 1-17), 中原暢子：「茶室のある家」, p.45 より抜粋。
- ・写真 1-15：筆者による撮影 (2018.4.9)。
- ・写真 1-16：設計図書「辻邸新築工事」を基に筆者が制作。筋違は省略している。
- ・写真 1-17：筆者による撮影 (2020.1.14)。
- ・写真 1-18：文献 1-20), 「イームズ邸」, p.175 より抜粋。
- ・写真 1-19：文献 1-22), 池辺陽：「和風と現代住宅」, p.196 写真のキャプションには「自然の材料の性質を極度に生かした空間の構成」と書かれている。
- ・写真 1-20：文献 1-22), 池辺陽：「和風と現代住宅」, p.196 写真のキャプションには、「ボール紙とビニールフィルムを活かし構成された空間」と書かれている。
- ・写真 1-21：文献 1-39), 東大池辺研究室：「住宅 No.20」, p.45 より抜粋。
- ・写真 1-22：文献 1-39), みねぎしやすお・小宮山雅夫・吉田桂二・中原暢子：「作品 C」, p.66 より抜粋。
- ・写真 1-23：文献 1-40), 池辺研究室：「住宅 No.28」, p.13 より抜粋。
- ・写真 1-24：文献 1-38), 池辺研究室：「住宅 No.58」 p.73 より抜粋。

注釈

- 1-1)：東京家政学院大学の退職記念として文献 1-1) を出版しているが、それ以外に中原の作品集というものは出版されていない。
- 1-2)：文献 1-2)
- 1-3)：文献 1-3)
- 1-4)：文献 1-4), 中原暢子：「建築一私との出会い 81」, p.13
- 1-5)：文献 1-5), 坂本絢・飯淵康一・飛ヶ谷潤一郎：「雑誌『新建築』に見る女性建築家の活動の変遷について:女性建築家の職能の確立過程に関する研究」, pp.249-252
- 1-6)：「林雅子資料室」は、設計同人元所員の白井克典が主宰する「白井克典設計事務所」内に設けられている。
- 1-7)：文献 1-9), 中原暢子：「H 邸」, p.30, 1966.8 より、掲載写真と図面を照合した結果、「平田邸」であることが確認できた。
- 1-8)：文献 1-8)
- 1-9)：文献 1-13), 中原暢子：「雁行した家」, p.51 より、平面図・立面図と照合した結果、「坂本邸」であることが確認できた。

- 1-10) : 文献 1-3), 「中原暢子」, p.39 より、平面図・立面図と照合した結果、「熊沢邸」であることが確認できた。
- 1-11) : 文献 1-18), において、続き間を構成しない座敷を「一つ間座敷」と定義している。
- 1-12) : 文献 1-20), 「住居のはたらき」, pp.22-23
- 1-13) : 文献 1-21), 「池辺陽 システムチックな感覚と人間的魅力」, p.63
- 1-14) : 文献 1-20), 「住居の形」, pp.175-176
- 1-15) : 文献 1-22), 池辺陽: 「和風と現代住宅」, p.196
- 1-16) : 文献 1-20), 「住居のはたらき」, p.159
- 1-17) : 文献 1-22), 池辺陽: 「和風と現代住宅」, p.178 によると、さらに「明治の初め洋風住居の入ってくる前の日本の住居は、大別して三つに、武家屋敷、庶民の家、農家の形がありました。…(中略)…私たちが現在和風住宅として考えているのは、武家屋敷に類似していることが判るのです。」と述べている。
- 1-18) : 文献 1-4), 中原暢子: 「建築一私との出会い 81」, p.13
- 1-19) : 文献 1-3), 「中原暢子」, pp.38-39
- 1-20) : 文献 1-26), 口絵・p.761 によると、祖母のきよの市議会議長任期は 1964.12.11-1965.12.20 である。
- 1-21) : 文献 1-27), 「0 既存家屋平面・配置」 残念ながら 2 階の平面図は見つかっていない。両親が没後、この跡地に建設されるのが「中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家)」(1985) である。
- 1-22) 文献 1-4), 中原暢子: 「建築一私との出会い 81」, p.13
- 1-23) : 学校法人東京家政学院概要の沿革によると、当時は「育児科」「保健科」「被服科」の 3 科のみであるが、文献 1-28), 中原暢子: 「大江スミの住まい 一大江家政学と家政学院創設まで一」, p.9 によると中原は、「生活科」と記している。
- 1-24) : 文献 1-3), 「中原暢子」, p.38
- 1-25) : 文献 1-30), p.97・104
- 1-26) : 中原の姪である佐藤玲子へのヒアリング (2012.4) による。
- 1-27) : 文献 1-4), 中原暢子: 「建築一私との出会い 81」, p.13
- 1-28) : 文献 1-31), 「ISHIMOTO のあゆみ」(参照 2020.10.17)
- 1-29) 蔵田周忠は、1936 年に今和次郎 (1888-1973) や竹内芳太郎 (1897-1987) らとともに民家研究会を設立し、建築史のみならず農村建築研究にも精通していた人物である。
- 1-30) : 文献 1-32), pp.134-141 の「武蔵工業大学短期大学部設置要綱」では、建設工学科とされているが、文献 1-32), p.140 の武蔵工業大学短期大学部設置許可書写しには、建設科との記載あり。
- 1-31) : 文献 1-33), 中原暢子: 「先生方の思い出」, pp.46-47
- 1-32) : 文献 1-32), 「武蔵工業大学短期大学部設置要綱」, pp.134-141
- 1-33) : 文献 1-32), 「学科又は専攻部門別学科科目又は講座概要」, pp.136-137
- 1-34) : 建設工学研究会の元メンバーであった小町治男へのヒアリング (2018.12.25) による。

- 1-35) : 文献 1-34), 喜多亮介 : 「五期会」,
<https://artscape.jp/artword/index.php/%E4%BA%94%E6%9C%9F%E4%BC%9A>
(2020.11.20 参照)
- 1-36) : 文献 1-35), p.28
- 1-37) : 文献 1-36), 奥村まこと他 9 名 : 「婦人建築家の役割」, p.16
- 1-38) : 文献 1-29), p.28
- 1-39) : 文献 1-30), 中原暢子 : 「池辺陽 システムチックな感覚と人間的魅力」, p.62
- 1-40) : 文献 1-40), 池辺研究室 : 「住宅 No.28」, p.13 によると、設計は「池辺研究室 担当者 中原暢子」と書かれている。
- 1-41) : 文献 1-21), 中原暢子 : 「池辺陽 システムチックな感覚と人間的魅力」, p.63
- 1-42) : 文献 1-41), 広瀬鎌二建築技術研究所 : 「公団試作 1 号住宅」, p.56
- 1-43) : 文献 1-42), 広瀬鎌二建築技術研究所 : 「SH-16」, p.36
- 1-44) : 文献 1-35), p.28
- 1-45) : 文献 1-43), 中原暢子 : 「みんなに助けられて」, pp.44-45
- 1-46) : エスペラント (語) とは、ポルトガル人ルドヴィコ・ザメンホフ (1859-1917) とその弟子が考案・整備した人工言語。
- 1-47) : 文献 1-45), 山田初江 : 「ポドコについて」
- 1-48) : 文献 1-21), pp.28-29
- 1-49) : 文献 1-46), 中原暢子 : 「女三人の建築設計事務所をもつて」, p.236
- 1-50) : 元所員の大島康治へのヒアリング (2018.10.27) による。
- 1-51) : 文献 1-30), pp.195-196 によると、1967 年の時点で中原が担当していたことが確認できた。
- 1-52) : 文献 1-30), 「教育職員一覧 (昭和 50.7.1 現在)」, pp.319-321
- 1-53) : UIFA は、1963 年に設立した女性建築家を中心とする国際組織で、現在会員は世界 75 カ国、会員数は 800 名程度である。UIFA の目的は、建築をはじめ、都市計画・環境計画などの分野に関心を持ち、その研究や創造に携わる女性たちが、専門的視野から国を超えて情報交換を行い、活動を発展させ、それぞれの水準の向上を目指すことである。同年に開催された第 1 回世界大会フランス (パリ) のテーマは「世界の女性建築家」であった。
- 1-54) : 文献 1-30), 「教育職員一覧」, pp.319-323
- 1-55) : 元所員白井克典へのヒアリング (2018.9.19) による。
- 1-56) : 文献 1-17), 中原暢子 : 「茶室のある家」, p.47 によると、設計期間は、1985 年 2 月から同年 7 月となっている。
- 1-57) : 文献 1-16), 中原暢子 : 「働いている今の自分と、今後の老化対策の両方を満足させられる家を」, p.201
- 1-58) : 元所員白井克典へのヒアリング (2018.9.19) による。

第2章 HP シェルを用いた構造表現主義—「長覚院」—

2.1 「長覚院」と第2章の概要

「長覚院」(写真 2-1、写真 2-2)²⁻¹⁾は、埼玉県浦和区領家に位置する天台宗の寺院であり、中原が1962年に本堂と庫裡を設計した。本堂は、1982年に大規模な模様替え行われている。また、庫裡は1988年に増改築が行われている。2020年現在、本堂は現存しているものの、庫裡は新たに建て替えられている。この作品は、「H.P.シェルと伝統の融合」と題して、雑誌1962年10月号の『建築文化』に掲載されている。

本章では池辺の伝統に対する考え方に強く影響を受けたと思われる「長覚院」本堂について、それが具体的にどのような影響であったのかを詳細に分析したい。



写真 2-1 竣工時の「長覚院」(1962)



写真 2-2 2015年現在の「長覚院」

2.1.1 本章の研究の背景

「長覚院」は、門型ラーメンに切断 HP シェルを載せた構造表現主義的な形態である。中原が設計した実施図面の原図²⁻²⁾や構造計算書を基に、「長覚院」の施主の子である現住職へ

のヒアリング調査の実施、同氏より借用した『長覚院建設録』²⁻³⁾等を参考に、「長覚院」の概要や構造的な特徴、計画からのデザインの変更点を含む竣工までの過程を調査し、把握する。

2.1.2 本章の目的と分析方法

「長覚院」の設計に際し、中原はどのような影響を受けていたか、中原が当時関わった組織または人物について理解することで詳細を明らかにしたい。この目的を達成させるために、設計同人設立までに受けた教育や実務経験及びその中で得た設計思想、構築された人間的なネットワークを明らかにする。また、国内を中心として HP シェル構造に関する作品や研究論文等を文献により調査し、比較・分析することによって、この作品の位置づけを明らかにする。

2.2 当時の新しい建築技術（HP シェル構造）

武蔵工業大学短期大学部建設科で建築の基礎を学んだとは言え、最先端のシェル構造についての知識を得て、「長覚院」を設計するには、専門分野に精通した構造設計者のサポートが必要であった。池辺と坪井善勝（1907-1990）等が1950年に創立した建設工学研究会において両研究室が活動し、「八幡製鉄労働組合会館」第1次案（1950）や「沼津市公会堂」（1953）等、住宅以外の作品や、池辺の住宅ナンバーシリーズの設計においても日常的に坪井善勝研究室等のサポートがあった。ちなみに、池辺研究室での作品における構造設計者として、池辺と同学年の織本匠²⁻⁴⁾や関野昇三²⁻⁵⁾に対する謝意が建築雑誌に表されている²⁻⁶⁾。

このことから、中原もこれらの専門家とのネットワークがあり、シェルについての助言や情報を得ていたと推測できる。東京家政学院大学名誉教授の杉本茂（1946-）が、1992年に中原に構造設計者との連携を尋ねた際、「織本匠の名前を挙げていた」との証言²⁻⁷⁾もあり、雑誌掲載作品等に明示はされていないが、織本匠の示唆を受けていたものと考えられる。織本匠は「鳳立夫」の筆名で建築評論活動もしており²⁻⁸⁾、シェルに関する論文を建築雑誌に掲載している。

「長覚院」の構造設計者で東京芸術大学教授であった温品鳳治²⁻⁹⁾は、坪井善勝研究室出身であり、1946年大学院を修了し鹿島建設に勤務している。織本匠も戦後鹿島建設に入社しているため、この時代に面識があったものと推察される。

1960年代は近代建築の一つの流れとして、余分な装飾を排し、用途に応じた無駄のない形態を追求すると同時に、構造の合理性をも追求する構造表現主義の作品が注目を集める²⁻¹⁰⁾。国外で新しい技術を活用した建築物が発表されると、国内でもその技術を応用した作品を競い合うように建設・発表するようになる。シェル構造も例外ではなく、多くの建築家がこの構造に挑戦した時代であった。

2.2.1 国内におけるシェル構造に関する初期の研究とシェル構造作品

シェル全般に関する研究活動は、戦前から行われており、日本では坂静雄（1896-1989）の「鉄筋コンクリート平面および局面の構造」（1937）²⁻¹¹⁾、「パラボリックハイパボロイト曲版

屋根の変形」(1952)が発表される²⁻¹²⁾。戦後、1957年になると丹下健三のHP シェル作品にも関わっていた坪井善勝がHP シェルに関連する研究²⁻¹³⁾を頻繁に発表する。HP シェルに関しては研究よりも多くの作品が先行して建設されていた。

1950年に池辺らは「八幡製鉄労働組合会館」第一次案(写真2-3)を組合に提出した²⁻¹⁴⁾。建設は第二次案をもとに実施されたが、この第一次案の模型写真によると、円形組合事務室の屋根には球形シェルが採用されており、構造設計は坪井善勝らの担当である。また、架構力学理論の研究者である小野薫(1903-1957)とその弟子である加藤渉(1915-1997)は、球形シェルの「鶴見倉庫」(1951)²⁻¹⁵⁾、「トンネル系シャーレン屋根を有する映画館」(1952)²⁻¹⁶⁾を発表する。その後、丹下健三(1913-2005)(構造:坪井善勝)によるらっぱ型の「広島子ども家」(1953)や球形シェルの「愛媛県民館」(1953)が竣工し、池辺らが率いる建設工学研究会の作品「沼津市公会堂」(1953)(写真2-4)の屋根にもシリンダー型シェルが使われている。また、吉田秀雄(1926-)等もシリンダー型シェルを使った「金鈴塚遺物保存館」(1957)(写真2-5)を設計し、池辺研究室から育った建築家の新技術としてシェル志向が確認できる。

日本で建設されたHP シェルに限定して分類すると表2-1のようになる。HP シェルの種類は、鞍型HP シェルと双曲放物HP シェルに分類できる(図2-1)が、鞍型HP シェルの構成面は1枚1ユニットであるが、双曲放物HP シェルは4枚1ユニットとするものが大部分を占める。日本で初めてHP シェルを実現したのは、丹下健三による鞍型の「平和記念公園慰霊碑」(1952)で、その後逆傘形の「魚菜会館」(1956頃)²⁻¹⁷⁾、双曲放物シェルの「静岡駿府会館」(1957)(写真2-6)と続く。双曲放物「長覚院」のHP シェルは、4枚で1ユニットを構成するものに該当する。

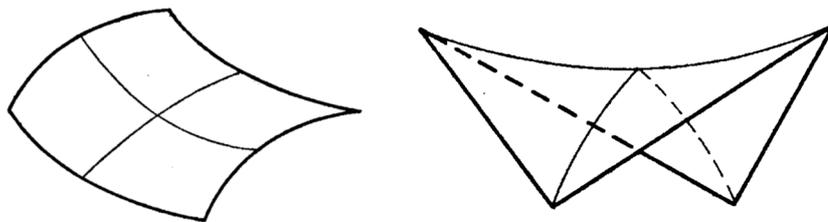


図2-1 HP シェルの種類(左:鞍型HP シェル 右:双曲放物HP シェル)

初期は中央に柱のある建物もみられるが、次第にHP シェルの特性である大きな無柱空間を活かすような設計が増え、後半になると体育館等の運動施設や教会等の宗教施設で多く採用される。シェル屋根の大きさについて比較をしてみると、1961年頃から一辺が50mを超える建築物が多く建設される。「長覚院」は17×17mであり、他のHP シェルに比べると規模が小さい部類に属する。

1956年時点でのHP シェルの応用解析の状況は、「膜理論についての発表(1936)がされているが、一般的な周辺の境界条件に適合するような解を得るための曲げ理論についての解析は明確になっていなかった」²⁻¹⁸⁾との記載が残されている程度であった。そのため、HP シ

シェルの規模が大きい場合は、模型を使い構造実験を行うことで安全性を確認していた。「長覚院」の構造計算書には、実験を行った記録は見つかっていないため、既に建設された他の HP シェル作品の実験結果を参考にした可能性は高い。

寺院で HP シェルを採用した作品をみると、鞍型シェルの「来迎寺」(1958) (写真 2-7) では、模型による構造実験が行われた²⁻¹⁹⁾。その後、鞍型相貫シェルの「太宗寺」(1962) (写真 2-8) が完成し²⁻²⁰⁾、同年、初めて双曲放物 HP シェルの「長覚院」が建設された。

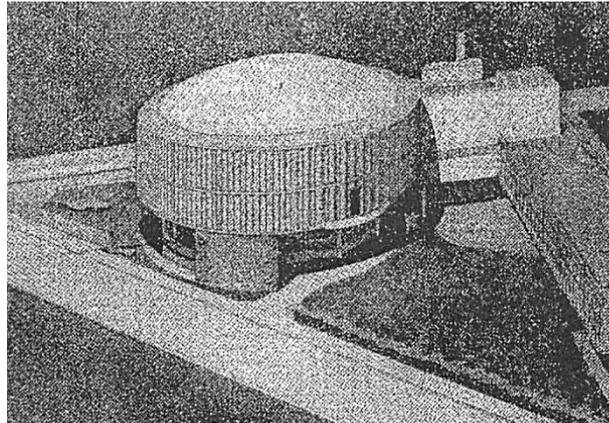


写真 2-3 「八幡製鉄労働組合会館」第1案 (1950)



写真 2-4 「沼津産業会館」(1953)



写真 2-5 「金鈴塚遺物保存館」(1957)

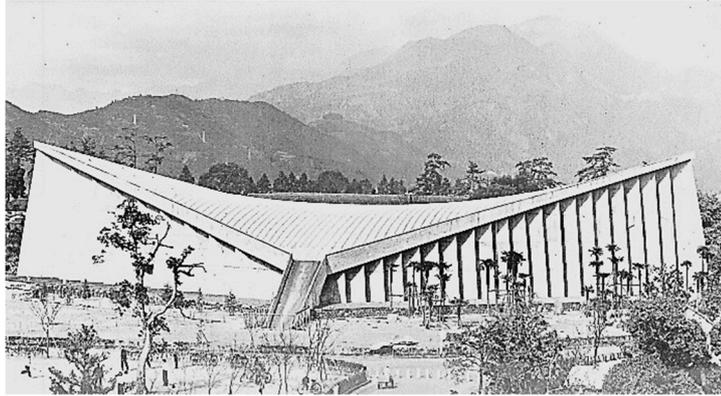


写真 2-6 「静岡駿府会館」(1957)

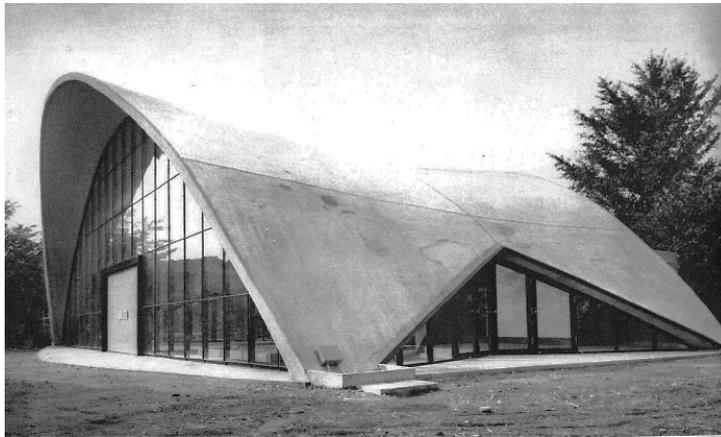


写真 2-7 「来迎寺」(1958)



写真 2-8 「太宗寺」(1962)

表 2-1 国内における HP シェル作品一覧

竣工年	雑誌初回掲載年月		建築名称	シェルの構造	鞍形HPシェル		双曲放物HPシェルの構成枚数						設計者	シェル屋根の水平投影による大きさと面積 (概算 m×m:mf)	実験の有無	
	年	月			1枚	相貫	1枚	3枚	4枚							その他
									1ユニット	2ユニット	8ユニット	9ユニット				
不明	1953	11	公会堂(計画案)	不明	○								山口文象	不明	不明	
1952	1954	1	平和記念公園慰霊碑	C	○								丹下健三	4.5×9:40.5	不明	
約1956	1956	11	魚菜会館 住宅・託児所(計画案)	RC				○					川島甲士他	住宅:11×11:121 託児所:6×6:36	×	
1958	1957	12	スカイ・ハウス	RC				○					菊竹清訓他	10×10:100	不明	
1957	1958	1	静岡駿府会館	RC			○						丹下健三計画研究室	54×54:2,916	○	
1957	1958	2	東京部品K.K工場	RC								○	RIA建築総合研究所	45×45:2,025	不明	
1957	1958	3	登別温泉科学館	RC	○								太田研究室 太田実他	10.5×12:126	不明	
約1958	1958	11	来迎寺	RC	○								宇野坦	12×18:216	○	
1958	1958	11	法政大学58年館 C棟	RC								○	大江宏建築設計事務所 大江宏他	22×40:880	○	
1958	1959	9	愛媛県広見町庁舎	RC				○					レーモンド設計事務所・中川軌太郎 田辺博司他	15×15:225	○	
1959	1959	11	厚生年金新潟市体育館	S			○						宮川英二研究室 宮川英二他	72×72:5,184	○	
約1960	1960	5	横浜新道 Toll Gate	RC								○	石本建築事務所 福田欣二他	11×38.8:426.8	不明	
約1960	1960	11	伊賀上野公民館	RC				○					坂倉準三建築研究所 西沢文雄他	14×16:224	不明	
約1961	1961	4	元町給油所	PC					○				坂倉準三建築研究所	8×20:160	不明	
約1961	1961	4	神戸税関前給油所	RC				○					坂倉準三建築研究所 大阪支所	11.5×11.5:132.25	不明	
約1961	1961	4	広島東給油所	RC			○						坂倉準三建築研究所 大阪支所	14×16:224	不明	
1961	1961	9	西条市体育館	PC			○						坂倉準三建築研究所 井上登司他	43.2×48:2,073.6	○	
約1961	1961	9	京都市下水処理場 ポンプ室	RC				○					増田研究室 増田友也他	50×50:2,500	○	
1962	1962	2	太宗寺	RC		○							清水建築設計事務所 清水哲夫他	21.2×21.1:449.44	不明	
1962	1962	10	長覚院	RC				○					林・山田・中原設計同人 中原暢子	17×17:289	不明	
1963	1963	5	佐賀県体育館	PC			○						坂倉準三建築研究所 坂倉準三	52×54:2,808	不明	
1964	1963	9	ホテル東光園	RC								○	菊竹清訓建築設計事務所	9.3×23:213.9	不明	
1964	1964	10	駒沢体育館	S				○					芦原義信建築設計研究所 芦原義信他	47×47:2,209	○	
1965	1965	5	大田区体育館	S+RC				○					カト一設計事務所 加藤渉他	53×53:2,809	○	
1964	1965	6	香川県立体育館	PC			○						丹下健三都市建築設計研究所 丹下健三他	60×70:4,200	不明	
1964	1965	6	東京カテドラル聖マリア大聖堂	RC								○	丹下健三都市建築研究所 丹下健三他	57×45:1,282.5(対角線)	不明	
1965	1966	2	弓張岳展望所	RC			○						坪井善勝他	12×14.4:86.4(対角線)	不明	

注:

建築雑誌に掲載された作品で、1965年までに竣工されたHPシェル構造の作品を対象とする。

シェル構造欄の「C」は、コンクリート造、「RC」は、鉄筋コンクリート造、「S」は、鉄骨造、「PC」は、プレキャストコンクリート造を示す。

2.2.2 1950年頃の海外におけるシェル構造の動向

中原が建築を学ぶ1950年頃、海外では鞍型HPシェルの「宇宙線研究所」(1951)(構造設計:フェリックス・キャンデラ)が一躍建築界の注目を集め、1953年には、米国の建築雑誌『The Architectural Forum』²⁻²¹⁾が「MITの講堂と礼拝堂」(1955)(設計:エーロ・サーリネン)を紹介し、「形態は機能に従う」と宣言したルイス・サリヴァン(1956-1924)の言説の再検討を提起した。これを『国際建築』²⁻²²⁾は1953年5月に直ちに引き上げ、形式的な機能主義に対する異議として紹介するとともに、シェル構造についての基本的な解説を行い、建築家に対する啓蒙を図った。以降、前出の表2-1にみるように日本の建築家によるHPシェルの挑戦が続いた。中原もこのような状況の中で、HPシェルを使った寺院を設計した。

『The Architectural Forum』の巻頭では、以下の6点について次のように列記されている(表2-2)。

表2-2 建築の既成概念に対する6つの問い

No.	原文	和訳
1	Has the time come when a shall concrete dome will be just as cheap, more efficient and less wasteful of material and space?	コンクリート製シェル構造のほうが、安価で効果的、材料、空間も節約できるのではないか。
2	Dose a modern auditorium have to have the angular, wedge-shaped plan now considered “modern”?	近代的オーデトリウムは角ばった楔形プランを「モダン」とみなす必要があるか。
3	Is there any reason why “polite” contemporary architecture should not employ the daring forms of same modern industrial construction?	「丁寧な」現代建築が同じ現代産業建築の大胆な形を採用してはならない理由は何か。
4	Is not a cylindrical chapel give you a sense of security through religion?	チャペルは、円筒形にすることで、宗教を通しての安心感をあたえられるのではないか。
5	Is there any reason why a chapel need have windows? Could it not be illuminated by light reflected through water?	チャペルに窓が必要とする理由があるか?水面から反射光によって照らすことはできないか。
6	Is there really a fixed relationship between Form and Function?	形と機能の間には本当に固定的関連があるのだろうか。

2.3 池辺の伝統に対する考え方と中原の設計方法

池辺の伝統に関する建築雑誌掲載の一連の論説は、表2-3に示す通りである²⁻²³⁾。

論説「「日本的デザイン」といかに取りくむか」(1955.2)で池辺は、「伝統へのよりかかりは、かつての西欧のネオ・クラシズムのひからびた建築の二の舞を演ずる」²⁻²⁴⁾と様式を選択を厳しく批判した。また、合理主義や機能主義の道をまっしぐらに進むことを否定し、現在の建築を発展させるには、日本の伝統の追求が不可欠であると述べている。さらに、「私たちが現在把握しなければならないものは、民衆とともに、生活とともに把握してゆく伝統であるとし、これ以外の伝統の把握はネタ探しの模倣に終わる。重要なことは、建築を社会的基盤に近づけることである」²⁻²⁵⁾と述べている。これに対して、清家清研究室から「合理主義・機能主義の行き詰まりとして、なぜ伝統が唯一の方法となるのか」「丹下健三・清家清との明確な対立点を示すべき」等の批判が行われた²⁻²⁶⁾。しかし、これらに対して池辺は明確には応

えていない。池辺は、論説「建築創造のリアリティをどこに求めるか？」(1955.8)で機能主義に対するアンチテーゼという形で、具体的な設計方法とつながる「建築創造」について3つのポイントを示している²⁻²⁷⁾。

表 2-3 池辺の伝統に関する建築雑誌掲載の論説一覧

著者	論説	雑誌出典
池辺陽	現代のデザイン	『国際建築』1951.2
池辺陽	「日本的デザイン」といかに取りくむか	『新建築』1955.2
丹下研究室グループ	“近代建築かどうか”が問題なのだ	
MIDOグループ	日本的表現と近代技術の歪曲	
UHONグループ	“日本的デザイン”を意識する必要はない	
RIAグループ	あまりに現象的などらえ方だ	
清家研究室グループ	問題提起が作家的でない	
池辺陽	和風建築と現代のデザイン	『新建築』1955.6
池辺陽	和風と現代住宅	『モダンリビング』1955.6
池辺陽	建築創造のリアリティをどこに求めるか?	『建築文化』1955.8
池辺陽	快楽主義の傾斜とたたかう	『新建築』1955.11
丹下健三、池辺陽他	伝統をどう克服するか?	『新建築』1956.3

- 1) 「機能主義を正統に戻す」、即ち、機能主義の行き詰まりを打破するためには、現代の使用機能の非人間性を克服する。
- 2) 「技術主義への徹底」を行うと同時に、技術主義の無批判性及び非人間性を克服する。
- 3) 機能主義の行き詰まりは建築と大衆との遊離であるから、「建築を大衆に結びつける」必要がある。

しかし、池辺はこれらの方法にとどまらなかった。その理由は、池辺にとってこれらが設計の最終目標ではなく、機能主義が陥りがちな快楽主義の罠を回避し、建築との関係において使用者たる人間が建築に対して創造的人間として形成されることが最終目標としているからである。つまり、建築家と建築の関係から使用者たる人間が建築に働きかける関係を視野に入れている。

池辺の伝統に対する考え方と中原の「長覚院」の設計方法の比較を表 2-4 に示す。「H.P.シェルと伝統の融合」²⁻²⁸⁾に記された「長覚院」の設計意図と、伝統論争における池辺の言説は同じ基盤をもつこの3つの考え方に基づいて設計が行われたと筆者は考える。

表 2-4 池辺の伝統に対する考え方と中原の「長覚院」の設計方法の比較

池辺の伝統に対する考え方	中原の「長覚院」の設計方法
機能主義を正統に戻す	大衆の中心であったお寺本来の姿にかえす
	若い人たちにも気軽に利用できるような明るい寺院
	仏教の尊厳さ
技術主義の徹底しつつ、非人間性を克服する	HPシェル4枚を組み合わせた形
	柱梁の室内外への表出
建築を大衆に結びつける	300年以上村あずかりの寺院
	大衆の中心であったお寺本来の姿にかえす
	児童遊園地や屋外劇場、花壇の計画

2.4 「長覚院」の設計

「長覚院」の計画、設計、施工及び改修までを含んで、前節で示した池辺の伝統に対する考え方である3つの観点から、以下に設計の内容を分析する。

2.4.1 「長覚院」の「伝統」をたどり「寺」の機能を検討

「長覚院」縁起には、「西林寺長覚院浄泰寺。天長7年(830)慈覚大師²⁻²⁹⁾関東巡錫(じゅんしゃく)のみぎり、この地に来たり、村人を教化し一字の堂を開いたのに創まると伝えられる。以来村民の滅罪寺として法灯が維持され、江戸時代末期は、寺小屋として村民子弟の教育の場となり、明治の学制とともに、現在のさいたま市立木崎小学校の前身となった。」とある。建替前の旧長覚院は茅葺屋根の本堂一つの形式(写真2-9)で、300年以上村あずかりの形で存続しており、定まった住職はいなかった²⁻³⁰⁾が、この度住職が決定し、新たに「長覚院」が建設されることになった。

中原は、「本堂の設計は、大衆の中心であったお寺本来の姿にかえしたい。という住職(前住職)の強い希望から出発し、若い人たちにも気軽に利用できるような明るいもの。しかし、「寺」というのは、どこまでも寺で集会場ではないのだから九輪塔や、正面の八角のところの法輪は従来のままの形でとどめ、仏教の尊厳さを失いたくなかった。」²⁻³¹⁾と記されている。

本堂は天台宗の様式で、納骨の場所も含め最も単純な正方形の平面構成である(図2-2)²⁻³²⁾。仏教の儀式空間としての荘厳さを確保するために、天台宗の象徴としての九輪塔(写真2-10)や八角形の法輪(写真2-11)、田字草紋(写真2-12)等を配置している。さらに旧長覚院が原点としていた、「寺子屋としての教育の場」「大衆の中心にある気軽に利用できる集会の場」に立ち戻るため、内陣と外陣を柔軟に仕切ろうと、内陣には格子天井を設け、朱色とグレーで彩色されたアコーディオンドアという近代的な装置を大胆に導入し、複合化した機能の統合を図った²⁻³³⁾。

内陣格子天井上部は、外陣のシェルの天井と同一空間(図2-3)で、打放しコンクリートとし、粘着力の強い荒木田土を塗っている。梁は濃紺布張りとしており、旧長覚院の面影と親しみやすさと明るさを演出した。



写真 2-9 旧長覚院

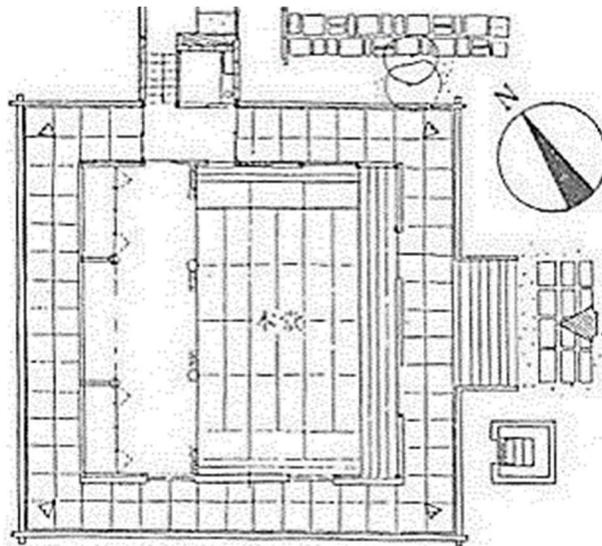


図 2-2 掲載誌による本堂平面図



写真 2-10 九輪塔取付け

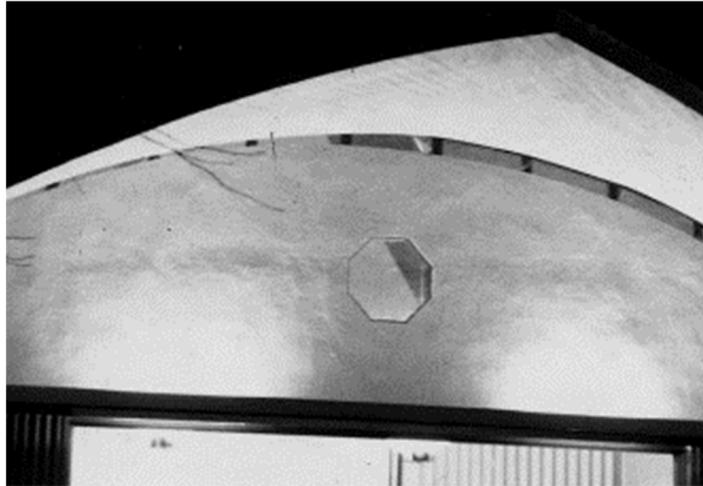


写真 2-11 正面の八角形の法輪

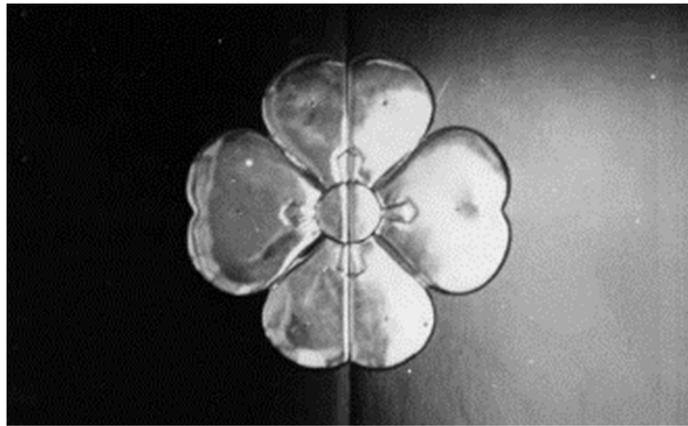


写真 2-12 納骨の戸にある田字草紋

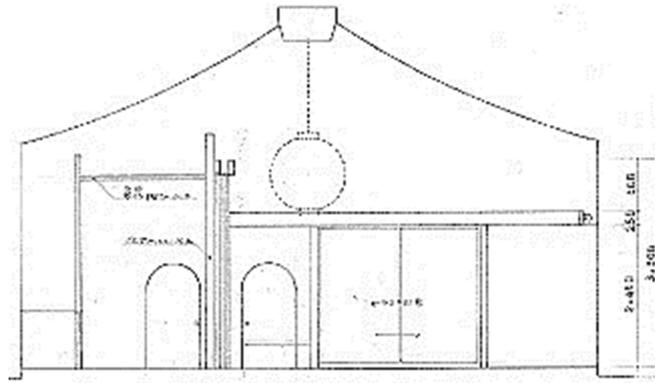


図 2-3 実施図面による展開図

2.4.2 技術主義の非人間性の克服

「長覚院」の構造計画としては、4枚の双曲放物 HP シェルから成る屋根を断面形状が正三角形である4本の登り梁と柱で持たせている。その柱・梁の内側が樋になっており、雨水を処理している（写真 2-13、図 2-4）²³⁴⁾。柱梁は鉄筋コンクリート造の山形ラーメンで構成

され、柱の断面積は、地盤面に近くなるに従って、小さくなっており、木造の廻廊は、柱とは完全に切り離した設計となっている。畳敷きの床と壁は予算の関係となるべく親しみやすいという条件から木造となっている²⁻³⁵⁾。このようにこの構造体は、木造と鉄筋コンクリート造の混構造となっている。寺院という伝統的な建築に対して最先端の技術を使い、構造表現主義的な建築としてまとめた。中原の師、池辺や広瀬鎌二は住宅問題の解決のため住宅の工業化技術を追求すると同時に、池辺研究室を巣立った建築家も建築設計においてシェル構造の技術を適用する実践を行ってきた。中原も新しい材料や技術を積極的に活用しようとする近代的建築思想は一貫して流れており、「長覚院」のシェル構造の試みはこれを示している。

「技術主義への徹底」を志向するが、技術主義の無批判性及び非人間性を克服するとの考えのもとに、双曲放物 HP シェルの切断により軒先の柔らかさを演出した。²⁻³⁶⁾

実施設計が始まった頃の中原によって書かれたスケッチが残されている（図 2-5）。また、模型は、設計監理契約を締結する直前に作成され、その写真も残されている（写真 2-14）。スケッチ・模型ともに、直線が強調された近代的な形をしている。



写真 2-13 柱の内側の樋

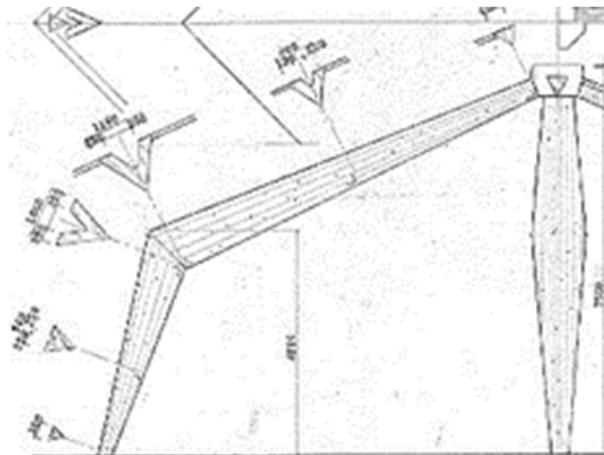


図 2-4 柱の断面詳細図



図 2-5 「長覚院」のスケッチ



写真 2-14 「長覚院」の模型

模型が完成すると前住職や檀家から次のような積極的な意見が出された。コミュニティの中核としての「長覚院」の形は、「昔の面影が感じられるものでありたい」との要望で、旧長覚院の屋根の形状に近づけるため、屋根の棟を 2m 高く上げることを決定した。さらに『長覚院建設録』²⁻³⁷⁾によれば、「堅にして温」という言葉が用いられているが、打放しコンクリートの軒線が直線で構成される本堂に「温」という暖かく柔らかい雰囲気を感じられることを求めた。そこでシェルの縁梁を曲線にすることでその要望に応えた。具体的な形をイメージ出来るよう、双曲放物 HP シェル屋根の部分模型を現地で制作し確認している(写真 2-15、写真 2-16)。



写真 2-15 異形 HP シェルの模型



写真 2-16 切断 HP シェルの模型

芦原義信建築設計研究所の所長であった守屋秀夫(生年不明-2000)は、織本匠が著した『架構—構造とデザイナー』の中で、駒沢体育館を例に4枚の双曲放物 HP シェルのつなぎ方²³⁸⁾について、等辺 HP シェル、切断 HP シェル、異形 HP シェルの3種を示しているが、その形状は図 2-6 の通りである。写真 2-15 は、異形 HP シェルで、写真 2-16 は切断 HP シェルである。等辺シェルを切断することで、軒線が曲線で表現される。V 型断面の門形ラーメンで支え、その軒先を切断することで「柔らかさ」を表現した。中原の「長覚院」の屋根は、等辺 HP シェルを軒先 3m のところで切断した「切断 HP シェル」を採用し、設計を進めた。構造表現主義が盛んな時代に切断 HP シェルを採用した作品は、鞍型シェルを除くと、寺院では、「長覚院」のみで意欲的な挑戦である。

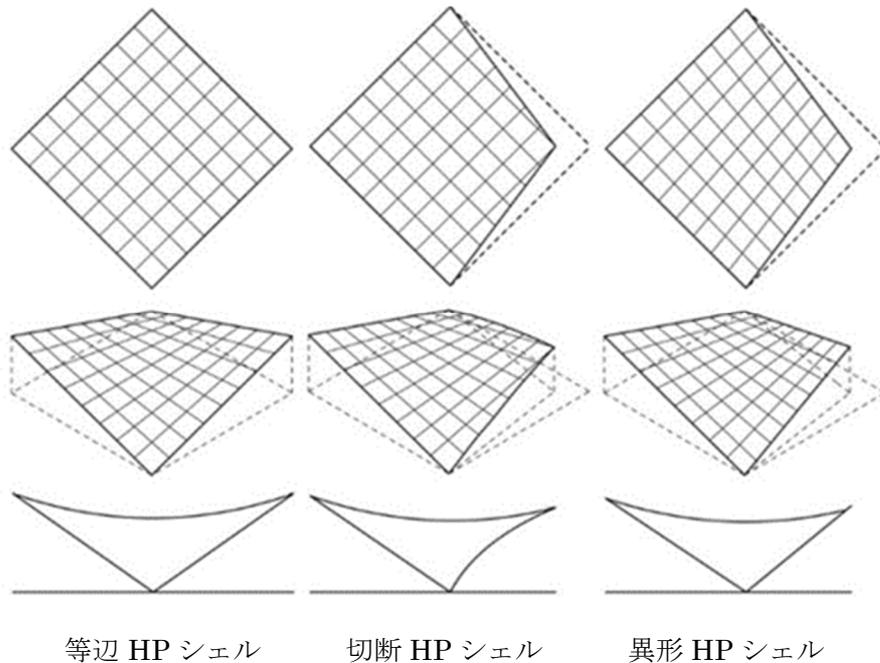


図 2-6 双曲放物 HP シェルの屋根版の形状による分類

「長覚院」の実施設計から竣工時までには、前に記述した双曲放物 HP シェルの形状のみならず、多くの部分で設計変更がなされている。ラーメン架構の断面形状は、実施設計時、柱と同様梁も中心部に近くなるに従い、小さくなっていた（図 2-7）が、竣工時には同一断面の梁となっている（図 2-8）。そして、実施図面では北・南・西面に向く破風と鉄筋コンクリート造の梁（実際は鉄骨造）で囲まれた三角部分はガラス張りであった（図 2-9）が、実際は、円弧を描くような軒線に沿う形でスリット窓が開けられている（写真 2-17）。これは、内部に差し込む光を少なく調整したことで、内部から天井を見上げた時に、シェル形状を強調できるようにした処理とみられる。

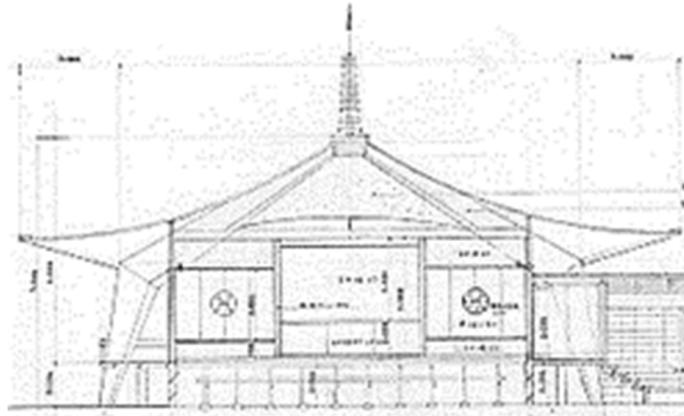


図 2-7 実施図面による断面図

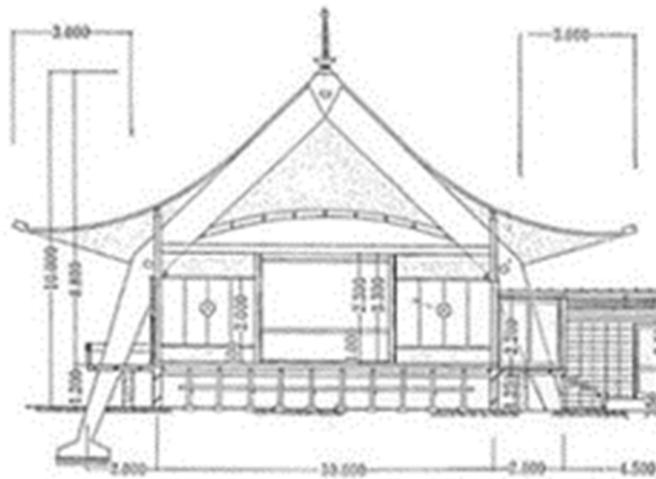


図 2-8 掲載誌による断面図

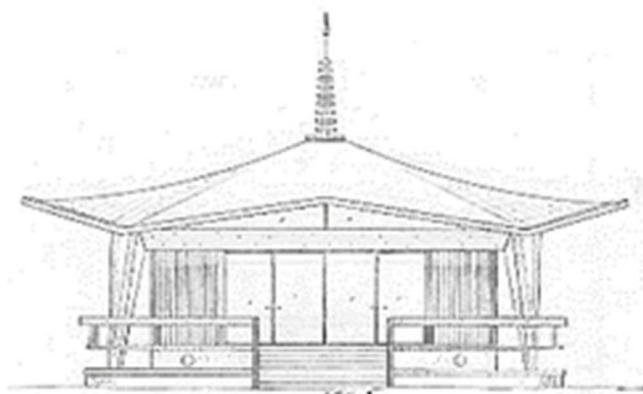


図 2-9 実施図面による南立面図



写真 2-17 本堂内部の破風のスリット窓

2.4.3 「長覚院」を大衆に結び付ける

建替前の旧長覚院は、大衆が守り育てた寺院である。新たに住職が決まり新しい「長覚院」の建設を村人が喜び積極的に建設する過程に参加してゆく様子が、『長覚院建設録』から伺える。一部を抜粋して建設過程を表にまとめた（表 2-5）。

中原は、基本設計実施前の 1961 年 8 月に、「善照寺本堂」（1958、設計：白井晟一）他、「妙経寺」（1959、設計：川島甲士）等にも前住職や檀家と一緒に訪れている²⁻³⁹。基本設計は 1961 年 12 月に完了し、1962 年 2 月には建築確認申請書を提出、1962 年 7 月に竣工している。地鎮起工の儀での参列者による石経埋納（写真 2-18）や盛大な落慶祝賀式の記録（写真 2-19）も残されている。また、中原は、敷地の南側に児童遊園地や屋外劇場、花壇を作りたいと考えていた。

「長覚院」の竣工 20 年後、雨漏りが生じたため、1982 年に大規模の模様替えが行われ、本堂屋根が銅板葺きに替えられる（写真 2-20）等の改修が行われている。この大規模の模様替えの設計に、中原が関与したかは、特定行政庁の確認申請台帳に記録がなく、現在のところ不明である。「長覚院」本堂屋根の銅板葺きへの変更については職人技を生かした伝統的な手法で葺いている。このことから前住職や檀家の思いの深さがわかる。この大規模の模様替え工事より、梁にあった雨樋は銅板葺きにより覆われ、天井裏が表しとなっていた外陣には

格天井が張られ（写真 2-21）、新九輪塔も設置されている。これをみると「長覚院」は竣工後も見事に大衆と結び付いていること分かる。

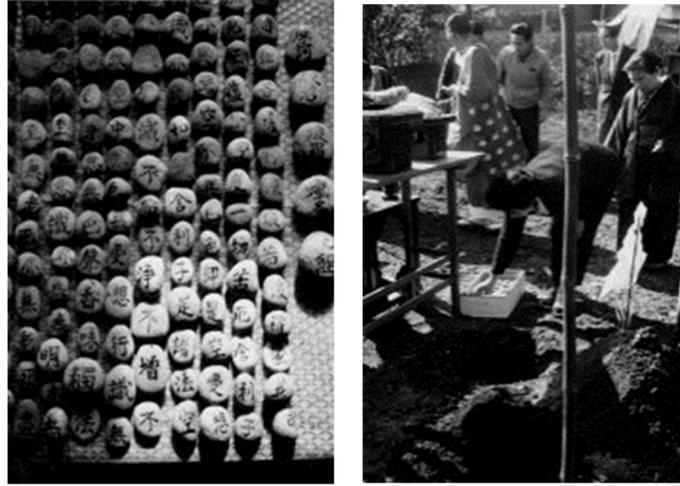


写真 2-18 一字一石経埋納



写真 2-19 落成祝賀式

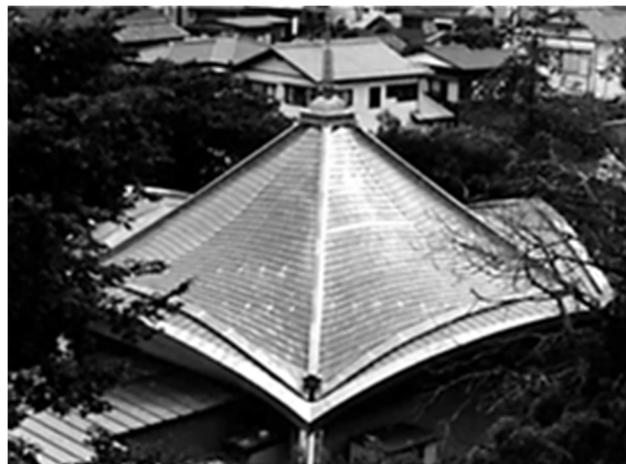


写真 2-20 銅板葺き



写真 2-21 外陣に格天井及び荘厳具を設置

表 2-5 「長覚院」の竣工・改修までの過程

年	月	日	事柄
1961	1	18	寺院建築視察(1)「本立院」、「寒光院」、「浄心寺」、「法乗院」、「廓信寺」、「正樹院庫裡」
1961	8	20	寺院建築視察(2) 中原同行 「妙経寺」、「長泉寺」、「善照寺」、「本覚寺」、「満照寺」、「浅草本願寺」
1961	8	—	本堂・庫裡の設計が始まる
1961	12	—	基本設計完了
1961	12	23	設計監理契約締結
1962	1	—	模型完成(屋根の高さは模型より2m高くすることを決定)
1962	2	13	建築確認申請書提出
1962	5	10	本堂屋根形状について現場協議(半日)
1962	3	20	本堂・庫裡確認申請受理(確認番号1237 受付番号160)
1962	8	11	本堂コンクリート打設、上棟式(上棟法要)
1962	5	2-9	本堂コンクリート型枠脱型
1962	5	19	本堂内部工事始まる
1962	5	23	本堂木工事始まる
1962	5	30	本堂周壁下地工事
1962	6	12	左官工事始まる
1962	6	17	本堂と庫裡がつながる
1962	6	23	完成前工事検査
1962	7	22	本堂、庫裡竣工、落慶
1982	7	—	本堂大規模な模様替え工事(事務所名:不明)(確認申請なし) 銅板葺き・格天井(外陣)・新九輪塔設置
1988	—	—	庫裡増改築確認申請(事務所名:不明)(検査済証なし)

2.5 考察

中原の伝統と闘う基本的な考え方は、池辺の伝統論争の中で示した、1) 機能主義を原初的な正統に戻すこと、2) 技術主義への徹底をしつつその非人間性を克服すること、3) 建築を大衆に結びつけること の3点は基本的枠組みとしては同じだと考える。しかし、「長覚院」の設計における具体的な設計方法は、中原の独自の考え方で設計されていると考えられる(表2-6)。

表2-6 池辺の設計手法と中原の「長覚院」における考えとの対応

池辺陽の設計手法	「機能主義を正統に戻す」	「技術主義への徹底をしつつその非人間性を克服する」	「建築を大衆に結びつける」
中原の長覚院における考え	<ul style="list-style-type: none"> 設計が高度化すると数値的になる。→画一化されることが問題→「本来の機能」を重視した設計ではなくなる。 「宗教」と「教育」の機能を併せ持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 旧長覚院のイメージとしての継承（施主の要望）と建築技術を調整することで、建築物に取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 大衆による荘厳化を受け入れる→装飾的になることで、寺がより大衆を受け入れられるものになる。
中原の長覚院における具体的設計手法	<ul style="list-style-type: none"> 外陣、内陣の境界を柔軟に分離（アコーディオンドアの採用） シンボルの採用（九輪塔、八角形の法輪、田字草紋等）。 	<ul style="list-style-type: none"> 先端技術（双曲放物HPシェル）を採用し、切断HPシェルによって柔らかい印象を創出。 柱梁の室内外への表出。 	<ul style="list-style-type: none"> （大衆への改修時の荘厳化の受け入れ（屋根の銅板葺き、九輪塔、格天井）。）

第1に、「機能主義を正統に戻す」とは、300年の歴史のある村あずかりの寺院が当初備えていた「寺院としての儀式的機能」と「コミュニティの中心としての集会機能」、さらには「寺子屋といった教育機能」を併せ持つ多目的空間とした。また、集会機能と儀式的機能を兼ね合わせるために、アコーディオンドアといった近代的装置を用いて、内陣と外陣の統合分離を可変化した。さらに、儀式空間を他の空間と共存させるため、天台宗の図像や荘厳具を使い、シンボルとして空間を構成し、機能の分離と統合を図ったという点である。

第2に、「技術主義への徹底をしつつその非人間性の克服する」とは、中原が「長覚院」で試みた双曲放物HPシェルは、国内の建築雑誌に掲載されたもののうち、寺院として初めて実現した作品である。高度な技術を要するHPシェルを実現させるために、構造設計担当の温品鳳治や建設工学研究会の坪井善勝研究室等を中心とする構造設計者のサポートを得て、実現した。また、前住職や檀家の意見を受け止め、基本設計完了後に屋根の高さを高くすることによって、旧長覚院の茅葺の形状に近づけ、等辺HPシェルを切断することで軒線に曲線を生み出し柔らかさを演出した。さらに、屋根のHPシェルと廻廊は鉄筋コンクリート造であり、壁、床は木造の混構造であるが、構造を分離して、それぞれに独自の表現を与えた。

そして、第3に、「建築を大衆に結びつける」とは、本堂の設計は、大衆の中心であったお寺本来の姿に戻したいという前住職の強い希望から出発し、若い人たちにも気軽に利用できる明るいものにするため、中原は、建築の設計に関しても前住職や檀家の意見を尊重しながら進めた。その記録は前住職が写真と解説でまとめた『長覚院建設録』に詳細にまとめられ

ている。また、本堂・庫裡以外に児童遊園地等を計画し、こどもたちの遊び場を設け、幅広い世代の人々がこの寺院に集まるよう計画した。

一方、この「長覚院」を使用し維持する中で、「荘厳化」が進展した。前住職はこのような動きを止めることなく大衆（檀家）に寄り添い、荘厳具を受け入れ、設置し、檀家による屋根葺き工事や外陣の格天井等の設置を実現している。このような活動に中原がどのように対応し、評価したかについては現在のところ明確な資料がない。

現在の姿は、梁部分に埋め込まれた雨樋や内部からの梁の現しが格天井でなどが隠されており、近代建築のデザインとしては違和感があるが、建築を大衆と緊密に結び付けてきた過程を形として確認できる貴重な建築として評価できる。

以上の検討を経て、設計についての言説が少ない中原の設計に対する基本的な考え方や設計方法を「長覚院」について一定の整理を行い、伝統的和風へと展開する作品の分析の足掛かりを得たと考える。

2.6 第2章のまとめ

中原の「長覚院」の本堂を中心にその設計過程と本堂に採用されている双曲放物 HP シェル構造の位置づけと師池辺の伝統に対する考え方をどのように具現化したのかを明らかにすることを目的とした。結果、「長覚院」の設計は、池辺の現代建築思想及び伝統に対する言説を踏まえたものであり、特に最先端の双曲放物 HP シェル実現において、池辺研究室時代の構造設計者たちからの支援・影響を受けていたこと、寺院のデザインにおいては、機能主義の原点に還るため、大衆（住職や檀家）の意向を積極的に取り入れたことを明らかにした。

参考文献リスト

文献 2-1) : 「長覚院」住職所有のアルバム『長覚院建設録V』

文献 2-2) : 『建築文化』, 第 13 巻, p.14, 彰国社, 1958.4

文献 2-3) : 『住居学科卒業研究梗概集 平成 3 年度』, 東京家政学院家政学部住居学科, 1992.1

文献 2-4) : 佐々木宏、種田元晴、市川紘司、青井哲人、橋本純、佐藤美弥、辻泰岳 : 「佐々木宏 [1931-] 「真相」の戦後日本建築」, 『建築討論』, 日本建築学会建築討論委員会, 2018.3.24, オンライン, 入手先

(<https://medium.com/kenchikutouron/%E4%BD%90%E3%80%85%E6%9C%A8%E5%AE%8F%E6%B0%8F-1931-%E7%9C%9F%E7%9B%B8-%E3%81%AE%E6%88%A6%E5%BE%8C%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%BB%BA%E7%AF%89-af90bdaaf324>), (参照 2020.8.12)

文献 2-5) : 小澤雄樹 : 「高度経済成長期の日本」, 『20 世紀を築いた構造家たち』, オーム社, 2014

文献 2-6) : 坂静雄 : 『鉄筋コンクリート平面および局面の構造』, 工業図書, 1937

文献 2-7) : 『日本建築学会論文集』, 第 45 巻, 日本建築学会, 1952.12

文献 2-8) : 『日本建築学会論文集報告集』, 第 57 巻, 第 1 号, 日本建築学会, 1957.1

- 文献 2-9) : 『建築雑誌』, 第 67 卷, 第 791 号, 日本建築学会, 1952.10
- 文献 2-10) : 『日本建築学会研究報告九州支部 3 計画系』, 第 47 卷, 2008.3.1
- 文献 2-11) : 『建築雑誌』, 第 67 卷, 第 787 号, 日本建築学会, 1952.6
- 文献 2-12) : 難波和彦 : 『戦後モダニズム建築の極北 池辺陽試論』, 彰国社, 1999
- 文献 2-13) : 『建築文化』, 第 133 号, 彰国社, 1957.11
- 文献 2-14) : 『コンクリート工学 14』, 第 128 号, 日本コンクリート工学会, 1976.5
- 文献 2-15) : 『国際建築』, 第 23 卷, 第 11 号, 美術出版社, 1956.11
- 文献 2-16) : 『建築』, 第 5 卷, 中外出版, 1961.1
- 文献 2-17) : 『建築文化』, 第 13 卷, 第 11 号, 彰国社, 1958.11
- 文献 2-18) : 『建築文化』, 第 17 卷, 第 2 号, 彰国社, 1962.2
- 文献 2-19) : 『近代建築』, 第 16 卷, 第 5 号, 近代建築社, 1962.5
- 文献 2-20) : The Architectural Forum, Vol.98, No.1, Rogers and Manson Company, 1953.1
- 文献 2-21) : 『国際建築』, 第 20 卷, 第 5 号, 美術出版社, 1953.5
- 文献 2-22) : 『新建築』, 第 30 卷, 第 2 号, 新建築社, 1955.2
- 文献 2-23) : 『建築文化』, 第 10 卷, 第 8 号, 彰国社, 1955.8
- 文献 2-24) : 「長覚院」住職所有のアルバム『長覚院建設録Ⅰ』
- 文献 2-25) : 『建築文化』, 第 192 号, 彰国社, 1962.10
- 文献 2-26) : 「長覚院」住職所有のアルバム『長覚院建設録Ⅲ』
- 文献 2-27) : 中原暢子 : 『長覚院新築工事図面』
- 文献 2-28) : 温品建築研究所 : 『長覚院構造計算書』
- 文献 2-29) : 「長覚院」住職所有のアルバム『長覚院建設録Ⅱ』
- 文献 2-30) : 織本匠 : 『架構—構造とデザイナー』, 武蔵野美術大学, 1987

図版リスト

- ・図 2-1 : 文献 2-14), 西村敏雄 : 「鉄筋コンクリート・プレストレストコンクリート 設計計算入門 24」, p.79 より抜粋。
- ・図 2-2 : 文献 2-24), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.76, 彰国社, 1962.10 より本堂部分の平面図のみを抜粋。室名等を筆者が加筆。
- ・図 2-3 : 「109 展開図 本堂東展開図」, 文献 2-26) より抜粋。1961.12 作図。
- ・図 2-4 : 「201 断面図 本堂庫裡断面図」, 文献 2-26) より一部抜粋。1961.12 作図。
- ・図 2-5 : 1961.12 設計の中原によるスケッチ。
- ・図 2-6 : 文献 2-29), 織本匠・武蔵野美術大学 : 「駒沢体育館・管制塔」, p.36 を参考に筆者が作成。
- ・図 2-7 : 「108 断面図」, 文献 2-26) より抜粋。1961.12 作図。
- ・図 2-8 : 文献 2-24), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.7 より抜粋。
- ・図 2-9 : 「104 立面図 南立面図」, 文献 2-26) より抜粋。1961.12 作図。

- ・表 2-1：文献 2-10), 南方雄貴・太記祐一：「日本における RC シェル構造建築の軌跡」, pp.905-908 をベースにし、『新建築』（創刊：1925.8～）、『国際建築』（復刊：1950.7～）、『建築』（創刊：1960.9～）、『建築文化』（創刊：1946.7～）、『近代建築』（創刊：1956.1～）等に掲載されている 1965 年頃までの作品とし、屋根構造が HP シェル構造のもののみを分析対象として筆者が作成。鞍型シェルも HP シェルの一つとして取り扱う。
- ・表 2-2：文献 2-20), Eero Saarinen：“Saarinen Challenges the Rectangle”, p.126 及び文献 2-21), エーロ・サーリネン：「モダニストが犯した最大の罪？—MIT のオーデトリウムと礼拝堂 エーロ・サーリネンの設計—」, pp.48-55 を参考にし、概要を筆者が原文を和訳し作成。
- ・表 2-3：1951 年から 1956 年の『国際建築』、『新建築』、『モダンリビング』、『建築文化』から筆者が抽出し作成。
- ・表 2-4：文献 2-23), 池辺陽：「建築創造のリアリティをどこに求めるか?」, p.49 及び p.74 を参考に筆者により作成。
- ・表 2-5：文献 2-1)、文献 2-24)、文献 2-26) 及び文献 2-29) を参考に筆者が作成。
- ・表 2-6：筆者が作成。
- ・写真 2-1：文献 2-1) より抜粋。1962.7 頃撮影。
- ・写真 2-2：筆者が撮影（2015.6.12）。
- ・写真 2-3：文献 2-9), 新日本建築家集団設計委員会：「八幡製鉄労働組合会館の設計と施工に就いて」, p.50 より抜粋。
- ・写真 2-4：文献 2-12), p.67 より抜粋。
- ・写真 2-5：文献 2-13), 吉田秀雄他：「金鈴塚遺物保存館」, p.35 より抜粋。
- ・写真 2-6：文献 2-16), 青木繁：「HP シェル構造／静岡駿府会館」, p.37 より抜粋。
- ・写真 2-7：文献 2-17), 宇野坦：「鞍型の本堂—来迎寺本堂」, p.46 より抜粋。
- ・写真 2-8：文献 2-18), 清水建設設計事務所：「太宗寺本堂」, p.68 より抜粋。
- ・写真 2-9：文献 2-24), より抜粋。1960 春撮影。「旧長覚院」は、1681（天和元）年 10 月 2 日建立である。
- ・写真 2-10：文献 2-26), より抜粋。1962.6.9 撮影。
- ・写真 2-11：文献 2-1) より抜粋。1962.7 頃撮影。
- ・写真 2-12：文献 2-1) より抜粋。1962.7 頃撮影。
- ・写真 2-13：文献 2-1) より抜粋。1962.7 頃撮影。
- ・写真 2-14：文献 2-24) より抜粋。1962.1 撮影。
- ・写真 2-15：文献 2-29) より抜粋。1962.3.10 撮影。
- ・写真 2-16：文献 2-29) より抜粋。1962.3.10 撮影。
- ・写真 2-17：文献 2-1) より抜粋。1962.7 頃撮影。
- ・写真 2-18：文献 2-24) より抜粋。1962.1.23 撮影。
- ・写真 2-19：文献 2-1) より抜粋。1962.7.22 撮影。
- ・写真 2-20：文献 2-1) より抜粋。1982.1 頃撮影。

・写真 2-21：文献 2-1) より抜粋。1982.6 頃撮影。

注釈

- 2-1)：中原は、HP シェル屋根を用いた設計はこれ以外にない。また、寺院建築の設計は、「長覚院」と「会田ビル」以外行っていない。
- 2-2)：元所員の白井克典(1957-)より譲り受けた設計同人中原設計担当の実施図面「長覚院新築工事図面」のこと。A2 サイズ計 33 枚が存在する。施工図の存在の確認はできていない。
- 2-3)：前住職が 1961 年 5 月の寺院建築視察から、新築工事、そして 1982 年 1 月の大規模の模様替え工事までの様子をまとめた I から VI の全 6 巻から成る写真アルバム。写真の他手書きでその時々々の事項等も記載されている。
- 2-4)：織本匠(1918-2001)は、池辺陽、芦原義信と同学年で 1942 年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業し、戦後、鹿島建設に入社。1956 年に芦原義信とともに中央公論社を設計、構造設計を担当後、織本匠構造設計研究所(現：織本構造設計)を設立する。池辺陽設計の住宅ナンバーシリーズや芦原義信設計の「駒沢体育館」(1964)の構造設計を担当している。1965 年 4 月の武蔵野美術大学の芸術学部に建築学科を設置すると同時に芦原義信と共に同大学教授となる。筆名で『新建築』や『国際建築』に「シャーレン：ひとつの素直な解決」や、「キャンデラ氏の場合 四角い箱への抵抗をこころみる」等のシェル構造に関する雑誌への講評も執筆。また、中原と同時期に建設工学研究会のメンバーであった小町治男によれば、設計同人には織本匠がよく出入りしていたという。
- 2-5)：関野昇三(生没年不明)は、東京大学の池辺陽・坪井善勝らが中心となり 1950 年に設立する建設工学研究会のメンバーの一人で、設立準備のメンバーは、池辺陽、今泉善一、小芦健一、吉田正輝、吉田秀雄、みねぎしやすお、北川允昭、室伏嘉文、吉田桂二、小宮山雅夫、中原暢子、関野昇三、渡辺仙蔵、柳下洋一、小泉幸男、村井友治、小町治男であった。関野昇三は、池辺陽や坪井善勝らとともに新日本建築家集団設計委員会に所属し、「八幡製鉄労働組合会館」の設計監理・現場監督スタッフの現場監督を担当する。中原は 1952 年に池辺研究室に入所し、建設工学研究会として仕事をしていることから、関野昇三とは、この頃から接点があったとみられる。また、関野昇三は 1952 年 9 月に、坪井善勝と連名で東京大学大学院院生・東京大学生産技術研究所所属として、論文を発表している。
- 2-6)：文献 2-2), 池辺研究室：「工業化のためのデザインへ—住居設計の新しい道—」, p.14 において、「住宅 No.38」「住宅 No.39」「住宅 No.41」「住宅 No.43」「住宅 No.44」「住宅 No.45」の一部の構造の協力を得たことへの謝辞が記載されている。
- 2-7)：文献 2-3), 浅野桂子(指導教員：渡辺健一)：「建築家・中原暢子について」, p.1 において、卒業研究発表会の質問事項として尋ねた。
- 2-8)：文献 2-4)
- 2-9)：温品鳳治(1922 頃-没年不明)は、「長覚院」の構造設計を温品建築研究所として担当している。1944 年東京大学を卒業し、1946 年同大学大学院を修了する。その後すぐに、鹿島建設

に就職し、土浦亀城建築事務所、鳳建築事務所に勤めた後、東京芸術大学の非常勤講師（1962-1965 在籍）を経て、1965 年に同大学の教授となる（-1989 在籍）。中原の設計した作品のうち、温品鳳治が「長覚院」以外に構造設計を行ったものは、混構造の「西川別邸（N 氏別邸）」（1981）がある。「沼津市公会堂」のオーデトリウムのシリンダーシェルの屋根は、1945 年頃坪井研究室に大学院特別研究生として在籍していた温品鳳治が坪井善勝に誘導されて残した involute 曲線の公式のメモをもとに作られたものである。温品鳳治は、実務で作品として構造設計に関わる一方で、「建築家と構造家との分業と協力」や「顧客は試験台か？」等『国際建築』や『建築文化』への論文掲載や座談会等に参加している。

2-10) : 文献 2-5), p.216

2-11) : 文献 2-6), この研究は我が国初のシェル研究であると位置づけられている。

2-12) : 文献 2-7), 坂静雄 : 「パラボリックハイパボロイト曲版屋根の変形」, pp.40-47

2-13) : 文献 2-8) 坪井善勝・青木繁・川股重也 : 「H.P.シェルに関する研究（その 1）」, pp.397-400

2-14) : 文献 2-9), 新日本建築家集団設計委員会 : 「八幡製鉄労働組合会館の設計と施工に就いて」, p.50

2-15) : 文献 2-10), 南方雄貴・太記祐一 : 「日本における RC シェル構造建築の軌跡」, p.906

2-16) : 文献 2-11), 小野薫・加藤渉 : 「トンネル系シャーレン屋根を有する映画館に就いて」, pp.27-31

2-17) : 文献 2-15), 川島甲士・川島亨 : 「魚菜会館建設計画」, pp.73-74 竣工した作品の雑誌掲載はないが、『国際建築』に計画案と共に施工写真も掲載されていることから、実際に建設されたものと考えられる。

2-18) : 文献 2-15), 岡本剛 : 「HP シェルを試みる」, p.71 の膜理論について発表（1936）とあるのは、文献 2-17) 岡本剛 : 「シャーレその歴史」, p.31 によると、フランス人の F.Aimond（生年没年不明）を指しているのではないかと思われる。

2-19) : 文献 2-17), 宇野坦 : 「鞍型の本堂—来迎寺本堂」, pp.44-47

2-20) : 文献 2-118), 清水建設設計事務所 : 「太宗寺本堂」, pp.68-72, 及び文献 2-19) 緒方建築事務所 : 「浄土宗太宗寺」, pp.81-84

2-21) : 文献 2-20), Eero Saarinen : “Saarinen Challenges the Rectangle”, p.126

2-22) : 文献 2-21), エーロ・サーリネン : 「モダニストが犯した最大の罪？—MIT のオーデトリウムと礼拝堂 エーロ・サーリネンの設計—」, pp.48-55 海外の代表的な建築雑誌出版社から掲載の承諾を得ており、1950 年-1953 年にかけて出版された『国際建築』は、外国雑誌からの転載記事が非常に多い。

2-23) : 文献 2-12), pp.81-85 第 3 章『『すまい』と伝統論争』において詳細に述べている。

2-24) : 文献 2-22), 池辺陽 : 「『日本のデザイン』といかに取りくむか」, pp.41-47

2-25) : 文献 2-22), 池辺陽 : 「『日本のデザイン』といかに取りくむか」, pp.41-47 において、誌上シンポジウムを行っている。池辺陽が「提案」という形で論説を発表し、これに対して丹下研究室、MIDO グループ、UHON グループ、RIA グループ及び清家研究室が「批判」を掲載して

いる。しかし実際は「池辺論文に対する見解」というタイトルでまとめられているが、提案に対する批判と対立的に演出している。

2-26) : 文献 2-22), 清家研究室グループ : 「問題提起が作家的でない」, p.47

2-27) : 文献 2-23), 池辺陽 : 「建築創造のリアリティをどこに求めるか?」, pp.47-51

2-28) : 文献 2-23), 池辺陽 : 「建築創造のリアリティをどこに求めるか?」, pp.73-76

2-29) : 慈覚大師 (じかくだいし 794-864) は、第3代の天台宗総本山である比叡山延暦寺の貫主 (住職)。円仁 (えんにん) ともいう。入唐八家 (最澄・空海・常暁・円行・円仁・恵運・円珍・宗叡) の一人。

2-30) : 文献 2-25), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.74

2-31) : 文献 2-25), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.74

2-32) : 文献 2-25), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.74

2-33) : 文献 2-25), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.74

2-34) : 文献 2-25), 中原暢子 : 「H.P.シェルと伝統の融合」, p.74

2-35) : 文献 2-26) 及び現任職である鎌田亮宣によるヒアリング調査 (2015.8) による。

2-36) : 文献 2-28), p.19 によると、縁梁の曲線は、 $z=c/a^2 \cdot xy=c/a^2 (-0.3096y-2.77233)y$ という放物線で表される。 z,x,y は、屋根の中心部を 0 とした三軸方向の距離を表し、 a は、シェル接合部の 1 辺の距離、 c は、屋根の中心部のからの垂直距離を表す。なお構造計算書作成年月は不明。

2-37) : 文献 2-24)

2-38) : 文献 2-30), 守屋秀夫 : 「駒沢体育館・管制塔」, p.36

2-39) : 文献 2-24)

第3章 木造を主構造とする構造表現主義—「辻別邸」—

3.1 「辻別邸」と第3章の概要

「辻別邸」(写真 3-1、写真 3-2) は、木造を主構造とする混構造の構造表現主義的な作品の一つである。長野県北佐久郡軽井沢町の南原地区にある別荘建築³⁻¹⁾であり、設計開始が1961年と設計同人設立後間もない時期で、竣工までに1964年と長期にわたった作品である。そのデザインは、丸太柱³⁻²⁾を斜材として使ったものであり、未発表作品である。竣工後現在までに、台所以外の水回りや階段の位置など、増改築を繰り返し今日に至っている。

「辻別邸」の建築主の娘とその夫は桑沢デザイン研究所の出身である。夫は、林が設計する「ヴィラ・イナワシロ」(1962)の家具担当をしている。林は1961年から1992年まで同研究所で講師を担当していたため、林を通じて中原に発注されたと思われる。

中原のデザインの特徴的でもある先端的建築技術の適用が見て取れる「辻別邸」を対象とし、具体的な導入に向かう発想や仕組みについて、実施に向けた手法を通してここで検討してみる。

3.1.1 本章の研究の背景

「辻別邸」と同時期の別荘としては、設計同人の共同主宰者である林の「草崎クラブ」(1964)や「末広がりの家」(1965)が有名である。設計同人では、共同設計は行わず、事務所の経営、スペース、所員を共有するという方針であった。「辻別邸」は、林と同じく丸太柱や合せ梁を使った別荘であるが、自らの主体性を確立するために様々な挑戦がみられる。その設計意図及び設計方法を明らかにする。



写真 3-1 2008年現在の「辻別邸」

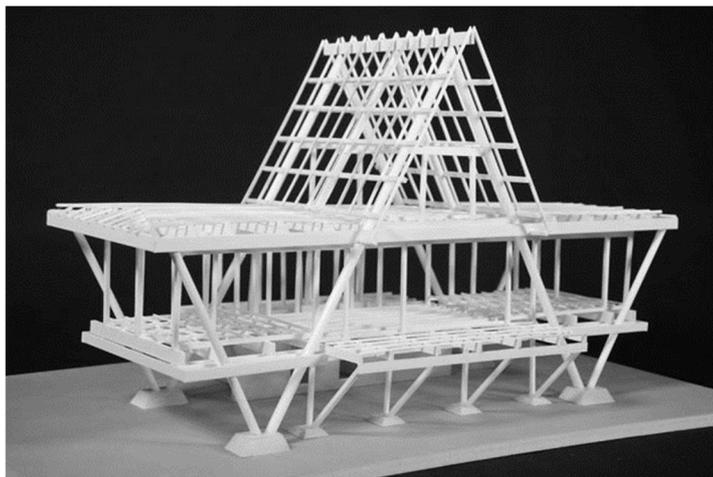


写真 3-2 「辻別邸」新築時の軸組模型

「辻別邸」の建つ軽井沢の南原地区は、1931年に軽井沢出身の早稲田大学教授である市村今朝蔵（1898-1950）が自分の所有地を分譲して学者村を作ることを考え、「友だちの村」として発足させ、それに賛同する学者や文化人らがこの地に別荘を構えた。「友達村」はその後「南原会」（1955年に「財団法人軽井沢南原文化会」に改称）となり、その活動は今日まで続いている³⁻³。「辻別邸」が建設された1960年代、この周辺には、大江宏（1913-1989）の「追分の山荘」（1962）やアントニン・レーモンド（1888-1976 以下、「レーモンド」という）の「軽井沢新スタジオ（旧レーモンド別荘）」（1962）など多くの建築家が別荘を構えていた。

3.1.2 本章の目的と分析方法

本章では、木造を主構造とする構造表現主義的な扱いについて検討する。中原が設計方法論を明示していれば、それに基づいて作品を分析できるが、林のように方法について明示したものはない。従って調査方法としては第1に、設計図書³⁻⁴を基に軸組模型及びCGモデルを作成、分析しその構成を詳細に確認することで、中原の「辻別邸」の特徴を明らかにする。第2に、現地調査及び現在この別荘の使用者である建築主の孫娘夫婦に聞き取り調査を行い、増改築前の原型を確認する。第3に、林とそれ以前に丸太柱を斜材として設計しているレーモンドの作品の構成方法とを比較し、中原の独自性を明らかにする。また、これらの独自性を育んだ母校である武蔵工業大学短期大学部の教育内容や池辺研究室での実務経験、及び「辻別邸」の建つ中軽井沢南原地区についても調査し、中原の設計意図を明らかにすることを試みた。

3.2 概要

設計図書や聞き取り調査をもとに、「辻別邸」の平面構成の概要、架構の特徴と以下にまとめる。なお、参考にした「辻別邸」の図面リストは次の通りである（表3-1）。

表 3-1 「辻別邸」図面リスト

1	図面リスト 面積表	8	立面図 (西)	15	天井伏図
2	仕上表 配置図 案内図	9	矩形図 (1)	16	基礎伏図
3	平面図 (1階)	10	矩形図 (2)	17	床伏図 (1階)
4	平面図 (2階)	11	矩形図 (3)	18	床伏図 (2階)
5	立面図 (北)	12	展開図 (1)	19	小屋伏図 屋根伏図 床伏図 (3階)
6	立面図 (東)	13	展開図 (2)	20	電気設備
7	立面図 (南)	14	建具表	21	給排水設備

3.2.1 平面構成の概要

「辻別邸」は、1階にカーポートとして使用できるピロティがあるが、その一部にはコンクリートブロック造の物置が設けられている (図 3-1 A)。2階は玄関及び居間・食堂・食堂 (LDK)、和室2室 (6畳、8畳) 及び女中室 (3畳) と1階コンクリートブロックの上部には浴室、洗面所、便所及び階段が収められており (図 3-2)、外壁窓には雨戸が設置されている。3階は居室 (図 3-3)、4階は梯子で昇降する納戸があり、延べ床面積は 91.53 m²である。

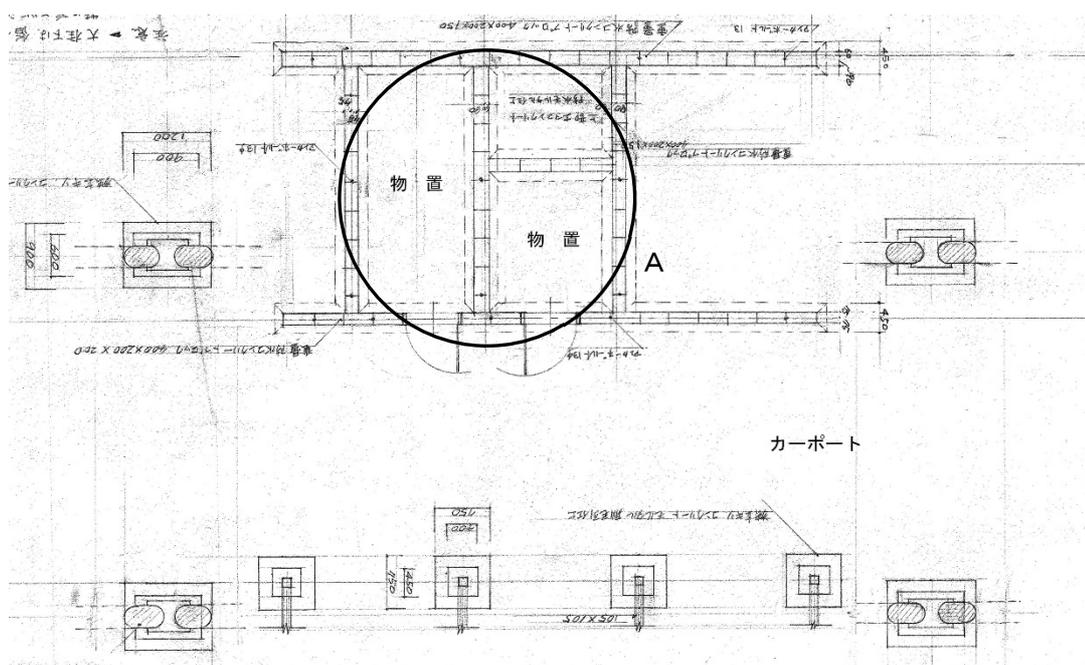


図 3-1 「辻別邸」1階床伏図

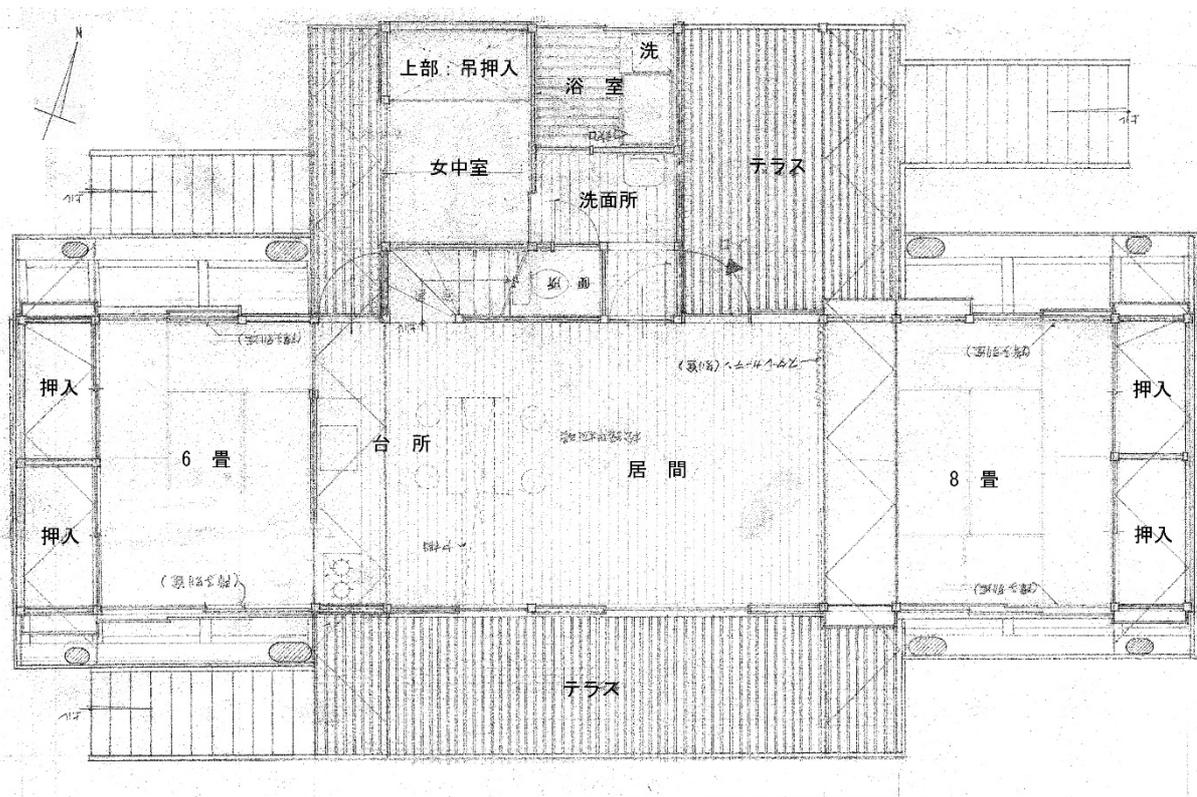


図 3-2 「辻別邸」2階平面図

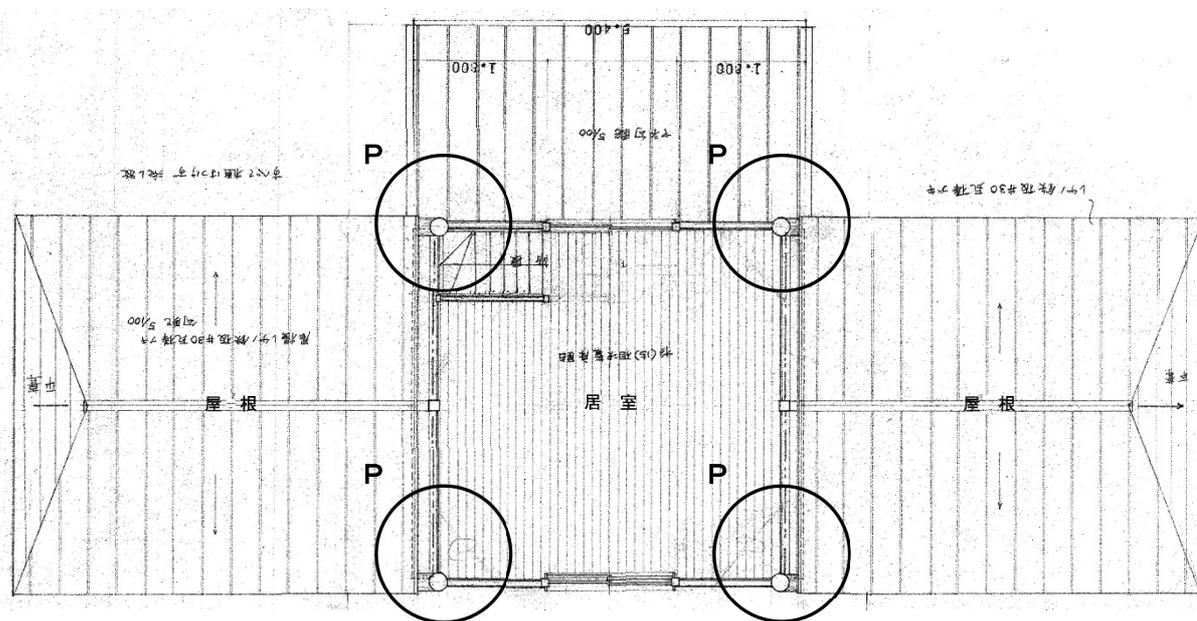


図 3-3 「辻別邸」3階平面図

3.2.2 架構の特徴 丸太柱・合せ梁・水平押え梁

(1) 梁間方向³⁻⁵⁾の構成

「辻別邸」の架構は、丸太柱を合掌に組み、その間に水平押え梁³⁻⁶⁾を設け、A型のトラスを形成し、その柱脚からV型になるよう別の柱を固定、その柱頭をつなぐことで、全体的に

W型のトラスを成立させている。丸太柱の通る基準線の軸組を模式図としてまとめた(図3-4)。丸太柱と合せ梁だけで構成するのではなく、部分的に水平押え梁で代替しており、全体の架構を細部のデザインに合わせて多様に展開している。

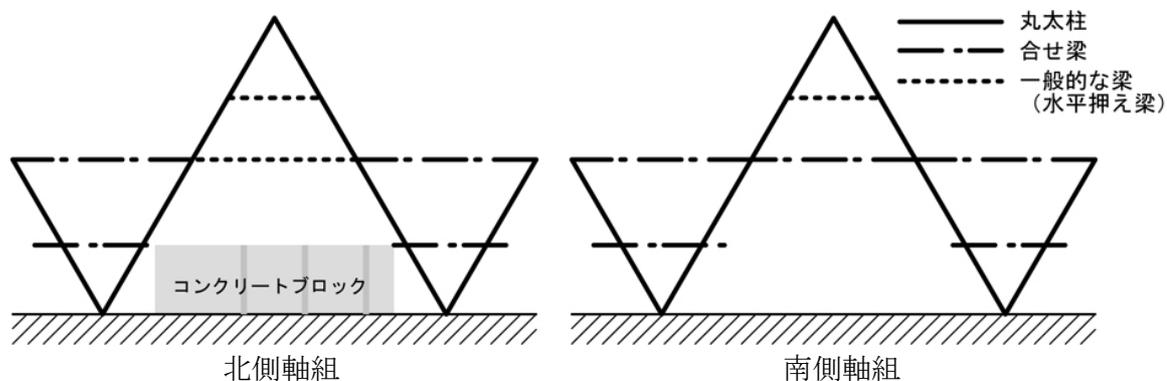


図3-4 「辻別邸」丸太柱に関する構造模式図

2階床梁では、V型の丸太柱を固定するために架構から両翼に和室部分を飛び出させて、合せ梁で固定している。図3-4の各軸組の2階床組の空いている中央部分には、居間・食堂・台所の床が別構造として差し込まれる。2階小屋梁は、北側中央部に換気用窓を確保するため、合せ梁を連続できず、水平押え梁に変えて接続している。

(2) 桁行方向の構成

2列のW型トラスの間の接続は、2階小屋梁両翼の軒先(図3-5 B)をボルト締めし、2階小屋と大屋根との接合部は、240mm×120mmの梁でつながれている(図3-5 C)のが確認できる。

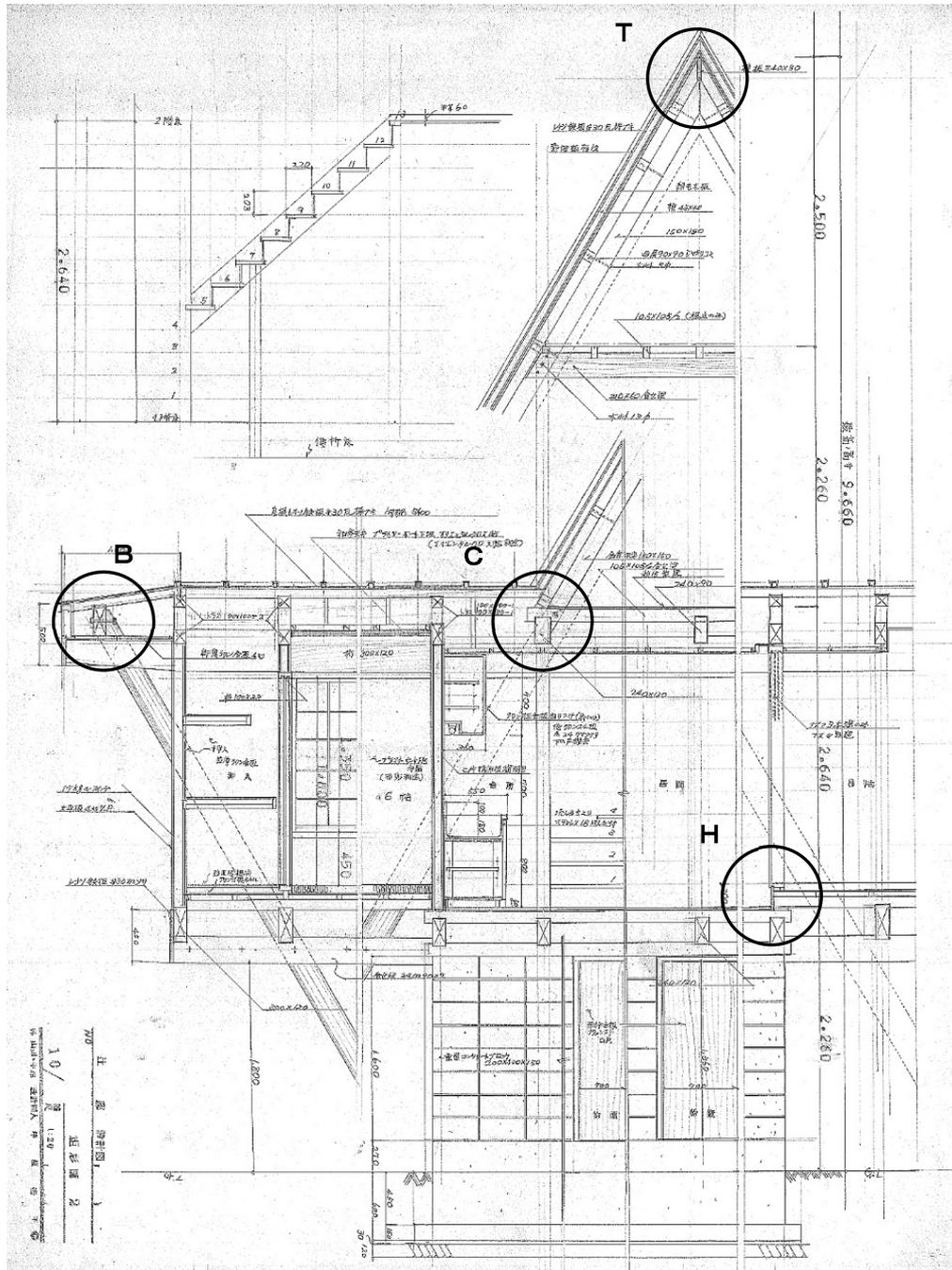


図 3-5 「辻別邸」矩形図（桁行方向）

3.2.3 丸太柱の構造

丸太柱の脚部は径 22mm のアンカーボルト 2 本で独立基礎に緊結している。そして、合せ梁 (240mm×90mm×2) で挟み、径 13mm のボルトで W 型に固定している。その両トラス間にキャンチレバーになるように居住部分を設けている。2 階外壁面について、両翼の和室は、外壁面から W 型トラスまでを南側は 450mm、北側は 900mm 内側 (図 3-6 D) にずら

しているが、中央部の居間・食堂部分の外壁面の一方は、丸太柱の通る基準線に揃えて配置 (図3-7 E) されている。

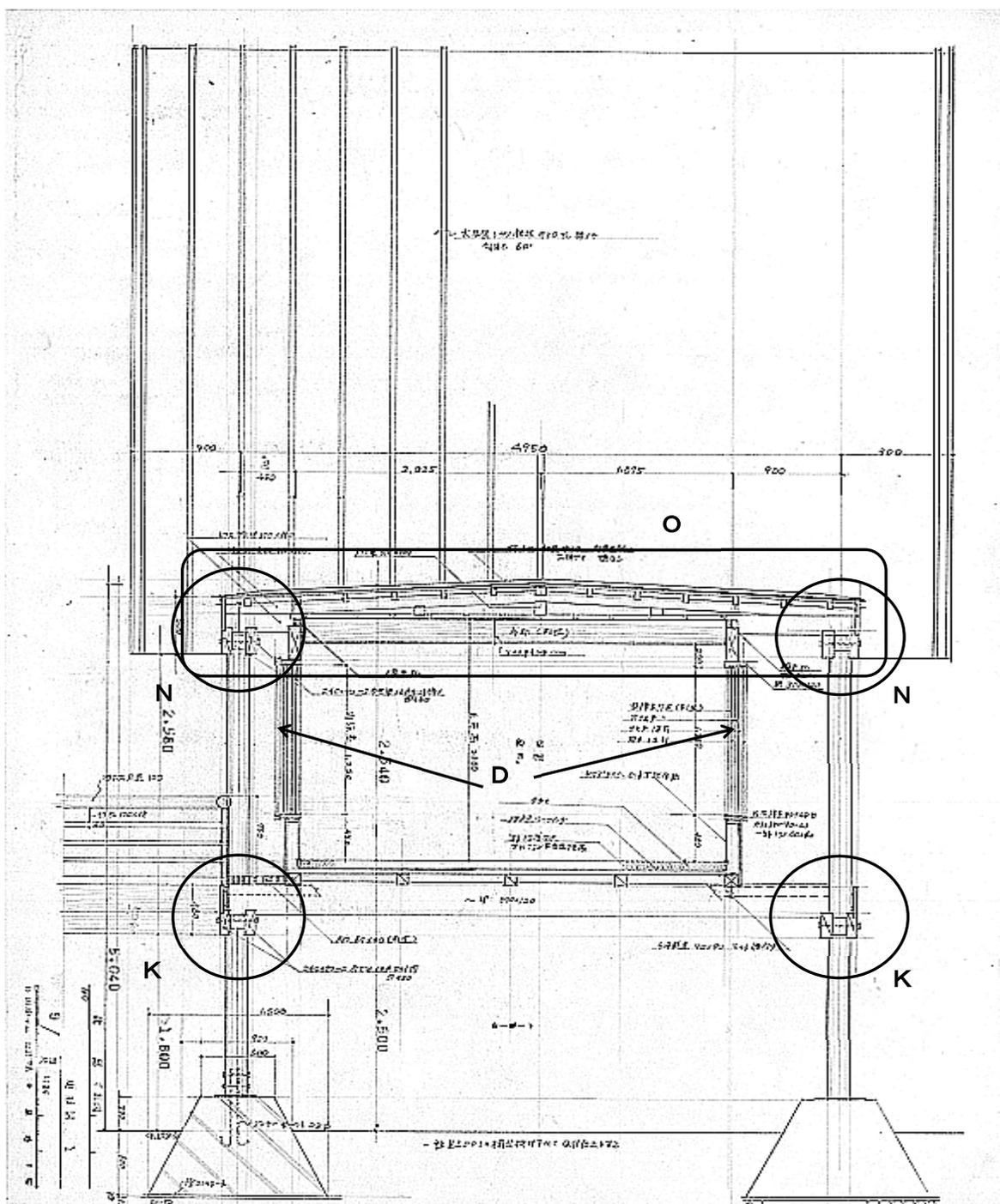


図3-6 「辻別邸」矩形図 (梁間方向・和室部分)

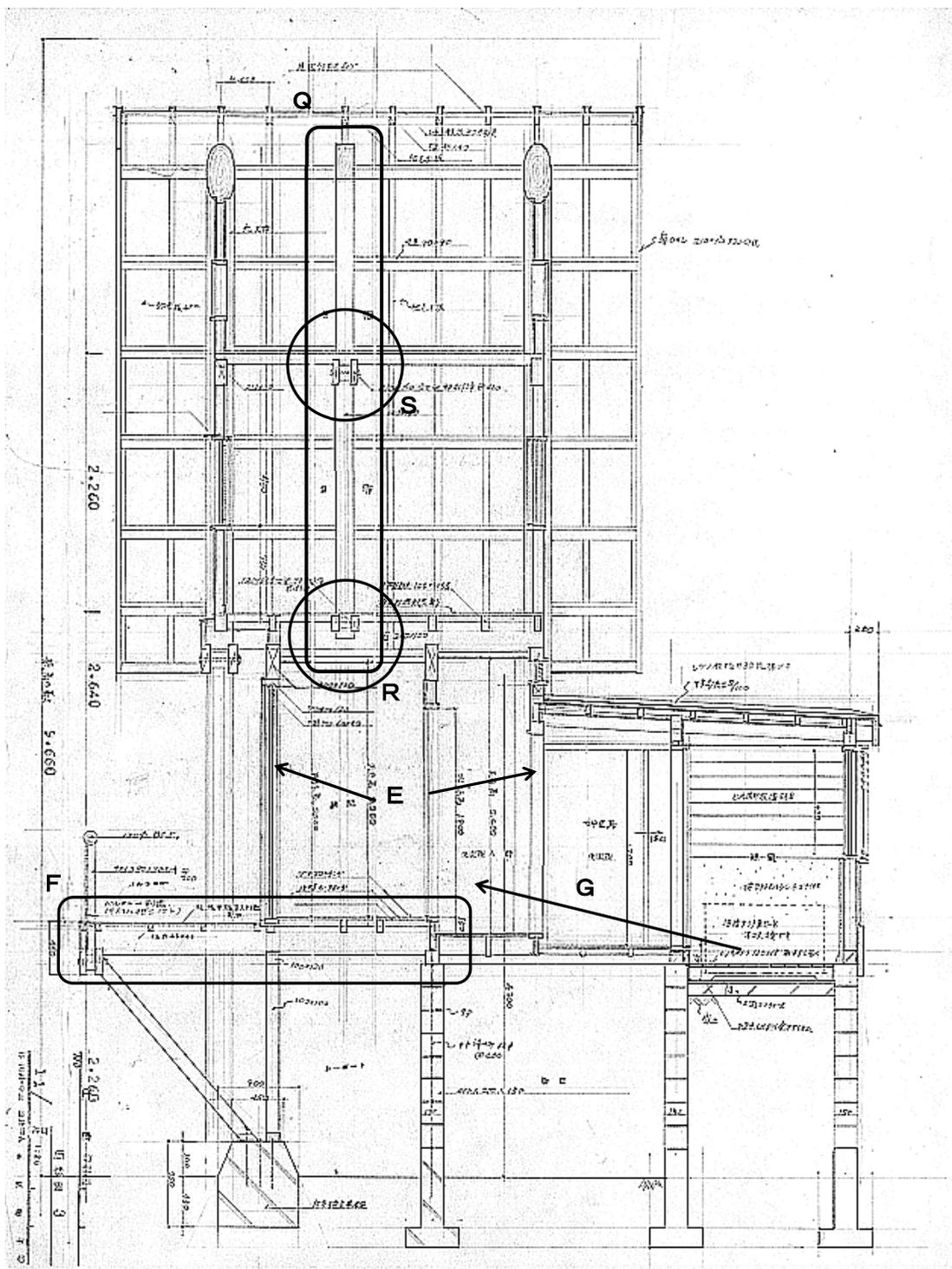


図3-7 「辻別邸」矩形図（梁間方向・居間部分）

3.2.4 2階床の構造

(1) 居間・食堂の床

①丸太柱から独立した床

居間・食堂部分の床は、丸太柱を構成するW型トラスとは、完全に切り離された構造となっており、床束と1階のコンクリートブロック部分に架かっている土台が床梁（大引）につながり構成している（図3-7 F）。

②コンクリートブロックと床

1階コンクリートブロックには、その上階に浴室、洗面所、便所、階段、そして玄関ポーチを兼ねる北側テラスがあり、W型トラスに900mm入り組んだ構成となっている。床高は、北に位置する浴室が最も低く、洗面所から居間・食堂と徐々に高くなり（図3-7 G）、居間・食堂と和室の高低差は200mmである（図3-5 H）。

③床の安定のための水平筋違

2階床伏図（図3-8）には、90mm角の水平筋違（火打梁をトラス状に使ったもの）が、コンクリートブロックの両端から南側テラスまで南北方向に2列入っている（図3-8 I、図3-9 J）。これは、梁間方向の揺れに対し抵抗するように計画されている。

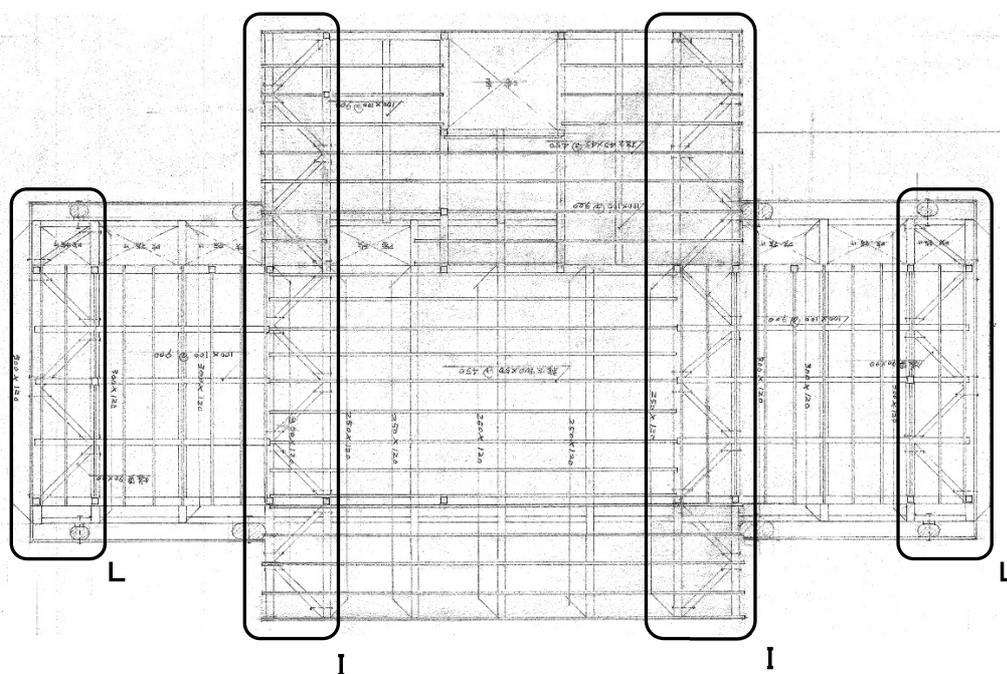


図3-8 「辻別邸」2階床伏図

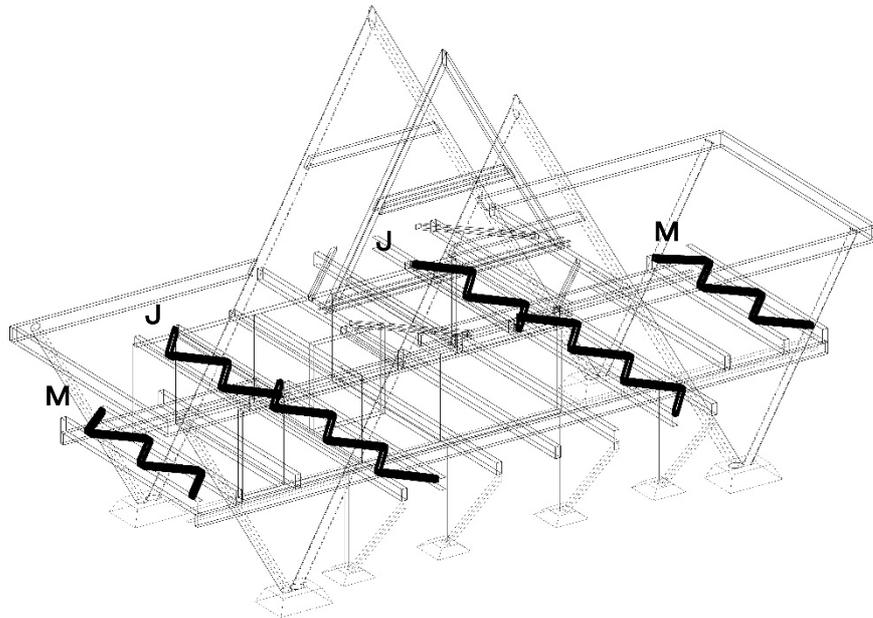


図 3-9 「辻別邸」斜材丸太柱と合せ梁、水平筋違の構成

④南側テラスを支える束

南側テラスの束は、独立基礎にアンカーボルトで固定され、上部の床を支えるために垂直な束と南に斜めに張り出した束が伸びている。現地調査の結果、独立基礎にその痕跡を確認することができた（写真 3-3、写真 3-4）。



写真 3-3 「辻別邸」南側テラスの床束と束石



写真 3-4 「辻別邸」南側テラスの床束と束石（拡大）

（2）和室及び個室の構造（合せ梁との関係）

①合せ梁にかけた床

和室の床の構造は、丸太柱を挟む内側の合せ梁の上に 300mm×120mm の床梁をのせ、その材と直行して 100mm 角の大引程度の横架材を引き、それに直行するように根太を引いている（図 3-6 K）。

②和室押入部分の水平振れ止めとしての水平筋違

2階居住部分は W 型トラスから飛び出し、桁行方向にキャンチレバーとなっている。この部分の振れ止めとして、90mm 角で径 13mm のボルト締め水平筋違（図 3-8 L、図 3-9 M）を設置している。コンクリートブロック部分から水平筋違を延長させることで、南側のテラス部分を安定させている。また、8 畳の和室の床組は、居間の床と重なりが生じている。

③2階屋根の構造

和室の軒の先端は合せ梁で止まっており（図 3-6 N）、外壁を合せ梁の内側に寄せることで、軒の出を確保し、外壁面に深い影を落としている。

洋小屋の屋根は、両翼併せて 8 組のトラスから成り、そのトラスは、和室の桁の上に庇の部分が張り出すような形で配置されている（図 3-6 O）。勾配 5/100 の寄棟屋根で、仕上げはレジン鉄板瓦棒葺きである。

3.2.5 大屋根と 3・4 階床

外壁は丸太柱を真壁としており、丸太柱が外部からみえるように設計されている（図 3-3 P）。丸太柱をつなぐ 240mm×120mm の材が、双方の W 型トラスを緊結し、3 階床から棟にかけて、合掌の中央に 150mm 角の登り梁が山形に設置されている（図 3-7 Q）。3 階床

は、その登り梁を挟むように 150mm×75mm の合せ梁が設置され、根太が掛かっている（図 3-7 R）。4 階床は合掌中央の登り梁を挟む形で 210mm×60mm の合せ梁が（図 3-7 S）、3 階床では、桁に根太と合せ梁が掛かっている。大屋根の頂部の棟板は、240mm×30mm を使用している（図 3-5 T）。勾配 60 度の切妻大屋根の仕上げは、同じくレジノ鉄板瓦棒葺きである。

3.3 増改築での変更点

「辻別邸」は、竣工後 5 から 10 年の間に湿気等の影響で木材の腐朽が進み、地元の建設会社である株式会社三信建設により増改築を行っている。平面の台所を除く水周り、階段の位置を変更、南側テラスの柱及び庇の増築、全ての壁面にブリキのトタンを挿入及びコンクリートブロック上部の床の全面張替等が行われた（図 3-10）³⁻⁷⁾。

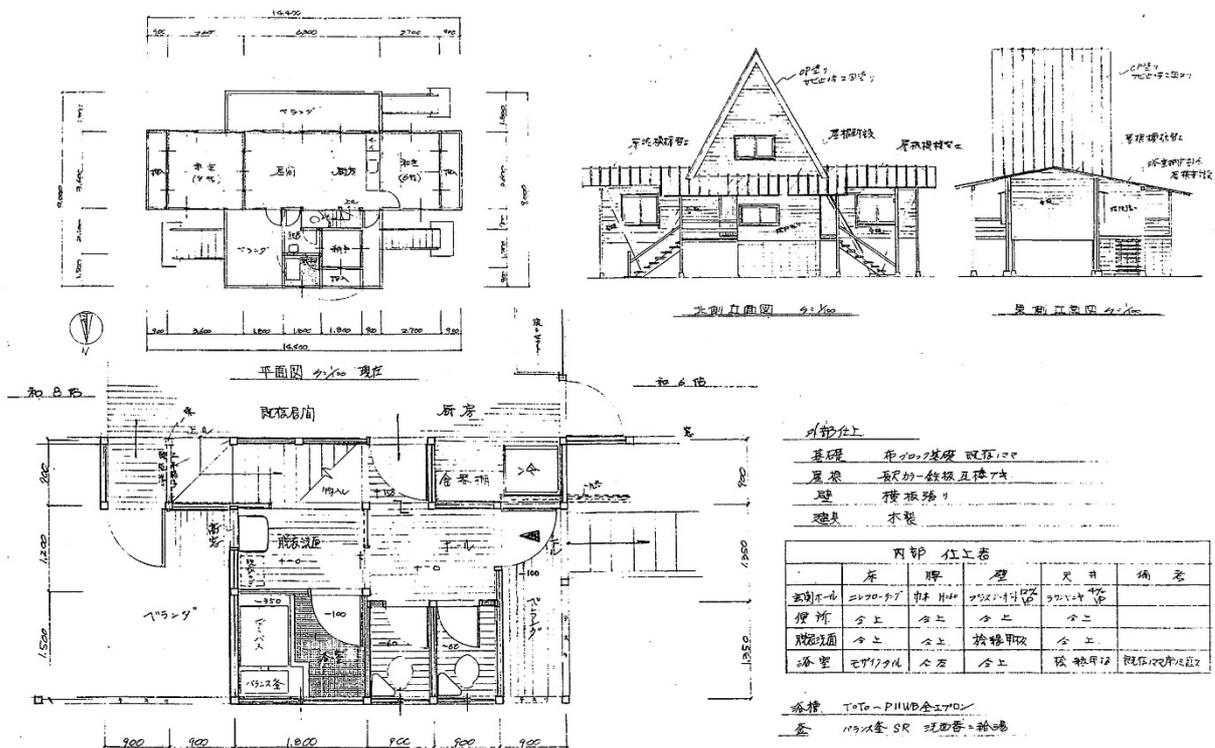


図 3-10 「辻別邸」増改築工事設計図

3.4 分析

「辻別邸」について、丸太柱の利用について同時期に設計された斜材丸太を合掌とした作品を挙げながら、ピロティの実現と採用の背景、外観及び内観の意匠について、分析を行う。

3.4.1 丸太柱の利用

「辻別邸」は中原には珍しく丸太柱を使ったものである。丸太材の使用は、林の初期の木造住宅・別荘に多数みられる。戦前から戦後にかけて、レーモンドの作品にもそれが顕著に表れている。そこで、レーモンドと林、中原の作品の内、丸太材を使用している建築物を抽出し³⁻⁸⁾、その部材を合掌の斜材柱として使っているものについて、比較、検討した(表3-2)。

「辻別邸」は桁行方向に水平押さえ梁、合せ梁を採用しているものの、梁間方向は、2階床を構成する水平筋違と3階の床梁等で構造を安定させている。林やレーモンドの作品は、外観はシンプルで、内部はダイナミックな吹抜や露出した小屋裏がみられる。しかし、中原の「辻別邸」では、W形柱トラスで、すべての荷重を負担するのではなく、1階のコンクリートブロックに荷重を負担させることによって、その分散を図っている。ダイナミックに見せながら構造の一貫性よりも、無理をしない構造計画が行われていることがわかる。

表3-2 斜材丸太柱を合掌として用いた作品

建築家	A.レーモンド	林雅子		中原暢子
建築名	「延岡ルーテル教会」	「草崎クラブ」	「末広りの家」	「辻別邸」
場所	宮崎県延岡市	静岡県伊東市	長野県北佐久郡	長野県北佐久郡
設計時期	1957	1961-1963	1963-1964	1961-1964
最高高さ (mm)	約8,000	10,000	8,040	9,660
屋根形式	切妻	切妻	切妻	切妻+寄棟
屋根勾配	約55度	5/10 (63.5度)	10/10 (45度)	60度
特徴的構造	(梁間) 水平押え梁	(梁間) 合せ梁	(梁間) 2階RC床に固定	(梁間) 水平押え梁、水平筋違
	(桁行) 基礎	(桁行) 縁甲板斜め張、基礎	(桁行) 縁甲板斜め張・基礎	(桁行) 合せ梁、基礎
丸太柱の位置関係	主に内部 (脚部のみ外部)	主に内部 (脚部のみ外部)	内部	主に外部
写真				
ピロティの有無	無	無	無	有
丸太柱径 (mm)	約300	360 電柱丸太	300~330	約200~約240 電柱丸太

3.4.2 ピロティの実現と採用の背景

また中原の師池辺が、「住宅 No.17」(1954)、「住宅 No.41」(1958)、「住宅 No.54」(1958)³⁻⁹⁾などでピロティを採用し、中原も「辻別邸」でピロティを実現している。中央を高くしたW型のトラスで構成され、木製の橋梁の中に居住スペースを差し込んだ形が取られている。中原が建築を本格的に学んだ武蔵工業大学短期大学の建設科のカリキュラムには、必修科目として「橋梁及鋼構造」という授業があり³⁻¹⁰⁾ 橋梁についての知識もあったのではないかと推察できる。また、「辻別邸」の使用者への聞き取り調査によると、湿気がひどかったとい

言い、床を上げた構造で良かったとも述べている³⁻¹¹⁾。汚水と雑排水の処理は、それぞれ直径900mmの浸透枳で対応しており、浄化槽は設置されていない。南原地区は一般に地下水位が高く、排水環境は良くなかったため、ピロティで湿気に対応することは有効であったと思われる。

3.4.3 外観及び内観の意匠 地域性と中原の和風好み

「辻別邸」の建つ南原地区は、学者が集まる別荘地である。「辻別邸」の外観は、勾配の急な三角の大屋根を配するという点では、バンガロー式を特徴とする「あめりか屋」³⁻¹²⁾の住宅の面影を彷彿とさせるものである。

2階の内部空間には極力丸太柱を表さずに和風のテイストでデザインをまとめている。3、4階の大屋根内部空間は、僅かに部屋の隅に丸太材の一部がみえるように外部とコントラストをもってデザインしている。これもかつての軽井沢の日本人の別荘のイメージである。和室の色彩は、竣工当時のまま³⁻¹³⁾であり、壁面はくすんだブルー、天井は白（写真3-5、写真3-6）となっている。



写真3-5 「辻別邸」和室（8畳）内観



写真 3-6 「辻別邸」和室（6畳）内観

3.5 考察

以上の分析より、中原の「辻別邸」における、丸太構造の空間構成の特徴、架構構造における現実的な対応、民家構造への親和性について考察する。

3.4.1 中原の丸太架構の空間構成の特徴

林と同じ丸太柱や合せ梁を使いつつも、建築全体を丸太材のトラスで組み立て、ピロティを含み4階建ての建築を実現する等、この時期他にみられない独特の木造建築の構成がみられる。これによって樹海の上の眺望を獲得し、ピロティによる快適な環境の確保が得られた。しかし一方で、林独特の丸太材と合せ梁で構成された吹抜を伴ったダイナミックな内部空間やレーモンドのような小屋組を表出した内部空間は中原にはなく、和風の落ち着いた内部空間を実現している。後の中原の和風に回帰する作品群³⁻¹⁴⁾をみれば、これは軽井沢に新たに別荘を求める人々の「外観はバンガロー風、内部は畳敷きの和風」³⁻¹⁵⁾に通じるもので、中原の好みでもあるとも考えられる。

3.5.2 架構構成における現実的な対応

「辻別邸」は、桁行方向においては丸太材で構成されるW型トラスが筋違の役割を果たし、梁間方向の水平力に対しては、大屋根と2階両翼の和室押入の外壁で負担している。

しかし、架構の全てを丸太柱のトラスで構成せず、床荷重大きい2階の台所、浴室、洗面所をW型トラスから切り離し、1階から自立させることで、これをトラスに伝えずに水平力をコンクリートブロックで受け止めている。このような柔軟な対応は、中原の特徴でもある。白井克典が、「凝縮された空間」³⁻¹⁶⁾で指摘する林の「部分から全体へ、全体からディテールへの厳しい一貫性」は中原にはみられない。しかし、「辻別邸」の場合、構造的な一貫性の断念

によって床の高さを多様に設定することを可能とし、居間・食堂の椅子座と和室の床座の視線を合わせる等、生活に配慮したきめ細かい設計を実現している。

3.5.3 民家構造への親和性

W型トラスを梁間方向で緊結するためにブレースを配置しなかった点は疑問が残る。1階部分及び3、4階部分の丸太材に対してブレースを配置しておけば、構造上は更に安定した建築となったと考えられる。ブレースを配置しないという構造は、民家の構造に近い。中原の師笹原貞彦（1914-2005）は、卒業設計制作の最中『民家帖』（1955）等の調査に蔵田周忠³⁻¹⁷（1895-1966）と共に奔走した経験を持っており、中原も笹原貞彦から民家に対する知識を受け継いでいると考えられる。ブレースを使わない中原のこの考えは、後に設計する柿生農協のモデル農村住宅「飯草邸」³⁻¹⁸（1966）（図3-11、写真3-7）に充実した形でみられる。



図3-11 「飯草邸」透視図



写真3-7 「飯草邸」（1966）

3.6 第3章のまとめ

中原設計の「辻別邸」は、林と同じ丸太柱や合せ梁を使いつつも、建築全体を丸太材のトラスとして組み立て、ピロティを含み4階建ての独特の木造建築を実現した。これによって眺望とピロティによる快適な環境を得ることができた。

デザインは構造表現主義的建築であるが、構造システムと建築表現の完全な一致にこだわることなく、荷重の大きい2階床を構造上丸太トラスから分離することによって丸太トラスの負担を減少させ、さらにブロック壁を導入することによって地震力に対応するとともに、

ピロティの有効利用を図るなど柔軟な設計態度がみられる。内部空間は、林の丸太材と合せ梁で構成された吹抜のあるダイナミックな内部空間ではなく、和風の落ち着いた内部空間を実現している。梁間方向にブレースを使わない中原のこの考えは、後に設計する柿生農協の住宅相談事業でのモデル農村住宅「飯草邸」（1966）に充実した形でみられる。

参考文献リスト

文献 3-1)：中原暢子：『辻邸新築工事』

文献 3-2)：国土地理院ウェブサイト：「地図・空中写真閲覧サービス」

<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>（参照 2018.5.5）

文献 3-3)：穴戸實：『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まい学大系 3，住まいの図書館出版局，1989.6

文献 3-4)：株式会社三信建設：『辻家増改築工事設計図』

文献 3-5)：三沢浩：『レーモンドの失われた建築』，王国社，2010.10

文献 3-6)：『建築』，中外出版，第 14 号，1961.10

文献 3-7)：『日本建築学会計画系論文集』，第 80 巻，第 716 号，pp.2315-2325，2015.10

文献 3-8)：『建築文化』，彰国社，第 50 号，1995.3

文献 3-9)：武蔵工業大学三十年史編集委員会：『武蔵工業大学 30 年史』，五島育英会，1960.5

文献 3-10)：『日本建築学会学術講演梗概集（中国）』，2017.7

文献 3-11)：「建築家 林雅子」委員会：『HAYASHI Masako, architect 1928-2001 建築家 林雅子』，新建築社，2002.8

文献 3-12)：中原暢子：『飯草邸新築工事』

図版リスト

- ・写真 3-1：筆者による撮影（2018.4.9）。
- ・写真 3-2：文献 3-1) を基に筆者が制作。筋違は省略している。
- ・写真 3-3：筆者による撮影（2018.4.9）。
- ・写真 3-4：写真 3-3 の一部を拡大したもの。
- ・写真 3-5：筆者による撮影（2018.4.9）。
- ・写真 3-6：筆者による撮影（2017.8.12）。
- ・写真 3-7：筆者による撮影（2017.1.22）。
- ・図 3-1：文献 3-1)，16.基礎伏図より抜粋。
- ・図 3-2：文献 3-1)，3.平面図（1 階）より抜粋。
- ・図 3-3：文献 3-1)，4.平面図（2 階）より抜粋。
- ・図 3-4：文献 3-1) を基に筆者が作成。
- ・図 3-5：文献 3-1)，10.矩形図（2）より抜粋。X 方向は一部省略されている。
- ・図 3-6：文献 3-1)，9.矩形図（1）より抜粋。
- ・図 3-7：文献 3-1)，11.矩形図（3）より抜粋。X 方向は一部省略がされている。

- ・図 3-8 : 文献 3-1), 18.床伏図 (2階) より抜粋。
- ・図 3-9 : 文献 3-1) を基に筆者が制作。細かな部材は省略している。
- ・図 3-10 : 文献 3-4)
- ・図 3-11 : 文献 3-12), より抜粋。中原が描いたものと推察される。
- ・表 3-1 : 文献 3-1), 表紙に記載の図面リストより抜粋。
- ・表 3-2 : 文献 3-5), 「50 延岡ルーテル教会は消えていた」 pp.204-207, 文献 3-6) 「特集 アントニン・レーモンドレーモンド作品集」, pp.13-157, 文献 3-7) 内田祥士:「アントニン・レーモンドの木造架構形式について —聖ポール教会と箕町の自邸兼事務所を事例として—」, pp.2315-2325 を元に筆者が作成。

注釈

- 3-1) : 「辻別邸」の使用者への聞き取り調査 (2017.8.12) によると「竣工当時は、国鉄信越本線 (現しなの鉄道) で中軽井沢に向かう途中、青い屋根が眺められた」という特徴的な建築物であった。現在は周辺の樹木が生育し、航空写真でも「辻別邸」の姿は確認することができないが、文献 3-2) 「1975 年の軽井沢の航空写真 (縮尺 1/25,000)」からは青色の屋根が確認できる。
- 3-2) : 本章では、直径 240mm~360mm の木材の柱を「丸太柱」と定義する。
- 3-3) : 文献 3-3), p.203
- 3-4) : 図面での表記は、玄関のある階が 1 階となっているが、本章では便宜上地盤面を 1 階として論じる。文献 3-1) の掲載図面は、1 階・4 階平面図及び軸組図は存在しない。A2 判トレーシングペーパーの原図、計 21 枚。なお、現在の「辻別邸」は、築 10~15 年で増改築がされているため、本章掲載の「辻別邸」の写真と図面とは食い違いがみられる。
- 3-5) : 丸太柱で構成された W 型トラス面を桁行方向とし、その直行方向を梁間方向とする。
- 3-6) : 「水平押え梁」とは、傾斜柱の開きを防ぐために用いられる水平の梁で、合せ梁を採用する場合もある。
- 3-7) : 使用者への聞き取り調査による (2018.5.4)。
- 3-8) : レーモンドについては、日本的な和風住宅の設計に取り組む 1926 年~1950 年代までを対象とする。その他、生田勉 (1912-1980) や篠原一男 (1925-2006) 等にも丸太材を使用したものがみられるが、それを斜材として用いたものはないため、リストからは外した。
- 3-9) : 文献 3-8), 池辺陽:「住宅ナンバーシリーズ」, pp.38-41 及び p.57
- 3-10) : 文献 3-9), p.137
- 3-11) : 使用者への聞き取り調査による (2018.5.4)。
- 3-12) : 「あめりか屋」とは、軽井沢の開発等を手掛けた日本の住宅設計施工会社 (1909 年創業) である。
- 3-13) : 使用者への聞き取り調査による (2018.5.4)。
- 3-14) : 文献 3-10), 深石圭子:「伝統的和風住宅への回帰 建築家中原暢子の研究 第 6 報」, pp.239-240

3-15) : 文献 3-3), p.225

3-16) : 文献 3-11), 白井克典 : 「凝縮された空間」, pp.338-341

3-17) : 蔵田周忠は、堀口捨己らとともに分離派建築会に所属し、モダニズム建築史にも精通する人物である。また、今和次郎とともに民家研究にも取り組む。中原が武蔵工業大学短期大学部の進学を決めたのは、石本喜久治より蔵田周忠先生がいることを勧められ、進学を決意したとの記録が残っている。

3-18) : 中原は農協建築研究会 (NKK) の一員として川崎市柿生農協からの依頼を受け、「飯草邸」は、その住宅相談事業で設計したモデル農家住宅第 1 号である。

第4章 農村住宅に関する言説と作品

4.1 第4章の概要

中原は NKK の住宅相談事業にて農村住宅の設計監理に参加した。この事業に建築主として参加した農協の組合員は、「人寄せ」空間の確保とともに本格的な床の間を設える等農村住宅の「格」の高さについて強い要望を持っていた。結果、中原はこれまでの研究された農村住宅研究の成果からは逸脱した農家住宅を実現した。さらに中原の設計手法は、林とは異なり、自らの設計指針を強く主張するというよりも、これまでの農村住宅研究の成果を重視しつつも、建築主の要求を受け入れ設計を行った。結果、第Ⅲ期には和風住宅の設計者としてのイメージが定着したが、この状態に甘んじることなく茶道を学び直し、茶道からみた和風住宅へと設計活動を深化させることとなった。

4.1.1 本章の研究の背景

中原は、昭和 40 年代に農村住宅の設計に取り組んでいるが、この時期の農村住宅は転換期を迎えており、農村計画学の研究者である青木志郎⁴¹⁾ (1923-2017) は、「農村住宅は研究の対象とはもはやなり得ず、集落や行政単位としての市町村レベルの計画研究を行うことがより重要であるというような風潮が生じてきた。」⁴²⁾ と述べている。また、農村住宅研究としての西山卯三 (1911-1994) の位置づけを行った森本信明 (1947-) は、昭和 35 年から 40 年代前半の農山漁村の変化について、「戦後から昭和 30 年代前半の研究展開の前提条件自体が劇的に「崩壊」していく過程でもあった。」⁴³⁾ と述べている。

4.1.2 本章の目的と分析方法

本章ではこのような農村住宅の転換期の設計に携わった中原の設計活動及び設計態度について明らかにする。1968 年 9 月に「農村住宅の問題点」⁴⁴⁾ として雑誌に掲載された中原の資料、および NKK として 1967 年に出版した『農村の住まい』より、中原の農村住宅に対する考えを抽出し、そこで設計された実施図面を分析、さらに補足的に NKK の活動や柿生農協の住宅相談事業における設計同人との関係を既存文献及びヒアリング調査を通して考察する。

4.2 農協建築研究会発足

NKK は、農協事務所建設を通して経済活動の支援を行うとともに、保健、厚生、娯楽、教養などの要求を織り込んだ文化の香り高いコミュニティセンターとして、生活様式の近代化を目標とし⁴⁵⁾、1964 年農林中央金庫の組合金融推進部内に設立された。メンバーは会長に大高正人 (1923-2010、大高建築設計事務所)、副会長に大高正人と東京大学建築学科同期の山名元 (1923-没年不詳、農林中央金庫監理役)、建築家メンバーとして、岡田恭平 (1925-没年不詳、新日本建築設計事務所)、山田昭 (生没年不詳、円建築設計事務所)、鬼頭梓 (1926-

2008、鬼頭梓建築設計事務所)、及び設計同人の林、山田、そして中原であった⁴⁶⁾。なお、岡田恭平、鬼頭梓、山田昭とは原則完全に分かれて業務を分担していた(図4-6)。

NKKは全国のモデル農協づくりを推進し、その個別相談業務は約180農協にもものぼるが、相談に応じた農協全てをNKKで設計監理するものではなく、各地の建築家に任せた⁴⁷⁾。NKKが直接設計した農協建築は20組合程度である⁴⁸⁾。農村住宅に関しては、『農村の住まい』⁴⁹⁾の出版やスライド『これからの農村住宅』を作成し、農協組合員に示し広報活動を行った⁴¹⁰⁾。

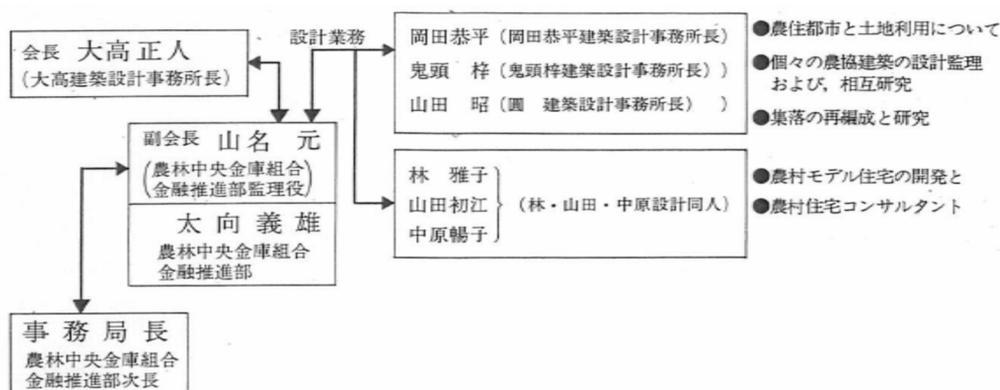


図4-6 NKKの組織と業務分担

4.2.1 農協建築研究会と林・山田・中原設計同人

どのような経緯で、NKKの活動に設計同人が関わったのかは、明らかになっていない。しかし、山田の夫である山田昭が「柿生農協組合事務所」(1966頃)(写真4-1)設計担当をしており、そのつながりで担当するようになったのではないかと推察される。さらに、サンケイハウジングセンターとNKKが共同で企画した「コーポラティブハウス柿生」(1975)の設計監理は、山田昭が代表を務める「圓建築設計事務所(農協建築研究会会員)」が担当しており、その設計協力として設計同人が記されている⁴¹¹⁾。なお、会長である大高正人は、学生時代、池辺や高山英華の研究室で建築を学んでいる。



写真4-1 柿生農協組合事務所(1966年頃)

4.2.2 柿生農協と農協建築研究会

我が国の高度経済成長に伴い、1960年以降大都市郊外において無秩序な宅地化が進行した。同時に土地売却後、金銭管理を怠って悲惨な結果となる農家が散見されるようになる。このような状況に対し、農家の生活の安定を図り、住民が自主的に新しい地域社会を形成することを狙った「農住都市構想」⁴⁻¹²⁾が検討され始めた。

1964年、神奈川県川崎市の柿生農協⁴⁻¹³⁾では組合長の鈴木新之助（生没年不詳）や農林中央金庫組合金融推進部の山名元を中心に組合金融の基本である農協の信用関係の確立を図る一つの方法⁴⁻¹⁴⁾としてNKKが発足する（写真4-2）。

NKKとしての住宅相談事業が始まった1966年から次第に土地利用についての相談件数が多くなり、土地利用相談会が発足した。これらの活動は、その後この地域で展開されるコーポラティブ事業（「コーポラティブハウス柿生」（1975）など）や新百合ヶ丘開発へと発展する契機となった。NKKの解散後、この事業は地域社会計画センター（1974年設立）に引き継がれた。



写真 4-2 NKK 発足時打ち合わせ

4.2.3 農協建築研究会住宅相談事業

中原は、NKKの住宅相談事業を始めるにあたり、都市近郊農村意識実態調査を神奈川県川崎市柿生地区で行っている⁴⁻¹⁵⁾。対象は、農協組合員の従来家屋及び新築家屋の計48戸であり、面接と図面、写真で実施している。調査目的は、「農村における住意識をはっきりと捉えるため、住宅相談の指導及び住宅相談資料を得るため」と書かれている。しかし、残念ながら、詳しいデータ等の掲載はされていない。

NKKが柿生農業組合事務所（設計：山田昭）の建設に関わったのを機に、1966年、同組合事務所に住宅相談コーナーを設け、山名元が企画した住宅相談事業を発足させた。そこでは主に設計同人がNKKとして農家の新築、増改築の設計監理を行った（写真4-3）⁴⁻¹⁾⁴⁻¹⁷⁾。受注方法は、複数の建築家に依頼をして一案に決めるのではなく、初めから設計同人3者のいずれかに依頼をし、設計が進められた。場合によっては、計画案までで、実現しなかったものもあるという⁴⁻¹⁸⁾。後に設立される土地区画整理組合の農家地権者の大部分がこの住宅

相談事業に関わったとされる。調査の結果、中原はこの住宅相談事業において、10 作品以上の住宅を設計していることが明らかになった。

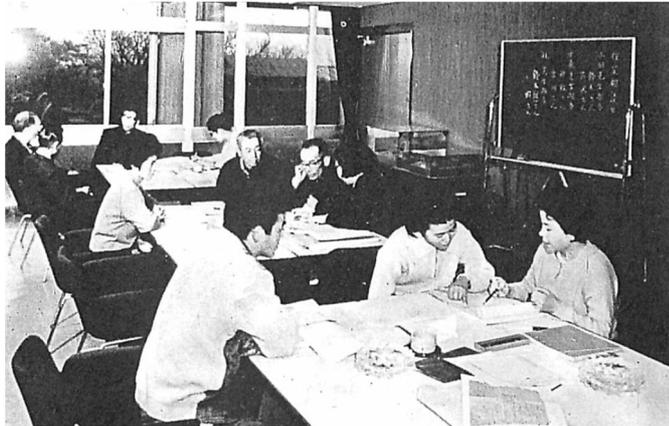


写真 4-3 NKK による住宅相談

4.2.4 農協建築研究会の農村住宅研究

戦後の農村住宅に関する既往研究は、農林省生活改善課と農村建築研究会⁴⁻¹⁹⁾を中心として展開されてきたが、池永衣里・小沢朝江：「戦後の農村住宅改善におけるモデル住宅の特徴とその背景」⁴⁻²⁰⁾において、この経過を1960年以前についてまとめている。その成果にNKKの『農村の住まい』(1967)⁴⁻²¹⁾で示されている内容を加筆しまとめると、旧来の農村住宅改善運動の指針とほぼ同じではあるが、項目としての顕著な違いは、「部屋の独立性」が追加されていることが確認できた(表4-1)。

表 4-1 戦前・戦後の農村住宅改善運動の指針

団体名 設立年	生活改善同盟会	同潤会	農村建築研究会 (農建研)	農協建築研究会 (NKK)
	1930	1940	1953	1967
項目				
家族本位の間取り	○	○	○	○
部屋の独立性			○	○
主婦労働の軽減	○		○	○
保健衛生	○	○		
新しい設備の導入		○	○	○
農作業空間の分離	○	○	○	○
採光・通風		○		○
構造強化	○	○	○	○

さらに、青木志郎が農村住宅の改善を続けてきた成果を『図集・農家住宅設計集』(1971)としてまとめた「住宅設計案集」⁴⁻²²⁾全42作品の平均延べ面積は113.63㎡であるのに対し、NKKの住宅相談事業の対象で実現した中原設計の新築住宅10作品の平均延べ面積は168.64㎡であり、階層的には上層の農家を対象としていることがわかる(表4-2)。

表 4-2 『図集・農家住宅設計集』掲載のモデル住宅及び
中原設計の農家住宅の延べ面積とその平均

『図集・農家住宅設計集』掲載の「住宅設計案集」の延べ面積					
No.	タイトル	延べ面積 (㎡)	No.	タイトル	延べ面積 (㎡)
1	下足で食事・炊事・団らんができる家	65.40	22	「いろり」のある家	115.50
2	和室を多くとった家—A案	65.40	23	ぬれ縁と池のある家	119.00
3	A案を変形した家—B案	66.90	24	家族室が中心の家	120.40
4	方形屋根の家	71.20	25	白壁・通り土間の家	121.40
5	南面の浴室がある家—A案	78.50	26	切妻の大屋根の家	120.00
6	A案を変形し、家族室を和室に—B案	80.20	27	土間のコーナーがある家	121.00
7	広い板の間がある家	80.20	28	コの字型の家	116.30
8	各部屋を南向きに	80.60	29	ラセン階段のある家	168.70
9	通り土間がある家—A案	80.20	30	床暖房ができる家	132.20
10	A案を変形し4つの個室に—B案	82.50	31	天井に明かりとりがある家	132.10
11	セントラルヒーティングの家	83.40	32	居間を中心においたプラン	138.70
12	個室以外を土間で統一する	26.00	33	親子一世帯を2階に	144.80
13	ガリ戸のある家	87.70	34	老人室を離れに	107.50
14	中廊下で各室をつなぐ	92.40	35	子ども室に工夫を	148.10
15	ピロティ形式の家	97.30	36	吹抜けのある家	142.70
16	レンガ床のある家	98.30	37	玄関ホールのある家	155.00
17	瓦葺きの大屋根の家	99.00	38	勝手口にボイラーを設ける	156.70
18	外便所のある家	99.00	39	中庭をかこんだ家	169.10
19	壁式コンクリートの家	102.30	40	別棟の老人室がある家	138.80
20	屋根裏を物置に	105.50	41	玄関にゆとりを	201.50
21	家具の配置をたのしむ	115.70	42	老人室を洋間に	156.00
平均					113.63
中原設計の農村住宅の延べ面積					
No.	タイトル	延べ面積 (㎡)	No.	タイトル	延べ面積 (㎡)
1	飯草邸	171.72	6	立川邸2	189.37
2	坂本邸(雁行した家)	109.44	7	熊沢邸(柿生の家)	292.74
3	立川邸1(若夫婦の家)	92.88	8	横山邸	216.27
4	仲林邸(鉄筋コンクリートの家)	168.10	9	鈴木邸 1	71.28
5	横田邸(大屋根の家)	158.36	10	志村邸	216.27
平均					168.64

4.3 中原暢子設計の農村住宅

中原は、母校の武蔵工業大学（現東京都市大学）短期大学部において、農村建築研究で著名な蔵田周忠（1895-1966）や笹原貞彦（1914-2005）に直接指導を受けた。笹原貞彦の設計事務所で実践的設計教育を受けた時期（1950年夏から短期大学部卒業の1953年3月まで）

が『図集 農村の住まい 第1集』(発行1952.2)に掲載の笹原貞彦による「高床づくりの農家」⁴⁻²³⁾の設計時期と重なると思われる。また、中原が所属していた「ポドコ」では、1959年に『農家の台所改善』⁴⁻²⁴⁾の編集を手掛けており、工業化を志向する池辺研究室に所属していた中原ではあったが、農村住宅の設計も身近なものであり、基礎的知識は十分あったと考えられる。

NKKでは、住まい方の封建的な住意識からの脱却を掲げ⁴⁻²⁵⁾、中原は柿生農協の農家の住意識調査を実施、その中で接客空間の比率が、新築の場合でも増えていることを指摘していた⁴⁻²⁶⁾。住宅相談においては「人寄せ」のためだけに床の間、広縁付き、続き間に対する要望が強く⁴⁻²⁷⁾、NKKや中原の設計意図とする方向には進まない現状を雑誌にて発表している。しかし、実現した作品からは、自身の設計方針よりも施主の意向を優先させたことが伺え、このことも住宅相談事業で10作品もの新築農村住宅を設計する結果となったと考えられる。

4.3.1 中原暢子の農村住宅に関する言説

中原は、農村住宅に関するいくつかの言説を残している。一つは、雑誌『室内』(1968.9、工作社)に掲載された「農村住宅の問題点」である。この言説は単著であり、1966年からNKKとして参加している川崎市柿生地区における農村住宅設計での取り組みを通して感じた言説を記している。

もう一つの農村住宅に関する言説は、NKKが編集を行った『農村の住まい』(1967.9、農林中央金庫)である。執筆分担の記載はないものの、中原の設計の農村住宅「飯草邸」の図面とともにその解説が掲載された頁があり、これらを言説として取り扱う。

なお、師池辺は、論説「『日本のデザイン』といかにとりくむか」の中で、日本の民家などに伝統を見出している⁴⁻²⁸⁾。

4.3.1.1 雑誌『室内』掲載の「農村住宅の問題点」

中原が雑誌『室内』に掲載した「農村住宅の問題点」は、NKKの住宅相談事業に取り組んでいる最中に掲載されたものである。住みよい間取りや農家の特殊な点に触れながら、理想的な農村住宅について明らかにしている(表4-3)。しかし、実際の設計では、理想とする農村住宅を実現させたのではなく、現実的に施主の意向を取り入れた計画がなされている。

表 4-3 「農村住宅の問題点」の章立て

No.	大見出し	中見出し
1	生活が変われば住いも変る	
2	住みよい間取り	①寝るところと食事の場所を分けよう
		②個室を確保しよう
		③家事労働が快適にできるようにしよう
		④便所に行く廊下を確保しよう
3	農家の特殊な点	①接客について
		②農作業と住居とのつなぎの部分
4	必要以上の材料は不要	
5	ちゃんとした設計が必要	
6	構造計画	
7	仕上材	
8	設備計画	
9	事前の打合せを十分に	

4.3.1.2 書籍『農村の住まい』掲載の「住まいの要点」

書籍『農村の住まい』は、「第3章 住まいの要点」が中心の構成となっている（表4-4）。そこには、中原が設計したモデル住宅第1号である「飯草邸」と記載されていた写真が3点掲載されている。「飯草邸」の図面（図4-2～図4-5、写真4-4～写真4-5）との照合の結果、その他写真やスケッチも合わせると、合計12点の掲載が確認でき、この章は、「飯草邸」を中心に書かれていることがわかる。

表 4-4 『農村の住まい』の章立て

章	大見出し	中見出し	中原設計農村住宅の掲載図・写真と掲載頁
	まえがき		
	このほんの見かた使いかた		
1	暮らしと住まい	変わりゆく農村の姿をつかもう	
2	新しい住まい誕生記	1. 周囲の事情	
		2. 家族それぞれの望み	
		3. 住まいの役割を考えなおす	
		4. 専門家のチエ	
		5. 設計から完成までのメモ	
3	住まいの要点	1. 敷地にも間取りがある	望ましい配置（飯草邸敷地鳥瞰図） p.43
		2. 住まいのなかの生活	茶の間（飯草邸和室6畳） p.45
			食事と調理（飯草邸台所） p.45
			子供部屋（飯草邸女子子供室） p.47
			出入り（飯草邸入口） p.49
			入浴／飯草邸（飯草邸浴室） p.51
		3. 住まいの骨組み	木造／飯草邸（飯草邸外観） p.53
		4. 材料のこと	火・水を使うところ／飯草邸（飯草邸台所） p.54
			土で汚れやすい床・1／飯草邸（飯草邸台所） p.57
		5. 住みやすい寸法	
6. 設備というもの	4廊下（飯草邸縁側） p.65		
7. 予算のたてかた			
8. 契約は身のため			
9. 工事のこと	工事工程表（飯草邸） pp.76-77		
10. 建築家とは			
4	農村住宅の今後を考える	1. 農村と都市	
		2. 農村の住宅と都市の住宅	
5	便覧	住宅資金のとりくみかた	
		設計監理委託契約の例	
		高橋邸新築工事	
		建築家の業務及び報酬規程／日本建築家協会規定	
		工事請負契約書	
		工事請負契約約款／四会連合協定	
		付・農村住宅の将来像—設計競技による提案	
		農協建築研究会紹介／奥付	

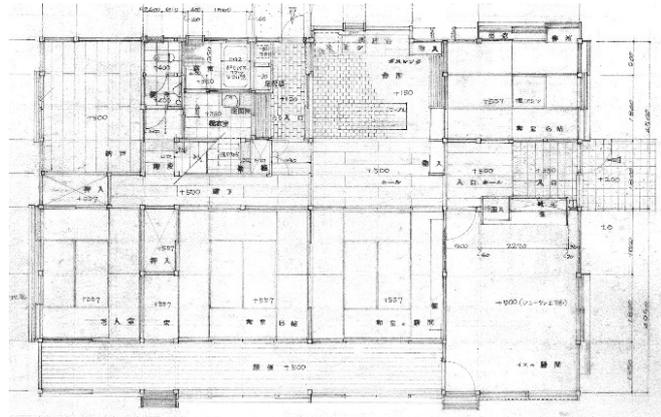


図 4-2 「飯草邸」1階平面図

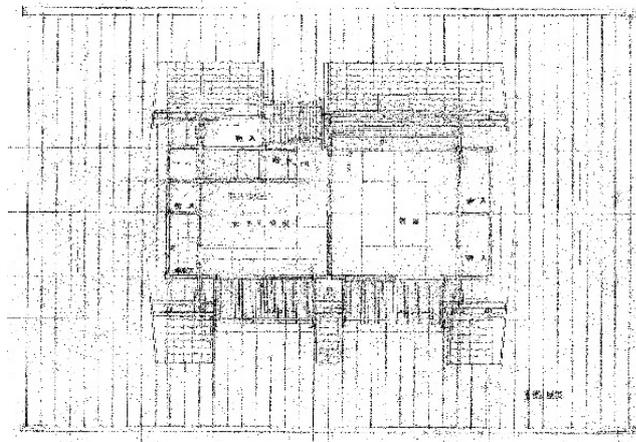


図 4-3 「飯草邸」2階平面図

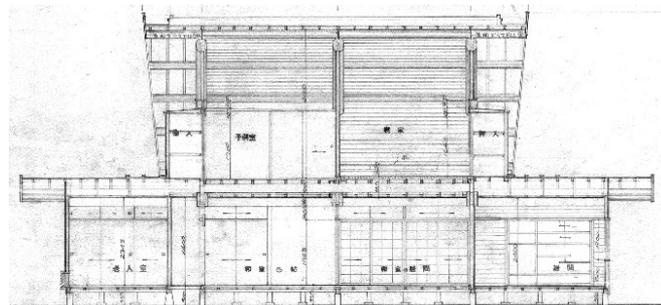


図 4-4 「飯草邸」断面図



図 4-5 「飯草邸」外観パース

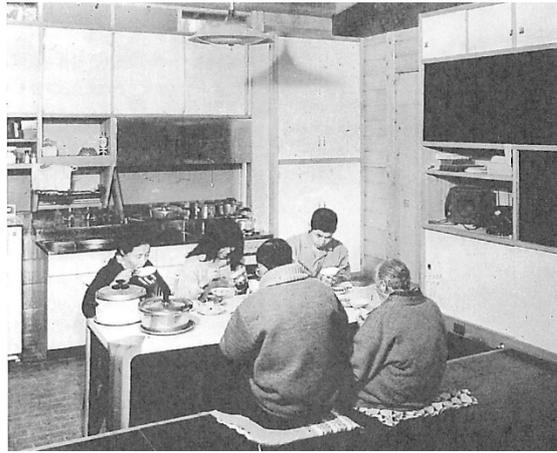


写真 4-4 「飯草邸」台所



写真 4-5 「飯草邸」和室 6 畳

一方、池辺の著した『すまい』（1954）の章立ては、以下のようになっており（表 4-5）、『農村の住まい』の章立て（表 4-4）と比較すると、着彩部分に執筆内容の共通点がみられた。

表 4-5 池辺陽著『すまい』の構成

章	大見出し	中見出し	小見出し
1	どうすれば住居はよくなるか		
2	住居のはたらき	生活の住居	住居の組み立て
			生活の動き
			タタミとイス
			社会的な生活
			個人の生活
			家事作業
			風呂・便所・洗面所
			子供
			物のしまい場所
			家具
		住居空間の役割	日当たりとその調節
			明るさ
			照明
			室内気候と暖房
			換気と通風
			外回りの役割
			屋根
			床
		住居の骨と血管	構造と材料
地震と風			
構造と間仕切り			
配線と配管			
住居の形	現代住居への疑問		
3	住居をつくる	その前提	
		一戸の住居の問題	面積を減らす
			使い方の変化
			生活の一体化と分離
			組織と動線による節約
			寸法の検討
			単純化
			地の利用
		社会化	
		結び	

4.3.1.3 農村住宅に関する言説

以上の言説より、中原は農村住宅に対する理想を NKK として掲げていたにも関わらず、施主とのやり取りの中で、全ての住宅に「続き間座敷」や「単独座敷」を設けることとなった。このことは様式選択を行わない「機能主義」の原則から逸脱しているが、中原は不本意ながら「続き間座敷」の様式選択を行ったと考える。

4.3.2 中原暢子の農村住宅に関する言説と作品の比較

一方、中原が NKK として設計した新築農村住宅 10 作品の特徴をまとめてみると（表 4-6）、以下が明らかになった。

表 4-6 中原が農協建築研究会として設計した柿生農協における新築農村住宅一覧

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
作品・建築名	飯草邸	坂本邸 (雁行した家)	立川邸1 (若夫婦の家)	仲林邸 (鉄筋コンクリートの家)	横田邸 (大屋根の家)	立川邸2	熊沢邸 (柿生の家)	横山邸	鈴木邸 1	志村邸		
現存 / 取壊	現存	現存	現存	取壊	現存	現存	取壊	現存	取壊	現存		
上段：設計年月	1966. 3	1966	1966. 12	1967	不明	1970. 3	1970. 4	1971. 1	1971. 4	1971頃		
下段：竣工年月	1966. 7	不明	不明	不明	1968. 4以前	不明	不明	不明	不明	1974		
階 数	2階建	平屋建	平屋建	2階建	2階建	平屋建	3階建	2階建	平屋建	2階建		
構 造	W	W	W	RC (ラーメン) +W	W	W	1-3階：RC (ラーメン)	1階：RC (ラーメン)	W	W		
家族人数	不明	不明	2人 (夫婦)	不明	8人 (夫婦、祖母、子5)	不明	不明	不明	不明	不明		
食寝分離	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
就寝分離 (臥寝分離)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
個室の確保	他の室を通らずに個室から便所に行く通路の確保	中廊下	片廊下	中廊下	中廊下	中廊下	居間食堂	中廊下	中廊下	中廊下		
続き間	室名称	和室8帖	和室の居間 (8帖) 和室8帖 和室6帖	和室2 (6帖) 和室1 (6帖)	客室 (8帖) 寝室 (8帖)	寝室 (8帖) 老人室 (6帖)	寝室1 (8帖) 寝室2 (8帖)	和室① (10帖) 和室② (8帖)	和室 (8帖) 和室 (8帖)	— —	客室 (8帖) 寝室 (8帖)	
	設え	床の間	床の間 仏壇	床の間 榻炬礎	床の間 —	床の間 仏壇	床の間・仏壇 床の間	床の間・仏壇	床の間・仏壇	— —	床の間・飾り棚	
	座敷の種類	続き間座敷	続き間座敷	続き間座敷	続き間座敷	続き間	単独座敷	続き間座敷	続き間座敷	単独座敷	続き間座敷	
	応接間	—	—	—	下足	上足	—	—	下足	—	上足	
近所の人との話し合いの場所	縁側	縁側・濡れ縁	縁側	縁側・濡れ縁	縁側・濡れ縁	縁側・テラス	バルコニー	濡れ縁	テラス	縁側・濡れ縁		
農作業と家事空間とのつなぐ部分	昼食の場	台所 (土間)	濡れ縁	テラス	食堂 (土間)	食堂 (土間)	台所食堂 (土間)	食堂 (土間)	食堂 (土間)	—	食堂 (土間)	
	下流し (足洗場)	屋内	—	—	屋外	—	—	—	屋外	—	—	
アプローチ	土間⇔脱衣室	○	—	—	—	○	—	—	—	—	○	
	外部⇔浴室	—	○	○	○	—	—	—	○	—	—	
	外部⇔洗面所	—	—	—	—	—	○	○	—	—	—	
家事労働	台所	台所の配置	I型	II型	I型	I型	I型	L型	II型	L型	I型	I型
		流し	サンウェーブSAS	シルバークウィン	シルバークウィン	○	(支給)	(支給)	ダブルシンク	(支給)	○	○
		調理台	○	シルバークウィン	シルバークウィン	不明	(支給)	(支給)	○	(支給)	○	○
		ガスレンジ	サンウェーブSR-3型	シルバークウィン	シルバークウィン	不明	(支給)	(支給)	○	(支給)	○	○
		勝手口	○	○	○	○	—	○	○	○	○	○
	浴室	給湯	瞬間湯沸器	瞬間湯沸器	瞬間湯沸器	瞬間湯沸器	瞬間湯沸器	瞬間湯沸器	不明	瞬間湯沸器	不明	不明
		風呂釜焚き	プロパン 焚器環外釜	プロパン	瞬間湯沸器	プロパン	風呂釜 (支給)	バランス釜	不明	石油風呂釜	バランス釜	不明
		浴室排気のための煙突	○	○	—	○	○	—	—	—	—	—
		浴槽	ポリバス	東洋陶器 P1220S	東陶 T-1534	木製 (既存)	ホーロー	鍍物ホーロー	ホーロー	ホーロー	ホーロー	鍍鉄
		断熱	屋根・2階天井 断熱材	—	—	—	屋根	天井	天井	屋根	天井	天井
主たる屋根仕上げ	瓦	瓦	瓦	RC	カラー鉄板	瓦	RC	瓦	カラー鉄板	瓦		
壁断熱材	—	○	—	○	一部	○	○	○	○	○		
最下階床断熱材	—	一部	—	—	—	—	一部	○	○	一部		
サッシ仕上材料	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ	アルミ	スプルース	スプルース	スプルース	木製	不明	アルミ		
構造計画	柱	径	120角	90角	120角	—	通し柱120角	120角	—	不明	不明	120角
		見えがかり	一等上小節	無節	無節	一等上小節	一等小節	上小節	不明	上小節・並一等	無節・上小節	無節・上小節
	合せ梁	設置場所	小屋裏	—	小屋組	—	室内表出	室内表出	—	—	—	2階床組※
便器の様式	和洋式	和式	和式	和式	和式 (1階)	和式	和式 (一般用)	洋式 (便所1)	和式 (1階)	洋式	和式 (1階)	
	大小兼用	×	×	×	×	×	×	○ (便所1)	×	○	×	
設備計画	汚物処理	汲み取り槽	汲み取り槽	低床式し尿浄化槽 (安達式浄化槽)	西島式浄化槽	汲み取り槽	ネオ浄化槽	低床式し尿浄化槽	浄化槽 (ぼっ気式)	汲み取り槽	浄化槽 (ぼっ気式)	
	ガス	プロパン	プロパン	プロパン	プロパン	プロパン	プロパン	プロパン	不明	不明	プロパン	

注：「—」は、該当するものがないことを示す。

「続き間」は、客用以外に供する2つの和室が機等で仕切られたものをいう。

「単独座敷」は、床の間のある客用に供する和室をいう。

「続き間座敷」は、座敷と客用以外に供する続き間をいう。

※合せ梁の梁せいは外部に表出しているが、その小口面は表出していない。

① 中廊下型による個室の独立性を確保

それぞれの個室から他の室を通らずに便所などへ行き来できるよう、主に中廊下形式を採用することで解決させている（図4-6）。10作品中8作品にそのような傾向がみられた。通風についての意識も高く中廊下型である「横田邸（大屋根の家）」では、「通風も、このような間取りでは難しい」⁴⁻²⁹⁾とし、その対応として欄間や高窓を採用している（図4-7）。

② 接客としての続き間

「人寄せ」の空間として続き間、床の間の構成が顕著であった。既に述べたように住宅相談事業に参加した農民が上層であり、「人寄せ」の重要性と、農家の格に対する意識が強く、従来の農村モデル住宅の基準では納得が得られなかったと考えられる。このような続き間の場合、用途としては床の間のある和室を接客空間とし、隣接する和室を居間又は寝室としているもの（図4-8）が半数を占める。さらに、プライバシー確保にやや難があるが、続き間の2室を共に寝室としているものもみられる（図4-9）。また、それに付随する縁側などは近所の人との話し合いの場所が考慮されている。

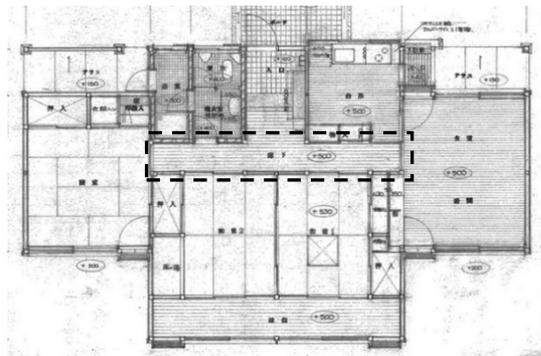


図4-6 「立川邸1 (若夫婦の家)」中廊下型

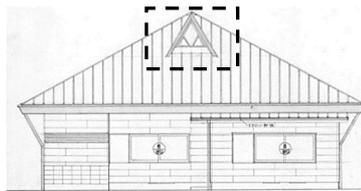


図4-7 「横田邸 (大屋根の家)」北立面図2階高窓

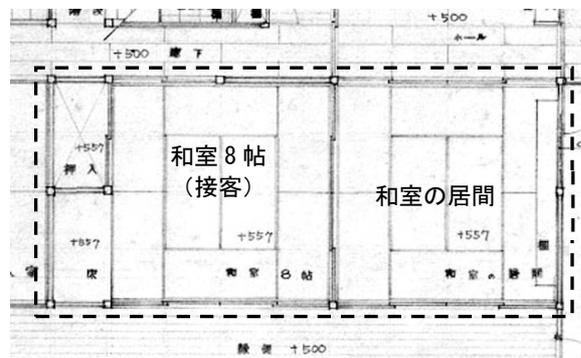


図4-8 「飯草邸」続き間（和室8帖（接客）-和室の居間）

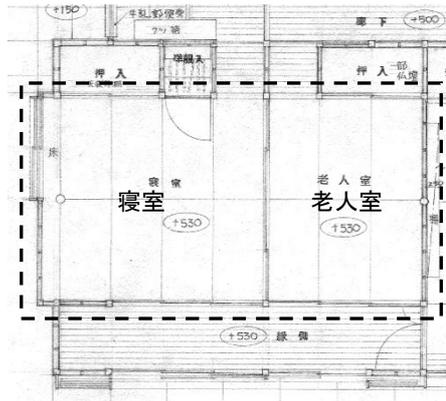


図 4-9 「横田邸（大屋根の家）」続き間（寝室-老人室）

③ 農作業と家事空間とをつなぐ部分

農作業と家事空間をつなぐ部分については、主に土間で処理されることが多い。続き間座敷への強い要望に関して対応するとともに、実際の農作業に対応した空間がきめ細かく確保されている。台所の改善については、流し、調理台、ガスレンジは、I型やII型、L型に配され、システムキッチン的なものとなっている。しかし、基本は下足で食事のできる土間台所食堂であり、時間的余裕があれば寛げる茶の間を隣接させ配置している。また、台所をDKといった形で上足にした場合、下足で食事のできる土間食堂や半外部空間に食事や休憩ができる場所を設け、あくまでも農作業を中心とした設計に変化していった（図 4-10～図 4-12）。

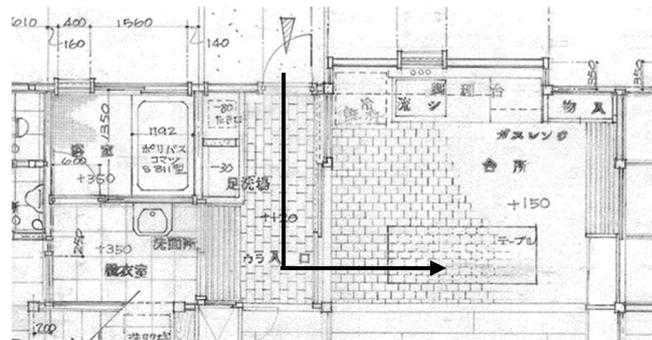


図 4-10 「飯草邸」下足のまま調理・食事のできる土間空間

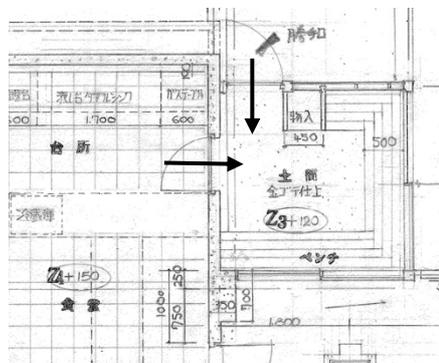


図 4-11 「熊沢邸」下足のまま食事のできる土間空間

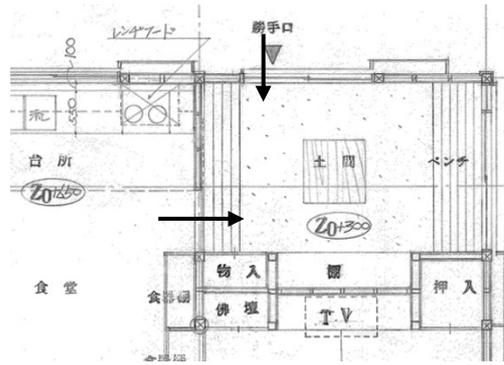


図 4-12 「志村邸」下足のまま食事のできる土間空間

浴室の改善については、当初は浴室に隣接する室内にプロパンを置いていたが、後に浴槽に付属するバランス釜がみられるようになる。モデル住宅である「飯草邸」では、土間台所は土間勝手に隣接し、土間勝手には足洗場や風呂の焚口（プロパン置き場）を設け、土間勝手から直接脱衣室にアプローチできるなど、農作業に対応したきめ細かい配慮がなされている（図 4-13）。さらに、汚れた農作業着での使用を考慮し、土間から直接脱衣室にアプローチできるもの（図 4-14）、外部から直接浴室や脱衣室へアプローチできるもの（図 4-15）が考えられている。中原設計の農村住宅は、住宅設備の部品化の真っただ中であり、台所の流し、調理台、ガスレンジ、浴槽、便器、小型洗面器などにその影響がみられる。

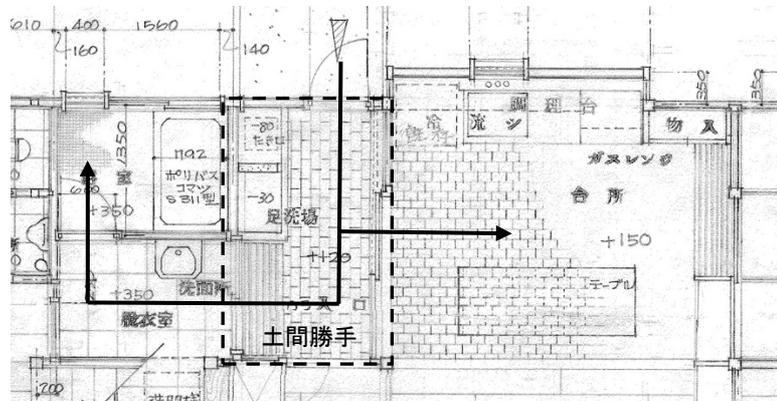


図 4-13 「飯草邸」食事のできる土間台所と足洗場から浴室のアプローチ



図 4-14 「横田邸（大屋根の家）」土間から洗面所に直結する動線

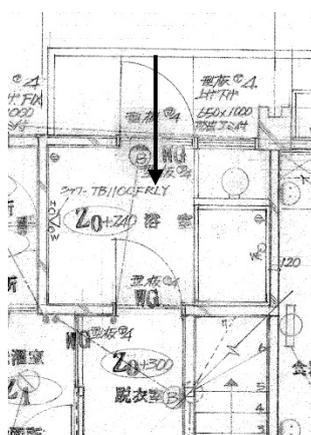


図 4-15 「横山邸」外部から直節アプローチ可能な浴室

④ 断熱

1975 年以降住宅金融公庫仕様書に断熱材の仕様の促進を図った。しかし、それより前に NKK では屋根下地に断熱材を入れることを推奨⁴⁻³⁰⁾していた。中原も断熱材を屋根・壁・床のいずれにも入れるべきだと、その重要性を強調していた。しかし、実際は瓦屋根について断熱効果がある⁴⁻³¹⁾とし、長尺鉄板の屋根の場合のみ天井に断熱材を敷いている。壁についてはほぼ断熱材を使用し、「飯草邸」の土間台所には、寒さ対策のため床に木レンガを敷きつめる工夫もされている。開口部からの熱損失については 1961 年に住宅用アルミサッシの販売が開始され、ある程度対応が可能となった。中原はアルミサッシの利用を推奨していたが、自身の農村住宅設計においては、その利用は 2 作品のみであった。

⑤ 構造計画

中原は、「広い敷地に家を建てるなら、住み心地のよい木造の方がよい。防火上の問題もない、日当たりの事も問題ないとすれば、農家に木造が多いのはむしろ当たり前である」⁴⁻³²⁾と述べており、農村住宅の構造は木造を主として考えていることがわかる。しかし、「仲林邸（鉄筋コンクリートの家）」は、北側に山が迫る敷地であるため RC 造ラーメン構造が主体で採用されている。木造は可変が容易であることも採用のひとつの理由であると推察できるが、地

盤などの理由でやむを得ず、RC造をとった場合でもフレキシビリティの高く可変性のあるラーメン構造を採用している。RC造ラーメン構造である「熊沢邸（柿生の家）」についても同様である（図4-16）。また、「横山邸」では、最下層をRC造、上層を木造とした混構造もみられる。

柱径は、耐久性を重んじ比較的断面寸法の太い材料を使うことを推奨し、120角を採用しているものが多い。木材の等級について、中原は見栄えよりも構造上の強さを重視していたが、一般的に柱の見えがかりに使用する特選上小節ではなく、最も良質といわれる無節も一定数みられる。

合せ梁は、中原が設計同人設立当初から多用する構造であり、農村住宅でも5作品の採用が確認できた（図4-17、図4-18）。スパンを飛ばすため採用したと思われるが、外部に小口が表出して腐朽しないように、小屋組内や室内に表出する形で使用されるようになる。

⑥ 便器・便所の変化

便器は和式から洋式に変化していく過程が見受けられる。1階においては小便器と大便器を分け和式として設置されているが、後に洋式が使用される。2階に便所がある場合、和式で大小兼用とするものから、洋式へと変化していく。「立川邸2」は、続き間を通らなければ使用することができない場所に続き間専用の洋式便所が計画されている（図4-19）。

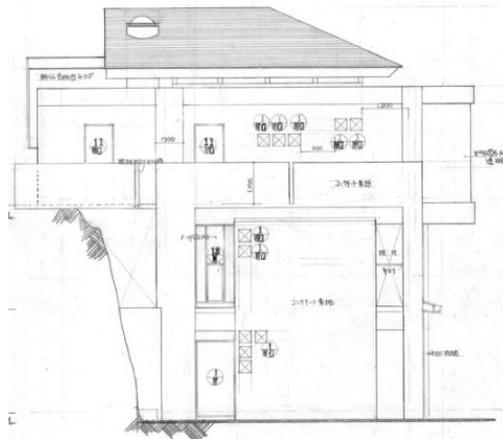


図4-16 「熊沢邸（柿生の家）」西立面図

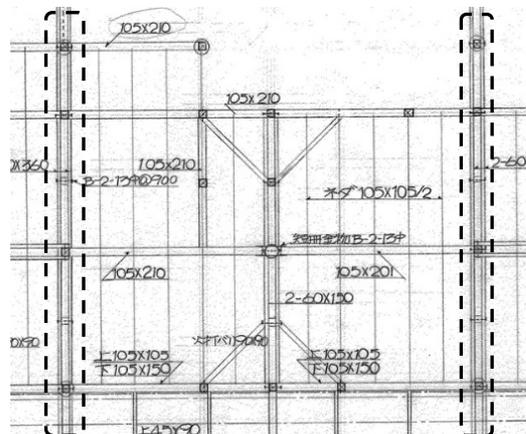


図4-17 「横田邸（大屋根の家）」合せ梁

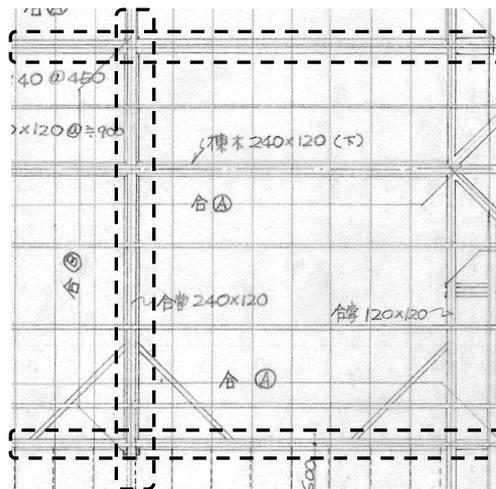


図4-18 「立川邸2」合せ梁

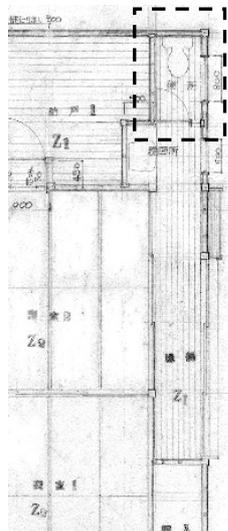


図4-19 「立川邸2」続き間専用の洋式便所

中原は、自身の作品が掲載されている雑誌の作品解説の中で、次のように述べている。

「…（中略）…建主とたたかい建主の考え方をかえてまでも新しい住生活の解決に努力しているすぐれた建築家もいる。しかし私はそんなにがんばるつもりはない。建主の考え方に妥協しようとは思わないが、私自身が建主の考えた方に共鳴でき、そして非常にスムーズな協力体制ができた時にのみ住宅はできあがるものだと思っている。われわれ設計者は、家をつくることはできるが、それを住みこなすことは建主であり、よりよい住宅にしてくれるのも建主である。将来の住まい方をすべて否定するのではなくて、それを基礎にしたよりよい生活ができるための空間とその広がり、そしてそれをあまり無理せず住みこなせる新しい生活の器をつくろうと努力している。…（中略）…」⁴⁻³³⁾

このことから、あくまでも建築主のため、建築主とともに住宅を作り上げていこうとする設計姿勢を感じることができる。

4.3.3 林雅子と山田初江の農村住宅

本章の最後に中原と組織を組んでいた林と山田は、農村住宅や NKK の仕事について、どのような姿勢で取り組んでいたのか、その二人の作品や言説を通して、中原の設計思想を補足したい。

1) 林雅子

林は、清家清（1918-2005）研究室時代から農村住宅の設計を行っており、北陸地方の農村住宅改造案が 1959 年に雑誌掲載されている⁴⁻³⁴。土間・食卓・炊事場を土間として再編、和室 20 畳を「居間」と「茶の間」に襖で分離し、茶の間と土間の食卓とを繋いでいる。附属舎と住宅の間に半外部の仕事場を設けている（図 4-20）。

また 1967 年に NKK が発行した『農村の住まい』には、標準設計として林設計の「高橋邸」（1967 茨城県）（図 4-21）が掲載されている。中心に入口を兼ね、朝昼の食事もできる「土間台所」が設けられ、背後の浴室・便所を土間で連続させている。これによって老人室、子供室と「人寄せ」に対応できる居間、寢室の続き間部分を大きく分離した設計で、土間台所を入口とした農村住宅の原則に忠実で明快なプランである。

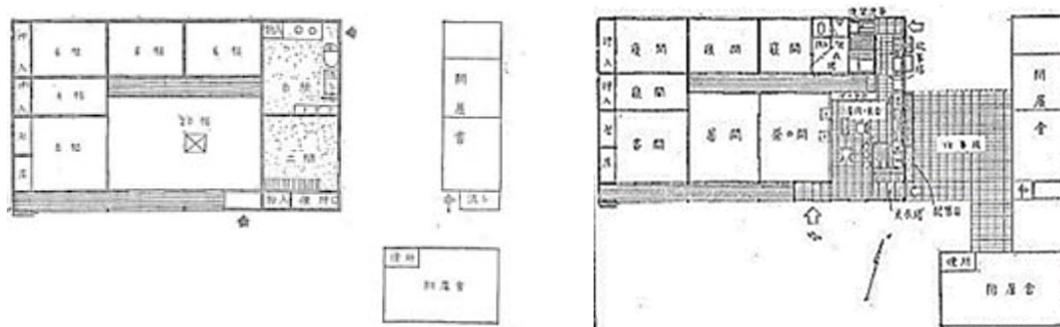


図 4-20 林雅子設計の北陸地方における現状と改造案平面図 左：改造前 右：改造後

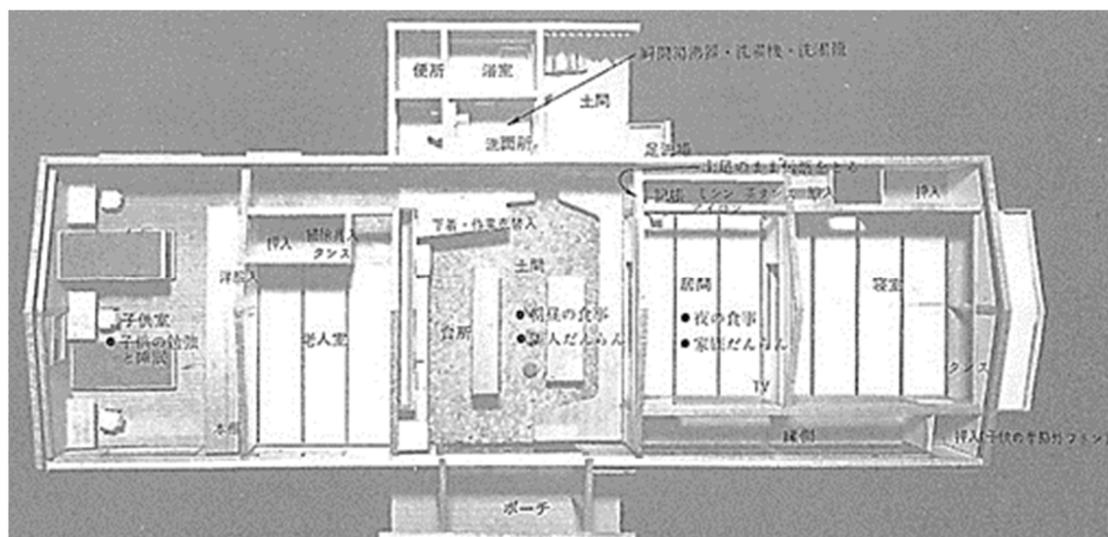


図 4-21 林雅子設計の『農村の住まい』標準設計「高橋邸」

また、林は柿生農協での住宅相談事業での作品の一つとして、「入母屋の家」(1967) (図4-22、図4-23) を発表している。この住宅は、四隅に個室を配置し、中央に食堂と和室の居間を設けている。農村住宅に根強く求められる続き間座敷をとらず、「人寄せ」を行う場合は、居間食堂を用いる。土間台所で果たされた機能の一部は、ベランダや食堂・居間との間の縁側の空間に見出す。屋根は伝統的な入母屋屋根を採用しているが、テラス部分に勾配の緩やかな差し掛け屋根を用い、居間・食堂部に光を取り入れるハイサイドライトを確保している。極めて建築的な提案であり、林らしい設計といえる。

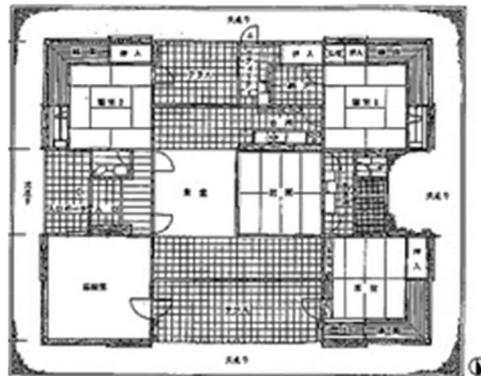


図4-22 林雅子設計の「入母屋の家」1階平面図



図4-23 林雅子設計の「入母屋の家」断面図

これと同時期に林が住宅相談事業で実現した「鈴木邸」(1967) (図4-24、図4-25) は、本床の続き間座敷を南北に配置し、南には1間の広縁が確保されている。プラン構成はL/DKのLに接して茶の間を続けている。しかし、この住宅は林の作品集⁴⁻³⁵⁾ 巻末にある「全197作品リスト」には含まれておらず、編集を担当した林昌二(1928-2011)が意図的に除いたもので、筆者は林がこの作品を自らの作品として認めていなかったと推察する。元所員の白井克典によれば、この他にも20作品程度が作品集に掲載されなかった⁴⁻³⁶⁾ という。この作品は筆者が林雅子資料室を訪問した際、偶然発見したものであり、その図面ラベルには「林雅子」と書かれていた。

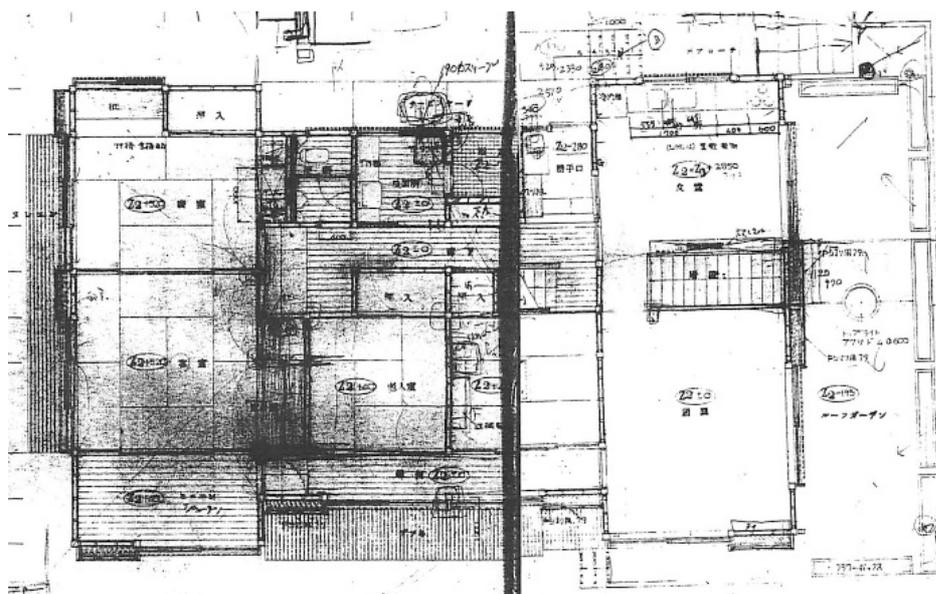


図 4-24 林雅子設計の「鈴木邸」1階平面図

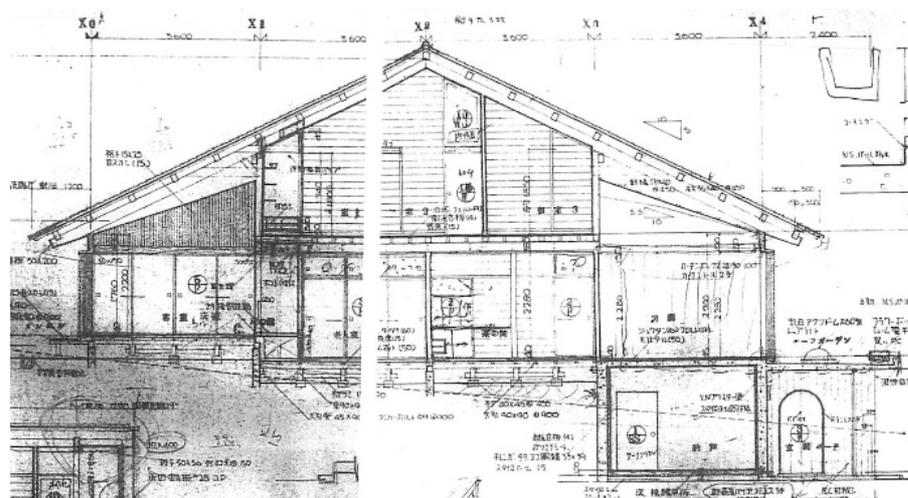


図 4-25 林雅子設計の「鈴木邸」断面図

『現代日本建築家全集』を編集した建築評論家の栗田勇（1929-）との対談で林は、依頼主の意見と自身の設計方針が異なるときの誘導方法について、「わたくし最初のラフ・スケッチにはいちばん時間をかけます。それまでにやった仕事の中から、参考になりそうな例をお出して、それについての意見をお聞きして、大きな方向をつかみます。それでどうしても相手が求めているものが見当違いとなれば、そこで、じゃ、さよならということになりますね。」⁴³⁷⁾と述べており、この住宅相談事業において、『農村の住まい』の標準モデルとして「高橋邸」(図 4-21)を設計していることから、農村住宅の現状について深い理解を有しながらも、自身の作品については自らの設計方法に基づいて厳格に追及していたことが読み取れる。結果、この住宅相談事業で実現した林の作品は 2 作品と少なく、自らの作品として認めているのは「入母屋の家」の 1 作品のみである。

2) 山田初江

山田が設計した農村住宅として「サービスヤードのある家」⁴⁻³⁸⁾、「L字型の家」⁴⁻³⁹⁾、「土間のある家」⁴⁻⁴⁰⁾等が雑誌に掲載されているが、柿生農協での NKK で設計したと確認できたのは「土間のある家」のみである。

「サービスヤードのある家」(図 4-26) は、半外部のサービスヤードにテーブルが置かれ、昼食が下足のまま可能な計画になっている。「L字型の家」(図 4-27) には、農作業に対する直接的配慮はないが、いずれも「人寄せ」に対して続き間を寝室、茶の間という形で確保している。各住戸の状況に合わせて農家の要望を入れた平面構成をしている。「土間のある家」

(図 4-28) は、玄関から直接アプローチできる食事のできる土間台所があり、さらに勝手土間から直接浴室につながることで、農作業時の家事動線に配慮した計画となっているが、茶の間と土間台所との直接の繋がりはない。家族それぞれの農家の生活スタイルに対応したきめ細かな設計だと考える。

山田は、柿生地区に住宅の他 NKK として「柿生保育園」(1966) (写真 4-6)、「百合ヶ丘ファミリーテニスクラブ」(1975) 等、非住宅系の設計をしている。設計同人を設立する以前、梓設計及び井上一典建築設計事務所に勤務していたため、非住宅系の施設設計に意欲を持っていたと推察される。

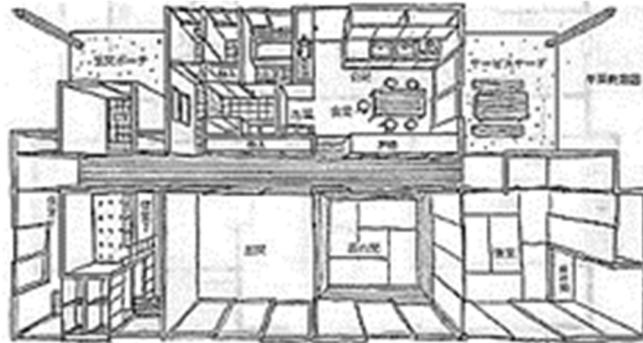


図 4-26 山田初江設計の「サービスヤードのある家」平面透視図

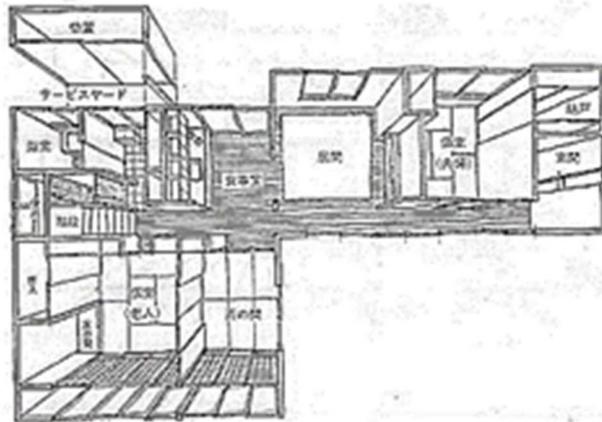


図 4-27 山田初江設計の「L字型の家」平面透視図

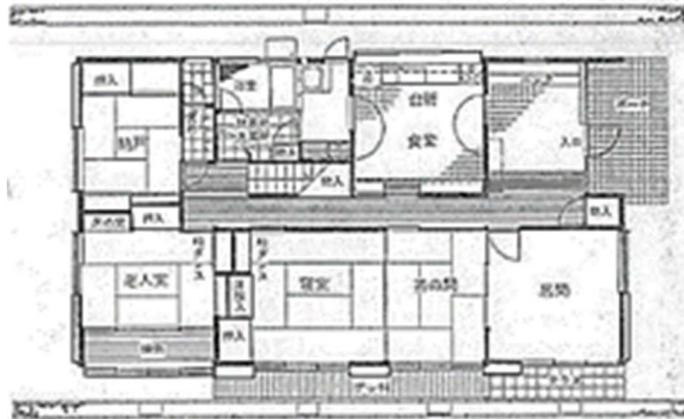


図 4-28 山田初江設計の「土間のある家」1階平面図



写真 4-6 山田初江設計の「柿生保育園」外観

山田はその後、農村住宅で課題となった座敷や応接間のあり方を「フォーマルリビング」と「ファミリーリビング」という生活に密着した形で近代的な接客空間を実現した自邸「材木座の家」(1979)を発表する。鈴木成文(1927-2010)は、これを「にぎやかさと静けさという2つの空間を用意することで、生活の多面性に対応することを試みているのである」と評価している⁴⁴⁾。住まい方を詳細に分析し新しい接客空間を生み出す山田の設計態度が確認できる。

4.4 第4章のまとめ

農村計画・農協建築・農家の近代化を目指していた NKK は、柿生農協の住宅相談事業を設計同人が主となって担当していた。そこで中原は少なくとも 10 作品もの農村住宅設計をしている。

その特徴は、住宅の最低限の機能と考えられる食寝分離、就寝分離、各部屋の独立性を満足させつつ、老人室と夫婦寝室を和室の続き間とすることによって、続き間として「人寄せ」の時に対応できることを最優先した間取りとなっている。家督相続制度の廃止等の民法改正や寄生地主制を非とする農地解放で農村に構造的変化をもたらしたとはいえ、依然として残る「人寄せ」のための空間として「続き間」とその農家の格を示すため、本格的な「座敷飾り」が求められ、全ての住宅に「続き間座敷」や「単独座敷」を設ける結果となった。家族本

位の間取りにするべきとする考えとは異なるが、建築主の譲れない要望を汲み取り、続き間座敷を備えた農村住宅を展開した。また、完全に分離できない住居と農作業の関係を家事労働の合理化とともに農作業者の使い勝手を考えて調整しており、農作業と住居との調整をきめ細かく行っている。

NKKの住宅相談事業において、自らの設計指針を強く主張するというよりも、これまでの農村住宅研究の成果を重視しつつも、建築主の要求を受け入れ設計を行ったという設計姿勢が明らかになった。

参考文献リスト

- 文献 4-1) : 『住宅建築研究所報』, 1976年版, No.3, 1977
 文献 4-2) : 『住宅総合研究財団研究年報』, No.26, 1999年版, 2000.3
 文献 4-3) : 『室内』, 第165号, No.9, 工作社
 文献 4-4) : 農林中央金庫組合金融第一本部推進部 : 『豊かな環境を求めて ―都市と農村を考える』, 社団法人地域社会計画センター, 1992.10
 文献 4-5) : 『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 建築歴史・意匠, 日本建築学会, 2012.9
 文献 4-6) : 農林中央金庫組合金融推進部 : 『農村の新しき環境を求めて (事務所・住まい・村づくり・そして農住都市) 農協建築研究会のあゆみ』,
 文献 4-7) : 農協建築研究会 : 『農村の住まい』, 農林中央金庫組合金融推進部, 1967.9
 文献 4-8) : 『近代建築』, 第22巻, 第4号, 近代建築社, 1968.4
 文献 4-9) : 『建築文化』, 第31巻, 第357号, 彰国社, 1976.7
 文献 4-10) : 農林中央金庫調査部 : 『農林中央金庫50年の歩み』, 1973.10
 文献 4-11) : 『農村建築』, 第62号, 農村建築研究会, 1969.7.31
 文献 4-12) : 『建築』, 第125号, 中外出版, 1971.2
 文献 4-13) : 日本建築学会 : 『日本建築学会学術講演梗概集』, 建築歴史・意匠, 日本建築学会, 2009.7.20
 文献 4-14) : 青木志郎編 : 「住宅設計案集」, 『凶集・農家住宅設計集』, 農山漁村文化協会, 1971.7
 文献 4-15) : 農村建築研究会 : 『凶集・農家の住まい』, 第1集, 農村建築研究会, 1952.2
 文献 4-16) : 日下あこ・久松由利子・ポドコ編 : 『農家の台所改善』, 井上書院, 1959.12
 文献 4-17) : 『新建築』, 第30巻, 第2号, 新建築社, 1955.2
 文献 4-18) : 中原暢子 : 『飯草邸』
 文献 4-19) : 池辺陽 : 『すまい』, 岩波書店, 1954
 文献 4-20) : 中原暢子 : 『立川邸新築工事設計図』
 文献 4-21) : 中原暢子 : 『横田邸新築工事設計図』
 文献 4-22) : 中原暢子 : 『熊沢邸新築工事設計図』
 文献 4-23) : 中原暢子 : 『志村邸新築工事設計図』
 文献 4-24) : 中原暢子 : 『横山邸新築工事設計図』

- 文献 4-25) : 『住宅建築』, 第 14 号, 彰国社, 1976.6
 文献 4-26) : 『図集・農家のすまい』, 第 2 集, 農山漁村文化協会, 1959
 文献 4-27) : 林雅子 : 「入母屋の家」, 『林雅子のディテール 空間の骨格』 彰国社, 1985.5
 文献 4-28) : 「建築家 林雅子」委員会 : 『HAYASHI Masako, architect 1928-2001 建築家 林雅子』, 新建築社, 2002.8
 文献 4-29) : 林雅子 : 『鈴木邸』 (実施図面)
 文献 4-30) : 栗田勇 : 「対談 トータルな生活像の復権」, 『現代日本建家全集 22 林雅子』, 三一書房, 1975.4
 文献 4-31) : 『室内』, 第 257 号, 工作社, 1968.9
 文献 4-32) : 『新建築』, 第 41 巻, 第 7 号, 新建築社, 1966.7
 文献 4-33) : 鈴木成文 : 「7 材木座の家」, 『住まいを読む—現代日本住居論』, 建築思想研究所, 1999

図版リスト

- ・ 図 4-1 : 文献 4-6), p.28 より抜粋。
- ・ 図 4-2 : 文献 4-18), 「104 平面 (1 階)」より抜粋。
- ・ 図 4-3 : 文献 4-18), 「105 平面 (2 階)」より抜粋。
- ・ 図 4-4 : 文献 4-18), 「108 断面図」より抜粋。
- ・ 図 4-5 : 文献 4-18), より抜粋。
- ・ 図 4-6 : 文献 4-20), 「104 平面図」より抜粋。
- ・ 図 4-7 : 文献 4-21), 「106 立面図」より抜粋。
- ・ 図 4-8 : 文献 4-18), 「104 平面 (1 階)」より抜粋。
- ・ 図 4-9 : 文献 4-21), 「103 1 階平面図」より抜粋。
- ・ 図 4-10 : 文献 4-18) 「104 平面 (1 階)」より抜粋。
- ・ 図 4-11 : 文献 4-22), 「105 3 階平面図」より抜粋。
- ・ 図 4-12 : 文献 4-23), 「103 1 階平面図」より抜粋。
- ・ 図 4-13 : 文献 4-18), 「104 平面 (1 階)」より抜粋。より抜粋。
- ・ 図 4-14 : 文献 4-21), より抜粋。
- ・ 図 4-15 : 文献 4-24), 「103 1 階平面図」より抜粋。
- ・ 図 4-16 : 文献 4-22), 「107 立面図」より抜粋。
- ・ 図 4-17 : 文献 4-21), 「203 床伏図 2 階」より抜粋。
- ・ 図 4-18 : 文献 4-20), 「203 小屋伏図」より抜粋。合せ梁を示す「合」の表記がみられる。
- ・ 図 4-19 : 文献 4-20), 「103 平面図」より抜粋。
- ・ 図 4-20 : 文献 4-26), 山田雅子 : 「農家の台所」, p.20 より抜粋。
- ・ 図 4-21 : 文献 4-7), p.29 より抜粋。プライバシーを配慮した各個室へのアプローチの確保、「人寄せ」空間としての続き間の確保、土間部分からの脱衣室・浴室へのアプローチの確保、作業着のまま食事のできる土間の台所兼食堂が計画されている。

- ・図 4-22 : 文献 4-27), p.114 より抜粋。
- ・図 4-23 : 文献 4-28), 「入母屋の家」, p.254 より抜粋。
- ・図 4-24 : 文献 4-29), 「104 平面図 (1 階)」より抜粋。
- ・図 4-25 : 文献 4-29), 「108 断面図・展開図」より抜粋。
- ・図 4-26 : 文献 4-31), 山田初江 : 「新しい間取り集 サービスヤードのある家」 p.44 より抜粋。
- ・図 4-27 : 文献 4-31), 山田初江 : 「新しい間取り集 L字型の家」, p.45 より抜粋。
- ・図 4-28 : 文献 4-31), 山田初江 : 「新しい間取り集 土間のある家」, p.16 より抜粋。
- ・表 4-1 : 文献 4-13), 池永衣里・小沢朝江 : 「戦後の農村住宅改善におけるモデル住宅の特徴とその背景」, pp.183-184 の表 1 を参考に NKK の基準として 文献 4-7), pp.42-69 の内容を基に筆者が作成。
- ・表 4-2 : 文献 4-14), pp.12-95 と中原設計の農村住宅の実施図面を元に筆者が作成。平均値は小数点第 3 位を四捨五入として算出。
- ・表 4-3 : 文献 4-3), 中原暢子 : 「農村住宅の問題点」, pp.33-41 を筆者が要約。
- ・表 4-4 : 文献 4-7), pp.42-69 の内容を基に筆者が作成。
- ・表 4-5 : 文献 4-19), 229p
- ・表 4-6 : 中原設計の実施図面の内、図面ラベルに「農協建築研究会」又は見積先が「多摩農協柿生支店」とある作品から抜粋し、筆者が作成。
- ・写真 4-1 : 文献 4-8), 円建築設計事務所 : 「柿生農協組合事務所」, pp.52-54
- ・写真 4-2 : 文献 4-4), p.20 より抜粋。左手前が中原とみられる。
- ・写真 4-3 : 文献 4-7), p.79, より抜粋。テーブル右の奥から手前に林雅子、中原、山田初江とみられる。右奥の黒板には、「住宅相談日」の文字と山田、中原、林の氏名、各々の相談者とみられる氏名が書かれている。
- ・写真 4-4 : 文献 4-7), p.45 より抜粋。
- ・写真 4-5 : 文献 4-7), p.45 より抜粋。
- ・写真 4-6 : 文献 4-32), 農協建築研究会 (企画)・山田初江 (設計) : 「柿生保育園」, p.204 より抜粋。

注釈

- 4-1) : 青木志郎は東京工業大学名誉教授であり、日本建築学会副会長 (1983-1984)、農村計画学会会長 (1986-1987) を歴任している。
- 4-2) : 文献 4-1), 青木志郎他 6 名 : 「農村住宅に関する一連の研究」, No.7513, pp.263-332
- 4-3) : 文献 4-2), 森本信明他 6 名 : 「昭和 20 年代を中心とした住宅計画の史的研究—西山文庫資料をもとにして—」, No.9815, p.224
- 4-4) : 文献 4-3), 中原暢子 : 「農村住宅の問題点」, pp.33-41
- 4-5) : 文献 4-4), p.21

- 4-6) : 文献 4-5), 波利摩星也・石飛昌平・熊谷亮平・山名善之:「大高正人の農協建築に関する研究 農村におけるコミュニティ形成の手法に着目して」, pp.705-706
- 4-7) : 文献 4-4), p.110
- 4-8) : 文献 4-4), p.73
- 4-9) : 文献 4-7), pp.1-124
- 4-10) : 文献 4-4), p.80
- 4-11) : 文献 4-9), 圓建築設計事務所他:「コーポラティブハウス柿生 協同組合方式による集合住宅」, pp.59-65
- 4-12) : 農学者の一楽照雄(1906-1994、協同組合経営研究所所長(当時))が1967年に発表した「協同組合による農住都市づくり」で提唱した構想であり、1969年に建設省に提案された。都市近郊農村における農家・農協主導の「まちづくり」を推進するものである。
- 4-13) : 柿生農協は、1959年には存在しており、1969年3月からは多摩農協柿生支店として、1997年10月からはJAセレサ川崎として活動している。
- 4-14) : 文献 4-10), p.160
- 4-15) : 文献 4-11), 中原暢子:「近郊農村住宅について 神奈川県川崎市角尾地区の住意識調査及住宅相談, 住宅設計監理を通して」, pp.15-17 目次には、日本建築学会農村計画委員会昭和43年活動報告の住宅部会討議用資料の一部として掲載されている。
- 4-16) : 文献 4-4), p.80
- 4-17) : 文献 4-12), 大高正人・岡田恭平・鬼頭梓・山田昭・山名元:「農協建築について」, pp.51-56 の中で、「(NKKの)女性の人たち(設計同人)は、住宅問題に取りくんでいるんですけども、非常に適任で懇切ていねいな住宅相談から何から、男性でもとてもあうまうまはいくまいと思うくらいうまくやっているわけです」と述べている。
- 4-18) : 柿生農協の元職員井上眞一へのヒアリング(2019.12.9)による。
- 4-19) : 農村建築研究会は、1950年に新日本建築学科集団農村建築部会から誕生した研究会であり、初代会長は今和次郎(1888-1973)である。
- 4-20) : 文献 4-13), 池永衣里・小沢朝江:「戦後の農村住宅改善におけるモデル住宅の特徴とその背景」, pp.183-184
- 4-21) : 文献 4-7), pp.1-124
- 4-22) : 文献 4-14), pp.11-96
- 4-23) : 文献 4-15), 笹原貞彦:「高床づくりの農家一二階に寝間を分けて一」, pp.28-29
- 4-24) : 文献 4-16), 113p
- 4-25) : 文献 4-4), p.21
- 4-26) : 文献 4-3), 中原暢子:「農村住宅の問題点」, p.36
- 4-27) : 文献 4-3), 中原暢子:「農村住宅の問題点」, p.36
- 4-28) : 文献 4-17), 池辺陽:「「日本的デザイン」といかに取りくむか」, p.43
- 4-29) : 文献 4-3), 中原暢子:「大屋根の家(横田邸)」, p.13
- 4-30) : 文献 4-7), p.54

4-31) 図面にはどの瓦葺き農村住宅にも土葺きである旨の記載はないが、「飯草邸」の現居住者からは、「屋根の土が落ちてきたことがある」との証言があった。そのため、土葺きにより断熱性能をもたせていたと考えられる。

4-32) : 文献 4-3), 中原暢子:「鉄筋コンクリートの家 (仲林邸)」, p.21

4-33) : 文献 4-25), 中原暢子:「建主の個性を基礎に」, p.60

4-34) : 文献 4-26), 山田雅子:「農家の台所」, pp.20-21 「山田」は林の旧姓である。

4-35) : 文献 4-28), 「入母屋の家」, 「全 197 作品リスト」, pp.342-254

4-36) : 元所員白井克典へのヒアリング (2018.9.19) による。

4-37) : 文献 4-30), 「対談 トータルな生活像の復権」, p.42

4-38) : 文献 4-31), 山田初江:「新しい間取り集 サービスヤードのある家」, p.44

4-39) : 文献 4-31), 山田初江:「新しい間取り集 L字型の家」, p.45

4-40) : 文献 4-31), 山田初江:「新しい間取り集 土間のある家」, pp.15-19

4-41) : 文献 4-33), pp.115-116

第5章 様式併存の受容—「水野レストラン」—

5.1 「水野レストラン」と第5章の概要

中原は農村住宅を NKK の住宅相談事業を通して設計する過程で、伝統的和風住宅の形式を外観及び内観において取り入れる試みを行ってきたことは、前章で述べたとおりである。そして、この住宅相談事業による設計活動の時期と並行して、「水野レストラン」という様式併存の極めて特殊な建築を設計している。池辺から学んだ機能主義の考え方とは正反対とも言えるこの作品について取り上げ、設計思想の変遷を明らかにするために、この時期の設計思想の転換について考察する。

5.1.1 本章の研究の背景

「水野レストラン」は、東京都文京区目白台に現存する中原の作品である（写真 5-1、写真 5-2）。1970 年「三昧匠 蔵」として創業した「水野レストラン」の図面をもとに、中原の設計方法を明らかにする。中原は、師池辺の元で近代建築を学び独立するが、その初期である 1969 年に「水野レストラン」を設計する。この建築が受注された経緯や、建築主からのデザインの要望があったかは不明である。これ以前に中原の設計に書院造風のインテリアデザインはあるが、明治建築風（A 棟）、蔵造り（B 棟）、書院造（C 棟）の 3 種もの建築様式を前面に押し出したものは、中原の作品の中では極めて特異な作品である。この作品は未発表作品であり、筆者は、中原の設計思想を分析する上で重要な作品であると考えた。



写真 5-1 「水野レストラン」明治建築風棟（A 棟）の外観



写真 5-2 「水野レストラン」書院造（C 棟）・蔵造り（B 棟）の外観

「水野レストラン」は、目白通りから坂道を下り路地の入った角に位置している。デザインとしては明治建築風（A棟）、蔵造り（B棟）、書院造（C棟）が別棟として混在し（図5-1）、通りに面して並列、中庭を囲むように配置されており（図5-2）、規模は延べ面積348.35㎡と小さい。特記仕様の最上段に「この建物は明治時代の建物を再現するように心掛ける」と記載され、その他は「日本建築学会建築工事標準仕様書A種による」とされている⁵⁻¹⁾。現在の「水野レストラン」は、明治建築風の棟の2階バルコニー等に増築が確認できる。

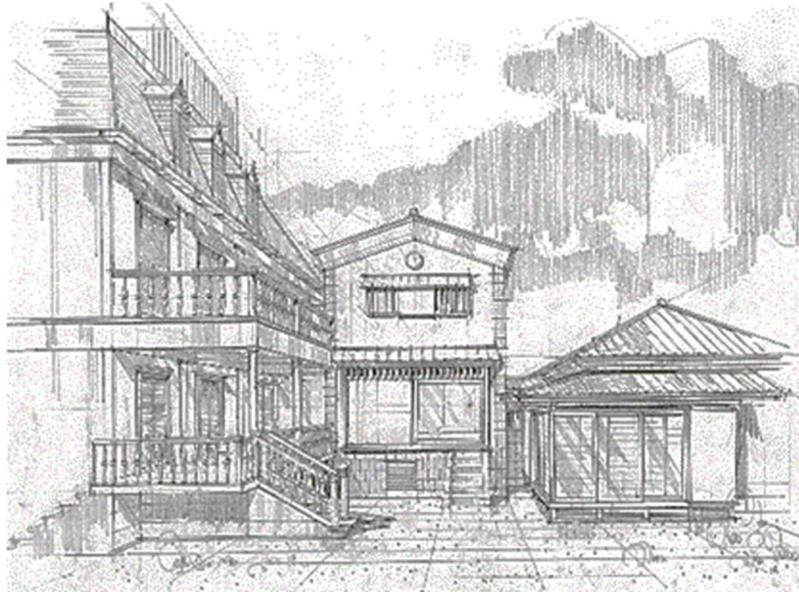


図5-1 「水野レストラン」スケッチ 中庭から臨む

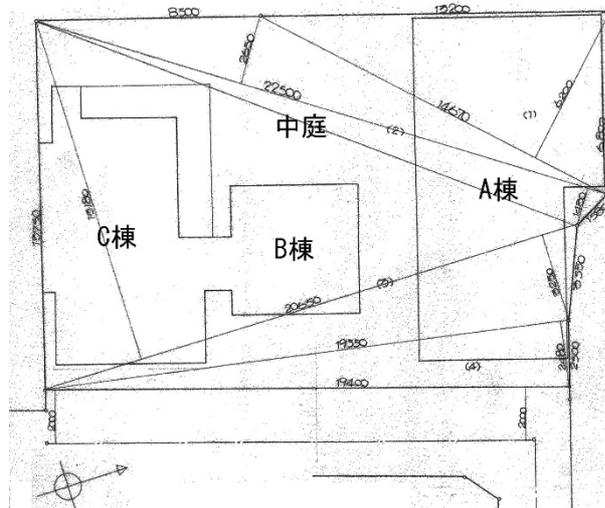


図5-2 「水野レストラン」配置図

5.1.2 本章の目的と分析方法

中原が設計同人設立後、NKKの住宅相談事業に取り組む最中に設計された「水野レストラン」であるが、明らかに農村建築の時とは異なった傾向がみられる。本章では「水野レストラン」の建築主との関係や設計図書から建築概要を把握し、その傾向を明らかにする。

5.2 建築主等の経歴と周辺敷地の時代背景

「水野レストラン」の実施図面によると建築主氏名欄には、水野幸夫（蔵左衛門）（1925-2010 以下、「兄幸夫」という）となっており、この高級日本料理店「三味匠 蔵」の経営者である。水野家は代々当主が「蔵左衛門」を名乗っている。兄幸夫は、日本大学芸術学部出身の工業デザイナーである⁵⁻²⁾。

日本大学芸術学部の歴史をたどると、1939年に専門部芸術科に宣伝芸術、写真、商工美術の3専攻を増設している。1943年に専門部芸術科は、創作科と宣伝芸術科を合併してできた宣伝文芸科に、美術科と商工美術科を合併してできた工作美術科から成り立っていたため、兄幸夫の入学が戦前であれば、工作美術科の卒業と考えられる。戦後であれば、1946年に終戦より停止していた専門部芸術科（写真科、映画科、文芸科、音楽科の各専攻科）を復活、同時に造形科を新設し5専攻科となった⁵⁻³⁾ため戦後の場合、造形科の卒業ではないかと推測される。

1949年学制改正により新制学部に移行、芸術学部となり、写真、映画・美術・音楽・文芸の5学科が設置された。1950年には演劇学科を増設し6学科体制となり、1956年専門部各科を廃止。1996年にはデザイン学科が増設された。従って、新制であれば、美術学科に所属していたのではないかと考えられる。

1970年に高級日本料理店「三味匠 蔵」として創業し、その姉妹店である「酒肴飯菜 丁」（写真5-3）を同一経営していた。2010年4月に兄幸夫が亡くなり、「三味匠 蔵」は2011年4月売却され、現在は「豊坂別館」として日本女子大学の所有となっている⁵⁻⁴⁾。

弟の水野正夫（1928-2014 以下、「弟正夫」という）はファッションデザイナーとして著名で、名古屋市熱田区出身である。東京外語大学、武蔵野美術大学を共に中退後、文化学院油絵科卒業。1955年、27歳の時に画家でファッションデザイナーの中原淳一（1913-1983）主宰の雑誌『ひまわり』にこども服のデザイン画が掲載され、賞を受けて3年間のパリ留学後、1958年に日本女子大学近くに「クチュール水野」を開く。そのビルの1階は、弟正夫が経営する喫茶店「カフェ水野」（写真5-4）がある。つまり、「水野レストラン」がオープンする1970年から遡る12年前にこの地で営業を始めている。1981年には、書籍『伝えたい日本の美しいもの』を出版している。



写真 5-3 「酒肴飯菜 丁」



写真 5-4 「カフェ水野」

「カフェ水野」については、「パリ、鎌倉にも店を持つ水野正夫さん and 和子さんという有名デザイナー夫妻のアトリエが二階、その一階がカフェ水野。女子大生には敷居の高いつまりはお値段の張るお店だったばかりか、モデルさんなど集まる人たちや劇団員だというギャルソンがみんなひどくおしゃれでカッコよくてそれだけでも九州から上京したばかりの少女には眩しく入るにも勇気のいる店でした。夜にはお酒も供する つまり大人の雰囲気いっぱいのお店だった」⁵⁵⁾との記録が残されている。「カフェ水野」のデザインは、極めてモダンな店舗デザインであった。この喫茶店で「水野レストラン」建設の打ち合わせを女性の建築家たちと頻繁に行っていたとの話を兄幸夫の秘書から伺ったことがある⁵⁶⁾。兄幸夫がこの地でレストランを経営した経緯は不明であるが、弟正夫が少なくともこの地域の状況をよく理解していたものと推測できる。

デザイナーが、工業デザイナーからレストラン経営者に転身することは大きな決断であるとともに、詳細な戦略が存在していたのではないかと考えられる。兄幸夫は、料理はもとより、自身で箸等のデザインも行っており、食器や調度品、インテリアそして中原がデザインした建築物の全てがデザインの対象であった。また、長唄三味線演奏家の今藤長由利(1948-

との交流からも日本文化に対する造詣が深かったと感ぜられる。これらは、レストランを立ち上げる過程で大きな影響を受けていたと思われる。中原は時々研究室の学生を伴ってこのレストランを訪れたとされるため、当時この作品を発表することはなかったが、これが満足できる作品であったと考えていたのではないかと推測する。この総合的なデザインについて、深い共感があったと推察される。

5.3 立面計画

道路と庭に面するA棟立面は念入りにデザインされ、まるで舞台セットの様な印象を受ける。開口部は、両開きのガラス戸の外部に同じく両開きのガラリ戸が設置され、さらに屋根にも同様にドーマー窓に嵌められている。屋根上部には、手すりを兼ねた王冠の棟飾りがあり、極めてシンプルにデザインされた商業建築であった。B棟は自らの代々水野蔵左衛門を名乗る水野家のシンボルとして蔵造りを採用し、その妻部分には、「水」の文字の紋が記されている。「キャフェ水野」の近代的デザインに対して様式併存のレストランを構成している。

「水野レストラン」の構造について、A棟、B棟は鉄筋コンクリート壁式構造である。A棟の屋根は、鉄骨造で、 $200 \times 100 \times 5.5 \times 8$ mmのH形鋼を使用し、仕上げは、コロニアルである。B棟の屋根は、日本瓦の切妻としている。実現していないが、当初は屋根に煙出しのための窓が計画されていた。C棟の屋根は、寄棟の日本瓦葺きで、勾配は4.5寸、一部廊下・縁側の部分は下屋となっており、その部分は日本瓦葺きの3寸勾配である。小屋組みは伝統的な和小屋ではあるが、梁には $250 \times 50 \times 32$ mmのC形鋼の鉄骨2本を合せ梁として、掛け渡ししている。B棟との接合部は、カラー鉄板の一文字葺きとなっている。

前面道路に面する東立面(図5-3)は、最も様式の違いを確認することができる。A棟の2階中央には、丸窓がデザインされている。中庭側の西立面は、B棟1階には浴室の大きな引き込み窓が設けられている(図5-4)。バルコニーを支える丸柱の柱頭や窓の上の装飾、小さな切妻屋根を張り出したドーマー窓のデザインは、シンプルな計画となっている(図5-5)(実際には、ペデュメントの傾斜部分に曲線の装飾がされている)。A棟の主要な窓は、ガラス戸外にガラリ戸が計画されている。A棟北立面の壁に窓はなく、東・南側同様、屋根にドーマー窓が設けられている(図5-6)。外壁は、A棟が柱梁型白漆喰仕上げ、東・南側はレンガタイル貼り、西・北側は、モルタルガン吹付けとなっている。B棟は、白漆喰仕上げ、なまこ壁となっており、立面を確認すると平瓦を互い違いに張る「馬乗り張り」である(実際には、縁に対して45度になるように斜めに傾けて張る「四半張」が採用されている)。C棟は、付け柱、付け土台杉上小節モルタルガン葺きつけ、南面はセラミックボード貼りとなっている。雨樋はA棟B棟とも、軒樋は木製で内側を亜鉛メッキ鋼板としオイルペイントをしている。堅樋は銅板 $\phi 70$ mmである。(表5-1)

表 5-1 「水野レストラン」外部仕上表

	A棟	B棟	C棟
基礎	鉄筋コンクリート 下地 外面 厚30 大谷石貼	鉄筋コンクリート アンカーボルトφ13	モルタル金ゴテ仕上
外壁	柱梁型白漆喰仕上 東・南側：レンガタイル貼 西・北側：モルタルガン吹付	白漆喰仕上 腰平瓦はりつけ	付け柱、付け土台：上小節 モルタルガン吹付 南面：セラミックボード貼
軒裏	白漆喰仕上	白漆喰仕上	延焼のおそれのある部分：モルタルガン吹付 その他：樺竹、野地板、杉180厚12
屋根	クボタコロニアル	クボタコロニアル	日本瓦唐草葺（すべてにフォームマット50mm挿入）
雨樋	軒樋：一箱樋 # 28 O.P. 縦樋：銅板φ70	軒樋：一箱樋 # 28 O.P. 縦樋：銅板φ70	軒樋・縦樋：銅板φ70
入口ポーチ	鉄平石（角切）はりつけ ポーチ：大谷石 階段：大谷石	—	—
テラス及びバルコニー	鉄平石（角切）はりつけ ポーチ：大谷石 手摺：ラワン クリ型O.P. 笠木：120×70ワラン	—	—
屋上	アスファルト防水三戸 手摺：鉄筋φ18 O.P.	—	—
物乾場	アスファルト防水三戸 モルタル目地切	—	—

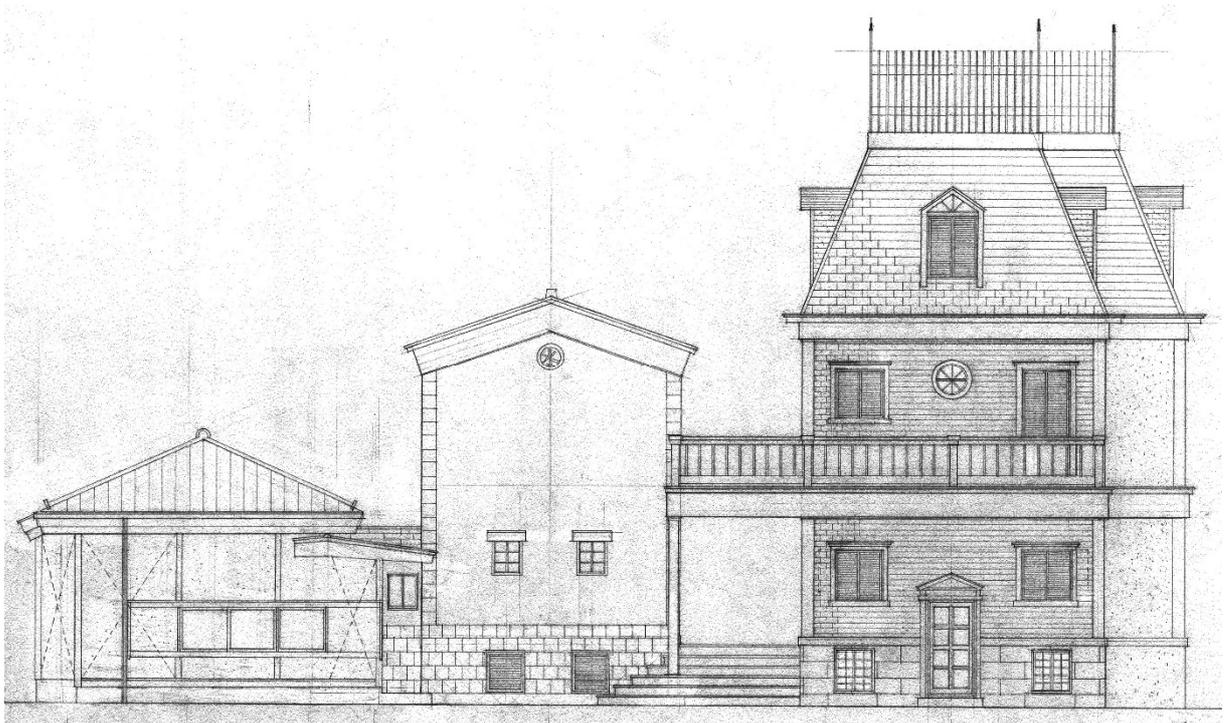


図 5-3 「水野レストラン」東立面図



図 5-4 「水野レストラン」西立面図



図 5-5 「水野レストラン」南立面図

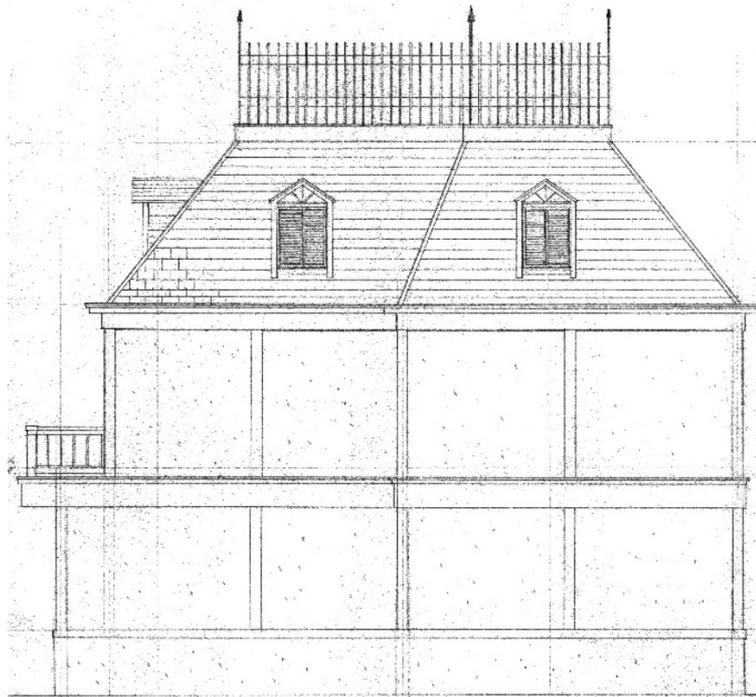


図 5-6 「水野レストラン」北立面図

5.4 平面・断面計画

「水野レストラン」の用途は、店舗との併用住宅である。主たるアプローチは、A棟とB棟の間のテラスを通り、それぞれの棟にアクセスする(図5-7、写真5-5、写真5-6)。A棟は、地盤面より1.5m下がったレベルに地下1階があり、地上3階建てである。地下1階は、レストランの厨房、食品倉庫、機械室等が配されている。1階は、椅子式の客室、客用便所、パントリー、放送室があり(図5-7)、2・3階は住居で、2階に居間、食堂、台所、夫婦寝室(図5-8)、3階は屋根裏であり、子供室2室と畳の私室、シャワー室等配されている(図5-9)。A棟住宅部分は、シャワー室はあるものの浴室はみられない。そのため、家族用としてB棟1階の浴室(図5-7)を使用することが考えられる。

A棟2階の住宅へは、A棟東正面の勝手口からレストランへもアプローチでき、住宅玄関は、2階に位置する。2階にはバルコニーがあり、その床は、1階のテラス同様鉄平石(角切り)貼り付けとしており、手摺はワランのくり型付きオイルペイントとしている(図5-10)。真ん中のB棟床面も、A棟同様に地盤面から下がっているが、地上2階建てである。1階は浴室、洗面所、便所、階段が、2階は、使用人室2室が収められている(図5-8)。A棟及びB棟の地下で行き来ができるようになっており(図5-11)、A棟への配膳はリフトによる。

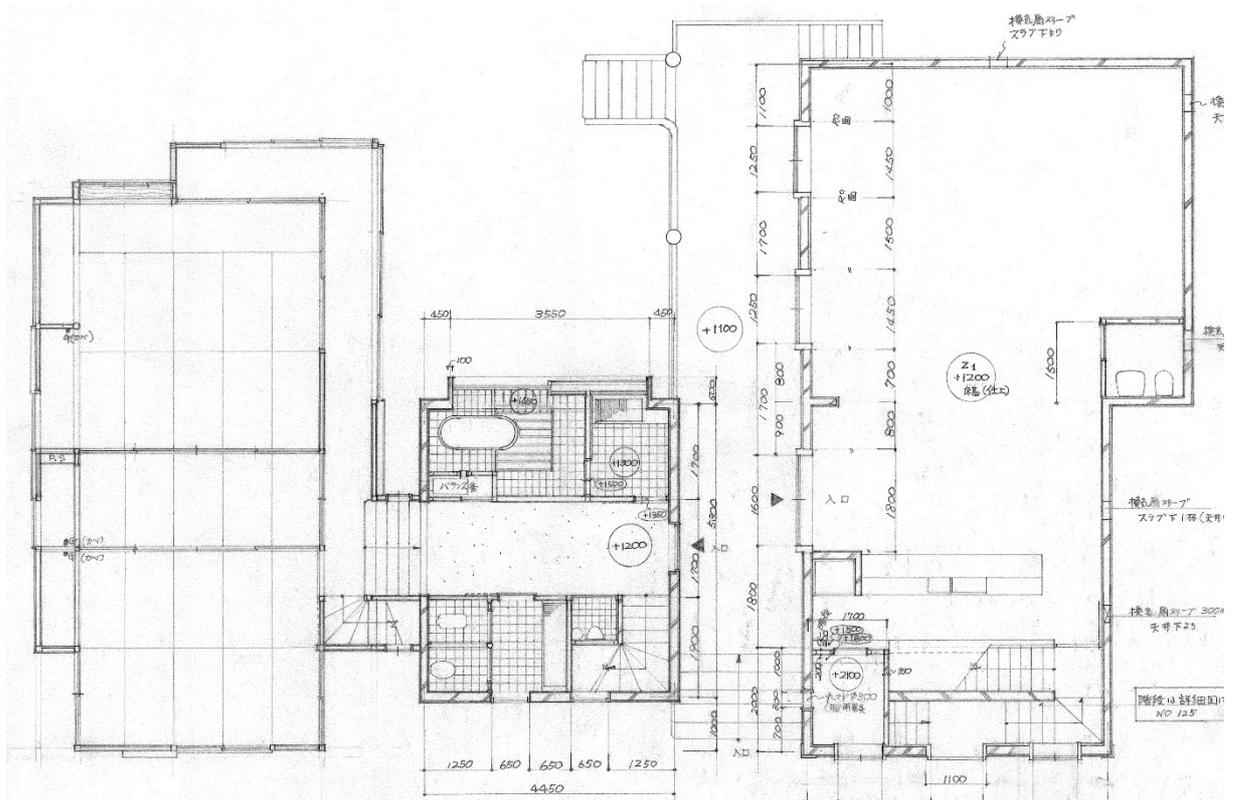


図 5-7 「水野レストラン」1階平面図



写真 5-5 「水野レストラン」アプローチ部分



写真 5-6 「水野レストラン」アプローチ部分

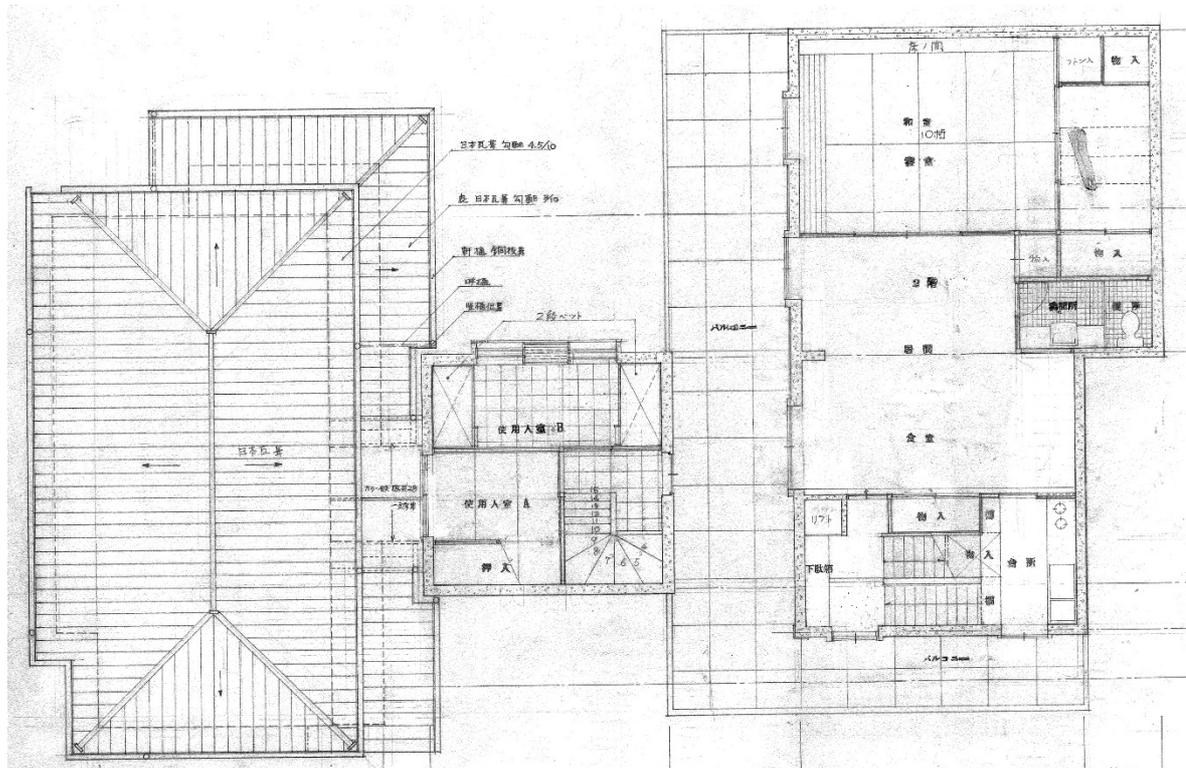


図 5-8 「水野レストラン」C棟屋根伏図・B棟A棟2階平面図

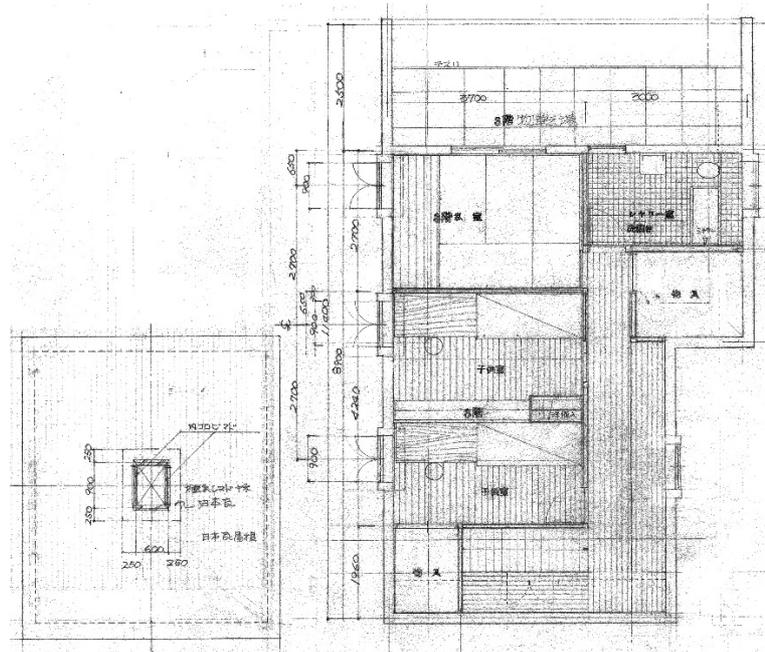


図 5-9 「水野レストラン」B棟屋根伏図・A棟3階平面図

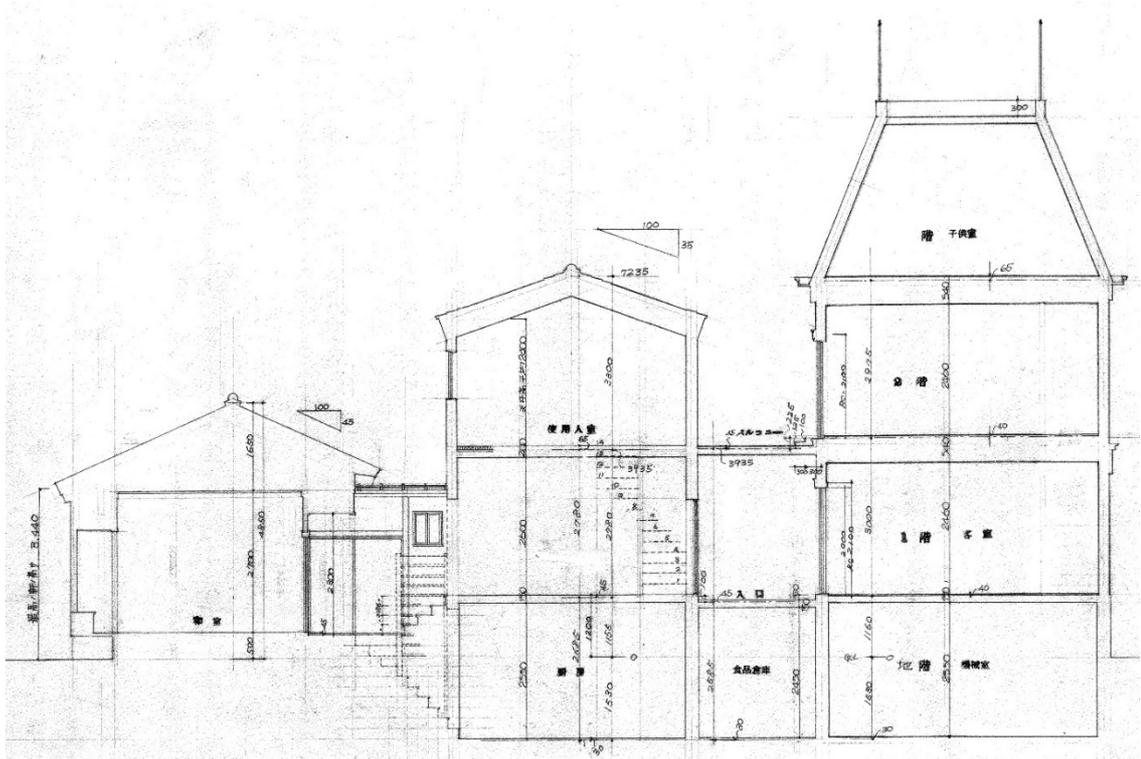


図5-11 「水野レストラン」断面図

C棟へはB棟の中央にある廊下を通りアプローチする。C棟は平屋建てであり、それぞれ床の間のある12.5畳、5畳、10畳の和室客室に分割されている。中央の5畳は、前室として配膳の際に利用する、若しくは、隣接する双方の和室を拡張する際に使用されると思われる。

5.5 インテリア計画

C棟の12.5畳の和室客室は、書院造を基調とし、床の間は薄縁とし、床框は漆塗りである。床脇には、地袋があり棚があり、その反対側には火灯窓のある書院がみられる。壁面には長押が回り(図5-12)、欄間がみられる(図5-13)。天井は、中央を杉の中拵合板敷目貼りとし、その周囲を杉柂鏡張りとしている。天井高は、2.7mと高く、内法高は、1.8mである。中庭に面して縁側が設けられている。

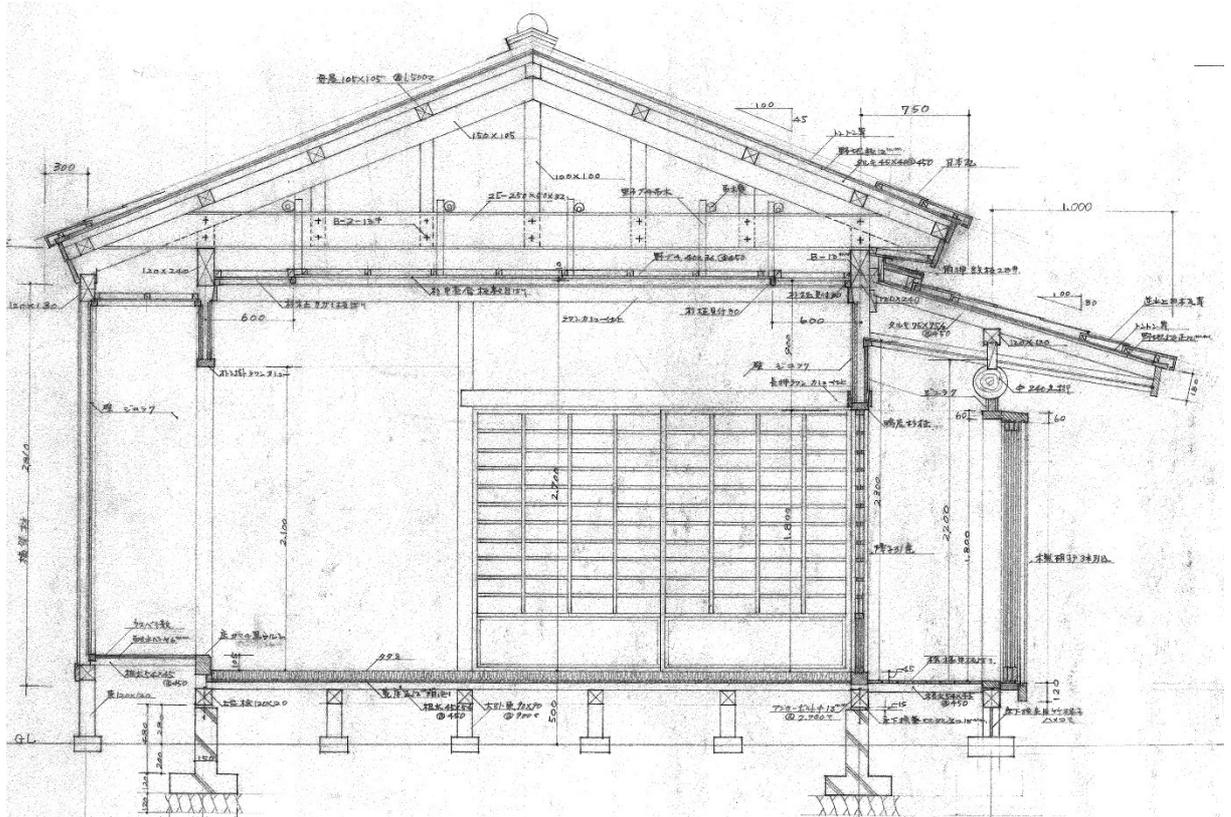


図5-12 「水野レストラン」C棟和室客室（12.5畳）断面詳細図

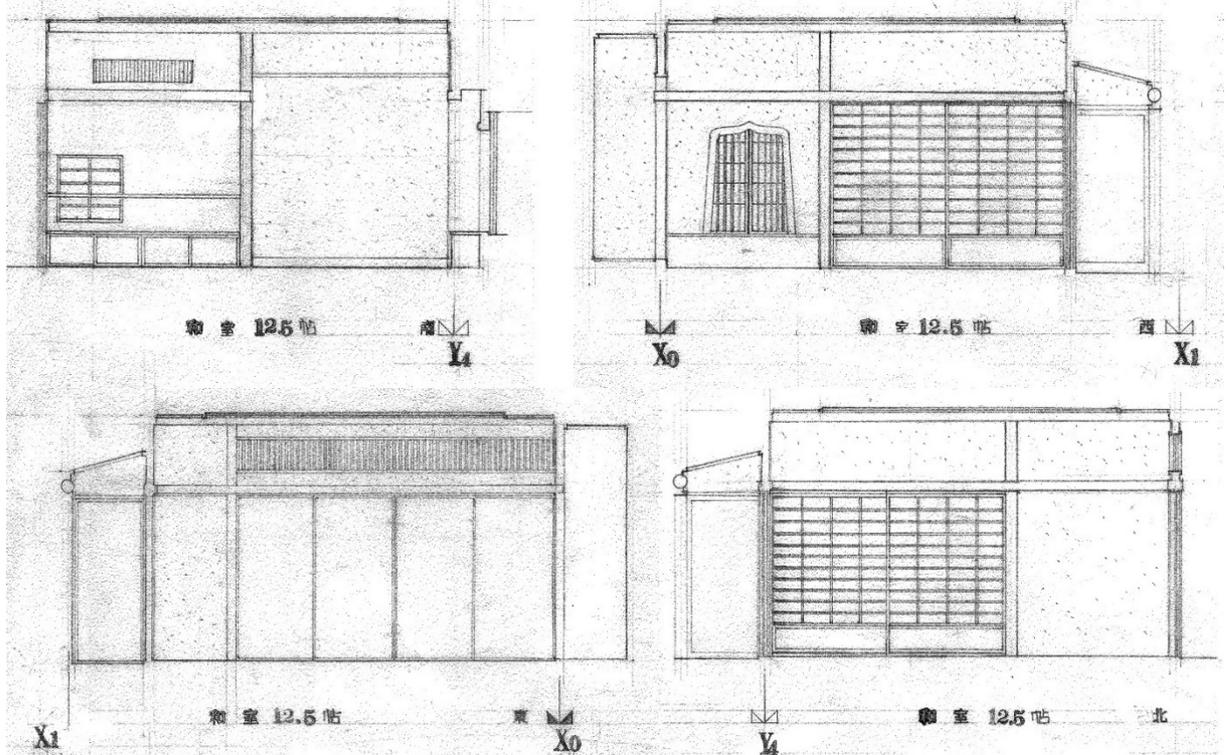


図5-13 「水野レストラン」C棟和室客室（12.5畳）展開図

A棟1階客室部分の平面の細部については図面化されていない。客室展開図は腰板が張られ、極めて装飾的である(図5-14)。床の仕上げは、「RC用フローリングブロック ワックス磨」と記載されている。天井の仕上げは漆喰で、周囲はアールが付いており、折上格天井となっている(写真5-7、図5-15)。格縁はラワン合板オイルペイント塗り(写真5-8、図5-16)、格板には写真のように花の模様が描かれている。A棟レストラン入口部分には、シャンデリアが飾られている。しかし、図面によるとA棟客席は、電灯設備の計画がされていない(図5-17)。

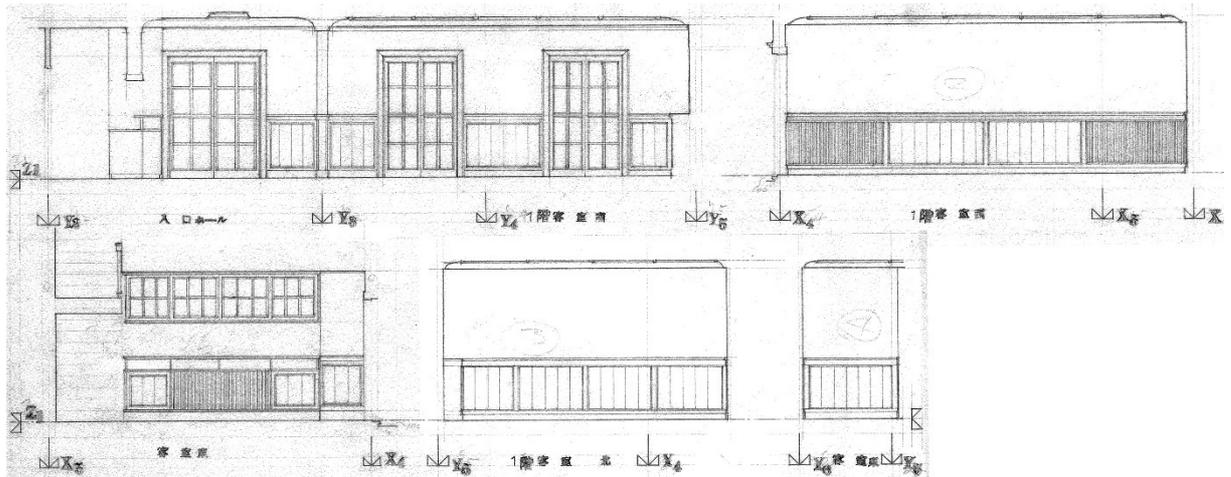


図5-14 「水野レストラン」A棟客室展開図



写真5-7 「水野レストラン」A棟客室天井

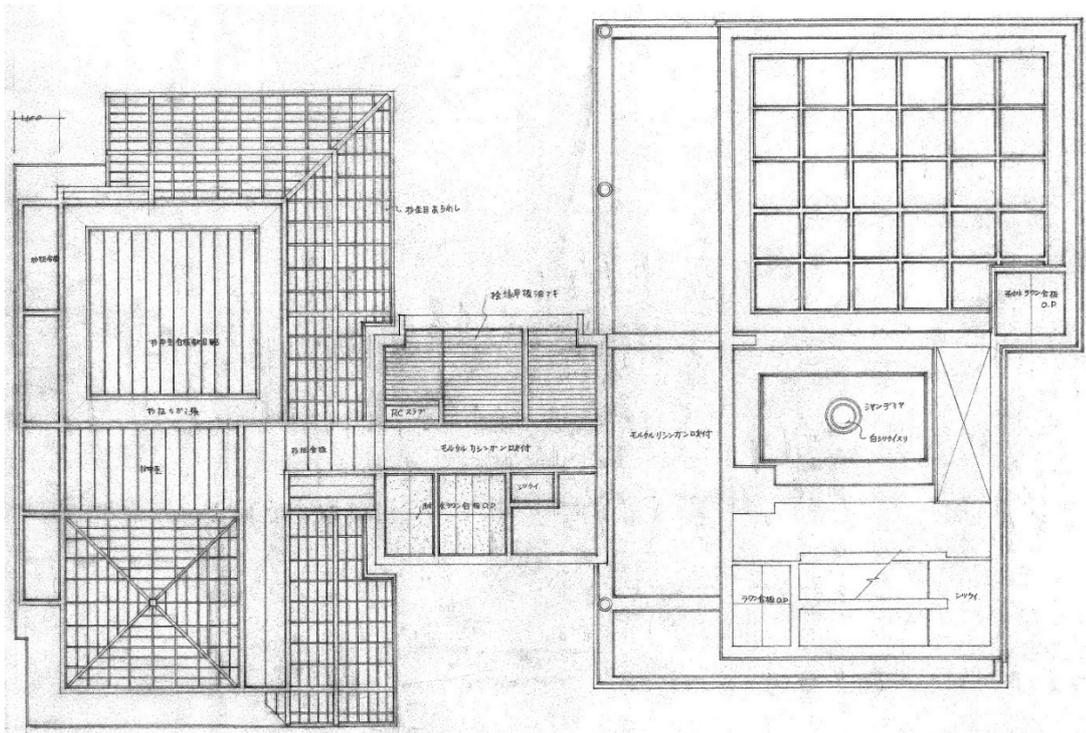


図 5-15 「水野レストラン」1階天井伏図

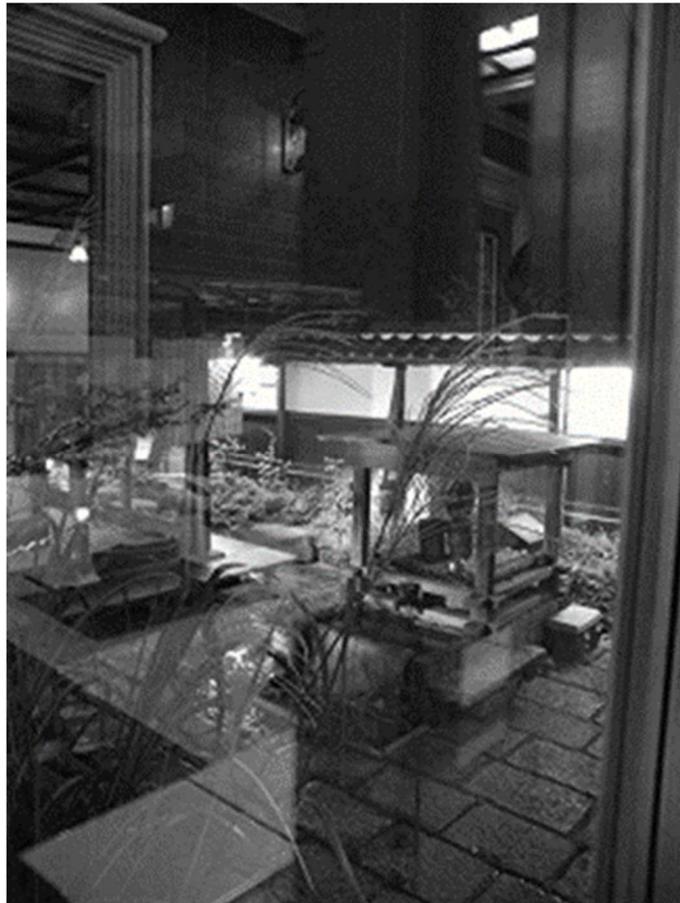


写真 5-8 「水野レストラン」中庭



写真 5-9 「水野レストラン」A棟客室

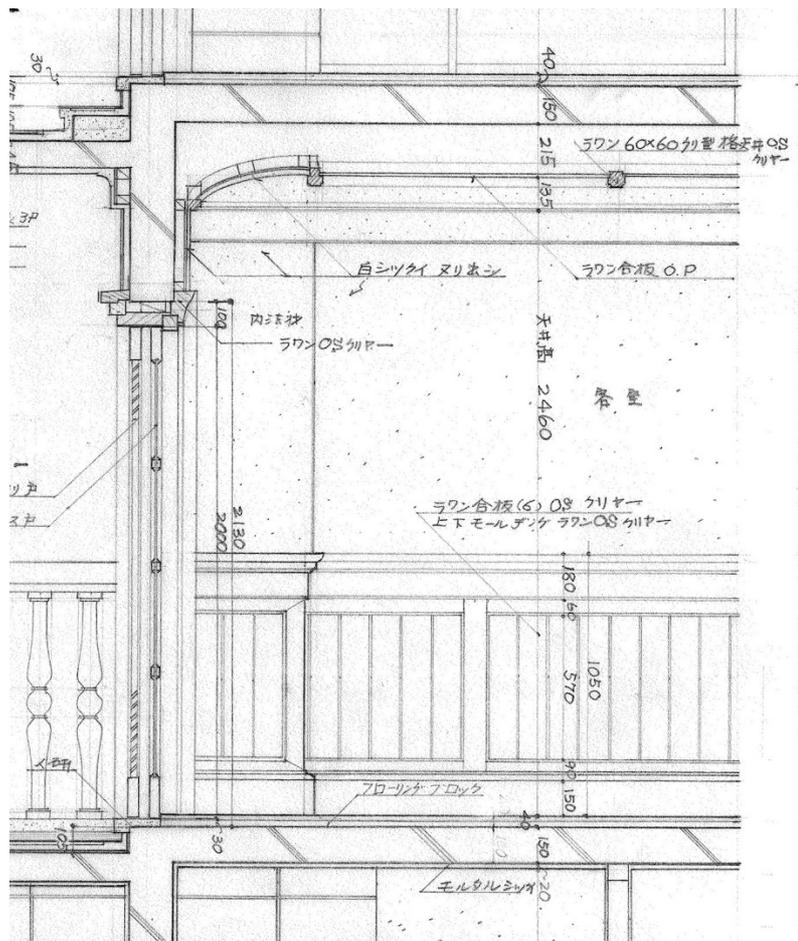


図 5-16 「水野レストラン」A棟客室断面詳細図

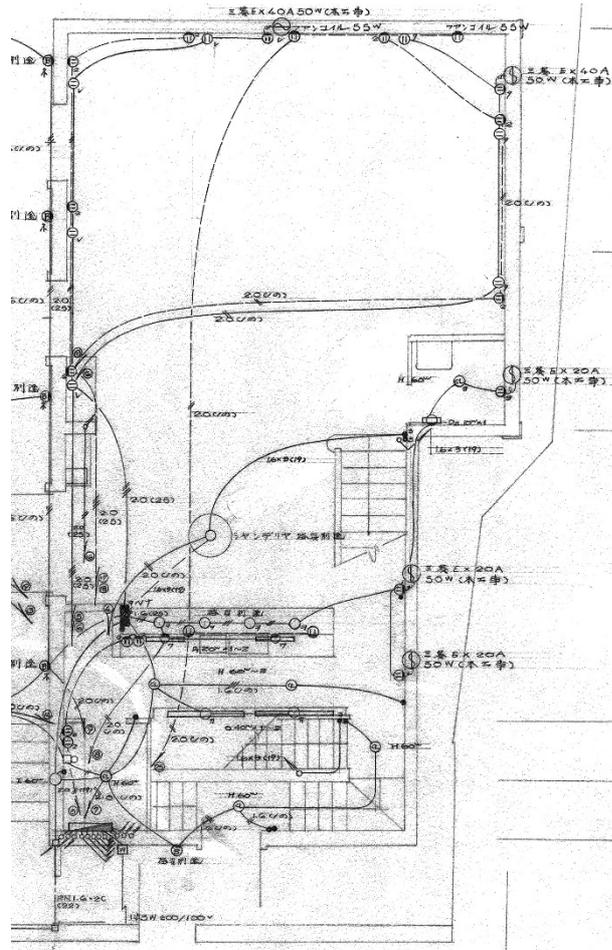


図 5-17 「水野レストラン」A 棟電灯計画

5.6 考察

「水野レストラン」は、3つの建築様式を用いているものの、蔵造りの内部は、脱衣室、浴室、便所、使用人室、階段が収められており、内部の用途は、その様式に対応しておらず、見世（店）蔵のような⁵⁷⁾設計手法となっている。また、A棟とB棟の外部仕上げは一部を除き同一な部分が多い。さらに、A棟の客席の平面図詳細は記載されていない、照明についても設計図書に記載されているものとは全く異なっている。建具詳細についてもそれほど細部にわたって図面化は行っていない。レストランのオーナーであり工業デザイナーでもある兄幸夫との共同作業ではないか。兄幸夫は新日本料理を開発し建築・インテリアとの総合的なサービスを提供している。

なぜ3つの様式を採用し、「水野レストラン」で実現されたかは不明であるが、様式主義的な考え方を素直に受け入れ設計を行ったことは、池辺とは異なる考えのもとに設計がなされたことは間違いない。中原の設計方法は、統一的なデザインを指向するのではなく、そこに関わる人々の思いや欲求を掬い上げて形にしてゆくスタイルが形成されてくる。そこには師池辺の「実験主義」的なアプローチから脱して、一人の建築家として作品をまとめ上げていく姿勢が確立されていく。

5.6.1 目白台の歴史的・文化的環境

「水野レストラン」が立つ目白台は、旧大名屋敷があった場所で、現在の東大病院分院跡地は松平出羽守の下屋敷、日本女子大学附属豊明小学校は大岡主膳正の下屋敷、日本女子大学附属豊明幼稚園は鳥羽藩の下屋敷、そして肥後細川庭園（旧：新江戸川公園）は細川家の下屋敷だった所である。「水野レストラン」があった場所は、大岡の屋敷跡と考えられる。

5.6.2 明治時代の上流層の住宅形式「和洋館並列型住宅様式」

建築学者、建築史家である内田青蔵（1953-）は、『HOME No.5 特別編集 昭和住宅メモリー』（2005）の「和洋の対立と融合 日本近代住宅」において、明治から昭和初期にかけて和館と洋館が対立・併存していく中で、明治初期の上流層の住宅形式は、伝統的な和館の脇に洋館を並置させる「和洋館並列型住宅様式」であったとし、以下のように述べている。

「…（中略）…明治天皇は、明治政府の高官や政府と関係の深い上流層の人々を頻繁に訪ねた。迎える側は、それまでの慣習に従って天皇のために行幸御殿を用意したが、その際、洋服姿の天皇を迎えるには床座の住まいではなく、磯座の西洋館を用意することがふさわしいと考えたのである。こうした行幸御殿としての洋館建設が繰り返される中で、次第に行幸の有無にかかわらず、客を迎える場として伝統的な住まいの脇に洋館を建てるのが、上流層の新しい住まいの形式として定着していった。…（中略）…この和洋館並列型住宅は、…（中略）…あたかも二項対立の様相を示すかのように、伝統的な和館と洋館がはっきりと区別できるように並んで配された。そして、その使い方も、当時は和館が生活の日常の場、洋館が接客の場であり、和館は床座で和服姿の場、洋館は椅子座で洋服の場、あるいは、和館が夏向きの場、洋館が冬向きの場、と解されていた。」⁵⁸⁾

5.6.3 文化人の居住地「目白台アパート」

高級賃貸住宅「目白台アパート（目白台ハウス）」（1962）には、小説家の瀬戸内晴美（1922-後の寂聴 以下「瀬戸内」という）が二度にわたって住み、ちょうど同時期には、小説家の谷崎潤一郎（1886-1965）、平林たい子（1905-1972）、円地文子（1905-1986）などが暮らしていた。「目白台アパート」には小説家や画家、音楽家、学者、俳優など多種多様な人たちが部屋を借りていた。瀬戸内が「目白台アパート」に住んでいた時期と「三味匠 蔵」のオープンは時期的に一致する。2010年4月兄幸夫の死去によって、経営していた「三味匠 蔵」や「肴肴飯菜 丁」は閉店し、今はホームページを見ることはできないが、そこには「目白台。古くは若山牧水、菊池寛らが居を構えた、文人たちも愛した街。今でも、大学や学校に囲まれた文教地区として知られる。昭和45年、『三味匠 蔵』誕生。日本女子大学の真裏にひっそりと佇む洋館と、虚飾をそぎ落とし実（じつ）に立ち返った、新日本料理」と書かれており⁵⁹⁾文化人に愛されていたレストランであったことをうかがい知ることができる。

5.6.4 環境に適したレストランの構想

建築様式併存として、赤坂離宮改修や、明治時代の上流層の住宅形式である「和洋館並列型住宅様式」がある。これは、「水野レストラン」の設計にも関連するものと思われる。また、デザインとして様式をモチーフとする商業建築の設計方法には、「水野レストラン」(1969)のように建築家が新たに設計を行う方法と、近隣の「椿山荘」(1953 移築)や「うかい鳥山」(1968 移築)のように既存の建築物を移築して活用する方法等がある。

①赤坂離宮改修による迎賓館としての活用

「水野レストラン」の設計は1969年であるが、1967年に赤坂離宮を改修して迎賓館(迎賓館赤坂離宮)とすることが閣議決定され、広報された。赤坂離宮改修の報道は、「水野レストラン」の設計に大きな影響を与えたと思われる。その後、日本芸術院会員であった村野藤吾(1891-1984)が設計を担当することとなった。

②「椿山荘」の民家移築によるレストランとしての活用

「水野レストラン」の近隣の目白通り沿いには、「椿山荘(現ホテル椿山荘東京)」が1952年から創業している。「椿山荘」の沿革は以下の通りである。軍人・政治家であった山縣有朋(1838-1922)が、1878年に椿が自生していた景勝地「つばきやま」を購入し邸宅をつくり、「椿山荘」と命名した。庭園の施工は庭師岩本勝五郎(生没年不明)が担当している。1918年には、当時関西財界で主導的地位を占めていた藤田組の2代目当主藤田平太郎男爵(1869-1940)が、名園をありのまま残したいという山縣有朋の意志を受け継ぐ。しかし、東京大空襲(1945)で、大邸宅、庭園等の大半が被害を受けた。1948年、「椿山荘」は藤田鉦業(旧藤田組)から藤田興業の所有となり、その創業者小川栄一(1900-1978)は「戦後の荒廃した東京に緑のオアシスを」の思想の下、名園「椿山荘」の復興に着手する。1952年11月11日にガーデンレストランとして「椿山荘」の創業を始める⁵⁻¹⁰⁾。敷地内には、多くの移築した建築物等が配置されている(表5-2)。兄幸夫は、目白台で店を構えるにあたって、おそらく「椿山荘」を意識していたであろう。

表5-2 「椿山荘」の移築建築物一覧

No.	建築物	移築年	移築元
1	白玉稻荷神社	1924	京都の下鴨神社
2	三重塔「圓通閣」	1925	広島県賀茂郡の篁山竹林寺
3	茶室「残月」	1947	箱根小涌園
4	木春堂	1953	神奈川県足柄上郡 (五島慶太 ⁵⁻¹¹⁾ 所有)
5	木春堂の個室(大椿、蓬萊)	1954	京都の三井邸
6	無茶庵	1954	文京区林町 (旧某氏邸所有の古民家)

③合掌造りの民家の移築によるレストランとしての活用

「うかいグループ」は、飲食店の経営や美術館の運営等する企業であるが、歴史的な背景のある建築物を移築することで、物語のある空間を演出する手法をとっている。創業者鶴飼貞男（1930-2006）は、本物であることにこだわり、長い年月をかけて育まれた文化も一緒に移送するという考えの下、事業を進めた⁵⁻¹²⁾。東京オリンピックが開催された年と同年の12月にいろいろ炭火焼料理「うかい鳥山」（設計：桂田設計事務所）を創業する。これまで甲府方面に移動する際は、甲州街道を利用しアクセスする立地であったが、1968年には中央自動車道の八王子相模湖間の開通により、高速を降りてもらえるよう魅力的な店舗にすべく、同年、最初に富山五箇山の複数の古い合掌造りの民家を敷地内に移築した。また、鶴飼貞男と設計者の桂田公男（生没年不明）は長い付き合いで、建築主の考えをよくわかってくれるという⁵⁻¹³⁾ 関係であった。桂田設計事務所は「うかいグループ」の出発点である「うかい鳥山」（1964）から「東京芝とうふやうかい」（2005）至るまで、41年で計8軒ものうかいの商業施設設計を担当している。

④様式選択の状況

「水野レストラン」が設計された時期までに、様式を近代的にアレンジして採用したものはあるものの、和風以外の建築様式を前面に押し出したり、様式を併存させたりするデザインは、中原の「水野レストラン」以外にみられない（表5-3）。中原は、「水野レストラン」を建築雑誌に公表していないことから、中原からの提案ではなく建築主の強い要望によるものと推察される。

表 5-3 様式採用や民家移築の事例

	社会の動き	商業建築のための民家等の移築	中原暢子	吉田五十八	堀口捨巳	谷口吉郎	村野藤吾	吉村順三	山田守	白井晟一	浦辺鏡太郎
1936				杵屋別邸 市屋信子邸							
1941				椿葉荘							
1950				歌舞伎座（第3期）	八勝館御幸の間						
1952		椿山荘に五島慶太所有の田舎家									
1955				文楽座	サンパワロ日万薬館万葉亭 三朝温泉旅館 料亭植むら亭 明治大学泉体育						
1957											倉敷考古館増築
1958						国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑	新歌舞伎座			善照寺本堂	
1960				大和文華館		赤坂東宮御所			日本武道館		
1961											大原美術館分館
1963										親和銀行東京支店	倉敷国際ホテル
1964		うかい鳥山に五箇山合掌造り			明治大学生田校舎						
1965	東京オリンピック			大阪ロイヤルホテル							
1966			飯草邸								
1968				中宮寺本堂			赤坂離宮改修			愛知県立芸術大学 皇居新宮殿基本設計	
1969			水野レストラン								
1970				満願寺					ホテルフジタ京都	親和銀行本店	
1974							赤坂離宮迎賓館改修竣工				

注：太字は、旧来からの様式を採用した作品を示す。
網掛け部分は、本論文で記載した作品。

5.6.5 中原暢子の「水野レストラン」でのデザイン

中原は、「建主の個性を基礎に」⁵⁻¹⁴⁾で述べているように、自分の考え方を押し通すというよりも、建築主の考え方に共鳴できるかどうかを重視している。

当時の建築デザインの流れとは反するように思える明治建築風建築と書院造などを併存させた理由は、目白台という環境とそれらが醸し出す雰囲気を楽しむ文化人をターゲットにデザインしたと考えられる。中原は様式を併存させつつも、様式の完全な再現よりも「食事を楽しむ」ための舞台装置として、料理に始まり、器や調度品、建築から環境に至るまで、総合的に目配りをする建築主の考え方に共鳴したのではないかと考えられる。中原の茶室への展開の中にもこのような生活全般をデザインする考え方が流れているように考えられる。

参考文献リスト

- 文献 5-1)：中原暢子：『水野レストラン新築工事設計図』，1969.8.12
- 文献 5-2)：日本大学芸術学部：『日本大学芸術学部』，<http://www.art.nihon-u.ac.jp/about/history/>
- 文献 5-3)：大久保一彦：『飲食店の勉強代行業”大久保一彦の勉強録』，2009.8.14
- 文献 5-4)：学校法人日本女子大学：『平成 23 年度事業報告書』，
https://www.jwu.ac.jp/content/files/grp/about/plan/houkoku/houkoku_h23.pdf，
- 文献 5-5)：アカバナー：『食ベログ』，
2009.11,<https://tabelog.com/tokyo/A1305/A130504/13098729/dtlphotonst/smp2/>，
- 文献 5-6)：けいあゆうさぎ：『けいあゆうさぎの退屈のない毎日』，
<https://ameblo.jp/kei0313ayu0604/entry-12501997774.html>，
- 文献 5-7)：彰国社編：『建築大辞典 第2版』，彰国社，1993.6.1
- 文献 5-8)：『X-knowledge home No.5 特別編集 昭和住宅メモリー:そして家は生きつづける。』，エクスナレッジムック，2005.8.10
- 文献 5-9)：ホテル椿山荘東京：『ホテル椿山荘東京ホームページ』
- 文献 5-10)：株式会社 ONESTORY：『株式会社 ONESTORY ホームページ』，2020.3.4
- 文献 5-11)：『日経アーキテクチュア』，第 807 号，日経 BP 社，2005.10.17
- 文献 5-12)：『住宅建築』，第 14 号，彰国社，1976.6

図版リスト

- ・図 5-1：文献 5-1)，「スケッチ」より抜粋。
- ・図 5-2：文献 5-1)，「101 配置図 案内図」より抜粋。「A 棟」「B 棟」「C 棟」の文字は筆者が加筆。
- ・図 5-3：文献 5-1)，「107 立面図東」より抜粋。
- ・図 5-4：文献 5-1)，「109 立面図西」より抜粋。
- ・図 5-5：文献 5-1)，「108 立面図南」より抜粋。
- ・図 5-6：文献 5-1)，「110 立面図北」より抜粋。

- ・ 図 5-7 : 文献 5-1), 「103 1階平面図」より抜粋。
- ・ 図 5-8 : 文献 5-1), 「104 1階屋根伏図 2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 5-9 : 文献 5-1), 「105 2階屋根伏図 3階平面図」より抜粋。
- ・ 図 5-10 : 文献 5-1), 「124 矩計詳細図」より抜粋。
- ・ 図 5-11 : 文献 5-1), 「112 断面図」より抜粋。
- ・ 図 5-12 : 文献 5-1), 「117 矩計図」より抜粋。
- ・ 図 5-13 : 文献 5-1), 「113 和室展開図」より抜粋。文献 5-1), 「117 矩計図」に火灯窓の表記はない。
- ・ 図 5-14 : 文献 5-1), 「114 1・2階展開図」より抜粋。
- ・ 図 5-15 : 文献 5-1), 「124 矩計詳細図」より一部抜粋。
- ・ 図 5-16 : 文献 5-1), 「118 1階天井伏図」より抜粋。
- ・ 図 5-17 : 文献 5-1), 「301 1階電灯設備」より抜粋。
- ・ 表 5-1 : 文献 5-1), 「102 仕上表」の外部仕上表より筆者が作成。
- ・ 表 5-2 : 文献 5-9), ホテル椿山荘東京 : 『ホテル椿山荘東京ホームページ』, <https://hotel-chinzanso-tokyo.jp/>, (参照 2020.9.15) より筆者が作成。
- ・ 表 5-3 : 筆者が作成。
- ・ 写真 5-1 : 筆者による撮影 (2020.1.14)。
- ・ 写真 5-2 : 筆者による撮影 (2020.1.14)。
- ・ 写真 5-3 : 文献 5-3), 「酒肴飯菜 丁 (文京区めじろ台)」, <https://plaza.rakuten.co.jp/yumeakinai/diary/200908140001/> (参照 2020.10.4) より抜粋。
- ・ 写真 5-4 : 文献 5-5), 「cafe 水野」, (参照 2020.10.4) より抜粋。
- ・ 写真 5-5 : 筆者による撮影 (2020.1.14)。アプローチ部分の屋根は後に増築したものとみられる。
- ・ 写真 5-6 : 筆者による撮影 (2020.1.14)。アプローチ部分の屋根は後に増築したものとみられる。
- ・ 写真 5-7 : 文献 5-3), 「《審美眼を磨くことができる水野蔵左衛門氏の日本料理店》三味匠蔵@東京都文京区目白台」, 2009.9.28, <https://plaza.rakuten.co.jp/yumeakinai/diary/200909280001/>, (参照 2020.8.28) より抜粋。
- ・ 写真 5-8 : 文献 5-3), 「《審美眼を磨くことができる水野蔵左衛門氏の日本料理店》三味匠蔵@東京都文京区目白台」, 2009.9.28, <https://plaza.rakuten.co.jp/yumeakinai/diary/200909280001/>, (参照 2020.8.28) より抜粋。写真中央左には書院造である C 棟の一部が確認でき、図面では記載されていないが、濡れ縁が回っていることが確認できる。また、A 棟室内のドア枠のデザインがガラスの反射から確認できる。

- ・写真 5-9 : 文献 5-3), 「《審美眼を磨くことができる水野蔵左衛門氏の日本料理店》三味匠蔵@東京都文京区目白台」,
2009.9.28,<https://plaza.rakuten.co.jp/yumeakinai/diary/200909280001/>, (参照
2020.8.28) より抜粋。

注釈

- 5-1) : 文献 5-1), 「102 仕上表」
- 5-2) : 水野の秘書北川氏へのヒアリング (2020.1.14) による。
- 5-3) : 文献 5-2), 「日藝とは 日藝の沿革」(参照 2020.9.5)
- 5-4) : 文献 5-4), 「8. 施設・設備」, p.8, (参照 2020.8.27)
- 5-5) : 文献 5-6), 「西洋おじや…cafe で学んだこと。」, 2018.3.22, (参照 2020.9.5)
- 5-6) : 水野の秘書北川氏へのヒアリング (2020.1.14) による。
- 5-7) : 文献 5-7), 「店蔵」 p.1606 によると、「江戸で初めて造り出された土蔵造りの店舗。一般的な塗屋造りより耐火性がある。通常は 2階建て で、1階前面には土戸をたて、他の開口部にはすべて厚い土塗りの観音扉を入れる。屋根は瓦葺き、大棟は箱棟とし、厚い鉢巻と腰巻を回す。1階は売場としてしばしば床下に穴蔵を設け、2階は商品置場、丁稚小僧の共同の寝室及び番頭専用の居室から成る。台所、便所および下女の住居は別棟とする。」とあり、「水野レストラン」の B 棟と合致する点 (下線部分) が多い。
- 5-8) : 文献 5-8), 内田青蔵:「和洋の対立と融合 日本の近代住宅」, p.43 明治 18-19 (1885-86) 年の内務省の官舎規定によれば、大臣官舎として「煉瓦造洋館及び和館」とあり、和洋館並列型を採ることが定められている。そして、内務大臣官舎ではないが、明治 25 (1892) 年の内大臣官舎は、実際、和館と洋館からなる姿で建てられていたのである。このことから、明治 20 年代 (1890 年代) には和洋館並列型住宅は上流層の住まいの形式として広く浸透していたと考えられる。なお、この和洋館並列型住宅の洋館は、当時の著名な建築家の手になるものも多かった。その作風は、古典系の様式建築で、木造とともに煉瓦造や石造によるもので、明治後半になると渡辺千秋邸や松本健次郎邸のようにアール・ヌーヴォーの影響を受けたもの、大正期から昭和初期になるとスパニッシュの影響を受けたものや、前田侯爵邸や朝香宮邸のようにアール・デコ様式といったヨーロッパの新様式を反映した作品も見られた。
- 5-9) : 文献 5-3), 「《審美眼を磨くことができる水野蔵左衛門氏の日本料理店》三味匠 蔵@東京都文京区目白台」,
2009.9.28,<https://plaza.rakuten.co.jp/yumeakinai/diary/200909280001/>, (参照
2020.8.28) より抜粋。
- 5-10) : 文献 5-9), 「ホテル椿山荘東京の歴史」, <https://hotel-chinzanso-tokyo.jp/garden/history/> (参照 2020.9.4)
- 5-11) : 五島慶太 (1882-1959) は東急グループの創設者である。

- 5-12) : 文献 5-10), 「ONESTORY」, <https://www.onestory-media.jp/post/?id=3543> (参照 2020.9.5)
- 5-13) : 文献 5-11), 鶴飼貞男・藤森照信 : 「対談 鶴飼貞男氏 (うかい代表取締役社長) × 藤森照信氏 (東京大学生産技術研究所教授、建築家) 本気の偽物が"新しい本物"を生む 遊び心に満ちた現代の数寄屋たち 特集 平成クライアント列伝--企業価値の向上見据え、建築をゆっくり育てる」, pp.76-81
- 5-14) : 文献 5-12), 中原暢子 : 「建主の個性を基礎に」, p.60

第6章 「和風」と「機能主義」の展開

6.1 第6章の概要

中原設計の住宅は、第Ⅱ期の農村住宅の設計時においては、農村住宅の近代化に関するこれまでの研究や施策の方針を十分に理解しながらも、基本的には建築主の要求を柔軟に受け入れ現実的な対応を行った結果、すべての農村住宅に続き間座敷や座敷を設けてきた。第Ⅲ期には、これまで農村住宅にほぼ限定されていた本格的な座敷がほとんどの住宅に拡大した時期である。一方、池辺から学んだ「機能主義」は構造表現主義の作品としてデザインに強く表出することは少なくなるが、平面計画や構造計画において「機能主義」が目指した合理主義的な方向は維持し続けていることを確認する。

6.1.1 本章の研究の背景

1976年6月号の『住宅建築』には、「木村別邸（K別邸）」「高橋邸1（T邸）」「長谷川邸（H邸）」の3作品が掲載されている。本研究で分類している時代区分では、それぞれ第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期に該当する。「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」は構造表現主義の混構造の作品であり、RC造のスラブに正方形を2つ重ねたプランに木造トラスを使った屋根をかけ、洋室と和室が混在している。「高橋邸1（扇形の家/Ta氏邸/T邸/Ta邸）」は、扇状に開いた平面に緩勾配の屋根がかかっている。全体が洋室で本格的な座敷が居間に向かって開いている。「長谷川邸（H邸）」は、床の間、書院、飾り棚を設え、縁側をまわした本格的続き間座敷（9畳・8畳）で、仏壇のある次の間に続いて茶の間（6畳）を配置し、3室を続き間として利用できるようにしている。これに接して2階建ての洋風の日常生活部分が配置されている。

中原は、これらの解説として「施主の個性を基礎に」という文章を掲げ、「…（中略）…従来からの住まい方を否定して、他のものに置き替えることによって、人間性と空間の新しい創造を試みる建築家も多く、建主とたたかい、建主の考え方をかえてまで新しい住生活の解決に努力しているすぐれた建築家もいる。しかし私はそんなにがんばるつもりはない。」⁶¹⁾と述べている。本章では、このような基本的な認識の下で設計された「和風」住宅の展開を把握する。

6.1.2 本章の目的と分析方法

第Ⅲ期の中原の設計する住宅に和風を感じさせる傾向がみられることから、中原作品の和風について明らかにするとともに、池辺から学んだ「機能主義」がどのような形で作品の中に存在しているのかを明らかにする。そのため、この期の典型的な和風住宅を取り上げ、具体的に検討する。次に「和風」や「機能主義」がどのように変化したかを把握し、この第Ⅲ期の特徴を明らかにする。本章の研究対象を下記に示す（表6-1）。

表 6-1 中原設計の設計年の明らかになった住宅一覧

No.	作品名	設計年	時代区分	座敷種類の有無					間取り	和室 + : 続き間 · : 和室が独立しているもの	
				客用座敷の種類			和室の種類				
				「本格的 続き間座 敷」	「続き間 座敷」	「単独座 敷」	該当なし	続き間			床の間付 き和室
1	吉岡邸	1958	第I期		○			○	5(2w・3)Lw/DK	客間8(踏込床)+居間8(地袋棚)+和室6	
2	本橋邸	1959				○				2(1w・1)LDK	和室6(踏込床)
3	矢島商店	1961			○				○	5(3w・2)Lw/D/K	和室6(本床・地袋棚)+和室(寢室)7.5・和室4.5・和室(居間)6
4	茂木邸	1960					○			5(4w・1)K(3Lw/Dw/K)	和室6・和室6・寢室6・子供室3・子供室3
5	榊邸	1960					○			2(1w・1)L/DK	寢室6
6	平田邸(H邸)	1960頃					○		○	4(2w・2)LDK	老人室8(踏込床・地袋棚)+和室6(地袋棚)
7	芳賀邸	1961					○		○	4(1w・3)L/Dw/K	食室6(床・地袋棚)+寢室? (床)
8	吉永邸(通り庭のある家)	1961				○			○	2(2w・0)Lw/DK	居間6(飾り棚)+書斎8(仏壇・地袋棚)+茶室4.5(踏込床・中棚)
9	長寛院(庫裡)	1961			○				○	3(3w・0)Lw/DK	和室8(本床)+和室(寢室)6(踏込床)+子供室2・居間4.5
10	辻別邸	1961								4(2w・2)LDK	和室8・和室6
11	田口邸1	1961				○			○	4(2w・0)LDK	和室6(本床・飾り棚)+和室(寢室)6(床)
12	十肥邸	1962					○		○	5(2w・3)L/DK	和室6+和室4.5
13	増山邸	1962					○			2(2w・0)LDK	寢室6・子供室4.5
14	吉田邸	1962					○			3(2w・1)LDK	寢室6・老人室6(仏壇)
15	岡邸	1963					○		○	5(3w・2)L/DK	客室6(踏込床・違い棚)+茶室4.5(踏込床)+和室(寢室)8(踏込床)
16	渡辺邸	1963					○		○	4(1w・3)LDK	寢室6(踏込床・地袋棚)
17	岡部医院(O氏邸/岡部邸)	1964								4(1w・3)LDK	和室4(飾り棚)
18	木村別邸(K氏別邸/下品山の家)	1965				○				5(3w・2)L/DK	茶室4.5(織部床)+寢室10・寢室8
19	飯草邸	1966		○				○	5(3w・2)L/Lw/Dw/DKd	和室8(踏込床)+居間8(中棚)+老人室6・和室(居間)6(仏壇)+寢室8	
20	芝崎邸	1966					○	○	4(3w・1)Lw/Dw/K	居間8(本床)+食室6(中棚)+寢室8・子供室4・子供室4	
21	立川邸1(若夫婦の家)	1966							3(2w・1)L/DK	和室6(本床)+和室(居間)6・寢室8	
22	坂本邸(雁行した家)	1966							4(2w・2)Lw/K	和室8(本床)+和室(寢室)6(仏壇)+居間6	
23	秋永邸(住宅部分)	1967							5(1w・4)L/D/K	寢室8	
24	仲林邸(鉄筋コンクリートの家)	1967		○				○	6(4w・2)L/Lw/DK	客室8(踏込床・飾り棚)+寢室8(地袋棚)+寢室6(踏込床)+居間6(仏壇)	
25	安藤邸1	1967			○				7(4w・3)L/DK	和室8(踏込床)+寢室6・客間6・予備室4.5	
26	安藤邸2	1967			○				5(3w・2)L/DK/Dw	和室8(踏込床)+和室(寢室)6・茶の間6・予備室3	
27	横田邸(大屋根の家)	1968以前						○	6(5w・1)Lw/DKd	寢室8(踏込床)+老人室6(仏壇)+茶の間7.5・個室7.5・個室5.5・個室6	
28	高橋邸1(彫師の家/Ta氏邸/T邸/Ta邸)	1968			○				5(1w・4)LDK 1(0w・1)LDK	和室6(本床・仏壇)	
29	高橋邸2	1968					○		3(1w・2)LDK	老人室6(埋め込んだ棚)	
30	戸田邸	1969							2(0w・2)LDK	(和室なし)	
31	水野レストラン	1969						○	3(2w・1)L/DK	和室寢室10(踏込床)+私室4.5	
32	篠崎邸	1969		○					5(2w・3)LDK	和室6(踏込床)+和室4.5	
33	松田医院	1969							4(2w・2)LDK	老人室6・寢室6	
34	立川邸2	1970						○	4(4w・0)L/DK	寢室8(踏込床・地袋棚)+寢室8(踏込床・地袋棚+仏壇)+客室6(本床・地袋棚)+個室8	
35	塚邸1	1970							4(0w・4)LDK	(和室なし)	
36	熊沢邸(桶生の家)	1970		○					6(3w・3)L/DK/Dd	和室10(踏込床・仏壇)+和室8・和室6(織部床)	
37	神崎邸	1970						○	6(3w・3)L/Lw/Dw/K	茶の間4.5(仏壇)+寢室(本床・違い棚)+和室4.5・予備室6	
38	横山邸	1971							7(6w・1)L/Lw/DK/Dd	和室8(本床・違い棚)+和室8・居間6・和室8・和室6・和室4.5・子供室4.5	
39	鈴木邸1	1971				○			2(1w・1)L/Dw/K	和室6(本床)	
40	志村邸	1971頃			○				7(3w・3)Lw/DKd	客室8(本床・違い棚)+寢室8・子供室6(踏込床)+茶の間8(仏壇)	
41	竹内邸	1972					○	○	5(3w・2)Lw/DK	居間8(飾り棚・仏壇)+寢室8(本床・神棚)+予備室6(踏込床)+書斎4.5(地袋棚)	
42	松本邸	1972					○		6(3w・3)L/Dw/K	和室8(踏込床・飾り棚・棚)+和室6(棚)+茶の間8(電話台+仏壇)+寢室7.5	
43	前田別邸(M氏別邸)	1972						○	2(2w・0)LDK	寢室6(踏込床・中棚)+和室6(踏込床・中棚)	
44	天満邸	1973						○	3(2w・1)L/DK	和室6(本床)+老人室9(本床)	
45	四柳邸(Y氏邸)	1972						○	4(2w・2)L/DK	和室(老人室)5(本床・地袋棚)+和室(寢室)6(踏込床・地袋棚)	
46	高塚邸	1974						○	4(2w・2)LDK	寢室(寢室)8(本床)+和室6(本床)	
47	沢柳邸	1973						○	5(4w・1)L/DK	客室8(本床)+子供室6・子供室6・和室(寢室)5	
48	長谷川邸(H邸)	1974		○					3(3w・0)L/D/Dw/K	和室8.5(本床・飾り棚・書院)+和室8(仏壇)+茶の間6・寢室8	
49	前田邸	1974							3(1w・3)LDK	和室(客室)6(踏込床・中棚)	
50	田口邸2	1975					○	○	4(2w・2)L/DK	老人室5(水皿)+寢室6(本床)	
51	小杉邸	1976							4(2w・2)Lw/D/K	客室6(踏込床)+居間8・寢室6	
52	堤邸2	1978		○					8(5w・3)Lw/D/K	和室12(本床・書院)+和室8+仏間3(仏壇)+客室8+茶の間8	
53	京橋邸	1979						○	4(2w・2)LDK	書斎8(踏込床)+和室6(仏壇)	
54	山本邸	1979							5(2w・3)LDK	老人室6(地袋棚+仏壇)+予備室4.5(踏込床)	
55	藤野邸(現・田中正造記念館)	1979		○					4(3w・1)L/DK	和室10(本床・地袋棚)+和室6(本床・地袋棚+仏壇)+予備室3	
56	西川別邸(千葉の家/N氏別邸)	1981							2(2w・0)LDK	和室8・寢室6	
57	佐野邸	1981		○				○	1階:5(5w・0)L/D/K 2階:4(1w・3)L/DK	和室(茶室)6(織部床・地袋棚)+茶室(本床・地袋棚)8・寢室8(踏込床)+茶室3.75(本床)+和室8(本床)+老人室5.5	
58	斎藤邸(Kさんの家/斎藤邸)	1981		○					7(4w・3)L/D/K	和室8(本床)+和室8(踏込床)+茶室3(本床)+和室(茶室)4.5(踏込床・棚)	
59	鈴木邸2	1982							4(1w・3)LDK	和室6(織部床)	
60	田邊邸	1984						○	6(2w・4)Lw/DK	居間8(踏込床・違い棚)+寢室8・予備室6	
61	千代田養神堂	1984						○	4(2w・2)Lw/DK	和室6(踏込床・書院)+和室(寢室)6・居間4.5(仏壇+神棚)	
62	中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家)	1985		○					6(3w・3)DK	茶室8(本床・地袋棚+仏壇+書院)+茶室8(本床・地袋棚)+茶室3.75(本床)	
63	中原邸	1985							4(1w・3)L/DK	和室7.5	
64	石垣邸	1986						○	5(1w・4)DK	和室(居間)8(織部床)	
65	森邸	1987						○	5(3w・2)Lw/DK	茶室8(本床・地袋棚)+茶室3.75(本床)+和室(寢室)8(本床・書院)+居間(仏壇)8	
66	山田邸	1987							7(2w・5)LDK	茶室8(本床)+小間茶室4.5(本床)	
67	村上邸	1988							1階:2(1w・1)L/DK 2階:2(1w・1)LDK	和室6(本床・仏壇)+和室6	
68	戸部邸	1989						○	6(3w・3)LDK	夫婦室(寢室)6(踏込床)+夫室4+老人室6(本床)+居間4(踏込床)	
69	木所邸	1988						○	1(1w・0)LDK	和室(寢室)10(本床)	
70	寺内邸	1988以前							5(2w・3)LDK	和室8(踏込床・飾り棚+中棚)+寢室6(引き出し棚)	
71	増田邸	1989							4(1w・3)LDK	和室8(踏込床)	
72	大関別邸	1998							1(1w・0)LDK	寢室6	

注: 水屋、女中室、納戸等は対象外とする。

「間取り」欄の数値は、個室の部屋数を示し、wは和室、dが土間、oが外部、Lは居間、Dは食事室、Kは台所、/は室の独立を示す。
「和室の詳細」欄において、図面に室名の記載がない、または量の量数のみの表記の場合は「和室」と表記する。室名の後()は、室名だけでは判別できないその室の用途を、その後の数値は敷いてある量の量数を、その後の()は床の間の設置を示す。

6.2 「和風」と「機能主義」に関する語句の定義

6.2.1 「和風」に関する語句の定義

中原が和風住宅について定義したものはない。中原の師である池辺は、伝統論争⁶⁻²⁾が激しく行われていた時期に「和風と現代住宅」⁶⁻³⁾（1955年6月）の中で、「和風という言葉は海外の住宅が日本に入ってきたことによるこれまでの住宅を総称して和風といった相対概念であり、元からはっきりした定義はない」と述べ、「これまでの日本の住宅の良さを現代に生かすことが重要でそのようなものはすべて現代住宅である」としている。瓦屋根の外観も和風とは考えず、現代住宅として評価している。例えば、前川國男の「笠間邸」⁶⁻⁴⁾（写真6-1、図6-1）（1938）（担当：丹下健三）を挙げて、「（笠間邸は、）鋭い屋根の線に農家の力強さを感じさせながら、よくありがちな民芸的な甘さを持っていません。…（中略）…いわゆる和風建築でも洋風建築でもなく、はっきりと現代の住宅のものです。」と論じている。

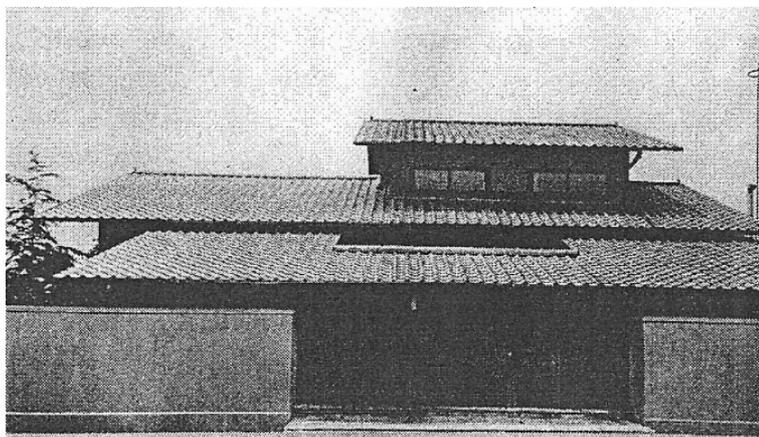


写真 6-1 前川國男設計「笠間邸」（1939）

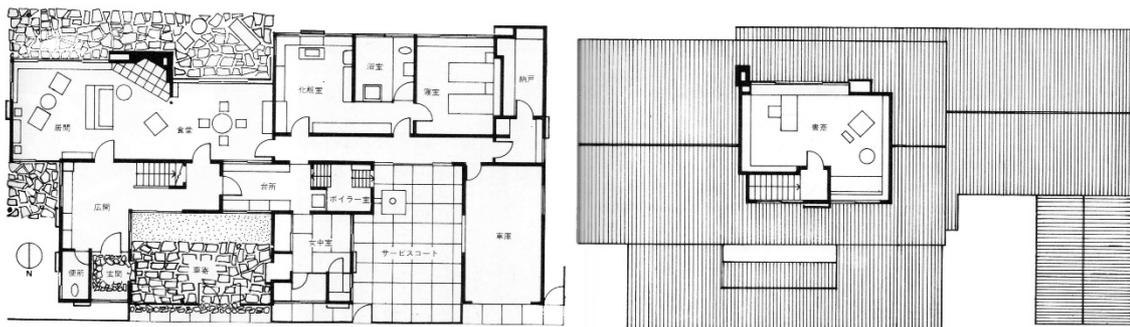


図 6-1 前川國男設計「笠間邸」（1939）平面図（左：1階平面図 右：2階平面図）

さらに池辺は、「住宅 No.0（関西の家）」（1945）（写真6-2、図6-2）を設計するが、そのメモには「このような純日本風建築は、昔のもの以上にはできないのではないかと疑問から、No.1で方向を見出す。」⁶⁻⁵⁾と書かれており、これを契機として作品の方向性が現代建築としての純和風建築の追求は断念し、新たな方向を模索することになる。その具体的な展開は「住宅 No.1」以降であると述べている。

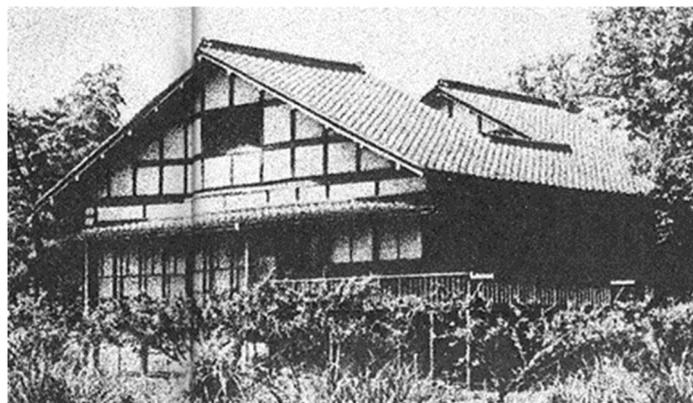


写真 6-2 池辺陽設計「住宅 No. 0 (関西の家)」(1945)

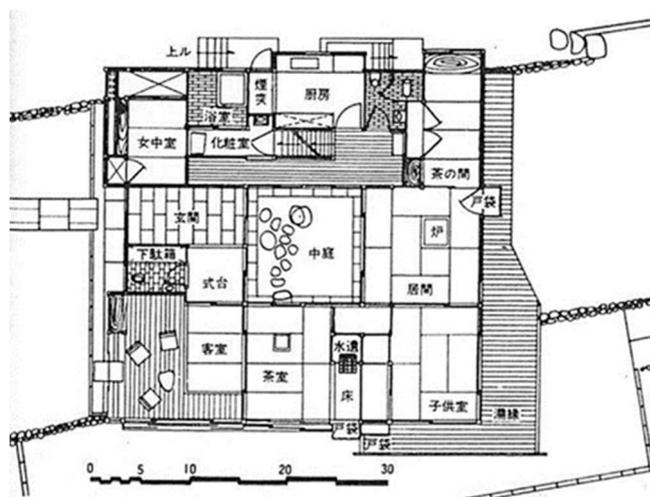


図 6-2 池辺陽設計「住宅 No. 0 (関西の家)」(1945) 1階平面図

池辺は住宅の機能として接客機能の重要性は認めているが、その形態には言及していない。また、何をもって和風とするかについて、菅見の限り池辺の明確な言説はない。外観は技術の発展や都市化の進行によって木造の伝統的な外観を都市住宅で実現することは困難で、これらを和風の指標とすることは不可能のため、内部空間の伝統的様式の中核をなす床の間のある座敷と他室との連続性（続き間）をその指標とする。

改めて定義すれば和室とは、畳の敷き詰められた室をいい、座敷とは、床の間を設えた接客に用いる和室をいう。このように座敷を設えた住宅をここでは「」を付けて、「和風」住宅と定義する。なお、「和風」とは、和室に座敷飾りを設えたものをいう。

なお、中原設計の「和風」住宅を分析するにあたり、室名が和室となっているものうち、客間としての「座敷」として使用されるものか、家族用としての「床の間付き和室」を分けておく必要がある。しかし、居住者の家族構成は、不明なものがほとんどである。老人室や子供室は室名として書かれているものが多いが、夫婦の寝室として使用する室は「和室」とのみ書かれているものもみられる。そのため、平面図より他室との関係や動線等を確認し、その和室が「座敷」であるか「床の間付き和室」であるかを判断した。

6.2.2 中原暢子と浜口ミホの「床の間追放論」

住宅を設計する上で中原に大きな影響を与えたものに、1949年に建築家の浜口ミホ(1915-1988)の「床の間追放論」⁶⁻⁶⁾がある。床の間には、身分の上下に関連する格式的要素と芸術鑑賞のための場所という二つの性格があり、このうち格式的要素が継承されることを批判し床の間の追放を訴えた。

日本建築史家である太田博太郎(1912-2007)は、「床の間が生活に潤いをあたえるものであるならば、『客間ではなく、家族の生活の場である居間になければならない』という浜口ミホの床の間追放論(『日本住宅の封建性』)は至極もつともである。」⁶⁻⁷⁾と述べている。このような考え方の延長線上に設計同人の山田設計のデュアルリビング(ツインリビング)を採用した「鎌倉の家(材木座の家)」(1979)(図6-3)のフォーマルリビング(写真6-3)のしつらい(室礼)があり、山田は以下のように述べている。

「日常は動かしやすい小振りの椅子を配置しているが、その椅子をファミリールームに移動させると、「空な空間」が現れる。そこへ礼室の仕方で「晴」から「褻」まで、実に劇的にこの舞台は変貌していく。緋毛氈⁶⁻⁸⁾を敷くと格調高く、改まった客を迎え入れるのに相応しい礼室となる。親の代からの紫檀の戸棚とガラス棚などには季節の飾り付けを行い、ときには旅先から持ち帰った面白いものをしばらく眺める場となり、訪れる人に話題を提供している。この場は、私が原稿書きで散らかすことがない限り、常に整然と整えられ、清々しい透明感がある。…(中略)…昔の座敷の知恵に学ぶことは多い。」⁶⁻⁹⁾

これは、リビングにおける床の間の機能をフォーマルリビングに示した事例である。同じ事務所に所属しながらも、中原には、山田のように、床の間の空間を洋室の中に計画するような作品はみられず、接客空間として日本の伝統的様式に従った床の間を備えた座敷を多く設計した。

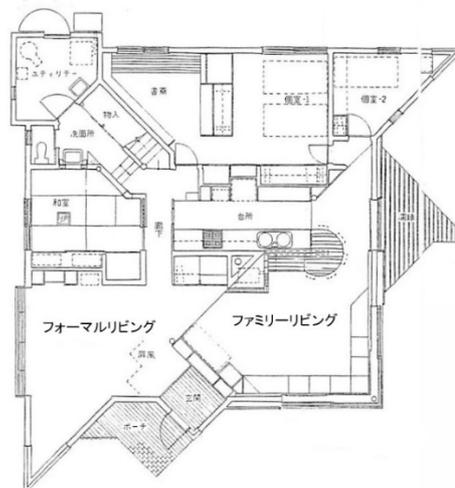


図6-3 「鎌倉の家(材木座の家)」(1979)1階平面図

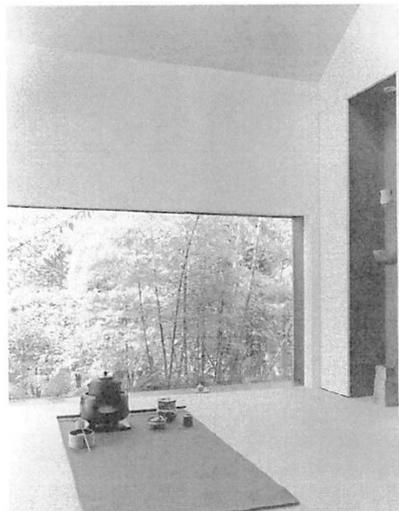


写真 6-3 「鎌倉の家（材木座の家）」（1979）フォーマルリビング

6.2.3 「機能主義」に関する語句の定義

機能主義という考え方には、様々な定義があるが、ここで用いる機能主義は、池辺が『すまい』（1955）で定義した機能主義である。この池辺の機能主義に「」を付けて、「機能主義」と表現する。住居のすべてを機能に還元する考え方で、「生活機能」「空間機能」「構成機能」さらに「視覚機能」から考える。端的に言えば、すでにある形を選択するのではなく、求められる機能から改めて考え直すという態度である。生活機能は住居を生活から考えるという意味であり、「寝る場所」、「食べる場所」等の機能から形を求める考え方である。空間機能は池辺の場合、日照、通風、換気など環境工学的側面を扱っており、この機能を規定する領域を空間機能としている。構成機能は、構造と設備の問題に対応している。視覚機能は、美的問題や芸術的問題を視覚機能としてとらえると述べている。構造表現主義は構成機能の構造と視覚的機能にまたがる問題で、構造を露出ことによって、住居に視覚的な機能を与えるという考え方である。

6.3 中原暢子設計の「和風」住宅の特徴

本章では、和室住宅を、続き間でない単独の座敷の「単独座敷」、いずれか一方が接客以外の用途には供しない「続き間座敷」、両室とも接客以外の用途には供しない「本格的続き間座敷」に分類し、「和風」住宅と定義する。このような観点から対象の住宅を検討したものが、表 6-2 であり、これを期別にまとめたものが図 6-4 である。

表 6-2 中原設計の接客空間の取り方

No.	作品名	和室										洋室	
		座敷	次の間	仏間	客室1	客室2	茶の間	縁起	老人室	書斎	応接室		
第I期	9 長覚院軍禮	8.0 床の間					6.0 床の間						
	1 吉岡邸	8.0 床の間 テラス				8.0 縁起 縁・テラス							
	3 矢島商店	6.0 床の間					7.5						
	15 岡邸	4.5 床の間 バルコニー		8.0 床の間	8.0 床の間								
	8 吉永邸 (通り庭のある家)	4.5 床の間 濡れ縁				6.0				8.0			
	2 本橋邸	6.0 床の間											
	11 田口邸1	6.0 床の間											
	18 木村別邸 (K氏別邸/下呂山の家)	4.5 床の間											
	12 土肥邸					4.5	6.0						
	4 茂木邸												
	5 神邸												
	6 茅田邸 (旧邸)												
	7 芳賀邸												
	10 辻別邸												
	13 増山邸												
	14 吉田邸												
	10 渡辺邸												
17 岡部医院 (O氏邸)													
第II期 農村住宅	7 熊沢邸 (樹生の家)	10.0 床の間 仏壇	8.0										
	8 横山邸	8.0 床の間 濡れ縁	8.0										
	1 飯草邸	8.0 床の間 縁側				8.0							
	2 立川邸1 (若夫婦の家)	8.0 床の間 縁側				8.0 縁側							
	3 坂本邸 (兼行した家)	8.0 床の間 縁側				6.0 仏壇 縁側							
	4 柳林邸 (鉄筋コンクリートの家)	8.0 床の間 縁側				8.0							
	10 志村邸	8.0 床の間 縁側				8.0							
	6 立川邸2	6.0 床の間				8.0 床の間	8.0 床の間	8.0 仏壇					
	9 鈴木邸1	6.0 床の間						8.0 縁側	8.0 縁側				
	5 横田邸 (大隈根の家)							8.0 床の間	6.0 縁側		7.5		
	第III期 農村住宅を除く	9 藤崎邸	6.0 床の間 濡れ縁	4.5									
		3 安藤邸1	8.0 床の間 縁側						6.0				
		4 安藤邸2	8.0 床の間										
		5 高橋邸1 (扇形の家/ta氏邸/7a邸)	6.0 床の間 仏壇 濡れ縁									約7.5	
		1 芝崎邸					8.0 床の間 濡れ縁	6.0					
		12 神崎邸						4.5	6.0 縁側	6.0 床の間			
		2 秋永邸											
6 高橋邸2													
7 戸田邸													
8 水野レストランジ棟													
10 松田医院													
11 堤邸1													
第IV期		12 堤邸2	12.0 床の間 書院 縁側	8.0	8.0 仏壇	8.0					8.0		
		8 長谷川邸 (旧邸)	8.5 床の間 書院 縁側	8.0	仏壇						6.0		6.0 土間
		15 藤野邸 (塚田中正澄記念館)	10.0 床の間 入側	6.0	仏壇								
		2 松本邸	8.0 床の間 広縁	6.0									
		14 山本邸	4.5 床の間									6.0 仏壇 広縁	
	5 岡崎邸 (I氏邸)	6.0 床の間 縁側			8.0 床の間 バルコニー								
	13 京極邸	6.0 床の間 仏壇 濡れ縁											
	3 前田別邸 (K氏別邸)	6.0 床の間 バルコニー											
	4 天満邸	6.0 床の間											
	6 高塚邸	6.0 床の間											
	7 沢柳邸	8.0 床の間 濡れ縁											
	11 小杉邸	6.0 床の間 濡れ縁											
	9 前田邸	6.0 床の間											
	1 竹内邸							8.0 仏壇		8.0 床の間		11.0	
	10 田口邸2									8.0 床の間	8.0		
	2 佐野邸	8.0 床の間 縁側	6.0 床の間						3.0 床の間				
	3 斉藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)	8.0 床の間 バルコニー	8.0 床の間 バルコニー						4.5 床の間 バルコニー	3.0 床の間			
7 中原自邸 (茶室のある家/自邸/瀬和の家)	8.0 床の間 仏壇・書院	8.0 床の間									約7.5		
6 千代田素神堂								6.0		6.0 床の間	18.0		
10 森邸	8.0 床の間							3.0 床の間	8.0 床の間				
11 山田邸	8.0 床の間 入側							4.5 床の間					
12 村上邸	6.0 床の間 仏壇										約8.0		
15 寺内邸	8.0 床の間 濡れ縁										約10.0		
5 田邊邸								8.0 床の間		8.0			
1 西川別邸 (千葉の家/西川別邸)								8.0					
9 石尾邸											12.0		
4 鈴木邸2													
8 中原邸													
16 増田邸													
13 戸部邸													
14 木所邸													
17 大岡別邸													

注：掲載順は、各時代区分毎に座敷の性格が強い順としている。
各作品の上段の数値は、室の座敷を、その下段以降には、床の間や仏壇、縁側等がある場合に表記している。
点線は、隣に記載の室と続き間であることを示す。
着色部分は、接客空間を示している (凡例参照)。

凡例
■：「本格的な座敷」
■：「続き間座敷」
■：「単独座敷」
■：「応接室」

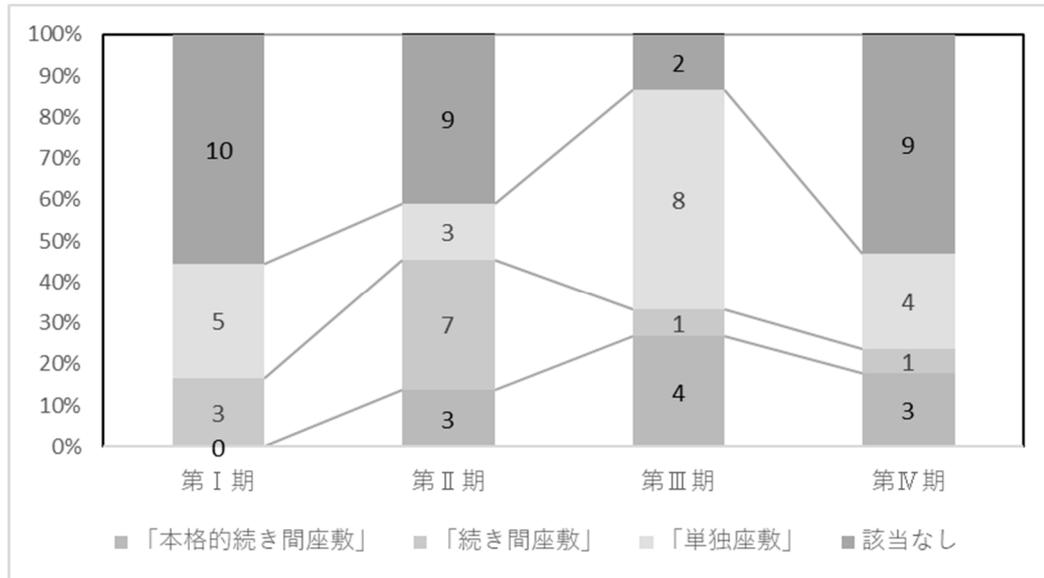


図 6-4 各期別座敷の種類別住宅件数の推移

このように、第Ⅱ期は、接客空間として「続き間座敷」をとる場合が多い。く、第Ⅲ期は、「本格的続き間座敷」を採用する割合が多く、それが確保できない場合は、「続き間座敷」または客専用の「単独座敷」をとる比率も多い。

6.3.1 第Ⅲ期の「和風」住宅の接客空間

そこで特徴のある第Ⅲ期の接客空間である「本格的続き間座敷」「続き間座敷」「単独座敷」を図面と合せて詳細をみていく。

6.3.1.1 中原暢子設計の「本格的続き間座敷」

第Ⅲ期における「本格的続き間座敷」は、「松本邸」(1972)、「長谷川邸(H邸)」(1974)、「堤邸2」(1978)、「藤野邸(現田中正造記念館)」(1979)の計4作品である。

1) 「松本邸」(1972)

「松本邸」は、床の間、飾り棚、書院のある8畳の6畳の次の間で1間の広縁が南についている。玄関を入り西側を接客空間として構成し、東側に日常空間を配置している(図6-5)。2階には7.5畳の夫婦寝室(和室)と子供部屋(洋室)3室で、洗面所、トイレが設けられている(図6-6)。1階には、11畳の居間(洋室)と8畳の茶の間と8畳の台所で構成されている。日常空間の1階はRC造、2階は木造で、小屋組は1・2階とも方形をトラスで組んでいる(図6-7)。木造とRC造の混構造である。「木村別邸(K氏別邸/下呂山の家)」同様、一方の方形屋根には、8組の木製トラスを組み、屋根中央に立つ丸太柱で金物を使って固定されている。

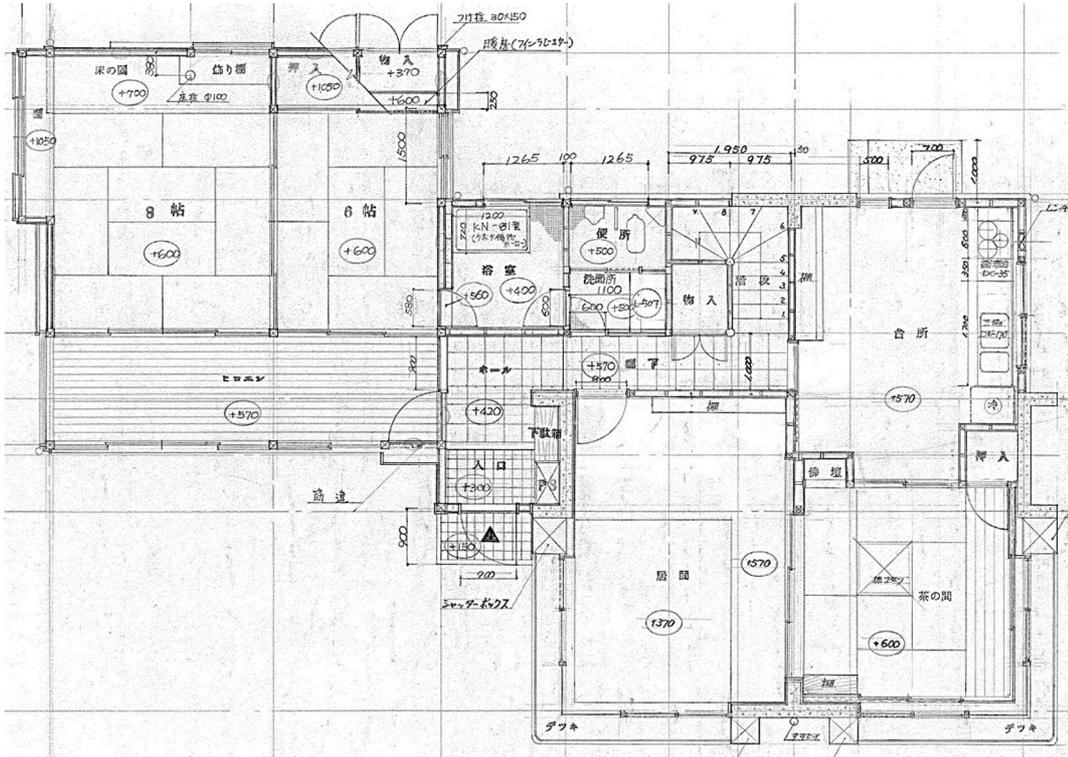


図 6-5 「松本邸」(1972) 1階平面図

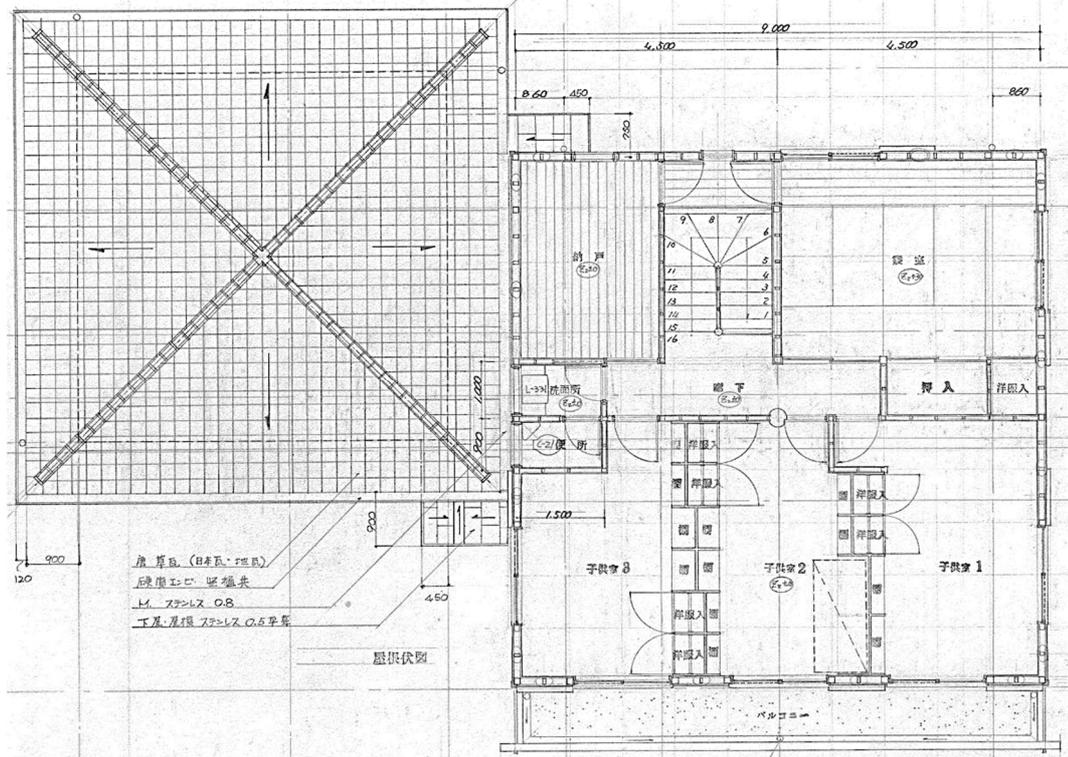


図 6-6 「松本邸」(1972) 2階平面図

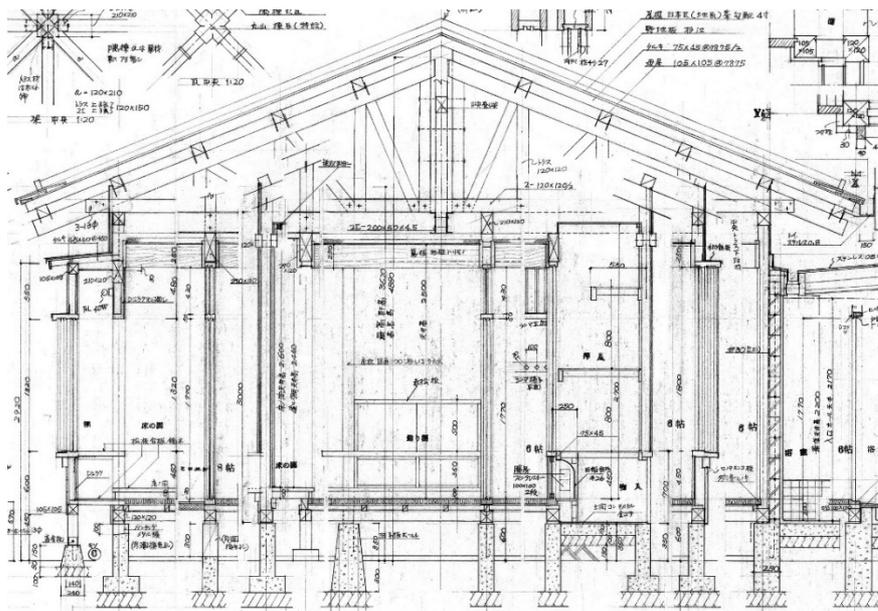


図 6-7 「松本邸」(1972) 矩計詳細図

2) 「長谷川邸 (H邸)」(1974)

「長谷川邸 (H邸)」は、床の間、飾り棚、書院を備え 8.5 畳の座敷 (写真 6-4)、仏壇を置いた 8 畳の次の間、さらに 6 畳の茶の間が南面して 1,350 mm 幅の縁側をまわした続き間を西側にまとめている (図 6-8)。この和室部分の小屋組は梁に松丸太を使用している。東側は、日常生活を中心に構成されている。2 階には寝室 (和室)、子供室、予備室含め 2 室 (洋室) が配置され (図 6-9)、1 階には食堂、台所が南北に配置され、それぞれ独立し半間の引き戸で繋げている。食堂は南面している。居間は玄関からの廊下で DK と隔てられており、居間は独立し、玄関から土足で入れる応接室を設けている。居間とは 300 mm の段差を設けているが、間に建具はなく一体的なデザインとなっており、接客空間の連続した空間と感じられる。

この東側のゾーンの小屋組は、登り梁で構成されており、中原のこれまで頻繁に使ってきた構法を使っている。

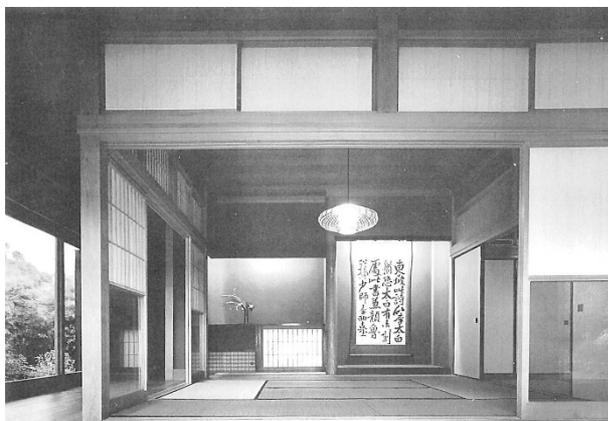


写真 6-4 「長谷川邸 (H邸)」和室 A

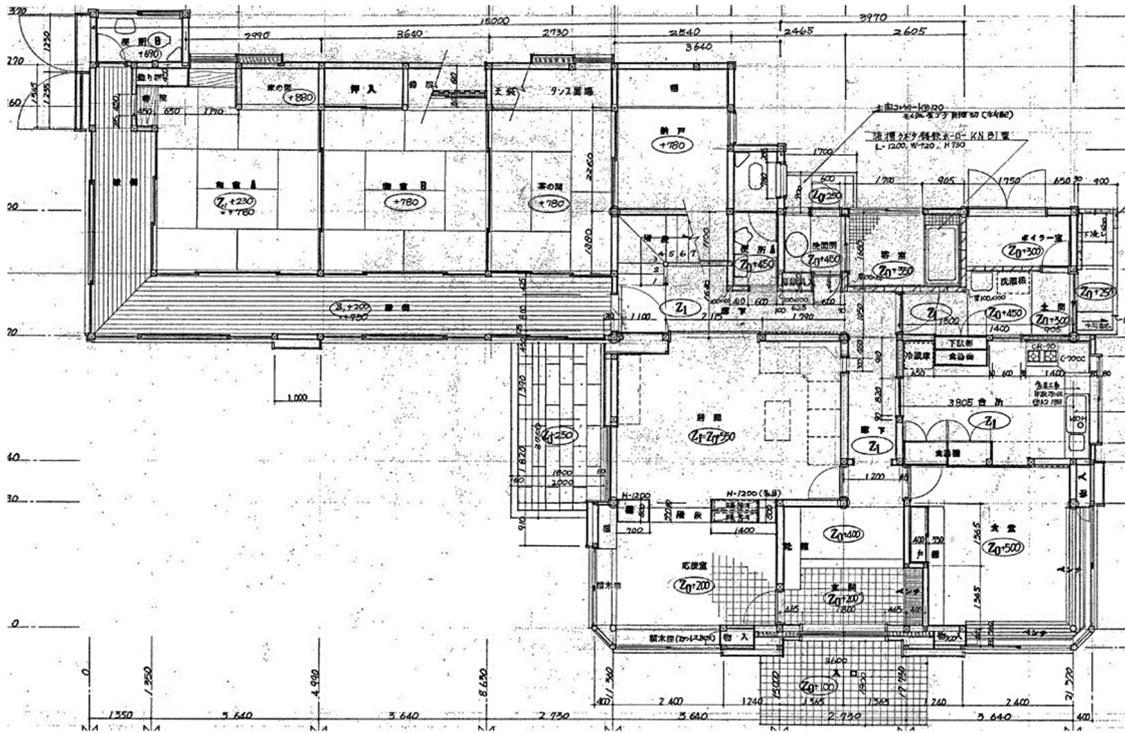


図 6-8 「長谷川邸 (H 邸)」 (1974) 1 階平面図

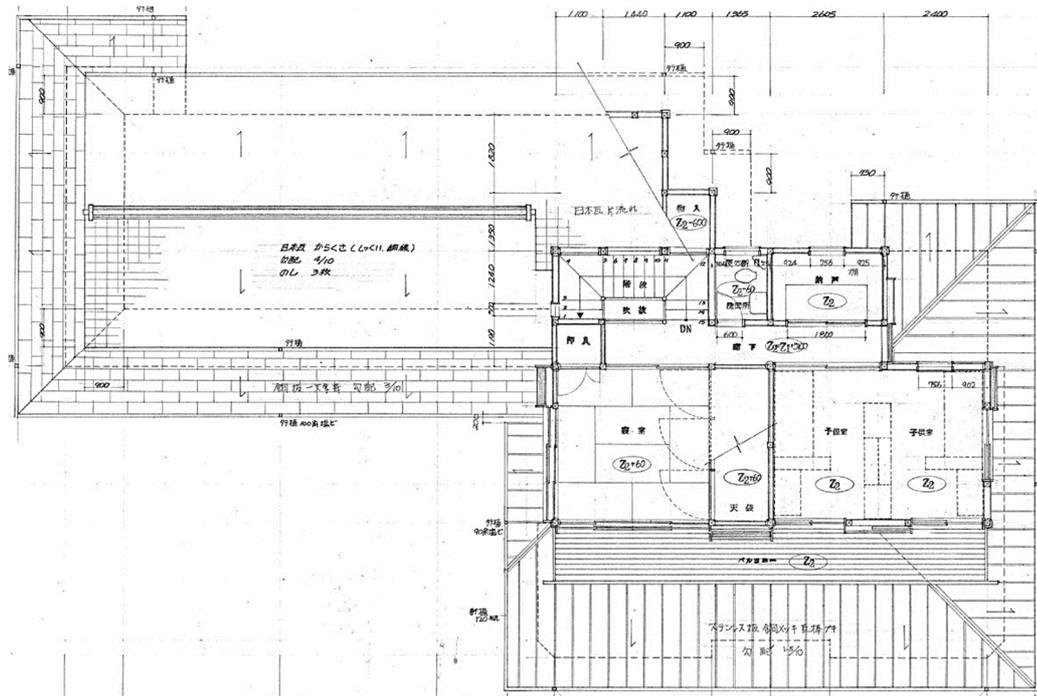


図 6-9 「長谷川邸 (H 邸)」 (1974) 2 階平面図

3) 「堤邸 2」 (1978)

「堤邸 2」 (図 6-10) は 12 畳の座敷 (図 6-11)、8 畳の次の間 (図 6-12) 及び 3 畳の仏間に 1.5 畳の仏壇設置場所を確保した和室でこれらが続き間として構成されている。単位はす

べて尺で記載されており、座敷の天井高は高く 10 尺であり、2 階建てで通し柱は 26 尺の通し柱を用いている。玄関には造り付けの椅子テーブルを置き、6 人の接客用のスペースを準備している。さらにこれに隣接した 8 畳の客室があり、土間でアプローチをとり幅 1.1 尺の檼の上がり框を 0.8 尺の高さに回している。客間の高さはこの上がり框より 0.2 尺上げている。この客室には床の間はないが、隣接する茶の間とは襖 4 枚で繋がっており続き間として使えるようになっている。

日常空間としては、2 階に夫婦寝室（和室）、子供部屋（洋室）3 室と便所を設け（図 6-13）、1 階は客室、茶の間の北側に廊下を挟んで 12 畳の食堂（洋室）と 8 畳の台所（DK）を置いている。台所は東から採光が取れるが、廊下、食堂は客室、茶の間に遮られて採光が全く取れないため、食堂には吹抜を設けトップライトから光を取り入れている。廊下にもトップライトを設けている。接客機能は伝統的な構成であるが、家族空間は機能的な構成となっている。

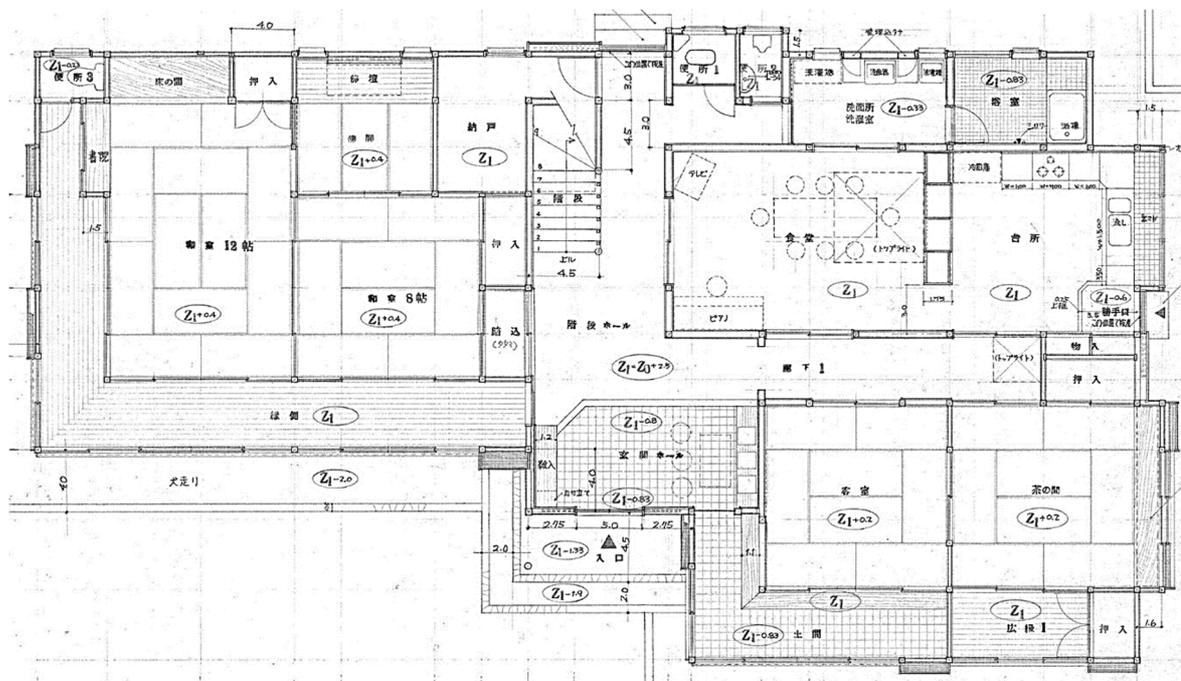


図 6-10 「堤邸 2」(1978) 1 階平面図

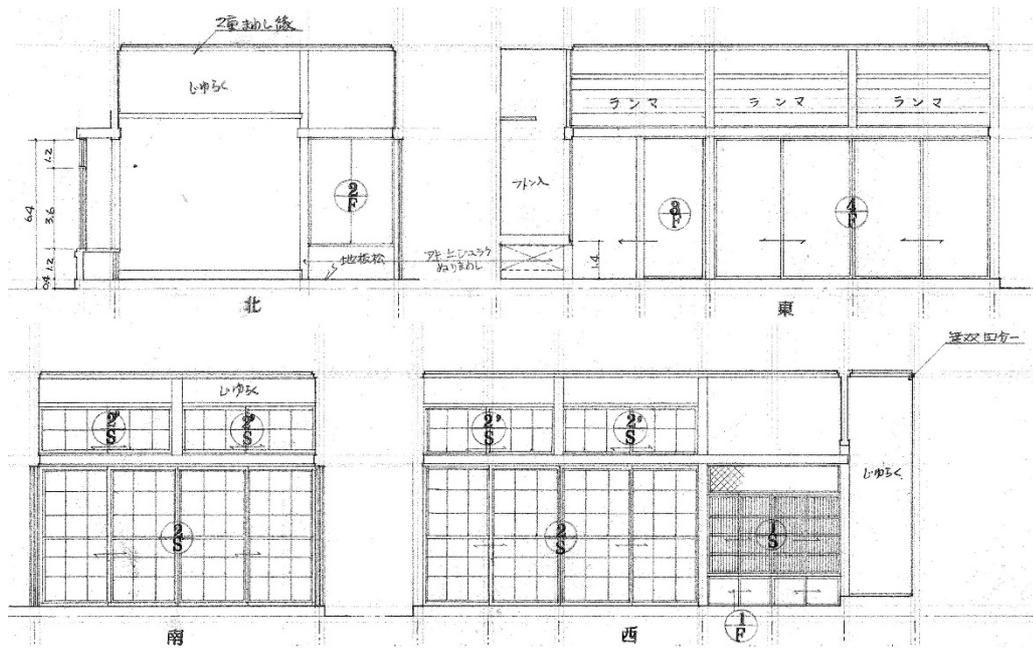


図 6-11 「堤邸 2」和室 12 畳展開図

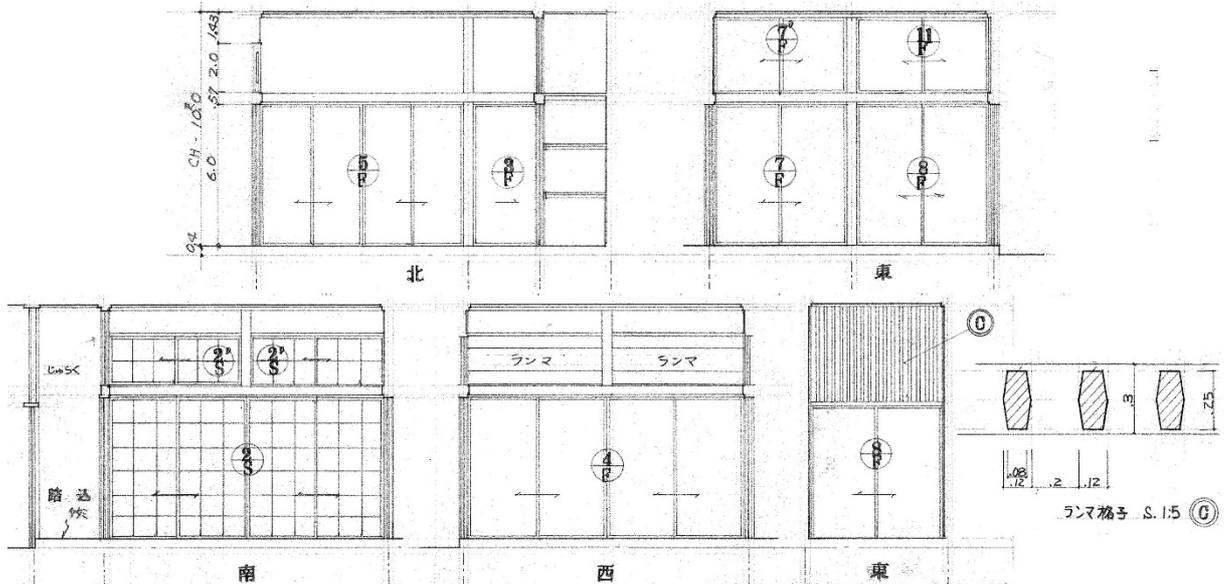


図 6-12 「堤邸 2」和室 8 畳展開図

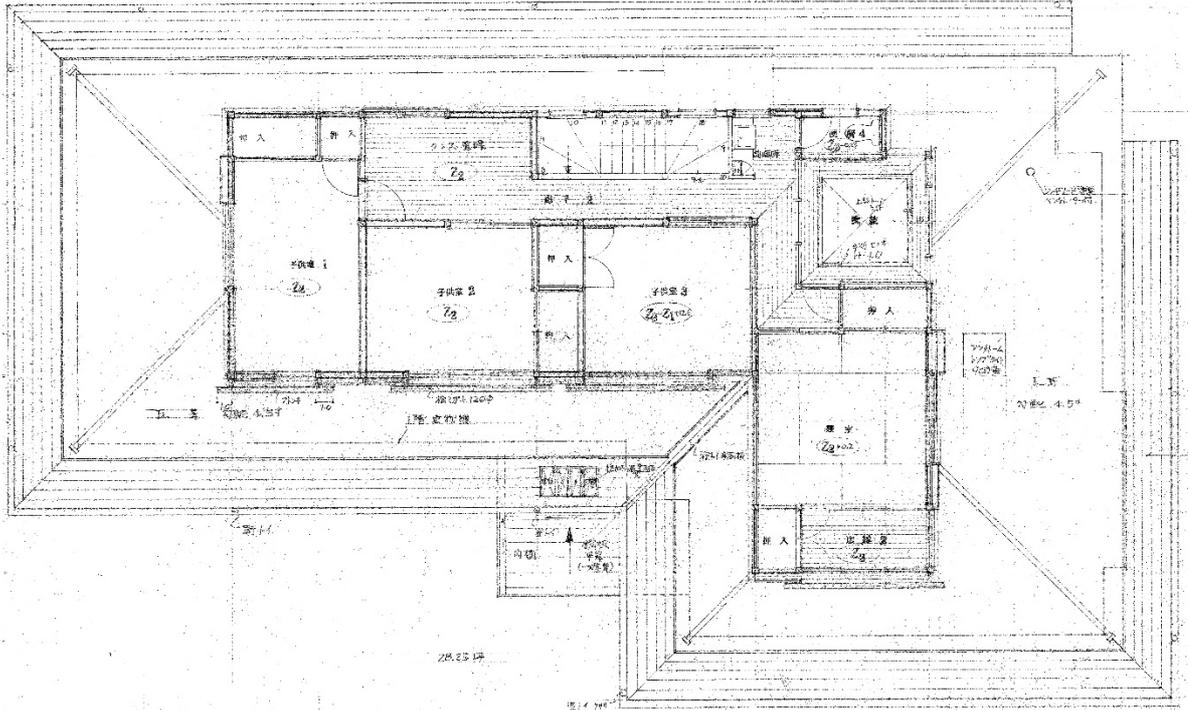


図 6-13 「堤邸 2」(1978) 2 階平面図

4) 「藤野邸 (現田中正造記念館)」(1979)

「藤野邸 (現田中正造記念館)」は、10 畳の座敷と仏壇のある 6 畳の次の間が南北に繋がり、床の間は 1 間半で、1 間の入側が回っている。壁を隔てて、17.5 畳の居間 (洋間) と 7.5 畳 (洋間) の食堂が繋がり、25 畳の LD となっている。廊下を挟んで東側に 6 畳 (洋室) 台所がある。テーブルが置かれており DK としても使える (図 6-14)。2 階には 18 畳 (洋室) の寝室と 12 畳 (洋室) の書斎が設けられている (図 6-15)。

このような大きい空間を支えるため、2 階床梁は、2C-200×50×4 mm の鉄骨合せ梁、小屋組は木造トラスを用い、4.5 勾配の日本瓦葺で木造和風建築にみえるが、トラスと鉄骨を適切に使った木造と鉄骨の混構造である (図 6-16)。

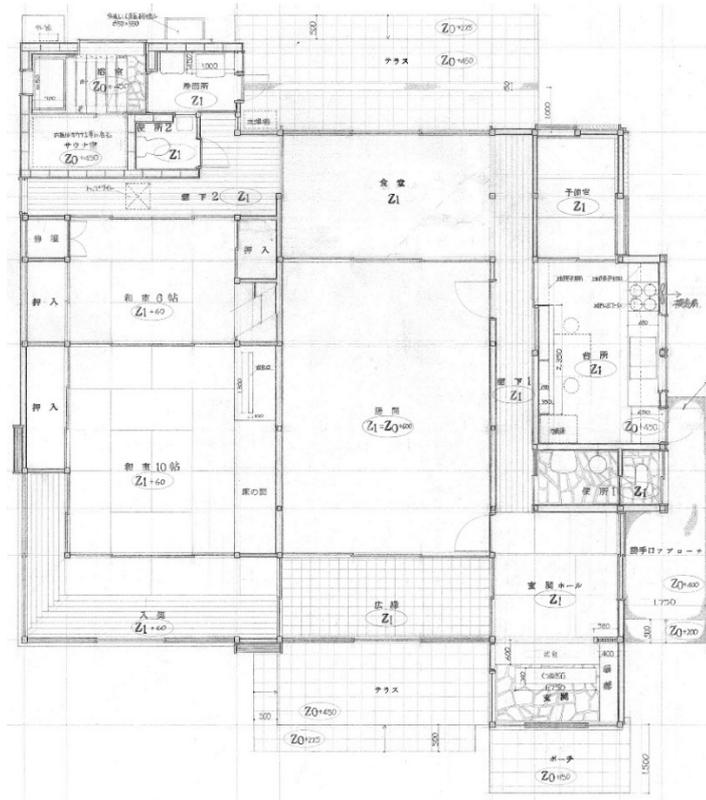


図 6-14 「藤野邸（現田中正造記念館）」（1979）1階平面図

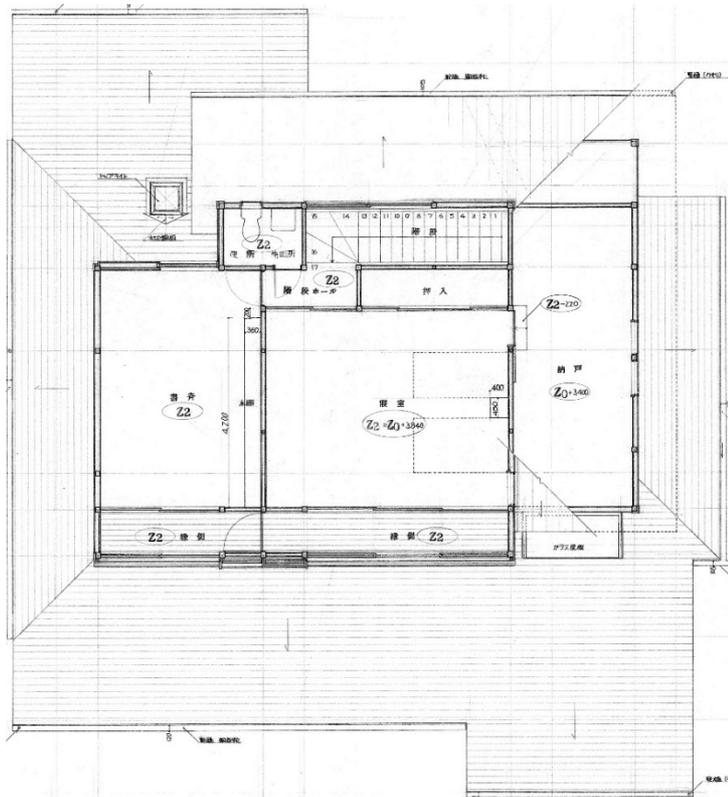


図 6-15 「藤野邸（現田中正造記念館）」（1979）2階平面図

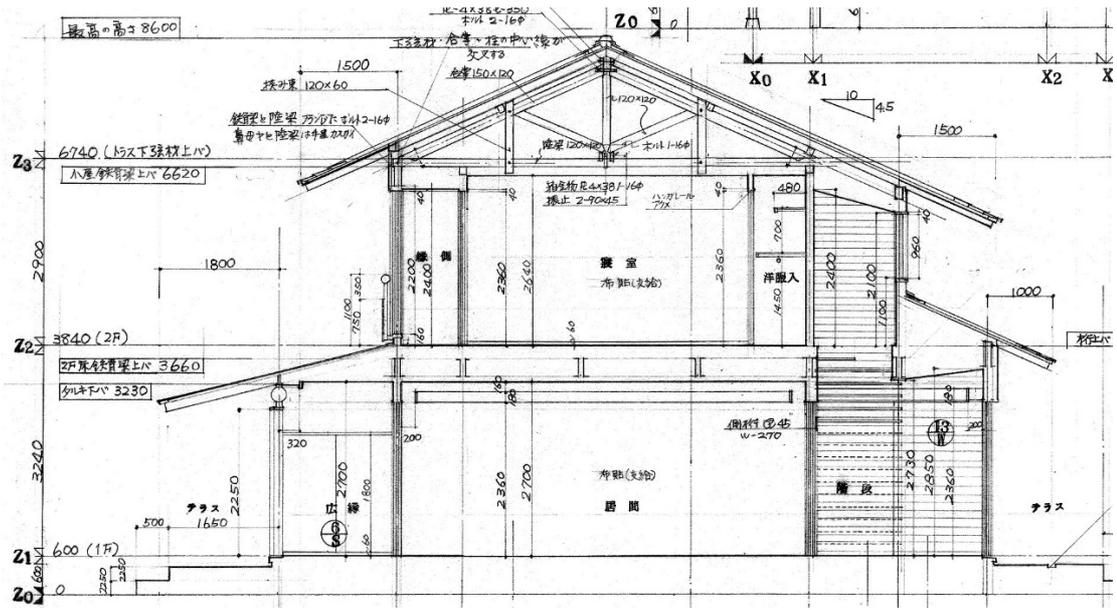


図 6-16 「藤野邸（現田中正造記念館）」（1979）断面図

6.3.1.2 中原暢子設計の「続き間座敷」

第Ⅲ期における「続き間座敷」は、「山本邸」（1979）1 作品のみである。2 階に 6 畳の老人室と 4.5 畳の予備室の続き間があり、予備室には蹴込床があり、老人室には仏壇、押入れがあり、1,800 mm幅の広縁に接している（図 6-17）。この 2 室は、欄間が入っておらず、吹き抜きとなっている（図 6-18）。設置階が 2 階ではあるが、この続き間座敷は、一体化したつくりとなっている。

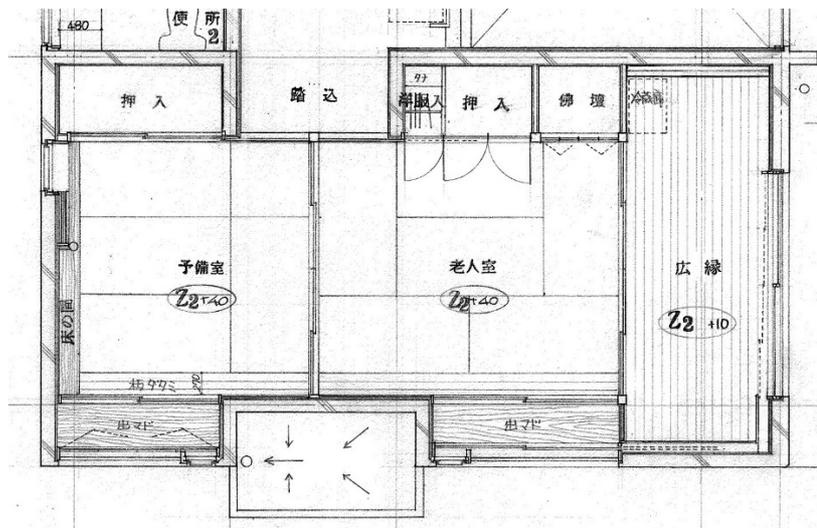


図 6-17 「山本邸」（1979）2 階平面図（部分）

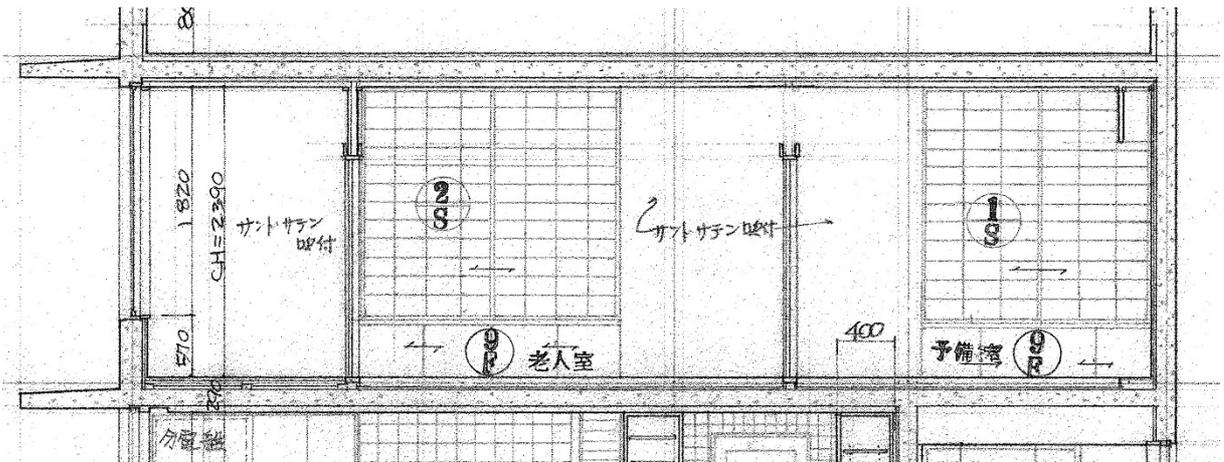


図 6-18 「山本邸」断面図（部分）

6.3.1.3 中原暢子設計の「単独座敷」

第Ⅲ期における「単独座敷」は、下記に示すように 8 作品ある。その広さは、8 畳もあるが、6 畳が一般的で、座敷の全てが廊下等他室を通らずに移動できるようになっており、その独立性が確保されている。廊下とつながりながらも、居間にもつながっているものは 2 例、そのうち 1 作品、半間の引戸で分離され、他の 1 作品は、1 間の襖で区切られているが、後者は家具の配置から居間と分離を想定していると考えられる。座敷の設えも宿泊も想定した接客ができるように考えられている（表 6-3）。

表 6-3 「単独座敷」の独立性

No.	作品名	畳数	独立性	出入口	接する室等	押入/収納
1	前田別邸(M氏別邸)	6畳	高	1(襖)	廊下	納戸
2	天満邸	6畳	高	1(襖)	廊下	押入
3	四柳邸(Y氏邸)	6畳	高	1(ガラス戸)	デッキ	押入
4	前田邸	6畳	高	1(襖)	廊下	押入
5	高塚邸	6畳	低	2(襖)	廊下・居間	押入
6	小杉邸	6畳	高	1(襖)	廊下	押入
7	沢柳邸	8畳	高	1(襖)	廊下	押入
8	京極邸	6畳	低	2(襖)	廊下・居間	押入

1) 「高塚邸」(1974)

「高塚邸」の 1 階和室（6 畳）は、玄関ホールと食堂居間からの 2 つのアプローチが可能であるが、食堂居間は片引き戸となっており、客室としての独立性は高い。床の間は、間口が半間で、幕板裏に照明が仕込まれている。幅 1 間の押入れがあり、玄関側の足元には内開き窓が設置されている（図 6-19）。

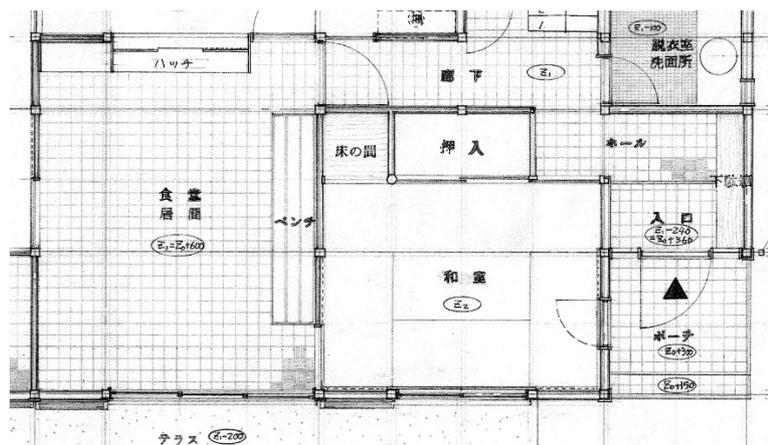


図 6-19 「高塚邸」(1974) 1階平面図(部分)

2) 「小杉邸」(1976)

「小杉邸」の客室(6畳)は、南に濡れ縁、押入れ1,800mm幅の押入れと奥行き450mm、間口2,150mmの踏込床があり、床脇には、ガラリ窓が床に接するように配され、長押が回っている。床柱は丸の杉のしぼり丸太である(図6-20)。

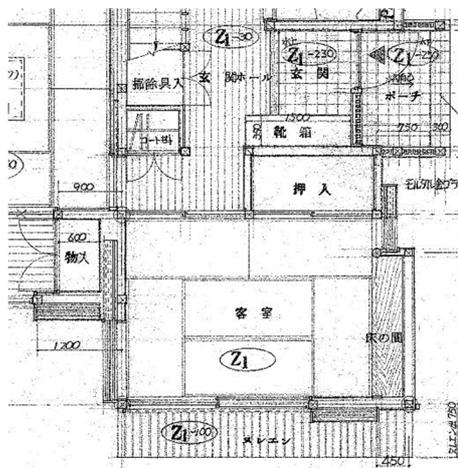


図 6-20 「小杉邸」(1976) 1階平面図(部分)

3) 「沢柳邸」(1973)

「沢柳邸」の客室(8畳)は、外部には濡れ縁があり、テラスにつながっている。床の間の幅は2,490mmで、飾り棚がある。奥には、框の高さに揃えるように障子が組み込まれている(図6-21)。床脇には、幅1,150mmの幅の押入れがある。床柱は、杉磨き丸太である。

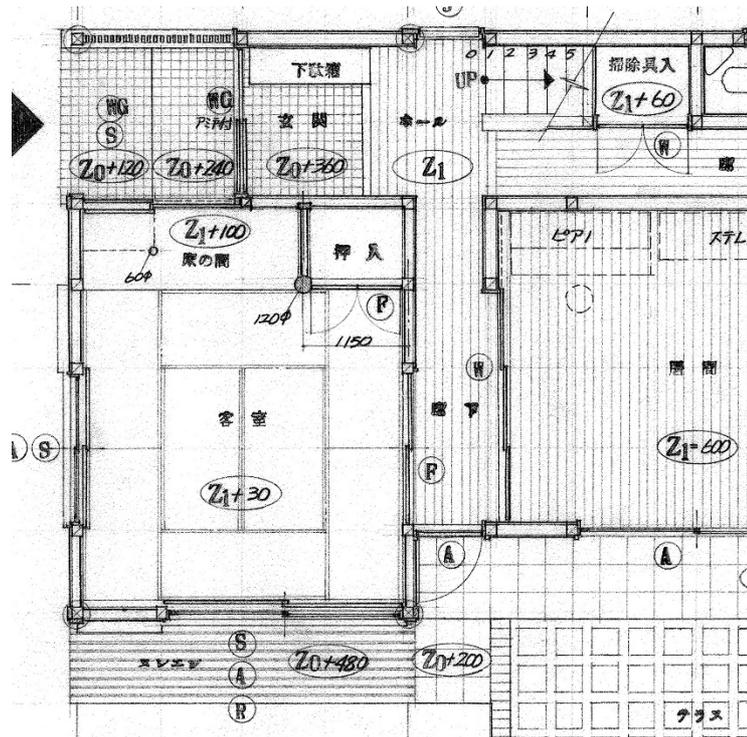


図 6-21 「沢柳邸」(1973) 1階平面図(部分)

4) 「京極邸」(1979)

「京極邸」の1階和室(6畳)の床の間には、中段の棚に仏壇があり、床柱は丸の杉磨き丸太が配されている(図6-22)。隣接する居間とは、250mmの段差があり、腰高の引き違いの襖(両面太鼓貼)で仕切られており、一体として使用することは想定されていない(図6-23)。

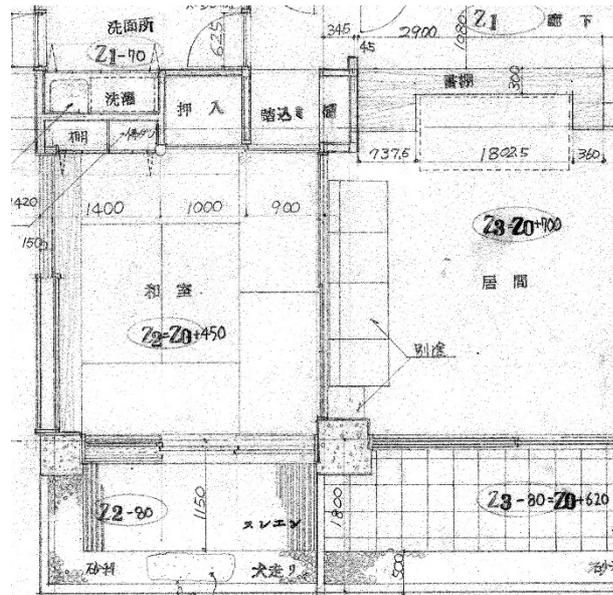


図 6-22 「京極邸」(1979) 1階平面図(部分)

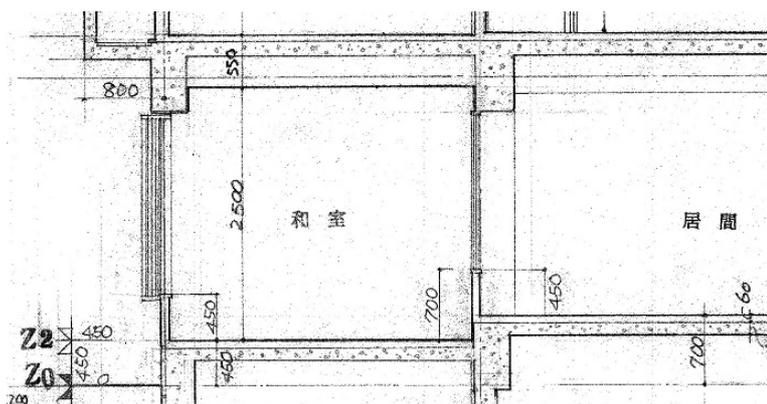


図 6-23 「京極邸」断面図（部分）

6.4 中原暢子設計の住宅に関する分析

中原設計の流れには、「和風」の流れと「機能主義」の流れがあることが分かるが、これを時期別に比較することによって、それぞれの流れの変化を明らかにする。

6.4.1 「和風」の流れ

「和風」の流れを明らかにするために、「本格的続き間座敷」「続き間座敷」及び「単独座敷」を扱う。来客のために使われる和室について、どのような平面構成であるかを、「本格的続き間座敷」「続き間座敷」「単独座敷」、該当なしに分類すると、第Ⅲ期は「続き間座敷」「単独座敷」ともに最も高い（図 6-24）。

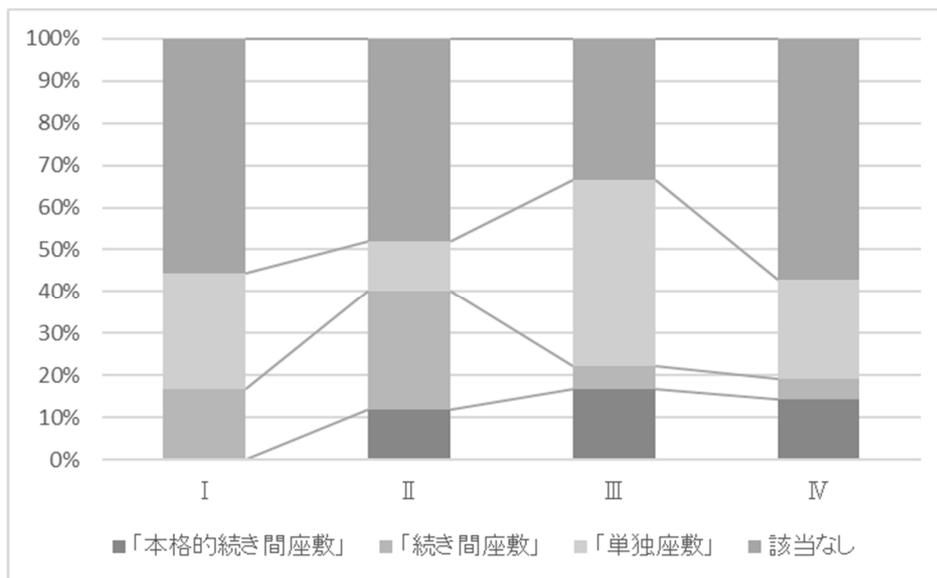


図 6-24 各期別「本格続き間座敷」、「続き間座敷」及び「単独座敷」のある住宅の比率の推移

和室のある作品数、一戸当りの和室のある室数の比率は、以下の通りである（図 6-25）。各期の和室のある作品数については、全ての時期について高い値を示しており、第Ⅱ期を除き100%であった。1戸あたりの和室数は、全期において2.5室を上回っており、最高で第Ⅱ期の3.6室であった。

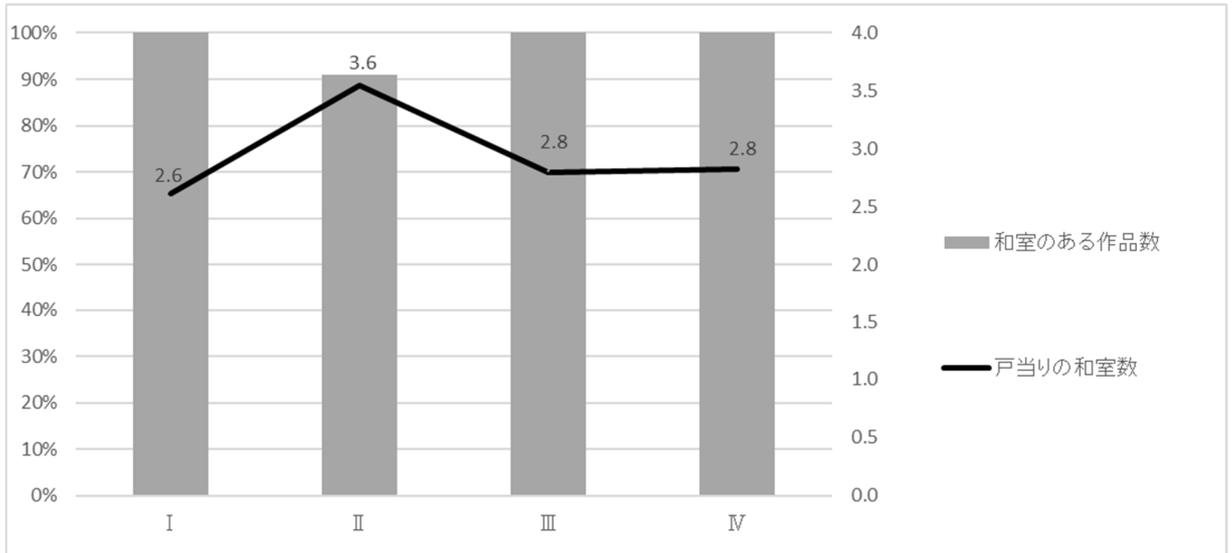


図 6-25 各期別和室のある作品数と戸当り和室数の比率の推移

6.4.2 内部空間における和室の設え

内部空間における和室の設えとして、床の間の有無、床板の形式、長押の有無、床柱の角柱選択があげられる。そのため、床の間の床板の形式による分類を行った。すべての居室を対象に床の間を採用している住宅比率（図 6-26）及び、床板の形式の比率（図 6-27）は以下の通りである。

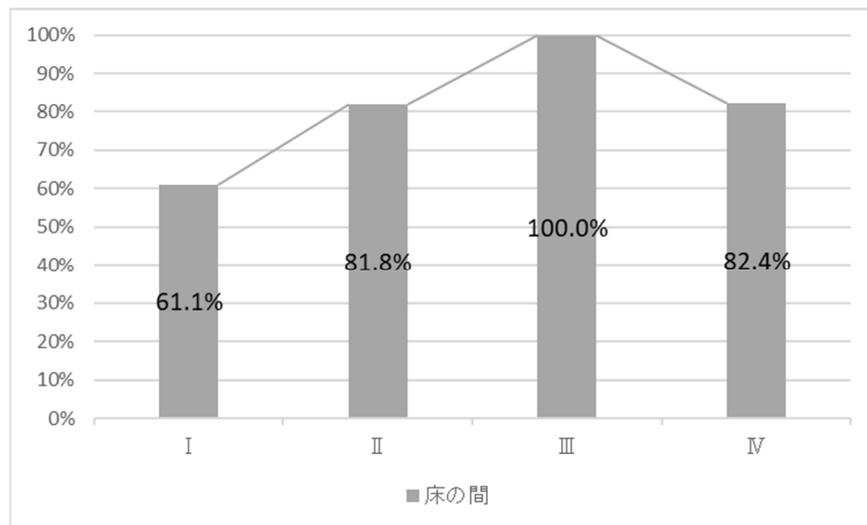


図 6-26 各期別床の間のある住宅比率の推移

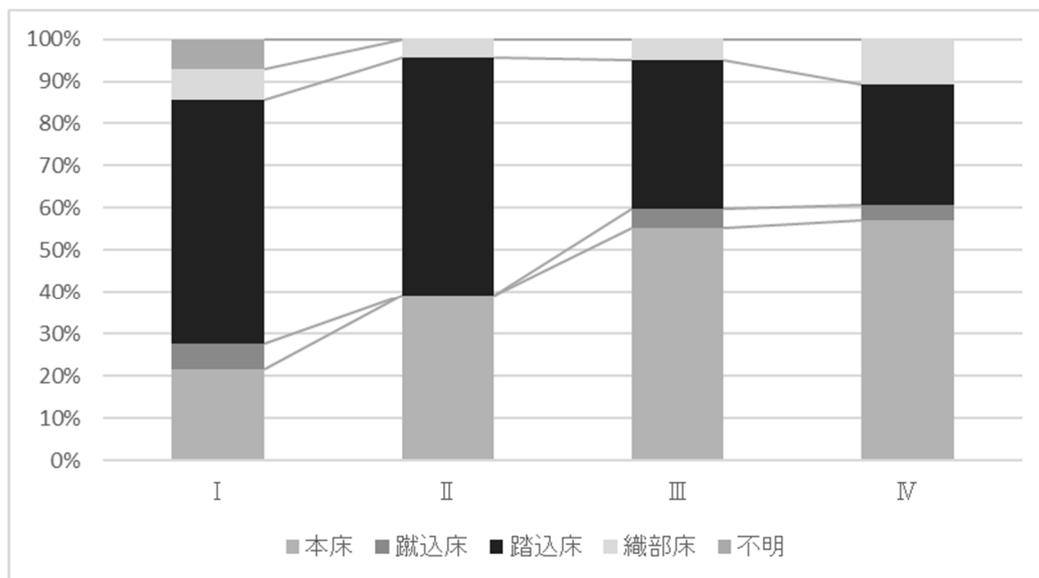


図 6-27 各期別床の間床板の形式別総数の比率の推移

採用されていたものは、床の間の種類は、本床、蹴込床、踏込床、織部床等であった。床の間は、第Ⅰ期でも55%を超えており、その後も上昇する。第Ⅲ期には、和室のあるすべての住宅に床の間が計画されるようになるが、第Ⅳ期になるとその比率は減少する。その内訳は、次の通りである。最も一般的なもの形式である本床は、第Ⅰ期に20%弱常であったものが、第Ⅱ期、第Ⅲ期と上昇をし、第Ⅳ期には55%超となっており、期を追うごとに、正式な床の間の形式である本床の採用に積極的であったことがわかる。それに対し、床框を用いず畳面と同一平面に床板を設けた踏込床は、全体的に本床に次いで、高い値を示している。第Ⅳ期にかけて徐々に30%弱まで減少する。奥行きのない最も簡易的な床の間である織部床は、全期にわたって多くはみられない。比較的取り入れやすい形式であるが、最も高い第Ⅳ期であっても20%を下回っている。

格式の高さを表す長押と角柱を使った床柱について検討してみる。数寄屋建築では省略されることが多い長押であるが、第Ⅲ期が約60%で採用されており、第Ⅳ期になると急激に減少する(図6-28)。角柱を使った床柱の採用に関しても、長押ほど大きな割合ではないが、第Ⅲ期が最も高く、第Ⅳ期で急激に減少する傾向は共通している(図6-29)。このことから、第Ⅲ期は、格式を重んじた和室が設計されていたことが読み取れる。第Ⅳ期が比率として小さいのは、格式や決まりごとに囚われない砕けた和室(茶室設計)が増えたからと推察できる。

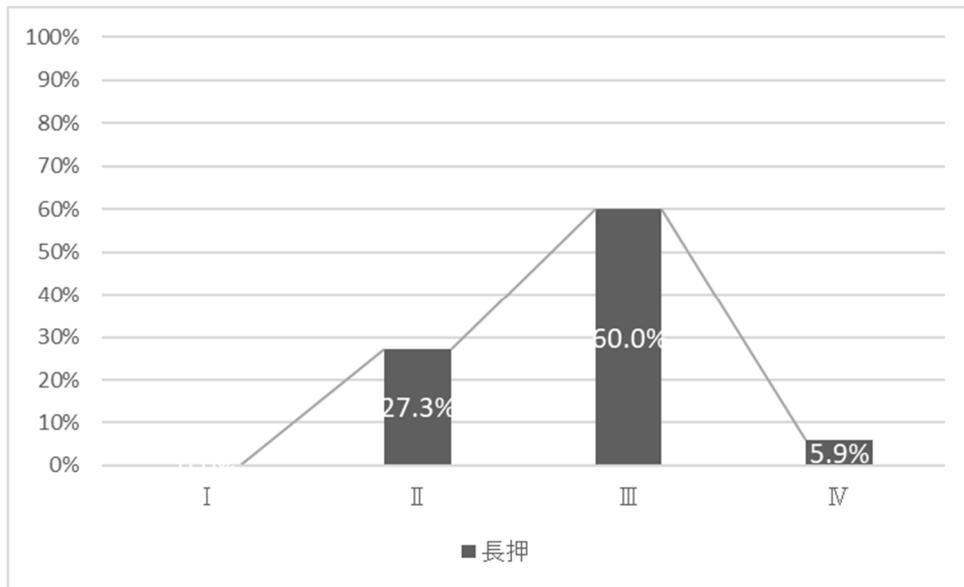


図 6-28 各期別長押比率の推移

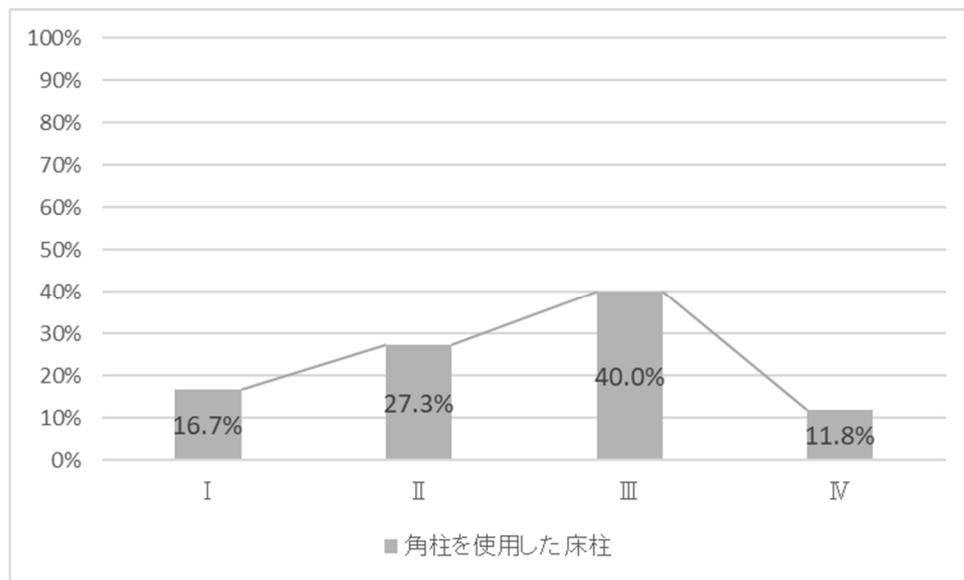


図 6-29 各期別床柱に角柱を使用した比率の推移

和室につながる、縁側、広縁、入側（以下、「内縁」という）は通路や和室の拡張空間、内外との中間的な領域であり、親しい客をもてなす空間としても使用される。中原は、いわゆる一般的な言葉の定義には沿って使用しておらず、これらの言葉を使分けている。特に、茶室に隣接する畳敷きの内縁にはその幅に関係なく「入側」という言葉を採用している。「入側」は、建築大辞典によると、「書院造り、または伝統的な民家においては、座敷と濡れ縁との間の細長い縁側部分。その幅 1 間か～1 間半くらいとる場合が多い。全面または一部を畳敷きとする場合もあり、この場合は、縁座敷と称される。」⁶⁻¹⁰⁾とされる。「入側」としているのは、「藤野邸（現田中正造記念館）」（1979）、「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（1985）、

「森邸」(1987)、および「山田邸」(1987)の計4作品である。入側の床仕上げ材料は、「藤野邸(現田中正造記念館)」のみ板と畳敷きであり、その他は、畳敷きであることから、中原は、畳敷きの縁側を「縁座敷」とではなく、「入側」と称しているようである。

そのため、本章では、中原が図面に記した内縁の名称に基づいて、分析を行う。内縁を採用した比率(図6-30)及び、その内訳の比率(図6-31)は以下の通りである。

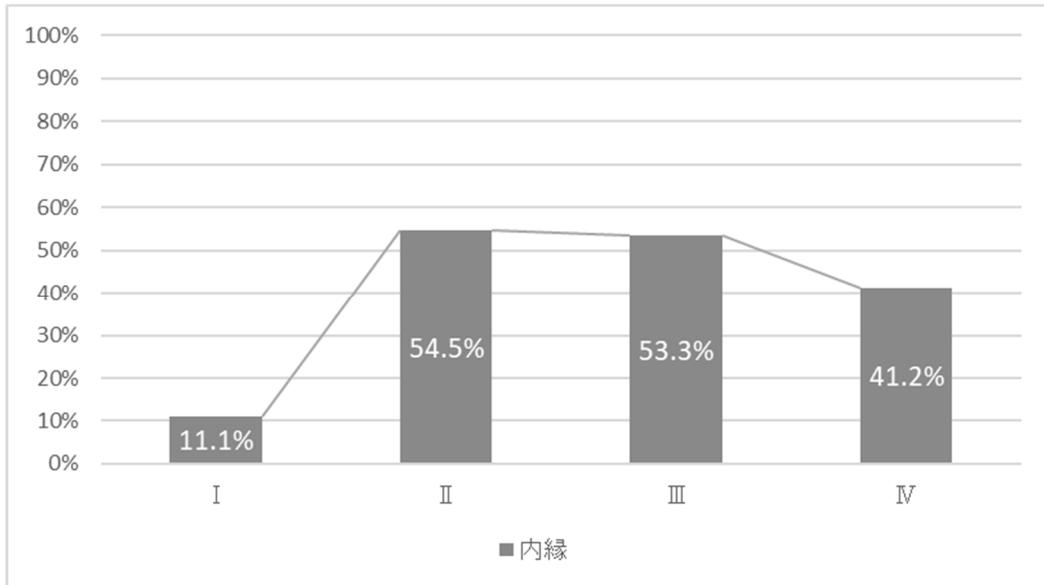


図 6-30 各期別内縁比率の推移

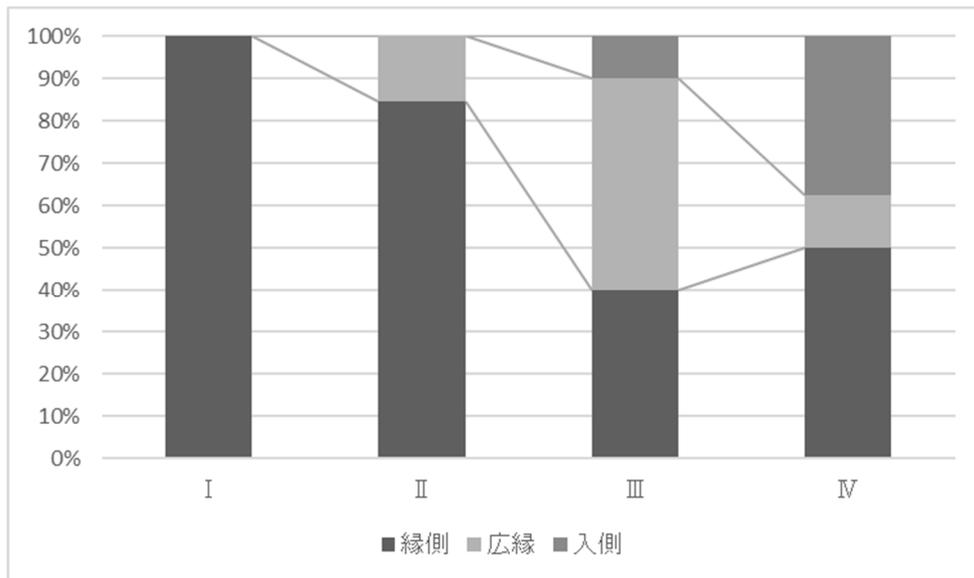


図 6-31 各期別内縁種類別作品数の比率の推移

内縁のある住宅の比率についてみていく。第I期は、10%超と少ない。これは、内縁を採用できるほどの余裕のある住宅が少なかったことが考えられる。第II期になると、内縁のあ

る比率は55%弱に増加する。その後は、徐々に内縁の比率は約40%まで減少していく。各期の内訳は、第Ⅰ期は、縁側のみであったが、第Ⅱ期になると広縁が増え始め、第Ⅲ期では半数程度となる。入側については、第Ⅲ期に採用され始め、第Ⅳ期になると35%を超える。入側は、広縁が多く使われた時期に採用し始め、第Ⅲ期から第Ⅳ期の間に、広縁から入側に移行していくことが明らかになった。

6.4.3 外観における「和風」要素

屋根については、形状、小屋組、仕上げ材料について分析していく。

屋根形状は、屋根伏図や立面図を確認し、主たる屋根形状に分類をして集計を行った。分類は、陸、バタフライ、片流れ、切妻、方形、寄棟、袴腰、入母屋、マンサード、その他（不明を含む）で分類を行った（図6-32）。

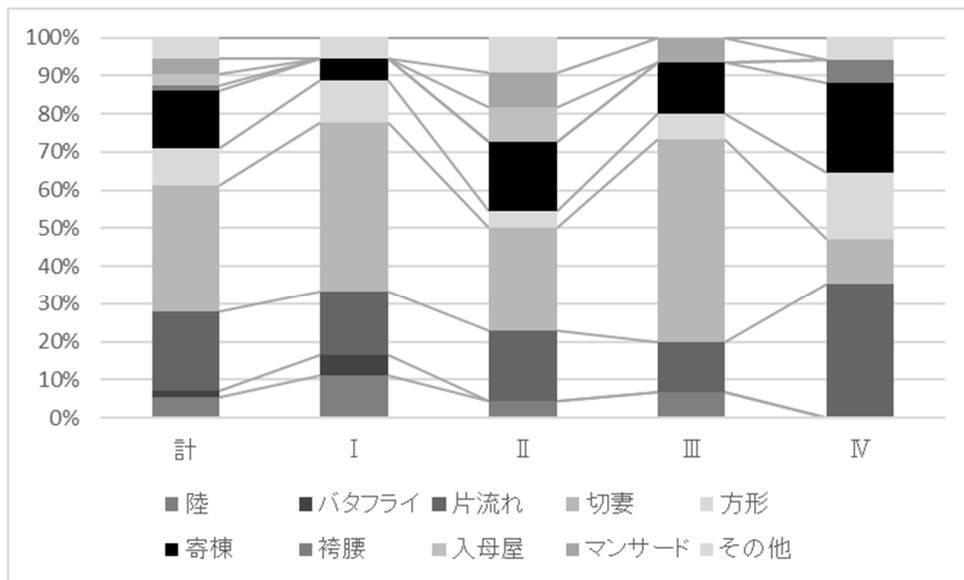


図6-32 全期各期別主たる屋根形状別作品数の比率の推移

各期を合計した比率で見ると、片流れと切妻を合わせると半数以上を占めている。この傾向は、各期にわたってもおおよそ共通事項といえる。第Ⅰ期から第Ⅲ期にわたっては、切妻の比率が最も多く、第Ⅲ期が最も高い。しかし、本格的な茶室設計が行われる第Ⅳ期は、その値が減少する。逆に第Ⅳ期に上昇しているものは片流れであり、第Ⅳ期には約3割を占める。入母屋や袴腰など和風住宅に用いられるものは、数作品のみであるが、切妻は様式に関係なく採用できる形状であり、安価で雨漏りのリスクが少ないため、多く採用されたと推察できる。

また、屋根の形状の複雑化は、斜線制限やそれに関連して敷地面積もその一因として考えられるため、各期別に敷地面積、建設地の都道府県をグラフで表し、その関係を検討する。

敷地面積は、第Ⅱ期に最も高く、その平均は、781.4 m²とかなり広い。第Ⅲ期からは減少傾向であり、第Ⅳ期は最小の317.6 m²である（図6-33）。一方、建設地別にみても、第Ⅰ期は、中原の地元である埼玉県と隣接する東京都が多くを占める。第Ⅱ期になると神奈川県が急激に増加する。これは、川崎市のNKKによる農家住宅が影響していると推察できる。第Ⅲ期は神奈川県が半数近くを占めるが、第Ⅳ期になると東京都が増加する（図6-34）。以上のことから、第Ⅳ期は敷地面積の小さい建設地である東京都の依頼が多くなったことで、屋根形状も片流れ切妻といった単純なものではなく、複雑化していったと推察できる。

小屋組については、在来軸組構法における和小屋構造、トラスの洋小屋構造、屋根勾配に沿って傾斜した登り梁で支える登り梁構造⁶⁻¹¹⁾、母屋を用いず屋根面の荷重を垂木によって桁に伝える垂木構造⁶⁻¹²⁾、壁面で支持された母屋で垂木を支持する母屋構造⁶⁻¹³⁾、2本の材を逆V字型にして頂部で緊結した叉首構造⁶⁻¹⁴⁾等に分類し集計した（図6-35）。屋根構造が木造のものを対象とし、屋根がRC造、S造の場合は、除いて分類している。

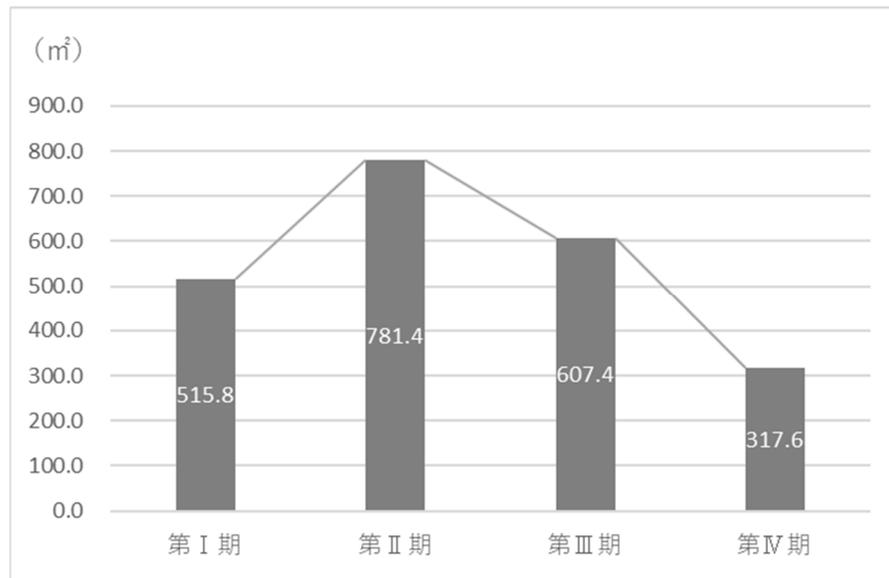


図6-33 各期別敷地面積の平均の推移

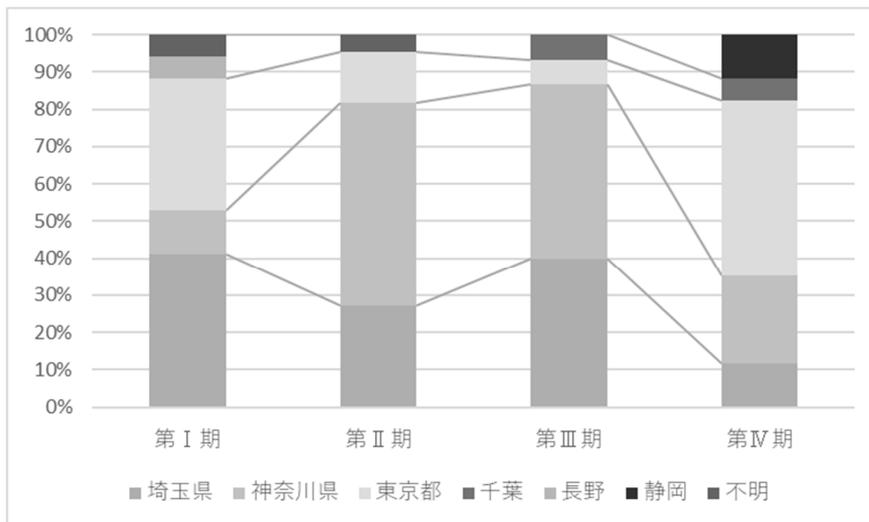


図 6-34 各期別建設地別の推移

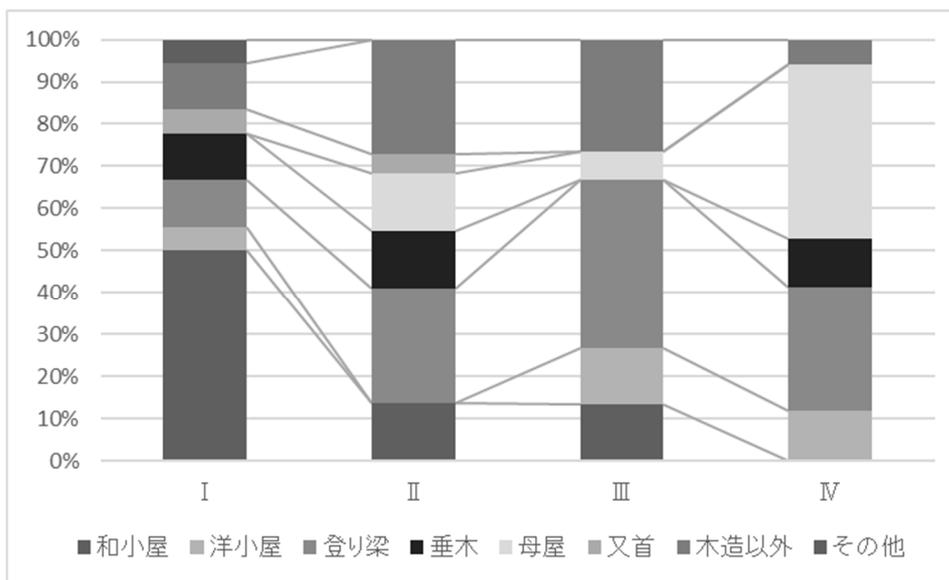


図 6-35 各期別主たる小屋組構造別作品数の比率の推移

和小屋構造は、第 I 期が約 60%と最も採用されているが、減少し第IV期にはみられない。洋小屋としての比率は少なく、多くても第III期の約 20%である。それに対し、大きな比率を占めるのは、登り梁構造、垂木構造、母屋構造である。登り梁構造は、第II期以降高い比率を占めており、第III期が約 40%と最大である。垂木構造は、第III期にはみられないが、他の時代区分は約 10%から 20%の範囲で推移している。母屋構造は、第IV期で最大の 40%超となる。これらの登り梁構造、垂木構造、母屋構造は、屋根裏空間を活用する場合に多く用いられており、実際、中原の設計の矩計図・断面図には、傾斜屋根の空間が多くみられる。

主たる屋根の仕上げ材料は、鉄板、スレート瓦、日本瓦等がみられた(図 6-36)。第 I 期は鉄板、特にレジノ鉄板を採用したものが 70%を超えるものの、第III期の採用はない。それに対し、スレートは第II期より採用され、第IV期には、60%を超える。これは我が国で、商品

名「コロニアル」が販売（1961）され始めた時期と一致していることから、新商品の開発・販売の影響と推察できる。日本瓦は、第Ⅲ期に約50%と最も高くなり、屋根仕上げでいう「和風」要素は、第Ⅲ期が日本瓦として最も高い。大工に任せてしまう和小屋から、中原自身が設計をする「和小屋以外」の小屋組へ移行していることが読み取ることができる。

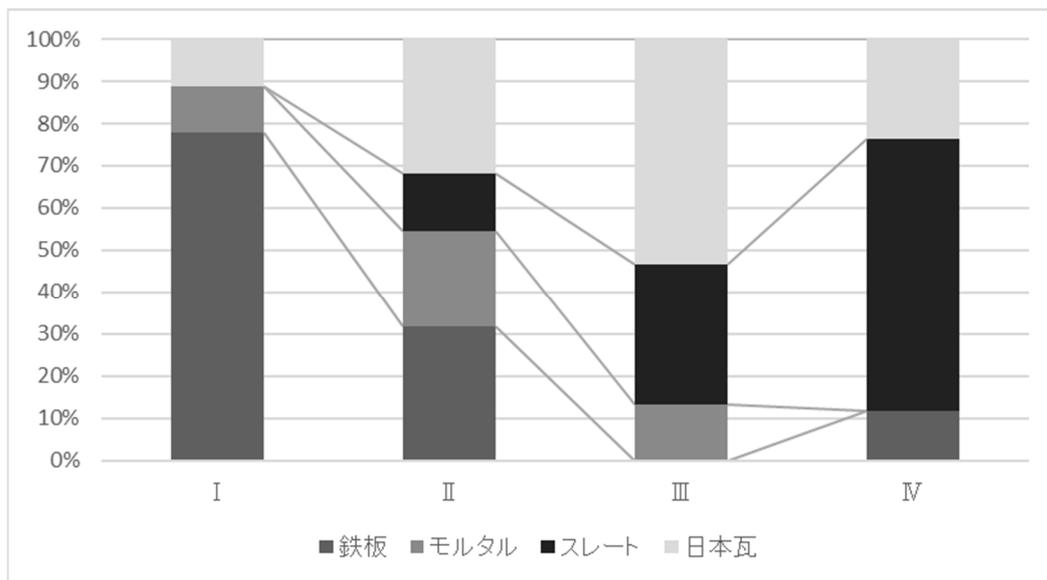


図 6-36 各期別主たる屋根仕上げ材料別作品数の比率の推移

外観における和風住宅の要素としては、様々なものが挙げられるが、今回は、壁については仕上げ材料、屋根については、小屋組や形状、仕上げ材料について、内部の「和風」要素とどのような関係があるのかを明らかにする。

はじめに、主たる外壁仕上げ材料について、図面の仕上げ材料に記載のあるその住宅の主たる外壁材料を抽出し、分析を行った。仕上げ材料には、スレートや木片セメント板などの窯業系サイディングや吹付タイルや漆喰などの塗り壁、煉瓦タイルなどのタイル、羽目板や南京下見板などの板張り又は木質系サイディング、鉄筋コンクリート（RC）またはコンクリートブロック（CB）の現しに分類でき、結果は以下のようになった（図 6-37）。

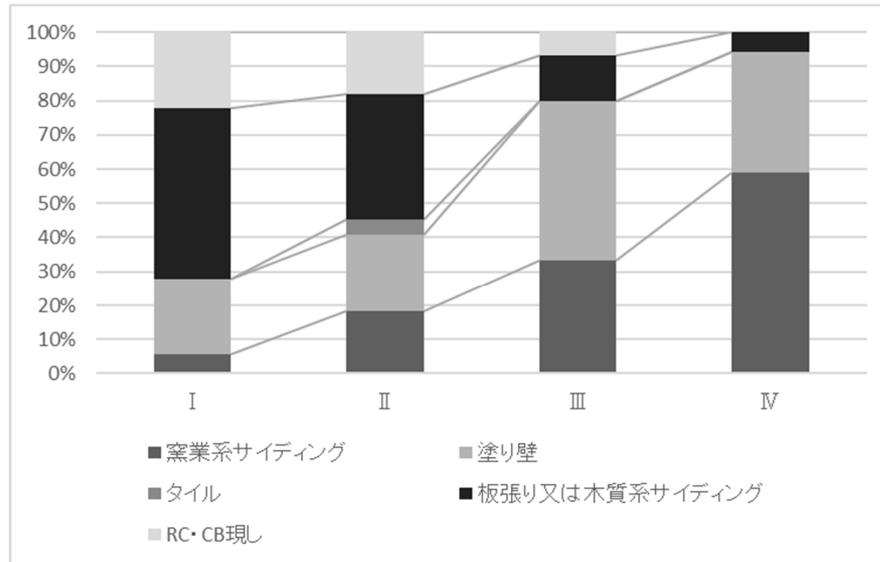


図 6-37 各期別主たる外壁仕上げ材料別作品数の比率の推移

第Ⅰ期に半分の比率で採用されていた板張り又は木質系サイディングは、第Ⅳ期にかけて徐々に減少し、10%を切っている。それに対し、第Ⅰ期では、10%を切っていた窯業系サイディングは、第Ⅳ期には、60%近くまで増加する。これは、窯業系サイディングの商品開発が進み販売が増えたことが大きいとみられる。塗り壁は、第Ⅲ期が50%と最も高いが第Ⅳ期では減少する。日本の伝統的な家屋にもつかわれる漆喰は第Ⅱ期の「立川邸 2」(1970)、「鈴木邸 1」(1971)、「志村邸」(1971 頃) の 3 作品と第Ⅳ期の「千代田養神堂」(1984) のみであり、第Ⅲ期以降は、外壁仕上げであるリシン書き落としが多くみられる。

6.4.4 LDK の特徴

池辺の「機能主義」における影響を受け、平面構成においては、家事の合理化を確認することができる。中原設計の LDK の間取りについて、DK 一体型 (LDK、L/DK、DK) と DK 分離型 (LD/K、L/D/K、D/K) とを比較する。DK 一体型は、全期にわたり 50%以上であり、第Ⅳ期には、85%を超える。すべてを独立させた L/D/K 型は、第Ⅳ期にはみられない。中原は、第Ⅰ期は、家事の合理化を目指し、DK 一体型を採用していたが、徐々に DK 分離型を望む建築主が多くなった。しかし第Ⅳ期になると、DK 一体型が大半を占めるようになる (図 6-38)。

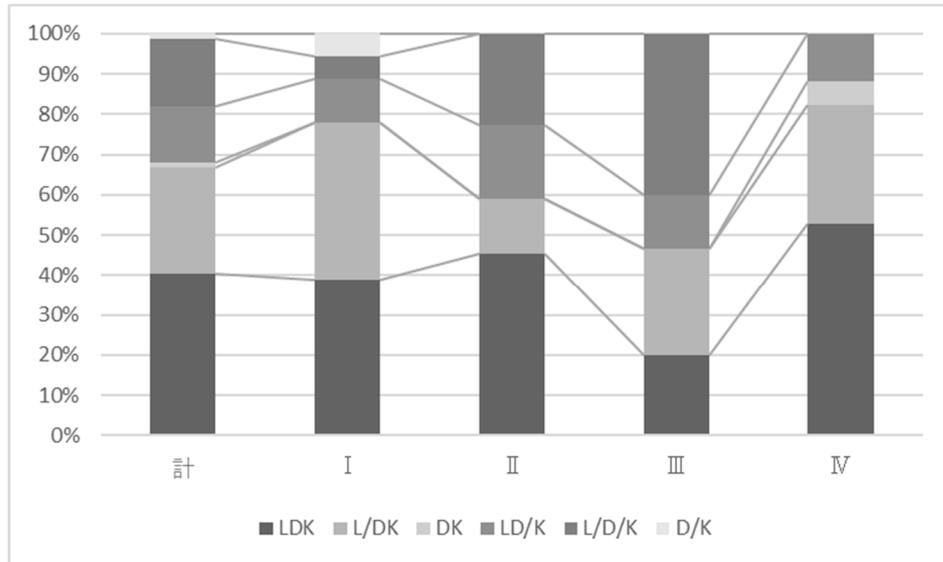


図 6-38 全期各期別 LDK のつながり別の比率の推移

6.4.5 茶の間と和室の居間

LDKにおいて、茶の間（Dw：和室の食事室）および和室の居間（Lw）を抽出し、その軒数を算出した。茶の間については、茶の間（Dw）は、第Ⅱ期に6軒と最も多いが、第Ⅳ期はみられない（図 6-39）。和室の居間（Lw）についても第Ⅱ期が最多であり（図 6-40）、着彩部分のように洋室の食事室や台所との併用がみられる。第Ⅱ期の農家住宅10軒のうち、茶の間（Dw）があるものが2軒、和室の居間（Lw）があるものが6軒あるため、和室の居間（Lw）は全て農家住宅であることが分かる。

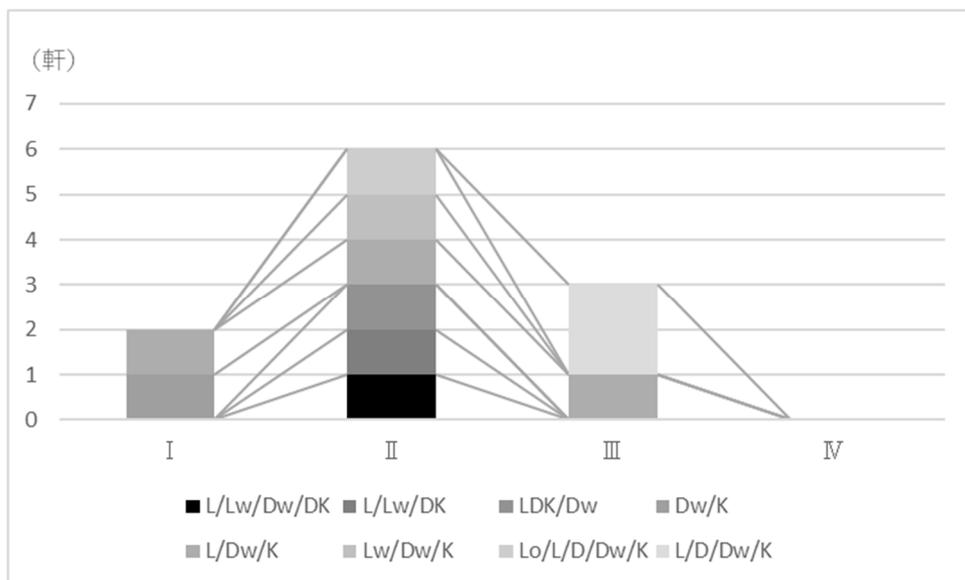


図 6-39 各期別茶の間（Dw）ある住宅軒数の推移

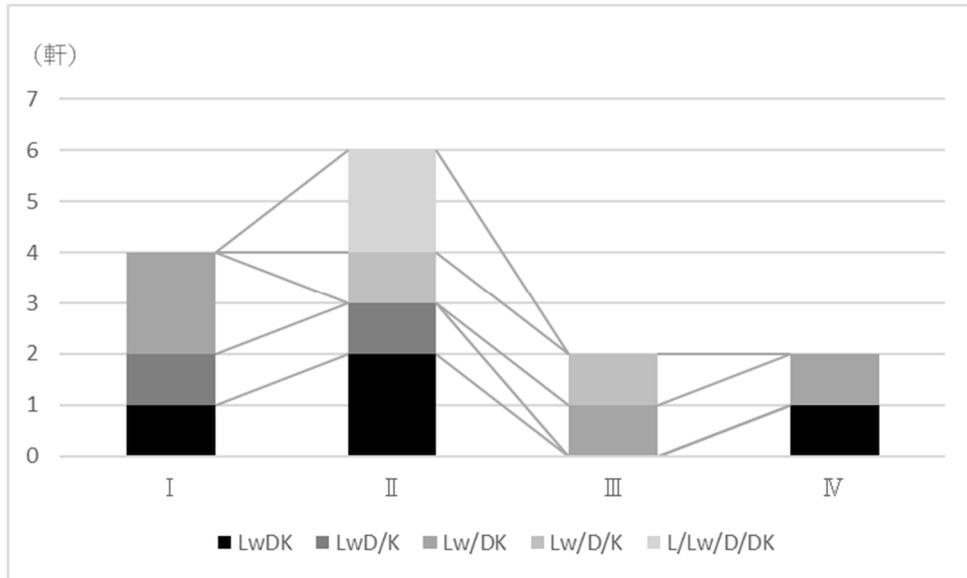


図 6-40 各期別和室の居間 (Lw) ある住宅軒数の推移

6.4.6 構造種別による分類と傾向

続いて、中原が設計した住宅を構造種別ごとにみていくと、その多くが木造と混構造で構成されていることが分かる (図 6-41)。各期の構成としては、徐々に混構造の比率が増えていく。第II期では、RC造、第III期になるとS造にも取り組むが、第IV期になると、再び木造と混構造のみの構成となる。

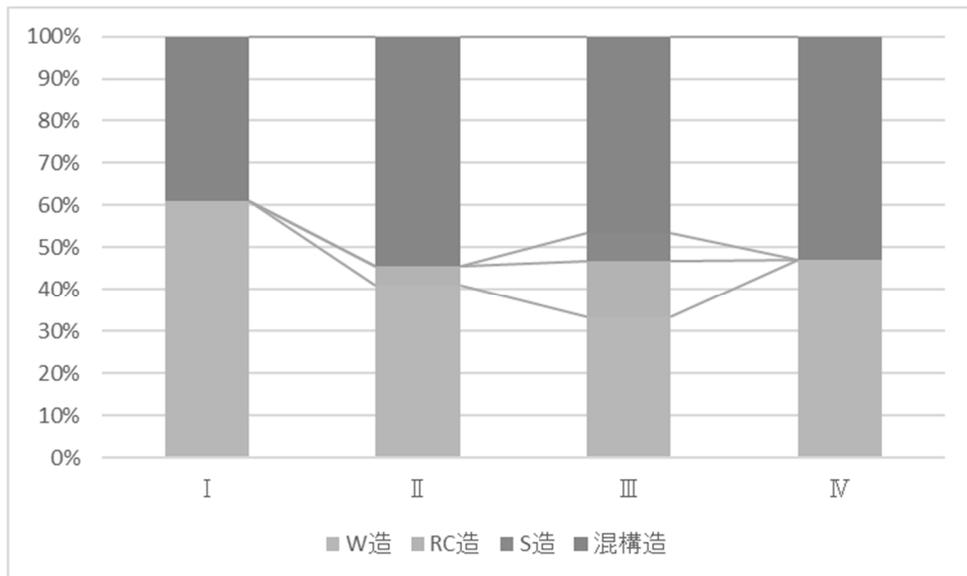


図 6-41 各期別構造の種別作品数の推移

6.4.7 混構造による分類と傾向

6.4.7.1 混構造の形式による分類と作品例

続いて、混構造の住宅を抽出し、混構造の形式について構造材料の使用する部位による構造組み合わせの分析を行った。すると、次の5つに分類することができた(表6-4、表6-5)。

表 6-4 中原が設計した新築混構造住宅の構造組み合わせ一覧

時期	設計年	作品・建築名	構造種別					混構造の形式
			W	CB	RC		S	
					壁式	ラーメン		
第Ⅰ期	1961	辻別邸	●	●				主要構造部位別タイプ
	1961	長覚院庫裡	●	●	▲			主要構造部位別タイプ
	1962	土肥邸		●	●			RC造主体タイプ
	1962	増山邸	●		●			RC造主体タイプ
	1962	吉田邸	●		●			RC造主体タイプ
	1963	岡邸	●			●		主要構造部位別タイプ
	1965	木村別邸 (K氏別邸/ 下呂山の家)	●		●			層別タイプ
第Ⅱ期	1966	芝崎邸	●	●			■	木造主体タイプ
	1966	坂本邸 (雁行した家)	●		●			層別タイプ
	1967	仲林邸 (鉄筋コンク リートの家)	●			●		RC造主体タイプ
	1967	安藤邸1	●			●	●	主要構造部位別タイプ
	1967	安藤邸2	●				■	S造主体タイプ
	1968以前	横田邸 (大屋根の家)	●				■	木造主体タイプ
	1968	高橋邸1	●				■	木造主体タイプ
	1968	高橋邸2	●				■	木造主体タイプ
	1969	水野 レストラン A棟			●		●	層別タイプ
	1970	堤邸1	●	●		●		RC造主体タイプ
	1970	熊沢邸 (柿生の家)	●			●	●	RC造主体タイプ
	1970	神崎邸	●		●			RC造主体タイプ
1971	横山邸	●			●		層別タイプ	
第Ⅲ期	1972	竹内邸	●				●	木造主体タイプ
	1972	松本邸	●		●		■	層別タイプ
	1974	高塚邸	●				■	木造主体タイプ
	1973	沢柳邸	●				■	木造主体タイプ
	1975	田口邸2	●				■	木造主体タイプ
	1979	京極邸	●			●		RC造主体タイプ
	1979	藤野邸	●				●	木造主体タイプ
第Ⅳ期	1981	西川別邸 (千葉の家/ N氏別邸)	●		●			層別タイプ
	1981	斉藤邸 (Kさんの家/ 斎藤邸)	●				●	S造主体タイプ
	1982	鈴木邸2	●				●	木造主体タイプ
	1984	田邊邸	●		●			層別タイプ
	1985	中原自邸 (茶室のあ る家/自邸/浦和の家)	●				■	木造主体タイプ
	1986	石垣邸	●				■	木造主体タイプ
	1988	木所邸	●		●			層別タイプ
	1988以前	寺内邸	●				■	木造主体タイプ
1998	大関別邸	●		●			層別タイプ	

注：

同敷地に2棟以上が設計されている場合で、構造が異なる場合は、別々に集計。

構造種別は、「W」：木造、「CB」：コンクリートブロック、「RC」は鉄筋コンクリート造、「S」は鉄骨造を示す。

表内の●印は指定欄の構造、▲印はスラブのみRC、■印は軽量鉄骨で構成されているものを示す。

表 6-5 中原の設計した混構造の5つのタイプ

タイプ	層別タイプ	主要構造部位別タイプ	木造主体タイプ	RC造主体タイプ	S造主体タイプ
概念図	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">木造</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">RC造</div>	主要構造部の一部 RC造 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 50px;">木造</div>	一部 S造 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 50px;">木造</div>	一部木造 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 50px;">RC造</div>	一部木造 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin: 5px auto; width: 50px;">S造</div>
	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-bottom: 2px;">S造</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">RC造</div>				

「層別タイプ」は、階層別に構造が異なる物を示す。例：「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」（1964）（写真 6-5）

「主要構造部位別タイプ」は、各部位別の構造は単一であるが、全体の構造が異種構造で組み合わされているものを示す（例：「長覚院庫裡」（1961）（写真 6-6）。「木造主体タイプ」は、主要構造が木造であるが、補強的に鉄骨の合せ梁が組み合わされているものを示す（例：「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（1985）（図 6-42）。「RC造主体タイプ」は、主要構造がRC造であるが、補強的に他の構造が組み合わされているものを示す例：「神崎邸」（1970）（写真 6-7）。「S造主体タイプ」は、主要構造がS造であるが、補強的に他の構造が組み合わされているものを示す（例：「斉藤邸（Kさんの家/斉藤邸）」（1981））。



写真 6-5 「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」（1964）外観



写真 6-6 「長覚院」（1961）庫裡外観

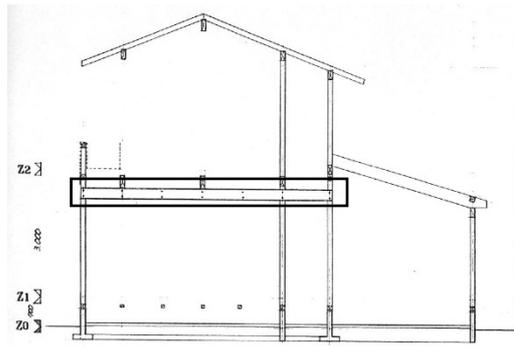


図 6-42 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（1985）軸組図



写真 6-7 「神崎邸」（1970）外観

続いて、各期の採用された構造の種別をグラフに表すと次のようになる（図 6-43）。全期にわたって、混構造の占める割合は約半数であり、単独構造では木造が最も多い。第Ⅲ期は、木造の他、RC 造や S 造等多様な構造を採用している。続いて、混構造タイプの内訳についてみていく（図 6-44）。全期を通して、混構造の形式で最多であったものは、「木造主体タイプ」13 作品、次いで、「層別タイプ」8 作品、「RC 造主体タイプ」8 作品であった。各期の傾向は、木造主体タイプは第Ⅱ期から採用し始め、第Ⅲ期に約 70%最も多く推移する。RC 造主体タイプは、年々減少していき、第Ⅳ期ではみられなくなる。多くの種類の混構造に挑戦しているのは第Ⅱ期である。第Ⅱ期から第Ⅲ期と初めに多くの混構造の種別に挑戦した後で、複数の単一構造の設計に取り組んでいることが明らかになった。「木造主体タイプ」は、木造の S 造による補強したものである。「層別タイプ」は、最上階を木造、それ以外を RC 造とするものが多い。適材適所に材料や構造を使い分けることで、結果として混構造が多用されたと推察できる。ただし、第Ⅲ期、第Ⅳ期では、混構造であることを表出せずにまとめた作品が増えていく。

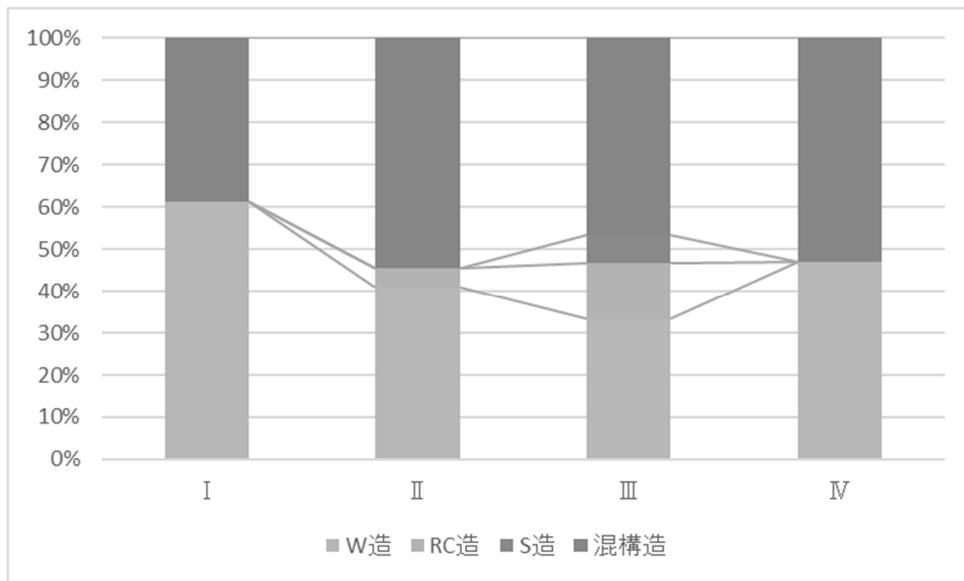


図 6-43 各期別構造別作品数の推移

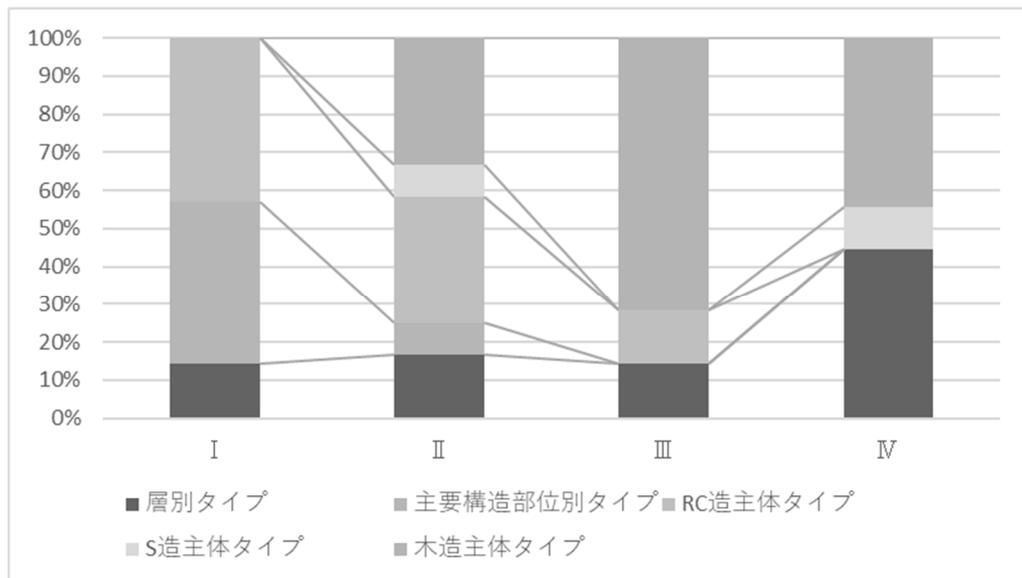


図 6-44 各期別混構造のタイプ別作品数の推移

6.4.7.2 混構造作品における構造の表出の傾向

構造表現主義の影響を池辺から受けた中原は、自身の作品にもその影響が表れている。ここでいう「構造の表出」とは梁（外観・内部空間）、小屋組（内部空間）の構造の一部がデザインとして表出しているものと定義するが、図 6-44 でいうと「層別タイプ」「主要構造部位別タイプ」は少なくとも構造の表出が現れているものとなる。その合計は、池辺研究室から独立した直後である第 I 期に最も多く、その後減少傾向が続くが、第 IV 期に 4 割超となっている。

6.5 考察

「和風」要素についての分析の結果、第Ⅲ期は、第Ⅳ期の重要な過渡期であり、茶室設計につながる傾向を数多く見つけることが出来た。第Ⅲ期には、床の間、長押、広縁の室内のみならず、外壁の塗り壁や屋根の日本瓦葺き等、外部についても和風的な要素が強く作品に現れている。しかし、茶室設計が盛んとなる第Ⅳ期になると、「和風」要素を採用する部位に変化がみられる。外観について、塗り壁としての外壁材料は、漆喰が減少し、外壁仕上げであるリシン書き落としを多く採用する。屋根については、日本瓦からコロニアルを主としたスレートに移行する。このように外壁や屋根の仕上げについては、新しく機能的な材料を積極的に取り入れている。小屋組について、初期は在来軸組構法である和小屋を盛んに採用しているが、徐々にそれを採用せず、代わって登り梁や、母屋構造、垂木構造が約9割を占める。これらの小屋組は、小屋裏空間の活用した、斜め天井の室を設計するためと推察できる。

これらのことから、中原の考える「和風」住宅は、内部はより日本的なものを求めるようになり、茶道の流派に基づいた日本文化を突き詰めた結果、「和風」建築を突き詰めていくことにつながっていく。それに対し、外部や屋根裏といった見えない部分に関しては、適材適所を基本とする機能主義的な選択が行われていることが明らかになった。外壁や屋根の非「和風」化にすることによって、延焼防止の法的規制やコストダウンに対応しているものと思われる。

しかし、結果としてそういう方向に行っただけであって、建築家の設計思想を表したものは必ずしも一致しない。建築設計は、受注産業であるため、建築家の意志がそのまま設計に現れているわけではない。そのため、設計図だけでは、建築家の設計意図を分析することができない。これまでの結果は、中原自身の設計意図はもちろん、時代の流れ、中原自身の評判、世の中の動き、建築主の意向等を踏まえた、総合的なものといえる。作品発表の可否についても、当時のジャーナリズム、建築主の意向、建築家自身の意向が影響する。

本格的な茶室設計に取り組む過渡期である第Ⅲ期は、二つの指向性を見ることができる。第1に、戦後機能主義の合理性をnLDKの平面構成技術として目指すということである。第2に、茶道を通した「和風」住宅の設計が行われているということである。この2つの指向性が、同時に存在し対立し、具体化する。

中原は、1966年から1971年の間に農村住宅の設計を、1972年から1979年までは茶室を改めて習い、茶室設計へとつながる準備として「和風」住宅の設計に取り組んだ。このことから、建築ジャーナリズムとしては、床の間が否定されてきた時期に、多くの床の間、さらには続き間のある住宅設計に取り組んでいたことになる。中原自身も、そのような時代背景の中でNKKでの住宅相談事業等を通して、建築ジャーナリズムの流れと住まい手である建築主より求められる要求の違いについて、身に染みて強く感じていたに違いない。双方の狭間で、自身の目指す方向について悩んでいた時期に茶室設計というものに出会い、自らの目指す方向が明らかになったのではないかと推察できる。身近な叔母や東京家政専門学校から茶道を学び、池辺研究室で設計した初めての住宅も茶室であった中原にとって、茶道を拠り所とすることは必然的なことであったかもしれない。

参考文献リスト

- 文献 6-1) : 『住宅建築』, 第 4 号, 建築資料研究社, 1976.6
 文献 6-2) : 『モダン・リビング』, 第 11 号, 婦人画報社, 1955.6
 文献 6-3) : 横山正他 6 名 : 『和風住宅史』, 新建築社, 1979.9.20
 文献 6-4) : 栗田勇編 : 『現代日本建築家全集 17 池辺陽・広瀬鎌二』, 三一書房, 1972.5.31
 文献 6-5) : 『建築文化』, 第 50 巻, 第 581 号, 彰国社, 1995.3
 文献 6-6) : 濱口ミホ : 『日本住宅の封建制』, 相模書房, 1949
 文献 6-7) : 太田博太郎 : 『床の間—日本住宅の象徴—』, 岩波新書, 1978.12.20
 文献 6-8) : 『建築文化』, 第 404 号, 彰国社, 1980.6
 文献 6-9) : 山田初江 : 『住空間の家族学 「心・体」 感覚で考える』, 彰国社, 2003.10.10
 文献 6-10) : 中原暢子 : 『松本邸新築工事設計図』
 文献 6-11) : 『住宅建築』, 第 14 号, 建築資料研究社, 1976.6
 文献 6-12) : 中原暢子 : 『長谷川邸新築工事設計図』
 文献 6-13) : 中原暢子 : 『堤邸新築工事設計図』
 文献 6-14) : 中原暢子 : 『藤野邸新築工事設計図』
 文献 6-15) : 中原暢子 : 『山本邸新築工事設計図』
 文献 6-16) : 中原暢子 : 『高塚邸新築工事設計図』
 文献 6-17) : 中原暢子 : 『小杉邸新築工事設計図』
 文献 6-18) : 中原暢子 : 『沢柳邸新築工事設計図』
 文献 6-19) : 中原暢子 : 『京極邸新築工事設計図』
 文献 6-20) : 彰国社編 : 『建築大辞典 第 2 版』, 彰国社, 1993.6.10
 文献 6-21) : 木造建築研究フォーラム・図説木造建築事典編集委員会 : 『図説・木造建築事典 [基礎編]』, 学芸出版社, 1995.3.5
 文献 6-22) : パイオニア展実行委員会 : 『未来へ 女性建築家のパオニアたちの肖像—巡回展覧会の記録—』, 2013.3
 文献 6-23) : 「長覚院」住職所有のアルバム『長覚院建設録 V』
 文献 6-24) : 中原暢子 : 『中原邸新築工事設計図』
 文献 6-25) : google, google map, オンライン, 入手先
 〈<https://www.google.co.jp/maps/@35.6836476,139.3525797,3a,49.3y,223.17h,99.92t/data=!3m7!1e1!3m5!1snbbVpSR-PYe5INzygE23Uw!2e0!5s20140501T000000!7i13312!8i6656?hl=ja>〉, 2014.5 撮影

図版リスト

- ・ 図 6-1 : 文献 6-3), 「笠間邸」, p.115 より抜粋。
- ・ 図 6-2 : 文献 6-4), 「関西の家」, p.16 より抜粋。
- ・ 図 6-3 : 文献 6-8), 山田昭・山田初江 : 「材木座の家」, p.126 より抜粋。
- ・ 図 6-4 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。

- ・ 図 6-5 : 文献 6-10), 「103 1階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-6 : 文献 6-10), 「104 2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-7 : 文献 6-10), 「108 矩計詳細図」より抜粋。
- ・ 図 6-8 : 文献 6-12), 「103 1階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-9 : 文献 6-12), 「104 2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-10 : 文献 6-13), 「103 1階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-11 : 文献 6-13), 「112 展開図 4」より抜粋。
- ・ 図 6-12 : 文献 6-13), 「112 展開図 4」より抜粋。
- ・ 図 6-13 : 文献 6-13), 「104 2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-14 : 文献 6-14), 「103 1階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-15 : 文献 6-14), 「104 2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-16 : 文献 6-14), 「107 断面図 1」より抜粋。
- ・ 図 6-17 : 文献 6-15), 「103 1階・中2階・2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-18 : 文献 6-15), 「107 断面図 1」より抜粋。
- ・ 図 6-19 : 文献 6-16), 「103 平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-20 : 文献 6-17), 「103 1,2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-21 : 文献 6-18), 「103 1階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-22 : 文献 6-19), 「103 1,2階平面図」より抜粋。
- ・ 図 6-23 : 文献 6-19), 「107 断面図」, より抜粋。
- ・ 図 6-24 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-25 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-26 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-27 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-28 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-29 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-30 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-31 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-32 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-33 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-34 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-35 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-36 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-37 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-38 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-39 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-40 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・ 図 6-41 : 中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。

- ・図 6-42：文献 6-24), 「206 軸組図 2」より一部抜粋し、筆者が加工。2 階床梁に、鉄骨合せ梁を採用している。
- ・図 6-43：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・図 6-44：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 6-1：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 6-2：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 6-3：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 6-4：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・表 6-5：中原設計の実施図面をもとに筆者が作成。
- ・写真 6-1：文献 6-2), 池辺陽：「和風と現代住宅」, p.188 より抜粋。
- ・写真 6-2：文献 6-4), 「関西の家」, pp.14-15 より抜粋。
- ・写真 6-3：文献 6-9), 「フォーマルリビングのしつらい（室礼）」, p.28 より抜粋。
- ・写真 6-4：文献 6-11), 中原暢子：「H 邸」, p.60 より抜粋。
- ・写真 6-5：文献 6-22), 「下呂の家」, p.39 平面図より「下呂の家」は「木村別邸」と確認ができた。
- ・写真 6-6：文献 6-23) より抜粋。1962.8 頃撮影。
- ・写真 6-7：文献 6-25) (参照 2020.2.7)

注釈

- 6-1)：文献 6-1), 中原暢子：「H 邸」「K 別邸」「T 邸」, pp.55-72
- 6-2)：伝統論争とは、1955 年 1 月に当時の『新建築』編集長であった川添登（1926-2015）が仕掛けた論争であり、多くの建築家を巻き込み、建築における現代と伝統の関係性についてさまざまな見解が論じられた。
- 6-3)：文献 6-2), 池辺陽：「和風と現代住宅」, pp.177-196
- 6-4)：文献 6-2), 池辺陽：「和風と現代住宅」 p.188
- 6-6)：文献 6-6), 「4.床の間追放論」, pp.113-129
- 6-5)：文献 6-5), 「住宅ナンバーシリーズ」, p.24・p.26
- 6-7)：文献 6-7), 「現代における床の間」, p.193
- 6-8)：緋毛氈（ひもうせん）とは、雛壇などに敷く、緋色の毛氈（フェルト布）のことであり、寺院や神社で絨毯代わりに敷かれ、茶席や式場の演出にも使用される。
- 6-9)：文献 6-9), 「予備室を正式な和室に」, p.28
- 6-10)：文献 6-20), 「入側」, p.98
- 6-11)：文献 6-21), 「小屋組 小屋裏のない屋根構造」, p.96
- 6-12)：文献 6-21), 「小屋組 垂木構造」, p.95
- 6-13)：文献 6-21), 「小屋組 小屋裏のない屋根構造」, p.97
- 6-14)：文献 6-21), 「小屋組 さす構造」, p.94

第7章 茶室設計の展開

7.1 第7章の概要

第7章は、中原が設計した茶室について変遷をまとめ、写しと思われる茶室について、本歌と比較することで、その差異から中原の設計における特徴とその考え方の変遷を明らかにする。中原は、広間については、床まわりは本歌の設えをほぼ再現しているが、合せ梁よりも上部に関しては、茶事を行うのに適した空間を創出するため、様々な装置（斜め天井、ガラスルーバー、メタルハライドランプ等）や設備を取り込んでいる。小間については、基本は本歌を忠実に再現しているものの、客や亭主の使い勝手を重視した設計になっていることが明らかになった。

7.1.1 本章の研究の背景

中原は、生涯に少なくとも25軒もの茶室設計に取り組んだ⁷⁻¹⁾。3室の茶室をもつ「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（現存せず）は、1985年に一部鉄骨造とした木造2階建て、3室の茶室（8畳の広間2室、2畳台目の小間1室）を持ち、1階は茶室や水屋の他、寄付として使うこともできる応接室、茶懐石に対応できる台所等茶の湯に関するスペースがある。建築雑誌に掲載された数少ない作品のうちのひとつであり、中原の代表作ともいえるものである（写真7-1、写真7-2、図7-1）。

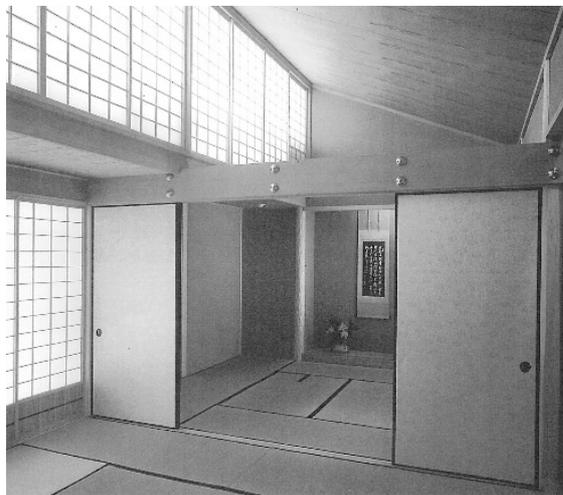


写真7-1 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」茶室1・2

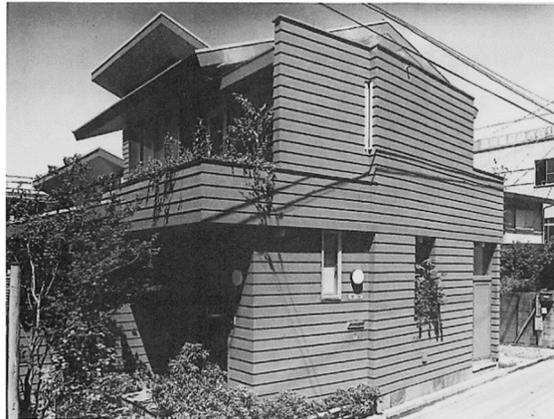


写真 7-2 「中原自邸(茶室のある家)」(1985) 西側外観

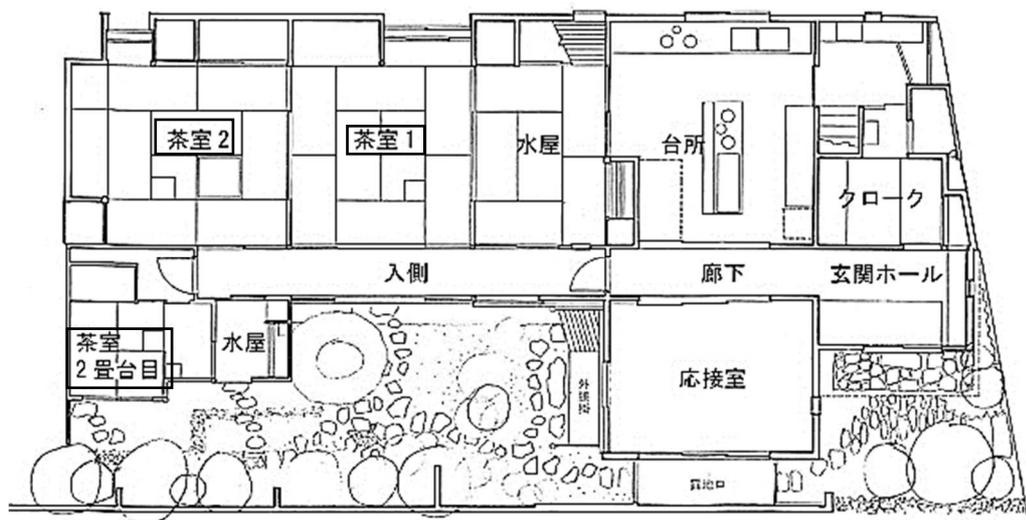


図 7-1 「中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)」1 階平面図

また、中原は表千家として「宗暢」の茶名を受け、多くの弟子を育てた。自邸では自ら積極的に茶会を開き、茶道教室や懐石料理教室を行うなど、自身の客をもてなす側に立った亭主や裏方としての幅広い活動を行った。「中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)」は、当初1階部分を貸し出すことで生計を立てようと建てられたものであるが、中原の茶道の弟子である山田豊の妻によれば、「中原は、月1回程度茶会を開くためのプロデュース、つまり茶懐石の料理人を自宅に招き、料理、道具、器、軸、花等を準備し、総合的な茶事の経験を体得する場を周到な準備を経て開催していた」⁷⁻²⁾という。中原は、自身の設計に茶室が多いことについて次のように振り返っている。

「私がつくったものでは茶室がとても多い。池辺研の第1件目もそうだし、設計同人をつくって1件目もそうですが、茶室なのです。どうして私に茶室がくるのだろう。全然わからないのという感じで、結局40歳からお茶を習い始めた。いまでもとても興味があって、なかなか離れられません。クライアントにお茶をやる人が多かったのですが、この頃、お茶をあまりやらないけど、お金持ちだから茶室くらいなればと、建ててくださいと言う人がい

る。見世物でつくりたいのね。そういう仕事が事務所に来ると、必ず私とのところに回ってくる。」⁷⁻³⁾

上記にある池辺研第1件目とは、施主が池辺の同級生⁷⁻⁴⁾でその父が茶人である「住宅No.10・秦邸」(1953)(図7-2)を、設計同人設立後の1件目とは、「矢島商店」(1960)(図7-3、図7-4)を示していると思われる。しかし、「矢島商店」は炉があるが、仕上げ表には「堀ゴタツ」との表記もあり、基礎伏図には炉や掘炬燵の表記はない。そのため、設計同人設立後の1件目というのは、実質的には、「吉永邸(通り庭のある家)」(1961)(図7-5)であったと思われる。

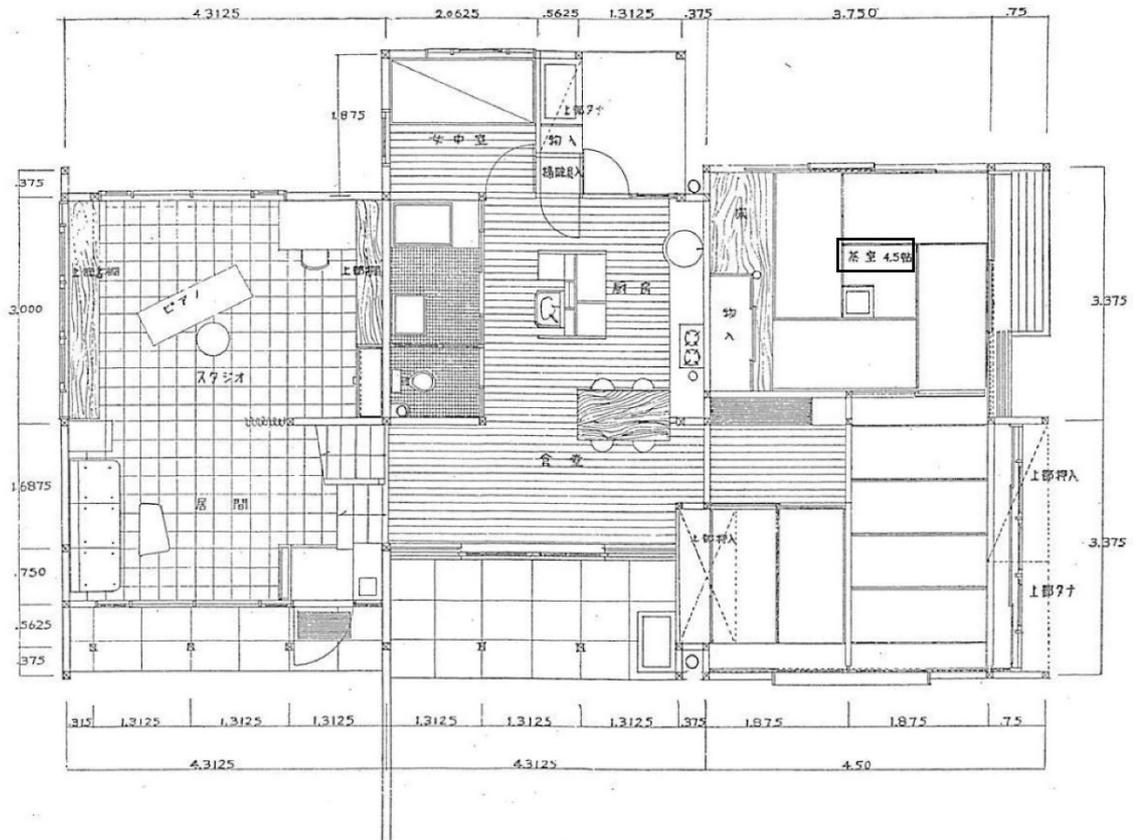


図7-2 「住宅 No. 10・秦邸」1階平面図

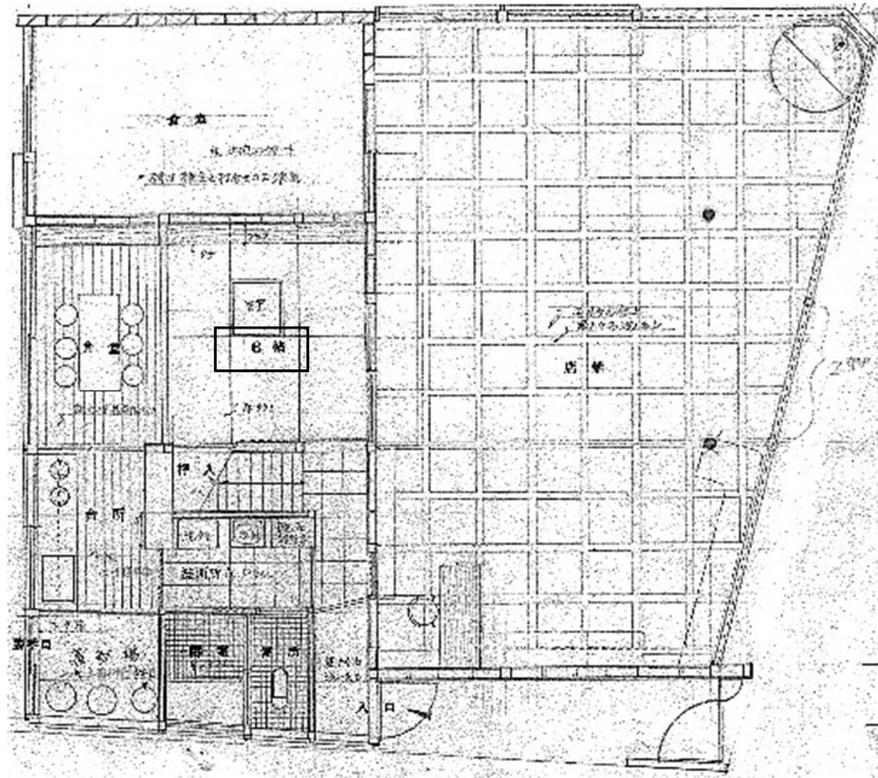


図 7-3 「矢島商店」1階平面図

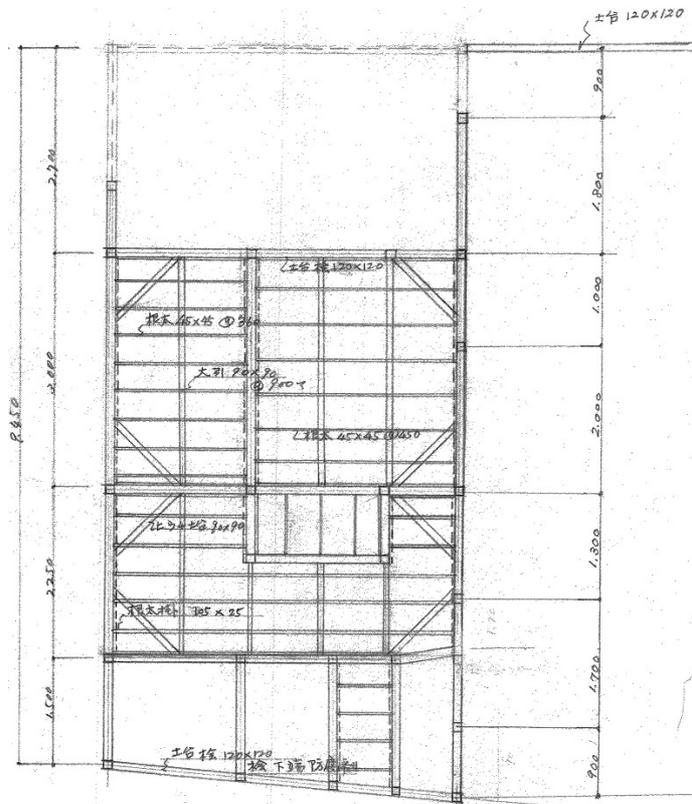


図 7-4 「矢島商店」1階床伏図

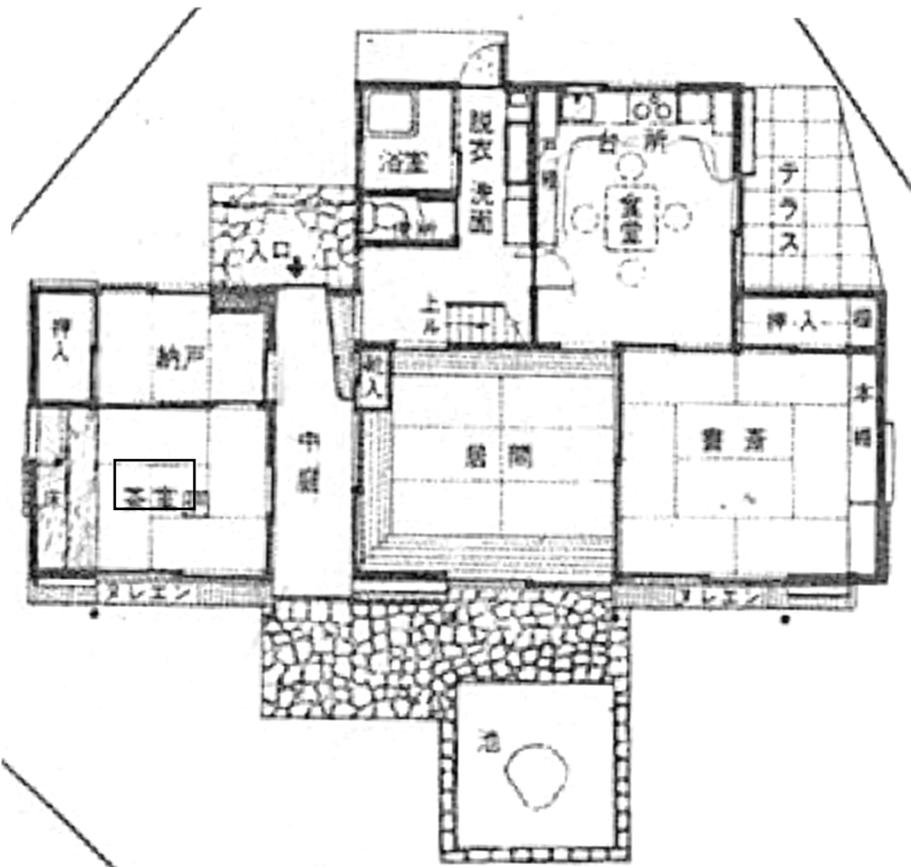


図 7-5 「吉永邸（通り庭のある家）」1階平面図

7.1.2 本章の目的と分析方法

茶室の設計の一つとして「写し」という手法がある。本章では、小間（4.5 畳以下で躡口のある茶室）については平面、立体構成、材料や寸法が同一であるかを「写し」の定義とする。

中原の茶室設計方法を明らかにするには、小間、広間（4.5 畳以上の茶室）、水屋（茶室に隣接する茶道具や水などを用意する場所）等の構成、及び露地（茶室に付随する庭、茶庭）との関連性を明らかにする必要がある。

中原が設計同人時代に設計した茶室は、住宅に付属する茶室がほとんどであり、公共の茶室の設計はみられない。中原が設計をした茶室で、設計図書として確認できたのは 15 軒 25 室（表 7-1）である。その内訳は、新築が 11 軒、増改築、改装（以下、「増改築等」という）が 4 軒である。新築茶室の場合、1 軒につき複数の茶室が付属しているもの、1 室の茶室に複数の炉が切っただけのも存在する。自身の流派にこだわらず他流派の茶室も設計している。時代区分は、第 1 章第 3 節と同じ区分として、茶室設計における各期の特徴を明らかにする。

本章では、まず、いくつかの中原が設計した茶室作品の具体例を挙げ、その流れを明らかにする。さらに、写しと思われる広間 2 作品、小間 3 作品について本歌との差異を明らかにすることによって、中原の茶室設計に対する考え方を明らかにする。中原の写しと思われる作品を位置付けるため、根岸照彦著『茶室の解明 平面データ集成』（2001.11）に掲載の实在

する古今のさまざまな 1,159 軒の茶室の中から、畳の構成、炉の切り方が同じ形式であり、かつ小間の場合は中柱があるものを抽出し、表にまとめる。そして、それらと各々の本歌とみられる茶室の建築図面等を用いて比較を行い、その差異を明らかにすることで、中原の茶室設計における考え方の変遷を明らかにする。補足的に、水屋や露地についても論じてゆく。

表 7-1 中原暢子設計の茶室概要

No.	設計年	住宅名	時期	建築の種類	施主の流派	室名	畳数	炉	炬の切り方	勝手	床の種類	床の位置	床の大きさ		附属する水屋		小間広間	開口	寄付	厨房/台所	外懸掛	露地		
													D×W (mm)	床の大きさ	D×W (mm)	広さ							水皿(流し) D×W (mm)	
1	1960	001矢島商店	第I期	新築	不明	茶室	6畳	○	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	—	—	—	—	広間	—	(不明)	台所	(不明)	(不明)		
2	1961	019吉永邸(通り庭のある家)	新築	新築	不明	茶室	4.5畳	○	四畳半切	逆勝手	踏込床・原畳床	上座床	480×2,700	1,800×3,600	400×900	—	広間	—	居間	台所	濡れ縁	通り庭		
3	1963頃	149岡邸	新築	新築	不明	茶室	4.5畳	○	四畳半切	本勝手	踏込床	亭主床	500×3,150	900×2,950	300×850	—	広間	—	和室	台所	—	バルコニー		
4	1964	036木村別邸 (K氏別邸、下呂山の家)	新築	新築	不明	茶室	4.5畳	○	四畳半切	本勝手	織部床	上座床	—	1,000×1,800	550×950	—	小間	○	待合	台所	—	(不明)		
5	1975	085高橋邸	増改築	増改築	不明	茶室	6畳	○	広間切	本勝手	約床・踏込床	客座上座床	350×900	—	—	—	広間	—	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)		
6	1978頃	167増田邸増築	増改築	増改築	不明	茶室4.5帖	4.5畳	(不明)	(不明)	(不明)	(不明)	客座上座床	1,080×1,100	1,080×1,100	300×1,060	—	小間	○	6帖	台所	(不明)	(不明)		
7	1979	103大塚邸	増改築	増改築	不明	和室8帖	8畳	○	広間切	本勝手	本床	上座床	3,400×1,820	480×1,820	480×1,820	—	広間	—	家族室	台所	(不明)	(不明)		
8	1981	107佐野邸	新築	新築	江戸千家	茶室1 和室1	8畳 6畳	○	広間切	本勝手	本床	上座中床	910×1,820	—	—	—	広間	—	和室1	台所	(不明)	(不明)		
9	1981	108斎藤邸 (Kさんの家、斎藤邸)	新築	新築	不明	茶室2	3畳台目	○	台目切	本勝手	本床	風炉先床	970×1,475	—	—	—	小間	○	茶室1	台所	—	バルコニー		
						和室1	4.5畳	○	四畳半切	本勝手	踏込床	上座床	404×1,850	1,933×1,695+	600×1,270	—	—	—	小間				○	居間
						茶室	3畳台目	○	台目切	本勝手	本床	風炉先床	985×900	396×880	—	—	—	小間	○				茶室2・3	
10	1985	000中原自邸 (茶室のある家、自邸、浦和の家)	新築	新築	表千家	和室2	8畳	○	広間切	本勝手	本床	下座床	600×1,385	2,555×2,595+	600×1,300	—	—	—	—	茶室3	台所	ペンチ	バルコニー	
						和室3	8畳	○	広間切	本勝手	踏込床	客座上座中床	1000×1,600	1,010×1,935	—	—	—	—	—	—				茶室2・3
						茶室1	8畳	○	広間切	本勝手	本床	下座床	910×1,875	4,860×2,790+	550×1,250	—	—	—	—	—				—
11	1987	125山田邸1	新築	新築	裏千家	茶室	2畳台目	○	台目切	本勝手	本床	上座中床	780×1,875	1,875×600	—	—	—	—	—	心渡	台所	外懸掛	茶庭	
						茶室	4.5畳	○	四畳半切	本勝手	本床	上座床	800×1,312	2,008×1,547	450×1,111	—	—	—	—	—				—
12	1987	028森邸	新築	新築	表千家	小間茶室	4.5畳	○	四畳半切	本勝手	本床	上座床	550×1,450	910×2,730	400×910	—	—	—	—	寄付	台所	○	茶庭	
						茶室8帖	8畳	○	台目切	逆勝手	本床	上座床	900×1,875	1,820×5,460+	500×1,200	—	—	—	—	—				—
13	1989	129増田邸	新築	新築	不明	茶室8帖	8畳	○	広間切	本勝手	本床・琵琶側	客座上座中床	900×1,400	2,800×2,560+	650×1,313	—	—	—	居間6帖	台所	○	茶庭		
						茶室3帖台目	3畳台目	○	台目切	本勝手	本床	上座床	1,300×1,000+	832×1,462	—	—	—	—	—				—	—
14	1990	130大野邸茶室	新築	新築	表千家	和室	8畳	○	広間切	本勝手	踏込床	上座床	600×1,820	—	—	—	—	—	居間	台所	濡れ縁	(不明)		
						茶室小間	3畳台目	○	台目切	本勝手	本床	下座床	909×1,871	2,955×3,742+	606×1,200	—	—	—	—				—	—
15	1994	139山田邸改築	改築	改築	表千家	和室	10畳	○	広間切	本勝手	本床	上座床	787×1,378	2,955×1,455	—	—	—	—	和室	厨房	○	茶庭		

注：炬があるもの又は室名が「茶室」のものを算入した。また、勝手は、炬を使用する時期(11~4月)を想定している。
 炬については、一般的な炬のサイズ(1尺4寸4方)の場合は「○」を、それよりも大きい炬の場合は「大炬」と記載した。
 床の大きさ、付属する水屋の広さ、水皿(流し)の大きさは、図面に寸法表記のある場合は、それを記載し、記載がない場合は、芯々で計測し概算を記載した。
 小間広間の別は、4.5畳以下で開口のあるものを小間とし、4.5畳以上で開口のないものを広間とした。
 寄付は、室の用途が寄付として使用する室名を記載した。
 網掛部分は、炬が破線で表記されており、畳の敷き方が図面と異なる可能性がある。

7.2 中原暢子設計の茶室における時代別特徴

7.2.1 初期の近代的な茶室設計

第I期（1958-1965）は、「矢島商店」（図7-3、図7-4）、「吉永邸（通り庭のある家）」（図7-5、写真7-3、写真7-4）、「岡邸」（図7-6）、「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」（図7-7）の4軒の茶室が該当する。通り庭から直接アプローチする「吉永邸（通り庭のある家）」の茶室は、原叟床（一畳大の地板の上の少し入ったところに床柱を立て落掛を入れた床）で、落し掛けを設けず、幕板のみのシンプルなデザインである。平面図上の確認では、「住宅No.10」の茶室4.5畳と同じ床の形式である。茶室にアプローチするための露地をこの通り庭が兼ねている。「吉永邸（通り庭のある家）」は雑誌『室内』（1963.4）に、「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」は、『建築文化』（1966.10）と『住宅建築』（1976.6）等に掲載されている。ただし、「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」の茶室の写真の掲載はないため、中原が書いた平面図と展開図（図7-8）を参考とした。躡口を含んで北壁面を6分割とし、上げ下げ障子をはめ込んでいる。待合と行き来する戸は、茶室室内からみると、右上がアールに見えるよう計画されている。床の種類は織部床である。「立川邸2」（1970）の続き間の天井には数寄屋的な工夫がみられる（図7-9）。畳数は「矢島商店」以外は4.5畳であり、炉の切り方も四畳半切と共通である。この頃から既に軽微な水屋を備えた本格的な茶室の設計にも取り組んでいる。



写真7-3 「吉永邸（通り庭のある家）」茶室



写真 7-4 「吉永邸（通り庭のある家）」露地としての通り庭

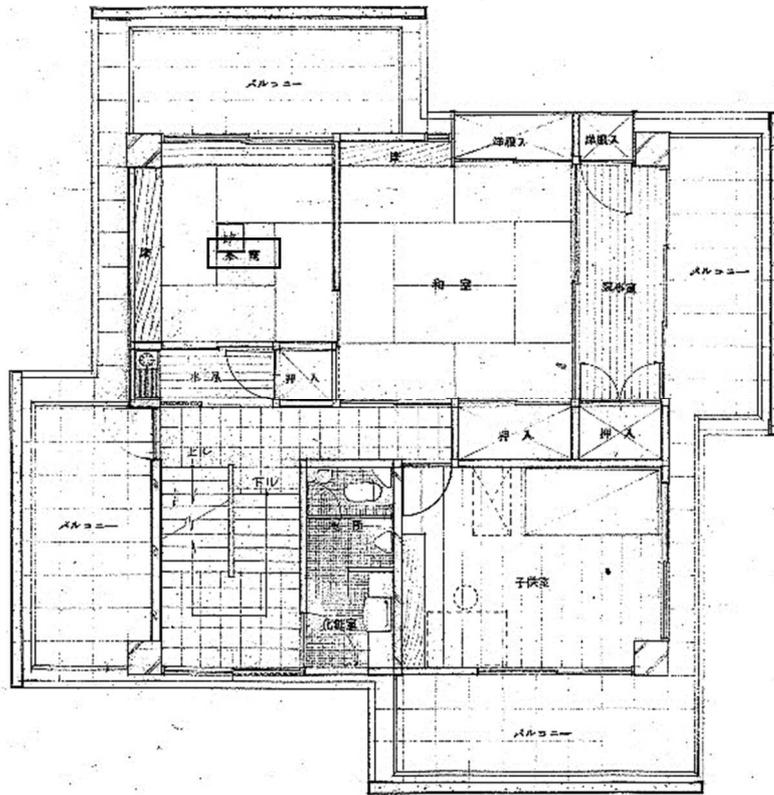


図 7-6 「岡邸」2階平面図



図 7-7 「木村別邸 (K 氏別邸/下呂山の家)」1 階平面図

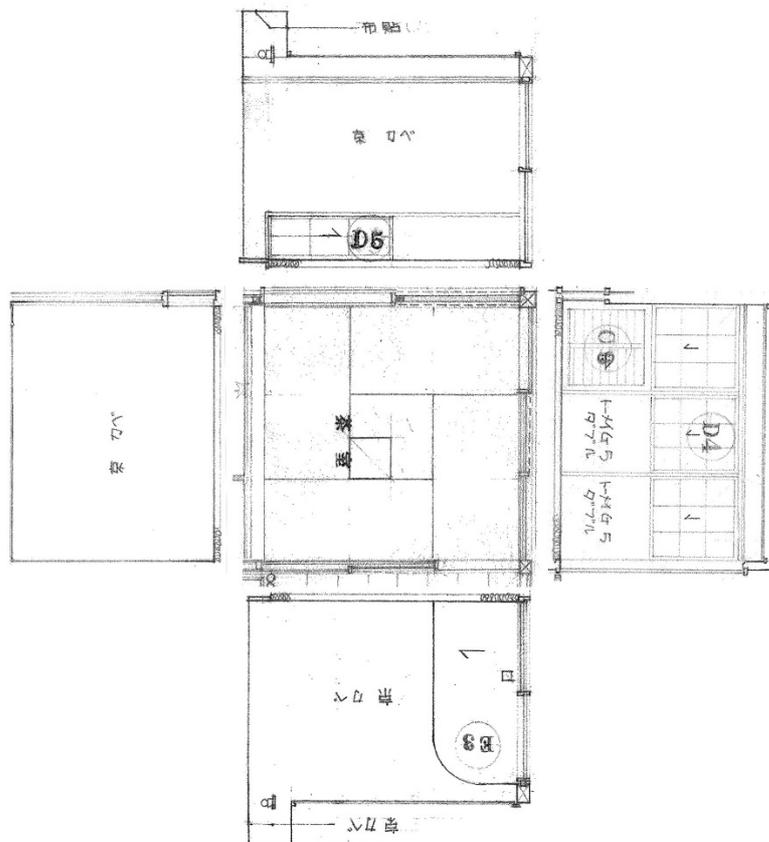


図 7-8 「木村別邸 (K 氏別邸/下呂山の家)」茶室平面図・展開図

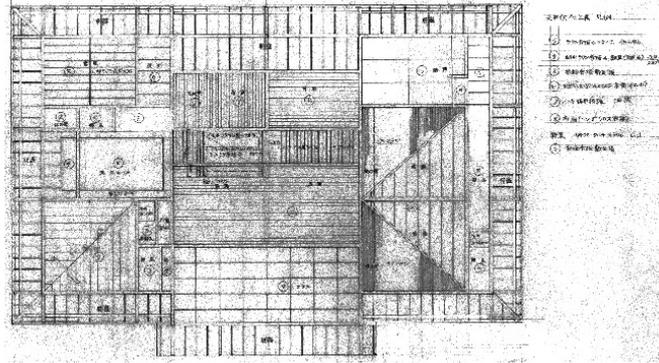


図 7-9 「立川邸 2」(1970) 天井伏図

本格的な茶室といっても、専用の水屋はそれほど大きくない。「吉永邸(通り庭のある家)」は、隣接する納戸の一角が、「木村別邸(K氏別邸/下呂山の家)」は室内にある待合の一角が、水屋となっている程度である。第Ⅰ期の茶室は、あくまでも住宅全体の設計の中で茶室と水屋の関係が決定されているため、全体のデザインを優先し、茶室にそのしわ寄せが生じている。ただし、茶室の知識を生かして自由にデザインをしている。

第Ⅱ期(1966-1971)には、茶室設計はみられない。

第Ⅲ期(1972-1979)は、「高橋邸」「増田邸増築」「大塚邸」の3軒の茶室が該当するが、いずれも増改築等であり、既存部を含めた全体像は現存している図面からでは確認できない。「高橋邸」は、床の間があるものの、その大きさは丸畳の1/5程度と極めて小さく、釣床の踏込床となっている(図7-10)。「増田邸増築」は、畳の敷き方の表記がなく不明な点が多いが、水屋は廊下の突き当りにコーナーとして設置している(図7-11)。「大塚邸」の天井高は2,340mmであり、部分的に2,140mmと低くしている(図7-12)。

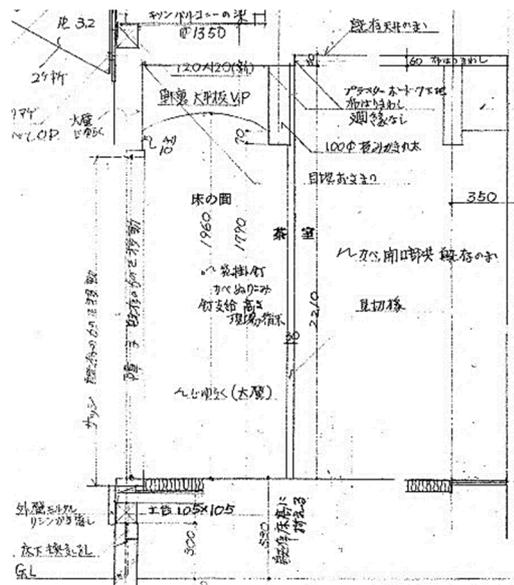


図 7-10 「高橋邸」茶室の釣床踏込床

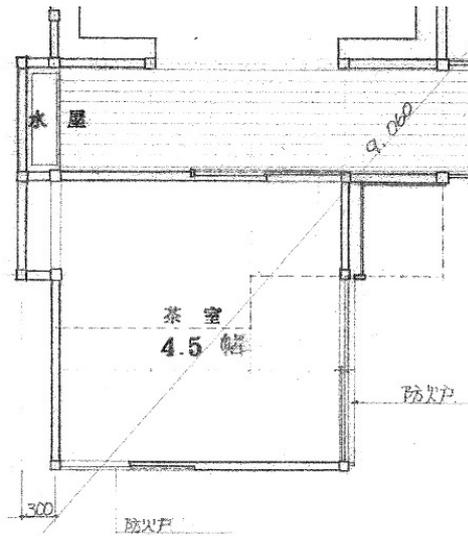


図 7-11 「増田邸増築」茶室と水屋平面図

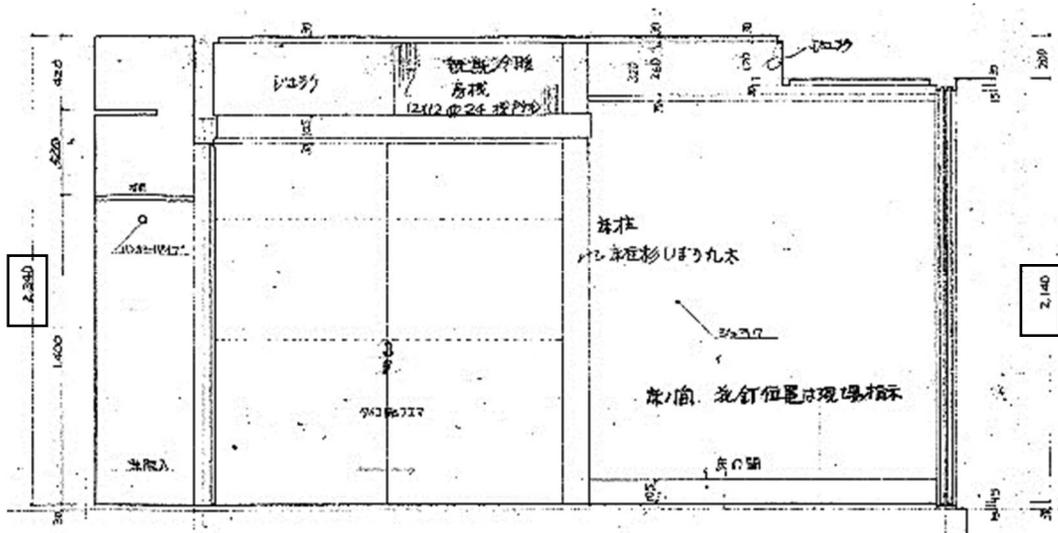


図 7-12 「大塚邸」和室 8 畳展開図

中原設計の茶室の増改築等は、極めて単純な方法で行われる。第 1 は炉を設けることである。風炉（火を入れて釜を掛ける道具。5～12月に行われる点前で使用する。）で対応することは可能であるとしても、一般的には、増改築等で新たに茶室を設計する場合、少なくとも炉や床の間を設けると思われる。床の間を容易に設置する場合、壁床、織部床、釣床等であれば簡単に設えることが出来る。第 2 にもう少し本格的に茶道を行う場合は水屋を設ける。これは水皿（すのこを敷いた流し）を設置し、給排水設備が必要となる。さらに茶室らしくするために天井は仕上げや勾配などを変える。増改築等の茶室を新築茶室と同じにすることは可能であるが、基本、茶を楽しむにはこの程度の増改築等が多い。第Ⅲ期では待合や寄付、小間と広間との関係、懐石料理を振舞うための台所の充実等は検討されているが、部屋の大きさや茶室との繋がりが完成した形には到達していない。

7.2.2 本格的な茶室設計とプロデュース

第IV期（1980-2002）は、8軒の茶室設計がみられるが、新築では特に1軒に付き複数の茶室をもつ住宅の設計が目立つ。中原は、1981年頃から茶室の写しの設計に取り組むようになる。この時期の前半は、「佐野邸」（1981）、「斉藤邸（Kさんの家/斎藤邸）」（1981）が該当する。

「佐野邸」は、1軒に3室もの茶室を持つ住宅であり、中板（点前畳と平行に客畳との間に入れた板畳のこと）のある茶室がある（和室1）（図7-13）。「佐野邸」の設計は1981年6月だが、その年の12月に中原はくも膜下出血で倒れ、竣工は1984年と竣工までに長い期間がかかった。「斉藤邸（Kさんの家/斎藤邸）」は、中原が茶道を通じて知り合った友人が建築主の住宅であり、規模は3階建てでベランダに露地がある。4室の茶室（2階に1室（写真7-5、図7-14）、3階に3室）の他、可動間仕切りで分割して使用可能な店舗に、懐石教室ができる業務用調理台等も完備している（写真7-6）。中原は「斉藤邸（Kさんの家/斎藤邸）」について、「これだけ制約のある空間では、やはり伝統にのっとった方が、より緊張感のある接客空間ができると考えざるをえなくなった。」⁷⁻⁵⁾と述べている。このように第IV期前半は、趣味で茶道を嗜むのではなく、自宅で教室などを運営するための茶室設計に移行していく。「佐野邸」「斉藤邸（Kさんの家/斎藤邸）」設計担当であった元所員・白井克典によると、「この2軒は、ともに茶事の亭主が女性であり、裏方も自分で行い采配も振るう、もてなす側のすべてを自分でやり切れるというのが特徴であり、いわゆる茶室の巨匠の建築家の考えとは異なる。デザインというより、動線による機能やサービス、茶懐石でのオペレーションを重視した。」⁷⁻⁶⁾という。

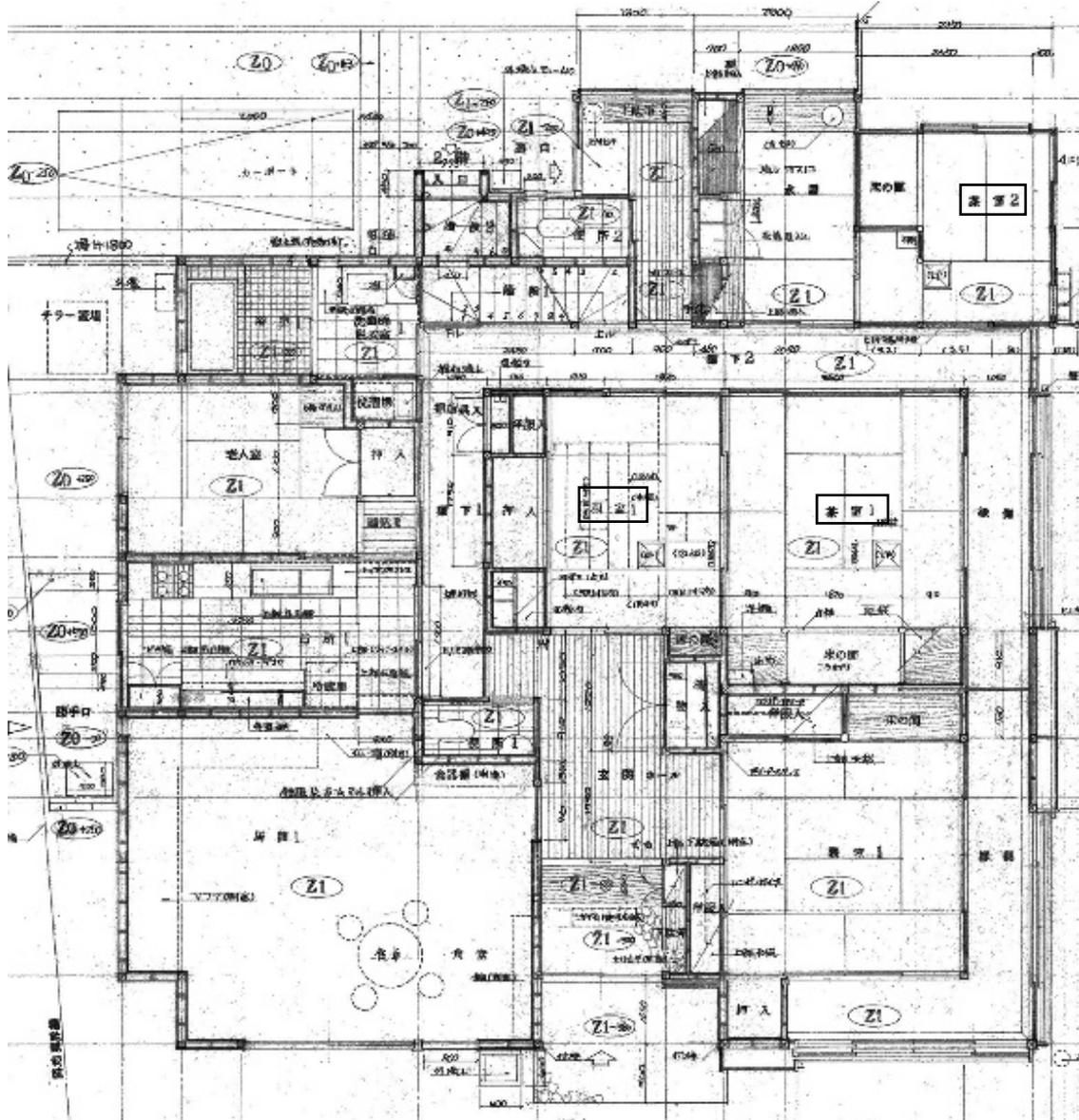


図 7-13 「佐野邸」1階平面図

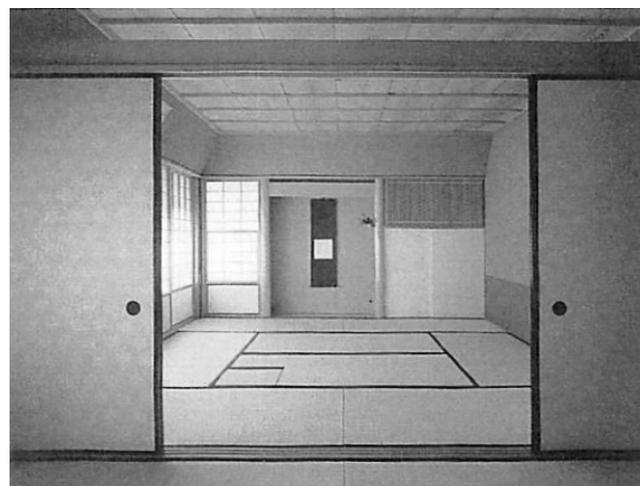


写真 7-5 「斎藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)」茶室 2

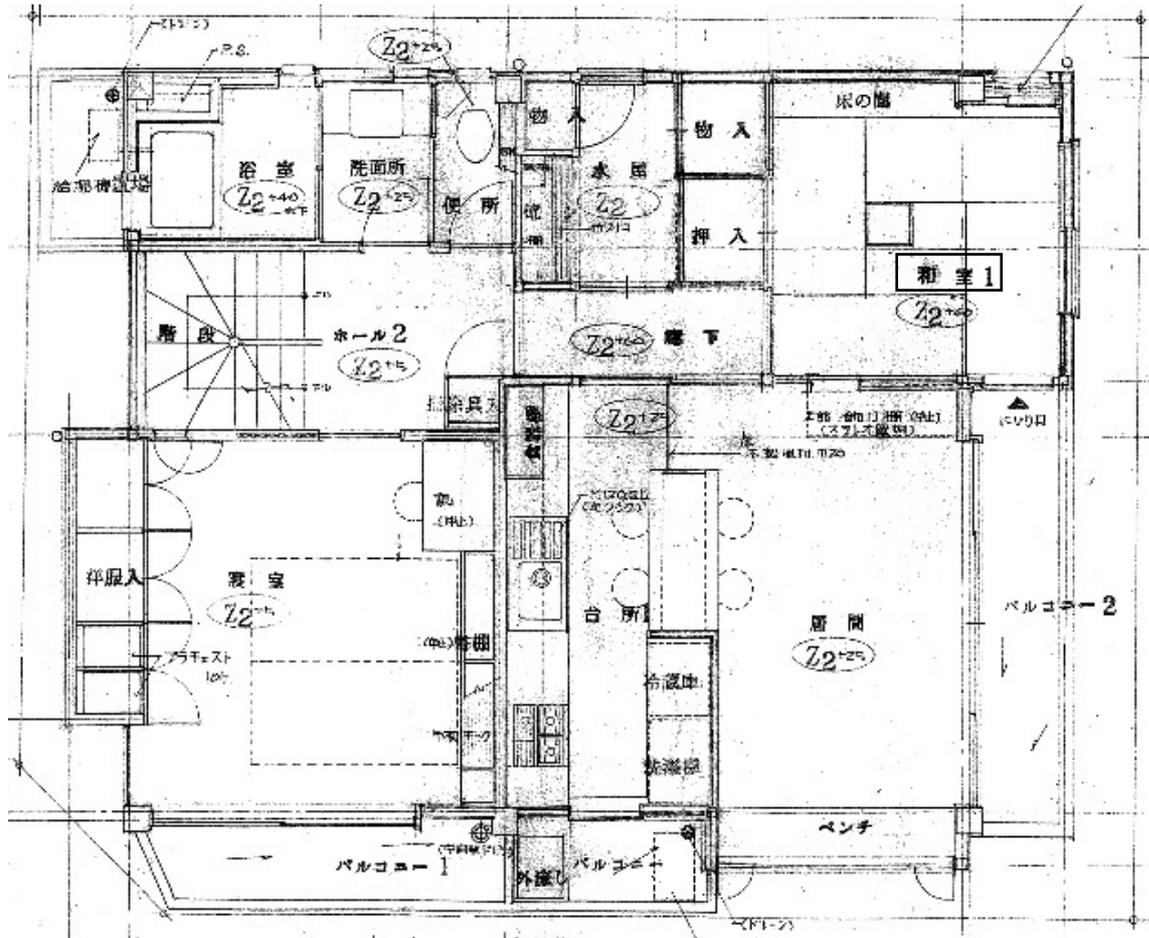


図7-14 「斉藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)」2階平面図



写真7-6 「斉藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)」店舗

第IV期後半は、茶道の専門家のための茶室設計である。作品としては、「中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)」の他、「山田邸1」「森邸」「増田邸増築」「大野邸茶室」「山田邸改築」

が該当する。一人暮らしが前提の「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」は、1階を茶事のための空間（図7-1）、2階をプライベート空間とし、水屋は広間用と小間用にそれぞれ専用ものが配され、業務用の調理台等を導入した茶懐石の調理ができる台所がある。露地には外腰掛の他、飛石や蹲、中門もあり二重露地となっている（写真7-7）。「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」の設計では、徹底的な検討が行われ、茶懐石の専門家の意見を入れて水屋、台所の関係をより完全なものとし、寄付、待合、外腰掛、蹲など自邸の設計であるが故に自身の理想とする茶室が完成した。その他、「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」についての茶室の詳細は、第7章第3節・第4節に後述する。「山田邸1」も1階は、茶事のための空間としてまとめ（図7-15）、2階の住居部分の直接の出入口は外階段を用い明確に分離しており、北側の茶室8畳には、大炉（裏千家独自の炉で正式な寸法よりも大きな炉のこと）を含む3つの炉が計画されている。「森邸」（図7-16）は、1階の和室すべてが東の露地に面するように配置しているため、台所・食堂には外部に通じる開口部位置が制限されている。また、「山田邸1」「森邸」は共に露地があり、図面には外腰掛や蹲の記載が確認できる。「増田邸増築」は、台所・食堂に隣接した茶室で、水屋の機能を兼ねることでコンパクトな設計となっている（図7-17）。



写真7-7 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」の露地

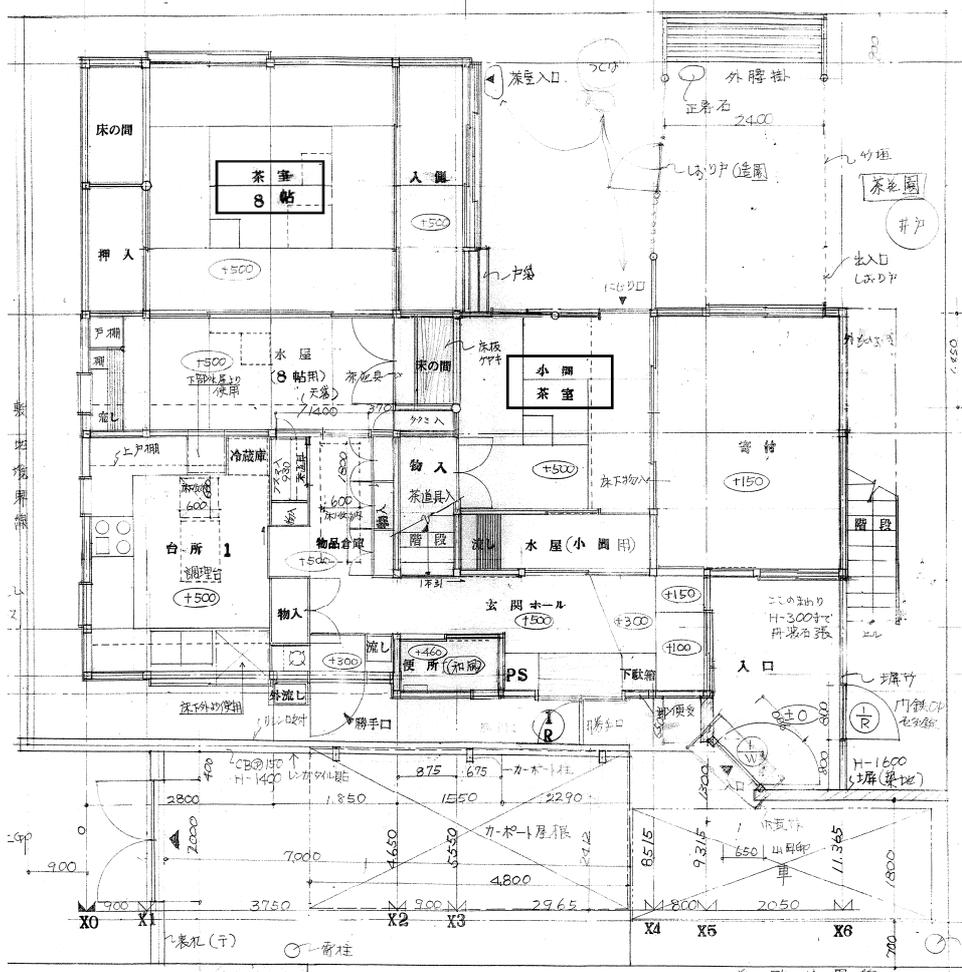


図 7-15 「山田邸 1」1 階平面図

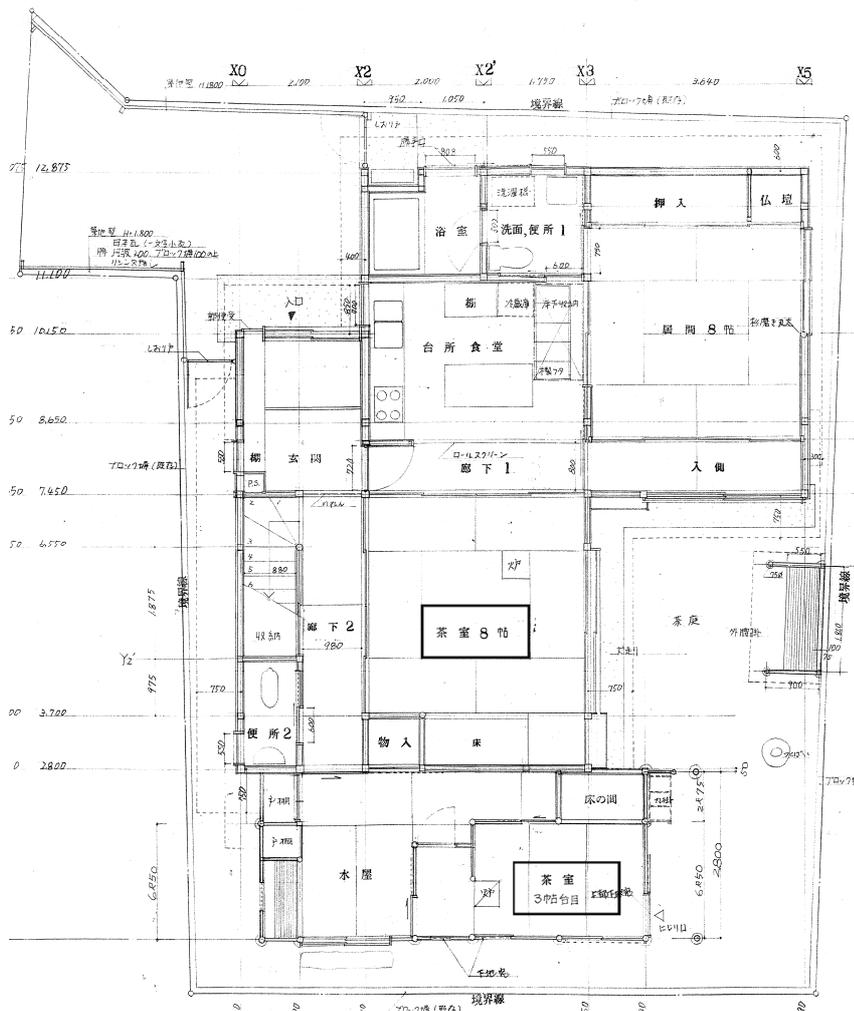


図 7-16 「森邸」1階平面図

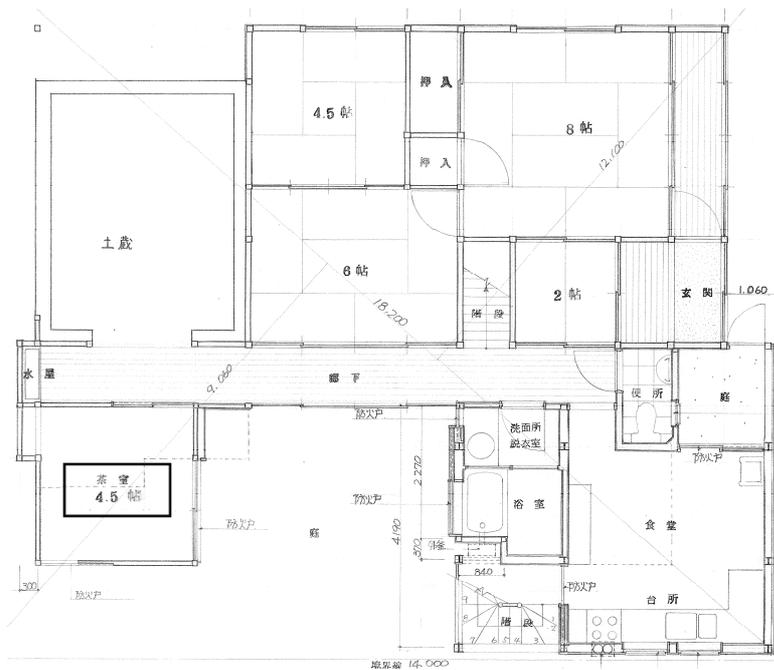


図 7-17 「増田邸増築」1階平面図

「大野邸茶室」は、敷地内に住宅の他、別棟として建てられた茶室専用の建物である。各茶室には、専用の水屋が隣接している。「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」同様、本格的な露地が計画されている（図7-18）。また、これまで表記のなかった室名を「寄付」とした室が配置される。また茶懐石を調理する室として室名を「厨房」とする調理場所が出現し、「茶庭」の文字も見受けられる。なお、「山田邸改築」は、（図7-19）。企画のみで建設はされていない。

造園計画は、造園業者へ設計依頼が多いが、少なくとも「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」「山田邸1」「森邸」の3軒は「東洋園芸」が造園工事を担当している。

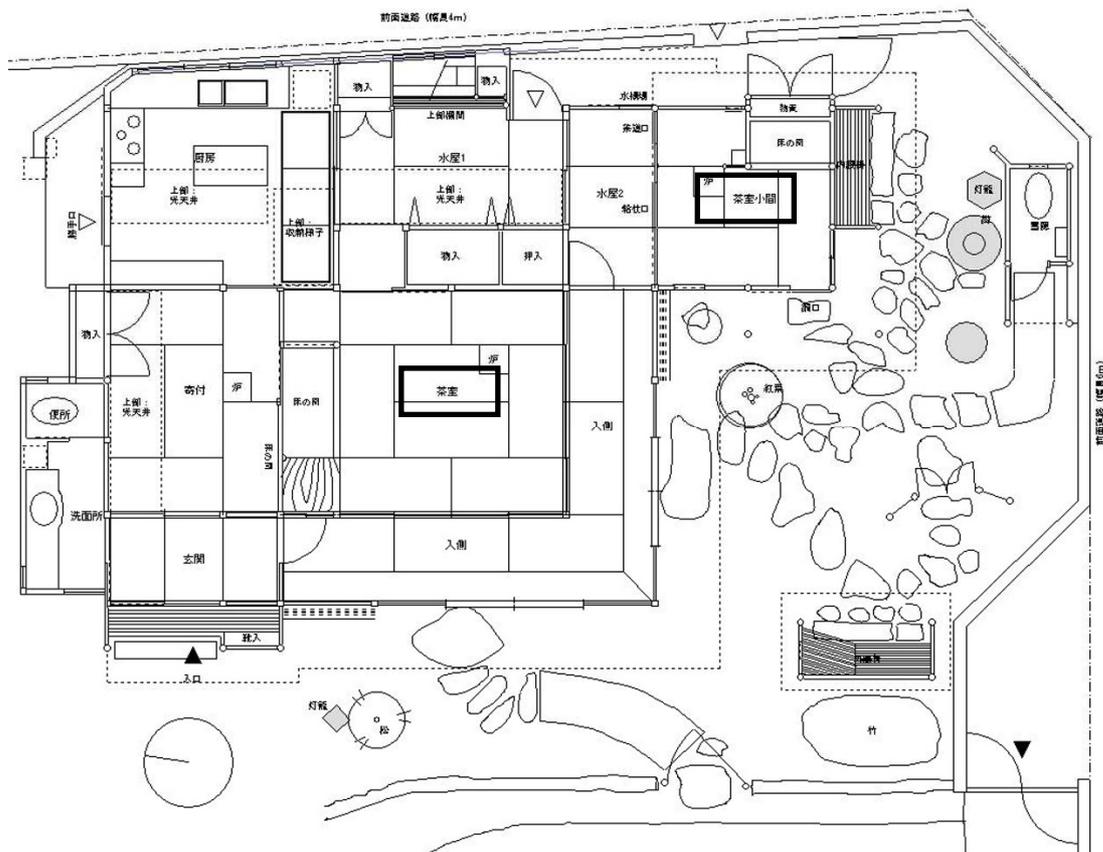


図7-18 「大野邸茶室」の配置図兼1階平面図

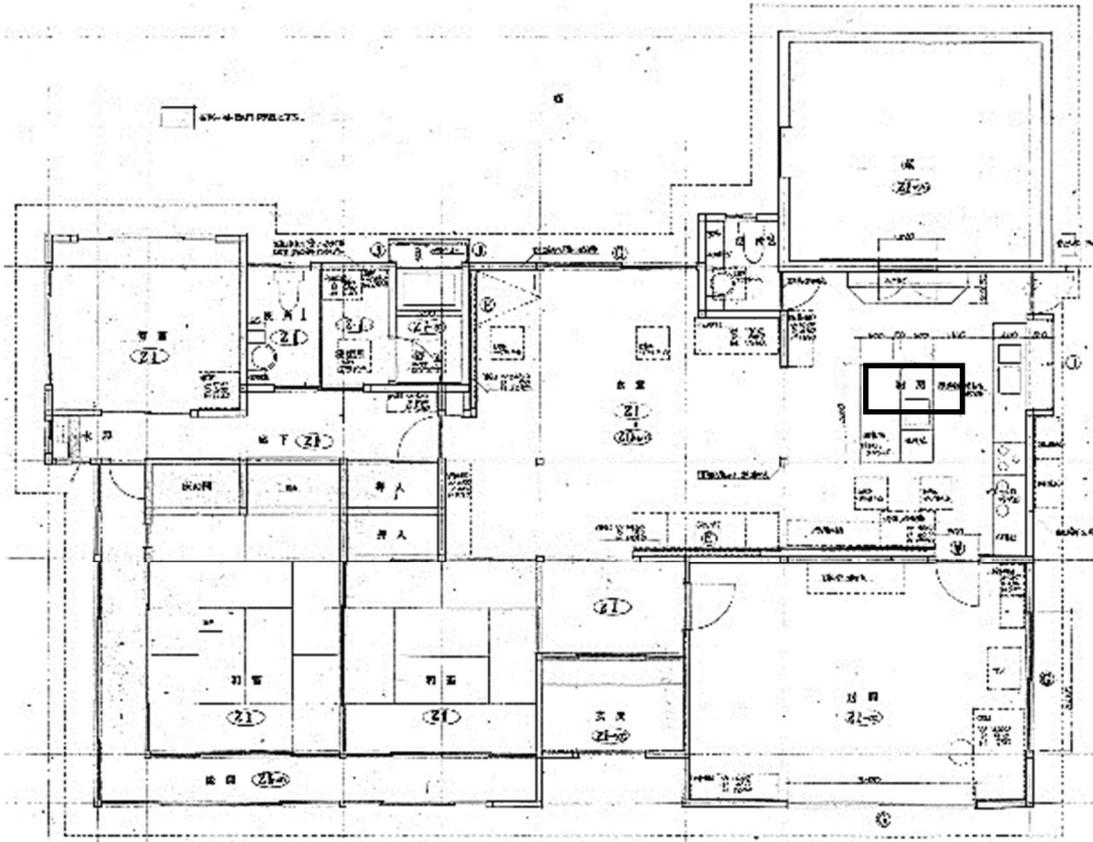


図 7-19 「山田邸改築」の1階平面図

また、茶室と水屋との関係において、「(中原は、「大野邸茶室」設計時に、) 流し(水皿)にお湯を捨てると銅板の熱膨張で音が鳴らないようにしなければならないと言っていた。」との証言があった⁷⁻⁷⁾。さらに、台所・厨房の調理時の音が漏れる対応として、その間に家具や厚みのある木製屏風を置いて音を軽減させることをしていたという⁷⁻⁸⁾。この水屋や台所・厨房と茶室との音の問題は「中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家)」の設計で見つけ出した問題であるため、丁寧に十分配慮して設計している。

7.3 広間における本歌の写しとみられる作品

広間について、写しであることを中原自身が述べた資料はみつかっていないが、中原が設計した「佐野邸」8畳広間は、畳数は異なるものの、床の位置や種類が江戸千家「花月楼(花月の間)」と類似しており、これを写したものと思われる。また、「中原自邸(茶室のある家/自邸/浦和の家)」の広間は、8畳二間続きであり、西側の茶室2は、表千家「松風楼」の構成に酷似している(図7-1・表7-2)。中原は、この広間について、「従来の和室のモジュールを全く無視し、現代人としての空間構成を比較してみた」⁷⁻⁹⁾と述べている。

表 7-2 中原が設計した写しとみられる広間

建築名（設計年）	室名称	畳の数	本歌
「佐野邸」（1981）	茶室1	8畳	江戸千家「花月楼（花月の間）」
「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（1985）	茶室2	8畳	表千家「松風楼」

7.3.1 中床四畳半切の茶室

中原が設計した「佐野邸」茶室1と「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」茶室2平面形状は、いずれも上座中床の四畳半切（図7-20）である。上座中床とは、上座側の間口の中間に床の間が位置するものをいい、四畳半切とは、点前畳（亭主が茶を点てる畳）より客座側の半間下に出ている炉で、踏込畳が丸畳の炉の切り方で、広間切ともいう。なお、中床は七事式⁷⁻¹⁰を行うために工夫された座敷であるとされる。『茶室の解明 平面データ集成』を基本として、江戸千家「花月楼」と表千家「新席」は、写真をもとに比較を行った。中床で四畳半切の茶室は以下の表の通りである（表7-3）。続いて、中原の設計したこの2作品の茶室について、詳細をみていく。



図 7-20 四畳半切の例（8畳本勝手の場合）

表 7-3 中床四畳半切茶室

茶室名	造営	好み (創建者)	床の間の位置	畳数	床の間の種類	
					床の間に向かって左	床の間に向かって右
江戸千家「花月楼 （花月の間）」	不明	川上不白	上座中床	10畳	琵琶棚・地袋	二重吊棚
松陰神社「花月楼」	安永5年 (1776)	川上不白	上座上段式床	8畳	床脇	床脇
表千家「松風楼」	大正10年 (1921)	12代惺斎	上座中床	8畳	—	琵琶棚
表千家「新席」	昭和34年 (1959)	不明	亭主床	8畳	琵琶棚・地袋	床脇

7.3.2 床回りにおける特徴

「佐野邸」茶室1（図7-21）は、中央の床の間の右に二重釣棚、左に下部が地袋の琵琶棚⁷⁻¹¹があり、弧を描いた小壁を2方向に廻している。畳数や地袋の高さ、落とし掛けの高さ等は多少異なるが江戸千家「花月楼（花月の間）」（写真7-8）とほぼ同様であった。

「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（図 7-1）の茶室 2（西に位置する茶室）は、中央の床の間の右に琵琶棚が配され、炉の位置も表千家の「松風楼」（写真 7-9）と同様であった（図 7-22、図 7-23）。「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」は、「松風楼」を写したものである。なお、「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」は付け書院がある（図面上では「台」と表記）が、表千家「松風楼」に書院はみられない。表千家「新席」8畳は、琵琶棚が「松風楼」とは逆の床の間左に付している（写真 7-10）。

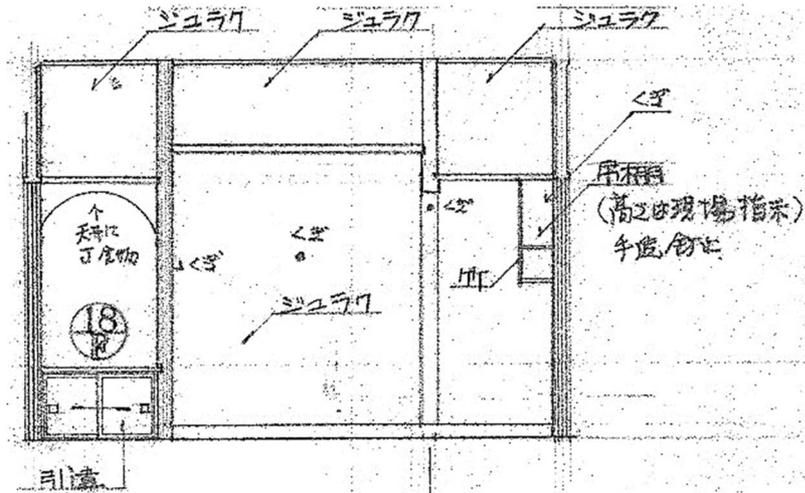


図 7-21 「佐野邸」茶室1南展開図

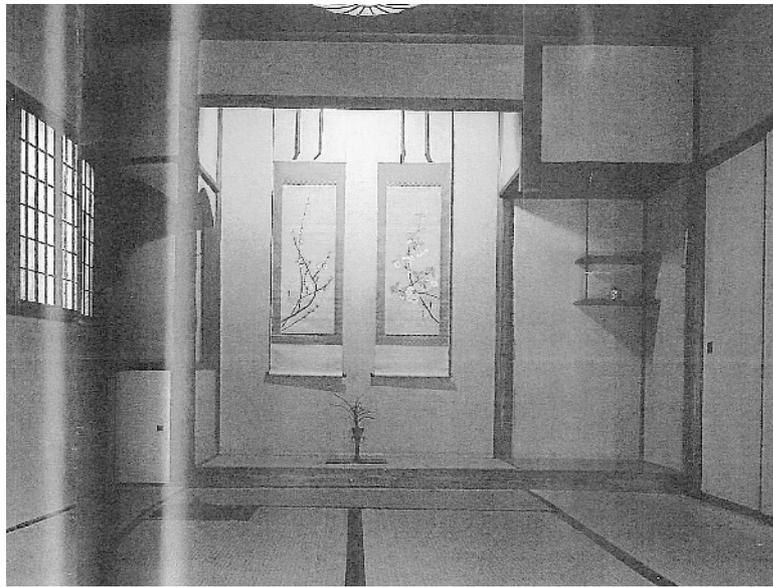


写真 7-8 江戸千家「花月楼（花月の間）」

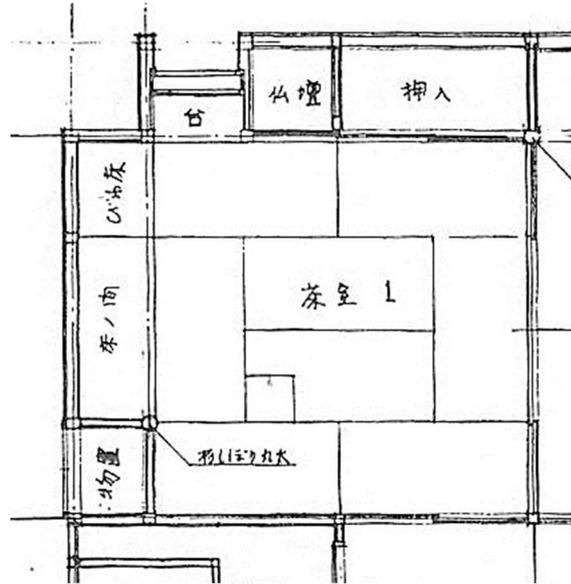


図 7-22 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」茶室 2 平面図

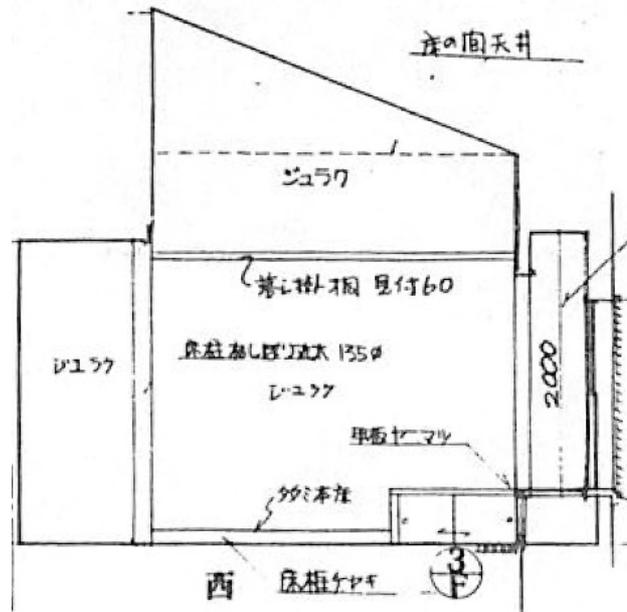


図 7-23 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」茶室 2 西展開図

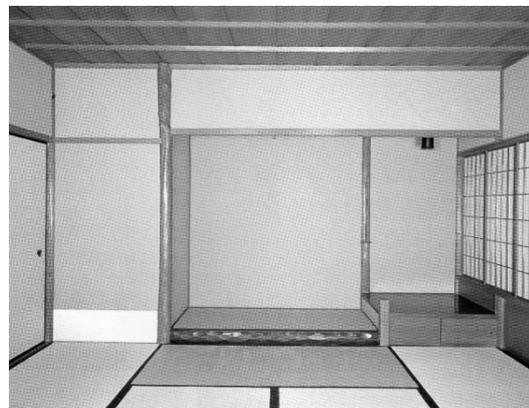


写真 7-9 表千家「松風楼」



写真 7-10 表千家「新席」床の間のある8畳（奥）と10畳の次の間（手前）

7.3.3 断面における特徴

「中原自邸（茶室のある家/自邸）」の断面には、中原の特徴がとても色濃く表現されている。茶室1・2共に南からハイサイドライトとして、2階にははめ殺しの透明網入りガラスとその両端に電動式アルミサッシを併用（図7-24）し、その250mm程度内側には、日除けとして電動ブラインドを設置（図7-25）することで、茶事に適した採光と通風が調整できるよう配慮している。さらにその1,100mm内側には全面に障子戸がはめ込まれ、その中に冷房器具を設置し、障子戸の一部に棧を設けて冷房吹出し口としている。また、室内に照明器具が露出するのを避けるため、電動ブラインドと障子戸の間に、メタルハイドランプ⁷⁻¹²⁾（写真7-11、図7-26）2機を設置し、斜め天井に反射させることで照明を行うなど、茶室内の設えに気を配っている。図5-26には、メタルハイドランプを傾斜させている様子が図面に表現されている。茶室1・2や2室に水屋、入側⁷⁻¹³⁾にまでも小間（第7章第4節にて述べる）同様、床暖房が仕込まれている。

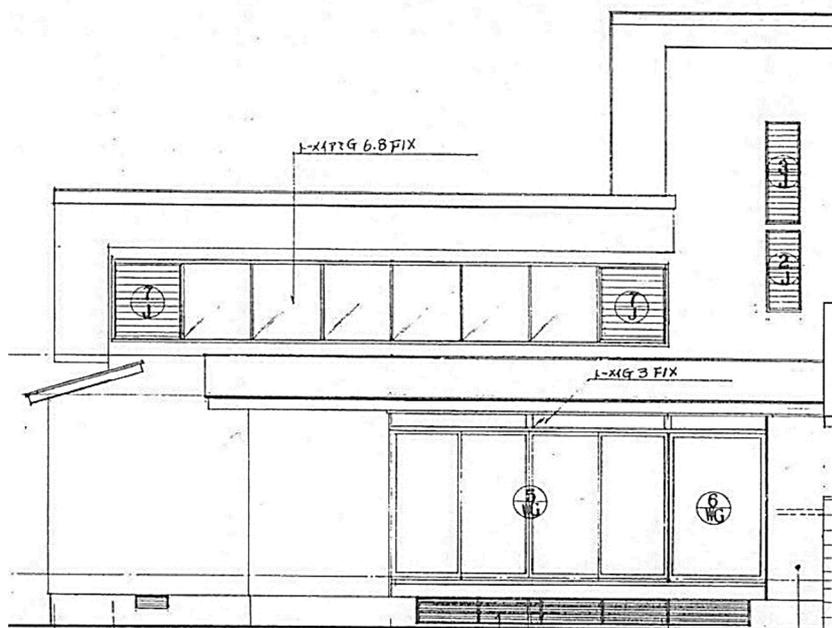


図 7-24 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」南立面図（部分）

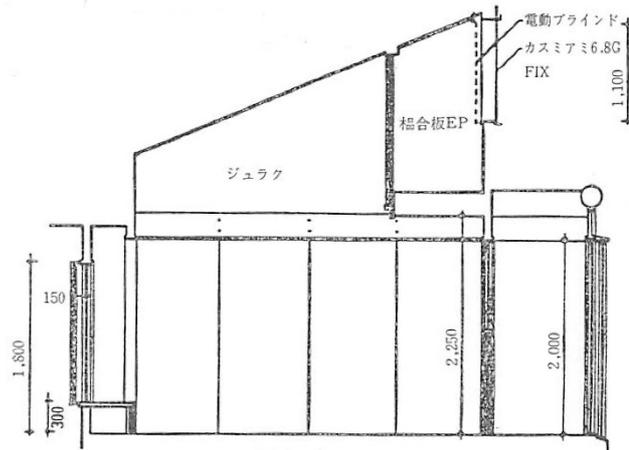


図 7-25 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」茶室1断面図



写真 7-11 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」に設置されていたメタルハライドランプ

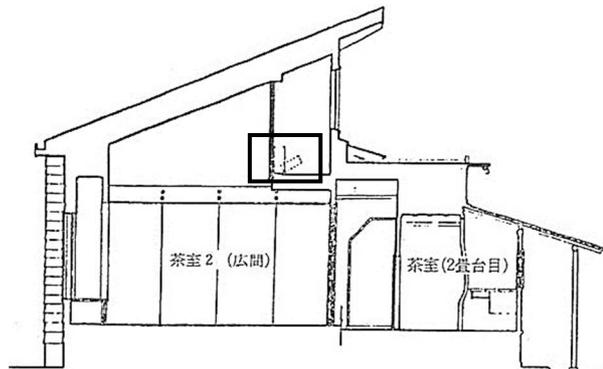


図 7-26 「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」茶室2・2畳台目断面図

前述の通り天井は斜め天井となっており、床から天井まで高さは高い部分で 4,000 mm、低い部分でも 2,800 mmある。畳から鴨居までの内法高は 2,000 mmであり、中原設計の茶室の中では、最も高さを意識した作品となっている（表 7-4）。中原はこの広間について「市街地の

厳しい環境条件のもとで、8畳の広間のほうをハイサイドライトで対応させることにより広々とした空間と、使い方の自由度について試作してみました。」と記している⁷⁻¹⁴⁾。

表 7-4 中原設計の茶室広間の天井高と内法高

No.	設計年	住宅名	時期	室名	畳数	天井の形状	天井高		内法高	
							(mm)	(尺)	(mm)	(尺)
1	1960	001矢島商店	第Ⅰ期	茶室	6畳	平	2,400		1,800	
2	1961	019吉永邸 (通り庭のある家)		茶室	4.5畳	平	2,500		1,800	
3	1963頃	149岡邸		茶室	4.5畳	斜め	2,430		1,800	
4	1964	036木村別邸 (K氏別邸、下呂山の家)		茶室	4.5畳					
5	1975	085高橋邸	第Ⅲ期	茶室	6畳	平	2,210		不明	
6	1978頃	167増田邸1		茶室4.5帖	4.5畳					
7	1979	103大塚邸		和室8帖	8畳	段	2,370		1,770	
8	1981	107佐野邸	第Ⅳ期	茶室1	8畳	平	2,600		1,800	
				和室1	6畳	平	2,600		1,800	
茶室2	3畳台目									
9	1981	108齊藤邸 (Kさんの家、斎藤邸)		和室1	4.5畳					
				茶室	3畳台目					
				和室2	8畳	平(一部斜め)	2,320		1,768	
				和室3	8畳	平(一部斜め)	2,300		1,768	
10	1985	000中原自邸 (茶室のある家、自邸、 浦和の家)		茶室1	8畳	斜め	高：4,000 低：約2,800		2,000	
				茶室2	8畳	斜め	高：4,000 低：約2,800		2,000	
				茶室	2畳台目					
11	1987	125山田邸1		小間茶室	4.5畳					
				茶室8帖	8畳	平	2,300		1,800	
12	1987	023森邸	茶室8帖	8畳	平	2,400		1,800		
			茶室3帖台目	3畳台目						
13	1989	129増田邸2	和室	8畳	平	2,350		1,900		
14	1990	130大野邸茶室	茶室	8畳	平		7.98		5.70	
			茶室小間	3畳台目						
15	1994	139山田邸2	和室	10畳	不明	不明	不明	不明	不明	

注：小間（4.5畳以下で開口があるもの）は、対象から除き網掛け表記としている。

天井高は、段がある場合、高い方の寸法を記入。

内法高は、床から鴨居下部までの寸法を示す。

7.4 小間における本歌の写しとみられる作品

中原は、1981年頃から写しの設計に取り組み始める。小間に関しては、少なくとも3作品の小間（表7-5）を写しとして実現しているとみられる。「暢庵」は、「長生庵」の写しであることは、図面に記されている。残る2作品は、これらが「写し」であるとする明確な記録は残されていないが、同一規模で床の間の位置や形式等が同じ茶室や建築主の流派を調査し、中原が本歌とみられる茶室を見学した記録が残されていること。さらに、元所員の見学記録や設計時に参考にした図面が存在したとの証言があったことから、「写し」と判断した。

表 7-5 中原が設計した写しとみられる小間一覧

建築名 (設計年)	室名称	畳の数	本歌
「森邸」 (1987)	茶室3畳台目	平3畳台目	表千家「不審庵」
「中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)」 (1985)	「暢庵」 茶室2畳台目	2畳台目	堀内家「長生庵」
「大野邸茶室」 (1990)	茶室3畳台目	深3畳台目	江戸千家「一円庵」

7.4.1 「森邸」茶室 3 畳台目

中原は、1987年に木造2階建ての専用住宅である「森邸」を設計している。その東南の角には表千家「不審庵」を写したと思われる3畳台目の茶室が隣接している。

この茶室の平面形状は、平3畳台目中柱台目切である。床の間位置は、上座床である（図7-27）。上座床とは、点前座に亭主が座してその前方（左手）に床の間が位置するものをいう。平3畳台目とは、点前畳から丸畳を横並びとして横長敷いた茶席のことをいい、台目切とは、点前畳に接した外側の畳を切る出炉のうち、点前畳が台目畳で点前畳の長辺を二等分した位置から上座側に切られ、点前畳の炉の先が小間中（京畳1/4間、1/4畳）になる炉の切り方をいう（図7-28）。

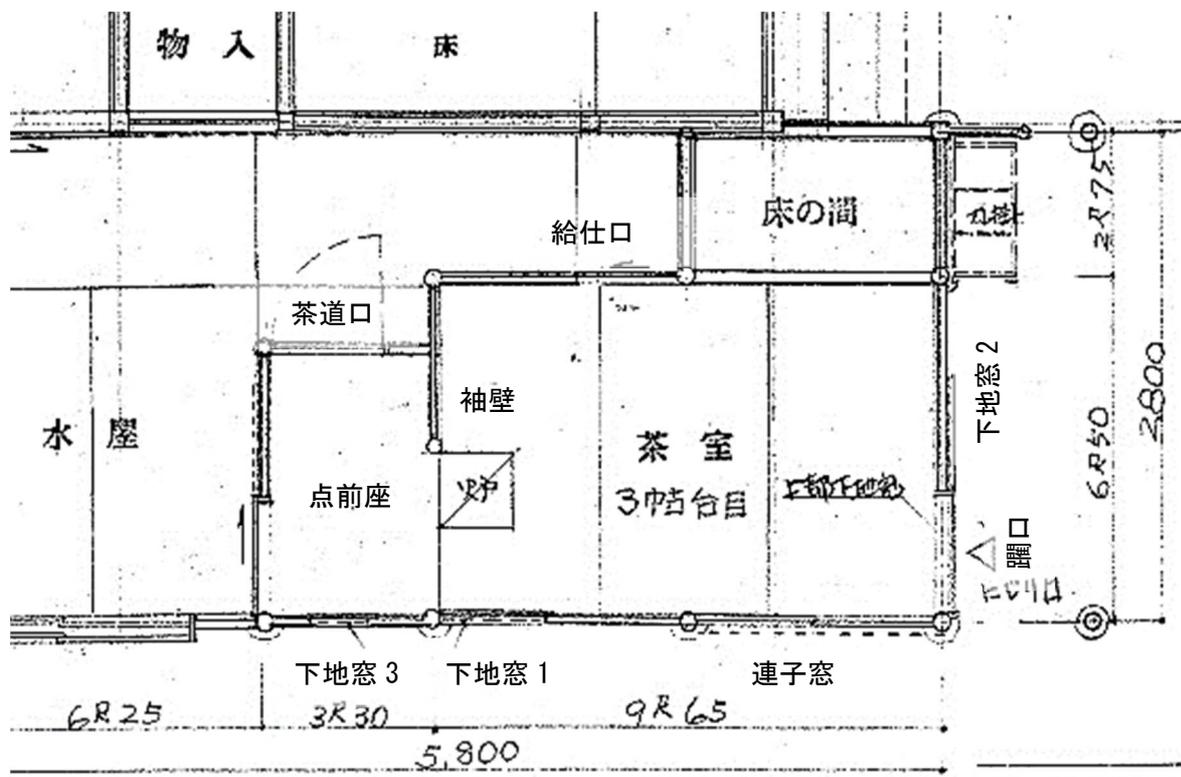


図 7-27 「森邸」茶室 3 畳台目と水屋平面図

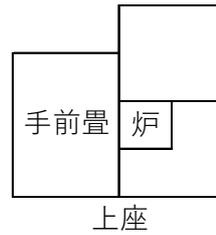


図 7-28 台目切の例

『茶室の解明 平面データ集成』に掲載されている主な上座床平 3 畳台目中柱台目切茶室は以下の表の通りである（表 7-6）。3 畳台目としては 129 軒存在するが、上座床平 3 畳大目中柱台目切に限ると表千家「不審庵」を合わせて 7 軒が該当した。

平 3 畳台目の場合、躡口正面に床の間を配置するのが一般的だが、「森邸」茶室 3 畳台目は躡口の右に床の間がある。これと同じ形式は、古文書「数寄屋工法集」及び「数寄屋構造法」に掲載されている「座敷 3 畳大目」のみであり、極めて特殊な入り方であるといえる。

表 7-6 上座床平 3 畳台目中柱台目切茶室

茶室名	造営	好み (創建者)	茶道口数とその場所	床の間と 躡口の関 係
「座敷 ^{ママ} 3畳大目」	不明 (古文書)	不明	1 下 (南)	躡口右
「利休3畳台不審庵」	不明 (古文書)	千利休	1 上 (北) 板畳	躡口正面
表千家「不審庵」	大正以前 (1913年再興)	千利休	1 上 (北) 板畳	躡口正面
浅草寺伝法院「天祐庵」	天明年間 (1781-89)	牧野作兵衛	1 上 (北) 板畳	躡口正面
弘月邸「審悦庵」	不明	不明	1 上 (北) 板畳	躡口正面
久保邸「惣庵」	1937-1940	久保惣太郎	1 上 (北) 板畳	躡口正面
「実修庵」	不明	不明	1 左 (西)	躡口正面

表千家「不審庵」の名は、千家2代少庵(1546-1614)が、本法寺前の地に千家を再興する際、深3畳台目と3畳敷道安囲の茶室を建て、これら2つの茶室のいずれかに「不審庵」の額が掲げられていたことに由来すると伝わる。3代宗旦(1578-1658)は、1畳半を造立して「不審庵」としたが、これを継承した4代・表千家初代江岑宗左(1913-1971)は父宗旦とはかり、不審庵を平3畳台目に建て替えたという歴史をもつ。「不審庵」は表千家の通称とされており、現在の茶席は、1913年に再建されたものである⁷⁻¹⁵⁾。表千家「不審庵」の忠実な写しとしては、最古のもので天明年間(1781-1788)造営の浅草寺伝法院「天祐庵」がある。昭和33(1958)年に現在の地に移築した⁷⁻¹⁶⁾。

「森邸」茶室3畳台目と表千家「不審庵」を材料や寸法等で比較すると、次のようになる(表7-7)。「森邸」茶室3畳台目は、炉畳脇にある下地窓1が高さ2尺、幅1尺8寸と若干縦長である。また、点前座脇の高所ある下地窓3についても幅が1尺2寸で、縦長である。

若干の数値的な違いはあるものの、天井や壁の材料、棚の形式及び下地窓に力竹を設けるなど、採用した材料はほぼ同一である。

表 7-7 「森邸」茶室3畳台目と表千家「不審庵」の材料や寸法等による比較（単位：尺）

茶室名		「森邸」 茶室三畳台目	表千家「不審庵」
所在		東京都杉並区 森邸内	京都府京都市 表千家邸内
建設時期		(設計：1987.2)	1646年（原型） 1913年再建
方位	躡口	東	南
勝手		本勝手	本勝手
床の間	形式	本床（畳敷）	本床（畳敷）
	位置	上座床	上座床
	床框	(不明)	桧丸太半割
	床柱	(不明)	赤松丸太
	径	(不明)	0.3
炉	種類	台目切	台目切
袖壁	中柱	赤松皮付	皮付女松
	径	0.18（直）	0.18（直）
	吹抜高	約2.00	2.26
	釣棚	二重棚、桐	二重棚、女竹、桐材
天井	床の間	杉鏡板張	鏡天井
	台目	掛込天井 ノネ板竹竿	掛込天井
	床前	竹竿ガマ	竹棹縁蒲天井
	躡口前	掛込天井 ノネ板竹竿	掛込天井
	突上窓	有 約1.32×約0.92	有 約1.45×約1.20
躡口	高×幅	2.20×2.00	2.26×2.05
茶道口	高×幅	5.00×2.10	5.80×約2.00
	建具	方立口、釣襖	方立口、釣襖
給仕口	高×幅	5.20×1.92 ※1	3.90×1.94
	建具	火灯口、和紙タイコ貼	火灯口
下地窓1 (炉畳脇)	高×幅	2.00×1.80、力竹	約1.82×約2.05、力竹
	畳からの高	1.45	1.4
下地窓2 (躡口上)	高×幅	2.40×2.40、力竹	2.40×約2.21、力竹
	畳からの高	2.34	約2.27
下地窓3 (点前座脇)	高×幅	1.50×1.20、力竹	1.60×約1.60、力竹
	畳からの高	約3.90	4
連子窓	高×幅	2.00×4.25	約2.02×約4.75
	畳からの高	2.48	約2.47
壁	仕上げ	(不明)	(不明)
	腰貼	みなと紙	湊紙
	腰貼高	約1.40, 約0.90	1.80, 1.40
参考資料		中原暢子：『森邸新築工事設計図』（1987）	北尾治道：『茶室の展開図』（1970）

※1 高さ寸法が、図面との比較により誤植と考えられる。

続いて、「森邸茶室」3畳台目と表千家「不審庵」の図面による比較し（表7-8）、差異を明らかにする。平面図をみると、「森邸」茶室3畳台目の躡口は、表千家「不審庵」とは異なり東壁面にあることが確認できる。そのため躡口上に位置していた下地窓2も躡口と共に東壁面へ移動し、その結果、東壁面にあった連子窓は、南壁面に計画されている。また、表千家「不審庵」の特徴である台目畳に付した幅5寸1分の板畳は、「森邸」茶室3畳台目にはみられない。さらに、水屋に直接つながる出入口として、釣襖の茶道口（亭主が点前をするときの出入口）の他に、点前座の背後にも高さ5尺、幅2尺6寸の引戸が設けられている。

躡口の配置を東に変更したのは寄付と露地、茶室の位置関係からやむを得ない変更であったと思われるが、結果躡口から床の間を正面にみる構成を犠牲にしている。また、表千家「不審庵」の板畳は、点前のしやすさのために設けられているが、「森邸」茶室3畳台目は、板畳を採用しない代わりに幅広の台目畳を採用している。それでも点前座の幅は本歌より狭い。特に夏秋に用いる風炉の場合、「森邸」茶室3畳台目では、釣戸への出入りが難しくなる。「不審庵」は、平面図でみるように、茶道口から入室し、180度回転してから定座する「戻り茶道口」であり、点前の仕方が特殊であり風炉の時期の点前について、『不白筆記』の「不審庵の仕様」で、以下のように書かれている⁷⁻¹⁷。

「一 風炉ハ中柱より外の畳へ常ノ通り置付ル 此時香合ハ下ノ棚ニ飾ル 横竹ノ下より取り申候
 一 風炉ノ時水指ノ蓋中柱ノ外へ立掛ル事有リ 水こほしの方、炉の時道具畳ノ方也
 一 風炉薄茶ノ時柄杓蓋置風炉ノ居前より中柱ヲ手ヲ廻し取りてよし 残す時も又如此にてよし 又ハ残スニ常ノ通り 柄杓蓋置水こほし持行勝手口居りて柄杓フタ置棚へ残ス事もあり （以下省略）」

つまり、風炉の時期は炉の季節の点前座で点前をせず、この畳を踏込畳のように用い、点前畳に接する丸畳を点前座とすると読み取ることができる。また、風炉の時は、水差の蓋を、中柱へ立て掛けることもありとある。風炉薄茶の際は、柄杓・蓋置を風炉の正しい座り位置から手を廻して取っても良いとある。

この川上不自が記したこの『不白筆記』の写し（図7-29）は、中原の自宅から遺品としてみつかった。表紙に「暢庵茶事教室「不白筆記」昭和63年3月ヨリ（空白）年（空白）月ニ至ル 清涼軒誌」と書かれている。中原が主宰していた「暢庵茶事教室」の中で行っていたものであり、104頁にわたって巻主「功不積用不妙」から「不審庵の仕様」の途中までが写されている。表紙にある読了日が未記入であることから作成途中であると推察できる。

表 7-8 「森邸」茶室3畳台目と表千家「不審庵」の図面による比較

茶室名	「森邸」茶室3畳台目	表千家「不審庵」
平面図（北が上）		
西展開図		
南展開図		
北展開図		
東展開図		

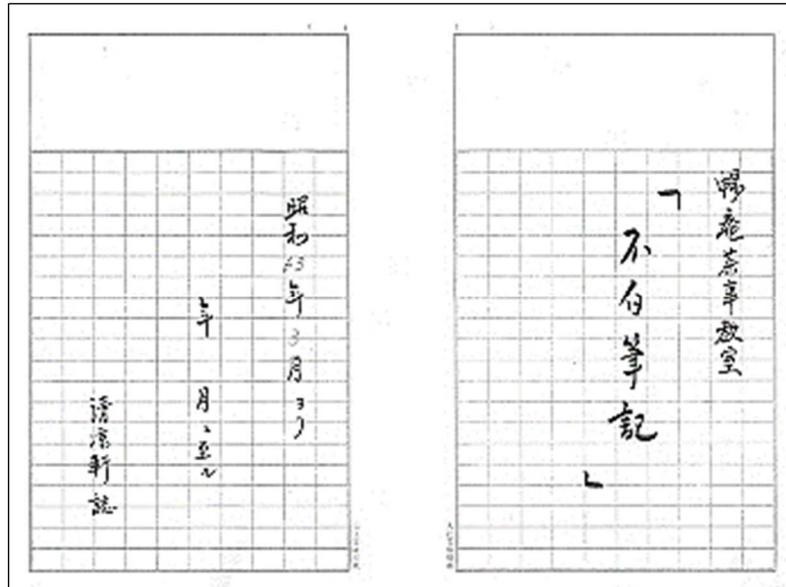


図 7-29 中原が書いたと思われる『不白筆記』の写し（表紙）

なお、『不白筆記』の復刻は、1979年に10代川上宗雪によって出版されており、この中の「茶室の普請」には、「妙喜庵」「今日庵」「又隠」「独楽庵」について書かれている。

「森邸」茶室3畳台目では、風炉の際は、炉の時の点前畳が踏込み畳となり、茶道口は、開き戸を使用する。また、炉の際は、「戻り点前」を解決するため、引戸の茶道口から出入りすることで、茶道口の使い分けがされていたのではないかと推察できる。通常は1つである茶道口を2つにすることで、亭主の使い勝手を良くしていることがこの図面から読み取ることができる。

「不審庵」は、表千家の象徴であり、これを自宅の茶室に写したいと考える茶人は多いと考えられる。しかし、風炉先から入る点前座は極めて特殊でこれを写すことは非常に困難であったと思われる。

「森邸」茶室3畳台目と表千家「不審庵」との差異を以下にまとめる。

- ①炉畳南面にある下地窓1は縦に長く、幅についても、1尺8寸と若干短い。
- ②点前座脇の高所ある下地窓3についても縦長であり、幅も1尺2寸と若干短い。
- ③躰口を東面からとっているため、躰口上部にあった下地窓も東面配され、東面にあった連子窓と入れ替わっている。
- ④点前畳のみ幅3尺3寸という他の丸畳に比べ幅の広い台目畳を採用している。しかし、表千家「不審庵」の点前座幅は、板畳を含めても約8尺8寸ほどであり、本歌より狭い。
- ⑤茶道口は、北側の釣襖の他に、躰口正面に位置する引戸が配置されている。

5.4.2 自邸「茶室のある家」茶室2畳台目

「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」（図7-1）には、1階に小間「暢庵」（図7-30、写真7-12）がある。中原は、ここで「堀内家（表千家の茶家）「長生庵」の写しを試み、極小空間と昔の職人の考え方、技術的に、現在の普通の職人で、挑戦してみた。」⁷⁻¹⁸⁾と書かれて

いる。「現代住宅の中に、茶室草庵の空間構成をもう一度活かしてみたい」という当時の中原の課題⁷⁻¹⁹⁾が具現化された作品であった。中原が主宰していたと思われる暢庵研究会の指導は、堀内家の千葉宗立から受けていることが判っている。さらに中原は、自邸を設計するために大工等職人と一緒に堀内家「長生庵」にて実測調査を行い詳細な実測図を残している(図7-31)。

また、中原は、自邸の全ての茶室に床暖房を設置している(図7-32)。電気の薄型畳ヒーターを畳表の下に仕込み、畳の踏み心地に違和感がないよう配慮していたという⁷⁻²⁰⁾。自邸の冷暖房や照明は茶室を含め、台所の集中管理となっており、設備面も含めて当時使用されているものの中の、最も効率よく、安全で、且つ手軽に使える住宅用のものを採用している^{7-21)、7-22)}。

さらに、床の間や突上窓(化粧屋根裏に切り開けた天窗)に蛍光灯を仕込み、茶室内にもコンセントを設置する等、近代的な対応をとっている(図7-33)。

「暢庵」の名づけ親でもある中原の茶道の師千葉宗立は、「暢庵」のことを「これだけ落ち着いたお茶室はあまりないのではありあませんか」と述べている⁷⁻²³⁾。

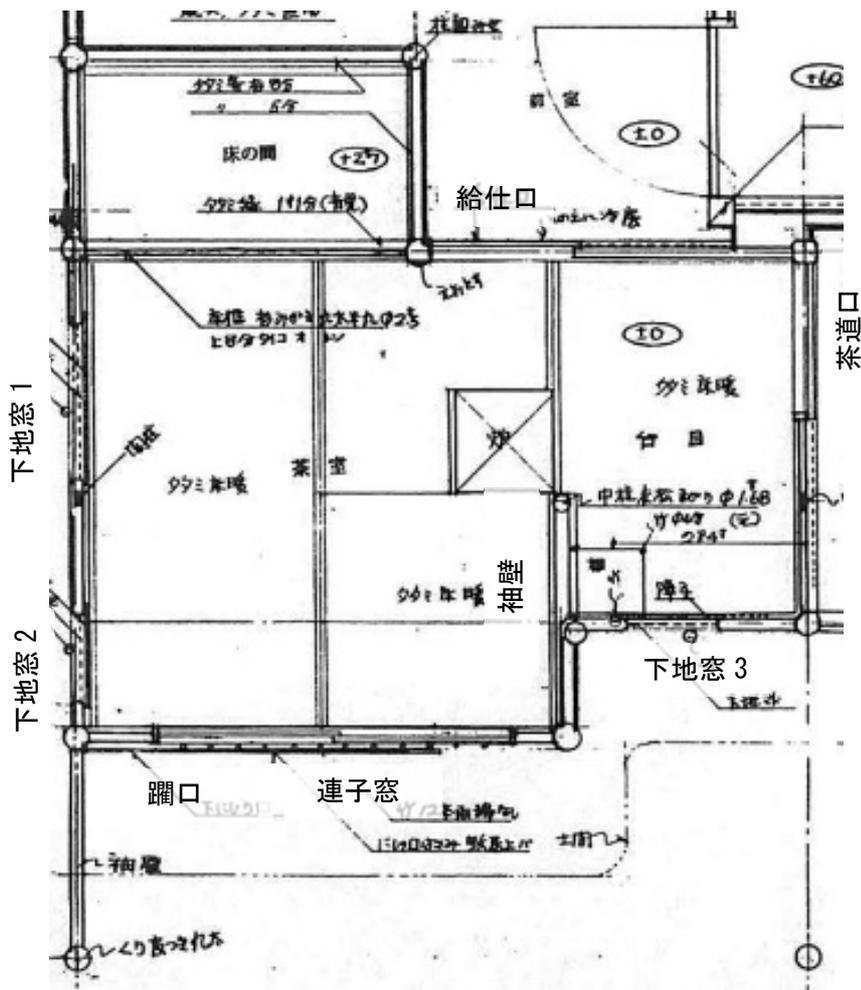


図7-30 「暢庵」平面図

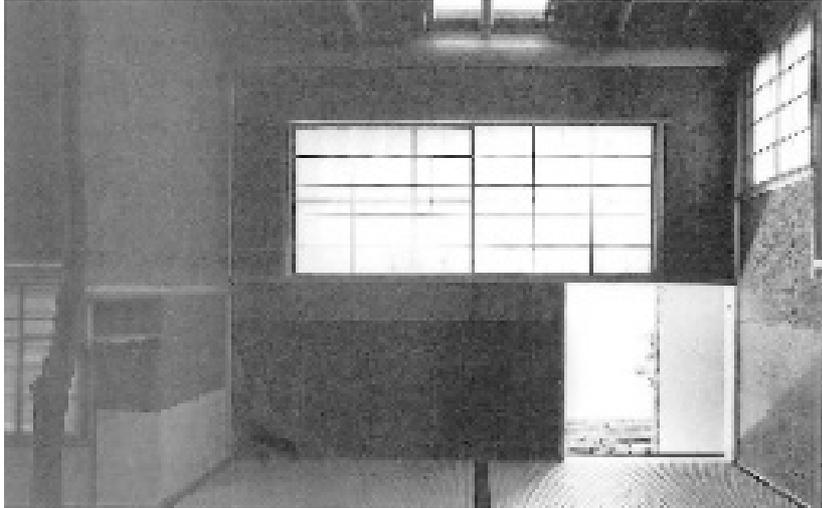


写真 7-12 「暢庵」内部

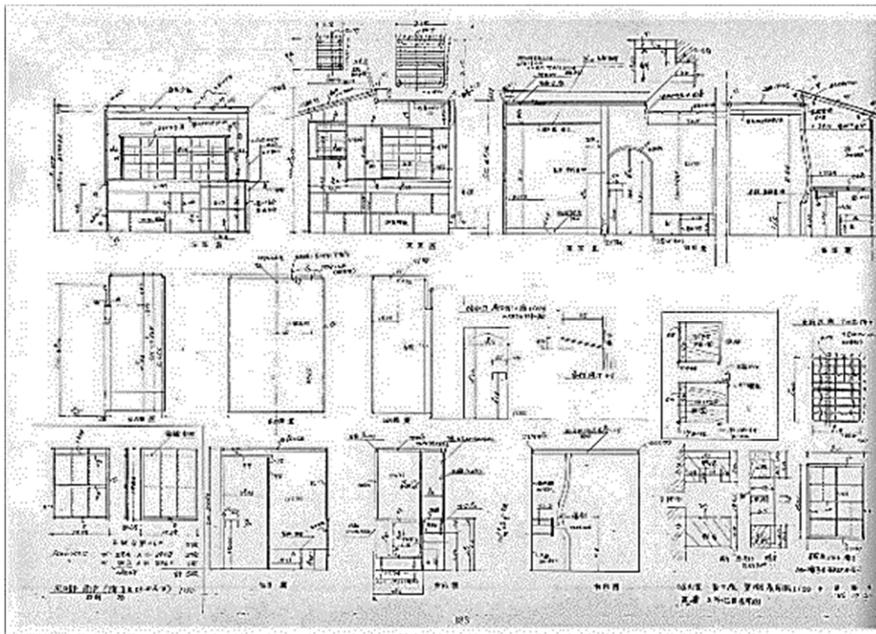


図 7-31 中原による堀内家「長生庵」実測図面と「暢庵」の図面

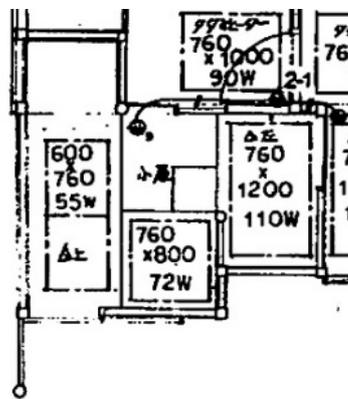


図 7-32 「暢庵」床暖房工事設計図

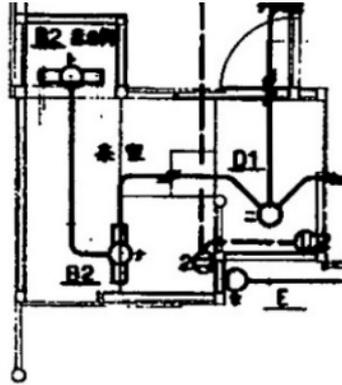


図 7-33 「暢庵」電気配線図・コンセント図

中原が設計した「暢庵」の平面形状は、2 畳台目中柱台目切である。2 畳台目とは、丸畳 2 畳と台目畳一畳で構成された茶席のことをいう。

『茶室の解明 平面データ集成』に掲載されている主な 2 畳台目中柱台目切は以下の表の通りである。2 畳台目の茶室計 46 軒のうち、中柱台目切の茶室は 10 軒であった（表 7-9）。2 畳台目中柱台目切かつ、躡口正面に床の間があるのは、半数の 5 軒である。

表 7-9 2 畳台目中柱台目切茶室

茶室名	床の間の位置	造営	好み (創建者)	床の間と躡口 等の関係
「数寄屋式 ^{ズイ} 畳大目」	上座床	不明 (古文書)	不明	躡口正面
「織部数寄 ^{ヅウ} 式畳大目」	下座床	不明 (古文書)	古田織部	躡口左
「有楽園」	下座床	不明 (古文書)	織田有楽	貴人口左
「数寄屋」	亭主下座床	不明 (古文書)	不明	躡口左
建仁寺 「東陽坊」	下座床	天正年間 (1573-93)	千利休 小堀遠州	躡口左
大徳寺高桐院 「松向軒」	下座床	江戸時代 (1603-1869?) 初期	細川三斎	躡口正面
南宗寺 「実相庵」	下座床	江戸時代 (1603-1869?)	千利休	躡口正面
大徳寺真珠庵 「庭玉軒」	下座床	寛永年中 (1624-45)	金森宗和	貴人口左
堀内家 「長生庵」	下座床	18世紀 (1701-1800) 初期	堀内仙鶴	躡口正面
大樋家 「陶土軒」	下座床	1992再建	鵬雲斎	躡口正面

注：貴人口とは、身分の高い客の出入口のために設けた立位で行き来できる出入口をいう。

中原は、堀内家より茶道の指導を受けている。堀内家「長生庵」(図7-34、写真7-13)は、堀内家を代表とする堀内仙鶴⁷⁻²⁴⁾好みの茶室である。18世紀初期に建設されたが、現存するものは1969年に再建されたものである。下座床で、躰口は南側に付き、茶道口のほかに床脇に給仕口(懐石料理を出す場合など点前以外で客座に入るとき)の出入口)を設けている。炉は台目切で、点前座の中柱には赤松の皮付ゆがみ丸太を用い、壁留めには竹を使う。風炉先右側に二重の釣棚がある。窓は西に下地窓2か所、南の躰口上に連子窓、風炉先に下地窓をあけている。天井は躰口上部が掛込天井、床前が平天井、点前座が落天井という3段の構成になり、掛込天井に突上窓をあける⁷⁻²⁵⁾。2畳台目の標準型といわれている。



図7-34 「長生庵」平面図



写真7-13 「長生庵」内部

堀内家「長生庵」の図面とほぼ同じ形式のものに江戸千家の2畳台目茶室「黙雷庵」がある。そこで、「黙雷庵」の調査を行った。「黙雷庵」(図7-35)は、江戸千家の祖川上不自が帰任して最初に建てた利休好みの茶室(現存せず)であり、文献のみで知ることができる。建設は宝暦(1751-1764)前期⁷⁻²⁶⁾とされており、現在の東京千代田区神田駿河台に建てられた。『囲おこし図』に収録されている起こし絵図(図7-36)⁷⁻²⁷⁾からその詳細を読み取ることができた。南向き⁷⁻²⁸⁾、下座床で点前座勝手付に茶道口、床脇に給仕口、床正面に躰口があけている⁷⁻²⁹⁾。

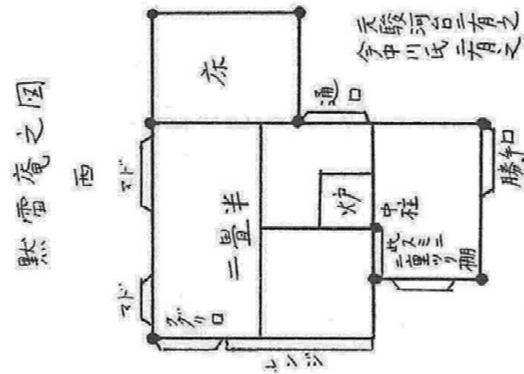


図 7-35 「黙雷庵」平面図

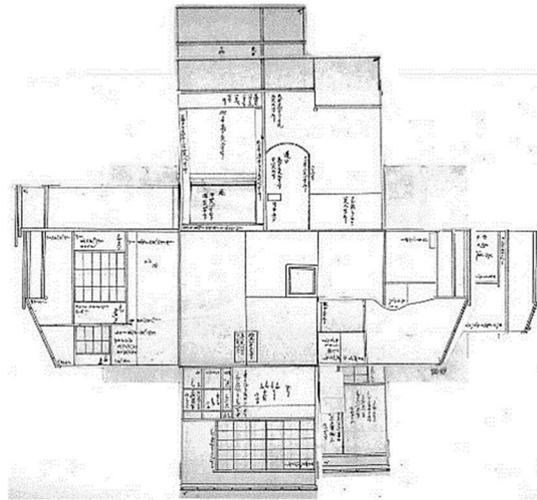


図 7-36 「黙雷庵」起し絵図

「黙雷庵」に掲げていた額は、川上不白の師表千家7代如心斎⁷⁻³⁰⁾の筆で、杉板に「黙雷」の2文字が白く書かれていたという。

川上不白は、1773年神田明神に「蓮華庵」(3畳台目切道安囲)に移り住み、「黙雷庵」は、しばらくして神田藩主中川修理太夫の江戸屋敷に移された⁷⁻³¹⁾とされる。なお、現存する池之端の「蓮華庵」は、8代一元斎(1884-1944)が昭和のはじめに復原したものである。

2畳台目中柱台目切の「暢庵」、堀内家「長生庵」及び「黙雷庵」の各部分の形式や材料、寸法による比較をすると、次のようになる(表7-10)。「暢庵」と「黙雷庵」の給仕口の高さは3尺9寸2分と同一で、堀内家「長生庵」より若干低い。多少の寸法の違いはあるものの、かなり厳密に写されており、材料についてもほぼ違いはみられない。

中村昌生(1927-2018)は、「黙雷庵」を堀内家「長生庵」と比較し、「仙鶴は覚々斎の門下であり、覚々斎のあとをうけた如心斎の弟子不白との間の作風上の脈絡がこの2つの茶室にあらわれているともみられよう。」⁷⁻³²⁾と述べている。

表 7-10 「暢庵」、堀内家「長生庵」及び「黙雷庵」の材料や寸法等による比較（単位：尺）

茶室名		「暢庵」	堀内家「長生庵」	「黙雷庵」
所在		埼玉県浦和市 (現さいたま市浦和区) 中原自邸内	京都府京都市 堀内家邸内	東京都千代田区 (駿河台) (周辺は武家屋敷)
建設時期		1986年4月 (現存せず)	18世紀 (1701-1800) 初期 天明年間 (1781-89) と元 治年間 (1964-65) に焼 失、明治2 (1869) 再建	宝暦 (1751-64) 前期 (現 存せず)
方位	躰口	南	南	南
勝手		本勝手	本勝手	本勝手
床の間	形式	本床 (畳敷)	本床 (畳敷)	本床 (畳敷)
	位置	下座床	下座床	下座床
	床框	杉みがき丸太	杉北山磨丸太	(不明)
	床柱	赤松皮付丸太	赤松丸太	(不明)
	径	(不明)	0.28	(不明)
炉	種類	台目切	台目切	台目切
袖壁	中柱	赤松皮付 (曲)	赤松丸太 (曲)	(不明) (曲)
	径	0.18	(不明)	(不明)
	吹抜高	2.1	2.1	2.3
釣棚		二重棚、桐、竹	二重棚、竹	二重棚
天井	床	杉鏡板張、平天井	鏡天井、平天井	鏡天井、平天井
	台目 (点前置)	シノ竹蒲天井、落天井	樟縁竹蒲天井、落天井	黒ベ杉押フチ竹、平天井
	床前	シノ竹ノネ板天井、平天井	白竹樟縁野根板天井、平天井	蒲、落天井
	躰口前	掛込天井	掛込天井	掛込天井
	突上窓	有 約1.60×約1.20	有 約1.80×約1.10	有 約1.80×1.40
躰口	高×幅	2.28×約2.20	2.20×2.00	2.40×2.50
茶道口	高×幅	5.19×2.20	5.10×2.10	5.00×2.00
	建具	方立口、タイコ襖	方立口、タイコ襖	方立口
給仕口	高×幅	約3.92×約1.80	4.30×2.00	3.93×1.90
	建具	火灯口、タイコ襖 (白和紙)	火灯口、タイコ襖	火灯口
下地窓1 (床前)	高×幅	2.44×2.30、力竹	2.20×約2.0、力竹	2.10×2.00、力竹
	畳からの高	2.49	約2.20	約2.00
下地窓2 (躰口前)	高×幅	1.61×1.35、力竹	1.50×約1.30	1.60×1.30、力竹
	畳からの高	3.42	3.4	3.3
	隅柱からの距離	約0.32	約0.40	0.44
下地窓3 (風炉先窓)	高×幅	1.61×約1.30、力竹	1.60×約1.20、力竹	1.63×1.30、力竹
	畳からの高	約0.60	0.6	0.56
連子窓	高×幅	2.00×4.74	2.10×4.80	約2.00×4.85
壁	仕上げ	京壁、ジュラク	(不明)	(不明)
	腰貼	灰色2段・白1段	湊紙	コシ紙ミノカミ
	腰貼高	1.80 (2段)	1.80 (2段)	1.83 (2段)
0.95 (1段)		約0.90 (1段)	0.91 (1段)	
参考資料		中原暢子：「茶室のある家」『新建築 住宅特集』(1986.10)	北尾治道：『茶室の展開図』(1970)	覃斎儀卿：『困おこし図』(出版年不明) 中村昌生：「川上不白の茶室」、『川上不白の茶』(1991.7)

3つの2畳台目を図面により比較（表 7-11）すると、平面図は、畳の敷き方や炉の位置、躡口と床の位置関係、茶道口、給仕口に至るまで同一であった。中原は自邸の「暢庵」にて忠実に「長生庵」の写しを行っていることが確認できた。

次に「暢庵」と堀内家「長生庵」の比較を詳細にみってみる。堀内家「長生庵」南展開図の連子窓敷居は、連子窓のところで切れているのに対し、「暢庵」は、柱まで伸びているが、鴨居は伸びていない。この連子窓は、引違いの障子となっており、敷居を伸ばさなくても開口は可能である。また、構造的な意味合いで柱間に敷居を通したとも考えづらい。そのため、これは機能を伴わない中原の意匠を表した設計であると思われる。よって「長生庵」と「暢庵」は、細部についても忠実に再現されており、丹念に読み取った様子がみてとれる。

なお、「暢庵」で開かれた茶席についての茶会記⁷⁻³³⁾が残されている（図 7-37）。平安時代の女流歌人大式三位（999 頃-1082 頃）の「はるかなる 唐土までも ゆくものは 秋の寝覚の 心なりけり」（勅撰和歌集『千載和歌集』巻第五：秋歌 下 302）の歌が記されており、亭主は中原宗暢（宗暢は中原の茶名）とある。初座、後座、薄茶での道具組の他、懐石料理の献立が記されているが、陶芸家の3代高橋楽斎作⁷⁻³⁴⁾の信楽の水差や陶芸家の鶴巻宗富（1922-）作の黒楽茶碗、茶道家である堀内宗完（何代かは不明）作の竹茶杓、茶碗師の楽家13代楽愷入（1887-1944）作の遠山白楽茶碗などで客をもてなしており、歴史のある茶道具を収集していたことをうかがい知ることができる。

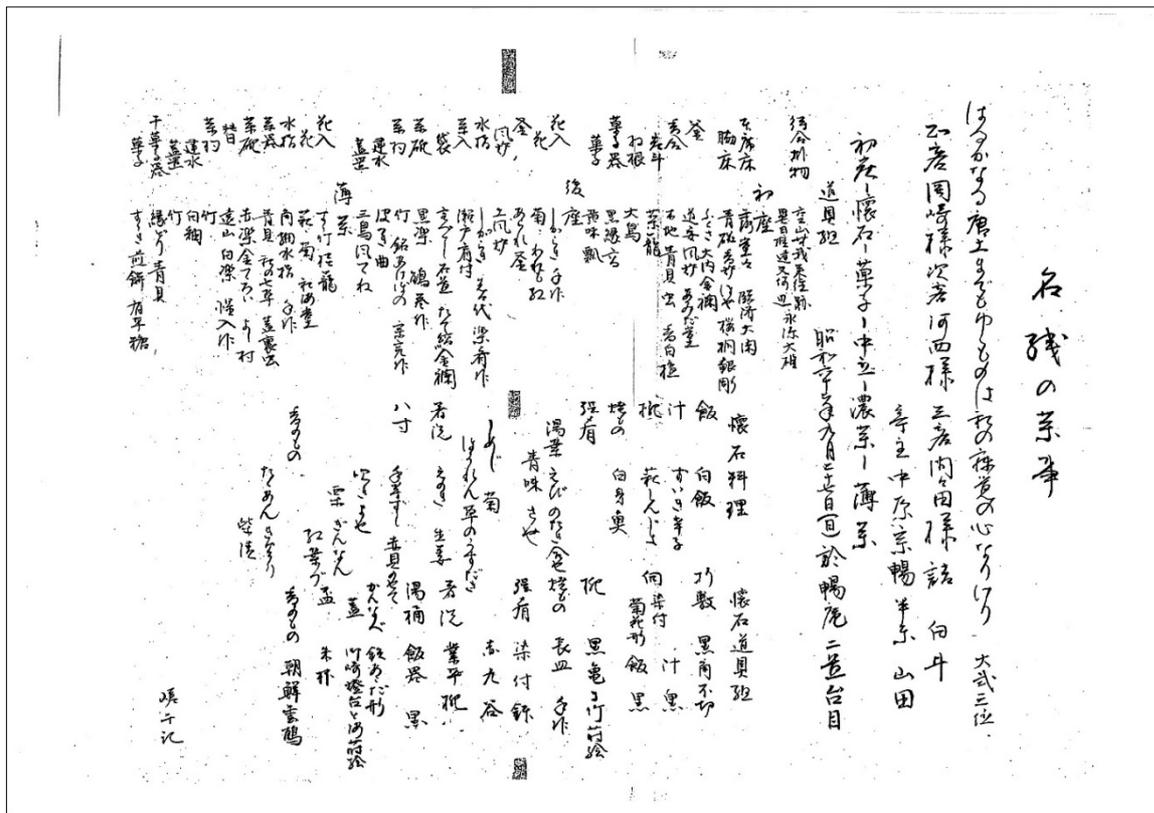


図 7-37 茶会記「名残の茶事」

続いて、堀内家「長生庵」と「黙雷庵」を比較すると、連子窓の位置に大きな違いをみることができる。南展開図にある連子窓の位置が、堀内家「長生庵」はほぼ中央に配置しているのに対し、「黙雷庵」は、点前座側に寄せて配置されている。また、西展開図の2つの下地窓の高さ関係が、堀内家「長生庵」は、躡口側の小さな下地窓の上辺が若干上がっており、「黙雷庵」は、同窓が下がっていることが分かった。

表 7-11 「暢庵」、堀内家「長生庵」及び「黙雷庵」の図面による比較

茶室名	「暢庵」	堀内家「長生庵」	「黙雷庵」
平面図（北が上）			
西展開図	<p>※西展開図に床の間の表記なし</p>		
南展開図	<p>※南展開図は、2図面に分けて表記</p>		
北展開図			
東展開図		<p>※2</p>	

※2 引手位置は、平面図や写真との照らし合わせにより、誤植と考えられる。

「暢庵」と「長生庵」「黙雷庵」の差異を以下にまとめる。

- ① 「長生庵」との比較では、給仕口の高さが若干低い。
- ② 「長生庵」との比較では、風炉先窓が若干吊棚寄りに配置されている。

③連子窓の窓台が柱まで伸びている。

④「黙雷庵」との比較では、南面連子窓が中心に配置されている。

自身の要望を実現できる自邸の設計では、他の写しと思われる作品よりも、本歌を最も忠実に再現していた。修理報告書などを参考にして構法の一部変更して補強を行っているが、寸法としては全くの変更がない。ただし、床の間や突上窓に蛍光灯を仕込み、コンセントを設置するなど、設備面での積極的な対応がされている。

7.4.3 「大野邸茶室」茶室3畳台目

中原は、1990年に母屋とは別棟の茶室を「大野邸茶室」として設計している。この建物は、木造2階建てであり、江戸千家「一円庵」の写しと思われる茶室3畳台目の他、8畳の広間に加え、2室の水屋、寄付、厨房を備えた本格的な茶室である。小間は3畳台目である。(図7-38)。露地は、外腰掛や内腰掛、雪隠、蹲等が巧みに配されている。「大野邸茶室」の全ての茶室にも、床暖房の計画はあったが、小間のみならず、すべての室に「中止」との記載が残されている(図7-39)。

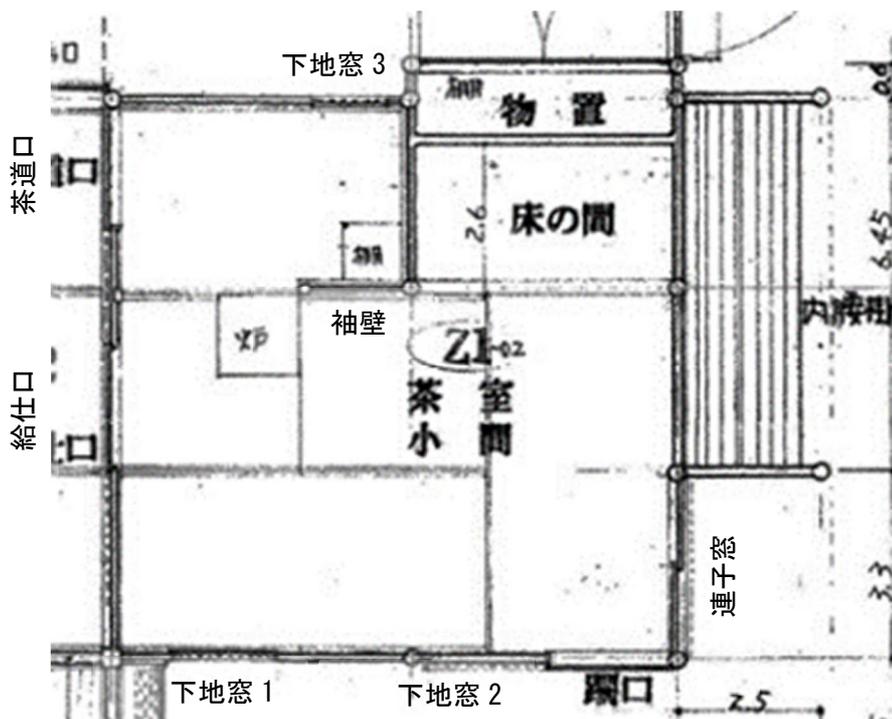


図 7-38 「大野邸茶室」茶室3畳台目平面図

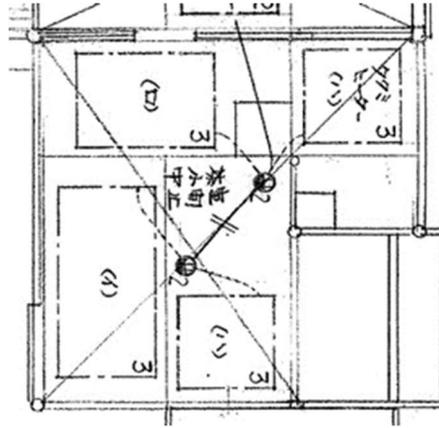


図 7-39 「大野邸茶室」茶室 3 畳台目床暖房の中止

「大野邸茶室」の南東角に位置する茶室 3 畳台目の平面形状は、点前座の上座に床を客座に向けて並べて設けた風炉先床で、3 畳台目中柱台目切である。

『茶室の解明 平面データ集成』には、「大野邸茶室」と同じ 3 畳台目は計 129 軒存在するが、風炉先床中柱台目切に限ると江戸千家「一円庵」を含む 6 軒が該当した（表 7-12）。

江戸千家「一円庵」の類似の間取りは、「愛宕荘」が挙げられるが、貴人口がなく、躡口正面に床の間を構える配置は、江戸千家「一円庵」のみであった。

表 7-12 風炉先床深 3 畳台目中柱台目切茶室

茶室名	造営	好み (創建者)	床の間と躡口 の関係と貴人 口
南禅寺金地院 「八窓の席」	寛永5年 (1628)	小堀遠州	躡口正面
江戸千家 「一円庵」	宝暦4年-不白没 (1754-1807)	川上不白	躡口正面
陽明文庫 「虎山荘」	1944	不明	躡口右 貴人口あり
興亜火災海上保険 「愛宕荘」	1995	レーモンド 設計事務所	躡口右
豊国神社 「豊秀舎」	不明	不明	躡口正面
「目黒の家」	不明	不明	躡口正面 貴人口あり

「一円庵」は、7代蓮々斎（1846-1908）により移築されたとされている。1869年に茶屋の他玄関、寄付と共に現在地である池之端に移築され、1962年に東重宝（現：東京都指定有形文化財）に指定された⁷⁻³⁵。「床は躡口の正面に配し、…（中略）…茶道口は方立口とし、

給仕口は花頭（火灯）口としてその位置は客座付の便利の良いところに配されている。点前座床左脇の下部吹抜けの所を風炉先として一重棚を付しているのもその形式としては珍しい構想である。」⁷⁻³⁶⁾といわれている。

「大野邸茶室」茶室3畳台目と「一円庵」を材料や寸法等で比較すると、次のようになる（表7-13）。

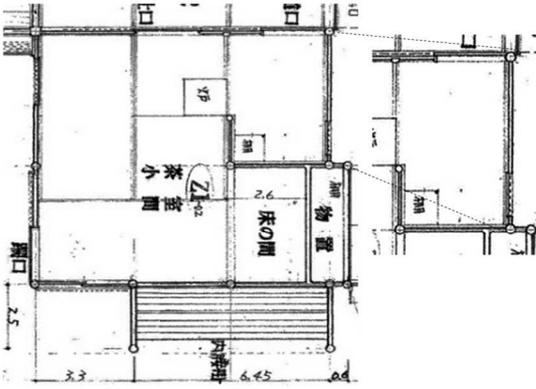
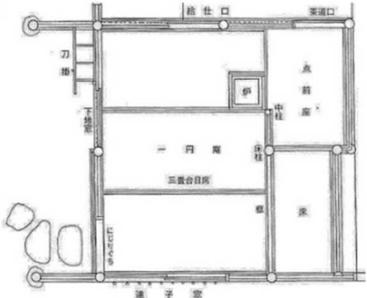
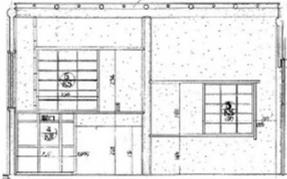
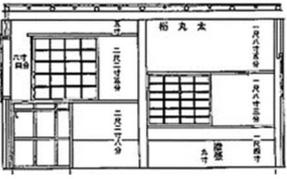
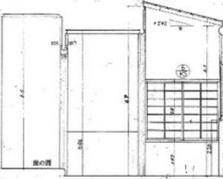
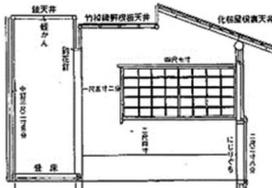
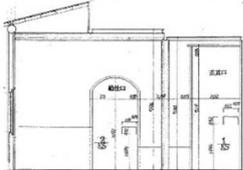
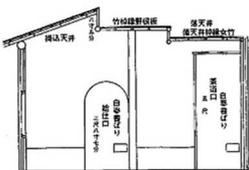
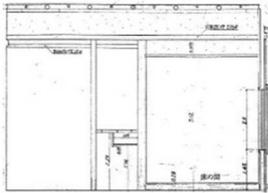
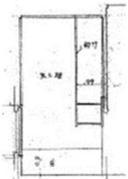
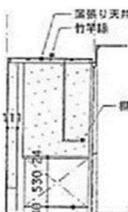
「大野邸茶室」3畳台目には、点前座に二重棚の釣棚がある。また、屋根には突上窓がある。この突上窓には、板戸が付いており、室内の明るさの調整ができる。さらに連子窓の幅が5尺4寸と短く、畳からの高さも1尺4寸5分と低い。また、下地窓3（点前座の奥の壁面に設けた窓）が配されている。突上窓や中柱、床脇の吹抜けの有無、釣棚の種類等、異なる部分もみられる。

7-13 「大野邸茶室」茶室3畳台目と江戸千家「一円庵」の材料や寸法等による比較（単位：尺）

茶室名		「大野邸茶室」 茶室3畳台目	江戸千家「一円庵」
所在		埼玉県大宮市（現：さいたま市）	東京都台東区池之端
		大野邸邸内	江戸千家
建設時期		（設計：1990.9）	宝暦4年～不白没（1754～1807） 1869年に移築
方位	躡口	西	西
勝手		本勝手	本勝手
床の間	形式	本床（畳敷）	本床（畳敷）
	位置	風炉先床	風炉先床
	床框	（不明）	赤松半丸太
	床柱	（不明）	節付磨き丸太
	径	（不明）	0.3
炉	種類	台目切	台目切
袖壁	中柱	（不明）（直）	赤松丸太（曲）
	径	（不明）	（不明）
	吹抜高	2.19	2.2
	釣棚	二重棚、桐、竹	一重棚
天井	床の間	鏡天井、平天井	鏡天井、平天井
	台目	ノネ板、シノ芽竹、平天井	棹縁細竹蒲天井、平天井、落天井
	床前	がま、平天井	竹棹縁野根板天井、平天井
	躡口前	掛込天井	掛込天井
	突上窓	有（板戸付） 1.60×2.00	無
躡口	高×幅	2.26×2.10	2.28×2.05
茶道口	高×幅	5.19×2.02	5.00×2.00
	建具	方立口、奉書タイコ貼	方立口、白奉ばり
給仕口	高×幅	3.92×2.00	3.87×1.97
	建具	火灯口、奉書タイコ貼	火灯口、白奉ばり
下地窓1 （躡口横）	高×幅	1.92×1.87	1.83×約2.00
	畳からの高	1.45	1.4
下地窓2 （躡口上）	高×幅	2.34×2.24	2.25×1.98
	畳からの高	2.34	2.28
下地窓3 （点前座奥）	高×幅	約2.4×約2.4	無
	畳からの高	1.3	—
連子窓	高×幅	2.40×5.20	1.52×4.70
	畳からの高	1.45	2.4
壁	仕上げ	京土、よこ波塗、スサ入	京壁
	腰貼	みなと紙、白	湊紙、白
	腰貼高	1.80、0.90	0.9
参考資料		中原暢子：『大野邸茶室工事設計図』（1990）	北尾治道：『茶室の展開図』（1970）

「大野邸茶室」茶室3畳台目の図面による比較（表7-14）について平面図を比較すると、畳の敷き方に違いがみられる。江戸千家「一円庵」は、3畳の丸畳を横並びにしているのに対し、「大野邸茶室」茶室3畳台目は、3畳のうち一畳を直行した向きに敷く深3畳台目である。連子窓の幅は、江戸千家「一円庵」に比べると、「大野邸茶室」茶室3畳台目のほうが狭くなっている。これは、江戸千家「一円庵」にはそれに附属する外腰掛はなく、同敷地内に建つ復元された江戸千家「蓮華庵」に付随する外腰掛を使うが、「大野邸茶室」茶室3畳台目は、この茶室に付随する外腰掛が南面にあるため、それが可能であったと推察できる。江戸千家「一円庵」西面の下地窓1は、外部に刀掛があるため、中央に寄っているが、「大野邸茶室」茶室3畳台目は、8畳茶室の入側に面する戸袋があるため、それを避ける形で北側に寄せて配置をしている。中柱にも違いがみられる。江戸千家「一円庵」の中柱は、曲柱となっているが、「大野邸茶室」茶室3畳台目では、直柱を採用している。さらに、江戸千家「一円庵」にみられる床脇の吹抜き（高：1尺7寸4分）は、「大野邸茶室」茶室3畳台目にはみられない。その他、茶道口、給仕口の太鼓襖の引手高さが、江戸千家「一円庵」よりも高い位置となっている。

表 7-14 「大野邸茶室」茶室3畳台目と江戸千家「一円庵」の図面による比較

茶室名	「大野邸茶室」茶室3畳台目	江戸千家「一円庵」
平面図（北が上）	 <p>点前座拡大</p>	
西展開図		
南展開図		
北展開図		
東展開図		
床脇展開図		 <p>数値の単位はmm</p>

「大野邸茶室」の平面図の中心に位置する8畳広間の床前畳には「家相の中心」との表記があり(図7-40)、鬼門と裏鬼門を結ぶ線上に水回りを避ける等といった家相による制約の影響もあったと推察できる。

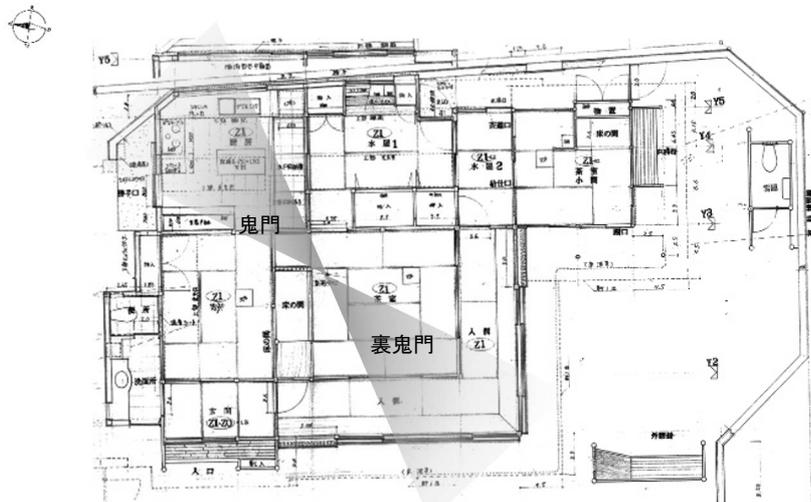


図7-40 「大野邸茶室」の鬼門裏鬼門

「大野邸茶室」茶室3畳台目と江戸千家「一円庵」の差異を以下にまとめる。

- ①点前座にある釣棚は二重棚である。
- ②突上窓がある。
- ③連子窓の幅が5尺4寸と短く、畳からの高さも1尺4寸5分と低い。
- ④中柱のある控え壁に隠れて、東展開図では確認できないが、点前座東に下地窓3を設けている。
- ⑤畳の敷き方は深3畳台目である。
- ⑥西展開図の下地窓1が給仕口寄りとなっている。
- ⑦中柱を直としている。
- ⑧床脇壁面が吹抜きとなっていない。
- ⑨茶道口・給仕口の引手の高さが4尺9寸3分(1,495mm)と高い。

7.5 考察

本歌取りの「写し」手法の特徴をまとめると、広間の場合は、床回りの構成を写している。

小間の場合は、間取り、開口部、天井の高さ、仕上げについては、本歌にできるだけ忠実に再現している。しかし、その茶室と露地や水屋との関係から、大胆に変更を行っている。

中原は池辺研究室時代から茶室設計に縁があり、住宅に付属する多くの茶室設計に取り組んできた。同時に自身も茶道を学びながら、茶人としての特に亭主や裏方、さらに懐石料理の調理に至るまで茶事に関することすべてを熟知していった。客としてはもちろん、もてなす側の動作や細かな使い勝手の良し悪しなどを繊細に感じ取っていたと思われる。

茶室における各時代区分の特徴については、第Ⅰ期の時点で既に水屋のある茶室設計にも取り組んでいるものの、茶室とその他の室のつながりは、あまり考慮されていない。第Ⅱ期の茶室設計はみられないが、NKKの農村住宅の設計において、和室、床の間、続き間等の和風的要素の設計をおこなっており、第Ⅲ期以降にそれが茶室へと影響を与えるようになる。第Ⅲ期は、増改築等の茶室設計に取り組むことで、容易に茶室を設けるための設計手法を確立していく。第Ⅳ期は、前半で、写しの設計を積極的に行いはじめ、茶事全般についての知識や技術を設計へと生かすようになる。後半では、茶道の専門家のための茶室設計へと発展し、中門のある本格的な露地の傾向へと収斂していく。

中原の設計した写しにおける本歌との差異を分析すると、茶人であり建築家でもある中原の評価の一端をみることができる。写しと思われる広間2室は、いずれも中床の花月式座敷である。床回りの設えは本歌に倣い、特に「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」は自身の住む住宅であるが故、自由な設計に取り組んでいる。近代的な斜め天井や合せ梁を使った空間構成、設備を駆使するが、それをみえない場所に組み込むことで、茶室としての本来の姿も両立させようとした。「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」は、中原にとって一つの到達点であったと考えられる。小間3室は、いずれもほぼ本歌と同じ方向で、忠実に再現しようと試みているが、その反面、細部においては大胆な差異がみられる。それは、亭主や客に対する機能性や使い勝手を重視しているという点である。「森邸」茶室3畳台目は、茶道口を2つ設けることで、戻り点前となる亭主の動線に配慮している。また、客の茶庭からの動線のしやすさのために東面に躡口を設けている。「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」2畳台目の「暢庵」は、人工照明や床暖房等の設備的な面から、さらに、「大野邸茶室」茶室3畳台目は、点前座の採光をとるために、点前座東に下地窓を付けることで、使い勝手を重視した設計がされていることが明らかになった。小間は、本歌をできる限り充実に写した上で、見た目にはわからない程度の使い勝手の良さを追求しており、「中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」以降の新築の小間は、基本写しである。

中原は、初期に「木村別邸（K氏別邸/下呂山の家）」のように独自のやり方で、極めて近代的なデザインの茶室に挑戦する。その後、中原自身も茶道を習う中で、茶道の知識を習得し、写しの設計に取り組む。写しの設計の場合、見た目の印象は本歌と変えないとする設計となり、従来の設計の方向が変化していく。すると、流派に所属する茶道の専門家からの依頼が増加し、結果として、茶室の意匠は伝統を継承するような古風なものとなっていく。茶道の基本である「おもてなし」をスムーズに行い、見た目では意匠として表現されにくい使い勝手に応じた動線の確保や設備の近代化、光の調整等の対応が茶室設計を通じてみえてきた。

参考文献リスト

- 文献 7-1)：『Sophia』、第3巻、第6号、講談社、1986.6
 文献 7-2)：『新建築（住宅特集）』、第6号、新建築社、1986.10
 文献 7-3)：『建築士』、第54巻、第5号、日本建築士会連合会、2005.8
 文献 7-4)：中原暢子：中原暢子先生最終講義「木造設計図集の出版にあたって」、東京家政学院大学家政学部住居学科、1999.1

- 文献 7-5) : 『国際建築』, 第 20 巻, 第 2 号, 美術出版社, 1953.2
文献 7-6) : 中原暢子 : 『矢島商店新築工事設計図』, 1960.1.31
文献 7-7) : 『室内』, 第 100 号, 工作社, 1963.4
文献 7-8) : 中原暢子 : 『岡邸新築工事』
文献 7-9) : 『住宅建築』, 第 14 号, 建築資料研究社, 1976.6
文献 7-10) : 中原暢子 : 『木村別邸新築工事設計図』, 1964.10.12
文献 7-11) : 中原暢子 : 『立川邸新築工事設計図』, 1970.3.5
文献 7-12) : 中原暢子 : 『高橋邸増改築工事設計図』
文献 7-13) : 中原暢子 : 『増田邸増築工事設計図』
文献 7-14) : 中原暢子 : 『大塚邸増改築工事設計図』
文献 7-15) : 中原暢子 : 『佐野邸新築工事設計図』, 1981.6.10
文献 7-16) : 中原暢子 : 『斉藤邸新築工事設計図』, 1981.11.26
文献 7-17) : 彰国社編 : 『食べる空間・つくる空間 18 人の建築家が語る住まいへの提案』, 彰国社, 1984.11
文献 7-18) : 中原暢子 : 『山田邸新築工事設計図』
文献 7-19) : 中原暢子 : 『森邸新築工事設計図』
文献 7-20) : 中原暢子 : 『増田邸新築工事設計図』
文献 7-21) : 中原暢子 : 『大野邸茶室工事設計図』, 1990.9.11
文献 7-22) : 中原暢子 : 『山田邸改装工事設計図』
文献 7-23) : 『東京家政学院大学紀要』, 第 28 号, 東京家政学院大学, 1988
文献 7-24) : 「茶道入門」, オンライン、入手先 〈<http://verdure.tyanoyu.net/index.html>〉
文献 7-25) : 根岸照彦 : 『茶室の解明 平面データ集成』, 建築資料研究社, 2001.11
文献 7-26) : 『住宅建築』, 第 434 号, 建築資料研究社, 2012.8
文献 7-27) : 表千家ホームページ : 茶の湯とこころの美, 新しい稽古場, オンライン、入手先 〈<http://www.omotesenke.jp/list4/list4-3/list4-3-12/>〉, 2005
文献 7-28) : 千宗左 : 『表千家茶の湯入門』, 主婦の友社, 2002.9
文献 7-29) : 中原暢子 : 『中原暢子の木造住宅設計図面集』, 中原暢子, 1999.1.14
文献 7-30) : 彰国社編 : 『建築大辞典 第 2 版』, 彰国社, 1993.6.1
文献 7-31) : 林屋辰三郎他 7 名 : 『角川茶道大事典 普及版』, 角川書店, 2002.9
文献 7-32) : 東京都教育庁地域教育支援部 : 東京都文化財情報データベース, オンライン、入手先 〈https://bunkazai.metro.tokyo.lg.jp/jp/search_detail.html?page=1&id=167〉
文献 7-33) : 北尾治道 : 『茶室の展開図』, 光村推古書院, 1970
文献 7-34) : 川上宗雪監修 : 『不白筆記付・孤峯川上不白道具帳写』, 中央公論新社, 2019.11
文献 7-35) : 千宗左・村田治郎・北村伝兵衛 : 『茶室 設計詳図とその実際』, 淡交社, 1959.11
文献 7-36) : 浅田晃彦 : 『不白の跡を探ねて』, 1979.12
文献 7-37) : 川上宗雪 : 『茶人 川上不白』, 茶の湯研究所, 2007.11
文献 7-38) : 覃斎儀卿 : 『困おこし図』, 出版年不明。
文献 7-39) : 中村昌生 : 「川上不白の茶室」, 『川上不白の茶』, 講談社, 1991.7

図版リスト

- ・図 7-1：文献 7-2), 中原暢子：「茶室のある家」, p.47 より抜粋し、筆者が室名を拡大。
- ・図 7-2：文献 7-5), 柳下洋一・北川允昭・中原暢子：「標準寸法の住宅への適用 例Ⅱ：秦邸・東京碑文谷」, p.60 より抜粋。家族構成は、「夫婦（作曲家）、老人（父・茶人）、子供 1 人」との記載がある。
- ・図 7-3：文献 7-6), 「3 平面図」より抜粋。
- ・図 7-4：文献 7-6), 「5 各伏図」より抜粋。
- ・図 7-5：文献 7-7), 中原暢子：「通り庭のある家」, p.44 より抜粋。
- ・図 7-6：文献 7-8), 「5 2 階平面図」より抜粋。
- ・図 7-7：文献 7-9), 中原暢子：「K 別邸」, p.65 より抜粋。
- ・図 7-8：文献 7-10), 「104 平面図 1 階」, 「108 展開図」より筆者が作成。平面図に板の間が記載されていないため、他の図面と確認し、筆者が加工した。
- ・図 7-9：文献 7-11), 「112 天井伏図」より抜粋。
- ・図 7-10：文献 7-12), 「104 矩計図」より抜粋。
- ・図 7-11：文献 7-13), 「2 配置図 案内図 平面図 面積表」より一部抜粋。
- ・図 7-12：文献 7-14), 「10 展開図 6 (和室)」より抜粋。
- ・図 7-13：文献 7-15), 「105 1 階平面図」より抜粋。
- ・図 7-14：文献 7-16), 「105 2 階平面図」より抜粋。
- ・図 7-15：文献 7-18), 「108 1 階平面図」より抜粋。
- ・図 7-16：文献 7-19), 「103 配置図 1 階平面図」より抜粋。
- ・図 7-17：文献 7-20), 「103 配置図 平面図 1」より抜粋。面積表には、既存部分と新築部分の面積が表記されているため、増築として取り扱う。
- ・図 7-18：文献 7-21), 「103 1 階平面図」を参考にし、露地を筆者が実測 (2018.12.3) し、作図。
- ・図 7-19：文献 7-22), 「101 平面図」より抜粋。
- ・図 7-20：文献 7-24), より抜粋。(参照 2020.11.06)
- ・図 7-21：文献 7-15), 「113 展開図 1」より抜粋。
- ・図 7-22：文献 7-29), 「茶室のある家 1 1 階平面図」, p.166 より抜粋。床の間脇に「びわ床」との記載あり。文献 7-2), 中原暢子：「茶室のある家」, p.47 と同室は「茶室 1」と書かれている。本文内では、西に位置する茶室を「茶室 2」とする。
- ・図 7-23：文献 7-29), 「茶室のある家 1 1 階平面図」, p.170 より抜粋。文献 7-2), 中原暢子：「茶室のある家」, p.47 と同室は「茶室 1」と書かれている。本文内では、西に位置する茶室を「茶室 2」とする。
- ・図 7-24：文献 7-29), 「茶室のある家 1 1 階平面図」, p.169 より部分的に抜粋。建具表によると、7J は電動式 (リモコン) のガラス可動式ルーバーと書かれている。
- ・図 7-25：文献 7-23), 中原暢子：「現代住宅の空間構成Ⅲ “極小空間をつくり 住まう その心理的考察を含めて”」, p.90 より抜粋。

- ・図 7-26: 文献 7-23), 中原暢子:「現代住宅の空間構成Ⅲ “極小空間をつくり 住まう その心理的考察を含めて”」, p.90 より抜粋。
- ・図 7-27: 文献 7-19) 下部の寸法線は場所を移動。
- ・図 7-28: 文献 7-24) より抜粋。(参照 2020.11.06)
- ・図 7-29: 「清涼軒」とは、中原自邸「茶室のある家」に 2 室ある 8 畳広間のどちらかであると思われる。
- ・図 7-30: 文献 7-29), 「茶室のある家 茶室 2 畳台目平面図」, p.181 より抜粋。図面作成は 1985.12.18 との記載あり。
- ・図 7-31: 文献 7-29), 「茶室のある家 堀内家長生庵実測展開図 茶室 2 畳台目展開図」, p.183 より抜粋。図面作成は 1985.10.21 との記載あり。元所員の白井克典によると、「茶室のある家」の設計は、作図も含め所員は全く関与せず、現場に行くのも中原がひとりで行ったという。
- ・図 7-32: 文献 7-29), 「茶室のある家 503 床暖房工事設計図」, p.205 より抜粋。
- ・図 7-33: 文献 7-29), 「305 電気設備電灯コンセント図」, p.197 より抜粋。
- ・図 7-34: 文献 7-33), 「ち/62/長生庵」, p.153 より抜粋。
- ・図 7-35: 文献 7-36), 「黙雷庵を建てる」, p.107 より抜粋。
- ・図 7-36: 文献 7-38), 「19 不白黙雷庵」, マイクロフィルムの資料から抜粋。図はすべて展開した状態だが、中柱のある袖壁により、点前畳の一部が隠れている。材料については、ほとんど記載されておらず、不明な点が多い。
- ・図 7-37: 1987 年 (昭和 62) 9 月 27 日 (日) に暢庵で開催された「名残の茶事」の茶会記であり、中原自邸から発見された。
- ・図 7-38: 文献 7-21), 「103 1 階平面図」より抜粋。
- ・図 7-39: 文献 7-21), 「503 床暖房設備工事」より抜粋。
- ・図 7-40: 文献 7-21), 「103 1 階平面図」を抜粋し、図面に記載のあった「家相の中心」から鬼門、裏鬼門を筆者が記入。
- ・表 7-1: 元所員白井克典より譲り受けた中原設計の実施図面等により筆者が調査・作成。
- ・表 7-2: 元所員白井克典より譲り受けた中原設計の実施図面等により筆者が調査・作成。
- ・表 7-3: 文献 7-25), pp.76-90 及び pp.206-213 掲載の中床四畳半切の茶室を元に、筆者が作成。また、江戸千家「花月楼」は文献 7-26), pp.78-79、表千家「新席」は文献 7-27) (参照 2020.8.18) の写真より比較した。
- ・表 7-4: 表 7-1 をもとに、中原が設計した広間の茶室を抽出し、実施図面より作成。
- ・表 7-5: 元所員白井克典より譲り受けた中原設計の実施図面等により筆者が調査・作成。
- ・表 7-6: 文献 7-25), 「3 畳台目」, pp.56-59, p.98 を元に上座床平 3 畳台目中柱台目切を抽出し、筆者が作成。
- ・表 7-7: 文献 7-19), 「103 配置図 1 階平面図」, 「109 茶室展開図」及び文献 7-33), 「ふ/81/不審庵」, pp.196-197 より筆者が作成。
- ・表 7-8: 文献 7-19) 及び文献 7-33), 「ふ/81/不審庵」より筆者が作成。

- ・表 7-9 : 文献 7-25), 「2 畳台目」, pp.48-51 を元に筆者が 2 畳台目中柱台目切を抽出し、筆者が作成。躡口がないものは、貴人口からみた床の間の位置を記載。
- ・表 7-10 : 文献 7-2), 中原暢子 : 「茶室のある家」, pp.42-43, 1986.10、文献 7-33), 「ち/62/長生庵」, pp.153-154, 及び文献 7-38) を元に、筆者が作成。
- ・表 7-11 : 文献 7-29), p.181, p.183、文献 7-33), 「ち/62/長生庵」及び、文献 7-38) より筆者が作成。黙雷庵については、起こし絵図から抽出したため、平面図に壁厚や柱、開口部位置は表現されていない。
- ・表 7-12 : 文献 7-25) を元に風炉先床深 3 畳台目中柱台目切を抽出し、筆者が作成。
- ・表 7-13 : 文献 7-21), 「103 1 階平面図」, 「111 茶室小間展開図」, 及び文献 7-33) 「い/6/一円庵」, pp.16-17 より筆者が作成。
- ・表 7-14 : 文献 7-21) 及び文献 7-33) 「い/6/一円庵」より筆者が加工。「一円庵」の床脇展開図は、文献 7-26) 伊郷吉信 : 「江戸千家の建築と自然 その 1」, p.70 より抜粋。
- ・写真 7-1 : 文献 7-2), 中原暢子 : 「茶室のある家」, p.45 より抜粋。
- ・写真 7-2 : 文献 7-2), 中原暢子 : 「茶室のある家」, p.47 より抜粋。
- ・写真 7-3 : 文献 7-7), 中原暢子 : p.41 より抜粋。「通り庭のある家」記載の同誌 p.44 に「(中略) …茶室(美しき室内参照)があるのは…(中略)」との記載あり。
- ・写真 7-4 : 文献 7-7), 中原暢子 : 「通り庭のある家」, p.47 より抜粋。
- ・写真 7-5 : 文献 7-1), 中原暢子 : 「趣味の茶事が、退職後、生活の中心に 住まいがそれを可能にした」, p.199 より抜粋。
- ・写真 7-6 : 文献 7-1), 中原暢子 : 「趣味の茶事が、退職後、生活の中心に 住まいがそれを可能にした」, p.198 より抜粋。
- ・写真 7-7 : 文献 7-2), 中原暢子 : 「茶室のある家」, p.40 より抜粋。
- ・写真 7-8 : 文献 7-26), 伊郷義信 : 「江戸千家の建築と自然その 1」, pp.78-79 (写真 清水謙) より 2 頁にわたった写真を筆者が加工し一部を抜粋。
- ・写真 7-9 : 文献 7-28), 「松風楼」, p.16 より抜粋。「松風楼」は、1921 年に第 12 代惺斎によって建てられた。
- ・写真 7-10 : 文献 7-27) (参照 2020.8.18) より抜粋。
- ・写真 7-11 : 東京家政学院大学が譲り受けたメタルハイドランプ (ハロゲン化水銀ランプ)。筆者が撮影 (2020.10.27)。
- ・写真 7-12 : 文献 7-2), 中原暢子 : 「茶室のある家」, p.42, 新建築社, 1986.10 から一部を抜粋。
- ・写真 7-13 : 文献 7-35), 「堀内家 長生庵 内部 3」, p.217 より抜粋。

注釈

7-1) : 文献 7-1), 中原暢子 : 「趣味の茶事が、退職後、生活の中心に 住まいがそれを可能にした」, pp.198-200 には、「(中原は)すでに茶室ぐるみの住まいの設計は 20 軒にも達している。」との記載があり、この雑誌が出版されて以降も、5 軒の茶室作品が確認できていることから、少なくとも 25 軒は設計しているとみられる。

- 7-2) : 中原の茶道の弟子である山田豊の妻へのヒアリング (2018.4.10) による。
- 7-3) : 文献 7-3), 中原暢子・山田初江:「対談「私の住まい記 60 年」」, p.38
- 7-4) : 文献 7-4)
- 7-5) : 文献 7-17), 中原暢子:「茶室と水屋」, p.95-98
- 7-6) : 元所員白井克典へのヒアリング (2018.8.20) による。
- 7-7) : 元所員大島康治へのヒアリング (2018.10.27) による。
- 7-8) : 中原の茶道の弟子である山田豊の妻へのヒアリング (2018.4.10) による。
- 7-9) : 文献 7-23), 中原暢子:「現代住宅の空間構成Ⅲ “極小空間をつくり 住まう その心理的考察を含めて”」, p.83
- 7-10) : 七事式とは、茶の湯の精神、技術をみがくために制定された稽古法であり員茶 (かずちゃ)、廻花 (まわりばな)、廻炭 (まわりずみ)、且坐 (さざ)、茶かぶき、一二三 (いちにさん)、花月 (かげつ) の七つがある。表千家 7 代の如心斎が、裏千家 8 代の一燈宗室や高弟たちと相談して制定した。
- 7-11) : 琵琶棚とは、琵琶台ともいい、床の間の脇の半間ほどを一段高くして板を張ったもので、ここに琵琶を飾ったところからこの名が付いた。琵琶床は、床の間の形式のひとつで、床脇に琵琶棚がある床の間をいう。
- 7-12) : 文献 7-29), 「茶室のある家」, p.163
- 7-13) : 文献 7-30), p.98 によると、書院造り、または伝統的な民家においては、座敷と濡れ縁との間の細長い縁側部分を示し、その幅 1 間~1 間半くらいとる場合が多い。全面または一部を畳敷きとする場合もあり、この場合は、縁座敷と称される。
- 7-14) : 文献 7-29), 「茶室のある家」, p.163
- 7-15) : 文献 7-31), 「不審庵」, p.1187
- 7-16) : 文献 7-32), (参照 2020.8.21)
- 7-17) : 文献 7-34), 「不審庵の仕様」, pp.24-27 『不白筆記』は、江戸千家の祖川上不白が師如心斎の茶説を聞き記した書物で、成立時期は宝暦 8 (1758) 年、安永 2 (1773) 年の説がある。
- 7-18) : 文献 7-29), p.83
- 7-19) : 文献 7-29), p.83
- 7-20) : 元所員大島康治へのヒアリング (2018.10.27) による。
- 7-21) : 文献 7-2), 中原暢子:「茶室のある家」, p.42
- 7-22) : 文献 7-29), p.83
- 7-23) : 文献 7-29), p.93
- 7-24) : 堀内仙鶴 (1675-1748) は、表千家六代千宗左に学び、堀内家初代家元であるが、以前は俳諧師であった。江戸の生まれで水間沾徳 (1662-1726) の門下である。とともに書画も堪能であった。山田宗徧 (1627-1708) の門弟堀内浄佐 (1612-1699) の養子になって茶道界に入った。
- 7-25) : 文献 7-31) 「長生庵」, p.924
- 7-26) : 文献 7-37) 「第 4 章 黙雷庵の茶頭」, p.49

7-27) : 「起こし絵図」とは、平面図に展開図を加え、貼り付けや差し込みによって組み立てると立体になる建築図面であり、茶室の設計や茶室の写しを作る際に参考とするもので、江戸時代に盛んに作られた。

7-28) : 文献 7-36), p.106

7-29) : 文献 7-31), 「黙雷庵」, p.1350

7-30) : 如心斎 (1705-1751) は、家元制度の基礎を築き、七事式を制定するなど茶道人口増大の時代に対応する茶の湯を模索した人物であり、その師は表千家 6 代原叟 (覚々斎) (1678-1730) である。

7-31) : 文献 7-37), 「口絵解説 15 16 阿弥陀堂釜 琳光院 黙雷庵 常什」, p.153

7-32) : 文献 7-39), 「川上不白の茶室」, p.84

7-33) : 茶会記とは、茶会の日時・場所・道具立て・懐石膳の献立、参加者の名前などを記したものである。

7-34) : 水差は「先々代楽斎作」との記載がある。高橋楽斎と考えられるが、昭和 62 年時点での当代は、4 代高橋楽斎 (光夫) である (1976 襲名)。その先々代とのことであるから 2 代高橋楽斎 (藤太郎 生没年不明) であるが、藤太郎は製窯業を営んでおらず、初代高橋楽斎 (藤左衛門 生没年不明) についても資料が少ないことから、3 代高橋楽斎 (光之助 1898-1975) を指しているものと思われる。

7-35) : 文献 7-26), 伊郷義信 : 「江戸千家の建築と自然その 1」, p.70

7-36) : 文献 7-33), 「6 一円庵 (いちえんあん)」, p.254 「火灯口」は「花頭口」と記す場合もある。

第8章 各章の要約と総括

8.1 各章の要約

本研究の目的は、茶人であり建築家でもある中原暢子（1929-2008 以下、「中原」という）の作品とその背景となる設計に対する考え方が、どのように変化し確立されたのかを明らかにすることである。中原は、草創期の女性建築家の一人として取り上げられることがあるが、建築家・中原を単独で研究したものはこれまでにない。モダニズム建築家のひとりである池辺陽（以下、「池辺」という）から指導を受けた中原が、どのような過程を経て、伝統的和風住宅や茶室、その「写し」を設計することになったかを生涯における主要作品を遡ることによって、その設計思想の変遷を明らかにした。

各章のまとめ及び総括は下記の通りである。

第1章 序論

本論文の目的は、中原の作品とそれを支えた設計思想の変遷を明らかにすることである。中原の雑誌等への建築掲載作品は、極めて少なくこれによってその過程を把握することは極めて困難であった。しかし、幸運にも中原が林・山田・中原設計同人（以下、「設計同人」という）時代に設計した大部分の設計図書が元所員に託され、中原の母校である東京家政学院大学に寄贈されたことで分析を行うことができた。

中原は、東京家政専門学校で住居概論の講義を分離派建築会の石本喜久治から受けたことをきっかけに建築を志した。武蔵工業大学短期大学部に入学し、蔵田周忠や笹原貞彦から建築教育を受け、1952年東京大学生産技術研究所池辺研究室に入室した。「住宅 No.20」「住宅 No.28」等の設計を担当し、池辺著の『すまい』の出版（1954）、伝統論争（1955-1956）、及び五期会運動（1956）による同僚の研究室からの独立、連合設計社の設立（1957）等が身近な環境にあった。その後、1958年に同研究室を辞し、林雅子・山田初江と共に設計同人を設立した。以来事務所の閉鎖（2001）まで住宅を中心とした144以上の作品を設計した。そのうち設計年の明らかな作品を時系列に4期に分けてその特徴と展開を明らかにする。

第2章 HP シェルを用いた構造表現主義—「長覚院」—

門型ラーメンに切断 HP シェルを載せた「長覚院」を取り上げ、その建設過程とその設計思想を明らかにした。設計は池辺が伝統論争の中で展開した「伝統」に対する考え方と「建築創造」について3つのポイントを忠実に守って実現したものである。第1の「機能主義を正統に戻す」については、寺院であることと村あずかりの寺として村の集会や寺子屋としても使われてきた伝統を踏まえて、HP シェルやシンボルを用いて尊厳のある宗教施設を目指すとともに、アコーディオンドアを内陣と外陣の間に設置し、気軽に集会などに利用できる村に解放されたデザインとした。第2の「技術主義の徹底と非人間性の克服」では、池辺や元同僚が円筒シェルを設計に採用している中で、池辺研究室時代の構造設計者からの支持を

受け、最先端のHPシェルをV型断面の門形ラーメンで支え、その軒先を切断することで「柔らかさ」を表現した寺院とした。第3の「建築を大衆に結びつける」では、住職や檀家の意向を積極的に受け入れ、屋根形状の変更や石経埋納などを通して寺院建築への参加を促した。

第3章 木造を主構造とする構造表現主義—「辻別邸」—

「辻別邸」は木造丸太を主構造とする構造表現主義的作品である。丸太柱と合せ梁でトラスを構成し、その間に床・屋根を差し込み、1階をピロティとした別荘建築である。同時期のA.レーモンド設計の「延岡ルーテル教会」(1957)や林雅子設計の「草崎クラブ」(1961)や「末広りの家」(1963)と同様、斜材丸太を利用しているが、全体をピロティとして他の作品との差別化を図っている。デザインは構造表現主義的建築であるが、構造システムと建築表現の完全な一致にこだわることなく、荷重の大きい2階床を構造上丸太トラスから分離することによって丸太トラスの負担を減少させ、さらにブロック壁を導入することによって地震力に対応するとともに、ピロティの有効利用を図るなど柔軟な設計態度がみられる。

第4章 農村住宅に関する言説と作品

農林中央金庫組合金融推進部の中に大高正人や山名元を中心に農協建築研究会(NKK)が設立され農協を中心としたまちづくり、農協等施設建設及び住宅相談事業を行った。設計同人はこの住宅相談事業に参加し、中原は都市近郊農村意識実態調査から農村住宅の問題点を整理し、高度成長期の大都市近郊の新築農家住宅10軒(1966-1971)を設計した。これらの設計は第Ⅱ期にあたる。間取りについてはプライバシーの確保やDKスタイルの採用等一程度の近代化を達成したが、日常生活と農作業の切り離しには至らず、土間空間を設け下足で家事、食事を可能としている。DKを上足とする場合でも、別に土間食堂を確保し下足での昼食を可能とした。

民法改正や農地解放で農村に構造的変化をもたらしたとはいえ、依然として残る「人寄せ」のための空間として「続き間」とその農家の格を示すため、本格的な「座敷飾り」が求められ、全ての住宅に「続き間座敷」や「単独座敷」を設ける結果となった。様式選択を行わない「機能主義」の原則から逸脱しているが、中原は不本意ながら「続き間座敷」の様式選択を行ったと考える。

第5章 様式併存の受容—「水野レストラン」—

「水野レストラン」は、明治建築風、蔵造り、書院造の3種の建築様式を併存した商業建築であり、これは池辺の「機能主義」から逸脱を示す設計方法、設計思想である。この期の設計思想の転換について考察した。

これについて中原が自ら語った資料はない。建築主の水野蔵左衛門(幸夫)は、工業デザイナーからレストラン経営に転身した日本文化に造詣の深い趣味人であり、その弟はファッションデザイナーの水野正夫で日本とパリに店舗を持ち、日本文化についての著書もある文化人である。これ以前に中原の設計に書院造風のインテリアデザインはあるが、様式を前面に

押し出したり、様式を併存させたりするデザインはみられない。また、この作品を建築雑誌に公表していないことから、中原からの提案ではなく建築主の強い要望によるものと推察される。「食事を楽しむ」ための舞台装置として、料理に始まり、器や調度品、建築から環境に至るまで、総合的に目配りをする建築主の考え方に共鳴したのではないかと考えられる。

第6章 「和風」と「機能主義」の展開

和風住宅の設計が集中する第Ⅲ期を中心にその特徴を検討した。農村住宅の設計でみせた「続き間座敷」のある和風住宅の設計において、和風住宅を設計できる建築家との評判が広がったのであろうか、第Ⅲ期には和風住宅の依頼が集中し、全ての住宅に座敷のある「和風」住宅が設計された。

それでは中原が池辺から学んだ「機能主義」は消失したかということ、そうではなく、生活部分の機能的な設計や構造・構法・材料の合理的で経済的な選択等、設計の基盤には池辺から学んだ「機能主義」が持続していることが確認された。

一方、中原はこの時期から茶道を学び直す。「続き間座敷」に対する強い要望を深く見直すために「おもてなし」をその中心におく茶道を学び直したのではないか。身近な叔母や東京家政専門学校から茶道を学び、池辺研究室で設計した初めての住宅も茶室であった中原にとって、茶道を拠り所とすることは必然的なことであったかもしれない。

第7章 茶室設計の展開

池辺研究室での初めての設計で茶室のある住宅を担当した中原は、独立後に設計した住宅に付属する茶室25室と独立した茶室1軒を設計した。これをまとめ、各時代での特徴を明確にし、さらに「写し」と考えられる茶室を抽出し、本歌と比較することで、その考え方を考察した。

第Ⅰ期は、これまでの茶室の様式にこだわらない新しい茶室であった。第Ⅱ期・第Ⅲ期に新築茶室はみられない。第Ⅳ期は、茶道や懐石料理の教室が開催できる複数の茶室、厨房（台所）を構えるものが多くを占め、本格的な二重露地のある外部空間も計画されている。

広間については、その流派の基本となる茶室を写している。しかし、細部をみると大胆な設計変更もみられる。自邸では、勾配天井や内部空間に露出した合せ梁を採用するなど、これまでの設計で試みてきた中原好みのようなものがみられる。また設備類を茶室室内から直接みえないところに建築的な装置をつくり収めており、茶事の進行に伴って、明るさの調整を機械的操作で可能とする細かな配慮がなされている。小間については、「実際その茶室を訪れてみると、極めて質が高いため、その「写し」に取り組むことを考えた」と述べており、基本的には、本歌を忠実に再現しようとして試みているものの、茶道の基本である「おもてなし」をスムーズに行い、また、快適に使うために、茶室全体のプランニング、明るさや温熱環境の調整等、池辺から学んだ合理的な考えにより茶室を支えている。

8.2 総括

中原の設計思想がどのように形成されてきたかを考えると、池辺研究室での設計活動を通して学んだものが最も大きい。一つは池辺著の『すまい』に記されている住居を「生活機能」「空間機能」「構成機能」及び「視覚機能」に分類する「機能主義」である。他の一つは、伝統論争の中で学んだ池辺の伝統に対する考え方である。「伝統へのよりかかりは、かつての西欧のネオ・クラシズムのひからびた建築の二の舞を演ずる」と様式の選択を厳しく否定した。

このように、池辺研究室から学んだ「機能主義」と伝統の考え方を基盤として、その時々々の偶然の出会い、つまり、「長覚院」での住職や檀家との出会い、農村住宅における農家の人々との出会い、「水野レストラン」における経営者との出会い、茶道への接近と茶道の宗匠や茶懐石の料理人との出会いの度に設計思想や設計方法を見直し、「機能主義」の設計思想を超えて、様式の選択を受容した「中原流の機能主義」を構築したと考えられる。各章で取り上げた主要な作品について、池辺の「機能主義」を対応させると、表 8-1 のようになる。

表 8-1 池辺の「機能主義」と中原の設計作品

池辺の言説			中原設計作品					
			長覚院	辻別邸	水野レストラン	農村住宅	和風住宅	茶室
機能主義	生活機能	機能主義を正統に戻す(本質的機能)	村あずかりの寺院	別荘 軽井沢	食事を楽しむ 舞台装置	人寄せ	接客	おもてなし 茶事 茶道の流派
	空間機能	—		ピロティ				(ハイサイドライト)
	構成機能	技術主義の徹底と非人間性の克服	切断HPシェル 木造	木造トラス ピロティ 合せ梁	壁構造 木造	混構造	混構造	混構造 電気・床暖房
	視覚機能	大衆に結び付ける	切断HPシェル	木造トラス	明治建築風 蔵造り 書院造	続き間 続き間座敷	本格的続き間座敷 単独座敷	小間・広間 写し 露地
キーワード			構造表現主義	構造表現主義	様式選択	様式選択 和風	様式選択 和風	様式選択 和風
出典	池辺著『すまい』(1954)	「建築創造のリアリティをどこに求めるか」	「H.P. シェルと伝統の融合 天台宗長覚院」	原図	原図	「農村住宅の問題点」(1968)、原図等	「H邸」(1976.6)、原図等	「茶室のある家」(1986.10)、原図等

6.3 今後の課題

今後の課題として、中原の研究は、女性建築家としての系譜、茶室建築としての系譜先等、いろいろな広がり方が可能であり、それらの方向についても分析することが必要であると思われる。また、中原の研究推進のため、関連の資料として譲り受けた図面や書籍等のデータベースの公開のための整備を行う必要がある。

図版リスト

- ・表 8-1：筆者が作成。

謝辞

博士学位論文を提出するにあたって、多くの方々のご指導とご助力をいただきました。

工学院大学大学院工学研究科建築学専攻教授の木下庸子先生、また同教授の大内田史郎先生には、私を博士後期課程の大学院生として受け入れていただき、この3年間査読論文の執筆・投稿から博士論文執筆までご指導いただき、心から深く感謝申し上げます。木下庸子先生には、主査として終始多大なる温かいご指導と激励を賜りました、大内田史郎先生には、副査として私が初めて執筆する査読論文の書き方やその対応にまで、丁寧にご指導いただきました。

また、同教授の山下てつろう先生には、これまでの多くのご経験から博士論文の構成や展開について細かな部分に至るまで具体的なご助言をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。

工学院大学総合研究所教授の後藤治先生、東京大学名誉教授・工学院大学非常勤特任教授の藤森照信先生、日本女子大学教授の定行まり子先生には、副査として本論文をまとめ今後の研究を発展させる上で大変貴重なご指導とご意見をいただきました。深く感謝申し上げます。

私の博士後期課程進学を勧めてくださいました、東京家政学院大学生生活デザイン学科教授の白井篤先生、原口秀昭先生、小池孝子先生をはじめ、同学科所属の先生方、旧住分野の先生方に心よりお礼申し上げます。先生方には、博士後期課程進学と職務を両立する上で、様々なご配慮をいただきました。深く感謝申し上げます。

東京家政学院大学名誉教授の杉本茂先生には大学学部時代より長年にわたり多大なるご指導をいただいてまいりました。ここに深く感謝いたします。

工学院大学大学院および東京家政学院大学の教職員の方々には、日頃より教育および研究における多大なご協力とご支援をいただきました。深く感謝申し上げます。

また、設計同人元所員の白井克典氏に深く感謝いたします。設計同人時代の設計図書等を、中原暢子先生からの厚い信頼を得て保管し、本学に寄贈されるとともに、中原作品の設計担当としての経験から、中原暢子先生の設計や林雅子先生の設計について貴重なお話を聞かせていただきました。

本論やその基礎となった紀要を執筆するにあたり、「長覚院」建設の貴重な資料を提供していただき、また興味深いお話を伺った住職の鎌田亮宣氏に厚くお礼申し上げます。また、「長覚院」の分析について建築構造の観点から、多大なご指導をいただいた東京家政学院大学名誉教授の金子雄太郎先生にも深くお礼申し上げます。

謝辞

中原暢子先生の姪の佐藤玲子氏、建設工学研究会元メンバーの小町治男氏、「辻別邸」の所有者である元日本大学の鈴木晃教授とその奥様、柿生農協元職員の井上眞一氏、江戸千家家元第10代宗雪宗匠、設計同人元所員の大島康治氏、その他中原暢子先生設計の住宅・建築の所有者、関係者の皆様、ご協力いただきましたすべての方々に厚くお礼申し上げます。

最後に、これまで私を温かく応援してくれた両親と支えてくれた夫、息子に心から感謝いたします。

2021年1月

付録

- 付録 1 中原暢子設計原図リスト
- 付録 2 中原暢子著作リスト
- 付録 3 中原暢子設計新築住宅の平面図・立面図一覧
- 付録 4 中原暢子略年譜

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
1	吉岡邸	専用住宅	新築	17	1958/6-1958/8		W	2階	不明	59.33	98.09	埼玉県さいたま市		取壊	
2	今野邸 (増改築)	専用住宅	増改築	13	1958/6-1958/9		W	1階	806.37	増改55.37	—	東京都大田区		取壊	
3	大坪医院 (増改築)	併用住宅	増改築	6	1958/10		W	2階	—	増改7.07	—	東京都葛飾区		不明	
4	本橋邸	専用住宅	新築	15	1959/3-1959/5		W	1階	519.56	61.68	61.68	東京都日野市		現存	
5	矢高商店	併用住宅	新築	18	1960/1-1961/3		W	2階	139.04	81.13	112.46	埼玉県川口市		取壊	
6	茂木邸	専用住宅	新築	14	1960/8	1960/6-1960/11	W	2階	76.59	33.88	66.94	埼玉県北区		不明	
7	斎藤邸 (増築)	専用住宅	増築	9	1960/8-1960/10		W	1階	不明	不明	不明	不明		不明	
8	柳邸	専用住宅	新築	10	1960/9		W	2階	355.93	48.6	81	東京都品川区		取壊	
9	平田邸 (H邸)	専用住宅	新築	17	1960頃		W	1階	265.25	104.49	99.63	神奈川県横浜		現存	『暮らしの知恵』1966.8
10	芳賀邸	専用住宅	新築	3	1961/1-1961/10		W	2階	240.3	70.87	398.52	東京都新宿区		不明	
11	中屋旅館 (改築)	併用住宅	改築	52	1961/8-1961/9		RC+CB	4階	127.75	112.14	398.52	千葉県鴨川市		取壊	
12	中屋旅館 (増築)	併用住宅	増築	12	1961/9-1962/4		RC	4階+塔屋	不明	不明	不明	千葉県鴨川市		取壊	
13	吉永邸 (通り庭のある家)	専用住宅	新築	16	1961/11		W	2階	354.87	84.93	99.24	神奈川県茅ヶ崎市	上山彰栄	取壊	『室内』1963.4
14	長覚院庫裡	併用住宅	新築	33	1961/12-1962/7	1962/1-1962/7	CB+W+RC(梁)	1階	2,171.29	166.315	230.33 (本堂込み)	埼玉県さいたま市		取壊	『建築文化』1962.10
15	長覚院本堂	寺院	新築	33	1961/12-1962/7	1962/1-1962/7	RC+W	1階	2,171.29	154.06	230.33 (庫裡込み)	埼玉県さいたま市		現存	『室内』1962.10/『建築文化』1962.10
16	辻別邸	別荘	新築	21	1961		W+CB	3階	933.39	85.86	91.53	長野県北佐久郡		現存	
17	田口邸1	専用住宅	新築	15	1961		W	2階	155.17	46.62	89.1	埼玉県蕨市	上山彰栄、S.M、伊東久	取壊	『室内』1966.4/『みのり』1966.9とその前後
18	土肥邸	専用住宅	新築	17	1962/2		RC+CB	2階	493.32	90.54	99.63	埼玉県さいたま市		取壊	
19	中原了平アパート (増改築)	集合住宅	増改築	11	1962/2		CB	2階+塔屋	407.55	増改60.75	108.24	埼玉県さいたま市	non、上、小	取壊	
20	増山邸	専用住宅	新築	12	1962/6		RC+W	2階	101.09	33.32	55.12	東京都品川区	Sugihara、小野	取壊	
21	吉田邸	専用住宅	新築	19	1962/8		RC+W	地下1階+1階	142	84.38	95.1	東京都新宿区	non、Sugihara	現存	
22	中田邸 (増築)	専用住宅	増築	19	1962/3-1962/7		CB+W	2階	402.15	108.78	増築22.57 改築19.44 既存93.46 計162.82	埼玉県さいたま市	Sugihara、上山彰栄、上井山、サトウ	現存	
23	渡辺邸	専用住宅	新築	9	1963/3		W	2階				不明		不明	

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
24	近藤邸 (増築) (K邸)	専用住宅	増築	13	1963/4		W	2階	204.34	新築31.02 既存46.59 計77.61	新築56.54 既存46.59 計103.13	東京都杉並区	Sugihara	取壊	『暮らしの知恵』1966.8/『室内』1965.11
25	福山邸 (増築)	専用住宅	増築	15	1963/5		CB+W	2階	92.84	既存33.058 ブロック増築 30.990 増築59.040 木造増築 18.630 計74.578	既存66.116 ブロック 増築59.040 木造増築 18.630 計143.786	東京都千代田区		取壊	
26	岡部邸 (増改築)	専用住宅	増改築	31	1963/7- 1963/11	1964/6- 1964/9	W	2階	239.2	135.63	増築45.88 改築121.86 既存118.03	東京都世田谷区	KTGT、non、カタオガ、野呂恒二	現存	『木造の詳細1構造編』(彰国社)1981/『建築文化』1966.10
27	岡邸	専用住宅	新築	28	1963頃	1968	RC+W	2階+屋 階	300.12	95.86	158.56	埼玉県さいたま市		現存?	
28	岡部医院 (O氏邸/岡部邸)	併用住宅	新築	29	1964/5		W	2階	264.3	124.92	176.94	東京都世田谷区		現存	『中原暢子の木造住宅設計図集』1997
29	木村別邸 (K氏別邸・別荘 下呂山の家)		新築	24	1964/10- 1965/3	1965/8- 1966/4	RC+W	2階+地下 1階	1,740.00	163.8	122.31	埼玉県入間郡	野呂恒二	現存	『中原暢子の木造住宅設計図集』1997/『住宅建築』1976.6/『建築文化』1966.10/『新感覚のセカンドハウス』1990.5 (講談社) / 『未来への女性建築家のハイオポニアの肖像』2013.3 (UIFA JAPAN)
30	飯草邸	農家住宅	新築	32	1966/3	1966/4- 1966/7	W	2階	1,728.90	141.48	171.72	神奈川県川崎市	non、(星野) 美	現存	『農村の住まい』1967.9
31	芝崎邸	専用住宅	新築	21	1966/11		W+OB+S	1階	1,551.18	161.95	125.03	埼玉県川口市	野呂恒二	不明	
32	立川邸1 (若夫婦の家)	農家住宅	新築	21	1966/12		W	1階	274.26	102.6	92.88	神奈川県川崎市	伊東久	現存	『室内』1968.9
33	坂本邸 (雁行した家)	農家住宅	新築	22	1966		W	1階	564	109.44	109.44	神奈川県川崎市	中原暢子	現存	『室内』1968.9
34	秋永邸 (住宅部分)	専用住宅	新築	33	1967/5- 1967/6		W	2階				不明	Non	取壊	
35	秋永邸 (店舗部分)	店舗	新築	33	1967/5- 1967/6		CB	1階				不明	Non	取壊	
36	仲林邸 (鉄筋コンクリートの家)	農家住宅	新築	27	1967		RC+W	2階	2,146.20	105	168.1 既存計105.78	神奈川県川崎市		取壊	『室内』1968.9
37	安藤邸1	併用住宅	新築	22	1967		RC+W+S	3階	321.44	90.5+物置 32.4	211.9	埼玉県川口市		取壊	
38	安藤邸2	併用住宅	新築	15	1967		W+S	2階	239.33	82.86	152.64	埼玉県川口市		取壊	
39	横田邸 (大屋根の家)	農家住宅	新築	26	1968以前		W+S	2階	799.67	128.51	158.36	神奈川県川崎市	Non	現存	『室内』1968.9
40	高橋邸1 (扇形の家 /Ta氏邸/Ta邸)	専用住宅	新築	25	1968/7	1968/9- 1969/8	W+S	2階	727.44	160.72	162.66	埼玉県さいたま市	Non	現存	『中原暢子の木造住宅設計図集』1997/『住宅建築』1976.6/『建築文化』1969.8

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
41	高橋邸2	専用住宅	新築	18	1968		W+軽量型鋼(鉄)	2階	125.1	45.36	76.95	埼玉県さいたま市		現存	
42	戸田邸	専用住宅	新築	20	1969/3		RC	2階	156.57	74.82	93.9	神奈川県逗子市		現存	
43	水野レストラン	併用住宅	新築	67	1969/8		RC+W+S	3階+地下1階	315.86	189.43	RC303.845 W66.25 計370.095	東京都中央区	中原暢子	現存	
44	篠崎邸	専用住宅	新築	18	1969		W	2階	223.6	72.09	113.03	東京都杉並区	non、ウエハラ、 ■山、久	取壊	
45	松田医院	併用住宅	新築	21	1969		W	2階	277.2	137.46	136.43	神奈川県平塚市	上田、non、上山 彰榮	取壊	
46	立川邸2	農家住宅	新築	24	1970/3		W	1階	1,228.11	189.37	212.99	神奈川県川崎市黒川	中原暢子	現存	
47	堤邸1	専用住宅	新築	28	1970/4		RC(ラメン)+CB	2階	490.3	83.87	106.44	埼玉県与野市	中原暢子	取壊	
48	熊沢邸(柿生の家)	農家住宅	新築	43	1970/4		RC+W+S	3階	2,214.51	新築174.89 既存66.16	292.74	神奈川県川崎市	中原暢子	取壊	『未来への女性建築家のパイオニアの肖像』2013.3 (UIFA JAPON)
49	岡部医院(増築)	併用住宅	増築	14	1970/6		S+W	2階	264.3	既存130.4 増築9.99	196.86	東京都世田谷区	中原暢子	現存	
50	神崎邸	専用住宅	新築	43	1970		RC+W	2階	585.86	108.01	196.86	東京都八王子市	加々美明	取壊	
51	横山邸	農家住宅	新築	7	1971/1		RC+W	2階	不明	不明	不明	神奈川県川崎市?	中原暢子	現存	
52	鈴木邸1	農家住宅	新築	2	1971/4		W	1階	881.36	71.28	71.28	神奈川県川崎市		取壊	
53	渡辺邸(増改築)	専用住宅	増改築	7	1971/9- 1971/10		W	2階				東京都杉並区		現存	
54	志村邸	農家住宅	新築	35	1971頃	1974	W	2階	776.54	164.36	216.27	神奈川県川崎市	■	現存	
55	竹内邸	専用住宅	新築	32	1972/1		W+S	2階	617.18	新築152.28 既存99.72 計243.00	186.30	神奈川県横浜市	中原暢子、■、井上	取壊	
56	松本邸	専用住宅	新築	27	1972/2		W+RC	2階	558.09	128.26	RC59.55 W130.67 計190.22	埼玉県浦和市	杉浦克治	現存	
57	前田別邸(M氏別邸)	別荘	新築	22	1972/9	1972/12- 1973/4	W	2階	1,644.48	66.44	78.67	神奈川県足柄上郡	中原暢子	現存	『中原暢子の木造住宅設計図集』1997/『建築文化』1974.3
58	天満邸	専用住宅	新築	24	1972/12- 1973/2		S	3階	224.85	56.49	111.92	東京都豊島区	ハ、ユサ、井上	取壊	
59	西柳邸(Y氏邸)	専用住宅	新築	23	1972/11	1972/12- 1973/4	W	2階	341.63	80.45	117.27	神奈川県横浜市	加美、ユサ、Ren、中原暢子	取壊	『中原暢子の木造住宅設計図集』1997/『建築文化』1974.3
60	高塚邸	専用住宅	新築	24	1973/4- 1974/7		W+S	2階	202.17	77.84	118.41	神奈川県鎌倉市	ハ	現存	
61	沢柳邸	専用住宅	新築	13	1973/10		W+S	2階	220.86	81.98	159.82	埼玉県浦和市	中原暢子	取壊	
62	会田邸(増改築)	専用住宅	増改築	11	1973/11		W	2階			不明	不明	小	不明	
63	三平邸(増改築)	農家住宅	増改築	10	1973頃		W	2階				神奈川県川崎市		現存	

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
64	坂本邸 (改築)	併用住宅	改築	9	1974/2		W	2階			改築4.32 新築58.61	東京都杉並区		現存	
65	長谷川邸 (H邸)	専用住宅	新築	42	1974/5		W	2階	2,396.92	169.55	227.06	埼玉県さいたま市あ	あ、中原暢子	現存	『住宅建築』1976.6
66	井原邸 (改築)	専用住宅	改築	9	1974/6- 1978/2		W	2階		改築21.605		埼玉県与野市		現存	
67	前田邸	専用住宅	新築	27	1974		RC	2階	312.27	54.42	95.25	神奈川県川崎市	中原暢子、はら、ス、井	現存 (後中原増築)	
68	熊沢邸 (増改築)・柿生の家	農家住宅	増改築	23	1974頃		S+RC+W	3階				神奈川県川崎市	光、中原暢子	取壊	『未来への女性建築家のパイオニアの肖像』2013.3 (UIPA JAPON)
69	田口邸2	専用住宅	新築	19	1975/11		W+S	2階	407.84	新築101.35 既存77.38 計178.73	新築149.92 既存116.96 計266.88	埼玉県蔵市		取壊	
70	高橋邸 (増改築)	専用住宅	増改築	13	1975		W+S	2階	125.1	既存46.38 増築11.60 計57.98	既存81.25 増築22.26 計103.51	埼玉県さいたま市		現存	
71	柴田邸 (増改築)	専用住宅	増改築	21	1976/1		W	2階	224.03	改築12.96 増築63.02 計75.98	88.84	埼玉県浦和市	あ、中原暢子、ス、ユサ、井、■	現存	
72	小杉邸	専用住宅	新築	25	1976/9		W	2階	384.27	93.12	128.95	埼玉県浦和市	mon、小、イ、ユサ、井上	現存	
73	塚邸 (増築)	専用住宅	増築	6	1976/9		W	1階				埼玉県与野市		取壊	
74	京極邸	専用住宅	新築	41	1978/11- 1979/10		RC+W	2階+地下1階	238.73	84.58	218.16	神奈川県鎌倉市	Sh、スズキ、井上、金子賢三	現存	
75	山本邸	専用住宅	新築	50	1979/3		RC	2階+1階	271.37	139.2	252.32	神奈川県川崎市	田中、小、Sh、スズキ、井上	取壊	
76	藤野邸 (現田中正造記念館)	専用住宅	新築	49	1979/8- 1979/11		W+S	2階	682.47	160.36	157.25	千葉県館林市	Y8、中原暢子、鈴木、金子賢三、伊ヶ崎	現存	
77	大塚邸 (増改築)	専用住宅	増改築	21	1979/8		W	2階	174.74	改築66.97 増築10.15 既存13.03 計90.15	改築64.57 増築10.15 既存41.69 計114.41	東京都小金井市	金子賢三	現存	
78	高森邸 (増改築)	専用住宅	増改築	13	1980/8		W	1階	141.12	改築前76.61 改築後77.40	12.43	東京都豊島区	白井克典、金子賢三	現存	
79	西川別邸 (千葉の家) /NI氏別邸	別荘	新築	31	1980/10- 1981/5		RC+W	2階+地下1階	236.34	52.91	136.8	千葉県富津市	白、中原暢子、白井克典、スズキ、井上、片岡	現存	『中原暢子の木造住宅設計図集』1999/『新感覚のセカンドハウス』1990.5 (講談社)
80	熊沢邸 (増改築) 【053熊沢邸と同居宅】 柿生の家	農家住宅	増改築	31	1980/10- 1984/2		S+W+RC	3階	236.34	52.91	136.8	神奈川県川崎市	白井克典、中原暢子、淵、スズキ、井上、金子賢三	取壊	『未来への女性建築家のパイオニアの肖像』2013.3 (UIPA JAPON)
81	佐野邸	専用住宅	新築	61	1981/6		W	2階+地下1階	429.69	189.31	336.09	東京都文京区	中原暢子、白井克典、本	現存	
82	斎藤邸 (Kさんの家・斎藤邸)	併用住宅	新築	54	1981/11		W+S	3階+小1層裏	92.35	63.16	156.15	東京都荒川区	中原暢子、白井克典、S.M.■、no、松原、ne、カタオカ	現存	『食べる空間・つくる空間』1984/『Sophia』1986.6

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
83	鈴木邸2	専用住宅	新築	28	1982/6		W+S	2階+小屋裏	123.14	68.94	129.7	東京都目黒区		現存	
84	井原邸 No.1 (増改築)	専用住宅	増改築	9	1982/7		W	1階			改造16.344増築9.07計25.41	埼玉県与野市		現存	
85	井原邸 No.2 (増改築)	専用住宅	増改築	23	1982/7-1982/10		W	2階	407.85	138.53	改造8.284増築78.755計87.039	埼玉県与野市	児玉智、カタオカ	現存	
86	前田邸 (増改築)	専用住宅	増改築	16	1982/12		RC	2階	312.27	計71.76	計128.26	神奈川県川崎市	児玉智	現存	
87	前田邸 (増改築)	専用住宅	増改築	16	1982/12		RC+W	2階	312.27	既存46.51増改築25.25計71.76	計93.29	神奈川県川崎市	児玉智	現存	
88	田邊邸	専用住宅	新築	41	1984/2-1984/5		W+RC	地下1階地上2階	316.33	123.31	190.38	神奈川県横浜市	nos、光、川井満、カタオカ	現存	
89	山崎峻邸 (増改築)	専用住宅	増改築	11	1984/4		S+W	2階		既存44.29増築27.88計72.17	計33.4	埼玉県浦和市		取壊	
90	千代田養神堂	併用住宅	新築	35	1984/11		W	2階	965.77	116.42	259.37	静岡県伊東市	中原暢子、ys、カタオカ	取壊	
91	中原自邸 (茶室のある家/自邸/補和の家)	専用住宅	新築	44	1985/2-1985/7	1985/8-1986/4	W+S	2階	390	135.57	175.8	埼玉県さいたま市	中原暢子	取壊	『中原暢子の木造住宅設計図集』1997/『新建築 (住宅特集)』1986.10/『Sophia』1986.6/『未来への女性建築家のバイオフィア』2013.3 (UIPA-JAPON)
92	中原邸	専用住宅	新築	26	1985/9		W	2階	288.68	132.58	148.42	東京都武蔵野市	金子賢三、中原暢子、鈴木	取壊	
93	石垣邸	専用住宅	新築	16	1986/4-1986/6		W+S	2階	518.98	既存163.38申請70.21計233.59	計295.09申請119.68計414.77	神奈川県横浜市	中原暢子、金子賢三	現存	
94	森邸	専用住宅	新築	26	1987/2		W	2階	168.88	93.4	156.87	東京都杉並区	金子賢三、吉、鈴木	現存	
95	山田邸	専用住宅	新築	31	1987	1987	W	2階	163.68	81.45	160.55	東京都大田区	大久保、金子賢三	現存	
96	大間別邸	別荘	新築	7	1998/2-1998/5		RC+W	地階1階地上1階+ロフト+階段	240.56	44.5	68.8	静岡県伊東市		現存	
97	村上邸	専用住宅	新築	23	1988/9-1988/10		W	2階	163.73	76.1	149.66	東京都大田区	小川 K、カタオカ	現存	
98	戸部邸	併用住宅	新築	31	1989/10-1989/8		W	2階	299.83	147.89	279.92	神奈川県横浜市	学 (山本学)、ウエタ、mo	現存	
99	木所邸	専用住宅	新築	25	1988		RC (地階+1階) + FSL + W (1階壁以上)	地階1階+地上1階	346.03	81.34	126.88	神奈川県川崎市	ウエタ	取壊	
100	寺内邸	専用住宅	新築	30	1988以前		W+S	2階	286	81.03	116.44	埼玉県川口市	Non	不明	

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
101	増田邸	専用住宅	新築	49	1989/10-1989/11		W	3階	368.83	104.39	既存55.359増築住居部分132.068増築部分その他17.6964	東京都三鷹市	y.m. 山本、大島康治、カタオカ	現存	
102	大野邸茶室	茶室	新築	36	1990/9		W	2階	958.7	既存224.61増築31.04計255.65	埼玉県さいたま市	大島康治、y.m.、カタオカ	現存		
103	鈴木邸 (改築)	専用住宅	改築	16	1990/12		W	2階	118.4	50.59	木造89.542バ、ルコニー6.625	東京都練馬区	カタオカ	取壊	
104	田沼邸 (増改築)	専用住宅	増改築	23	1991/3-1991/7		W	2階	274.65	116.02	167.84	東京都武蔵野市	カタオカ	現存	
105	戸田邸 (増築)	専用住宅	増築	33	1992/5-1992/11		RC	2階 (既存) + 1階	403.34	増築68.23 既存59.49 計127.72	156.53 その他72.43	静岡県熱海市	KAN、カタオカ	現存	
106	山本邸 (改築)	専用住宅	改築	21	1993/12-1994/2		RC	地下1階 地上1階			158.25	神奈川県川崎市	カタオカ	現存	
107	山田邸 (改築・企画)	専用住宅	改築	21	1994/7		W	1階			増築98.63	群馬県桐生市		—	
108	大池邸 (増改築)	併用住宅	増改築	37	1997/2-1997/12		RC+W+S	2階	676	287.95	改築42.61 計141.24	愛知県江南市	Ski、Shi、カタオカ	現存	
109	今村邸	専用住宅	新築	16	不明		W	2階	126.23	49.5	75	東京都小金井市		現存	
110	荻野邸	専用住宅	新築	16	不明		W	2階	46.17		76.66	東京都世田谷区		取壊	
111	近藤邸 (改築)	専用住宅	改築	9	不明		W (CB+W)	1階	180.55	改築45.74 既存29.97 計75.71	改築39.33 既存55.89 計95.22	東京都杉並区		取壊	
112	川田邸	専用住宅	新築	28	不明		W+S	2階	238	82.26	109.08	東京都調布市		取壊	
113	黒田邸	専用住宅	新築	28	不明		RC+W	2階+小屋裏	267.52	新築77.21 既存16.20 計93.41	新築163.35 存16.2計179.55	埼玉県浦和市		取壊	
114	宇佐見邸 (増築)	専用住宅	増築	17	不明		W+S	2階	236.35	既存30.64 増築52.79 計83.43	118.21	東京都練馬区		取壊	
115	小野邸 (増築)	専用住宅	増築	16	不明		W	2階	139.66		増築52.47 改築4.57 計57.04	東京都国分寺市		小野邸は存在。改築か？	
116	村田邸	専用住宅	新築	8	不明		S	2階	不明	不明		東京都世田谷区	中原	不明	
117	溝田邸	専用住宅	新築	39	不明		RC+W	2階	455.11	146.86	204.28	東京都中野区	あ、こた、ハ	取壊	
118	山崎邸	専用住宅	新築	13	不明		W	2階	232.08	63.18	59.94	神奈川県横浜須賀市		取壊	
119	橋本邸	専用住宅	新築	5	不明		W	2階	379.5	44.55	81	埼玉県浦和市		取壊	

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
120	橋本邸	専用住宅	新築	13	不明		W	1階	191.15	62.25	61.21	埼玉県浦和市	あ	取壊	
121	今村邸	専用住宅	新築	27	不明		W	2階	278.94	92.11	136.84	埼玉県浦和市	小、イ	取壊	
122	渡辺邸	専用住宅	新築	13	不明		W	中2階	36.03	21.92	61.43	東京都文京区		現存	
123	糸邸	専用住宅	新築	35	不明		W	2階	287.77	147.69	257.31	東京都中野区	あ、k、中原暢子	取壊	
124	竹内邸NO2	専用住宅	新築	31	不明		W	2階	288	108.27	123.8	神奈川県横浜		取壊	
125	野地邸 (増改築)	専用住宅	増改築	12	不明		W+S	2階	162	改築8.68 増築18.08 計26.76	55.02	埼玉県大宮市		取壊	
126	秋永賢商店社員住宅	専用住宅	新築	15	不明		W+RC	2階	490.61	83.75	82.43	埼玉県川口市	中原暢子	取壊	
127	田中邸	専用住宅	新築	11	不明		W+S	2階	316.75	58.5	99.94	埼玉県浦和市	中原暢子	取壊	
128	前田邸 (増築)	専用住宅	増築	25	不明		W	2階	321.3		増築98.6 既存128.4	神奈川県川崎市	中川	現存	
129	浅野邸 (増築) ※水回り・縁側	専用住宅	増築	5	不明		W	1階				神奈川県横浜		現存	
130	浅野邸 (増築) ※玄関・玄関ホール・洗面所・縁側	専用住宅	増築	15	不明		S+W	2階			増築58.15	神奈川県横浜		現存	
131	伊藤邸	専用住宅	新築	13	不明		CB+W	2階	95.32	62.51	73.01	埼玉県浦和市		現存	
132	康楽ビル本社	併用住宅	新築	25	不明		RC+W	2階	273.17	102.82	147.59	東京都武蔵野市	中原暢子	取壊	
133	小杉邸	専用住宅	新築	8	不明		W	1階	112.8	46.35	46.35	埼玉県浦和市		取壊	
134	昔間邸 (増築)	専用住宅	増築	5	不明		W	2階				東京都練馬区		不明	
135	高柳邸	専用住宅	新築	28	不明		RC (スラブ・梁) +W+S	2階	283.3	90.9	149.41	埼玉県川口市		取壊	
136	堤邸2	専用住宅	新築	22	1978		W	2階				埼玉県入間市		現存	
137	土肥邸 (改築)	専用住宅	改築	2	不明		S (一部壁・一部1FSL) +W	2階	274.63	新築7,212 既存90,54 計97,752	新築106,404 既存73,26 計179,664	埼玉県浦和市	中原暢子	取壊	
138	藤田邸 (増築)	併用住宅	増築	5	不明		S	2階	354.87	申請+既存 83.49 計199.17	申請86.25 既存住宅 57.24 既存店舗 115.68 計259.17	埼玉県川口市		取壊	
139	増田邸 (増築)	専用住宅	増築	11	1978頃		W+RC (1SL) +S (梁)	2階	208.56	申請27.04 既存75.20 計102.21	既存114.96 改築13.58 増築16.65 計145.65	東京都文京区	Kei、あ	現存	
140	吉永別邸	別荘	新築	10	不明		W	2階	413.49	30.89	61.79	静岡県伊東市		取壊	
141	Kビル (木村ビル)	併用住宅	新築	—	不明	1972/6-1973/4	RC	6階+屋階	297.57	202	1077.21	埼玉県さいたま市	加々美明	取壊	『建築文化』 1974.3

付録1 中原暢子設計原図リスト

No.	作品名	用途	新築/増改築等	図面枚数	設計期間	施工期間	構造	階数	敷地面積 (㎡)	建築面積 (㎡)	延べ床面積 (㎡)	建設地	図面作成者	現存/取壊	掲載誌
142	会田ビル	併用住宅	新築	51	不明	1988/1/8- 1988/8/31	RC+S	3階	635.67	298.97	777.97	埼玉県浦和市	Go. Mo. 幸、金子賢三、大久保	現存	

注:

作品ごとにまとまって保管されていたトレージングペーパーの元図をPDFデータに変換したものを基にした一覧であり、すべての作品を網羅したものではありません。

竣工図ではないため、この図面の通りに建築されたかの確認はできていない。

設計された年月順に掲載し、設計年月日が不明なものは、最後にまとめて記載している。

図面制作者欄は、図面ラベルに記載のサインを表記。サインより実名が判る場合のみ、実名を表記し、読み取れない場合は■と表記。

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書/雑誌/講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
1	雑誌	柳下洋一、北川允昭、中原暢子	三つの異つた生活を単純な平面にまとめる Hさんの35.91坪のすまい (住宅No.10)	44-46	別冊婦人画報 モダンリビング vol.4 すまいの設計	1952.4	婦人画報社
2	雑誌	柳下洋一、北川允昭、中原暢子	標準寸法の住宅への適用 例II：秦邸・東京碑文谷 (住宅No.10)	60-63	国際建築 第20巻第2号	1953.2	美術出版社
3	雑誌	北川允昭、中原暢子	限られた費用で住水準を高める設計 (住宅No.12)	68-69	家の設計・庭の設計 再版 (Modern living; 第5集)	1953	婦人画報社
4	雑誌	みなねぎしやすお、小泉幸夫、中原暢子	住宅No.20 コアのある17.26坪のすまい	18-25	別冊婦人画報 モダンリビング vol.8 すまいのデザイン	1954.9	婦人画報社
5	雑誌	池辺陽、みなねぎしやすお、中原暢子、小泉幸夫	住宅No.20	45-48	新建築 第29巻第11号	1954.11	新建築社
6	雑誌	みなねぎしやすお、小宮山雅夫、吉田桂二、中原暢子	新建築賞・新制作協会展建築部出品	64-67	新建築 第29巻第11号	1954.11	新建築社
7	雑誌	池辺研究室 担当：中原暢子	住宅No.28 鉄骨造による試作住宅	13-19	新建築 第30巻第11号	1955.11	新建築社
8	雑誌	中原暢子	構造計画 (住宅No.28)	19	新建築 第30巻第11号	1955.11	新建築社
9	雑誌	広瀬鍾二建築技術研究所 担当：中原暢子	公団試作1号住宅	56-59	新建築 第32巻第1号	1957.1	新建築社
10	雑誌	池辺陽研究室 (池辺陽、箱根強、佐々木宏、北川允昭、川井満、中原暢子、関文子、川島亨、境公子、池辺昌子)	2つのグループの小住宅設計白書 工業化のためのデザインへ-住居設計の新しい道- 住宅6点 (住宅No.38・39・41・43・44・45)	10-42	建築文化 第13巻第4号 (通号138)	1958.4	葺国社
11	雑誌	担当：中原暢子、佐藤恒子、国場幸一郎	SH-16	34-39	近代建築 第12巻第10号	1958.10	建設情報社
12	雑誌	中原暢子	女三人の建築設計事務所をもって	234-236	婦人画報 1958年12月号	1958.12	婦人画報社
13	雑誌	池辺陽、中原暢子	GMモジュールによるモデュラーコーポレイション	121-124	日本建築学会研究報告 第44号 昭和33年度・支部研究会 (関東支部)	1958.12	日本建築学会

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
14	雑誌	興村まこと、日下あこ、沢田泰子、下河辺千穂子、田中温子、中原暢子(林・山田・中原設計同人)、久松由利子、吉田和子、陳来治 編集：大江宏、芦原義信	(座談会) 婦人建築家の役割	15-21	建築雑誌 第74巻第866号	1959.1	日本建築学会
15	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	働きやすい台所	86-90	栄養と料理 第25巻第6号	1959.6	女子栄養大学出版部
16	雑誌	中原暢子(建築家)、田中温子、為永綾子、上田フサ	特集／働きやすい台所とは(グラフィヤページより) (座談会) 公団アパートの台所を中心に	114-121	栄養と料理 第25巻第9号	1959.9	女子栄養大学出版部
17	雑誌	浜口ミホ、中原暢子(めんどうりグループ)、荻野富雄、田島良平、栗原忠、主婦の友売店相談室	特集：台所をこうして便利に 手軽な設備と改造の実験集	36-54	主婦の友 第43巻第10号	1959.10	主婦の友社
18	雑誌	中原暢子	子どもとすまい コーナー・デスク	54-55	子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌 第44巻	1959.11	日本子どもを守る会編(福音館書店)
19	雑誌	中原暢子(建築家)	特集／ボナーナスで買物読本 ⑦台所改造をしたので食器戸棚を買いたいのですが	122-125	栄養と料理 第25巻第12号	1959.12	女子栄養大学出版部
20	雑誌	中原暢子	子どもとすまい 子どもの机・椅子	54-55	子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌 第45巻	1959.12	日本子どもを守る会編(福音館書店)
21	雑誌	中原暢子(建築家)	子どもとすまい 子どもべやの色	54-55	子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌 第46号	1960.1	日本子どもを守る会編(福音館書店)
22	雑誌	中原暢子	子どもとすまい 子ども遊び場と道具	54-55	子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌 第47号	1960.2	日本子どもを守る会編(福音館書店)
23	雑誌	中原暢子	子どもとすまい 寝室について	54-55	子どものしあわせ：母と教師を結ぶ雑誌 第48号	1960.3	日本子どもを守る会編(福音館書店)
24	図書	中原暢子	子ども室をつくる	65	子ども室と遊び場	1961.7	主婦の友社
25	雑誌	設計：中原暢子(林・山田・中原設計同人)	HPシエルと伝統の融合／天台宗長覚院	67-72	建築文化 第17巻第192号	1962.10	彰国社
26	雑誌	中原暢子	<美しき室内>茶室的日本間(吉永邸・通り庭のある家)	41	室内 第100号(通号187)	1963.4	工作社
27	雑誌	設計：中原暢子、担当：上山彰栄	通り庭のある家(吉永邸)	43-47	室内 第100号(通号187)	1963.4	工作社

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
28	雑誌	広瀬謙二（スタッフ：鈴木伸一、佐藤徳重、塩野正宏、佐藤恒子、服部重信、山本啓介、国場幸一郎、中原暢子、溝口長男、小林千恵子、土志田泰、（本吉康郎、若月啓功））	1956/1957 SH-12,14,15,16,20 碧水荘他 L,G,S	64-65	建築 第35号	1963.8	中外出版
29	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	住まい サービスヤード／物置と雨の日の物干し場	91	週刊サンケイ 第14巻第36号(通号742)	1965.8	扶桑社
30	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	住まい 主人のコーナー／書庫つき書斎をつくろう	93	週刊サンケイ 第14巻第38号(通号744)	1965.9	扶桑社
31	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	住まい タタミの寝室／マットレスの置き場所	91	週刊サンケイ 第14巻第39号(通号745)	1965.9	扶桑社
32	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	住まい 車庫を作る心得／行動半径をよく計算して	89	週刊サンケイ 第14巻第43号(通号749)	1965.10	扶桑社
33	雑誌	中原暢子；林；山田	住まい 廊下にナンドを／狭い部屋のための収納法	89	週刊サンケイ 第14巻第45号(通号751)	1965.11	扶桑社
34	雑誌	中原暢子	<美しき室内>仕事のできる和室（近藤邸）	25	室内 第131号（通号221）	1965.11	工作社
35	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	住宅建築の焦点② 見積と契約（田口邸）	27-33	室内 第136号（通号226）	1966.4	工作社
36	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	広い空間をデザインする つくりつけ家具のある書斎 K邸（近藤邸（増築））	28	暮しの知恵 第6巻第8号 [通号136]	1966.8	学習研究社
37	雑誌	中原暢子（林・山田・中原設計同人）	広い空間をデザインする 空間の広がりを見せた食堂 H邸（平田邸）	30	暮しの知恵 第6巻第8号 [通号136]	1966.8	学習研究社
38	雑誌	中原暢子	家を建てる⑨外まわりと完成引き渡し（田口邸）	12-13	みのり 第45号	1966.8	農林中央金庫資金部
39	雑誌	設計：中原暢子（林・山田・中原設計同人） 担当：野呂恒二	木造でシェェルターをつくる／木村別邸・岡部邸	103-114	建築文化 第21巻第140号	1966.10	朝国社

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
40	図書	農協建築研究会(大高正人、山名元、岡田恭平、山田昭、鬼頭梓、山田初江、林雅子、中原暢子、田中恒久、宮内嘉久、原田敬、立松久昌)	(住まいの要点)	(41-80)	農村の住まい	1967.9	農林中央金庫
41	雑誌	設計：中原暢子(林・山田・中原設計同人)、担当：竹内裕	住宅設計の与条件を考える 扇形の家・Ta邸(高橋邸) [設計・中原暢子] (住宅設計(特集))	80-84	建築文化 第24巻第274号	1968.8	彰国社
42	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	住宅設計における与条件について(高橋邸(扇形の家・Ta邸))	84	建築文化 第24巻第274号	1968.8	彰国社
43	雑誌	設計：中原暢子(林・山田・中原設計同人)	特集/これからの農村住宅 大屋根の家(横田邸)	10-14	室内 第165号(通号257)	1968.9	工作社
44	雑誌	設計：中原暢子(林・山田・中原設計同人)	特集/これからの農村住宅 鉄筋コンクリートの家(仲林邸(増築))	20-25	室内 第165号(通号257)	1968.9	工作社
45	雑誌	設計：中原暢子(林・山田・中原設計同人)	特集/これからの農村住宅 若夫婦の家(立川邸1)	26-30	室内 第165号(通号257)	1968.9	工作社
46	雑誌	中原暢子(建築家)	特集/これからの農村住宅 農村住宅の問題点	33-41	室内 第165号(通号257)	1968.9	工作社
47	雑誌	設計：中原暢子	特集/これからの農村住宅 新しい間取り集 雁行した家(坂本邸)	51	室内 第165号(通号257)	1968.9	工作社
48	図書	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	岡部邸(真壁構造・合せ梁・極母屋)	20-21	木造の詳細 1構造編	1968	彰国社
49	雑誌	中原暢子(農協建築研究会、林・山田・中原設計同人)	近郊農村住宅について 神奈川県川崎市柿生地区の住いしき調査及び住宅相談、住宅設計監理を通して	15-17	農村建築 第62号 1968	1969.7	農村建築研究会
50	雑誌	中原暢子(建築家)	特集/住宅の収納部分 どんな収納部分がどのくらい必要か、	33-37	室内 第171号(通号263)	1969.3	工作社
51	雑誌	中原暢子(建築家)	特集/建具金物・家具金物 建具金物の上手な使い方	79-83	室内 第189号(通号238)	1970.9	工作社
52	雑誌	清家清、中原暢子、増沢洵	座談会 住宅を考える(特集 住宅を考える・住宅9題)	38-42	近代建築 第27巻第9号	1973.9	近代建築社
53	雑誌	設計/中原暢子(林・山田・中原設計同人)	中原暢子住宅3題—Kビル・Y氏邸(四柳邸)・M氏別邸(前田別邸)	122	建築文化 第29巻第329号	1974.3	彰国社
54	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	H(長谷川)邸	55-59	住宅建築 第4号	1976.6	建築資料研究社
55	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	建主の個性を基礎に(H(長谷川)邸)	60	住宅建築 第4号	1976.6	建築資料研究社
56	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	K(木村)別邸	62-67	住宅建築 第4号	1976.6	建築資料研究社

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
57	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	T(高橋・扇形の家)邸	68-71	住宅建築 第4号	1976.6	建築資料研究社
58	雑誌	中原暢子(建築家)	砂の怪物(タリアセン・ウエスト・アリゾナ州「設計 フランク・ロイド・ライト」(NICE SPACE))	147-148	SD: Space design: スペースデザイン 第143号	1976.7	鹿島出版会
59	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	住宅についてふたたび考える	103	新建築 第52巻第1号	1977.1	新建築社
60	雑誌	中原暢子	先生方の想い出(私の受けた建築教育・Ⅲ)	46-47	建築雑誌 第92巻第1128号	1977.10	日本建築学会
61	雑誌	中原暢子(建築家)	緻密に計算されたオアシス(王の広場/イスファハン17世紀(NICE SPACE))	85-86	SD: Space design: スペースデザイン 第171号	1978.12	鹿島出版会
62	雑誌	中原暢子(建築設計家)	家庭科「住居」の指導について	22-25	高校教育 第15巻第3号	1981.2	学事出版
63	講演	岩田糸子(ガラス工芸家)、 中原暢子			JIAトーク	1983	社団法人日本建築家協会関東甲信越支部/JIAトーク実行委員会
64	図書	中原暢子	茶室と水屋	92-99	食べる空間・つくる空間: 18人の建築家が語る住まいへの提案	1984.11	彰国社
65	雑誌	林雅子、山田初江、中原暢子	女性建築家だから建てられた家(インタビュー)	196-197	Sophia 第3巻第6号	1986.6	講談社
66	雑誌	中原暢子	趣味の茶事が、退職後、生活の中心に 住まいがそれを可能にした 東京・斎藤邸	198-200	Sophia 第3巻第6号	1986.6	講談社
67	雑誌	中原暢子	働いている今の自分と、今後の老後対策の両方を満足させられる家を 中原暢子さん設計の自邸	201	Sophia 第3巻第6号	1986.6	講談社
68	雑誌	中原暢子	茶室のある家	40-47	新建築(住宅特集) 3(Winter 1986)	1986.10	新建築社
69	雑誌	中原暢子	建築一私との出会い81	13	建築文化 第41巻第480号	1986.10	彰国社
70	雑誌	林雅子×山田初江×中原暢子	もう一つの戦後史—ポドコに芽吹いた潜勢力—	13-47	風声 一つの葉21	1986.10	宮内嘉久編集事務所 編 INAX出版
71	雑誌	中原暢子	茶室空間の歴史的考察—現代住宅建築の空間構成—(1)	53-59	東京家政学院大学紀要 第26号	1986	東京家政学院大学
72	雑誌	中原暢子	茶室: 空間構成美を展開図から分析考察する—現代住宅建築の空間構成(2)—	63-71	東京家政学院大学紀要 第27号	1987	東京家政学院大学
73	図書	吉永フミ(世話人: 中原・井上・永山・鈴木・井口)		全141	虹の立つまで	1988.4	吉永フミ先生御退職記念会事務局 東京家政学院大学

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
74	図書	中原暢子	解説	1-7	家政学生活学研究基礎文献集『応用家事精義』大江スミ子著 第1巻緒論住居	1988.6	大空社(東京宝文館(大正5年刊の復刻))
75	雑誌	中原暢子	現代住宅建築の空間構成(3) 極小空間をつくりくまう>その心理的考察を含めて(自邸)	83-94	東京家政学院大学紀要 第28号	1988	東京家政学院大学
76	雑誌	村田あが、中原暢子、矢藤仁美	江戸時代中、後期の住まいについての研究—家相の文献を通して—(第一報)	E19	日本家政学会第41回大会研究発表要旨集	1989.5	社団法人日本家政学会
77	雑誌	矢藤仁美、中原暢子、村田あが	江戸時代中、後期の住まいについての研究—家相の文献を通して—(第二報)	E20	日本家政学会第41回大会研究発表要旨集	1989.5	社団法人日本家政学会
78	雑誌	中原暢子、村田あが、矢藤仁美	江戸時代中、後期の住まいについての研究—家相の文献を通して—(第三報)	E21	日本家政学会第41回大会研究発表要旨集	1989.5	社団法人日本家政学会
79	雑誌	村田あが、中原暢子	江戸時代中、後期の住まいについての研究(第1報) 日本居家秘用について『三事略考』	17-48	東京家政学院大学紀要 第29号	1989	東京家政学院大学
80	雑誌	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	つかず離れずで30年を超えた同居活動	79	日経アーキテクチュア 第366巻	1990.4	日経Pb社
81	図書	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	雄大な海の景色が心をなごませる千葉の家(西川別邸)	24-27	新感覚のセカンドハウス	1990.5	講談社
82	図書	中原暢子(林・山田・中原設計同人)	囲炉裏のある部屋が核。茶室が近隣とのコミュニケーションの場所(木村別邸)	144	新感覚のセカンドハウス	1990.5	講談社
83	雑誌	中原暢子、村田あが	江戸時代中、後期の住まいについての研究(第3報) 日本居家秘用について(2)	31-41	東京家政学院大学紀要 第30号	1990	東京家政学院大学
84	雑誌	小宮山優香、中原暢子	茶事のための空間分析 その1—文献を主として茶室と水屋・台所の広さの分析—	E13	日本家政学会第43回大会研究発表要旨集	1991	社団法人日本家政学会
85	雑誌	中原暢子、小宮山優香	茶事のための空間分析 その2—茶事の実験を通して接客形態と方法を考察する—	E14	日本家政学会第43回大会研究発表要旨集	1991	社団法人日本家政学会
86	雑誌	中原暢子	大江スミの住まい—大江家政学と家政学院創設まで—	1-14	東京家政学院大学紀要 第31号	1991	東京家政学院大学
87	雑誌	中原暢子	茶室水屋の建築計画論的研究—茶室水屋の平面構成—	E17	日本家政学会第44回大会研究発表要旨集	1992.5	社団法人日本家政学会
88	雑誌	中原暢子	茶室・水屋の建築計画的な研究:茶事(表千家・風炉正午)の記録 一時間を軸として—	149-161	東京家政学院大学紀要 第32号	1992	東京家政学院大学
89	雑誌	中原暢子(UIFA JAPON会長)	UIFA JAPON設立のごあいさつ	1-2	UIFA JAPON NEWSLETTER No.1	1992.12	—
90	雑誌	中原暢子(UIFA JAPON会長)	国際女流建築家会議(UIFA)(キャッチボール)	182-183	住宅建築 第219号	1993.6	建築資料研究社

付録2 中原暢子著作リスト

No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
91	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	UIFA 第10回大会に参加して	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.2	1993.7	UIFA JAPON
92	雑誌	UIFA JAPON (国際女性建築家会議日本支部)	韓国からの留学生ハムさんとの対話	2	UIFA JAPON NEWSLETTER No.3	1993.11	UIFA JAPON
93	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	UIFA JAPON 名誉会長 S.d Herbez de la Tour さん見記	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.7	1994.7	UIFA JAPON
94	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	年頭のあいさつ	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.9	1995.1	UIFA JAPON
95	雑誌	中原暢子 (埼玉県)	会員からのメッセージ 阪神大震災について私の考えること・できること	3	UIFA JAPON NEWSLETTER No.10	1995.3	UIFA JAPON
96	雑誌	中原暢子	第1回パリ大会	2	UIFA JAPON NEWSLETTER No.13	1995.9	UIFA JAPON
97	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	韓日シンポジウムで感じたこと	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.14	1995.11	UIFA JAPON
98	雑誌	中原暢子	林・山田・中原設計同人の歩み	2	UIFA JAPON NEWSLETTER No.15	1996.2	UIFA JAPON
99	雑誌	中原暢子 (東京家政学院大学教授)	特集：建築とわたし「みんなに助けられて」	44-45	建築雑誌 第111巻第1386号	1996.3	日本建築学会
100	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	1996年度通常総会を迎えるに当たって	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.17	1996.3	UIFA JAPON
101	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	第12回UIFA 日本大会の開催に当たって	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.20	1996.11	UIFA JAPON
102	雑誌	中原暢子 (林・山田・中原設計同人)	波頭をとらえる1997 住宅についてふたたび考える	103	新建築 第72巻第1号	1997.1	新建築社
103	雑誌	中原暢子 (東京家政学院大学教授)	集まって住もう—高齢者の住まいを考える—	12-16	家庭科教育 第71巻第2号	1997.2	家政教育社
104	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)、小川信子	UIFA 国際女性建築家会議 第12回日本大会開催に向けて ごあいさつ	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.23	1997.5	UIFA JAPON
105	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	第5回総会を終えて	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.24	1997.7	UIFA JAPON
106	雑誌	赤松良子、中原暢子	(対談) 特集ザ・インタビュ— 第12回日本大会 名誉顧問の赤松良子先生にさく—	2-5	UIFA JAPON NEWSLETTER No.25	1997.9	UIFA JAPON
107	雑誌	松田妙子、中原暢子	(対談) 特集ザ・インタビュ— 住宅産業研修財団理事長、生涯学習開発財団 松田妙子氏—	2-3	UIFA JAPON NEWSLETTER No.28	1998.4	UIFA JAPON
108	雑誌	松川淳子、中原暢子	(対談) 特集ザ・インタビュ— UIFA JAPON 会長中原暢子氏、第12回日本実行委員長松川淳子氏	1-2	UIFA JAPON NEWSLETTER No.31	1998.8	UIFA JAPON
109	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON 会長)	UIFA' 98 日本大会を終わって	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.32	1998.11	UIFA JAPON

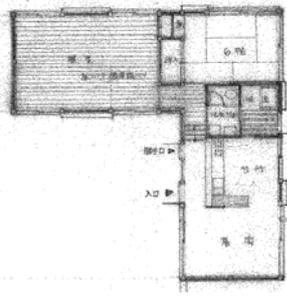
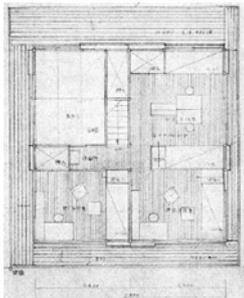
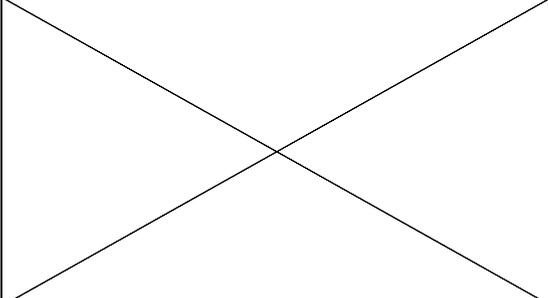
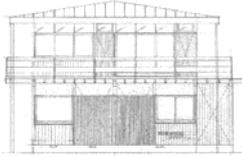
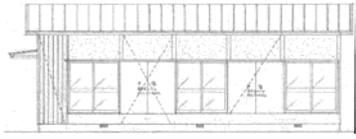
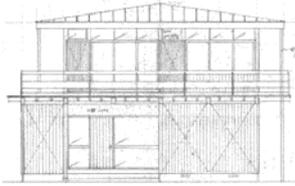
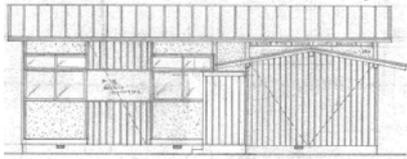
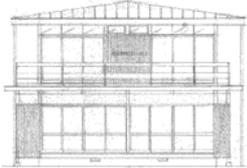
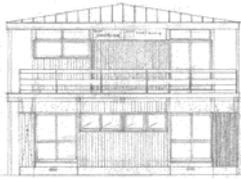
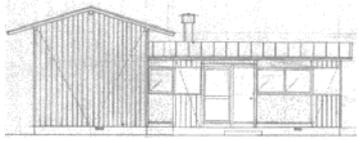
付録2 中原暢子著作リスト

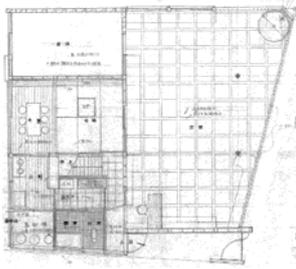
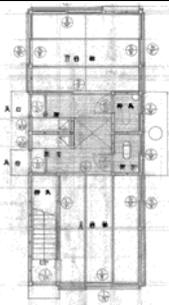
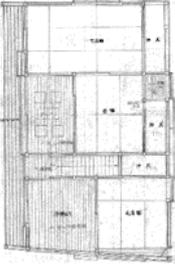
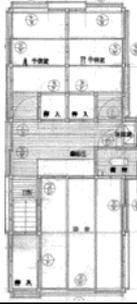
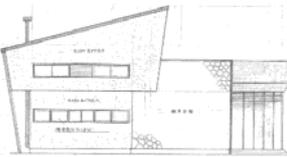
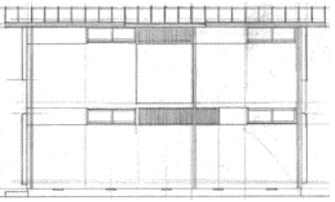
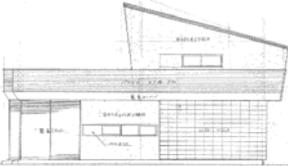
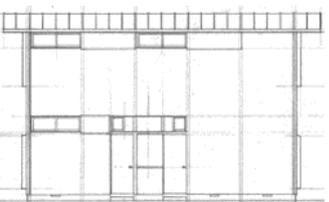
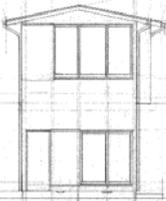
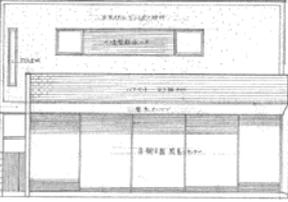
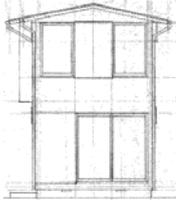
No.	図書／雑誌／講演	筆者	タイトル	頁	書籍名	出版年月	出版社
110	講演	中原暢子	木造設計図集の出版にあたって	83:46:06	中原暢子先生最終講義	1999	東京家政学院大学 政学部住居学科
111	図書	中原暢子	中原暢子の木造住宅設計図面集	全207	(退職記念出版)	1999	—
112	雑誌	中原暢子 (UIFA JAPON会 長)	希望をもって楽しく生きたい	1	UIFA JAPON NEWSLETTER No.45	2001.1	UIFA JAPON
113	図書	中原暢子 (建築家)	池辺陽 システムチックな感覚と人間的魅力	60-65	素顔の大建築家たち2—弟子の見た巨匠 の世界	2001	建築資料研究社
114	図書	佐々木宏、中原暢子、難波和 彦	(対談) 作家的建築家を志す	72-83	素顔の大建築家たち2—弟子の見た巨匠 の世界	2001	建築資料研究社
115	講演	中原暢子	講演会『林・山田・中原設計同人の44年間』— UIFA JAPON 10周年を記念して—	—	総会記念講演	2002.6	UIFA JAPON
116	雑誌	中原暢子、山田初江、司会： 松川淳子	対談 私の住まい記60年	35-39	建築士 第54巻第635号	2005.8	日本建築士会連合会
117	雑誌	中原暢子	「2007年のUIFA 私の仕事」会員たちの仕事・活 動・生活 遊んで学ぶ (茶室のある自邸)	4	UIFA JAPON NEWSLETTER No.71-72	2007.7	UIFA JAPON

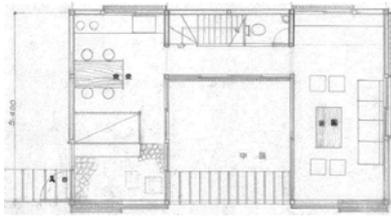
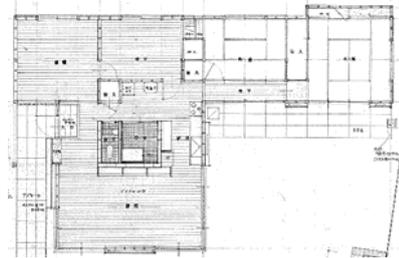
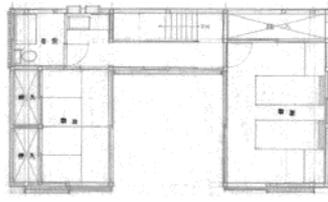
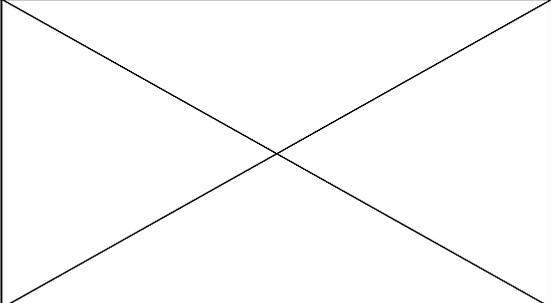
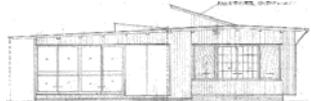
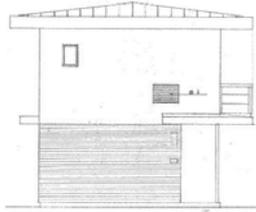
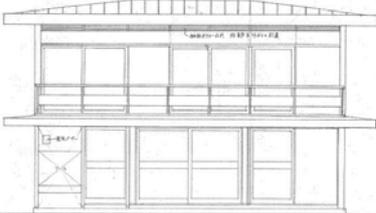
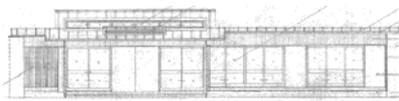
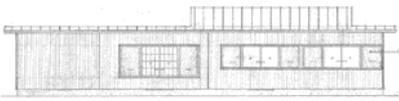
注：当時の中原の肩書について記載のある場合は、著者欄の中原の後の（ ）内に記載

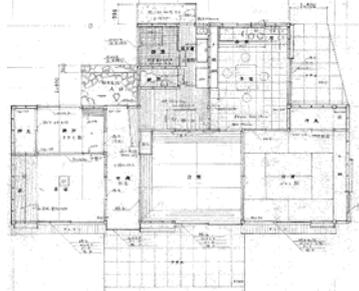
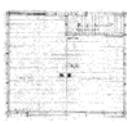
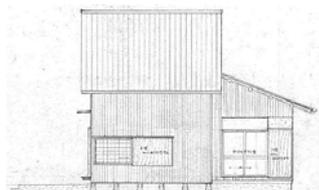
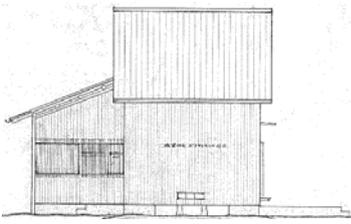
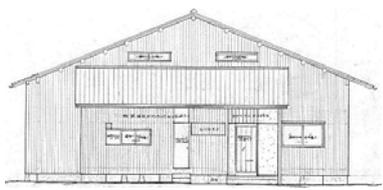
作品名が明らかになったものはタイトル欄の（ ）内に記載

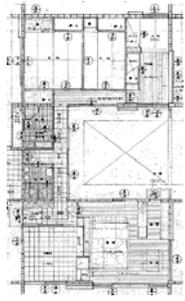
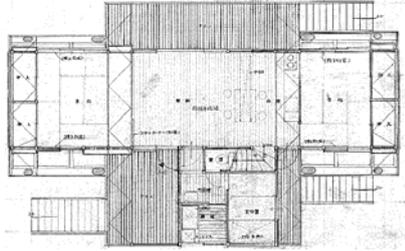
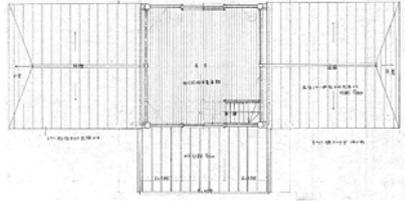
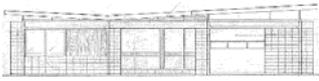
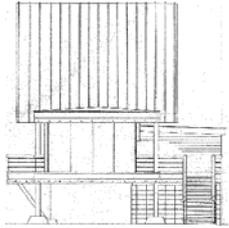
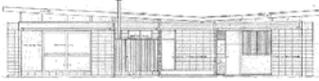
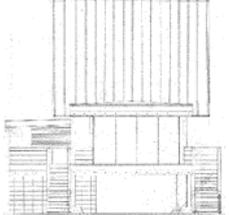
付録3 中原暢子設計新築住宅の平面図・立面図一覧

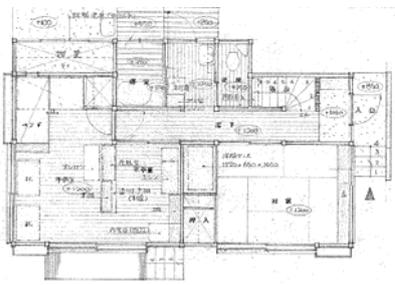
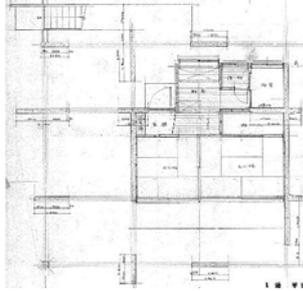
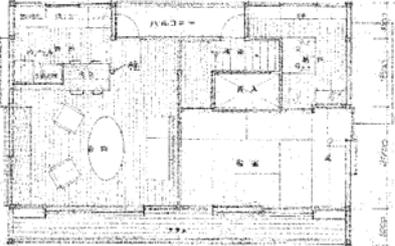
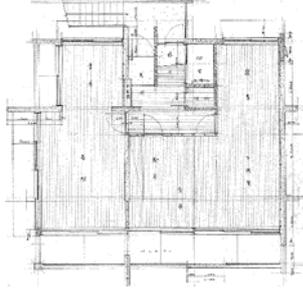
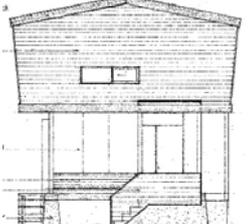
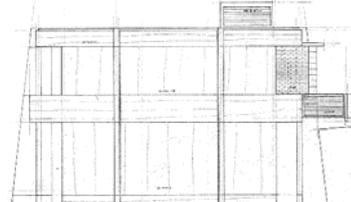
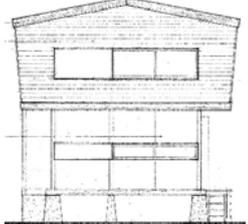
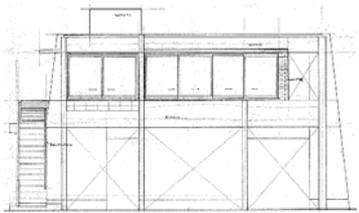
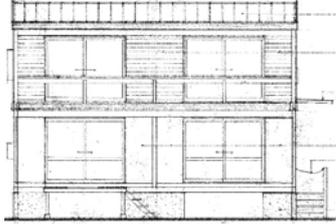
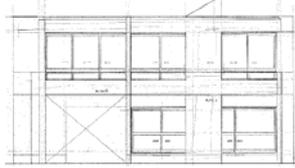
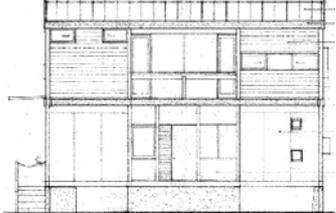
No.	1	2
作品名	吉岡邸	本橋邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

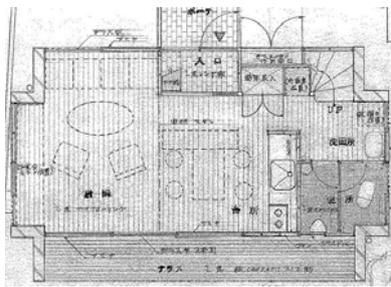
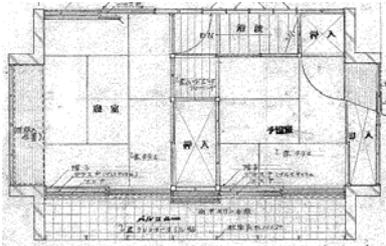
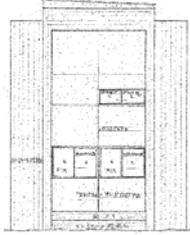
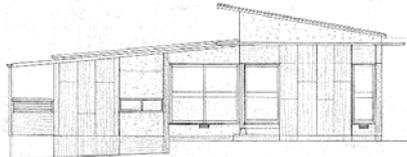
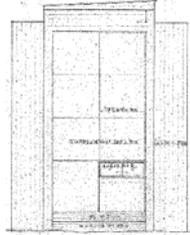
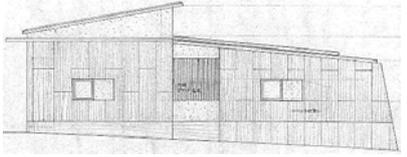
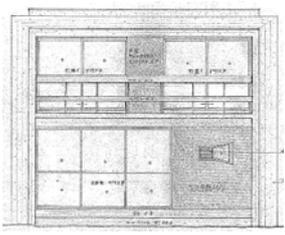
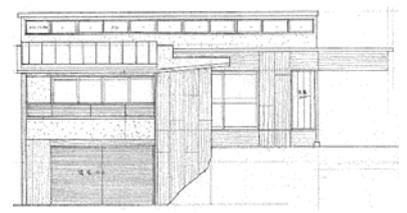
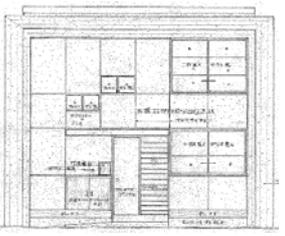
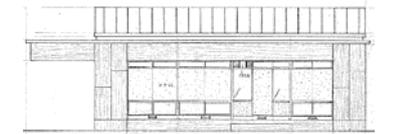
No.	3	4
作品名	矢島商店	茂木邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

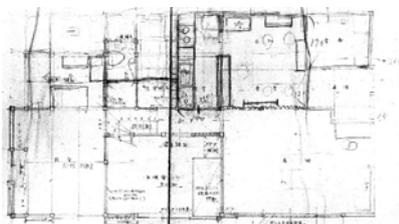
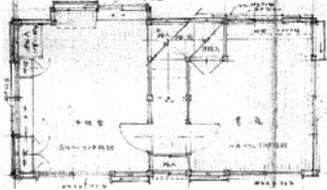
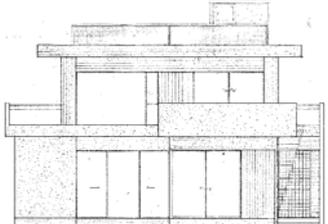
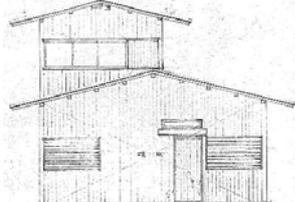
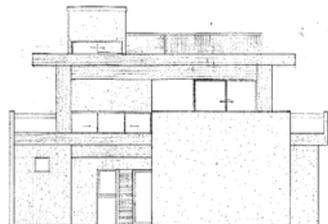
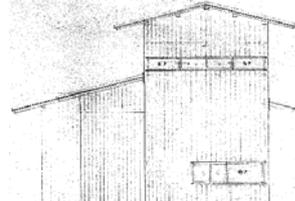
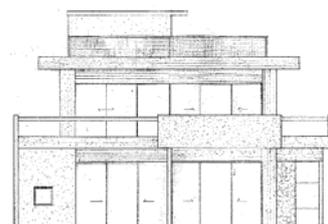
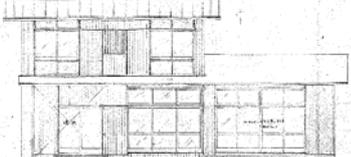
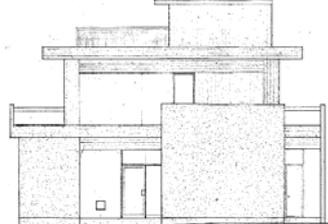
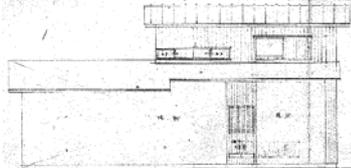
No.	5	6
作品名	榊邸	平田邸 (H邸)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

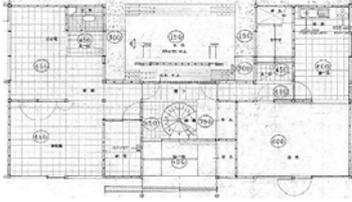
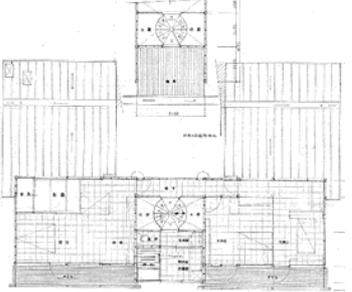
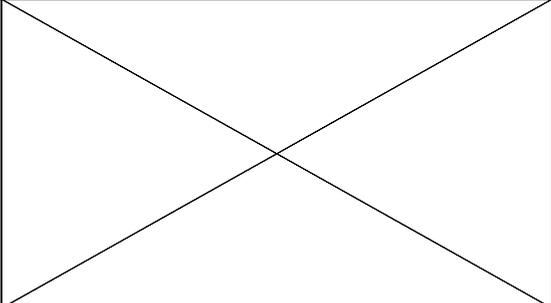
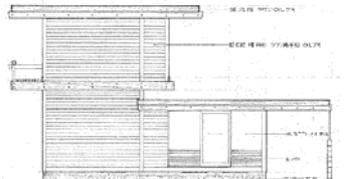
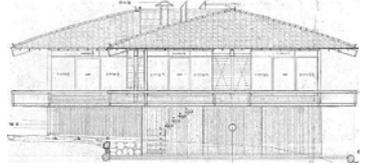
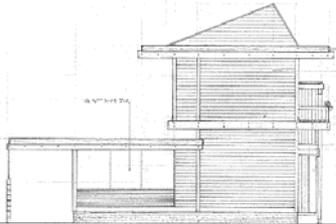
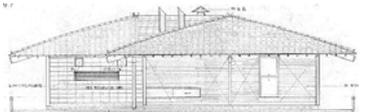
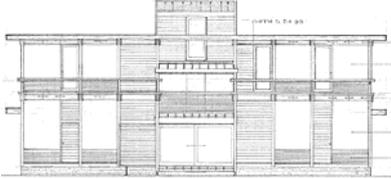
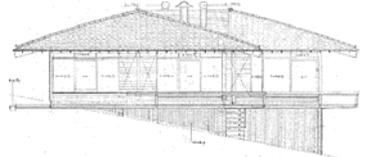
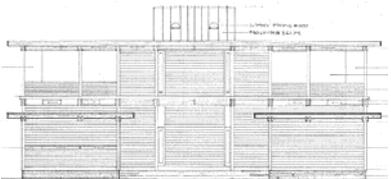
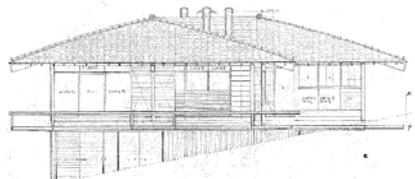
No.	7	8
作品名	芳賀邸	吉永邸（通り庭のある家）
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	展開図・仕上げ表はあるが、平面・立面・断面は不明。	

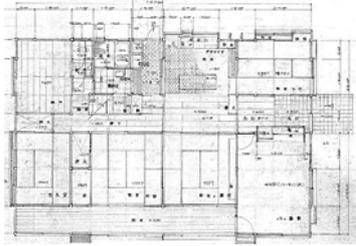
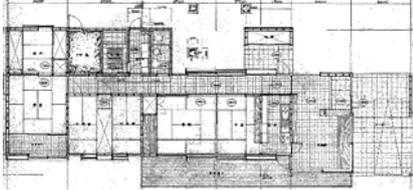
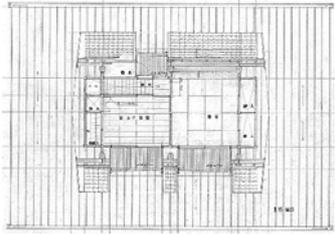
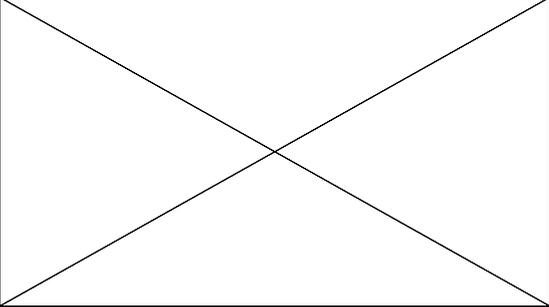
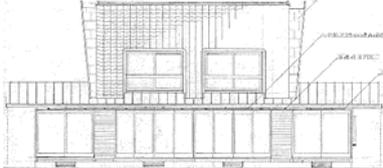
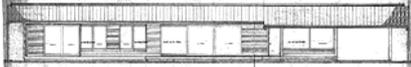
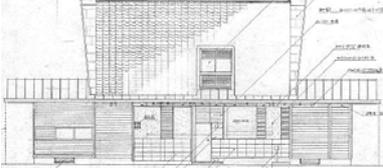
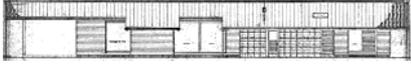
No.	9	10
作品名	長覚院庫裡	辻別邸
1階平面図		 2階平面図
2階平面図		 3階平面図
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		3階建て

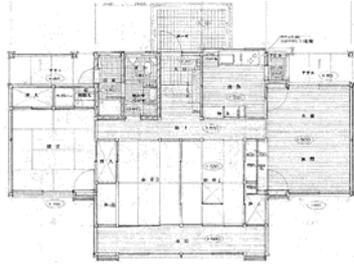
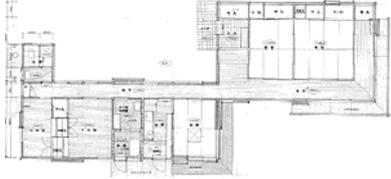
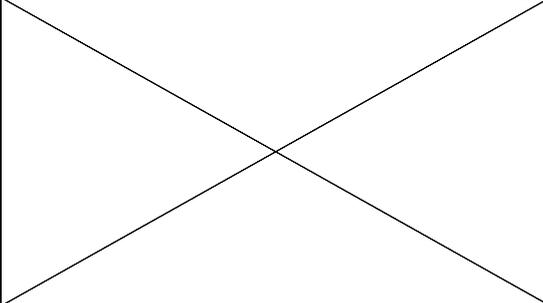
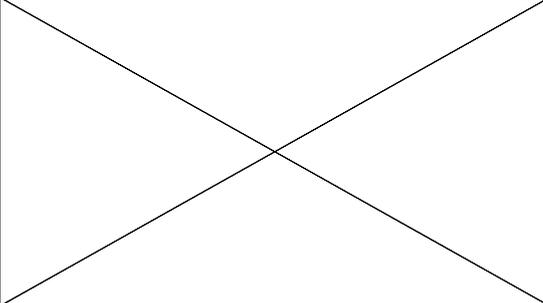
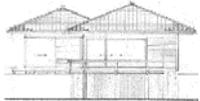
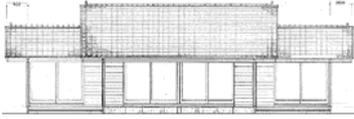
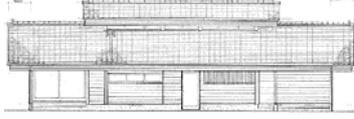
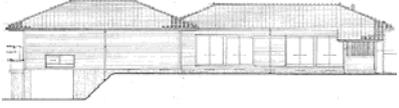
No.	11	12
作品名	田口邸1	土肥邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

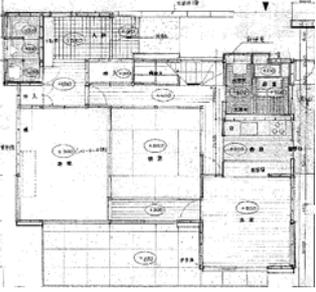
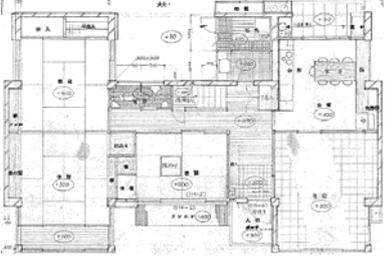
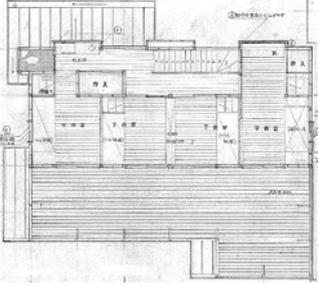
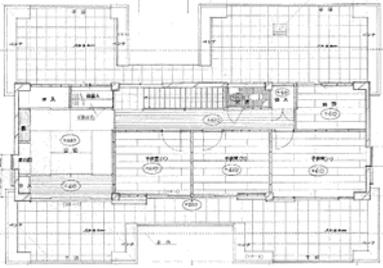
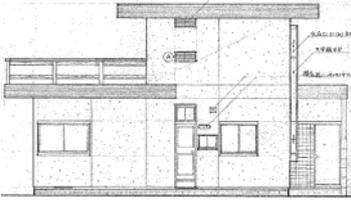
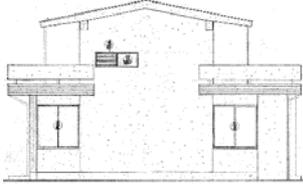
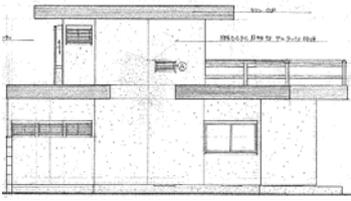
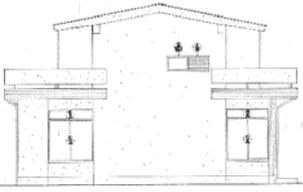
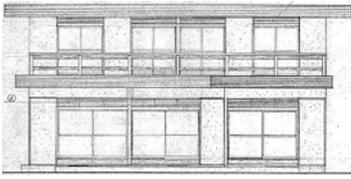
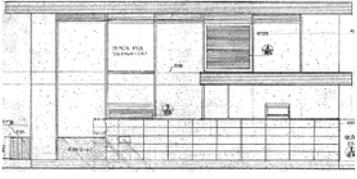
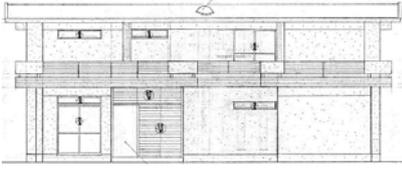
No.	13	14
作品名	増山邸	吉田邸
1階平面図		 地階平面図
2階平面図		 1階平面図
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		地階あり。

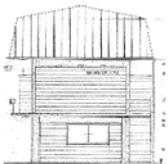
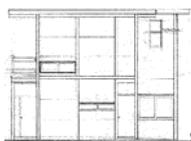
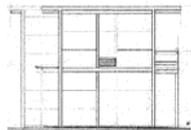
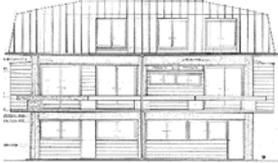
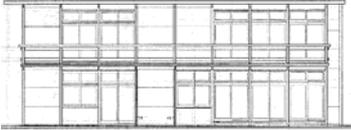
No.	15	16
作品名	岡邸	渡辺邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	ペントハウスあり。	

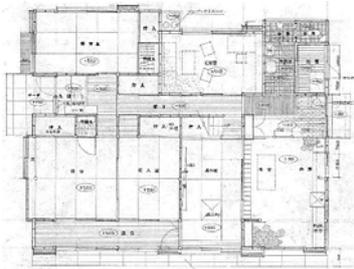
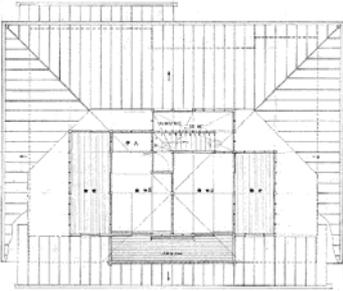
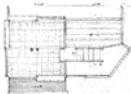
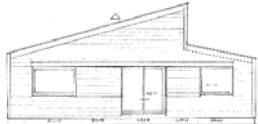
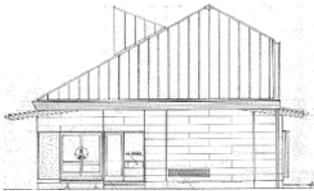
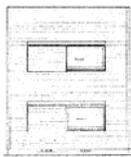
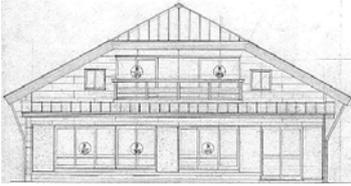
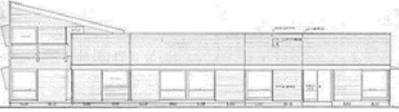
No.	17	18
作品名	岡部医院 (O氏邸/岡部邸)	木村別邸 (K氏別邸/下呂山の家)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		地階あり。

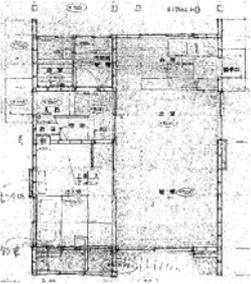
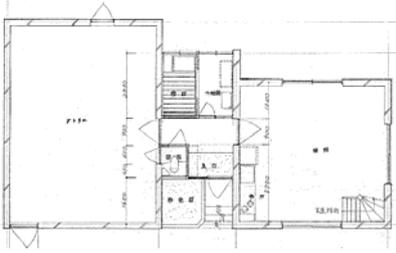
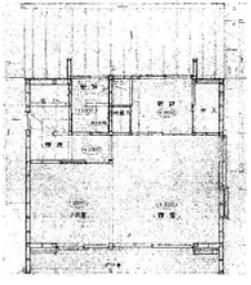
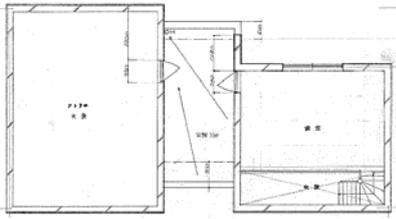
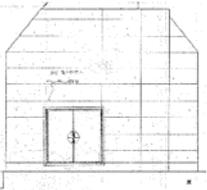
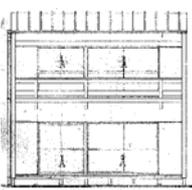
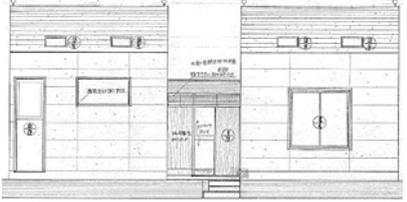
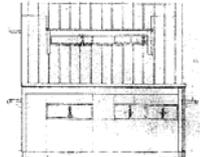
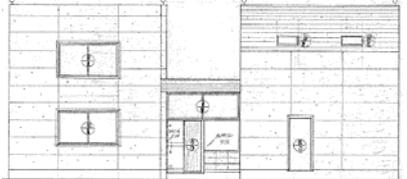
No.	19	20
作品名	飯草邸	芝崎邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

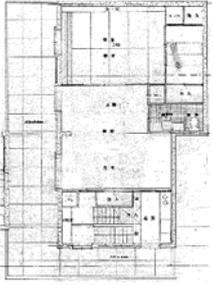
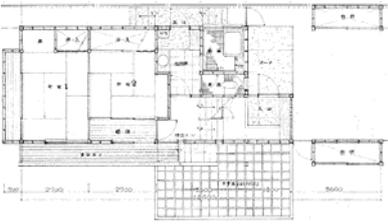
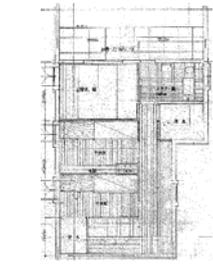
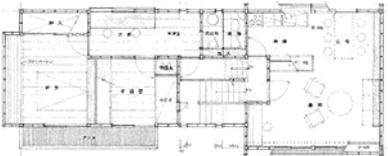
No.	21	22
作品名	立川邸1 (若夫婦の家)	坂本邸 (雁行した家)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

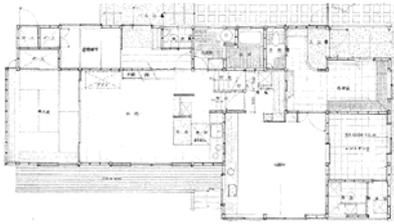
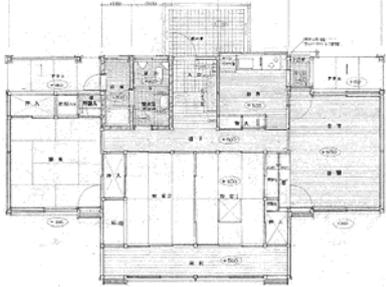
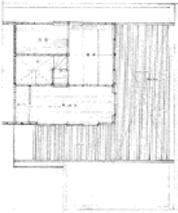
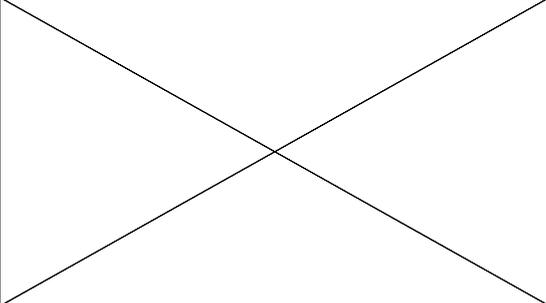
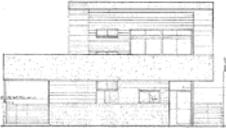
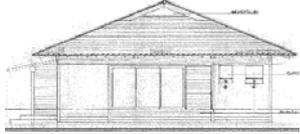
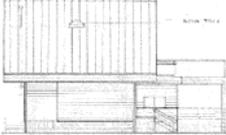
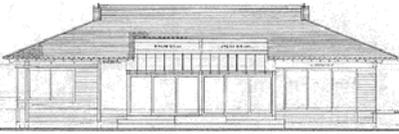
No.	23	24
作品名	秋永邸	仲林邸 (鉄筋コンクリートの家)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

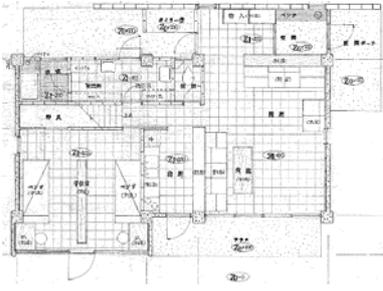
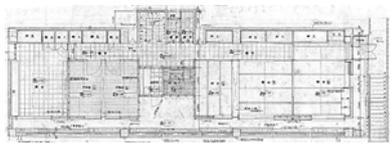
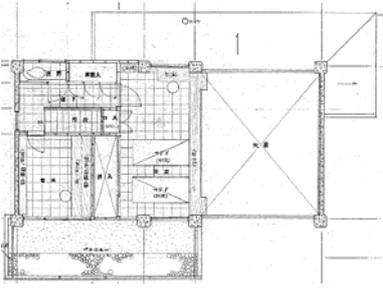
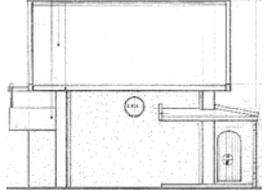
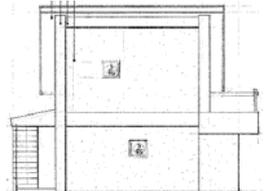
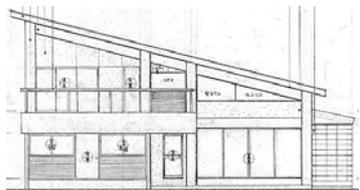
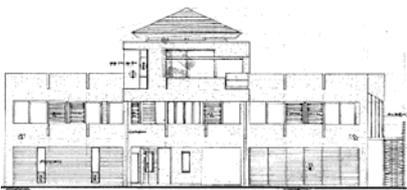
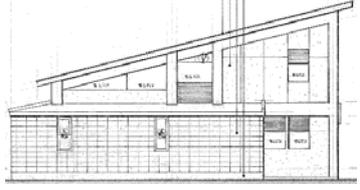
No.	25	26
作品名	安藤邸1	安藤邸2
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	3階建て	

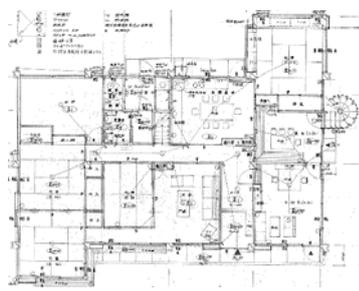
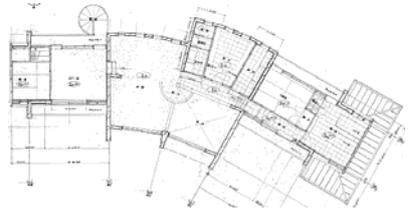
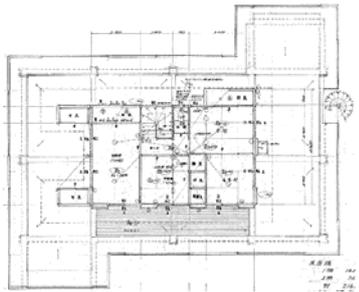
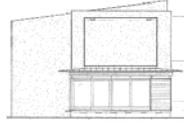
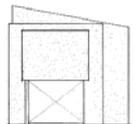
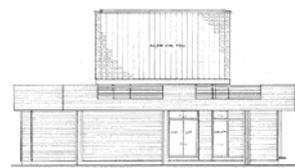
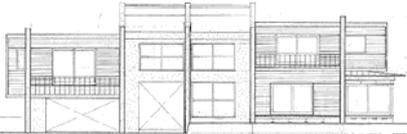
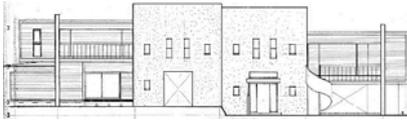
No.	27	28
作品名	横田邸（大屋根の家）	高橋邸1 （扇形の家/Ta氏邸/T邸/Ta邸）
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		立面図は実長による。

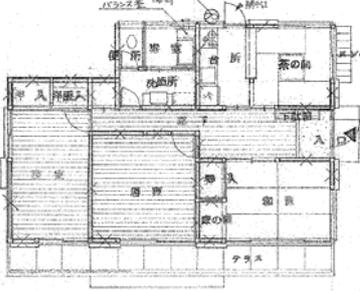
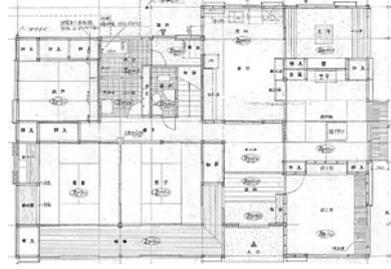
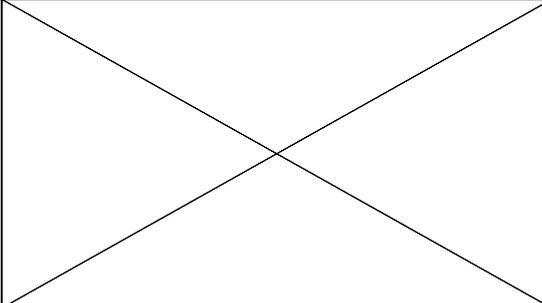
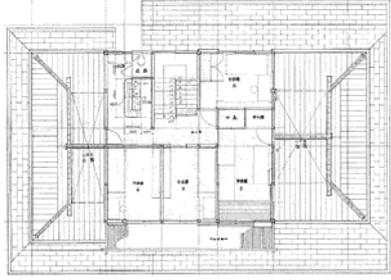
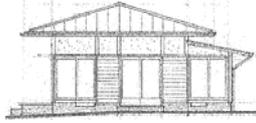
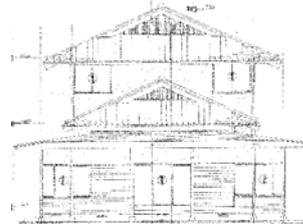
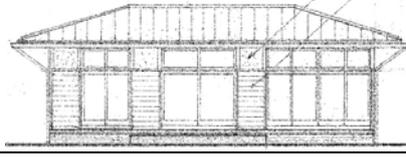
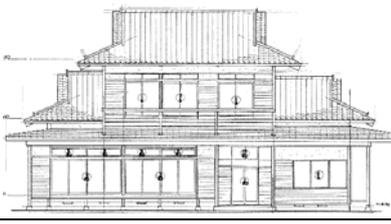
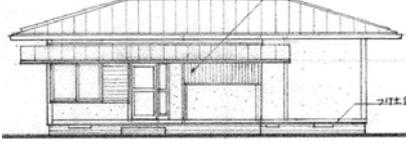
No.	29	30
作品名	高橋邸2	戸田邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

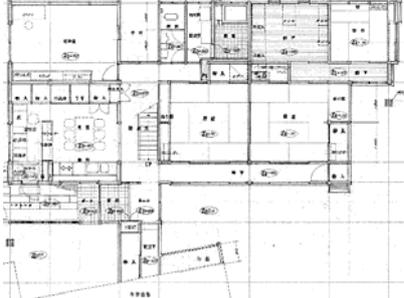
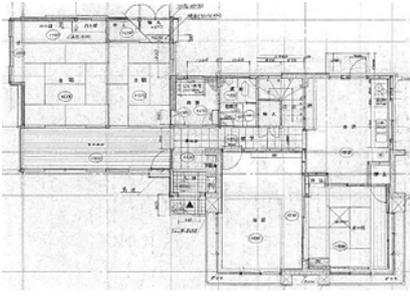
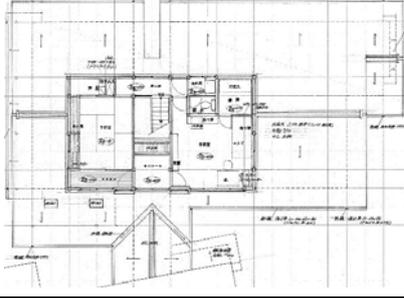
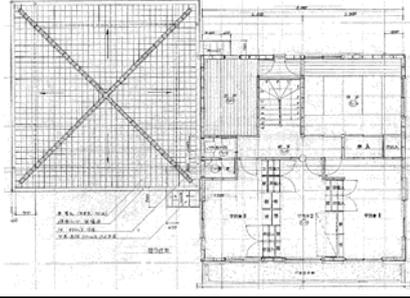
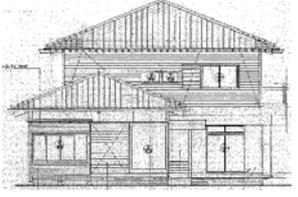
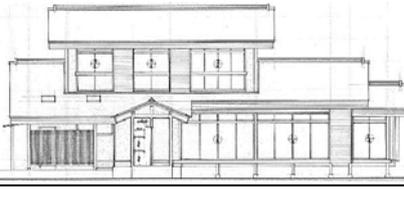
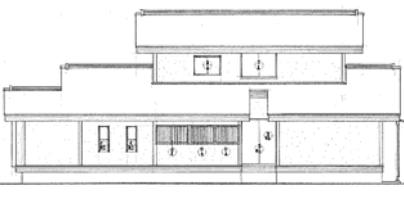
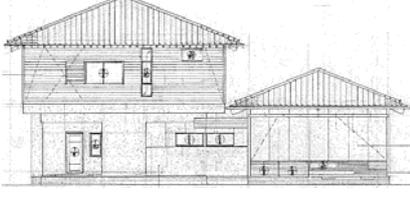
No.	31	32
作品名	水野レストランA棟	篠崎邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	3階建て	

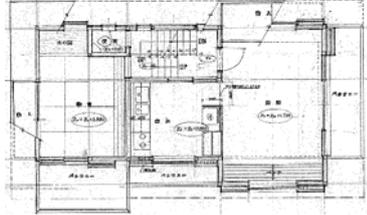
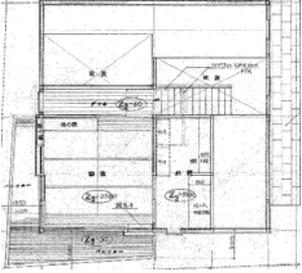
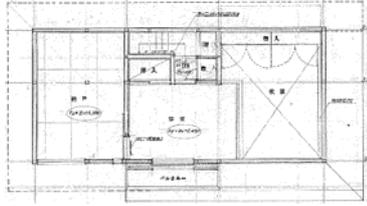
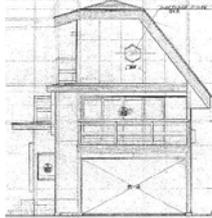
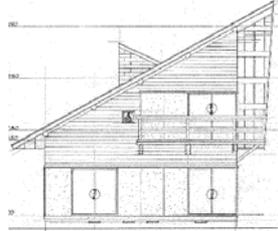
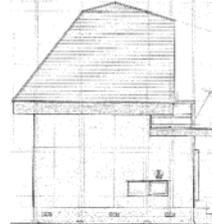
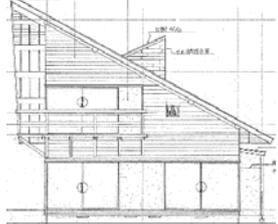
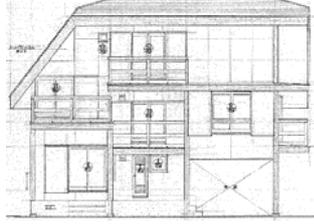
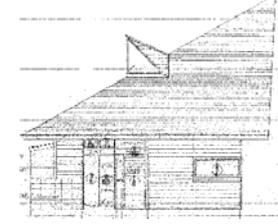
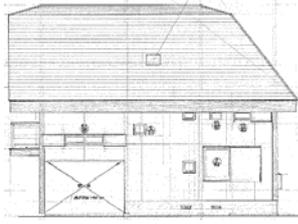
No.	33	34
作品名	松田医院	立川邸2
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

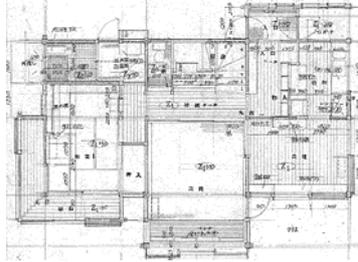
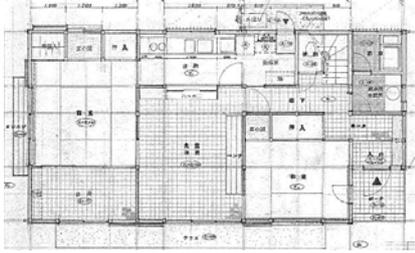
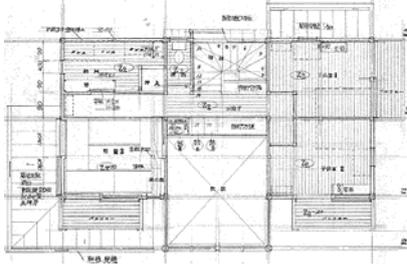
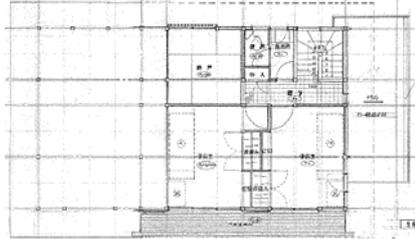
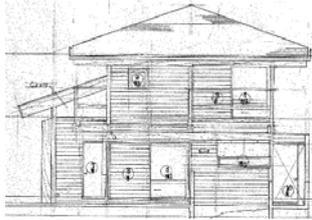
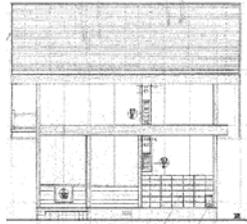
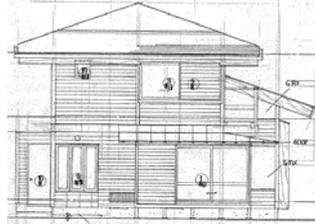
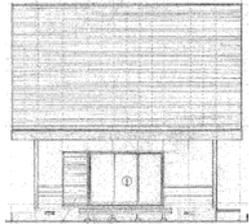
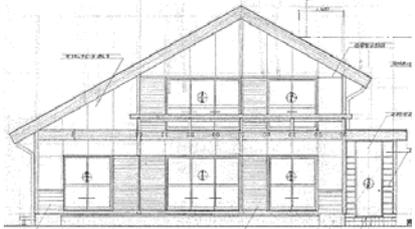
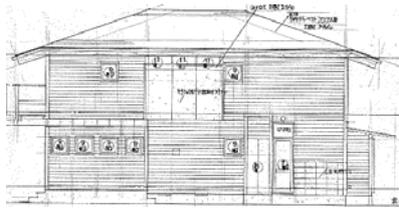
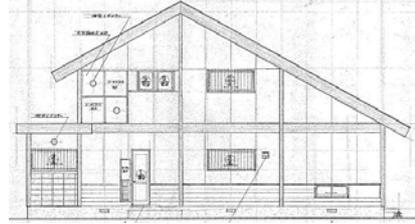
No.	35	36
作品名	堤邸1	熊沢邸 (柿生の家)
1階平面図		 2階平面図
2階平面図		 3階平面図
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		3階建て

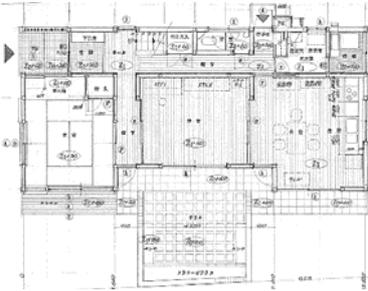
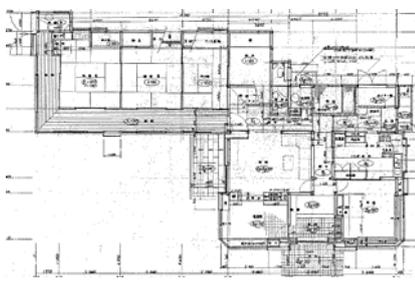
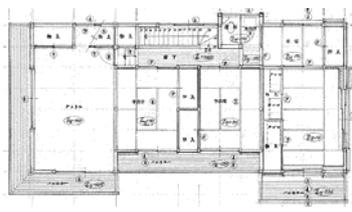
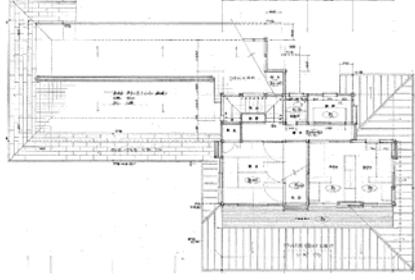
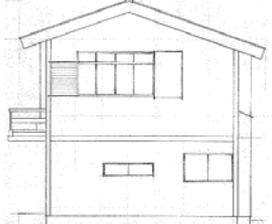
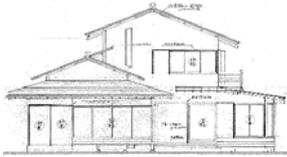
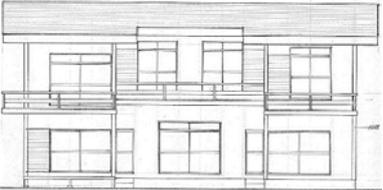
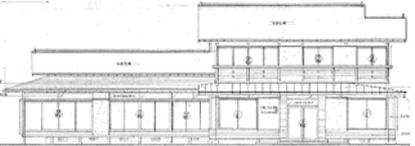
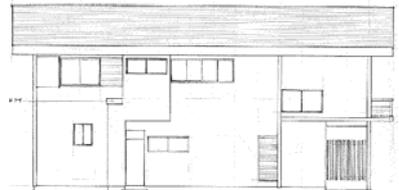
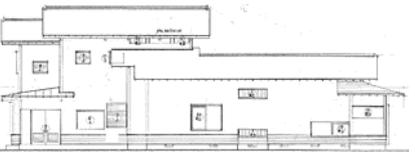
No.	37	38
作品名	神崎邸	横山邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	立面図は実長による。	

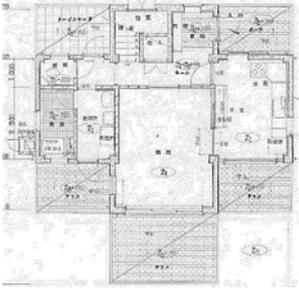
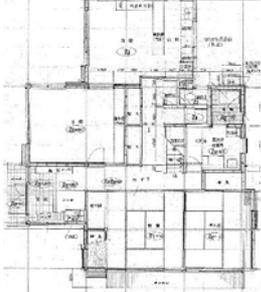
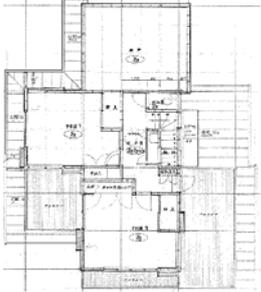
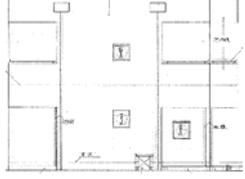
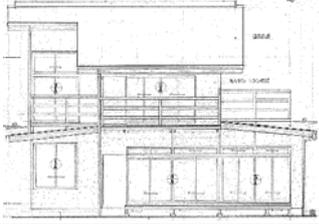
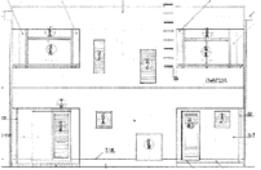
No.	39	40
作品名	鈴木邸1	志村邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

No.	41	42
作品名	竹内邸	松本邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

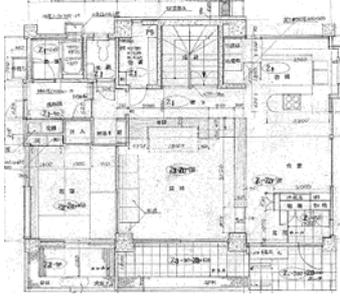
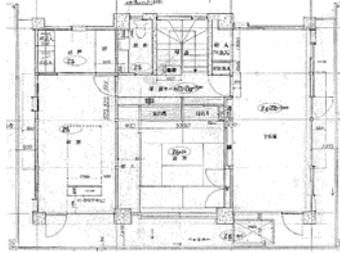
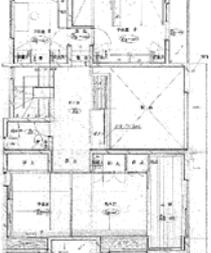
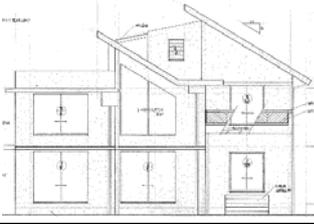
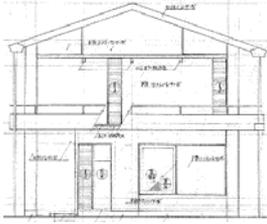
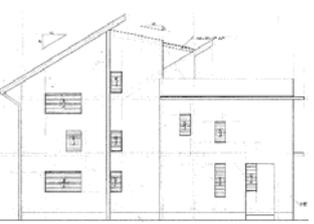
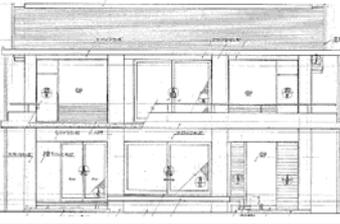
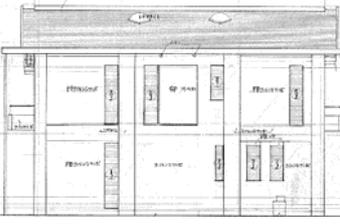
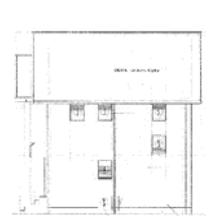
No.	43	44
作品名	前田別邸 (M氏別邸)	天満邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		3階建て

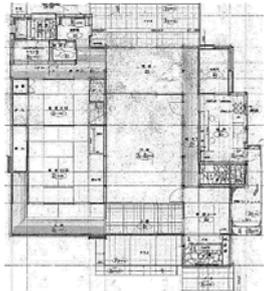
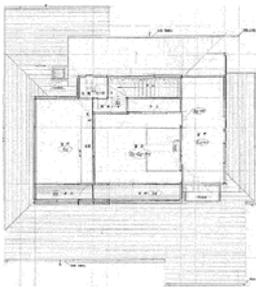
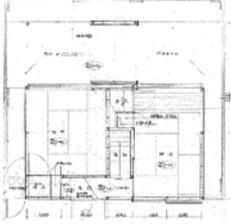
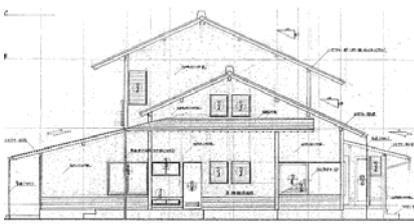
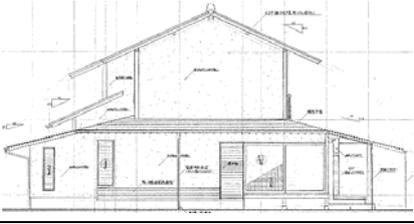
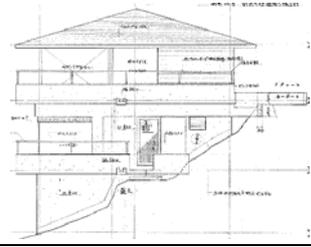
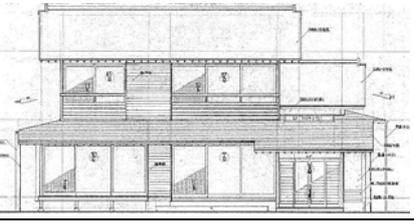
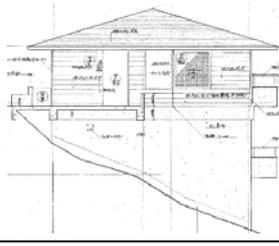
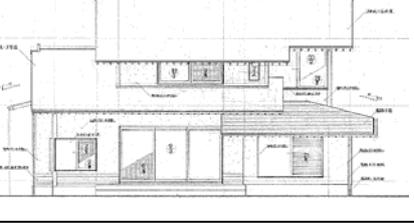
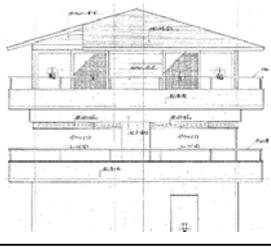
No.	45	46
作品名	四柳邸 (Y氏邸)	高塚邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

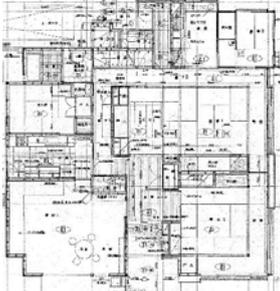
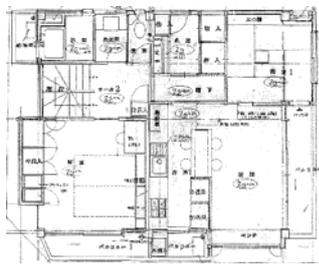
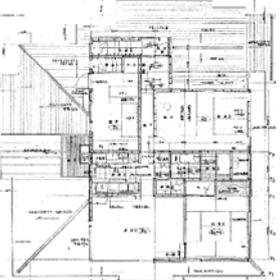
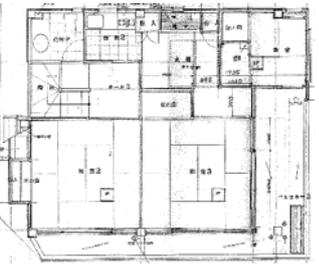
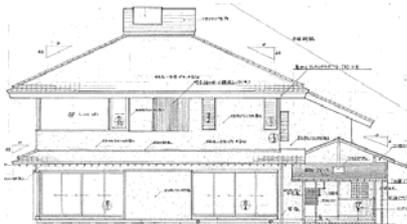
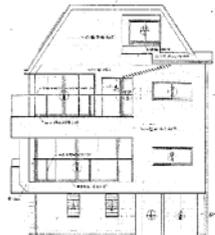
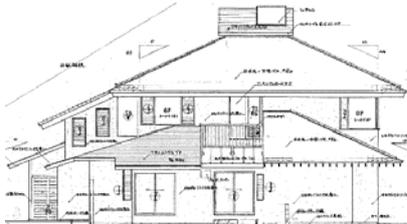
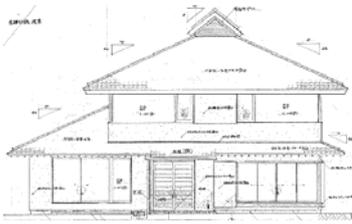
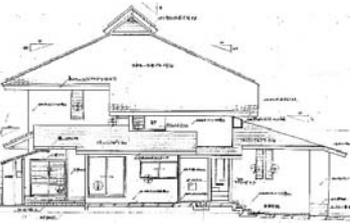
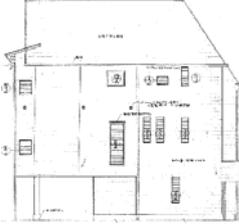
No.	47	48
作品名	沢柳邸	長谷川邸 (H邸)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

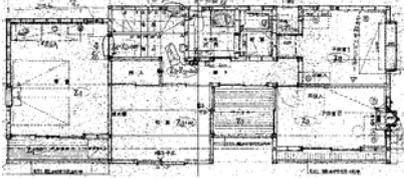
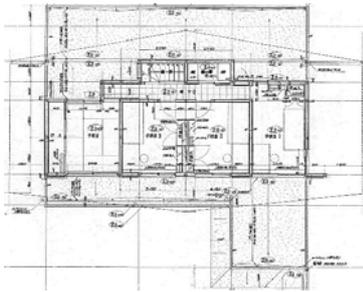
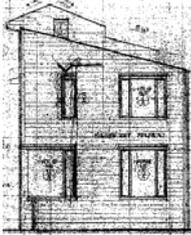
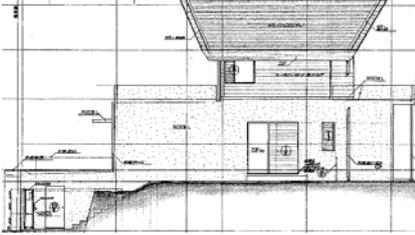
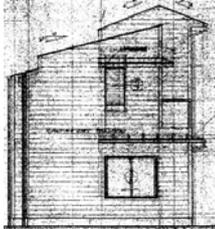
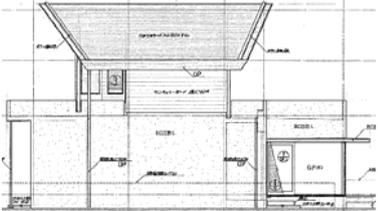
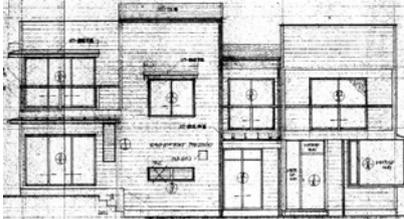
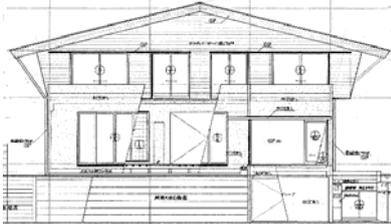
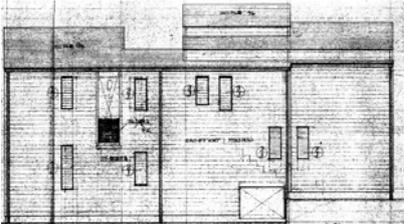
No.	49	50
作品名	前田邸	田口邸2
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

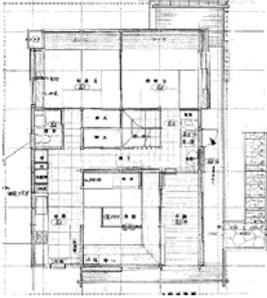
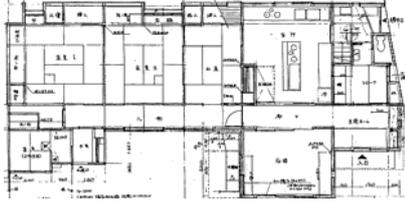
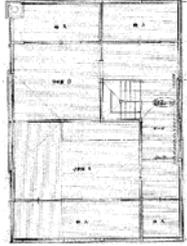
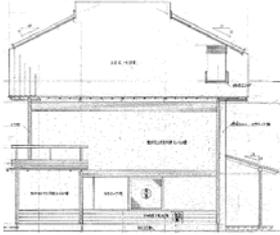
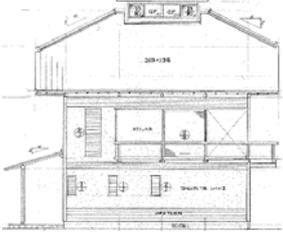
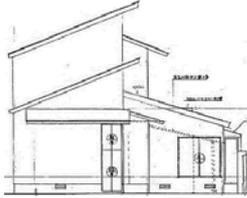
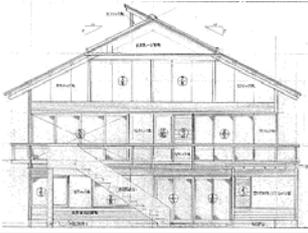
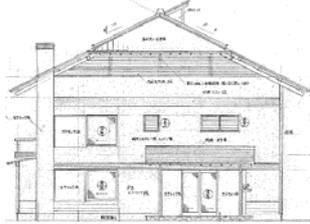
No.	51	52
作品名	小杉邸	堤邸2
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

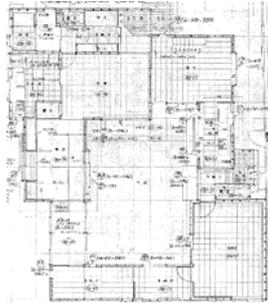
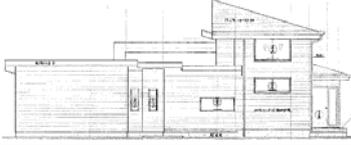
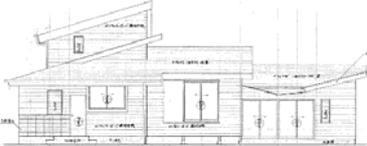
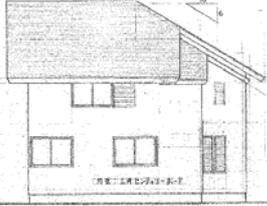
No.	53	54
作品名	京極邸	山本邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	地階あり。	中2階、屋階あり。

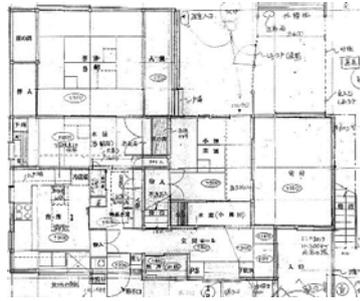
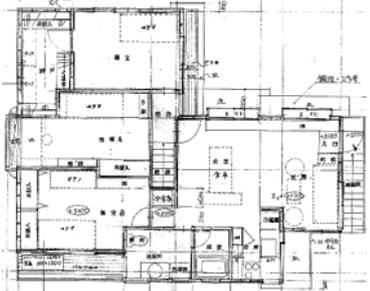
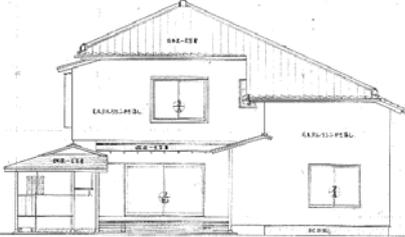
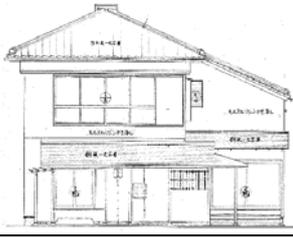
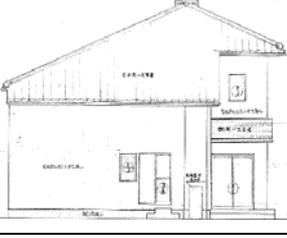
No.	55	56
作品名	藤野邸 (現田中正造記念館)	西川別邸 (千葉の家/N氏別邸)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		地階あり。

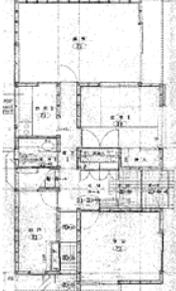
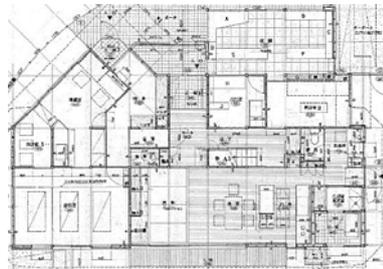
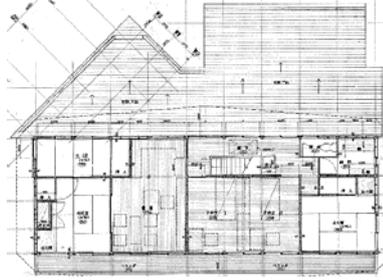
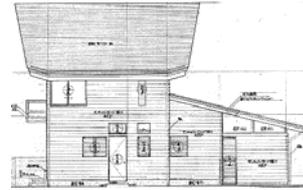
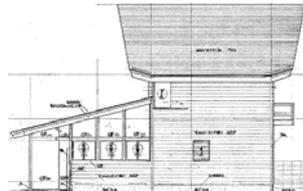
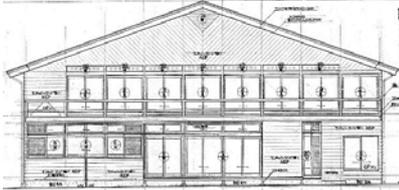
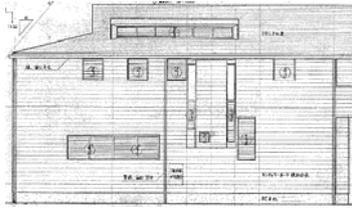
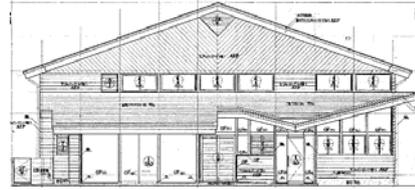
No.	57	58
作品名	佐野邸	斉藤邸 (Kさんの家/斎藤邸)
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

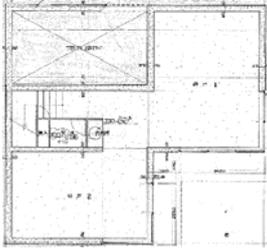
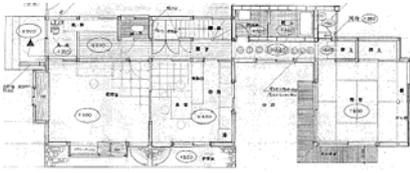
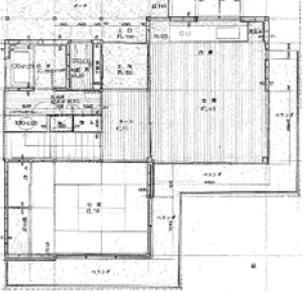
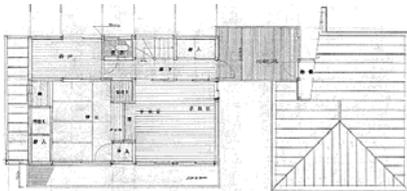
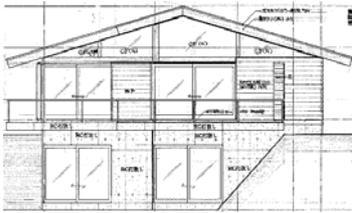
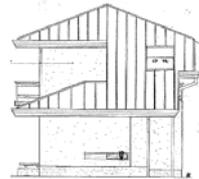
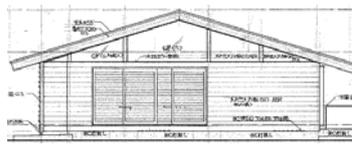
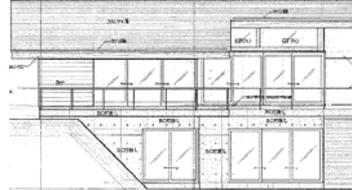
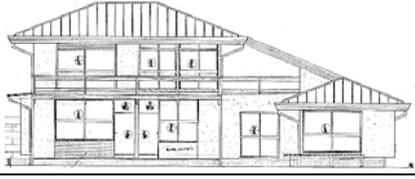
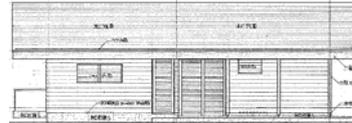
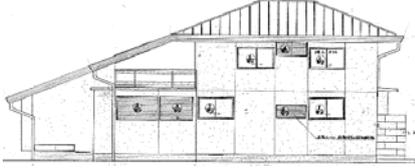
No.	59	60
作品名	鈴木邸2	田邊邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		地階あり。

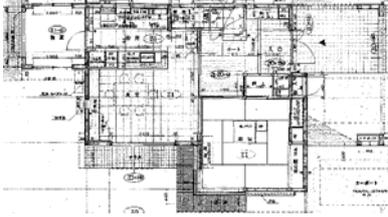
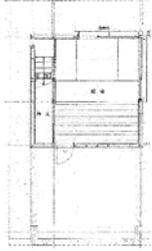
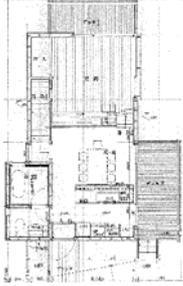
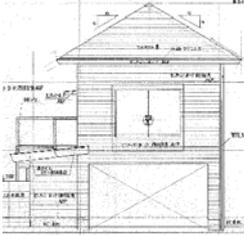
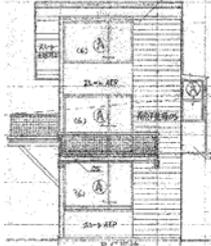
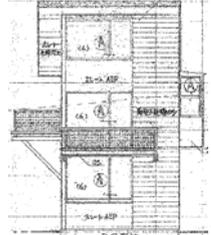
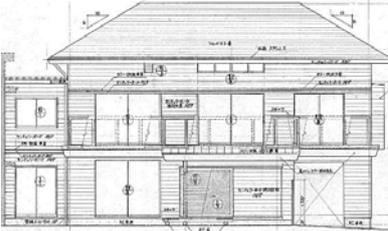
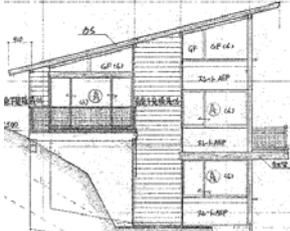
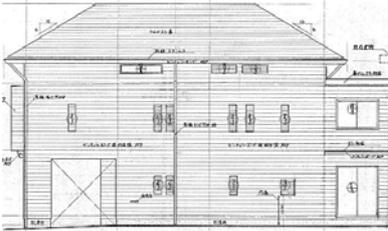
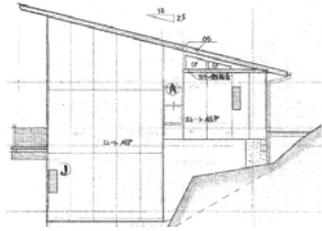
No.	61	62
作品名	千代田養神堂	中原自邸 (茶室のある家/自邸/浦和の家)
1階平面図	 <p>2階平面図</p>	
2階平面図	 <p>屋根裏階平面図</p>	
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

No.	63	64
作品名	中原邸	石垣邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

No.	65	66
作品名	森邸	山田邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

No.	67	68
作品名	村上邸	戸部邸
1階平面図		
2階平面図		
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		屋根裏階あり。

No.	69	70
作品名	木所邸	寺内邸
1階平面図	 <p>地階平面図</p>	
2階平面図	 <p>1階平面図</p>	
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考		

No.	71	72
作品名	増田邸	大関別邸
1階平面図		 地階平面図
2階平面図		 1階平面図
東立面図		
西立面図		
南立面図		
北立面図		
備考	3階建て	ロフト階あり。

付録4 中原暢子略年譜

西暦	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の關係する建築作品
1929	1月5日中原家の末っ子として埼玉県に生まれる。(父=英寿、母=きよの)					
1935	4埼玉県師範学校附属小学校入学			▲『栄養と料理』創刊		
1936					2二・二六事件	▲『柗屋別荘』吉田五十八 ▲『古屋信子邸』吉田五十八
1939				6『現代建築』創刊(-1940.9)		
1940					9日独伊三国同盟	
1941	3埼玉県師範学校附属小学校卒業 4埼玉県立浦和第一高等女学校(5年制)入学			3住宅営団法公布	12太平洋戦争勃発	▲『借葉荘』吉田五十八
1942				▲西山卯三『食養分離論』		
1943					学徒出陣	
1944	▲埼玉県立浦和第一高等女学校入学卒業(4年で全国一斉繰り上げ卒業) 9東京家政専門学校保健科入学				学徒・女性の勤労働員	
1945				11『建築雑誌』休刊	3東京大空襲 8第二次世界大戦終結(終戦) 11戦災復興院設置	▲『住宅No.0』池辺陽
1946				1『新建築』復刊 4『建築文化』創刊 ▲『近代建築』創刊	11日本国憲法公布	
1947				6新日本建築家集団(NAU)設立 9西山卯三『これからのすまい住機式の話』 12浜口隆一『ヒューマンリズムの建築』 7建設省発足		
1948	3東京家政専門学校保健科(19期生)卒業 4労働省婦人少年局入省					
1949	▲『日本住宅の封建制』を食い入るように読んだ			▲浜口ミホ『日本住宅の封建制』初版 ▲日本家政学会設立		

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の關係する建築作品
1950	21	4武蔵工業大学短期大学部建設科(1期生)入学 ▲1年次の夏休みから笹原貞彦の事務所を手伝い(アルバイト)			1農村建築研究会 (NAU下部組織) 設立 4 計画研究会LV (les Vendredis) 設立 5住宅金融公庫法公布 5建築基準法公布 5文化財保護法公布	4東京家政学院短期大学部を設置 朝鮮特需(-1952)	7「住居No.3」池辺陽 9「八幡製鉄労働組合会館 第1次案」NAU設計委員会 ▲「歌舞伎座 (第3期)」吉田五十八 ▲「人勝館御幸の間」堀口捨己
1951	22				▲『農建月報』創刊 (継続後誌：農村建築) 7『モダンリビング』創刊		▲「鶴見倉庫」小野薫・加藤渉 ▲「宇宙線研究所」F.キヤンデラ
1952	23	3武蔵工業大学短期大学部建設科卒業 5東京大学生産技術研究所 池辺研究室 技術研究生 (~1958.3) ▲所懇 (建築設計事務所員懇談会) 設立に参加	4「三つの異つた生活を単純な平面にまとめる Hさんの35.91坪のすまい (住宅No.10)」『モダンリビング』柳下洋一、北川允昭、中原暢子		11所懇 (建築設計事務所員懇談会) 設立 2『週刊サンケイ』創刊 (-1988.6 継続後誌：Spa!)		3「住居No.10」池辺陽 7「最小限住居の試作」増沢洵 ▲「トネル系シャーレン屋根を有する映画館」小野薫・加藤渉
1953	24	6船越彌子の紹介でポドコ (PODOKO) の前身に参加 9婦人画報の渡辺曙よりポドコ (PODOKO) への仕事を受ける 9ポドコ (PODOKO) に参加	2「標準寸法の住宅への適用 例II：秦邸・東京碑文谷 (住宅No.10)」『国際建築』柳下洋一、北川允昭、中原暢子 ▲「限られた費用で住水準を高める設計 (No.12)」『家の設計・庭の設計』再版 (Modern living; 第5集)』北川允昭、中原暢子		1『農村建築』創刊 (-1967 継続後誌：農建月報) 1『Architectural Forum』にシユエル (サーリオン) について掲載され、翻訳される 9ポドコ (PODOKO) 設立 9火曜会設立		2「高橋助教授の家」清家清 3「法政大学・大学院」大江宏 11「公会堂 (計画案)」山口文象 ▲「広嶋子どもの家」丹下健三 ▲「愛媛県民館」丹下健三 ▲「沼津市公会堂」池辺陽

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の關係する建築作品
1954	25		9「住宅No.20 コア-のある17.26坪のすまい」、『モダンリビング』みねぎしやすお、小泉幸夫、中原暢子 11「住宅No.20」『新建築』池辺陽、みねぎしやすお、中原暢子、小泉幸夫 11「新建築賞・新制作協会展建築部出品 作品A・作品B・作品C」『新建築』みねぎしやすお、小宮山雅夫、吉田桂二、中原暢子	11「構造計画（住宅No.28）」『新建築』	3建築研究団体連絡会（建築連）設立 6金曜会設立 8例の会設立		11平和記念公園慰霊碑」丹下健三 9「住宅No.20」池辺陽 11「住宅No.17」池辺陽
1955	26	広瀬鎌二建築技術研究所入所	11「住宅No.28 鉄骨による試作住宅」『新建築』	1『木工界』創刊（-1961 継続後誌：室内） 1伝説論争（-1956頃） 7住宅公団発足			1「住居（自居）」丹下健三 11「住居No.28」池辺陽 ▲「MITの講堂と礼拝堂」E.サーリネン ▲「文楽座」吉田五十八 ▲「サンパウロ日本館」堀口捨己 ▲「万葉館万葉亭」堀口捨己 ▲「三朝温泉旅館後菜」堀口捨己 ▲「料亭植むら亭」堀口捨己 ▲「明治大学泉体育館」堀口捨己
1956	27	広瀬鎌二建築技術研究所退所 池辺研究室へ戻る（-1958）			6五期会設立（-1960.6） ▲『子どものしあわせ』創刊 6総合設計社（団・合作社・沖分室）設立		11「魚菜会館」丹下健三
1957	28		1「公団試作1号住宅（SH-12）」『新建築』				12「スカイ・ハウス」菊竹清訓 ▲「延岡ルーテル教会」A.レーモンド ▲「金鈴塚遺物保存館」吉田秀雄

付録4 中原暢子略年譜

西暦	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の關係する建築作品
1958	5「一般建築士資格取得（登録27343号）」 6林・山田・中原設計同人（東京都文京区表町209原方若竹荘）設立（一般建築士事務所登録番号2023）中原はここに住み込む。 ▲池袋三越にてモデルルームを設計し展示 6ラジオ東京テレビ「女性教室」で「住宅教室」担当（週一、三者交代で） ▲日本経済新聞家庭欄連載	10「SH-16」『近代建築』中原暢子、佐藤恒子、国場幸一郎 6「002吉岡邸」設計 6「003今野邸（増改築）」設計 10「005大坪医院（増改築）」設計 3「004本橋邸」設計	4「2つのグループの小住宅設計白書 工業化のためのデザインへ」住居設計の新しい道-住宅6点(住宅No.38・39・41・43・44・45)』『建築文化』池辺陽研究室(池辺陽、福梅強、佐々木安、北川允昭、川井満、中原暢子、岡文子、川島亨、境公子、池辺昌子) 12「GMモデルによるモデュラコーデインネーション」『日本建築学会研究報告・支部研究会（関東支部）』池辺陽、中原暢子 12「女三人の建築設計事務所をもって」『婦人画報』 1「婦人建築家の役割（座談会）」『建築雑誌』奥村まこと、日下あこ、沢田泰子、下河辺千穂子、田中温子、中原暢子他 6「働きやすい台所」『栄養と料理』 9「働きやすい台所とは 公団アパートの台所を中心に（座談会）」『栄養と料理』中原暢子、田中温子、為永綾子、上田フサ 10「台所をこうして便利に 手帳な設備と改造の実験集」『主婦の友』坂ロミホ、中原暢子、荻野富雄、田島良平、栗原忠、主婦の友売店相談室 11「子どもとすまい コーナー・デスク」『子どものしあわせ』 12「ポーターで買物原本 ⑦台所改造をしたので食器戸棚を買いたいのですが」『栄養と料理』 12「子どもとすまい 子どもの机・椅子」『子どものしあわせ』	▲連合設計社市ヶ谷事務所設立 ▲世界デザイン会議が東京で開催 8民主主義を守る建築会議設立 ▲連合設計社新橋事務所設立	▲安保闘争（-1960、1970） 5夏季オリンピック（1964）の開催地が東京に決まる	1「静岡戦府会館」丹下健三 2「東京都品K.K.工場」RIA建築総合研究所 3「登別温泉科学館」太田実 4「住宅No.41」池辺陽 11「来迎寺」宇野垣棟 11「法政大学58年館C棟」大江宏 ▲「善照寺本堂」白井晟一 ▲「国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑」谷口吉郎 ▲「新歌舞伎座」村野藤吾 9「愛媛県広見町庁舎」A.レーモンド 11「厚生年金新潟市体育館」宮川英二 12「住宅No.54」池辺陽 ▲「妙経寺」川島甲士
1959	4林・山田・中原設計同人移転（東京都台東区上野3-6-3三春ビル） 8「009茂木邸」竣工 ▲「007平田邸（H邸）」設計	1「001矢島商店」設計 8「009茂木邸」設計 8「011斎藤邸（増築）」設計 9「008榊邸」設計 11「009茂木邸」竣工 ▲「007平田邸（H邸）」設計	1「子どもとすまい 子どもの色」『子どものしあわせ』 2「子どもとすまい 子どもの遊び場と道具について」『子どものしあわせ』 3「子どもとすまい 寝室について」『子どものしあわせ』	5「世界デザイン会議が東京で開催」 8「民主主義を守る建築会議設立」 ▲「連合設計社新橋事務所設立」	1「日米安全保障条約」	5「横浜新道 Tool Gate」石本建築事務所 11「伊賀上野公民館」坂倉準三建築研究所 ▲「大和文華館」吉田五十八 ▲「赤坂東宮御所」谷口吉郎 ▲「日本武道館」山田守

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の關係する建築作品
1961	32		1 「015芳賀邸」設計 8 「016中屋旅館(改築)」設計 9 「026中屋旅館(増築)」設計 11 「019吉永邸(通り庭のある家)」設計 12 「020長覚院」設計 ▲ 「013田口邸」設計 ▲ 「014辻別邸」設計	7 「子ども室をつくる」『子ども室と遊び場』	4 『室内』創刊(=2006.3継続前誌:木工界)		4 「元町給油所」坂倉準三建築研究所 4 「神戸祝園前給油所」坂倉準三建築研究所 4 「広島東給油所」坂倉準三建築研究所 9 「西条市体育館」坂倉準三建築研究所 9 「京都市下水処理場ポンプ室」増田知也
1962	33	4東京家政学院短期大学(東京・市ヶ谷)非常勤講師として着任	2 「025土肥邸」設計 2 「022中原アハート(増改築)」設計 3 「028中田邸(増築)」設計 6 「027増山邸」設計 7 「020長覚院」竣工 8 「029吉田邸」設計	10 「HPシエルと伝統の融合/天台宗長覚院」『建築文化』			2 「水宗寺」清水哲夫 ▲ 「ヴィラ・イナフシロ」林雅子 ▲ 「追分の山荘」大江宏 ▲ 「畷井沢新スタジオ(旧レーモンド別荘)」Aレーモンド
1963	34	6-7国際女性建築家会議(UIFA)第1回大会フランス(パリ)6/26-7/3(設立総会)に参加 ▲国際女性建築家会議(UIFA)第1回大会フランス(パリ)のインタナーナークエクトとして9ヶ月参加	3 「034渡辺邸」設計 4 「031近藤邸(K邸)(増築)」設計 5 「032福山邸(増築)」設計 7 「136岡部邸(増改築)」設計 ▲? 「149岡邸」設計	4 「<美しき室内>茶室の日本間」『室内』(吉永邸・通り庭のある家) 4 「通り庭のある家(吉永邸)」『室内』中原暢子、上山彰栄 8 「1956/1957 SH-12,14,15,16,20碧水荘他 L.G.S」『建築』広瀬鎌二(スタッフ:鈴木伸一、佐藤徳重、塩野正宏、佐藤恒子、服部重信、山本啓介、岡場孝一郎、中原暢子、溝口長男、小林千恵子、土志田泰、(本吉康郎、若月啓功))	▲国際女性建築家会議(UIFA)設立		5 「佐賀県体育館」坂倉準三建築研究所 9 「ホテル東光園」菊竹清訓 ▲ 「親和銀行東京支店」白井周一
1964	35	5農協建築研究会(NKK)へ参加	5 「035画部陸院(O氏邸)」設計 9 「136岡部邸(増改築)」竣工 10 「036木村別邸(K氏別邸/下呂皿の家)」設計	5農協建築研究会(NKK)設立	10東京オリピック		10 「駒沢体育館」芦原義信 ▲ 「草崎クラブ」林雅子 ▲ 「明治大学生田校舎」堀口捨己

付録4 中原暢子略年譜

西暦	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の關係する建築作品
1965			8「住まい サービスタイド/物置と雨の日の物干し場」『週刊サンケイ』 9「住まい 主人のコーナー/書庫つき書斎をつくろう」『週刊サンケイ』 9「住まい タタミの寝室/マットレスの置き場所」『週刊サンケイ』 10「住まい 車庫を作る心得/行動半径をよく計算して」『週刊サンケイ』 11「<美しき室内>仕事のできる和室(近藤邸)」『室内刊サンケイ』 11「住まい 廊下にナンドを/狭い部屋のための収納法」『週刊サンケイ』	1『SD(スペースデザイン)』創刊 (-2000.12)		5「大田区体育館」加藤渉 6「香川県立体育館」丹下健三 6「東京カテドラル聖マリア大聖堂」丹下健三 ▲「末広がりの家」林雅子 ▲「大阪ロイヤルホテル」吉田五十八
1966	▲農協建築研究会(NKK)の住宅相談事業で農協住宅を設計(～1974)	4「036木村別邸」(K氏別邸/下呂山の家) 竣工 3「039飯重邸」(モデル住宅第1号) 設計 11「040芝崎邸」設計 12「039飯草邸」(モデル住宅第1号) 竣工 12「021立川邸」(若夫婦の家) 設計 社 ▲「041坂本邸」設計	4「住宅建築と焦点② 見積と契約(田口邸)」『室内』 8「広い空間をデザインする つくりつけ家具のある書斎 K邸(近藤邸増築)」『暮らしの知恵』 8「広い空間をデザインする 空間の広がりを見せた食堂 H邸(平田邸)」『暮らしの知恵』 9「家を建てる⑨外まわりと完成引き渡し(田口邸)」『みのり』 10「木造でシェルターをつくる/木村別邸・岡部邸」『建築文化』			2「弓張岳展望所」坪井義勝 ▲「栢生保育園」山田初江 ▲「愛知県立芸術大学」吉村順三
1967		5「043秋永邸」設計 ▲「163仲林邸(鉄筋コンクリートの家)」設計 ▲「053安藤邸」設計 ▲「145安藤邸」設計	9「農村のすまい」農協建築研究会			▲「高橋邸」林雅子 ▲「鈴木邸」林雅子 ▲「入母屋の家」林雅子
1968		7「046高橋邸(扇形の家/Ta氏邸/T邸/Ta邸)」設計 ▲?「067横田邸(大屋根の家)」設計 社 ▲「046高橋邸」設計	8「扇形の家・Ta邸(高橋邸)」『建築文化』 8「建築設計における与条件について(扇形の家・Ta邸(高橋邸))」『建築文化』 9「これからの農村住宅 大家の家(横田邸)」『室内』 9「これからの農村住宅 鉄筋コンクリートの家(仲林邸増築)」 9「これからの農村住宅 若夫婦の家(立川邸1)」『室内』 9「これからの農村住宅 農村住宅の問題点」『室内』 9「これからの農村住宅 新しい間取り集 雁行した家(坂本邸)」 ▲「岡部邸(真壁構造・合せ梁・種母屋)」『木造の詳細(構造編)』	5「都市住宅」創刊 (-1986)		▲「中宮寺本堂」吉田五十八 ▲「皇居新宮殿基本設計」吉村順三

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の関係する建築作品
1969	40	この頃から茶道を始める	3 「050戸田邸」設計 8 「068水野レストラン」設計 8 「046高橋邸(扇形の家/Ta氏邸/T邸、/Ta邸)」竣工 「051篠崎邸」設計 ▲「049松田医院」設計	2 「近郊農村住宅について 神奈川県川崎市栢生地区の住いしき調査及び住宅相談、住宅設計監理を通して」『農村建築』 3 「住宅の収納部分 どのような収納部分がどのくらい必要か」『室内』			
1970	41		3 「052立川邸2」設計 4 「160堤邸」設計 4 「053熊沢邸」設計 6 「054岡部医院(増築)」設計 10 「150神崎邸」竣工 ▲「150神崎邸」設計	9 「建具金物・家具金物 建具金物の上手な使い方」『室内』	▲「連合設計社みねぎしや・すお建設設計事務所設立		▲「満願寺」吉田五十八 ▲「ホテルフジタ京都」吉村順三 ▲「親和銀行本店」白井晟一
1971	42	1事務所移転(東京都新宿区南元町19信濃町外苑ビル503)	1 「054篠山邸」設計 4 「055鈴木邸」設計 9 「058渡辺邸(増改築)」設計 10 「089竹内邸」設計 ▲? 「057志村邸」設計				
1972	43		2 「060松本邸」設計 9 「063前田別邸(M氏別邸)」設計 11 「064四柳邸(Y氏邸)」設計 12 「066天満邸」設計				
1973	44	この頃から池袋で茶道を習い始める	4 「063前田別邸(M氏別邸)」竣工 4 「064四柳邸(Y氏邸)」竣工 4 「070高塚邸」設計 10 「072沢柳邸」設計 11 「073会田邸(増改築)」設計 ▲? 「169三平邸(増改築)」設計	9 「座談会 住宅を考える」「住宅を考える・住宅9題」『近代建築』清家清、中原暢子、増沢海			
1974	45		2 「079坂本邸(改築)」設計 5 「081長谷川邸(H邸)」設計 6 「085井原邸(改築)」設計 ▲「157前田邸」設計 ▲? 「116熊沢邸(増改築)」設計 ▲「057志村邸」竣工	3 「住宅3題—Kビル(木村ビル)・Y氏邸(四柳邸)・M氏別邸(前田別邸)」『建築文化』	▲「地域社会計画センター設立(NKKの事業が引き継がれる)		▲「赤坂離宮迎賓館」村野藤吾

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の関係する建築作品
1975	46		5 「081長谷川邸 (H邸)」 竣工 11 「086田口邸」 設計 ▲ 「085高橋邸」 設計		5 『住宅建築』 創刊		▲ 「桐生コーポラティブ・ハウス」山田昭 ▲ 「百合ヶ丘フリアリ・ニスクラブ」山田初江
1976	47	10 国際女性建築家会議 (UIFA) 第4回世界大会イラン (ラムサール) に参加 参加テーマ: 建築における文化的同一性 10 国際女性建築家会議 (UIFA) 第4回世界大会イラン (ラムサール) において講演「日本の住宅事情について」	1 「087柴田邸 (増改築)」 設計 9 「094小杉邸」 設計 9 「091埴邸 (増築)」 設計	6 「H (長谷川) 邸」、 「K (木村) 別邸」、 「T (高橋) 邸」 『住宅建築』 日本の集落6: 千葉県 6 「建主の個性を基礎に (H (長谷川) 邸)」 『住宅建築』 日本の集落6: 千葉県 7 「砂の怪物 (タリアセン・ウエスト、アリゾナ州) (設計 フランク・ロイド・ライト) (NICE SPACE)」 『スペースデザイン』 1 「住宅についてふたたび考える」 『新建築』 10 「先生方の思い出 (私の受けた建築教育・III)」 『建築雑誌』 12 「緻密に計算されたオアシス (王の広場/イスファアハン17世紀 (NICE SPACE))」 『スペースデザイン』			
1977	48		11 「097京極邸」 設計 ▲ 「159埴邸2」 竣工 ▲ ? 「167増田邸」 設計				
1978	49		3 「099山本邸」 設計 8 「103大塚邸 (増改築)」 設計 11 「100藤野邸 (現田中正蔵記念館)」 設計				
1979	50	胃がんのため十二指腸全と胃の2/3を切除	8 「105高森邸 (増改築)」 設計 10 「106西川別邸」 設計 10 「116熊沢邸 (増改築)」 設計				
1980	51		6 「107佐野邸」 設計 11 「108芥藤邸 (Kさんの家/産藤邸)」 設計				
1981	52	この頃茶室の写しの設計に取り組み始める。 12 ぐも臍下出血で倒れる (後遺症はなかったが、半年間は仕事ができないう状態が続いた)	6 「110鈴木邸」 設計 7 「111井原邸No.1 (増改築)」 設計 7 「112井原邸No.2 (増改築)」 設計	2 「家庭科「住居」の指導について」 『高校教育』			
1982	53						
1983	54	▲ JIA トークに岩田糸子 (ガラス工芸家) の聞き手として参加 主催: 社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部/JIA トーク実行委員会					6 新耐震基準 ▲ 林雅子が日本建築学会賞受賞 (一連の住宅作品)

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の関係する建築作品
1984	55		2 「118田邊邸」設計 4 「119山崎峻邸（増改築）」設計 11 「120千代田養神堂」設計 ▲「107佐野邸」竣工	11 「茶室と水屋」『食べる空間・つくる空間：18人の建築家が語る住まいへの提案』	▲連合設計社を連合設計社横山公男建築事務所に変更		
1985	56	4 東京家政学院大学家政学部住居学科（東京・町田）助教授として着任	2 「1000中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」設計 9 「121中原邸」設計	2 「1000中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」設計		4 男女雇用機会均等法	
1986	57		4 「122石垣邸」設計 4 「1000中原自邸（茶室のある家/自邸/浦和の家）」竣工	6 「女性建築家だから建てられた家」『Sophia』 6 「趣味の茶事が、退職後、生活の中心に 住まいがそれを可能にした 東京・斎藤邸」『Sophia』 6 「働いている今の自分と、今後の老後対策の両方を満足させられる家を 中原暢子さん設計の自邸」『Sophia』 10 「茶室のある家」『新建築（住宅特集）』 10 「建築—私との出会い81」『建築文化』 10 「もう一つの戦後史—ポドコに芽吹いた潜勢力—」『風声 一 つの葉21』林雅子、山田初江、中原暢子 ▲ 「茶室空間の歴史的考察—現代住宅建築の空間構成—（1）」『東京家政学院大学紀要』	4 「新建築住宅特集」月刊誌 ▲ 林雅子が第111回吉田五十八賞を受賞		
1987	58		2 「028森邸」設計 ▲ 「125山田邸」設計	▲ 「茶室：空間構成美を展開図から分析考察する—現代住宅建築の空間構成（2）—」『東京家政学院大学紀要』			
1988	59	▲ 暢庵茶事教室にて「不白筆記」写し執筆か ▲ 東京家政学院大学家政学部住居学科教授に昇進	3 「124村上邸」設計 10 「127戸部邸」設計 ▲ 「152木所邸」設計 ▲ ? 「048寺内邸」設計	6 「解説」『家政学生活学研究基礎文獻集』『応用家事精義』大江スミ子著 第1巻緒論住居 ▲ 「現代住宅の空間構成（3）極小空間をつくりくまう」>その心理的考察を含めて（自邸）」『東京家政学院大学紀要』			

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の関係する建築作品
1989	60		10 「129増田邸」設計	5 「江戸時代中、後期の住まいについての研究-家相の文献を通して- (第一報)」 『日本家政学会大会研究発表要旨集』 村田あが、中原暢子、矢藤仁美 5 「江戸時代中、後期の住まいについての研究-家相の文献を通して- (第二報)」 『日本家政学会大会研究発表要旨集』 矢藤仁美、中原暢子、村田あが 5 「江戸時代中、後期の住まいについての研究-家相の文献を通して- (第三報)」 『日本家政学会大会研究発表要旨集』 中原暢子、村田あが、矢藤仁美 ▲ 「江戸時代中・後期の住まいについての研究 (第1報) 日本居家秘用について『三事略考』」 『東京家政学院大学紀要』 村田あが、中原暢子			
1990	61		9 「130大野邸茶室」設計 12 「131鈴木邸 (改築)」設計	4 「つかず離れず30年を超えた同居活動」 『日経アーキテクチュア』 中原暢子 5 「雄大な海の景色が心をなごませる千葉の家 (西川別邸)」 『新感覚のセカンドハウス』 5 「厩戸裏のある部屋が核。茶室が近隣とのコミュニケーションの場所 (木村別邸)」 『新感覚のセカンドハウス』 ▲ 「江戸時代中・後期の住まいについての研究 (第3報) 日本居家秘用について (2)」 『東京家政学院大学紀要』 中原暢子、村田あが			
1991	62		3 「132田沼邸 (増改築)」設計	5 「茶事のための空間分析 その1-文献を主として茶室と水屋・台所の広さの分析-」 『日本家政学会大会研究発表要旨集』 小宮山優香、中原暢子 5 「茶事のための空間分析 その2-茶事の実験を通して接客形態と方法を考察する-」 『日本家政学会大会研究発表要旨集』 中原暢子、小宮山優香 ▲ 「大江スミの住まい-大江家政学と家政学院創設まで-」 『東京家政学院大学紀要』			
1992	63	▲ 国際女性建築家会議日本支部 (UIFA JAPON) 初代会長に就任 (-2002.6)	5 「134戸田邸 (増築)」設計 12 「113前田邸 (増改築)」設計 12 「113前田邸 (増改築)」設計	5 「茶室・水屋の建築計画的な研究-茶室水屋の平面構成-」 『日本家政学会大会研究発表要旨集』 ▲ 「茶室・水屋の建築計画的な研究-茶室(表千家・風炉正午)の記録 一時間を軸として-」 『東京家政学院大学紀要』 12 「UIFA JAPON設立のごあいさつ」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 6 「国際女流建築家会議 (UIFA)」 『住宅建築』 7 「UIFA第10回大会に参加して」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 11 「韓国からの留学生ハムさんとの対話」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』	▲ 国際女性建築家会議日本支部 (UIFA JAPON) 設立		
1993	64		12 「137山本邸 (改装)」設計				

付録4 中原暢子略年譜

西暦	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の関係する建築作品
1994		7 「189山田邸 (改装・企画)」 設計	7 「S.d Herbez de la Tourさん見記」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』			
1995	9第2回国際シンポジウム (韓・日女性建築家) にて討論 (韓国女性建築家協会 会長: 金華蓮) テーマ「21世紀 新 住居文化 女性が主役である」		1 「年頭のあいさつ」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 3 「会員からのメッセージ 阪神大震災について私の考えること」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 9 「第1回バリエ大会」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 11 「韓日シンポジウムで感じたこと」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』		1 阪神淡路大震災	
1996	67		2 「林・山田・中原設計同人の歩み」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 3 「建築とわたし「みんなに助けられて」」 『建築雑誌』 3 「1996年度通常総会を迎えるに当たって」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 11 「第12回UIFA日本大会の開催に当たって」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』			
1997	68	2 「140大池邸 (増改築)」 設計	1 「集まって住もう—高齢者の住まいを考える—」 『家庭科教育』 1 「波頭をとらえる1997 住宅についてふたたび考える」 『新建築』 5 「UIFA国際女性建築家会議 第12回日本大会開催に向けてごあいさつ」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 7 「第5回総会を終えて」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 9 「ザ・インタビュ—第12回日本大会名譽顧問の赤松良子先生にきく— (対談)」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 赤松良子、中原暢子			
1998	69 9第12回UIFA世界大会が東京で開催される。テーマ「環境共生 時代の人・建築・都市」 清澄庭園の茶会で亭主を務める	2 「141大関別邸」 設計	4 「ザ・インタビュ—住宅産業研修財団理事長、生涯学習開発財団 松田妙子氏— (対談)」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 松田妙子、中原暢子 8 「ザ・インタビュ—UIFA JAPON会長中原暢子氏、第12回日本実行員長松川淳子氏 (対談)」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 11 「UIFA' 98 日本大会を終わって」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』			
1999	70 ▲東京家政学院大学家政学部住居学科最終講義『木造設計図集』 3東京家政学院大学家政学部住居学科定年退職		▲『中原暢子の木造住宅設計図面集』			

付録4 中原暢子略年譜

西暦	年齢	本人	作品	著作	建築関連	内外情勢	本論記載の関係する建築作品
2001	72			1 「希望をもって楽しく生きていきたい」 『UIFA JAPON NEWSLETTER』 ▲ 「池辺駒 システムチックな感覚と人間的魅力」 『素顔の大建築家たち2-弟子から見た見た巨匠の世界』 ▲ 「作家的建築家を志す (対談)」 『素顔の大建築家たち2-弟子から見た見た巨匠の世界』 佐々木宏、中原暢子、難波和彦		1 『建築文化』隔月刊に変更	
2002	73	3林・山田・中原設計同人解散 6国際女性建築家会議日本支部 (UIFA JAPON) 名誉会長に就任 6講演会『林・山田・中原設計 同人の44年間』-UIFA JAPON 10周年を記念して-					
2004	75						
2005	76			8 「対談 私の住まい記60年」 『建築士』 中原暢子、山田初江、松川淳子			
2007	78			7 「2007年のUIFA 私の仕事」 会員たちの仕事・活動・生活 遊んで学ぶ。 『UIFA JAPON NEWSLETTER』			
2008	79	7月5日他界。享年79歳					▲ 『主婦の友』 休刊

注：

中原の生誕から死去までを対象としており、設計年、発表年が不明なものは対象としない。

各項目の先頭の英数字は、月を示す。不明の場合は、▲で表記。

作品欄について、中原暢子が単独で設計しているものは、設計者は省略。

東京大学生産技術研究所池辺研究室 (建設工学研究会) および広瀬鎌二建築技術研究所所属時は、設計年は不明のため、作品の発表年で作品欄に記載。

作品欄にある設計同人時代の作品のうち、雑誌等に発表したものは下線表記している。